KYUSHU
ECONOMIC
FORUM

九州経済フォーラム25周年記念誌

創ろう九州新時代
拓こうアジアの新世紀

九州経済フォーラム25周年記念誌　創ろう九州新時代 拓こうアジアの新世紀　KYUSHU ECONOMIC FORUM

KYUSHU
ECONOMIC
FORUM

九州経済フォーラム
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前2丁目9番28号
商工会議所ビル1F　福岡県中経協内
TEL:092-451-8593　FAX:092-451-9379

目次

九州経済フォーラム 創立25周年記念事業

ご挨拶　九州経済フォーラム 会長　石原 進 氏　05
ご祝辞　経済産業省 九州経済産業局 局長　広実 郁郎 氏　07
ご祝辞　福岡県知事　小川 洋 氏　08

沖縄開催

次第一覧　11
エクスカーション　12
歴史文化勉強会
開会挨拶　井手口 修一 氏　13
歓迎挨拶　翁長 雄志 氏　14
記念講演①「琉球の精神文化に学ぶ」　亀島 清 氏　15
記念講演②「日本の精神文化に学ぶ」　長谷川 三千子 氏　25
御礼の言葉　磯山 誠二 氏　33
交流懇談会
開会挨拶　石原 進 氏　34
歓迎挨拶　与世田 兼稔 氏　35
乾杯　知念 榮治 氏　36
閉会挨拶　徳田 勇治 氏　37
記念シンポジウム
開会挨拶　矢頭 美世子 氏　38
基調講演1「平成の開国と国家の存亡」　関岡 英之 氏　40
基調講演「どうする日本、どこへ行く日本」　中西 輝政 氏　53
パネルディスカッション
進行　山口 秀範 氏
パネラー　中西 輝政 氏　長谷川 三千子 氏　関岡 英之 氏　67
感謝の言葉　稲嶺 恵一 氏　80
閉会挨拶　小早川 明徳 氏　81
慰霊参拝
閉会挨拶　石原 進 氏　83
記念勉強会「日台関係について」
講演　荘 連豪 氏　167
郭 世松 氏　169
九州経済フォーラム夕食会
会長挨拶　石原 進 氏　176
乾杯　井上 良弘 氏　177
特別懇談会
挨拶　林 省三 氏　178
挨拶　高宮 俊雄 氏　180
記念講演
記念講演1「台日経済交流と展望～」　江 丙坤 氏　181
御礼の言葉　廣崎 清邦 氏　188
記念講演2「時とともに進むグローバル経営」　劉 金標 氏　189
御礼の言葉　伊井田 栄吉 氏　194
視察　南港ソフトウェアパーク・TECOグループ　195
記念講演3「東日本大地震後の日台協業の新機会」　黄 茂雄 氏　196
総統府 表敬訪問　207
交流懇談会
挨拶　博井 澄夫 氏　208
挨拶　黄 重球 氏　209
挨拶　佐味 祐介 氏　210
記念品交換
記念交流会
主催者挨拶　石原 進 氏　211
乾杯　黄 茂雄 氏　212
閉会挨拶　小早川 明徳 氏　213
台北市観光・昼食・解散式　215

福岡開催

次第一覧　222
開会挨拶　井手口 修一 氏　223
Q&A
冨田 大輝 氏　吉田 拓巳 氏　江口 克成 氏
森山 円香 氏　末成 あゆみ 氏　小田 憲和 氏　224

熊本開催

次第一覧 84

記念勉強会
開会挨拶 石原 進氏 84
歓迎挨拶 佐藤 義興氏 87
勉強会
「当社における環境保全活動～再発見・再設計による（CSR）」 甲斐 隆博氏 88
パネル展示見学会 103

交流懇談会
開会挨拶 矢頭 美世子氏 104
歓迎挨拶 瀧島 郁夫氏 105
乾杯 石原 進氏 107
郷土芸能 演舞
閉会挨拶 小辻 智之氏 108

記念シンポジウム
開会挨拶 甲斐 隆博氏 109
基調講演1「森・里・海の連環～」 畠山 重篤氏 111
御札の言葉 廣崎 靖邦氏 125
パネルディスカッション 126
進行 田中 克
パネラー 畠山 重篤氏 畑 明宏氏 小関 哲氏
閉会挨拶 小早川 明徳氏 154
水の恵みツアー・チャリティーゴルフ 155

台湾開催

次第一覧 156

特別懇談会
開会挨拶 洪 敏弘氏 158
閉会挨拶 是永 駿氏 159
閉会挨拶 陳 書明氏 160

特別講演「台湾経済の現状と展望」 梁 國新氏 161
御札の言葉 村上 英治氏 166

総評 矢頭 美世子氏 236

九州府長就任式
開会挨拶 甲斐 隆博氏 238
メッセージ 瀧島 郁夫氏 飯干 辰巳氏 松尾 新吾氏 橋田 紘一氏 239
九州府長就任談話 石原 進氏 240
公認記者会見 川崎 隆生氏 斎藤 修一氏 野口 裕之氏 247

特別講演
開会挨拶 是永 駿氏 251
講演「今こそゴールデンチャンス～」 黄 茂雄氏 252
記念品贈呈 256

記念式典
会長挨拶 石原 進氏 257
記念式典 功労表彰受賞者一覧 258

記念レセプション
実行委員長挨拶 末吉 紀雄氏 261
来賓挨拶 服部 誠太郎氏 262
乾杯 高宮 俊通氏 263
閉会挨拶 小早川 明徳氏 264
博多手一本 長谷川 裕一氏 265

25周年の思い出

歴史年表 267
交流懇談会記録 269

データベース

歴代会長 271
役員名簿 272
歴代役員名簿 273
定例会 275
早朝会 277
車座談議 287
定例総会 288
企業広告 289
推進体制 333

九州経済フォーラムとは

設立

昭和61年3月に、㈱はせがわ　長谷川裕一社長のやみがたい地域変革や九州島創造への情熱と、「志」を同じくする若手経済人の地域に対する熱い思いが、「中央と九州を結ぶ」という画期的な発想を持って、経済界に鮮明で確かな一石を投じたのが始まり。

コンセプト

- 道州制導入の研究並びに推進
- 産学官の融合ネットワークの構築
- 九州・沖縄地域の広域連携交流の推進
- 九州の21世紀型産業経済の育成
- アジア各国との経済並びに文化交流の推進
- 九州文化の確立と九州人の養成
- 在九州の各省庁機関関係者との交流
- 九州の次世代を担う人材育成および交流

主な活動

1 基本行事の開催

1 総会の開催
2 理事会の開催
3 必要に応じて正副会長（理事長を含む）会議の開催

2 特別例会の開催

政治、行政、経済、文化、社会活動等中央で活躍する方を中心に講師に迎え、必要に応じ開催する。

3 早朝会の開催

新年祝賀（パーティ形式）の開催
九州各県での移動早朝会の開催
上記1、2を含め年間に4～5回の早朝会の開催

4 研究会活動の実施

次の課題別研究会を開催する。
研究会の成果は、発表会において総括するとともに、事業報告書として提出する。

九州広域連携研究会
→道州制構想の学習会開催、他の団体（経済同友会、知事会　等）との交流促進
九州経済・産業戦略研究会
→産学官融合事業の推進、ネットワークの確立
九州文化・観光戦略研究会
→九州の歴史・文化の学習会開催、九州学の構築並びに観光資源の発掘

5 各県との交流懇談会の開催

九州・沖縄各県の旬のテーマについて、経済界、行政、学界、文化芸術分野等から講師を迎え、講演会等を開催するとともに、各県の経済界等との交流を図る。

6 車座談義の開催

九州で活躍される方をゲストに迎え、年2回程度開催する。

ご挨拶

昭和61年3月に誕生した九州経済フォーラムは、お蔭様で創立25周年を迎え、この度、記念誌を発行することとなりました。

九州経済フォーラムでは、この5年間、早朝会や九州各県で開催した交流懇談会を中心に会員と各地域の皆さまとの交流を図ってきました。平成21年度からは車座談義を開催し、会員間の新たな交流の場を設けたほか、特別事業として平成20年2月にはトルコとアラブ首長国連邦のドバイへ、平成21年6月には再びトルコへ海外視察団を派遣し海外交流も行いました。そして25周年事業として、平成23年4月、創立25周年記念シンポジウムin沖縄を皮切りに、8月に熊本、9月に台湾、そして11月には福岡で、合計4回のシンポジウムを開催しました。会員の皆様、そして開催地の地元の皆様には大変なご尽力を頂きましたが、お蔭様でいずれの会も盛況のうちに終えることができました。

特に、台湾での開催となった9月の創立25周年記念シンポジウムでは、海外での開催であるにもかかわらず、実に108名もの方にご参加いただきました。そして台湾では中華民國工商協進會榮譽理事長である黄茂雄氏の素晴らしいアレンジにより、台湾各界を代表する方が講師としてこのシンポジウムに参加していただいたほか、多くの台湾財界人との交流を持つことができました。

記念事業を締めくくる福岡でのシンポジウムでは、次世代を担う優秀な若者5人による、九州の未来に向けたアイディアをプレゼンテーションしてもらいました。参加された皆様にも大きな刺激となったのではないかと思います。

平成19年からの5年は日本にとっても激動の5年間でありました。平成20年9月のリーマン・ブラザースの経営破綻か

ら始まった世界的な経済危機、世界第2位の経済大国となった中国の急速な台頭、そして平成23年3月に発生した東日本大震災、現在、日本が置かれた状況はこれまで経験したことがないほど危機的ものとなっています。一方、政治は混迷を極め、国民に対し明確な日本の将来像を示すことができないままであります。

「九州に活動の拠点を持つ若手経済人の意思と情熱を結集し、国家的・国際的視野に立つ中央の行政、経済界の新鋭かつ優秀な人材との交流活動を推進し、会員の啓発、親睦を高め、九州各地域に豊かな見識と強固な指導力をもった経済人を育成する」という活動目的を持ってスタートしたこの九州経済フォーラムでありますが、このフォーラムで培った中央・海外とのネットワークを最大限駆使し、現在の日本の危機的状況を九州から変えていくことができるよう、今後も各事業を強力に推進してまいります。

九州経済フォーラム会長
石原 進

ご祝辞

九州経済産業局長
廣實 郁郎 氏

九州経済フォーラムが創立25周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

貴フォーラムにおかれましては、「九州はひとつ」を念頭に、昭和61年に創立されて以来、九州・沖縄地域の広域連携交流や産学官交流の促進等を通じ、九州経済の活性化に多大な貢献をしてこられました。これもひとえに初代の長谷川会長、2代目の大迫会長、そして現在の石原会長をはじめとする歴代の関係者の皆様の御尽力の賜であると深く敬意を表します。

創立当時の昭和61年はプラザ合意後の円高不況等により産業構造の転換が求められていました。貴フォーラムにおける四半世紀にわたる将来を見据えた活動もあり、九州経済は、アジアとの交流促進や自動車等新産業の集積、観光産業の育成等により、着実な発展を遂げてきました。

現下の産業空洞化やエネルギー制約等、かつてない諸課題に直面する中、九州経済産業局では、「強靱な九州経済の構築」（九州の自立化）に向け、関係機関と連携した取組を展開しており、貴フォーラムの先導的な活動に大きな期待をいたしております。

最後に九州経済フォーラムの今後益々の御発展と会員の皆様の御健勝・御活躍を心よりお祈りいたします。

ご祝辞

福岡県知事
小川 洋 氏

九州経済フォーラムが創立25周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

貴会におかれましては、昭和61年の創立以来長きにわたり、九州各県の行政ならびに経済人等の交流促進に取り組まれるとともに、経済、政治、文化、社会問題など幅広い分野における研さんを重ねられ、九州経済の活性化に大きく貢献されています。石原進会長をはじめ役員、会員の皆さまのご熱意に、深く敬意を表します。

現在、わが国は、長引く円高や世界景気の減速、電力の安定供給の不安、厳しさが続く雇用情勢など、大きな課題に直面しております。

このような中、福岡県では、成長著しいアジアに近いという強みを活かし、アジアの活力を取り込みながら、環境を軸とした産業の国際競争力の強化を図る「グリーンアジア国際戦略総合特区」を推進しています。都市環境インフラの技術・ノウハウをパッケージ化してアジアの諸都市に提供するとともに、低燃費自動車、産業用ロボット、パワー半導体など環境配慮型製品の開発・生産拠点化に向けて、現在、産学官一体となって取り組んでいるところです。

アジアの活力を取り込むことにより福岡県の経済を活性化し、本県が成長エンジンとなって、九州、さらには日本経済全体の発展に対して大きく貢献したいと考えています。引き続きご協力をお願いいたします。

九州経済フォーラムのますますのご発展と会員の皆さまのご健勝、ご活躍を祈念いたします。

九州経済フォーラム

創立25周年記念事業

Kyushu economic forum

the 25th anniversary

in establishment buisiness

沖縄開催 …P11~P83

と　き：平成23年4月22日（金）、23日（土）
ところ：ロワジールホテル那覇
九州経済フォーラム参加者：102名
沖縄現地参加者：321名

熊本開催 …P84~P155

と　き：平成23年8月4日（木）、5日（金）
ところ：阿蘇リゾート グランヴィリオホテル
九州経済フォーラム参加者：194名
熊本現地参加者：131名

台湾開催 …P156~P216

と　き：平成23年9月29日（木）、30日（金）、10月1日（土）
ところ：君品酒店（PALAIS de CHINE HOTEL）、
　　晶華酒店（the Regent TAIPEI）、国立故宮博物院、芝山巖
九州経済フォーラム参加者：100名
沖縄現地参加者：58名

福岡開催 …P222~P265

と　き：平成23年11月17日（木）
ところ：ホテルニューオータニ博多
社会人：924名
学生：261名

主催／九州経済フォーラム
共催／福岡商工会議所、北九州商工会議所、福岡経済同友会
後援／沖縄県、（社）沖縄県経営者協会、沖縄経済同友会、沖縄県商工会議所連合会、沖縄県商工会連合会、
　　沖縄県中小企業団体中央会、（社）日本青年会議所沖縄地区協議会（順不同）

沖縄開催

O K I N A W A

九州経済フォーラム創立25周年記念シンポジウム in 沖縄

次 第 《平成23年4月22日(金)》

17:00 ■九州経済フォーラム創立25周年
沖縄記念事業

・開会挨拶　九州経済フォーラム
副会長　井手口 修一 氏
・歓迎挨拶　那覇市
市長　翁長 雄志 氏

17:10 ○記念講演 ～歴史文化勉強会～
・講師　亀島　靖　氏

18:20 テーマ「　琉球の精神文化に学ぶ　」
・講師　長谷川　三千子　氏
・お礼の言葉　九州経済フォーラム
理事　犠山 誠二 氏

（　会場　移　動　）

19:30 ■交流懇談会（天妃の間）
・開会挨拶　九州経済フォーラム
会長　石原　進　氏

19:40 ・歓迎挨拶　沖縄県
知事　仲井眞　弘多　氏

19:50 ・歓待の舞　四つ竹

20:00 ・乾杯　沖縄県 経営者協会 会長
知念 榮治 氏

（　ご　歓　談　）

20:30 ・琉球芸能　エイサー

21:20 ・閉会挨拶　九州経済フォーラム
理事　徳田　勇治　氏

21:30 閉会

次 第 《平成23年4月23日(土)》

8:00 ■記念シンポジウム（天妃の間）
・開会挨拶　九州経済フォーラム
副会長　矢頭 美世子氏

○基調講演

8:10 ・講師　関岡 英之 氏
テーマ「"平成の開国"と国家の存亡」

9:20 ・講師　中西 輝政 氏
テーマ「どうする日本、どこへ行く日本。」

10:45 ○パネルディスカッション
・進行　山口 秀範 氏
（株式会社寺子屋モデル代表世話役社長）
・パネラー
中西　輝政 氏
長谷川 三千子 氏
関岡　英之 氏

12:20 ・感謝の言葉
株式会社りゅうせき 参与　稲嶺 惠一 氏

12:25 ・閉会挨拶
九州経済フォーラム
理事長　小早川 明徳 氏

12:30 閉会

Excursion

エクスカーション

歴史文化勉強会

開会挨拶

九州経済フォーラム　副会長　井手口 修一氏（西日本電信電話株式会社九州事業本部長兼福岡支店長）

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介に預かりました井手口でございます。九州経済フォーラム創立25周年沖縄事業の担当を仰せつかっております。本日はかく多数、お忙しい中、お集まりいただきましたことを、まずもって御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

初めに、この度の東日本大震災により被災されました方々、関係者の皆様方などに対しまして、心よりお見舞いを申し上げたいと思います。また一刻も早い被災者の皆様方の生活の復興に向けて、適切な支援をこれからも重ねていかなければという風に考えております。

当フォーラムは創立25周年を迎えるに当たりまして、記念事業の開催を4つ計画しております。その頭初として、今日、明日の2日間、この沖縄で「創立25周年記念シンポジウムーin沖縄」といたしまして、歴史文化勉強会とシンポジウムを開催させていただきます。東北大震災で未曾有の被害が発生し、しかもまだ収束しないという状況ではありますけれども、被災者の皆様方の長期的なサポート、日本経済の全面的な復興に向けて、今、九州・沖縄が果たすべき役割を熟慮いたしまして、予定通りこの記念事業を開催させていただくことを決定いたしました。

テーマは「どうする日本、どこへ行く日本」と題しました。沖縄の皆様方との交流を重ねる中で、このシンポジウムが今後の日本のあり方を考える契機となり、日本の置かれているさまざまな問題点の本質を捉え直すことができれば、自ずと、解決の糸口・方向性が見つかるのではないかと思うからです。また、日本の歴史と文化の原点が今でも息づいているこの沖縄・琉球の地で、琉球の皆様方がたどって来たさまざまな歴史や文化、海洋や自然がもたらしてくれる特有の効果を肌で感じるのも、日本という国家の現在をどうクリアして、今後どうしていかなければならないかという命題を考える上で、とても意義深いものがあると考えております。今、混迷の極みにあると言ってもよい日本にとって、琉球の皆様の歴史や文化に学ぶべき数々の教えがあるだろうという仮説に基づいております。少々難しいテーマでありますけれども、ぜひ皆さん、この2日間、交流を深めていただきまして、我が国が抱えるさまざまな問題に関して議論が高まりますことを願っております。

このあとすぐ、歴史文化勉強会として亀島様、長谷川様のお二方にご講演いただき、そのあとの懇親懇談会では当フォーラムの68名、沖縄の皆様方と交流させていただきたいと思っております。

最後になりますけれども、ここに記念シンポジウムを開催できますのも、ご講演いただく皆様方、並びに沖縄経済界、福岡・北九州経済界の皆様方のご理解、ご協力の賜物であると、大変深く感謝申し上げております。皆様にとって有意義な時間となりますことをお祈り申し上げまして、甚だ簡単ではございますが、私の開会の挨拶に代えさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

歓迎挨拶

那覇市長　翁長 雄志氏

九州経済フォーラムが創立25周年を迎えられたことを心よりお喜び申し上げます。那覇市民31万人を代表し、本式典の那覇市開催を熱烈に歓迎いたします。

3月11日に起きました東日本大震災は、東北地方を中心に甚大な被害をもたらし、多くの命が奪われ、今なお被災地や避難場所などで不自由な生活を送っている被災者が多数おられます。亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、一日も早い復興を願っています。本市といたしましても市民生活に多少の影響があったとしても、復興支援に全力をあげ努めてまいりたいと考えています。

九州・沖縄の景気状況は、財務局等の発表によると厳しい状況にあるとの認識ですが、東日本大震災の影響で先行きに不透明感が出てきました。沖縄においては、基幹産業である観光分野において入域観光客の減少が始まっており、深刻な状況になるのではと危惧しております。

そのような中、今回のフォーラムの「どうする日本、どこへ行く日本」というテーマは、現在の日本全体の置かれている状況を考えるとき、九州各県において皆様方のように優れた発想と時代感覚に富んだ経済界のリーダーが一堂に会し、議論し、懇親を深めることは、大きな意義があると思います。日々の営みをとめることができないのと同様に経済活動も継続しなければなりません。しっかり前を見据え、リーダーシップを発揮し、日本経済を支えてもらいたいと強く願っています。

那覇市は、琉球王朝時代より中国や東南アジアとの海外貿易の拠点として栄え、王府として政治・経済・文化の中心地でございました。市内には、首里城跡や識名園といった世界遺産があるなど、異国情緒があふれ、また、守礼の邦と呼ばれ、南国の温かいおもてなしの心を持つまちでもあり、この機会に名所旧跡を訪れ、琉球の歴史と文化に触れて頂ければ幸いに存じます。

結びに、本フォーラムが実りある成果を上げますことを祈念しますとともに、九州経済フォーラム会員の皆様のご健勝・ご多幸を祈念いたしまして私のあいさつといたします。

記念講演～歴史文化勉強会 1

講師

歴史劇作家・プロデューサー

亀島 靖 氏

テーマ

「琉球の精神文化に学ぶ」

1943年 那覇市生まれ。
早稲田大学第一商学部卒。「琉球歴史の謎とロマン」の著者。琉球歴史と日本史、世界史を一目で比較できる「新・琉球歴史年表」を出版。現職は、NPO沖縄観光人材育成協会理事長、琉球歴史浪漫の会顧問、琉球新報カルチャーセンター「琉球歴史講座」講師など多数。

皆さん、こんにちは。本日はこの記念すべきシンポジウムにお招きいただきまして、ありがとうございます。

私は今、ラジオや新聞等でドラマを書きながら、琉球の歴史に取り組んでいます。私の視点は、歴史というのは生きた人間のドラマだということです。ですから、私自身が物語を書く時は、私たちの先人たちがどういった考え方で歴史を作ってきたかをその中に再現すると言いますか、先人たちが物語の進行役になる形で歴史を掘り返しております。今日は1時間ぐらい時間をとりまして、そういった視点から琉球の歴史を皆さんにお話ししたいと思います。

今日は九州各県から大勢いらしてますけれども、地元の私たちにとっての琉球の歴史は、実はなかなか内実が少ないというところの歴史です。私は昭和18年生まれですが、これは私たちが学校で琉球の歴史を正式に教えてもらった経験がないということから来ています。それ以前からそうではありましたが、私たち沖縄県は第2次大戦、そして戦後の政策等で貴重な歴史資料や文化財を数多く失いまして、さらに状況は悪くなりました。

戦前は、こんな小さな県に国宝が23件あったと言われてます。現在、首里城は復元されましたが、そのほとんどが壊滅しました。戦前の沖縄の国宝数23件は、全国で4位です。1位は60件の京都です。それから奈良県、滋賀県、その次に国宝の数を誇ったのが沖縄県なんですよ。それぐらいのアビリティを持った琉球という一つの国がかつてあり、しかもそれは本土とは違う意思と独自の文化を持った国だったということが目えます。「どこへ行く日本」というタイトルについてのお話がありましたが、今日、私は琉球の歴史をむしろ源流までさかのぼって、時代の流れに琉球がどういう対応をしてきたかをお話しします。また、そういう琉球の歴史を知っていただくと、琉球独自の文化や精神文化についても理解が深まるのではないかと思います。

今日、セーファー御嶽（うたき）に行かれた方もおられるようですが、これは世界遺産に登録されてますけど、非常に珍しい世界遺産です。通常は建物とか自然、そういった形で世界遺産に登録されますが、あのセーファー御嶽は建物じゃないですね。また、屋久島のような自然という一つの景観でもない。セーファー御嶽そのものは大きな岩場ですけれど、世界遺産に登録されているのは、その背景に沖縄の人たちのニライカナイの考え方とか、そういった信仰の原点があり、信仰を通じた人々の交流があるからなんです。

そうした精神文化も独特なものがあります。あとでまた触れますが、たとえば神様ですね。本土では高天原という天上界があって、そこから神々が垂直に下界に降りてくるんですね。天孫

が高千穂峰に降臨するとか、そういう形で垂直に降りて来ます。それで、北方に行けば行くほど、神々というのは垂直に降りて来ると言われます。たとえばモンゴル。モンゴル人の神様というのは垂直に降りて来るんですね。ところが南に行くと、神様は水平にお見えになる。ポリネシアやハワイ、そういった海洋民族の神々というのは、みんな海の神様で、海に神々の住まう場所があって、そこから水平にやって来られるという形です。沖縄の神様も、海の彼方のニライカナイという理想郷におられ、そこからやって来られます。神々は水平に訪れて、また水平線の彼方に消えていくというのが、沖縄の神様の考え方なんですね。

そういった中、沖縄では冠婚葬祭を全部、女性が仕切っています。セーファー御嶽は琉球最高の聖地で、さまざまな神事が行われましたが、その神事を仕切るのも、全部女性です。その女性たちを神女と書きまして、沖縄の方言ではヌールとかノロと言います。このノロ、ヌールは、巫女さんと間違える人がいますけど、巫女さんじゃなくて公的な女神官なんですね。この女性たちは、神々を祭り、神事を執り行い、神々と一般の人々との間の橋渡しをするわけです。沖縄の場合、そういった神事が行われる聖域は男子禁制です。国王といえども入ることは許されない場所なんです。ところが、本土の場合は女人禁制という形で、沖縄と逆なんですね。何年か前、大相撲の大阪場所の時、大阪府に女性の知事がいらして、大相撲の土俵の上で優勝者にトロフィーを渡したいという要望を相撲協会に申し入れたんですけども、女性は土俵の上には上げないということで、相撲協会は断固として拒否しました。本土の場合は女人禁制、沖縄の場合は男子禁制ということでして、そういう思想や神事のやり方には、いろいろ違う面があります。

こういったことは琉球の歴史と非常に深いつながりがあります。私たちは琉球という言葉を使いまして、今も「琉球の歴史」という表現をしましたけれども、この琉球という言葉は、実は沖縄の人が自ら作り出した言葉ではないんですね。沖縄では沖縄のことをウチナー、沖縄の人のことをウチナーンチュと言いますが、これは自分たちで作り出した言葉です。しかし、琉球という言葉はそうではありません。言い伝えでは、足利幕府の頃に補添に大きな城（グスク）があって、そこに察度（さっと）という王様がいました。この王様が1372年に、中国と初めて交易を開始するわけですね。これを朝貢貿易と言いまして、中国に貢ぎ物をする。中国は貢ぎ物を持って来た国と契約を交わします。この契約を冊封（さっぽう、さくほう）と言いまして、一冊、二冊の冊と封建制度の封と書くんです。冊という言葉は、昔、紙がない時代に、竹管という竹を削った細い板みたいなものに字を書いて、これを沿るしてたんですね。下げた状態になるのが一冊です。これは記録を意味します。封建制度の封というのは、これは一つの領界です。自分の領地を示すのに、土を盛り上げて境界線を作る。これを封と言います。封建制度というのはそういう風に領地を明確に分けて、それぞれ独立した国、藩を作るということで、元は境界線を意味したわけです。沖縄は、そういう冊封という契約を中国と結んで、中国のグループに参加します。その時の中国に、明という帝国を作った洪武帝という皇帝がいまして、この皇帝が沖縄に「琉球」という名前を下賜するんです。

琉球という言葉自体は、琉は琉璃、ガラス、光り輝くということを意味します。球は文字通り、球ですね。ですから、琉球とは光り輝く球のような島であるということになります。これは中国から見た沖縄の姿です。つまり、美しい亜熱帯の透明な海に来て、中国人はびっくりしたわけですね。船の上から海底を見ますと、白い砂と珊瑚が広がり、そして赤・青・黄色の原色の魚たちが泳いでいます。ところが中国の海というのは、黄河や揚子江といった大河が毎日何万トンもの黄砂を押し出して、海中に泥を堆積しているわけですね。そういったところは海水の透

明度も低く、貝とか魚とかももちろん見えません。中国人は海が濁ると安心するとか、ふるさとみたいだと思うそうですけど、中国人にとって海というのは、濁ってるのが普通なんですね。そういった海で生活している中国人が、この亜熱帯の琉球の海を見て、まるで海中に自分がいるかのような錯覚を覚える。これが一つの琉球伝説の始まりだと言われています。ですから、海の東の彼方にある島々は、透き通った海に色とりどりの命があふれて、ガラスのように光り輝く美しい島だと、そういう表現で「琉球」という名前をつけたわけです。これが琉球の始まりなんですけど、私たちはこの言葉を、琉球王朝時代に生まれた文化、たとえば琉球舞踊、琉球漆器、あるいは琉球料理などの文化に対して使っています。

次はその琉球、つまり沖縄というこの島の歴史を見ていくわけですが、私は川と同じように、原点までさかのぼると全体の概要が見えてくると考えています。まず、沖縄を指すウチナーという言葉。ウチというのは大きいという意味です。そしてナーというのは漁場、魚を獲る場所。ですからウチナーというのは、大きな豊かな漁場であるという言い方のようです。また、沖縄という呼び名は、西暦753年に鑑真和尚が日本に行く途中でこの島に立ち寄った時、この島のことを「阿児奈波（あじなは、あこなは）島」と言いたのが最初と言われています。これは実は、中国語で一番という表現を漢字に当てはめたものなんですね。ですから、鑑真和尚が来た700年代半ばには、沖縄の人たちは自分たちのことを一番と表現しているわけです。つまり海洋民族である沖縄の人たちは、珊瑚礁の内海を一番大きな豊かな漁場として、その近くで生活をしていた。そういったことから、ウチナーに大きな豊かな漁場であるという意味になりました。那覇はこのナーが流って那覇、漁場から変化したという関係です。

このウチナーという私たちの島に、いつウチナーンチュが現れたかというと、これはもう2万年も前のことで、それが港川人という人たちです。この人たちは中国の南部から、この琉球列島に歩いて渡ってきたと言われています。昔、この琉球列島は大陸と陸続きでした。そして、日本列島も大陸と陸続きでした。ですから、日本列島にはある時期、人々が大陸から渡ってくるわけですが、その同じ頃、この琉球列島にも大陸から渡ってきた人たちがいて、それが港川人と言われる人なんですね。この写真は沖縄本島南部の八重瀬町港川にある崖なんですけど、高さが30mぐらい、10階建てのビルほどの高さがありまして、ここが洞窟になっています。そこの洞窟から昭和34、5年ぐらいに、港川人の化石人骨が発見されました。

港川人を発掘した人が大山盛保さんです。58号線の泊交差点から、又吉通りの森林開発の右側にオーケー九州というガソリンスタンドがありますけれども、そのスタンドの社長さんです。大山さんがご自分で庭を造る時に、庭石に使う粟石を見ると、その石の中に大きな骨が化石になって入っていたんですね。大山さんは昔から考古学に興味がありまして、骨が石になるのに大体1万年かかるという知識を持っていました。それでじっくり見てみると、どうもその骨は、1万年以上前には沖縄にはいないと言われていた、イノシシとかシカとかの大型の動物の骨であるということに気がつくんです。それで、庭石を持ってきた人に、石を採った場所に案内してくれと言って連れて行ってもらったのが、この洞窟です。中に入りますと、動物らしい骨に混じって人骨と見られるようなものもいっぱいある。それを全部引っ張りだしてみますと、35体ぐらいの人骨の化石が出てきたんですね。

大山さんも、これはかなり古いものであるとわかりましたし、自分たち素人の手には負えないということで、東京大学の専門の先生に調査を依頼しに行きました。そしてこの骨を放射性炭素による年代測定にかけたところ、1万8000年プラスマイナス2000年、つまり2万年前後の人間の骨であるということがわかりまして、東京でも大変な反響を呼びました。なにしろ日本全国を見ても1万年以上前の人骨はほとんど出てこないと言われています。それなのに、なぜ沖縄から出てくるのかと言いますと、その理由は沖縄の土壌にあります。沖縄でも特にこの中南部は、珊瑚礁の堆積したカルシウムの多い石灰岩の土壌なんですね。この土壌は、人間や動物の骨をそのまま石にしてしまいます。ところが本土、それから沖縄でも沖縄本島北部などは、ほとんどが火山灰が堆積した酸性土壌のため、30年もあれば土の

中の骨は溶けてなくなってしまいます。ですから、本土ではほとんど1万年以上前の人骨は出てこないんです。

沖縄中南部では、港川のほかにも宜野湾や北谷（ちゃたん）、伊江島などで、それから宮古島や久米島でも1万年以上前の人骨化石が発見されています。最近では石垣島の新石垣空港を造ってるところにある洞窟から、また2万5000年前の人間の骨が出ています。これは本土の考古学者からすると、沖縄は人骨化石が出てくる宝の山だということになりますので、今、若い考古学者が沖縄のあちこちに行って、洞窟以外でも調査をしていらっしゃいます。とにかく、こういう港川人が私たちウチナーンチュの古い先祖であるということです。ただ、直接の先祖かと言うと、その間に実はミッシング・リンクと言いまして、空白期間があります。2万年前の人たちと、私たち今のウチナーンチュの間に、もう一つ別の先祖のグループがあると推測されるわけですね。それが5000年前に沖縄に現れる海洋民族。いわゆる黒潮民族と言われる人たちです。

最初に沖縄に現れた港川人は、先ほど言いましたが、中国大陸から歩いて渡ってきたと言われています。船で来たという説もありますけど、これもさっき触れたように、2万年以上前は中国大陸と沖縄は陸続きだったわけです。その頃、世界は最後の氷河期を迎えていたと言われていまして、現在の平均気温を15℃ぐらい下回る気温でした。そのため、北極や南極を中心にどんどん海水が凍って、海の水が少なくなります。その分だけ海面がどんどん下がってくるんですね。現在の東シナ海は平均水深が約400mで、世界で一番浅い海だと言われていますが、その東シナ海でどれぐらい海面が下がったかと言いますと、200mぐらいだそうです。沖縄県庁の建物は高さが50mぐらいですから、その4倍です。東シナ海の海面が今より200mも下にあれば、浅い部分は海底がむき出しになりますから、沖縄本島と宮古、八重山がつながるんですね。そして先島と台湾、台湾とさらに中国大陸も堤防のようにつながって、東シナ海を囲むような形の陸橋ができます。そして、沖縄から北でも沖永良部島、徳之島、奄美大島、そしてトカラ列島、さらに九州がつながって、いわば海中廊みたいな海の道が海底から出現するわけです。その道を伝わって、中国から動物が移動を始める。その中に、今、沖縄で珍しい動物であるヤンバルクイナとかハブとかノグチゲラとか、そういった動物たちの祖先もいたんですね。その移動する動物を追って、またさらに大型のシカとかゾウとかそういう動物が、陸橋を渡って移動を始める。それらの獣を、今度は自分たちの食料にしながら、人間がその陸橋を歩いてくる。これが我々の祖先の港川人であるということです。

彼ら港川人がどこからやって来たかについてはいくつか説がありますが、その一つが柳江（りゅうこう）人です。柳江人というのは、ちょうど中国の南の地方にいた民族なんですね。この人たちと港川人は遺伝子的には非常によく似ていると言われています。そして港川人は、この陸橋を伝って沖縄から九州に北上した可能性があるとも言われとおり、最近、沖縄県で発見された港川人こそ縄文人の祖先であるという学説を発表された学者さんもいます。縄文人というのは、私たちが日本史で習う、1～2万年ぐらい前の日本人のルーツですね。その日本人のルーツである縄文人と港川人がつながっている。

つまり琉球列島から北上して九州に上陸した人々が縄文人につながっているという説を唱えられているらしいですね。

縄文人と言えば、青森には三内丸山遺跡があります。三内丸山遺跡からは、今のところ5000年以上前の縄文時代の集落跡が見つかりまして、今まで常識とされてきた縄文時代の学説を根底からひっくり返すようなものが、続々と発見されています。それまで縄文人というのは、獣のように食べ物を求めて移動し、定住生活をしない、文化がないと言われていたんですけど、この三内丸山遺跡を見ると、そこには竪穴式住居や倉庫だけでなく、祭祀用と思われる巨大な建物の跡があったり、発掘された栗の実のDNAを分析すると、栗の木を栽培して実を食料にしていたことがわかったんですね。その縄文人が日本人のルーツであり、さらにその人々が港川人につながっていくとなれば、これはまさにロマンです。これは再度、歯の形、それから骨格、遺伝子などを分析していくと、日本人はどこから来たかというのがわかるかもしれません。縄文人と港川人の何かがつながるととても面白いですね。

この写真の右側が、復元された港川人の顔です。沖縄の人を見ますと、こういった顔の人、いくらでも自分の周囲にいそうですね。現在は一応、この人たちが沖縄の人たちの最古の祖先であるとされていますけど、まだ確定しているわけではないんです。最近もまた、港川人は途中でウィルスによって絶滅したという説も出てきたりしまして、2万年前から現在までの間には、いわゆるミッシング・リンクというかなりの空白部分が出てきます。

さらにその前、港川人がどこから来たかというと、先ほど中国南部の柳江人というのを紹介しましたが、さらに遡った彼らの祖先というのは、この南のインドネシア、いわゆるジャワ、スマトラ辺りから来たと言われています。この辺にも海面が下がったために、オーストラリア大陸みたいな一つの大陸が出来まして、それをスンダランドと言います。これはよくムー大陸とか、アトランティスと間違われますけど、違いますね。そのスンダランドから10万年以上前、人間が移動を始めます。そして、琉球列島に渡ってくる人たちが、私たち日本人のルーツの一つになるわけです。

日本人を含めた黄色人種はモンゴリアンとも呼ばれます。モンゴリアンというのはアジア人の先祖ですが、アジアにいたモンゴリアンたちは、シベリアから氷でつながったアメリカ大陸に渡って、インディアンの先祖になっていく。さらに彼らがまた、メキシコ、ペルーまで下りていくんですね。ですから、ペルーの人たちの体格や体質は、モンゴリアンとほぼ同じです。たとえば蒙古斑、子供の時にお尻にできる青いあざ。あれはペルーの人たちにも出てきます。そういう意味では、アジア人の先祖はアジアで誕生したわけですけど、この人たちが世界各地に散って行って、その流れの一つがこんな小さな琉球列島の沖縄という島に渡り、一つのステージに役割を持って登場したということが言えます。さらにそれがまた縄文人、弥生人といった日本本土の人々の歴史とも関わりを持ち、DNAや骨格の特徴など生物学的な面、民族学的な面でつながりが生まれていくわけですね。

さらにこの東南アジアの人たちがどこから来たかと言いますと、ルーツをさらに追求していくと、やはり人間が最初に誕生したと言われるアフリカに行き着きます。200万年前にサバンナで、木から下りたサルがヒョウとかライオンに追いかけられながら逃げているうちに、2本足で走るようになって、それが人間につながるという説がありますけど、アフリカで発生した人類の祖先が東に移動していったのが私たちの先祖、いわゆるモンゴロイドと呼ばれるアジアの人の先祖なんです。そして、アフリカにそのまま残った人たちがネグロイドという黒人の先祖になるわけです。また、アフリカから北上していく人たちもいました。この人たちがネアンデルタール人とかクロマニヨン人になるわけですが、北に行くと太陽光線が弱いので、皮膚のメラニン色素が抜けていくんですね。そして白人化する。そしてコーカソイドと言われる白人の先祖になります。人類のルーツは、こういう風にずっと遡るとアフリカまでたどることができますが、そういった人類史の大きな流れの中で、アジアの中の沖縄という小さな島も、一つの役割を持ってたというのが何となくうれしいですね。

この沖縄からは、さらにいろいろな出土品が出てきます。九州各県はもちろん本土からは出てこず、沖縄でしか

出てこないものに、中国の古代貨幣があります。この何かカミソリみたいな形をしたものも国内では沖縄だけで見つかっている出土品で、明刀銭と呼ばれる中国の古代貨幣の一種です。秦の始皇帝が中国を統一する前、燕という国がありました。この燕という国はアジアで商売というものを確立した最初の国だと言われていて、商という名でも呼ばれた国なんですね。これが今の商いとか商売という言葉につながっているんですけど、この国で使っていた貨幣が、この明刀銭です。このお金は沖縄から、しか見つかっていません。しかも平成4年には沖縄の洞窟からまた一枚出てきまして、計二枚になりました。

なぜ2400～2500年前の中国のお金が沖縄から出てくるのか。それを研究されたのが江上波夫という先生です。貨幣というのは目的を持った人たちしか使わないですから、沖縄では流通経済活動がとても進んでいたのではないかと考えられますが、では明刀銭はどうやって沖縄に運ばれたのでしょうか。中国大陸には、沿岸を航行する一つの航路がありまして、大きい荷物を運ぶ時には、陸の道なき道を行くよりは、船に荷物を積んで沿岸伝いに運んでいたわけですね。そういった船が台風とか低気圧に巻き込まれて、東シナ海に押し流されることがありました。普通だと、中国大陸と沖縄の間は1500km、那覇～東京間ぐらいの距離があって、沿岸航海用の船ではなかなか行き着けません。しかし、琉球列島と中国大陸の間、東シナ海の真ん中には対馬海流という暖流が流れており、それから冬には北から吹き下ろしてくる季節風があります。この自然のエネルギーで、中国の沿岸から外海に吹き出された人たちが、琉球列島に吹き寄せられてくるわけです。こういった人々が明刀銭とか古い中国のお金などを持ってきたんじゃないかと考えられています。

その頃の古い中国の珍しいお金が、沖縄にもう一カ所、石垣島のすぐ南にある竹富島という小さな島からも出ています。これは竹富島にあるお寺に付属する博物館の写真なんですけど、お坊さんがいらっしゃって、この方がご自分の宗家、竹富から出てきた中国のお金を全部集めて、蒐集館という展示館を作られたんです。そのお金の中に、2000年前の貨布という面白い形

をした中国の古銭があるんですね。この竹富島にも、2400～2500年前から秦の時代にかけてのお金が渡っているということです。つまり竹富島は2400～2500年前から中国人のいわゆる前進基地だったのではないかということが考えられます。こういった遺跡、遺物から、琉球列島は紀元前から中国と非常に深い交流があったということが、最近の考古学の成果から見てもわかるわけです。

また、九州の佐賀県には、吉野ヶ里という弥生時代の遺跡があります。これが発見された時は、卑弥呼の邪馬台国でにないかということで、新聞やテレビなどでも非常にセンセーショナルなニュースとして騒がれましたね。結果的には邪馬台国ではないということになりましたけど、その2000年前の弥生時代の吉野ヶ里の遺跡の中から、お墓が見つかっているんですね。そのお墓はある程度力を持った権力者たちのお墓と見られますが、そこから出てくる人骨の腕には、ゴホウラという貝殻でできた腕輪が装飾品として何個もつけられているんですね。このゴホウラという貝は、奄美大島以南の水深10m以上の深海でしか採れない貝です。最近は沖縄本島近くでは採れなくなりまして、どんどん生息域が南に動いていますが、このゴホウラ貝の貝殻というのは、光沢があるんです。光ってるんですね。光り物というのは、中国では魔除けになると考えられていました。王様が金銀の王冠とか宝石類を身につけるのは、あれは一つの魔除けということです。光り物、これは魔を防ぐ。いわゆる魔気、邪気を防ぐという言い伝えがあります。

しかし、沖縄の人たちがこういう力を知ってて、それを使ったかというと、そうではありません。沖縄はいわゆる中国との交流の窓口で、中国人が沖縄南海で採れるこの貝殻を見て、それを加工して腕輪を作って佐賀県に持っていく。そして佐賀県でコメや弥生式土器と取り替えて、それを琉球に持ち帰る。沖縄の人たちは、このゴホウラの貝殻で海外との交易品を作り出して、それが九州との交流に使われていた。その交易品が佐賀県吉野ヶ里から出てくるゴホウラ貝の腕輪なんですね。ということは、その当時、九州と琉球列島、それから中国の間には、交易ルートがあったということになります。シルクロードというのは中国と中近東を結ぶ道ですけど、最近は琉球列島と中国、そして本土を結ぶ貝の道、いわばシェルロードと呼んでいい一つの文化の道があったということが言われています。これが九州と琉球列島、特に沖縄との、2000年前の古代の歴史のつながりを証明すると思います。最近の考古学によって、こういった新しい説も生まれてきております。

沖縄本島の西に、伊江島という島があります。この伊江島がゴホウラの貝殻の腕輪の生産工場であると最近わかってきました。伊江島は、海洋博をやった本部（もとぶ）のすぐ目の前にある島ですけど、この島の南部の遺跡から、この貝殻の試作品が山のように出てきたんですね。失敗品のゴホウラ、つまり実際に加工した品も出てきたということは、そこが生産工場であったということです。しかもこの生産工場は、伊江島だけでなく、久米島、渡嘉敷島といった東シナ海に面する島々にもあったということが最近わかってきています。また、これも最近になって、北海道からも沖縄から運ばれたイモガイの貝殻が発見されました。沖縄の人たちが北海道まで持って行ってたかというと、さすがにそれは無理です。おそらく途中途中でバトンタッチをしながら、リレー式に運ばれたんでしょう。しかし、今から2000年以上前の弥生時代、既に琉球の貝の文化は、遠く北海道まで北上していたということですね。

こうした琉球列島を中心とした古代の人々の交流は、当時の沖縄の人たちの船を操る能力や、航海をしようという意思だけで成し遂げられたのではなくて、自然の大きな力によるところも大きかったと思われます。南太平洋では北太平洋暖流というのが発生していまして、これが黒潮の母体みたいなものです。私たちに台湾の北部から宮城県の金華山沖までを黒潮と呼んでいるらしいですが、黒潮は台湾の北で発生しているかというとそうではなくて、そのルーツと言いますか、根元は北太平洋で発生するんですね。そこで発生した暖流が、地球の自転と北から吹き下ろす風の力によって、北上を始める。これが黒潮という一つの暖流になるわけです。沖縄がいろいろ独自色の強い文化や歴史を作っていく要因の一つが黒潮です。この黒潮が非常に大きな役割を果たしています。

地図を見ていただきますと、太平洋

をこうやって連続していくみたいに回っているのが北太平洋暖流です。この中にクジラ、マグロ、カツオといった魚類が回遊しています。この回遊する魚群を追って、南太平洋から北上してくる人たちがいるんです。この人々が今から5000年前、港川人のあと、琉球列島にたどり着いて、私たち沖縄人の新しい先祖につながる海洋民族なんですね。セーファー御嶽に出ますと、あそこから久高（くだか）島が見えます。久高島は、沖縄では神の島と呼ばれてるんですね。なぜ神の島と呼ばれるかと言いますと、沖縄の創建の神々が降臨した場所だからです。本土で言えば、イザナギ、イザナミのような男女の神々が、ニライカナイから久高島に最初に上陸しているわけです。久高という島自体は元々「くふぉう」と言いまして、何を意味するのかというと、クバの木、つまりビロウです。

紀元前の今から5000年以上前の時代、沖縄では亜熱帯植物のクバ、いわゆるビロウの木を使って文化を営んでいました。現在でもクバで家の屋根を葺いたり、サバニという小舟の帆をクバで作ったり、扇や笠などの生活道具を作るといった文化が残っていますが、沖縄ではクバというのは神の木、神木と位置づけられていて、クバの木を伝わって神々がその場に降りてくるということになっています。そうやって神々が降りてこられたのが久高島ということなんですけど、その久高島の港の近くで、今から10年ほど前に久高第二貝塚というのが発見されました。これを調べると5000年以上前の貝塚なんですね。沖縄では恩納村の仲泊をはじめ、あちこちから貝塚が発見されています。貝塚を調べると、古代の人たちが食べたものとか道具とか、そういう文化の名残が出てきますね。実は、沖縄で見つかる各地域の貝塚は、ほとんどが5000年ぐらい前のものなんです。ということは、その時代に海洋民族が沖縄にやって来て海洋文化をもたらし、そして沖縄の貝塚で見つかるような文化を築いていったということが推測できるわけです

海洋民族と言えば船ですが、宜野座村からは3000年以上前に沖縄と本土を行き来したくり舟の舳先が見つかってます。沖縄の人々が船に乗ってあちこちへ行き、交易する。その中で文化の交流が生まれる。それを現在でも残している文化というのは、各地のお祭りです。この真ん中のは鹿児島のソラヨイという祭りですけど、沖縄のウンジャミ（海神祭）とも共通点があって、これらは東南アジアの国にルーツがあるとされる狩猟民族の祭りだと言われてますね。こうやっていろんな文化が、沖縄を中継地としてどんどん北上してきます。

時代は飛びますけれども、沖縄の文化の交流という意味で大きな事件が、幕末のころに起こっています。ペリー提督は浦賀に行く前に琉球に立ち寄りますが、そのきっかけを作った人物がいるんですね。それがバジルホールというイギリスの若き将校です。彼は阿片戦争の時、中国を調べるためにアジアに来て、沖縄にも立ち寄ります。そして彼は沖縄の文化を見て、琉球は歓迎する文化である、いわゆるウェルカム文化である、琉球は刀を持たない平和な国であるということを帰国して本に書いたんです。これがヨーロッパで出版され、その本を読んで琉球に興味を抱いたペリー提督が、浦賀に行く前にわざわざ琉球に立ち寄ることになるわけです。そして、ペリー提督は当時の琉球の文化、歴史を物語る物や琉球の植物の原種のサンプルなどを全部ア

メリカに持ち帰りました。それらは今、アメリカのペリー記念館に保存されています。

こういった琉球の歴史の中で、琉球王国がどうやって誕生したかという話に戻ります。先ほどお話ししましたように、中国との冊封という契約によって、琉球は中国との交易のシステムの中に組み入れられていきました。そしてこれが琉球にとって大きなメリットをもたらします。琉球という言葉自体が一つの国際ブランドになるんですね。

琉球が東南アジアに行って交易をするにしても、名も知らぬ国であれば相手にされない。ところが、中国の冊封体制の中で、中国の皇帝から賜った琉球という名前、そして琉球という国がどうやってこうなったかというバックグラウンドは、冊封をした他の国々も知っているわけですね。もちろん琉球も他の国々のことを知っています。ですから、中国の皇帝からお墨付きを得た琉球というブランドが、東南アジアに行って貿易する時に琉球の大きな力になるんです。

これによって琉球の人々は、当時の東南アジア諸国と手広く交易を行います。たとえば、インドのベンガル地方は赤い染料の産地ですが、インドから持ち込んだその染料を使って染め上げられたのが、当時はべんがたと呼ばれていた布で、これが今の琉球紅型（びんがた）につながるんですね。そしてまた、東南アジアから琉球に渡ってきた蒸留酒が泡盛になり、中国から渡ってきた泡法が空手になっていきます。このように琉球は冊封という中国と結んだ交易体制の中で貿易を行い、そこから上がる莫大な利益で琉球王朝というのを運営していくわけですが、同時に中国から入ってくる文化、そして東南アジアから入ってくるいろんな異国の文化を取り入れて消化し、琉球独自の王朝文化を作り出していくということになるんですね。

琉球の建造物、特に首里城は、外形的には中国の紫禁城に似ていることでもわかるように、中国の様式を取り入れてます。ほかにもたとえば首里城の送迎の石の門も中国の様式ですし、沖縄のグスクの中にも長崎の眼鏡橋みたいなアーチ門を作ったところがあります。ですから、沖縄の文化というのは、目に見える表面的な建造物には、中国の影響が非常に大きく現れていると言えます。しかし、沖縄の文化の大きな基盤、目に見えない思想や精神文化になると、これは日本文化です。

なぜそういうことが言えるかというと、一つは言葉です。文化は言葉によって育まれるという部分が大きいですよね。沖縄の言葉は、奈良時代の万葉言葉だと言われます。その頃、全国に仏教を広めようとして、お坊さんたちが琉球列島にもやって来ます。そして彼らは、琉球に数年滞在して、本土の言葉を伝えていくんですね。本土の言葉の中心地は京都です。京都から北に1500㎞行きますと青森県。京都から1500㎞南に行きますと石垣島なんですが、不思議なことに、石垣の言葉と青森の言葉はよく似ていると言われますね。たとえばお母さんのことを石垣では「アッパー」と言います。青森でも「アッパー」という言い方をするんです。京都を中心にして同心円を描くと、同じ距離のところには、北と南で同じような言葉が残っていると言われますが、まさにその通りなんですね。

ほかにも沖縄には古い時代の言葉がたくさん残っています。たとえば「東風来」と書きまして「こちーら」と読みますが、これは菅原道真が「東風（こち）吹かば…」という歌にも詠んだ東風ですね。そして「南風」と書いて「はえ」と読むのも、古い時代の奈良時代の言葉です。沖縄には「南風原」と書いて「はえばる」という地名もあります。それから、日本語の発音も古い時代のものが残っています。最も特徴的なのが、宮古・八重山地方や本部辺りに残っている「はひふへほ」が「ぱぴぷぺぽ」になる言葉です。ですから「鼻をかむ」は「ぱなをかむ」になります。奈良時代は鼻のことを「ぱな」

と言ったんですね。ほかにも本部地方の今帰仁の近くには、「はひふへほ」を「ぱぴぷぺぽ」と発音する言葉がたくさんあります。

こういうことを見ていくと、琉球の歴史というのは、非常に大きな文化の交流の歴史によって培われてきたということがわかります。しかし、その精神的な基盤、いわゆる思想の骨格を成すのは日本です。日本文化という土壌の上に目に見える形で中国の文明を取り入れて、首里城をはじめとする建造物やいろいろな物を作っていく。これが琉球の文化ということになろうかと思います。

時間となりましたので、ここで話を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

【質疑応答】

本当に今日は貴重なお話をありがとうございました。私は福岡の出身で、宗像大社が近くにございます。高校時代に沖島に行きましたが、その沖島には女性は入ってはいけません。男性が海で禊をして島に上陸しますと、今日のお話にあったセーファー御嶽とほとんど同じで、岩が重なり合っておりまして、そこをくぐって入っていくと、宗像大社の沖津宮が祀られております。そこには約2000年ぐらい前からずっと海の神を祀ってきた遺跡もあるんですけど、ここの神様も海の神なら、横から降臨してきたんでしょうか、それとも上からでしょうか。私は、沖島はどうも横の感じがするんです。それで、沖の島のさらに向こうにある韓国の済州島も横なんですね。横に神が来る。それを見ますと、先ほどのお話にあった海から来る神々のルーツと、元は同じではなかったかという気がしたんですけれども、先生、いかがでしょうか。

実は、柳田国男先生が「海上の道」という本を書かれています。どちらかと言うと文化は北進する。これは文化だけが北進するのではなくて、人間が文化・文明を携えて北上していくという風な内容なんですけど、日本全国の中でも海岸や海に近いところには、やはり海洋民族が住み着いているわけですね。天皇に貝殻とか貝の身を捧げる、そういう部族を海族と言っていたらしいんですけど、それも海洋民族だと思われますね。この海洋民族が潜水漁法、海に潜って海底の獲物を下からとってくる名人なんです。沖縄にもそういう潜水漁法がありますし、日本でも天草や英虞湾とか、あちこちで広く行われていますよね。日本本土では、今は海女と呼ばれる女性がそうした潜水漁の中心ですが、実は本土でも最初は男性が潜ってたんです。ところが、途中で弥生文化になって、稲が入ってきたものですから、田んぼを作るためには土地を開墾しなきゃいけない。男はその力仕事に移っていく。海に潜る役目を今度は女性が担うようになって、そうして海女という人たちが出てくるんですね。ところが沖縄の場合は半農半漁がずーっと続いて、そのまま海洋文化というのが、あまり変わらない形で今に受け継がれているわけです。

今のご質問ですが、やはり黒潮、そして対馬海流が流れて、文化を運んでいくと思うんですよ。海洋文化を伝える人たちが同じような文化を持って、同じような神々を連れて、北上していくということも言えると思いますね。今、歴史を論じる場合、陸の上から見る歴史という視点がほとんどですけど、海から見る歴史の視点もあります。網野善彦先生という人が、海から見る歴史も日本の歴史の一つの見方だと教えてくれてます。日本列島の北側では、海洋民族の文化的なものが共通しています。沖縄ともやはり共通しているものはあると言えると思います。

記念講演～歴史文化勉強会 2

講師

埼玉大学名誉教授

長谷川 三千子 氏

テーマ

「日本の精神文化に学ぶ」

1946年東京生まれ。
東京大学文学部（哲学科）卒業。同大学大学院博士課程中退。東京大学文学部助手を経て、埼玉大学教養学部に勤務。平成23年4月より埼玉大学名誉教授。
著書に『からごころ～日本精神の逆説』（中公叢書）、『日本語の哲学』（ちくま新書）など。

初めまして、長谷川でございます。初めましてというのは、ここにいらっしゃる方々の大部分にも初めましてなんですが、沖縄に初めましてという意味も含めての初めまして、でございます。

私は、本当に生まれて初めて沖縄に参りましたが、実は沖縄に来る前は、正直言って何でみんな沖縄、沖縄って騒ぐんだろうと思っておりました。今日は羽田発の沖縄行きはほとんど満席だったんですけど、すぐ後ろに座っていた3人組の若い男の子たちなんかは、乗った瞬間からもうきゃうきゃしてるんですね。「ああ、もう天国だなあ」「ああ早く着かないかな」とか言ってるんです。何をこの人たち興奮してるんだろうと思ったんですが、いざ着いてみて、それがわかりました。先ほどは、本当に一瞬、ちらっと沖縄の玄関口からちょっと中を拝見させていただいたというような、そういう短いツアーでしたけれども、あのセーファー御嶽に行ってきまして、しみじみわかった気がいたしました。

あらかじめいろんなことをガイドの方に説明していただいて、一歩一歩石灰岩を踏みしめながら、上から大きな岩がかぶさってきている御嶽への道を歩いていくと、昔、たった一人で闘得大君がここを歩いていらした時は、どういう感じだったのか、本当に身にしみてわかってくる感じがしたんです。そして、岩の裂け目に来ると、今度は目の前に遠く、真っ青な海が広がり、そこに島が見えました。これはもう、本当にやっぱりみんなが沖縄、沖縄と興奮するわけだなあと思いました。

実際にそういうウチナーの様子を自分の目で見て、そして今の亀島先生のお話をうかがいますと、改めて沖縄というこの場所が、日本にとって、ある非常に特別な意味を持った場所なんだなということが、改めてわかる気がいたします。日本の中でもこんな風に、元々独立した歴史を持っていて、そしてそこから日本に組み入れられていった場所、しかもこれほどはっきりした形でそれが残っているというところは、多分、他にはないんじゃないかという気がします。もちろん大昔の歴史を見ますと、いろんな地域が蝦夷（えみし）であり蝦夷（えぞ）であり、大和にとっての外国であり、他民族であって、それが統合されていったということがあるわけです。けれども、本当にそれ自体として独立した文化があって、そしてその独立した形が今も手に触れられる形で残っている、しかもそこが日本であるというところは、やっぱり、この沖縄の他にはないという気がいたします。

そういう沖縄と日本全体の関係を考えるとき、日本というのは何なのか、日本を日本としているのは何なのかという問いが、改めて我々に突きつけられ

る思いがいたします。今日、ガイドの方や亀島先生のお話を聞き、お昼の時にもミニレクチャーを拝聴いたしまして、つくづく印象に残ったのは、ああこの琉球、あるいは沖縄というところは、日本と中国の両方が自分のものにしたくて、お互いに綱引きをしたところなんだ、そして双方が「こっちにいらっしゃい」と呼びかけて、いろいろ歓待をして、ついに日本が沖縄を自分たちの側に引き止めた、そういうところなんだなということでした。

世界史の中では、そういう綱引きというのは大体が、血なまぐさい征服物語という形で行われます。もちろん沖縄の場合にも、ある意味でその例外ではなかったと思いますが、それよりも目立つのは、日本と中国がまるで求婚者のように沖縄にはたらきかけていた、ということの方ですね。ことにこの琉球という中国名なんですけれども、私がつくづく面白いなと思いましたのは、中国はめったにこういう名前を周辺民族に付けないんですよね。匈奴とか吐蕃もそうですし、あちらの文書の中では我々大和の国や民族にも、矮小という意味を含む「倭」という漢字を当てています。彼らは、決してほめ言葉を他の民族に使わない人たちです。それが、瑠璃の球を求めるというのが語源の一つだったという美しい名前を与えて、貿易のお墨付きまで与えるなんていうのは、これはもう中国周辺の民族にとっては、泣いて喜ぶような素晴らしい恩恵ですね。

ところがやっぱり、先ほどのセーファー御嶽に身を置き、しかもそこがつい最近まで、男の人が入ってはいけない、（女人禁制ではなくて）男人禁制という場だったことを考え併せてみますと、これはどう逆立ちしても中国文化じゃないなという気がいたします。前世紀の後半から日本でもフェミニストという人たちがのさばり始めまして、日本の女性の虐げられた地位を向上しなくちゃとか言って、一生懸命いろんな法律や基本法を作ったりしていますけれども、実は日本というのは世界全体で見ても、大昔から女性の力が認められてきた国なんです。先ほども、琉球ではノロという、役人と同じように正式の役目を与えられた女性たちが、コミュニティを引っ張るという形がずっと続いていたというお話をうかがいました。面白いことに東北地方には、もっと霊力の強いイタコという、霊界と人の世を取り持つ女性たちもいます。このように日本には、女性が最も神に近いという、我々独自の精神文化が暗黙のうちにあって、これは恐らく中国の儒教文化の中では、どこをどう叩いても出てこない、そういう深い精神文化だと思います。ですから今、沖縄が沖縄として日本であるということは、言ってみれば両国の暗黙の綱引きの中で、そういう精神文化の深いところの引力というのが、いわば勝ちを占めたという風に考えて良いのではないかという気がします。

ところが、ここで実は私がお話しようとしたのは、そういう深い絆で結ばれている沖縄、しかも本州の若者たちが、沖縄上空に来ると「ああうれしいな」「見えたよ、見えたよ」と言って喜ぶような、憧れの地としての沖縄という側面を持っているのと同時に、多分ここにいらっしゃる皆さんも胸の中にいろんな思いをお持ちだと思いますけれども、沖縄と日本本土の関係は、少なくともこの60年間、非常に難しいものを含んでいて、そしてその間には深い絆があるのと同じぐらいに深い亀裂が走ってきたということです。そして、その亀裂は、いまだに事あるごとにその口を開けるわけです。今はもう大震災の問題で吹き飛んでしまいましたけれども、民主党になってから、改めて米軍の基地をどこにどうするかという問題は、宙ぶらりんになったまま、いわば日本政府の解決しなければならないものすごく難しい課題としてあり続けるという、そういう格好になっています。

一体、この亀裂はどこから発しているのか。私はこのシンポジウムへのお誘いをいただいてから、そのことを何度も考えて、これがやっぱり根元にあるかなという気持ちを抱いたところで今度の大震災に出遭って、日本が沖縄をどう扱ってきたかという、この問題の形が、改めて見えたような気がしました。そう言うとすごく大げさに聞こえるんですが、実はキーワードは非常に簡単なことで、苦難をともにするという体験を、我々は本当に共有してきたのか。このことに尽きるのではないかと思うんです。

震災からどうしてこんな話が出てきたのかというところを、ちょっとお話ししたいんですが、今回のシンポジウムのタイトル「どうする日本、どこへ行く日本」は、もちろん震災の起こる

前にお決めになったわけですよね。でも、何だか怖いぐらいに、今の日本の状況をズバリと言い当てているという気がいたします。皆さんの大部分の方は多分九州にいらっしゃり、あるいは沖縄にいらして、あれほど大きい地震でも、九州・沖縄になると全くちらりとも揺れなかったのではないかと思います。ところが、東京におりますと、かなり揺れました。それでも東京で亡くなった方というのは、九段会館で天井が落ちて亡くなった方とか、たまたま危険な作業中に足場から落ちて亡くなった方とか、ほんのわずかだったので、あの後の我々東京にいる人間の反応は、言ってみれば比較的ゆとりのあるものでした。「ああ怖かったね」と言いながら自分の地震体験を話すという、そんな光景が震災後、どこでも繰り広げられたんです。

あれだけ大きく揺れたので、これは関東大震災かと思ったという方が結構いらっしゃいます。それからもうちょっと観察の鋭い人は、これは直下型ではないから、これが世に言う境界大震災というやつかなと思った方もいらっしゃるんですが、実は私の頭には、東北の方の前では言えないような台詞が、ふっと浮かんだんです。最初にグラグラッと揺れ始めた時に、「ああ、なんだまた宮城沖地震か」と思ったんですね。実際には、「ああ何だ、また」どころか、それこそ数百年に一度の宮城沖地震だったのですが―けれども、そんなことが頭をよぎったのには理由がありまして、実は11日の大地震の2日前、3月の9日にも宮城沖に地震があったんです。東京でも少し揺れました。その時は、本当にめまいがするのかなというような感じの、ゆらゆらーっとした揺れで、後で携帯の地震情報を見ると、「宮城沖でかなり大きい地震」と出ていました。

それで、そういう遠い地震ならこっちには直接関わりはないし、自分がめまいがしたんでもないなと、ちょっと安心したんですが、実はそれが本当は、今回の大地震につながる、非常に怖い前兆だったらしいんですね。そこでガタンと小さく壊れて、その2日後にそこを中心にして、ダーッと南北にマグニチュード9の地震が発生したということなんです。もちろん、ほんの一瞬、「ああ何だ、宮城沖地震か」と思った次の瞬間、ちょうど家が荒波にもまれる船になったような感じの大揺れになって、2分間ぐらいゆさゆさと揺れて、「これは変だな、遠い地震だと思ってたのに」と不安になりました。息子も部屋から出てきまして、「遠い地震だと思ってたんだけどな」「いや、違いよ」「ということは…」と、二人で顔を見合わせ、「よっぽど巨大な地震がどこかで起こったんだ」とテレビの前に駆けつけたら、その時はまだマグニチュード8。いくつと言ってましたけれども、もう東北地方に大変な被害があったという情報がダーッと流れていました。それで「何だ、宮城沖地震か」と言うどころの騒ぎではないということに気がついたわけです。

自分で振り返ってみて、つくづくと反省したことがあります。17年前には阪神大震災がありまして、本当に大変な被害が出たんですが、あの時には不思議に、自分たちが日本人として一緒になって被害を受けたという気持ちが、非常に薄かったんです。これは恐らく、今回ある官僚が言っていたように、一つは阪神大震災が東日本大震災と比べれば、かわいいと言えるぐらいのものだったからかも知れません。阪神大震災で家族を亡くした方は、ちょっとムカッとなさるような言葉だと思いますが、本当に地震の規模それ自体で言えばそういうものだったし、日本自体が直面した危機という意味でも、阪神大震災はあくまでも局地的な地震、局地的な災害だったわけです。

ですから、我々の態度もそれなりのものでした。東京からもいっぱいボランティアが阪神に駆けつけましたけれども、それがどういうボランティアだったかと言うと、「お気の毒に」というボランティアだった。つまり、我々、全く何の被害も受けていない人間たちが、気の毒な方たちを救うために少しでもお役に立ちたいと言って、ボランティアとして阪神に駆けつけた。あの出来事は、今振り返って考えてみると、そういうものだったような気がします。

ところが、少なくとも関東に住む我々にとって、今度の東日本大震災は阪神の時とは全く意味が違いました。東北が一番ひどくやられたのに、東日本大震災なんていう名前になって、我々東京に住んでいる人間はちょっと面映いんですが、不思議に「東北の方たちは気の毒にね」という、そういう気持ちではないんです。もちろん、気の毒じゃないというのではない。避難先にたどり着くまでに3日間すぶ濡れ

になって山の中を歩いて、ようやくたどり着いたそこでも、まだ食料が足りない。そんな苦労をされた方々が、気の毒でないはずはありません。一口に言えば、他人事の「気の毒」ではなくて、これは自分たちの災害だ！という感覚なのです。私自身を振り返ってみると、さあ日本が大変なことになった、これはもう皆で一緒になって力を合わせて、日本を再生復興させなくちゃいけないという気持ちなんです。こんな風に言うと、まるで菅首相の言葉みたいで嫌なんですけれども、これは単なるお役人の決まり文句とか、政府の人たちの口先の話というのではなくて、我々自身の持つ実感として、そういう感じが湧いてくるわけですね。

私の親類は皆、九州とか南の方なので、東北に直接の親戚はいないんですけれども、たとえば娘の友達の両親が石巻市で、家を全部流されて、今、住むところに困っているというような話を聞くと、もうどうぞどうぞ、いらっしゃいと思わず言ってしまう。普通だったら、全然知らない人にうちの空いてる部屋をどうぞなんて、間違っても多分、私の口から出てこないと思うんですが、これはもう何と言うか、頭で考えるというよりも、体全体が一緒になって苦難に立ち向かわなくちゃというモードに切り替わっているという感じなんですね。

何でそれが改めて、沖縄の話についての反省になってきたのかを申し上げますと、よくこの震災を振り返って、第2次大戦の東京大空襲とか原爆とか、そういうものと比較して話をする方がたくさんいらっしゃいますが、これはある意味では大変間違っているんですね。今回の大震災は、福島の原発の事故も含めて、これはあくまでも天災なんです。福島の原発事故が想定外であったということが大変非難を受けまして、あれは人災だと言う人が多いんですけれども、私はあれを人災という言い方で言うのは、少し不遜なんじゃないかという気がします。もちろん、想定をもっと厳しくしておきべきだったんじゃないかということは、いくらでも言えるんですが、しかし、地球と人間という本来のあり方で考えてみると、何もかも我々が想定して、地球がくしゃみしようが、咳をしようが、全部人間の想定内になるというのは、あり得ないことなんですね。たとえば、今回のマグニチュード9というのは大変な大地震ですけれども、地球全体からすれば、多分くしゃみまでいかない。我々はちょっとくたびれると、ほっぺたがピクピクッとしたりしますけれども、地球にしてみれば多分、その程度のことだろうという気がします。

かつて地球は、こんな風にプレートがずれるだけではなくて、本当にプレートがばきっと折れて、中のマグマが噴出してくるというような、そんな大きなくしゃみをしたこともありました。そんな時には想定外も想定内もなくて、もうほとんどの生物が絶滅するような事態が、地球では時々起こるわけなんです。そんな地球上に、我々はほんのちょこっと住まわせてもらっている。用心しながら、びくびくしながら住まわせてもらっている。今回の東北の震災というのは、そういうものだったと思います。

一方、戦争というのは、これはあくまでも人災です。原爆は天から降ってきたのではなくて、アメリカ軍が日本人たちを殺すために、ちょうど広島の人たちが家から出てきて、出勤する時間帯を狙って落としたわけですし、東京大空襲も、一番北風がびゅうびゅう吹いて、乾燥しきって、本当に燃えやすくなっている時に、東京中の人間を皆殺しにするのにいいような形で、焼夷弾を落としたわけです。人災というのは、私はそういうものだと思うんです。

ですから、あまり軽々しく両方をくっつけ合わせたくはないんですが、しかし、ある意味では似ているところがある。というのも、この第2次大戦、ことに大東亜戦争末期の日本というのは、日本中が一緒になって同じ苦難を背負っていた時期で、しかも、その時に我々が忘れてならないのは、この苦難を何とか、てうまいこと逃れようという日本人はほとんどいなかったということです。皆、日本が負ける時は自分たちの命も終わる時だという、ある種の覚悟を持って戦争に臨んでいた。ことに戦争に行く世代の青年たち、それからもう少し若い少年たち。世代論で言えば、いわゆる第2次戦後派と言われるような、敗戦当時に12、3歳から20歳ぐらいであった人たち。こういう人たちが一番、その気持ちを強く持っていたと言われるわけですが、しかし、それだけでなくて、小さな子供を抱えた母親たちも、ある種の覚悟のようなものを肚の底に持ちながら、日々を過

ごしていました。そしてそれこそが、我が国の戦争体験だったわけです。

とりわけ、戦争末期にしきりに語られていたのは、本土決戦ということです。上から焼夷弾をばらまかれて、原爆を落とされるというだけではない。本土決戦というのは、それまで空爆を逃れていた都市もひっくるめて国民すべてが、命をかけて最後まで切り結ぶ作戦という風に日本人たちは捉えていた。それが本土決戦だったわけです。

この本土決戦というのは、今、平和になった我々の目から見ると、とんでもない作戦だったという風に、多分皆さんも思われるでしょうし、若い人たちもみんなそう思うと思うんです。たとえば富岡幸一郎さんという、非常に日本人の精神文化について深く考える方が、『新大東亜戦争肯定論』という、林房雄の『大東亜戦争肯定論』をもじった題名の本をお書きになっています。その中で、特攻の人たちが国のために命を捧げたことを、単なる犬死にという風に考えたのでは、日本文化はわからないというようなことを書いていらっしゃいます。その富岡幸一郎さんですら、本土決戦というのは狂気の作戦である、作戦なんかではないと言ってらっしゃる。しかし、その当時、既に物心ついていて、自分で戦争末期と敗戦を体験した、たとえば橋谷秀昭さんのような方は、それは少し違うとおっしゃるんですね。やっぱり日本人は、ある一つの覚悟を固めて戦っていて、いかに狂気と見えようとも、本土決戦というのは日本人の精神の一つの表現だった。そういうものと理解しなくちゃいけないとおっしゃっている。つまり、いわば保守派と言われる人たちの中でも、実際にそれを体験した人と、それから戦後の生まれで全く知らない人間の間では、大きく温度差があるという、とっても難しい問題が、この本土決戦なんです。

これがなぜ沖縄を理解するのに関わってくるのか、もう皆さんは既にピンと来てらっしゃると思いますが、いわゆる本土決戦をしたのは沖縄だけなんですね。もちろん、それ以外にも小さな島で、守備隊と住民たちが一緒に戦ったという戦闘はいくつかあるので、沖縄だけと言うのは間違いだと言う歴史家もいます。しかし、ほとんど10万人に近い住民が軍と一緒に戦って、戦死した兵士とちょうど同じ人数の住民が、いわば「戦死」したというのは、沖縄だけなんです。もし我々が、この大東亜戦争を戦っていた時の日本人の気持ちになって、本当に正しく沖縄戦というものを眺めたらば、ちょうど今回の大震災で、東京にいた我々が東北を何とかしなきゃ、一緒に日本が再生しなくちゃという気持ちにかられるのと同じように、沖縄は自分たちの同じ危機を戦ってくれたんだという心からの共感をもってその死を悼み、自分たちもその後に続くぞという決意表明をもって、沖縄戦をそれぞれの心の中に刻み付けなくてはいけないと思ったはずです。私は沖縄戦というのは、こういう出来事だったと思うんです。

その沖縄戦が、いわば公式に終結したのは6月の23日でした。あの有名な、「秋待たで結れ行く島の青草は皇国（みくに）の春に甦らなむ」という牛島中将の歌とともに、沖縄が公式に敗北を認めたのが6月23日だったんですが、それから2ヶ月たたないうちに、日本はポツダム宣言を受諾して降伏します。実は、ここからが非常に難しいところなんですね。この終戦の詔書というのは、いろんな人が言う通り、大変ありがたい詔書なんです。でも、この8月15日の時点で降伏勧告を受け入れるということが、実質上何を意味するかというと、歴史の常識から言えば、まず昭和天皇のご一身の安全は、もう確保できない、占領してくる連合軍が何をしようとも、我々は何一つできないということです。日本国民全員の命が助かるかわりに、そういうところに昭和天皇を差し出すというのが、言ってみればポツダム宣言の受諾だったわけです。

ただし昭和天皇は、自分の命はどうなっても構わないんだ、大事なのは日本国民の命であるから、日本国民は情の激するままに事端を繁くしたりしてにならぬ、ここで本当にきれいさっぱりと、堪え難きを耐え、忍び難きを忍んで敗戦を受け入れよと、そういう詔書を下されたわけですよね。これは改めて言いますが、大変ありがたいことなんです。しかし、このありがたい詔書を受けた時に、ある意味で我々と沖縄との間に大きい亀裂が入ってしまったということが言えます。つまり、沖縄の人々は本土決戦をして、非常に多数の住民が戦死した。ところが、それに続こうと思っていた本土の人間たちは、この終戦の詔書をありがたく拝して、そして静かに占領者たちの言いな

りになってしまった。これが日本の戦後の始まりなんですね。別の言い方をすると、我々が沖縄の人たちの手を取って、「ありがとう、私たちも後に続きます」というその道は、そこできれいに閉ざされてしまった。結局、何が起こったかと言うと、沖縄の気の毒な人々という、そういう仕方でしか、本土の人間は沖縄戦を見ることができなくなってしまったわけです。私は、これが日本の戦後の出発点―本土と沖縄の亀裂の始まり―だったんじゃないかという気がするんです。

実は、今日に備えて、例の大江健三郎さんの『沖縄ノート』というのを、ちょっと新刊で買うのは怖しかったので、アマゾンのユーズド・ストアで40円で買いました（笑）。しかし、読んでみると、彼はドキンとするほど正しいことも言ってるんですね。我々は沖縄から日本を振り返って反省しなくてはいけないと、そんなことを書いているんです。これはもう、ある意味で本当にドキリとするほど正しい言葉です。

今、敗戦の時に日本の本土と沖縄の間に大きい亀裂が入ったということを申し上げたわけですが、もう一つ大きい亀裂が入ったのが、日本のいわゆる主権回復の日、つまり昭和27年4月28日です。この日は日本が占領を解かれて、独立主権を取り戻した日としてお祝いしなくちゃいけないと、私の尊敬する小堀（桂一郎）先生、井尻（千男）先生、入江（隆則）先生のお三人が発起人になって、毎年、この主権回復を祝う記念集会というのを開いていらっしゃいます。私も何度かその祝典に招かれて、おめでたいと口にしつつも、何かやっぱり心から祝えないなあと感じておりました。その時には、沖縄のことを考えて引っかかっていたわけではないんですけれども、毎回、これは単純に祝っちゃいけないなという気持ちがしていました。私は実は、いろんなところに呼ばれて話をするたびに、あまり主催者の思う通りの話をしないということを言われていまして、そういう祝典でもめでたくないと言い続けてきたんですが、改めてこの沖縄の問題を考えてみて、あっ、私が引っかかっていたのはこれだと、改めて確認する思いがしました。

つまり、その時、沖縄が置き去りにされたまま、本土だけが独立主権を回復している。沖縄は相変わらず米軍の支配の下にある。そして、かの佐藤首相の沖縄返還まで、我々は沖縄を見捨てたままにして、主権独立国家と言っていた。しかし、もう一回、大江健三郎の言葉を噛み締めながら振り返ってみると、果たして我々は本当にその時、独立主権を回復したのか。形の上では主権国家なんて言っているけれども、本当に日本は主権国家なのか。いろんな資料を洗い出してみればみるほど、日本はいまだに独立していない主権国家だと思えてなりません。しかも沖縄の人たちは否応なしに毎日、米軍の存在というものと顔を突き合わせて生きてきているわけです。

ですから、アメリカという存在がどういう存在か、考えてみてください。もちろんアメリカがたくさんお金を落としてくれている。そういう意味で経済の繁栄に役立っている。そういう側面があるにしても、しかし、沖縄の住民10万人を殺した相手、人災のその張本人である敵国のアメリカが、この美しい瑠璃の球という言葉で謳われてきた自分たちの国の中に、いまだに居座ったままでいるわけです。こういう厳しい刺を突きつけられつつ生きてきているということ、これが私は沖縄の戦後史だったのではないかという気がします。これはまさに、我々日本人が本当は日々目の前にして、そして日々反省して、これをどうしたらいいのか考えるべき問題、まさに「どうする日本、どこへ行く日本」と問いかけ続けなければいけない問題なんですね。

ところが、日本はもうそれを徹底して隠してきました。それをどんなに徹底して隠してきたかの一番はっきりした例が日本国憲法です。ここにいらっしゃる皆さんは皆もご承知の通り、我々が国が最高法規と戴いている日本国憲法というものは、日本人が作ったものではない。単に草案をアメリカ人が作ったというだけでもない。アメリカ人が作って、英語で書いて、日本語に訳す。その日本語への翻訳一つ一つにも逐一注文をつけて、それから国会の審議も逐一、こんな風に審議いたしましたと翻訳してはGHQにおうかがいを立てていた。しかももっと恥ずかしいことには、GHQがどう言うだろうかということを、まず第一に立てつつ条文の審査をして、さらに、アメリカが作り、アメリカの力の下で出来上がっている憲法であるということを国民に一言も漏らさないまま、天皇陛下の上意の文をつけて、日本国憲法と

言って発布してしまった。こういう日本国憲法の下で、我が国の日本の本土は独立主権国家だと言い続けてきたわけです。この背景にはもちろん、アメリカがものすごく厳格なプレスコードを敷いて、憲法に関してちょっとでもそういう真実をほのめかした文章が、あらかじめ申し出た印刷物の予定物の中にあると、全部それを削除させて、絶対にそれが表に出ないようにしたという、そういう確かな経緯があります。

しかし、そもそも日本に占領に来たアメリカ人たちの中で、日本語ができた人というのは、ほんのちょびっとなんです。この震災を機に、私は日本に帰化するとおっしゃったドナルド・キーンさん。よくぞいい時に言ってくださったと私も大変うれしいんですが、彼なんかは日本語ができて日本に来た数少ないアメリカ人の一人です。大多数の検閲は、日本人が英語に翻訳しているんです。もちろんそれも二人ひと組にしてしっかりとダブルチェックをさせる。アメリカ人たちは日本人がサボタージュをしないように、非常に巧妙にシステムを作っていたらしいんですが、しかし、我々が本当に断固、精神的にアメリカに支配されたりなんかするものかという、そういう大和魂を持ち続けていたら、どんなに厳しいチェックがあっても、どうにかする方法はあったと思います。

たとえば日本人の魂を奮い立たせるような文章は適当にごまかして「これはアメリカは偉いということを書いた文章ですよ」なんて言って提出してしまって、「我が国の日本国憲法はアメリカが作ったものだから、我々はもうこんなものの下で長年暮らすつもりはない」と、そんな文章をどんどん発表させたって良かったはずなんです。あるいは生放送で、国会議員が大声で「諸君、この日本国憲法の真相をご存知ですか」と演説したって良かったはずなんです。ところが、我々はもう新しい国だ、日本は民主主義に生まれ変わったと言って、そういうことを一切やってこなかった。そういうことのすべてをまざまざと思い知らせてくれるのが、この沖縄という我が国の貴重な県だという気がするんです。

そういう意味で私は、沖縄で日の丸を焼いてみせたり、それから君が代にそっぽを向いてみたり、そういう人たちに対して片方ではものすごく怒りを感じます。つまり、「あなたたちは自分でその亀裂を大きくするつもりなんですか」という怒りの気持ちを私自身、確かに持ってるんです。しかし、それと同時に、それをさせてきたのは、やっぱり戦後の日本だったという気がしてならない。もし戦後の日本が本当に我々の大和魂を捨てずに、我々が本土決戦という、ある意味では狂気じみていると思われるような、そういう作戦ですら覚悟をもって引き受けようという姿勢で戦っていたということを忘れていなかったら、随分違っていたでしょう。ところが、戦後の日本は自らけろりと忘れてしまった。こういう日本人の健忘症というものがある限り、日本と沖縄の溝は埋まらないのではないかという気がするんです。

もう最後の一言になりますが、改めてもう一度「どうする日本、どこへ行く日本」と問いかけたいと思います。これはまさに先ほども言ったように、今の私の気持ちそのままなんです。実は本当に個人的な話になるんですが、私の紹介の肩書きは、お恥ずかしくも埼玉大学名誉教授となっております。つまり定年退職したということです。この4月に定年退職になって、3月に地震が起こるまでは、もう何かルンルン気分だったんです。もうこれからは読みたい本をたくさん読んで、書きたいものをたくさん書いて、そしてまあ旅行もしようかなあとか、本当に文人生活の老後を楽しもうと思っていたんですが、先ほどのように、もう思い切り揺さぶられました。子供を叱る時なんか、よく「お前、そんなことでいいのか」と揺さぶったりしますけど、そんな風な感じで揺さぶられて、本当にお前、そんなにのんびりしてていいのかと言われた気がいたしました。

今回の震災の後、それこそ菅さんも大急ぎで、何か復興構想会議というのを作ってるようですけれども、震災の復興の話になった時によく耳にするのが、関東大震災の後、リーダーシップを発揮してグランドデザインを作り上げた後藤新平の名です。後藤新平のグランドデザインはだんだん骨抜きになって、あまり思った通りにはいかなかったけれども、彼のような人が出てきてほしいという話ですね。しかし、これはダメなんです。なぜダメかと言うと、関東大震災は非常に簡単だからです。これはある意味で阪神大震災と同じ、一つの都市がやられた、それだけの問題なんですね。ところが今回は東

北の東海岸全域がやられている。農業、水産業だけでなく、工業にとっても実は、あの地域は大変重要だった。あの地域では、そのすべての産業に渡って影響が出ている。そして、福島の第一原発の事故によって、東電が本当に危機的な状況に陥っている。どんな風に危機的かと言うと、もちろん、あの原発の事故を何とかして、人命の被害を出さずに収束するというのが第一です。これも専門家に言わせると、実は、よくあれだけの被害で収まっているというぐらいなんだそうですけれども、そういう目の前の危機と同時に、これは今後の日本のエネルギー政策をどうするのかという、非常に大きい問題につながっている。エネルギー政策に関しては、単に感情的に「原発は怖い」だけでは対処できない。しかし、対照的に原発はこれだけ怖いものだということも、我々は見せつけられた。さあ、本当に「どうする日本、どこへ行く日本」なんですね。

これは誰かカリスマ的なグランドデザインの立案者がいて、そして号令一下で何かをすればいいといった性質のものではないと、私は思います。今はまさに、日本のお得意の衆知を集めるべき時です。しかも東北というのは、我々は東北地方なんてまとめて呼びますけれども、実はそれぞれの町や村は、どこもそれぞれ非常に特色を持った地域です。ちょうど沖縄は沖縄の特色を持っているように、それぞれの東北の町、村がコミュニティとしての特色を持っている。それを壊すようなグランドデザインをしてしまったら、もう東北は東北でなくなり、日本は日本でなくなってしまうんです。だけれども、今、東北には、本当にもう町長さんもいなくなってしまった町とか、陸前高田市なんかのように、被災者全員に災害見舞金を全部出すと、もう市の1年分の予算をオーバーしてしまうという、そんなところがたくさんあるわけです。そういう苦難に立ち向かっている人たちと我々が力を合わせて、一体どうすれば、これから前より良くしていくという復興ができるのか。困難なことだとわかっていますが、私はこれは絶対にできるし、あきらめてはいけないと思ってるんです。

本当に笑っちゃうんですが、地震があって1週間ぐらいたった頃、私はもう居ても立ってもいられなくなって、知り合いの小さいシンクタンクの人のところに電話をかけて、「ちょっとこれ、何とかしようよ」と言って、私なりに動き始めました。今は、何か手漕ぎボートで漕ぎだすような感じで、いろんな専門の方たちの話を聞きながら、ネットワークを広げている最中です。手漕ぎボートがようやくモーターボートぐらいになってきたかなという感じなんですが、これはもう本当に、東日本だけの問題ではなくて、関西も九州も、皆さんのアイデアと力を結集して取り組んでいかなければならない問題だという風に考えています。私の周囲きは名誉教授で、専門は哲学ということになっているんですけれども、目下しばらくは、えらいこっちゃ、えらいこっちゃと言って、いろんなシンクタンクとか学者の間を走り回る小間使いとして、この苦難に何とか、私なりのお手伝いになりたいと思っております。

改めて考えますのは、こういう時にはやっぱり、沖縄の方たちの力も、ぜひ助けていただきたいということです。さっきのお話にもありましたように、柳田国男さんのドーナツ理論とかいうの、私も若い頃に聞いたことがありますが、実は真ん中とその周辺の近さよりも、その遠いところと遠いところの方が、いろんな意味で通い合うものを持っている。沖縄のようにコミュニティの力と伝統の力でもって大きな災厄を乗り越え、今も再生への道を一生懸命もがき進んでいるところ。そして、今、現に災害に出遭って、これからもがき進んでいくところ。そこが両方で手をつなぎ合えば、多分、単に首都圏が手を差し伸べるというのとは、また全く違ったものが生まれてくるのではないかという気がしております。

何か、日本の精神文化に学ぶというよりも、沖縄に学ぶ、そしてぜひ沖縄の力を貸っていただきたいというようなお願いになってしまいましたが、ぜひどうぞよろしくお願いいたします。

御礼の言葉

九州経済フォーラム 常任理事 磯山 誠二 氏（株式会社西日本シティ銀行 代表取締役専務）

九州経済フォーラム25周年事業の沖縄事業を担当させていただいております磯山と申します。今日は亀島先生、長谷川先生、本当に大変貴重なお話をしていただきまして、ありがとうございました。

実に私は、歴史ににあまり詳しくありません。沖縄に来るまで沖縄と琉球の区別もつきませんでしたが、今回いろいろと教えていただいて、違いがわかってきました。また、ウチナーというのはインドネシア語から来ているというお話も、バスの中で伺いました。そして、先ほど亀島先生の港川人のお話を伺って、また認識を改めました。私は以前、日本人のルーツに関する本を読んで、私は縄文人から分かれたのが沖縄の人々だと考えておりましたけれども、そうではなくて逆かもしれないわけですね。大変壮大な琉球の歴史から、最終的には沖縄の奥底には日本のアイデンティティがあるというようなことまで、終始興味深く拝聴いたしました。

亀島先生が古代から14世紀の沖縄のお話をされた後、長谷川先生からは戦後の日本の時代を考える場合、避けては通れない沖縄のことを勉強させていただきました。長谷川先生に今まで非常に難しい本を書かれておられまして、私はあまり自分では読んでいないのですけれども、今回のお話を聞いていて思ったことが一つあります。それは、歴史的に中国の文化をずっと学んできて、戦後はアメリカの言うグローバルスタンダードを勉強してきた日本ですが、これからはやはりもう一度、沖縄・日本のことをしっかり考え、ジャパニーズ・スタンダードというものを作って、世界で戦わなければいけないのではないかということです。

そういう意味でも長谷川先生のお話は、明日のシンポジウムにつながる示唆に富むものでしたし、東日本大震災についても、沖縄と九州の経済がしっかり苦難を共有するということが必要だと痛感いたしました。グリーンスパン（前米連邦準備制度理事会議長）が2、3年前にあったリーマンショックを、100年に一度の金融の津波だということで、英語で「a once-in-a-century credit tsunami」という言い方をしております。今回は1000年に一度の自然の津波に襲われた日本ですけれども、この沖縄と九州がしっかり苦難を共有化することによって、日本の元気を取り戻せるようになればいいと思います。明日のシンポジウムもそういったつながりの気持ちを持って進めていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

交流懇談会

開会挨拶

九州経済フォーラム　会長　石原 進 氏（九州旅客鉄道株式会社　代表取締役会長）

皆さん、こんばんは。JR九州の会長をしております石原と申します。この九州経済フォーラムの会長をさせていただいております。

今日は、九州から約100名、沖縄からも300名以上の皆さんにご参加いただきまして、大変盛大な25周年の会が開催することができました。まず、この場を借りまして、皆様に心から御礼申し上げます。

先ほど長谷川先生から「どうする日本、どこへ行く日本」という題で、この状況にぴったりだと思うというお話がありましたけれども、本当に少子高齢化、人口減少、年金制度の問題、財政問題、安全保障の問題、そして教育の問題もあり、問題が山積しています。そういう中で、この日本をどうしていくのか、未来の世代にどうやって立派な日本を受け渡していくのかということを考えますと、本当に大変です。この題は半年前に決めたわけでございますが、そこに東日本大震災が発生し、先ほどお話しましたように、本当に凄いタイミングと言いますか、この題があてはまるシンポジウムになったと思います。

震災を機会に、我々日本人は、この国をどういう国にしていくのか、この国にどんな問題があるのかということを真剣に考え、行動していかなければいけないと思います。先ほど勉強いたしましたけれども、沖縄は本当に素晴らしい歴史と同時に、また苦難の歴史を持っています。講師の先生方のお話を聞き、そして、この懇親会で皆様のお話を聞きながら、お互いに語り合って、これからの日本をどうするかということについて、一緒に考えてまいりたいと思います。

私たちは、ともすれば公に対する奉仕の心を忘れがちになりますし、日本国民の一体感も格差の問題などもあって、薄れてきているのではないかという感じがします。また、日本人の自信、誇りといったものについても、特に今回の原発事故が非常に大きなブレーキを与えているのではないかと思います。その一方、こういう震災が起こった時こそ、国の大事さを強く感じるわけでして、日本という国家の大切さについても、改めて本当に真剣に考えていきたいと思うわけであります。

今回のシンポジウムは、そういったことを考える機会を作ってもらったと思います。そして日本が改めて世界に尊敬され、また存在感のある国になるように、皆で一緒に力を合わせて頑張っていくための一助になれば、このシンポジウムも成功だと思います。

本日は本当にありがとうございました。明日、また半日ございますけれども、皆様、楽しみにご参加いただきたいと思います。

これで私のご挨拶といたします。ありがとうございました。

歓迎挨拶

沖縄県知事 仲井眞弘多氏 代理 沖縄県副知事 与世田 兼稔 氏

沖縄県副知事の与世田でございます。本日は沖縄県にいらして、本当にありがとうございます。また、創立25周年ということで、記念シンポジウムを開催され、大変に勉強されたということを承り、心から感謝とお祝いを申し上げたいと思います。

知事が本日所要のため、副知事の私が挨拶文を預かって参りましたので、知事に代わり挨拶を代読したいと思います。

「懇談会のご挨拶の前に、東日本大震災とそれに伴う津波により被災された皆様に対し、心からお見舞い申し上げるとともに、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

沖縄県としましては、医療従事者を始めとする職員の派遣や、避難者の受入、物資提供等の支援を行っているところですが、被災を免れた地域として、これまで以上に地域経済を活性化することも我々の役割であると認識しております。

今後も、被災地に対する支援を継続するとともに、九州・沖縄地域の経済活性化が、東北地方の復興の手助けにもつながるとの思いを持って、九州各県の皆様方と連携して取り組んでいきたいと考えております。

それでは、九州経済フォーラム創立25周年記念式典が開催されるに当たり、ごあいさつを申し上げます。

いし石はら原すすむ進九州経済フォーラム会長を始め、関係者の皆様、ようこそ沖縄県へお越しくださいました。

心から歓迎申し上げます。

本年、九州経済フォーラムが創立25周年という節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げるとともに、記念式典を沖縄で開催していただきましたことに、感謝申し上げます。

九州と沖縄は、我が国の南の玄関口として、これまで中国や東南アジア諸国との経済・文化交流に大きな役割を果たしてきましたが、世界の政治・経済におけるアジアの台頭は目覚ましいものがあり、21世紀は、「アジアの時代」とも言われております。

九州と沖縄が、その地理的・歴史的特性を活かして、今後ともアジア諸国との経済・文化交流をますます深め、九州地域の振興と発展に繋がるよう期待するものであります。

また、九州各地から来県されました皆様には、県内の経済界の方々と親睦を深めていただき、九州と沖縄両地域の連携が強化されることを期待いたします。

終わりに、本シンポジウムの御成功とお集まりの皆様方の御健勝と御活躍を祈念いたしまして、ごあいさつといたします。

乾杯

沖縄県経営者協会 会長 知念 榮治 氏

（沖縄セルラー電話株式会社 代表取締役会長）

沖縄の経営者協会の会長をおおせつかっております知念でございます。本日は九州の各県からたくさんの皆さんが、九州経済フォーラム25周年を記念したシンポジウムということで、沖縄までおいでいただきました。心から御礼を申し上げます。

先ほど会長さんからお話がありましたように、残念ながら大震災が起こって、一体日本はこれからどうなるんだという大変危機的な状況の中で、このシンポジウムが開かれました。しかもタイトルからして、まさにそれにふさわしい、「どうする日本、どこへ行く日本」というテーマでのシンポジウムだということでございます。

いろんなマスコミの情報を見ていますと、この大震災については、日本中はもちろん、世界中の百数十カ国からいろんな支援がされているということであります。それから、日本のことだから、必ず立派な国に再生できるはずだという期待も寄せられております。我々もその期待に応えられるように、国民一丸となって復興に協力をして、いや、復興と言うよりも、新しく震災に強い日本を作るという思いで、皆で頑張らないといけないなと思っております。

確か、九州新幹線が鹿児島まで開通するので、その開通記念イベントを各県いろんな工夫をしてやろうと準備をされていた最中に大震災が起こって、新幹線開通の行事が全てストップをしてしまったと聞いております。マスコミにも全く載らなくなってしまったということで、九州の方々は非常に残念だとは思いますが、これも一つ、あの震災に遭わないですんだということで、ありがたかったんだと考えたほうが良いのかもしれません。沖縄も今ちょっと、リーディング産業の観光がストップをしておりまして、各ホテルも閑散としていて頭を抱えておりますが、これはしょうがないことであります。ぜひ早めに震災の復興が進んで、日本全体が明るくなってほしいと心から願っております。

それでは、震災の被災者の方々に一日も早く立ち直っていただいて、日本全体が元気になり、九州も沖縄もまた、大いに日本復興の先導役になって頑張ろうという思いをこめて乾杯をしたいと思いますので、皆様、ご唱和をお願いいたします。

日本の再生のために、乾杯！

ありがとうございました。

琉球芸能　エイサー

歓待の枝　四つ竹

閉会挨拶

九州経済フォーラム 常任理事 徳田 勇治 氏（トヨタ自動車九州株式会社 常務取締役）

九州経済フォーラム理事をやらせていただいております徳田でございます。皆様、ご歓談中のところ、無粋な挨拶をさせていただきます。

本日、私は朝一番からきちっと行事に参加いたしまして、本当にいろんな勉強をさせていただきました。セーファー御嶽では、あの厳かなムードに浸り、信仰心篤き沖縄の方々の日常生活を実感させていただきましたし、それから「いちゃりばちょーでー」でしたか、一度会ったら兄弟と一緒、つまり長い付き合いを本当にやりましょうよという言葉も教えていただきました。こういうことを勉強させていただきますと、私自身、日常いかに貧しい精神生活を送っているか、本当によくわかるわけでございます。

それで決意をいたしましたのが、先ほど沖縄経営者協会の方からお話がありましたけど、沖縄の観光のニーズも減っているということでございましたので、本当に微力でございますが、近々女房を連れて、ぜひこの沖縄にもう一度来たいと思いました。

それからもう一つ、私の本業は自動車の生産でございます。皆様方も新聞等々でご存知のように、地震に東北で起きて、私どもトヨタも三河とか九州の工場には地震の被害は一切なかったにもかかわらず、操業が半分程度にまで減りました。実は、1台の車には部品が2万点近く、数え方によっては3万点の部品があるんですが、この部品一つが足りなくても、車の生産はできません。そういう中で東北には、私どもが部品を調達をさせていただいているメーカーさんが、本当に多かったわけです。私ども工場というのは、一次メーカーさんにお取り引きをいただいてまして、その一次メーカーさんが二次メーカーさんに仕事を出して、二次、メーカーさんがまた三次、四次、五次という風に、ずっと部品調達先が広がっております。私どもは自動車生産を長年やっておりますが、これだけサプライチェーンが長くて広域に渡っているというのは、我々自身が気づかなかった弱点だったのかなという風に、今、考えております。

この問題はこれからオールトヨタ挙げて、いろいろ検討していくわけですけれども、リスク対応ということも含めまして、やはり物を作っているそのエリアで調達も完結するという形に、サプライチェーンを変えていかなければいけません。特に九州は、韓国、それから中国も含めて、これは一つのエリアだという風に思っておりますので、そういうことでこれからぜひ、将来を見据えた、次のステップアップをやっていきたいと思っております。

ということになりますと、当然ですが、やはり沖縄も含めまして、我々がおりますこの九州圏内というのが、いろんな意味で一つにまとまる必要がございます。我々の用語で言いますと「自工程完結」という風に申しますが、ビジネスの最初から最後までをきちっと完結できて、どういうリスクがあっても動じない、そんな生産体制をぜひ私どもも作ってまいりたいと思いますし、九州の他の業界の方々も同じようなお気持ちでいらっしゃるのではないかなと思っております。

最後になりましたけれども、今回この交流会では、本当に有意義なお話をさせていただくことができました。私自身は、泡盛を4杯飲みましたら、頭がクラクラしておりますが、それにさておきまして、沖縄の経営者協会の皆様はじめ後援団体の方々、私ども九州経済フォーラムの受け入れに大変ご尽力、ご支援をいただきまして、本当にありがとうございました。まだ明日、シンポジウムが残っておりますので、気をゆるめることなく、有意義な一連のイベントにしたいと思っております。

本当に今日は、これだけ盛大な交流会を企画していただきまして、ありがとうございました。これをもって挨拶とさせていただきます。

創立25周年記念シンポジウム

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 矢頭 美世子 氏（株式会社やずや 代表取締役会長）

皆様、おはようございます。朝早くからご苦労様です。

私は、昨日参りまして、まず沖縄の自然の美しさに本当に感動いたしました。子供たちとよく沖縄には来るんですが、昨日は本当に井上先生や亀島先生のレクチャーのおかげで、琉球のお勉強をさせていただきました。琉球という国が刀を持たずに平和を保ち、450年も存在していたというのはすごいですね。江戸で260年と聞いてましたけれど、もっとすごい文化を持っていて、しかも武器を持たないで平和外交をし、交易しながら自分たちの経済、文化、教養を高めていった。まさに理想的な琉球の姿に学ばせていただきました。また、私はいつも、日本はもっとグローバル的にならなくちゃいけないと言ってるんですけど、それを何と500年以上前になさってたのが、この琉球です。

そしてまた、長谷川先生のご講演では、戦後の沖縄のことを、戦前の分も含めてお勉強させていただきました。個人的な話になりますが、昔、私の父は、沖縄の方がうちにいらしてお食事したり、泊まったりされる時に、必ず正座して「沖縄の方には本土としてご迷惑かけました」と言って謝っていたんですね。当時はどんな意味か全然わからなかったですけど、昨日の長谷川先生のお話を聞いて、点が線になりました。ああ、父はそういう思いで、まず沖縄の方に謝って、そして我が家で乾杯するんだなとわかったんです。そんな父の素晴らしさも、また昨日、思い出しました。

それから、昨日、国宝の数は京都、奈良に続いて沖縄が三番目ということを聞いて、本当に申し訳ないなと思いました。私の今までの沖縄のイメージは、本当にお恥ずかしい限りでした。昨日でそのイメージが360度まで行かなくても180度変わり、沖縄がもっと大好きになって、またぜひぜひ来たいと思いました。今度はただ遊びに来るだけじゃなくて、そういう沖縄の歴史や文化を学ぶことも含めて、訪れたいと思いました。子供たちももう、上は40を過ぎてますので、それなりの人物にならないといけませんし、私も含めて、もう一回沖縄に来てみたいなと思ってます。

これは私の役目でもあるかなと思います。やっぱり現地に来て、現地の方と触れ合うというのは大切です。企業

でもそうですけれど、今の学生さんは、いくらどの学校を出て、学歴がどうこう言っても、やはり知識だけなんですね。その知識を自分の目で見て確かめて、現地で触れ合うことによって、見識に変えていく。まさに昨日は、自分がそんなことをいつも言ってるのに、自分自身もそんなだったということがわかって、本当に恥ずかしいと思いました。沖縄の方、本当に申し訳ございませんでした。私も少しは変わろうと思ってます。

今回の東北大震災は、私たちに本当にすごい試練を与えてくれました。日本人に今まで、まあ何とかなるだろう、国がしてくれるだろう、地域がするだろう、復興するだろうという考え方で来ていたと思いますが、今回はそうではなくて、痛み分けです。皆がそのことを感じながら、一緒になって考えていきなさいという試練を、神様が下さったのかなと思ってます。

そういう状況の中では、やはり情報が大切なんですね。正しい情報があれば正しい方向にすぐ行くんですけど、今は情報がすごく不安定です。私の会社に例えた場合は、社員から正しい情報が上がってくればくるほど、私の決定は正しくなるはずなんですね。ところが、自分中心の考え方とか利害とかいろんな問題があって、途中で変に情報が屈折されてしまうことがある。けれど、トップはそれを聞いて決断しなければなりません。トップの決断が間違った方向になると、企業も存続を問われる事態になる。まさに日本も今、そういう状況になっているなと思っております。

ちょっと個人的な話なんですけど、実は、今年は先代の十三回忌の年です。12年前、突然先代が亡くなって、私が会社を受け継ぐことになりましたが、主婦からスタートの私ですので、どうしたらいいかわかりませんでした。その時に、先代は何を私に残していったのか、会社の企業としての存在価値は何なのか、きっと私に教えてくれていると考え、1年掛けて先代の日記とか本とか、先代が好きだったものを全部調べて、『25年の歩み』という社史を1年間で作り上げました。今の社員たちは、残念ですけど、先代を知らない社員たちが多いんですね。でも、私は先代が何をしてきたか、次に伝えたかったことは何かを今、語れます。ただ、私の次の次になるともうこれは消えてしまって、やずやが何のために事業を興したのかもわからなくなってしまうんですね。そういうことはいけないと思って、1年間、情報誌を作り、社史を作って、今でもそれがバイブルになっています。そして、これを見るととの方向性に行くべきなのかがわかるようになっています。情報を一度徹底的に収集して、そしてビジョンを作り、価値観を共有することが、やはりこれからの日本にも大事なんじゃないかなと思います。

私は本当にありがたく思っていますが、社員たちは誰も辞めないで、このバイブルを見ながら、一緒に歩んできてくれました。社員と一緒にこれからの会社の夢を語り、同じ価値観で同じ方向を見て、速いスピードで行ったおかげで、毎月倍々ゲームで売上げが増え、今のやずやがあるんですけど、もし社史というバイブルなしに何となく引き継いでたら、多分、方向性はバラバラで、今のやずやはなかったと思ってます。そういう意味でこの国も、これからは本当に素晴らしいリーダーたちの一人一人が、他人事ではなく自分のこととして問題に取り組んでいくことが大事じゃないかなと思います。

今日、そういう私も、沖縄に対して本当に認識を新たにし、これまで申し訳なかった、これから沖縄をもっと大好きになろうと思うようになってきました。まず一番は自分が学ぶことだなと思います。昨日から沖縄に触れてみて、沖縄の良さを本当に感じ取りました。これから何度も沖縄に来ることによって、もっともっと沖縄への見識を深めていきたいなと思ってます。

また、本日はこれから、関岡先生と中西先生に基調講演をしていただきます。またその後、パネルディスカッションも予定されていて、私はとても楽しみにしています。私もここに来た以上は、この講演から何か実りになるものを一つでも会社に持って帰り、今後の経営に活かしていきたいなと思っています。

最後になりますが、沖縄の皆様とこのように現地で一緒に話し合い、ともに学び、ともに感じるということは、本当にうれしいことでございます。お互いに学び合えることに感謝して、閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

基調講演 1

テーマ 「〝平成の開国〟と国家の存亡」

講師

ノンフィクション作家

関岡 英之 氏

1961年東京生まれ。
慶応義塾大学法学部ののち、東京銀行（現・三菱東京UFJ銀行）入行。2001年早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了、著述活動に入る。2007年より拓殖大学日本文化研究所客員教授。
『中国を拒否できない日本』（ちくま新書）など著書多数。

この度は、九州経済フォーラム創立25周年、誠におめでとうございます。また、このような重要な式典にお招きいただきまして、大変光栄に存じております。ご準備に奔走されました、福岡を中心とした九州経済界の皆様、そして温かく迎えてくださいました沖縄経済界の皆様に、この場をお借りしまして改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

私は今年に入りましてから、九州にお何いしますのは2回目でございます。実は3月10日に、九州学生ゼミナールという団体だったと思うんですけれども、九州の大学の学生さんたちにお招きいただきまして、北九州市で講演をさせていただきました。その日のうちに帰京したんですが、もし1日遅れておりましたら、3月11日でございますので、羽田空港が閉鎖されていて、恐らく帰宅することができなかったと思うんですね。

翌日、3月11日の14時46分は、私は自宅におりました。私事になりますが、この4月から高校1年生になった一人娘は、その時、学校におりましたので、電車が全部止まってしまったために帰ってこれなくなりまして、その日は学校で一夜を明かしました。娘は15歳にして、20万人とも30万人とも言われる帰宅難民のうちの一人になってしまったわけです。私は50年の人生で、一度も帰宅難民になったことはありません。娘はたまたま学校におりましたから良かったわけですけれども、もしあの地震が3時間後に起きていれば、恐らく下校の途中だったでしょうね。そうするともう、これは5～6時間かけて歩いて帰ってくるか、あるいは避難所に身を寄せて一夜を明かすかするしかありません。15歳の娘がそういう運命に見舞われたかもしれないと思うと、

慄然といたします。しかし、それも家や、場合によってはご両親を失われた、東北地方を中心とした被災地のお子さんたちに比べれば、どうということもないわけです。

一方、私が初めて沖縄にお伺いしたのは比較的最近でございます。今から5年ほど前に、沖縄タイムズさんが主催される定例的な講演会に呼んでいただきまして、講演させていただきました。併せて沖縄タイムズの記者の方に、嘉手納基地や普天間基地、普天間基地を一望する、あの公園の展望台にも連れて行っていただきまして、ここの現状を拝見させていただきました。それから辺野古の移設予定地にも連れて行っていただきまして、よくリポートにある基地の現状も、本当に駆け足ではございましたけれども、見せていただきました。その後、実は家族と一緒に観光旅行で二度、沖縄に来ておりまして、一度目の時には沖縄の世界遺産を巡りました。首里城に始まりまして、霊御殿、識名園、それから昨日、長谷川先生のお話にもありましたセーファー御嶽、さらに座喜味城、今帰仁城、中城と、9カ所ある世界遺産を全部、拝見しました。もちろん南部の戦跡も巡礼させていただきました。二度目は石垣島、竹富島、西表島といったような八重山諸島にも足を伸ばしました。ですら、今回が四度目ということです。5年のうちに4回もお伺いしているということは、それだけでも私は、沖縄に魅了された、沖縄に夢中な人間の一人ということでございます。

しかし、一昨年の政権交代以降、この沖縄は、まさに日本の運命を象徴するかのような国際政治の荒波にもまれてきました。一つはもちろん普天間をめぐる問題ですが、この普天間基地の移設問題は、単に普天間や辺野古の周辺の方々、あるいは沖縄県民の方々の問題だけではなくて、やはりこれは、我々のこの日本という国が、アメリカという国とどのように付き合っていくべきかという問題として捉えなければいけないんじゃないかと思います。もう一つは、昨年の9月7日に起きました尖閣諸島の事件です。これも石垣島や八重山諸島の水産関係者だけの問題ではなくて、やはり日本という国が中国という国と、どのように付き合っていくべきなのかという問題だと思うんですね。そういう意味で言えば、この2年ばかりの間に沖縄を巡って起きたさまざまな事件というのは、まさに日本という国の直面する問題の縮図です。沖縄はそれを集中的に背負って来たという立場にあるのではないかという風に思います。

今日は「『平成の開国』と国家の存亡」という、非常に仰々しいタイトルにさせていただきました。この後に中西先生から、「どうする日本、どこへ行く日本」という講演をいただきますけれども、私の話も今後の日本をどうするかという問題であります。この『平成の開国』という文脈の中では、我々には二つの選択肢があると言われているわけですね。一つにTPP、環太平洋経済連携パートナーシップという選択肢が提示されております。もう一つは、鳩山内閣の時から、特に言われるようになっていた東アジア共同体という選択肢です。つまり、アジアを中心としていくのか、それともアメリカと連携を強めて、太平洋という形でやっていくのか。いずれにしても今、この二つの選択肢が提示されているわけですけれども、それに関してどのように考えていったらいいのか、今日は私なりのお話をさせていただければと思っております。

私はノンフィクション作家というのをやらせていただいております。フィクションというのは小説、いわゆる創作のことですから、頭の中で作り上げたものです。ノンフィクションというのは、それをノンという形で否定しておりますので、あくまでも事実に基づいて作品を作り上げていくということなんですね。これからスライドを使いながらお話をさせていただきますが、今日お見せする資料は、基本的には新聞報道、それから政府の公式発表といったような、どなたでも検証していただける、いわゆる公開情報です。ですから、何かの秘密情報だとか秘密文書、それから内部資料といったものは一切ございません。皆さんがどなたでもご覧いただけるような公開情報を使いながら、私なりの切り口でお話を進めさせていただくことになります。

それでは最初のスライドです。これは福島第一原発の報道写真ですね。手前が三号機で、奥が四号機です。すでに福島原発の停止から1ヶ月以上たちますけれども、いまだに大気中、それから海中への放射能の漏洩と言いますか、流出が続いております。つい先だって、この原発事故がチェルノブイリと同じ

レベル7であると、日本政府自身が発表するという事態に至ったわけですが、同じレベル7と言いましても、チェルノブイリと福島とは全く事故の性格が違うというのは、皆様もご存知の通りだと思います。チェルノブイリは、原子炉が暴走して爆発した、原子炉を止めることができなかったという事故ですが、ご存知の通りこの福島、あるいは宮城県の女川、青森県の東通といった、太平洋に面していて、今回津波の被害を受けた日本の原子力発電所は、すべて安全に停止しているわけですね。あのマグニチュード9.0の千年に一度と言われる大震災にも耐え、制御棒が正常に挿入されて、原子炉自体は止まって、今日に至っているわけです。これは、世界の原子力関係者、技術者が驚嘆するぐらいすごいことです。やはり日本の技術力、原子力発電所の運営技術というものに対しては、世界中が高い評価を与えている。このことはやはり押さえておかなければいけないと思います。

ただ、さりながら、福島は原子炉停止後の冷却に失敗した。原子力発電所の安全の要諦というのは、「止める、冷やす、閉じ込める」の三段階だと言われていますけれども、この二番目の冷やすというところから、うまくいかなくなったわけです。レベル7になってしまったのは、結局、この1ヶ月間に流出してしまっていた放射線量の累積値が、レベル7の基準に達してしまったということに尽きるわけですね。ですから、事故の性格としてはチェルノブイリとは全く違います。福島の場合は、原子力が停止した後に迅速に冷却して、冷温停止状態に持っていくべきだった。それには海水を注入するということを、原子炉が止まってから8時間以内にやるべきだったと言われています。しかし、さまざまな要因が積み重なって、その決定が遅れたということで、今日に至ってしまっているわけです。

一方で、東北各地の被災地の方々の状況も、震災直後と大して変わっておりません。つい先日も東北地方の小学校で新学期が始まったけれども、給食はパンと牛乳だけだと、そういった状況が伝わっております。ですから、日本の政府は今、この原子力発電所の対応と、被災地の救援・復旧、それから今後の復興といったことで手一杯だろうと、誰しもそういう風に感じていると思います。ところが、この朝日新聞の報道を見ますと、今からちょうど2週間前の4月8日、大変不思議なことに「規制制度改革に対する具体的方針」というものが閣議決定されているんですね。この記事の中に、134項目の規制改革に関する内閣の方針が閣議で決定されたと書いてあるんです。これが4月8日、東日本大震災から1ヶ月弱たった時点です。ところが、この134項目の規制改革というのは、今回の原子力発電所の危機対応、それから東日本大震災に対する復興に、一切関係ございません。全く無関係の問題なんですね。実は、震災が起きるはるか以前から検討されてきた問題が、閣議で決定されたということなんです。

一体なぜ、こんな時に規制改革ということが進められているのかと言うと、実はその根拠となる、その前の段階の閣議決定がございまして、それが昨年11月9日に行われました「包括的経済連携に関する基本方針」閣議決定というものです。この中で菅内閣は、環太平洋パートナーシップ、これがいわゆるTPPと言われているものですけれども、この協定については「国内の環境整備を早急に進めるとともに、関係国との協議を開始する」と言っています。つまり、TPP参加9カ国との代表交渉と併せて国内の環境整備をしていくということが、昨年11月時点の閣議で決定されているんですね。

その国内対策の具体的内容として、3項目が挙げられております。これもすべて閣議決定の中身なんですけれども、一つは農業、二番目が人の移動で、この二つに関しては、今年の6月に基本方針を決定する、さらに三番目の規制制度改革については、3月に具体的な方針を決定するということが、11月の時点で一応スケジュール化されていたわけですね。その後、東日本大震災が起きたために、3月に予定されていた規制制度改革の方針決定は、多分、当面凍結か、少なくとも先送りになったんだろうと、誰しも思っていたんです。ところが、これが、3月からわずかに遅れて4月8日に決定されたということです。ですから、この4月8日の134項目の規制改革というのは、震災対応とは全く関係なく、実はTPPに関連してあらかじめ準備が進められてきたものなんですね。

TPPに関しましては、皆さんの中にも賛成される方、推進すべきだと

お考えの方もいらっしゃると思います。私はちょっとそれに対して疑問を持つ立場から、私なりの論拠というものを、いくつか示させていただきたいと思います。TPP推進論は、主として新聞が非常に熱心に展開しております。特に熱心なのが朝日新聞と産経新聞さんで、たとえばこの中国との問題、アメリカとの問題に関しても、日頃は朝日新聞さんと産経新聞さんの意見は、真っ向から対立するわけですけれども、どういう訳かこのTPPに関しては完全に意見が一致している。これは実は、鄭政民営化の時もそうだったんですね。何か非段、意見が対立している新聞同士が足並みを揃えて賛成となると、私なんか天の邪鬼なものですから、あれっ、おかしいなと、疑問を持ってしまいます。特にこのTPP推進論については、三つの「欺瞞」と言うとちょっと言葉がきついと思ったので、あえて「誤謬」といたしましたけれども、疑問に思う点がございます。

まず、TPPに関しては、これに参加しなければ、日本は世界から取り残されてしまう、グローバリズムの流れから完全に日本は孤立してしまうというような議論があるわけですね。現在、TPPに正式に参加を表明している国は、T9という風に言われている通り、9つございます。TPPは元々、この中のシンガポール、ブルネイ、それからチリとニュージーランドという、比較的経済規模の小さい4カ国が始めた経済連携協定でございまして、それにアメリカが参加を表明し、それに追随する形でオーストラリアやマレーシアなんかが、今、参加を表明しているということなんです。このグループに入らないと、もう日本はおしまいだと言わんばかりの論調が、朝日新聞を見ても、産経新聞を見ても書いてあるわけですね。ところが、まず私にこれが全くおかしな議論だという風に思うわけです。

なぜかと言いますと、この9カ国のうち6カ国との間で、既に我が国はEPA、つまり経済連携協定を結んでいるからなんですね。正確に言いますと、ペルーだけはまだ正式に発効しておりません。しかし、昨年11月、横浜で行われたAPECの時に、ペルーの大統領との間で交渉が一応完了していますから、あとは書類上の手続きを進めていくだけなんです。それ以外の国に関しては、完全に2国間のEPAがすでに発効されているわけですから、ペルーを含めた6カ国との間に、日本は何の取り決めもないという状況ではないわけです。ちなみに、オーストラリアとの間では、交渉が今、非常に難航しております。ニュージーランドとアメリカの間では、交渉自体がまだ始まっておりません。

一方我が国は、東アジアに関して地域的な経済連携という構想を提唱しております。これは「東アジア包括的経済連携構想」というんですけれども、多分、そう言うよりも「ASEAN+6」と言ったほうが、思い当たられる方が多いと思います。つまりASEANの10カ国に加えて、日本、中国、韓国、さらにインド、オーストラリア、ニュージーランドという6カ国を合わせた、一つの包括的な東アジアの経済連携構想というのを、日本が提唱しているわけです。実は中国が、ASEAN+3という、ASEANと日中韓の3カ国という構想を推進しているんですが、これに対して我が国は、さらにインドとオーストラリアとニュージーランドを加えた構想というものを、日本独自の構想として推進しているんですね。これはまだ、もちろん構想段階ではありますが、日本としてこういった方針を打ち出している以上は、実現に向けて進めていくべきだと、私は考えております。私はこの構想を支持する立場です。

そうしますと、先ほどのT9の中で、日本とEPAを結んでいないオーストラリアとニュージーランドも、これに包括されてくるわけですね。ということは、日本との間のEPAにも、日本が中心となって進めていくリージョナルなEPAに関しても、どちらからも担保されていない唯一の国が、アメリカ合衆国ということになります。ですから、日本が取り残されるというのは、とんでもない倒錯した議論でございまして、アメリカこそが取り残されると焦っているわけですね。ですから、日本人であるにもかかわらず、TPPに参加しなければ取り残されると言っている方は、知ってか知らずか、まさにアメリカの立場を代弁されていると、私なんかは受け止めてしまう訳です。

二番目の問題は、このままでは韓国に負けてしまうという議論です。韓国はアメリカとの間でEPAをもう結んでおります。まだ発効はしておりませんけど、一応、交渉は終わってるん

ですね。それからEUとの間でも韓国は、一応、EPAの交渉を完了しています。ところが、我が国はアメリカとも、EUとの間でも、まだEPAがございませんので、このままでは韓国に負けてしまうという風におっしゃる方が、結構いらっしゃるわけですね。これも私は、直感的に言って、大変おかしな議論だと思うんです。なぜかと言えば、まず日本と韓国では経済規模が違います。この棒グラフの長さがGDPの大きさを示していますけれども、日本のGDPは大体5兆ドルぐらいございます。それに対して韓国は9000億ドルぐらいですから、5分の1以下なんですね。さらに、そのGDPの中に占める輸出の依存度、つまり外需にどれだけ依存しているかという部分を赤で示してありますが、韓国はご覧になっていただく通り、もうGDPの半分近く、45%は外需に依存しなければやっていけない、そういう経済構造になっております。それが良いか悪いかは別として、そういう経済構造になっているんですね。これに対して我が国は、外需に依存している部分はわずか16%です。しかもこれは、以前からすると大分増えてるんですね。かつては10%ぐらいしか外需に依存していなかったんです。つまり、良くも悪くも、我が国は世界3位の経済大国であり、悠々たる内需を持った、やはり経済の厚みという点でも韓国とは随分違ったポジションにあるということです。これはきちっと押さえておかなければいけない点だと思います。

つまり、日本が世界から取り残されるとか、韓国に負けるというのは、事実誤認なんですね。事実を誤認したまま外国との交渉に出て行けば、勝てる交渉にも勝てません。外国と交渉する上では、まず自分のポジション、それから彼我のポジションぐらいは正確に押さえておかなければ、そもそも交渉に臨む準備もできていないということになってしまうのではないかと思うわけです。ですから、韓国に負けるというのは、あくまでもミクロの話です。マクロの話ではないというのが、私の見方です。

それから、このTPPに関しては、農業が問題である、農業が足を引っ張っているという風におっしゃる方もいらっしゃる。しかし、ご覧いただいてわかる通り、実はこの24のテーマをクリアしなければいけません。左下にある「市場アクセス（農業）」というのがコメに関する部分なんですけれども、これは24分の1に過ぎないわけですね。それ以外にも、たとえばサービスに関しては、金融、通信、越境取引、短期商用入国、それから電子商取引という5つの分野がありますし、今日はちょっと時間の関係でご説明できませんけれども、投資とか労働、環境といった、貿易とは直接関係ないようなさまざまなテーマがあります。これらの項目について、アメリカを中心とした9カ国と対決し、交渉をまとめていかなければいけません。ですから、決して農業だけの問題ではないんです。はっきり言うと、日本の経済や社会全般にさまざまな影響を及ぼす、非常に大きなテーマだということなんですね。その中でよく議論されるのは、日本の農業は非常に閉鎖的だ、保護主義的だということですが、これが私は、TPPを推進するお立場の方々がおっしゃる中で、三つ目の大きな誤謬だと思っております。

このグラフは、皆さんよくご存知の通り、我が国の食糧自給率をOECD加盟の主要国と比較したものです。アメリカやフランスといった農業が盛んな国々は、農業自給を達成しているどころか、むしろ余剰分がありまして、これを海外に輸出することによって、農業輸出立国という形でやっているわけですね。それからドイツは工業国、イギリスは今や金融立国になっていますけれども、こういった国々でも、大体食糧の7割は自給を確保しています。これに対して我が国の食糧自給率は今、40%程度で、主要国と比べると、日本は大きく劣後しているという風に言われております。しかし、私はもっと問題は深刻だと思っているんです。それは、この食糧全体で考えているのではなくて、穀物という風に視点を変えるとどうなるかということなん

ですね。そうすると、こんな風なグラフになります。これは同じ5カ国を比べたもので、先ほどは食糧全体の自給率でしたが、穀物自給率に関して見ると、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、日本は、今度はこのようになります。アメリカ、フランスはもちろん自給を達成していますが、食糧全体で若干未達だった工業国のドイツと金融立国のイギリスも、穀物に関してはほぼ100％の自給を維持しております。ところが我が国は、食糧全体で40％の自給率がありながら、穀物だけ見ると28％と逆に下がってしまうわけです。他の欧米先進国に、穀物のほうが食糧全体の平均値よりも高い自給率を持っているにもかかわらず、我が国だけは逆に、穀物の自給率のほうが低いという状況ですね。

なぜ他の国は穀物の自給を100％維持しているか。これは、穀物が主食だからです。穀物というのは常温で数年間備蓄できます。つまり、国家の有事の時には戦略物資になるわけですから、これはもう経済合理性の論理ではなくて、国家安全保障の観点から、アメリカもフランスも、莫大な補助金をつぎ込んで、穀物だけは絶対に自給を維持するという政策を貫いているんですね。ところが我が国は逆に、食糧全体より穀物のほうが自給率が下がってしまうという状況になっているわけです。

しかし皆さん、疑問に思われると思うんですね。コメの自給率は今、95％です。コメの自給率が95％にもかかわらず、なぜ穀物自給率に換算すると28％に下がってしまうのかと。それはコメ以外の三大主要穀物、つまり小麦、大豆、トウモロコシの自給率が惨憺たる状況にあるからなんです。今、日本の小麦の自給率は14％で、ひっくり返しますと、外国に依存している割合が86％ということです。小麦はもちろんパンですとか、パスタなどの種類の原料です。大豆は、お醤油とかお味噌とか、日本人の味覚にとって欠かすことのできない穀物ですが、この自給率に至っては今や5％に過ぎません。トウモロコシは主に飼料用として輸入されているわけですけれども、これに関しては何と自給率は0％。100％外国に依存しているという状況になっています。ですから、いくらコメが95％を維持していても、穀物全体では28％に下がってしまうわけですね。

では、一体どこの国に依存しているかというのが、下のグラフです。赤で示している部分が米国です。つまり小麦の56％、大豆のほぼ4分の3、そして飼料用トウモロコシに至ってはほぼ100％をアメリカに依存しているということなんです。ですから、我が国の農業が閉鎖的だとか、保護主義的だとかいうのは、これはとんでもない誤謬であり、事実無根のプロパガンダだという風に私は思うわけですね。主要国の中で我が国ほど外国に、とりわけアメリカの農家に対して、これだけ市場を野放図に開放してしまっている国はない。日本は鎖国どころか、穀物に関してはむしろ、過剰なまでに開国しているというのが、私の事実認識です。なぜこうなったかというのが問題ですね。自然現象とか神の見えざる手によって、こういった事態が起きてきたのかと言うと、もちろんそうではないということを次に申し上げたいんですね。

この背景には、実は戦後、日本人の食生活が大きく変わったということが、一つ関係しています。このグラフは日本人の平均的な栄養の摂取状況を食物別の割合で見たもので、上のほうが昭和13年、日中戦争が始まった翌年、つまり戦前の状況です。そして下が直近の平成18年です。よく日本人の食生活が洋風化したと言われていますね。私たちには、明治の文明開化で牛鍋が入ってきたりなんかしたという知識もありますから、私も何となく、日本人の食生活は明治ぐらいからゆっくり時間をかけて変わってきたのかなと思っていたんです。ところが、これは農林水産省が発表している食糧自給表というものから、私自身が作ったグラフなんですけれども、戦前の日中戦争の頃には、実に日本人の栄養源というのに、実に61％以上がコメでした。それ以外は雑穀とか芋、豆、それから野菜、こういったものから栄養を取っていたんですね。

ところが戦後になりますと、この赤で示している部分が急増しているわけです。まず小麦ですね。これはもちろんパンの原料です。それから肉、牛乳、卵といった動物性タンパク質、そして油脂が非常に増えております。一人の人間が食べられる食べ物の量というのは限られておりますから、小麦や肉が増えれば、その分、何か減らさなきゃ

いけないということで、唯一減った項目がコメなんです。つまりコメの割合を減らして、小麦や肉、つまり洋食を食べるようになったのは、実は比較的新しいことなんですね。昭和13年から平成18年まで、ざっと70年ぐらいの歳月がたっているわけですけれども、70年といえば、わずか1ジェネレーションです。一人の人間の一生にあたる1ジェネレーションで、これほど食生活が激変した民族というものが、果たして世界の歴史上、存在するのだろうか。やはりこれは、自然現象とか神の見えざる手による結果というよりは、私はやはり、何か人為的な操作によるものではないかという風に疑問を持って、いろいろな文献を調べてみたわけです。

もう少し日本人の食生活の変化を見ていきますと、肉、牛乳、卵といった動物性タンパク質が急増しましたが、その元である家畜の飼料となるのがトウモロコシです。それから、油脂の原料となるのが大豆ですね。つまり、先ほど日本の自給率が壊滅的な状況にあった小麦、大豆、トウモロコシというのが、実は戦後、日本人が食生活において、非常にそれを摂取する割合を増やしてきた分野なんですね。この写真は、まだ戦後間もない頃の学校給食の状況です。今の東日本、東北の子供たちは、またこういった学校給食の状況に逆戻りしてしまったわけですけれども、つい50年か60年前までは、我々日本人全員がこういった給食を食べていたんですね。主なメニューは、パンと脱脂粉乳を使ったミルクです。学校給食が法律として担保されるようになったのは、昭和29年のことです。もう占領は終わっておりました。日本で学校給食法というのが成立しまして、その時なぜか、学校給食というのはパンを、要するに小麦を使ったパンとか麺とか、粉食を基本とするという風なことが、この法律で定められているわけですね。今から考えると、非常に不思議なことです。

実は昭和29年というのは、西暦で言うと1954年なんですが、この同じ年にアメリカでは「余剰農作物処理法」、パブリックロー480というものが成立しているんですね。どういった内容かと言いますと、まず一つは、輸入国の外貨不足に配慮して、米ドル以外の通貨での貿易代金の決済を認めるというものです。つまり、当時の日本は、ドル不足、外貨不足に非常に苦しんでいたわけです。国内は食糧不足で、アメリカから食糧を輸入したいけれども、決済するための外貨がない。だったら、日本円での決済を認めましょうと、アメリカサイドが言ってくれたわけです。二番目は、この学校給食、それから災害援助です。今回の東日本大震災に関しても、アメリカは「トモダチ作戦」と称してさまざまな援助をしてくれているわけですけれども、当時、戦後間もない時期も、日本は全く同じような状況でした。ですから、学校給食、それから災害援助の名目で、米国産農作物を無償援助する、無償供与するというのが、二つ目の方針ですね。当然、その輸出代金は日本円です。当時はソフトカレンシーで交換性がありませんから、アメリカが円を受け取っても、それはアメリカ国内で使用することはできません。それで、その一部を結局、日本にプールし、プールした日本円で販売代金の一部を市場開拓、今で言うとマーケティング活動に充当するというのが、三番目の方針でした。

このような法律が1954年にアメリカサイドで成立し、その翌年1955年に、実際に日米の間で「余剰農作物協定」というものが結ばれまして、こういったことが実施に移されていったわけですね。この下から2行目に書いてある「学校給食用の小麦、脱脂粉乳の現物供与」というのは、実はアメリカから供与されています。このことは皆さんも結構、ご存知だと思うんですね。一番下に書いてあるのが、この小麦の輸出代金のうち4億円を使って、日本の小麦市場開拓プロモーションというものが行われたということなんです。

次のこの写真を見て、あっ、懐かしいなと思われる方は、私より少し上の世代の方なんじゃないかと思います。私は見た記憶がないんですが、何の写真かと言いますと、キッチンカーというものなんですね。この頃、当時の厚生省が所管する外郭団体である日本食生活協会というところが、栄養改善運動というものを全国で展開したんです。このキッチンカーの後部に調理器具を積んで、全国津々浦々の団地だとか農村を訪れて、そこで主婦の方々を集めて、小麦を使った料理の実演をやってみせたわけですね。実際に、主婦の方々にそのお料理を試食していただいたり、それから小麦を使ったお料理のレシピやパンフレットを配ったりもし

ました。この運動の資金が実は、アメリカの余剰農作物処理法、パブリック480に基づく資金なんです。あの4億円の資金を使って、こういったことが行われていたわけですね。

この下にコメントが書いてあります。このコメントをおっしゃっているのは、大磯敏雄さんという、当時厚生省の栄養課長だった方で、その後、国立栄養研究所の所長などを歴任されて、日本の栄養学の世界に君臨した方です。この大磯さんがNHKのインタビューに対して、「あれがアメリカの金でやってるなんて気づいた人はまずいないでしょう。知らぬ間に効果を上げるのが本来のプロパガンダなんですよ」と、非常に正直に実態をおっしゃっているんです。

つまり、わずか70年という1ジェネレーションで、我々日本人の食生活が大きく変わった。ご飯を食べなくなり、そのためにコメが余って、減反政策までやらされるようになった。その一方ではお肉やパン、いわゆる洋食を食べるようになった。その背景には、まず学校の給食の場でパンを食べなさい、ミルクを飲みなさいという指導がある。やがておかずが出るようになれば、主食がパンで牛乳が飲み物の給食に焼き魚というわけにはいきませんから、ハンバーグだとかトンカツだとか、肉を食べましょうということになる。その肉の飼料であるトウモロコシ、それから揚げ物の食用油の原料である大豆、これもすべてアメリカの農産物を、どんどん日本で消費していきましょう。そのために国民に対する栄養改善運動、よく言えば啓蒙活動、はっきり言えばプロパガンダ活動を、日本の政府を挙げてやっていたということなんですね。

当然、これを仕掛けた人たちがいます。この写真で万歳してる人たちは、実はアメリカ人です。うしろに日章旗と星条旗が掲げてあって、横断幕に日本語で何か文字が書いてあります。何と書いてあるかというと、「日本におけるアメリカ小麦市場開拓事業10周年記念　1956年～1966年」です。つまりこれは1966年に、東京のどこかのホテルでアメリカ人たちが開いたパーティの写真なんですね。1956年に何があったかというと、アメリカのオレゴン州の小麦栽培者連盟というところが、東京に事務所を開いた。その後、アイダホ州とワシントン州が加わって、アメリカ西部小麦連合会という組織が出来上がって、東京に事務所を持って活動してきた。これは1956年からの10年で、日本にアメリカ産小麦の市場がこれだけ広がった、これだけ売れるようになったというのを、万歳三唱して祝っているという場面なんですね。

オレゴン、アイダホ、ワシントン州がどの辺にあるかと言うと、すべて太平洋岸の太平洋に面しています。一方、アメリカのコーンベルトとか小麦ベルトとか言われる、いわゆる穀倉地帯というのは、この3つの州からロッキー山脈をはさんだ東側、内陸部にあります。たとえばアイオワ州は全米一のトウモロコシの産地、カンザス州は全米一の小麦の産地だそうですけれども、こういった州は、もっと東のほうにあるシカゴとかデトロイト、ニューヨークのような大都市に、そのまま穀物を輸送することができるわけですね。しかし、ワシントン、オレゴン、アイダホといった州からシカゴやデトロイトに農作物を輸送しようとすると、ロッキー山脈を越えなければいけません。つまり、輸送費の点で、アイオワ州とかカンザス州には到底太刀打ちできない。国内競争力がないということです。だったら、船に乗せて日本に輸出したほうがはるかに有用だと、西部の3つの州の農家の人たちに考えたわけです。

それがアイゼンハワー政権時代の話です。彼らは当時のアイゼンハワー政権に対してロビー活動を行って、まずアメリカ国内の余剰農作物、つまりオレゴンやアイダホで余っている農作物を日本に輸出させようと働きかけ、そのために、代金を日本円で決済してもいいですよ、それから日本人がもっともっとアメリカの穀物を食べるように学校の給食のメニューを設定し、主婦に対してはキッチンカーによる啓蒙活動をしましょうよと、そういったものをパッケージで仕掛けてきたわけです

ね。その結果がこういった日本の現状、小麦、大豆、トウモロコシの惨憺たる自給率と、穀物自給率の危機的状況を招いているということです。

コメ以外にも実は、TPPにはいろんな問題がございます。先ほどからお話ししているTPPの24分野の中には、衛生検疫も入っています。ここで問題になってくるのは、今度は牛肉です。牛肉に関しては、皆さんご存知の通り、BSEの問題が数年前にございました。アメリカでBSEに感染した牛が発見されたために、日本はただちに米国産牛肉の輸入を禁止しましたね。アメリカはそれに対して、輸入再開圧力をかけてきました。日本側が提示したのは全頭検査でした。その是非はともかく、少なくとも当時の日本はそういうルールでやっているんだから、もし日本に牛肉を輸出したければ、アメリカも全頭検査をやって下さいという要求を日本は出したわけですね。

これはもう当然のことだと思います。なぜかと言いますと、ALOPという適正な保護の水準、つまり我が国としてどこまで危険性を認めるかというのは、国が決めることだからです。大きく言えば、これは私は主権に関わる問題だと思います。日本が全頭検査でやると言って決めた以上は、それは日本の主権行為なんです。それについて外国からとやかく言われる筋合いはないというのが、私の考えでございますけれども、それに対してアメリカは、科学的根拠はないと言ってきました。アメリカは全頭検査なんかやってない、世界中でやっているのは日本だけだという理屈で、月齢30ヶ月以下の牛については、検査なしで輸入しろと言うんです。アメリカという国は、あまりにも牛の数が多すぎて、1%しか検査してないと言われてるんですね。

そんな国と全頭検査をやっている国が折り合いをつけるというのは甚だ難しいわけですけれども、さまざまな交渉の結果、小泉政権の時に、小泉さんの政治的判断ということで、日本はこの中をとるという、極めて日本的な解決の仕方をしました。じゃあ、月齢20ヶ月以下の輸入に限っては認めましょうということになったわけですね。その根拠は、日本国内で月齢21ヶ月の牛からBSEが検出されたという実例があるので、ここから下はいくら何でも譲れませんということです。小泉さんなりにがんばったと思うんですけれども、結局日本は、月齢20ヶ月以下に関しては、アメリカ産の牛肉の輸入を認めるという形で今日に至っています。

ところがアメリカは、いまだに20ヶ月以下の輸入を認めろという要求を引っ込めておりません。引っ込めていないどころか、その後また大きな変化がございました。国際獣疫局（OIE）という一つの国際機関がありまして、これはあまり畜産関係者以外の方はあまり聞き慣れないと思うんですけれども、ここが食肉の輸入だとか、もっと全般的に食品の安全に関わる基準というものを決めているんだそうです。アメリカは2007年に、この国際機関から、アメリカは管理されたリスク国ですよという認定を受けました。これは3段階にステージが分かれているらしいですけど、その真ん中の、管理されたリスク国という認定を受けたんですね。アメリカの畜産業界というのは、ものすごい政治力を持った圧力団体と言われていますから、これは憶測ですけど、国際獣疫局にもかなりの圧力をかけたんじゃないかと思います。

なぜかと言えば、アメリカは1.1%しか牛を検査してない。しかもトレーサビリティという、1頭1頭がいつどこで生まれて、どう飼育されてきたかという管理もやってませんから、そういう国がどうして管理されたリスク国に認定されるのか、根本的な疑問があるわけです。ところが一旦、この国際機関からお墨付きを得ますと、この管理されたリスク国に関しては、もう月齢制限なんか関係ない、無視していいですよということになる。ただし一つだけ、特定危険部位の除去という条件がついています。つまりBSEの原因と言われている異常プリオンというものは、脊髄とか脳とか、そういった特定の部位に蓄積しやすいので、それは特定危険部位として除去しなきゃいけない。ただ、そこさえ取っていれば、もう月齢は何ヶ月だろうが関係なく、検査なしで自由に貿易すべきだということを国際獣疫局が言っているんですね。ですから、アメリカは今、月齢30ヶ月以下どころか、月齢制限そのものを撤廃しろということを、日本政府に言ってきてる段階なんです。

最初は全頭検査と言ってて、それが20ヶ月以下に下がってきて、ついこの間まで30ヶ月以下だと言ってたのが、今度はもう月齢制限をやめろというところまで、どんどん要求がエスカレー

トしてきている。これが現状なんですね。つまり、こういったさまざまな影響がTPP交渉に参加することによって生じるということです。今日は食の問題に限って申しましたけれども、実はそれ以外にも、医療とか投資、労働といったようなさまざまな分野で、同じような問題が起きてきます。ですから、少なくとも私はTPPに関しては非常に慎重に考えるべきだという立場です。

じゃあ、もう一つの選択肢である東アジア共同体のほうが良い解答かと言ったら、これもまたとんでもない話だというのが、次の話になります。今年4月8日に決定された134項目の規制改革の中には、あれっと思うものが結構入っているんですね。一つは人の移動に関する分野の、高度外国人材の両親の帯同解禁というものですね。高度外国人材というのは、たとえばIT技術者だとか、バイオテクノロジーの技術者だとか、何か特定の技術を持った外国人のことで、そういった人たちについては、今、日本はどんどん受け入れていこうという国策です。現状でも既にそういう方に関しては、奥さんと子供は連れて来ていいことになっています。これは私も人道上と言いますか、国際的な常識として当然のことだと思います。ところが、今回閣議決定された規制改革案では、ご本人と奥さんの両親も連れて来ていいですよということになるわけですね。

果たして、そこまで必要があるんでしょうか。高度外国人材の方に子供が生まれますと、おじいちゃん、おばあちゃんに面倒をみてもらう必要があるかもしれない。奥さんのほうのおじいちゃん、おばあちゃんにも日本に来てもらって、赤ちゃんの面倒をみてもらったほうがいいんじゃないか、そういう配慮だというんですけどね。要するに、一人の高度外国人材の入国を許可しますと、最低でも6人連れて来るということなんです。お子さんが1人だとしても、ご本人と奥さんがご両親を連れてくれば、一気に6人連れて入ってきちゃうということなんですね。

それから二番目は、在留資格に関することです。今、外国人に対する滞在許可の資格の一つに、投資経営というのがあります。これは、最低500万円以上の出資金を出して、日本でベンチャー企業なんかを立ち上げたりした人に対して与えられる在留資格です。最近では、日本の大学を卒業した中国の留学生の方なんかが、日本でIT企業を作られたりするケースが増えてきているわけですけれども、今の500万円以上という要件の金額を引き下げて、もっと裾野を拡大しましょうというような話があるわけです。じゃあ、仮に300万円になったとして、たとえば中国人の留学生が10人集まって、1人30万円ずつ出して300万円で会社を作ったとします。10人で作った会社でも、普通だったら社長が1人いて、あとは従業員とかになると思うんですけれども、最近のベンチャーの中には、10人全員が役員になっちゃって、従業員が1人もいないなんていう会社もあるらしいですね。その場合でもその10人全員に、この投資家あるいは経営者という在留資格が与えられるというのが、この規制改革案なんです。

さらに、投資家とか経営者という資格を得た外国人は、家事使用人というのを帯同できるとされています。つまり、弟や妹やいとことか、知人、友人といった者を家事使用人と称して、ぞろぞろいっぱい連れて来ることができるということです。要するにこういった規制改革の狙いは一体何かというと、日本に移民をどんどん入れていきましょう、しかも子供を産んでいただいて、おじいちゃん、おばあちゃんも来ていただいて、どんどん定着してもらって、移民の人口を増やしていこうというのが基本的なコンセプトなんですね。

それから、移民だけではなくて観光客どんどん増やしていこうということになっています。もちろん今、沖縄や福岡の観光産業は、中国人のお客さんが来なくなって大変ご苦労されているというのは、よく存じ上げております。しかし、あえて私は苦言を呈したいんですね。今の外国人観光客の状況、特に中国の状況はどうなっているかというと、実は昨年の7月1日から、年収80万円の中国人を中流層と見なして、これに個人の観光ビザをどんどん出していくようになっています。今回、4月8日に閣議決定されたのは、それをさらに緩和しようという話なんですね。年収80万円ですよ。月収じゃないんですからね。

この年収80万円の中間層というのが、中国にどれぐらいいらっしゃるかというと、何と対象となる世帯は1600万世帯です。我が国の総世帯

数は4800万世帯ですから、ほぼその3分の1の規模です。1世帯を夫婦と子供1人の3人として単純計算しても5000万人ぐらいになってしまいますから、我が国の人口の4割ぐらいに匹敵します。そういう人たちに対して、日本は個人の観光ビザをどんどん出しているわけですが、果たして年収80万円の人たちが日本に来て、本当にお金を落としていってくれるのか。お金を落としにくるんじゃなくて、お金を稼ぎにくるんじゃないのかというのが、私の疑問なわけです。結局、昨年3月の大震災ショック、今年の東日本大震災ショックで、皆さん、来なくなってしまいましたね。だから私は、どこまで外国人観光客の夢を当てにするのか、本当に当てになるのかということを、一度お考えいただきたいと思うわけです。

しかもこれは、今後心配されるという話ではない。既にもう既成事実として、この平成改元以降始まっている動きなんですね。これは法務省が発表している、平成改元以降の日本に外国人登録をされている外国人の数です。今まで私たちは、在日外国人と言えば、ストレートにそれは韓国系・朝鮮系の方々という風に連想してきました。平成元年のころは確かにそうだったんですが、この20年間に中国の方々がものすごく増えております。特に平成21年度はリーマンショックの影響で、日系ブラジル人の方なんかは減っていますし、韓国・朝鮮系の方も、平成4年をピークに今、どんどん減っておられるんですけれども、中国から入ってこられる方だけは、もう鰻のぼりと言っていいような右肩上がりで増えていまして、今、累計で68万人いらっしゃいます。68万人というと大体、日本では政令指定都市の人口に匹敵しますね。新潟市とか静岡市、熊本市の人口に匹敵するぐらいの方が、既に日本に定着しておられるんですね。

この方々は、たとえば長崎とか神戸、横浜のいわゆる中華街に戦前からお住まいになっている華僑の方々ではありません。この直近20年間に中華人民共和国から新たに流入されてきた方々なんですね。つまり、我が国とはイデオロギーも政治体制も、歴史観も国益も違う中華人民共和国という国から、新たに入って来た「新華僑」と呼ばれている方々です。どういった方々かと言いますと、年齢構成では、ほぼ8割は30代以下です。30代以下の方々というのは、いわゆる愛国教育を受けて育った方々です。愛国教育は、邪悪な日本軍国主義を中国共産党が打ち破ったという内容の教育ですから、たとえばインターネットで日本に対してひどい誹謗中傷を書き散らしたり、サッカーの応援の時にブーイングをしたり、何かデモがあると日章旗に火を点けたりとかいった行動をとられるのが、この30代、20代の方なんです。40代から上の方というのは、そういうことをなさらないわけですね。

私は実は20年前に、北京に3年間住んでいたことがあります。出張とかプライベートで、中国のさまざまな地方に行きましたけれども、私が日本人だとわかった時に、たとえば戦争責任についてどう思うんだ、南京大虐殺についてどう思うんだと問い詰められたことなんて一度もありませんし、まして唾を吐きかけられたり、石を投げられたりなんてことは一度もないです。40代より上の方々というのは、別に分別があるとかそういうことではなくて、そういう教育を受けてなかったからです。むしろこの40代や50代、私と同世代の中国人というのは、日中友好の時代だったんですね。日本人が行くと、もう熱烈歓迎、熱烈歓迎と言って大歓迎してくれた時代の教育を受けた人たちは、そういう反応をいたしません。だから、30代、20代の人たちが、そういう反日的な行動を取るというのは、やっぱり教育の結果なんですね。

その愛国教育というのは、中国共産党は歴史教育だと言っていますけれども、中国共産党にとって都合の悪いことは一切教えません。文化大革命も、天安門事件も教えない一方で、南京大虐殺30万人ということを教えているわけですから、私はこれは歴史教育ではなくてプロパガンダ教育だろうと思う

んですが、とにかく、そういう教育を受けた方々が今、急速に日本で増えてきているということなんですね。さらにその中で、永住権を持った方々がどんどん増えています。現状では16万人。これはかつて自民党の支持母体であった日本医師会の会員数に匹敵する数なんですけれども、これも実はわずか7年で倍増していますので、今後ずっと16万人ということではないわけですね。毎年毎年1万人のオーダーで増えていきますから、5年後、10年後、どうなっているかということを考える必要があります。

今や日本の社会の中に深く、在日中国人の方々が浸透しておられます。これは2009年3月9日の朝日新聞の報道なんですが、日本の一流校の中にかなり外国人が増えているという噂を聞いて、朝日の記者が取材したわけです。取材先は実は晩星という、首都圏にあるフランス系カトリックの、帰国子女なんかを対象とした国際高校なんですけれども、そこの特進クラスです。特進クラスというのはもちろん最も偏差値の高い、たとえば東京大学とか京都大学とか一流大学を受けるクラスですが、そこで生徒さんたちに国籍を旗で示していただいたところ、何と最大多数はもう日本人ではないんですね。中国の国籍を持った方が一番多くなっているんです。

つまり、新華僑と呼ばれている人たちは、かつての華僑のイメージとは随分違うということです。昔の華僑は三つの刃物という言い方をされていました。肉切り包丁、つまり調理師さんですね。それから仕立て用のハサミ、仕立て屋さんと、カミソリ、要するに理髪師さん。そういったサービス産業に従事される方が多かったわけですけれども、今や新華僑というのは、非常に高度な教育を受けた知的水準が高い中国人で、おそらくこの晩星の特進クラスを卒業したお子さんたちは、九州大学とか京都大学や東京大学といったような一流大学に進学し、やがては日本の経済、社会の中枢に進出してくるだろうと考えられます。既に中国の方々の間では、政界進出まで考えておられます。これは一昨年の暮れに東京の池袋というところで、華人参政支援協会という団体が立ち上がったという記事です。「中文導報」というのは、在日中国の方々が出している中国語の新聞なんですけれども、その中にこのようなスローガンを掲げておられますね。「10年かかろうが20年かかろうが、我々の代表を国会議事堂に送り込む!」。我々の代表というのは、華人の代表ということです。

ここで一応おさらいしておきますと、華僑というのは、中国の国籍を持ったまま外国に定着して暮らしている中国人のことですね。華人というのは、現地の国籍を取得している中国系の人たちのことです。国籍上はもう日本人になっています。ですから華人の方は選挙権どころか、もう被選挙権ももう持っていますので、国会議員に立候補することもできます。ただ、中国系の候補者がいても、日本の有権者からはなかなか票がもらえない。しかし、もし華僑に対して参政権が与えられたらどうでしょう。既に16万人の永住者がいますし、今の趨勢で行けば、今後、おそらく5年以内に20万人を突破すると思われますので、華僑に外国人参政権が与えられれば、中国系候補者の当選が一気に現実味を帯びてきます。外国人参政権の話は、今は地方レベルと言っていますけれども、中国の方々はあくまでも、10年かかっても20年かかっても国会議事堂に送り込むと言ってますから、やはり最終的な目標は国政に参加することなんですね。こういった動きもあるということは、私たちは一つ押さえておかなければいけないと思います。

こういった発言をお聞きになりますと、関岡というのは何とまあ差別的な、民族差別主義者かと思われたかもしれませんが、実は私が初めて訪れた外国は中国なんです。1979年ですから、もう今から32年前ですね。先ほども言いましたが、20年ほど前には、銀行の駐在員として北京に3年間、家族帯同で暮らしたこともございます。もちろん中国語もしゃべれます。ですから、少なくとも私は平均的日本人よりは、中国に関してさまざまなことを経験してきました。無知とか偏見に基づいてこういったことを申し上げているのではありません。しかも中国人とか中国の人種や民族について言っているのではなくて、あくまでも中華人民共和国という国家は、やはり我々日本とは随分違っていて、違った国家戦略で動いていますよということを申し上げたいわけですね。

その一つが、昨年の7月1日に中国で施行された「国防動員法」という法

律です。その立法目的は民戦結合、つまり兵士と戦時の結合と、それから軍民結合、軍人と民間人を結合させること。すなわち、平時から民間人に国防勤務を負わせるという法律です。この国防勤務の対象となるのは、18歳から60歳までの男性及び18歳から55歳までの女性で、以下の免除規定を除き、国防勤務を負担しなければならない。国防勤務を免除されるのは、たとえば託児所などで働いている方々、それから義務教育段階の学校の先生とか、妊婦中の女性や病気療養中の方々、そして国連などの国際機関に在籍している中国人で、それ以外はすべて強引に対象になります。つまり、日本の大学に留学している大学生、コンビニでレジを打っているお姉さんや居酒屋でお皿を洗っているお兄さん、そういった民間人もすべて、一旦事があれば、世界中のどこにいようと、国連などに勤めていない限りは、すべて中華人民共和国政府の指令に従わなければいけないという法律が、既に施行されているわけです。

それで、これは大変気になる新聞記事なんですが、昨年4月26日の朝日新聞です。迷彩服を着た中国の若者がお辞儀の練習をしておりますね。一体どういうことかと言いますと、これは中国の雲南省というところにある労働者の派遣会社が、これから日本に送り込む研修生に対して合宿訓練を行っているところです。そのカリキュラムには、日本語とかこういったお辞儀のような日本式の礼儀作法に加えて、何と軍事教練がある。これは人民解放軍から派遣された教官が軍事教練を施している場面ですね。しかも、こういった研修生を日本に送り込むと、その派遣会社に対しては、中央政府などから一人当たり9999元、約1万2999円ぐらいの報奨金が出ている。つまり、こういったことが中華人民共和国の国策として行われているということを、やはり我々受け入れる側としても知っておく必要があるのではないかという風に思うわけです。

この写真は、2008年の北京オリンピックの年に、長野で聖火リレーを見送ると称して、6000人とも言われている中国人が集まり、巨大な赤旗を打ち振った場面です。実は私は当日、現場に行きまして、この場面を実際に体験しました。これは国防動員法の施行前ではありましたけれども、今ではその予行演習だったのではないかと見られております。こういったようなことは、実は昨日発売した、『国家の存亡』にも書いております。今日のタイトルも書名から取らせていただきましたけれども、PHP新書から出させていただいておりますので、もしご興味があれば、ご一読いただければ大変ありがたいと思います。

最後に、やはり平成の開国と称して、TPPとか東アジア共同体といったような、さまざまな美名と言いますか、スローガンが打ち出されておりますけれども、我々はもう一回、深くそれを考えてみる必要があるということを、重ねてお伝えしたいと思います。南州翁・西郷隆盛は、既に明治の時代にこのようにおっしゃっています。「みだりに外国の盛大を羨み、議題特質を論ぜず、家屋の構造より玩造物に至るまでいちいち外国を倣ぎ、奢侈の風を長じ、財を浪費せば、国力疲弊し人心浮薄に流る。結局日本身代限りのほかはあるまじき也」と。東日本大震災が起きた時に、外国人たちは一斉に引き上げて行きましたが、私はそれは別に非難するに当たらないと思います。やっぱり彼らには彼らの生きる道がありますし、私たちはそれを心静かに見送るべきだと思うんですね。ただし一つだけはっきりしたことは、一旦、国難が日本に襲いかかってきた時に、外国人は日本を去っていってしまう。彼らには帰っていく祖国がある。しかし、私たちには逃げる場所なんかどこにもない。ここに残って、やはり日本人同士が団結して、復興を成し遂げていく以外にない。そのことが、今回の震災から学ぶべき唯一最大の教訓ではないかと思うわけです。ですから、外国人や外資や利権に頼るという、そんな発想が本当にこの国の未来を打開する解決策になるのかどうか、ぜひ一度お考えいただきたいということでございます。

大変大風呂敷を広げましたけれども、ご清聴、誠にありがとうございました。

基調講演 2

テーマ「どうする日本、どこへゆく日本」

講師

京都大学教授
中西 輝政 氏

1947年 大阪生まれ。
京都大学法学部卒業ののち、同大学大学院修士課程（国際政治学専攻）修了。英国ケンブリッジ大学歴史学部大学院（国際関係史専攻）修了。1995年より京都大学大学院・人間環境学研究科教授。
『強い日本をめざす道』（PHP研究所）など著書多数。

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました中西輝政と申します。

この東日本大震災については、もういろんなお話が出ております。起こった当日から、これは国難だ、あるいは戦後最大の危機だという表現がしきりに聞かれるわけですけれども、私は国難だという言葉には非常に抵抗を感じます。国難というのは、蒙古襲来、黒船来航、あるいはポツダム宣言といったことが日本にとっての国難なんです。私はいろんな国に居住した経験がございますが、自然災害ということでは、日本ほど過酷な環境の国は世界にもないだろうと思います。本当に自然が厳しい国ですね。確かにシベリアの北のほうへ行くと、冬はマイナス40℃とか、そういう不幸な国があります。サハラ砂漠の真ん中にも、砂漠の国があります。しかし、気候の変動はわずかで、極めてワンパターンな気候が年中続くわけですね。寒けりゃ寒い、乾燥していりゃ乾燥する。自然の猛威と言っても、同じようなものがずっと続くわけですが、日本列島だけは違います。突如来るわけですね。典型的なのは火山の噴火であります。

私は文明論、文明史というものを専攻している歴史学者でありますので、地震の研究とも無関係ではありません。物理学的な原理はよくわかりませんが、若い頃から周りに理学部の地震学関係の方が多くいらっしゃったものですから、門前の小僧ということで、何十年と一緒に机を並べて地震学というものについて勉強しました。地震学者は今回もまた予知に失敗したわけですが、地震は予知できません。これは現状、非常にはっきりしているわけですね。ですから、地震学というのは、私から言うと非常に原始的でレベルの低い歴史学であると思います。あんなも

のは当たらない。私も静岡にしばらく住んだことがありますので、東海大地震というのが20年ほど前から騒がれていたのは知っております。何人もの学者が国から何億という莫大な予算をいただいて、東海地震を予知するために一生懸命研究して参りました。しかし、これは専門の学者に言わせても、予知できるとしても発生直前、今から30分後とからしいです。その程度であっても、大変いいパフォーマンスということであります。

私は、前の地震予知連絡会の溝上恵先生に親しくしていただいて、いろいろ地震の話をご教授いただきましたが、やっぱり地震というのは、日本列島の物理的メカニズムがどうあれ、起これば この国の歴史を変えてきました。そういう意味で非常に重要な歴史的素材なんです。私が関心を持つのもその面からなんですね。地震が起これば日本という国の国柄が変わるわけです。少なくとも文化が変わる。人々の価値観が変わる。世の中の歩みががらっと変わります。これは如実なところであります。

今、地震が起こって、復興、復興という声が聞かれますけれども、これは自然が相手なんですね。従って復興は大切ですけれども、戦争が終わった時のように、もう明日からは空爆がない、B-29がやって来ないというようなことは誰もはっきりとはわかりません。地震が起こった3月11日、私は昭和14年に日本とソ連がソ満国境で軍事衝突したノモンハン事件の歴史について、京都で全国各地から来た研究者と一緒に勉強会をやっておりました。ノモンハン事件が日本の北進と南進を分つ大きな役目を果たしたんじゃないだろうか、当時の日本陸軍はどういう戦略をとろうと していたのかと、そういうことを一生懸命議論していたら、今、東北で大地震が起こった、マグニチュード8.8だというニュースが飛び込んできたわけです。当初はマグニチュードを8.8とか言ってたんですが、それがまあ、どうも宮城県沖、岩手県沖だと。

この第一報を聞いた瞬間に、あっ、これは日本の歴史が変わる、世の中は変わると思いました。その場にいた人々に、「死者5万から10万は覚悟しないといかんよ」「阪神大震災の数倍の規模になりますよ」「皆さん、東に向かってお帰りになられる方は、いろんな代替交通手段を考えられたほうがいい」と言ってるうちに、テレビでは、東京地方でも震度5弱の地震があって、九段会館の天井が崩れて、というようなニュースを映し出したものですから、「これはもう新幹線も止まる、空港も全部止まる。あとは自衛隊と米軍の出動、これを待つしかないでしょう。北朝鮮からミサイルが飛んでこなければいいですねえ」と、そんな話をしていたわけです。

ともかく今後は、やっぱり西日本に大震災が来るということを真っ先に考えなければならない。これも過去の地震のパターンから言うと、三陸沖の日本海溝近辺であれだけのプレート地震が起こりますと、必ず刺激が伝わって、東海、東南海、南海地震が起こる。つまり本番は西日本大震災ですよ。これは多くの地震学者が言っていることです。

しかし、マスコミなんかに出て話をする地震学者というのは、非常に社会的な影響を気になさる人が多いですね。これは原子力関係も同じで、恐らくこうだと思っておられる話の1割2割、ストレートな方でも3割ぐらいしかお話をされないと思います。たとえば、一般国民というのは無知なもので、本当の可能性を知らせて、最悪の場合はこうなりますなんて話をすれば、パニックを起こしてしまう。社会的影響が大き過ぎる。自分には責任が取れないことが起こったら困る。あるいは研究予算をもらっているところから、いろいろ言ってくる。それから、自分の周囲の人間にも影響があるかもしれない。私の恩師は87歳ながら健在としておられますが、こういう恩師の先生や若い弟子たちの就職先ということも頭に浮かべて、なかなか正直なことは言わないんです。学者ですから、真実追究でしゃべるべきなんですが、そういう一番大切な国民に向けての発信の場で、言葉を濁してしまいます。これが学者です。学者というものは真実を追究していても、そのことを社会的にストレートに出す時には非常に臆病で、そして場合によると虚偽を流して、平然としておるものなんですね。これは非常に残念なことです。日本の特に学者に多いことであります。

ですけれどもやはり、当時、関西におりました我々から見ていて、今一警鐘を鳴らすべきことは、西に来ることなんですね。今回の東日本大震災、つま

り日本海溝付近の、宮城県沖、岩手県沖のプレート型大地震が警鐘を鳴らしているのは、東南海、南海地震が次に必ずやって来るということです。我々は、こんな危ない島に住んでいるんですよね。そこへ持って来て福島第一原発のあのような事故が起きてしまった。私はやはり外国人は戻って来ないと思いますね。日本に仕事のある方は戻って来られるでしょうが、日本は危ないというイメージは、やっぱり世界中に流布したと言えます。

まあ、そういう悲観的な話をしようというのではありませんが、今、復興、復旧を考えながら、一番念頭に置かなきゃならないのは首都直下型大地震ですね。東京直撃の地震が来ます。これはもう起こって当然、30年以内に起こる確率が70％と、多くの学者はこう言っているわけですね。皆さん、起こる前には割合正確なことをおっしゃいます。ですから、これはもう起こったら、ああ起こったか、やっぱり起こったんだなあと思わなきゃいけない。何人かの人とお別れしないといけないし、日本の将来に対する考え方も、やっぱり変えなきゃいけない。もう今まで我々が住み、暮らしてきたいろんな生活空間、あるいはその先進的な機能が集積された首都時代というのは、もうこれで終わるんだ。こういう覚悟というのが、この島に住む人間には、常に求められてきたんです。覚悟なしに日本列島には住めません。こんな危ない島はないんです。

ですから私も、日本を出ることを考えるわけですよ。私はあちこち海外に住んだ経験もあるし、世界各国にいろんな知り合いがおります。私の今まで蓄えてきた知識を切り売りすれば、とりあえず市民権を与えてくれるような海外の国はたくさんあります。実際に移住ということをもう何十年も、特にここ10年ほどは、真剣に考えてきました。日本はアメリカとの関係が断ち切られたら、翌日に、あるいは3日後に、某国の占領下に置かれるだろう。そうなれば、某国政府は、私のような知識人はどうも悪質な反体制派だということで、必ず収容されるだろう。東京裁判か京都裁判かわかりませんが、B級、C級被告みたいな形で、これは必ず断罪される。そういう時にはやっぱり政治亡命ということも考えなけりゃならない。オーストラリアに逃げるか、ハワイに行くか。飛行機のオープンチケットは買えなくても、とにかく小型船舶操縦免許でも取っておけば、自分でグアム島辺りまでは外洋レースの軽いノリで逃げていけるだろうと、そんなことを考えたりしておりました。

しかし、そんなことを考えていたら、公の立場で発言することはできません。これは筆を折るしかない。今までいろんな研究していたことを全部捨てるか、外国のためにお役に立ててくださいと言って国籍をもらうか、私にはそういうことしかできないと思います。従って、覚悟は必要である。もう必ずやられるんです。どこかへ連れていかれるかもしれないなんてことは、ヨーロッパの歴史を勉強していると、当たり前のように理解されますから、そういうことを私は常に意識してきました。

しかし、一方で地質学の知識も多少はかじっておるものですから、これはやっぱり天災が先に来るなあという感じがします。日本列島は大地震の季節、いわゆる地震と火山活動の活動期に入ったと、こういう風に言われますね。私は京都の東山の嵯峨野の、平安時代にものすごい大地震を起こした白川断層の真上に住んでおります。勤めております大学は、花折断層という、もっとすごい断層の上にあるんですね。ですから、その辺りが一瞬で壊滅するということは確かであります。私はこれまで、いろんな雑学に興味を向けて参りましたので、とにかくどうでもいい、誰も読まないような本をいっぱい、自宅にも大学のオフィスにも置いております。ですから、「地震が起こるともう、あなたは完全に本に埋まって死んでしまいますよ。何とか片付けなさい」と、家内に毎日のように言われるわけです。この頃は、「本に埋まって死ねば、それは本望だから」と、家内にはその一手で押し返しておりますけれども、地震というのに、この島に住む以上、常に覚悟しておく必要があるということです。

秋になれば台風がやって来て必ず洪水が起こり、家が流されるわけですね。数は今回の地震ほど多くありませんが、梅雨明けの頃には必ず山崩れが起こって、家が埋まるわけですね。これは日本列島では、歳時記とか年中行事のような光景です。私は長い間、イギリスに住んでおりましたが、イギリスは全く天災、自然災害のないところですね。「地震ってどうなるの？　説明してよ」とイギリス人に言われますが、

説明しようがありません。台風もそうです。それから火山の噴火。火山なんてロマンティックだと、欧米人にはそんなことを言う人までいるんです。日本列島は地球上の陸地のうち、わずか0．2％ののシェアしかありません。ところが世界の火山噴火の20％は日本列島で起こっているわけです。つまりこの島は、火山噴火の確率が100倍、高いわけですよ。

今回、自然科学のいろんな解説者が、日本列島は4つの代表的な大きなプレートの上に乗っかっていると説明しております。まず、今回の地震で大きな役割を果たした太平洋プレートがある。それから北海道から東北地方、佐渡島、

そして東京湾沖、房総半島から伊豆大島の辺りまで、北米プレートというものが入り込んでいる。南からはフィリピンプレートがどんどん押し上げていく。その境目がちょうど相模湾沖ということですね。さらに西からはユーラシアプレートがどんどん東へ押してくる。4つの代表的な大きなプレートが、日本列島の地下で押し合いへし合いしているわけです。そんな地殻の境目を、三つも四つも持っている国は、世界中で日本しかありません。日本より少し前に地震があったニュージーランドも地震国ですが、これはインド洋プレートと太平洋プレート、二つのプレートの境目にあるわけですから、ごくごく単純な話なんですね。

なぜこういう話をしているかと言いますと、私の専門分野の国際関係の話に重なるからです。やっぱりこの島は、国際環境も最悪の島なんですよ。日本は今、とんでもない国際政治環境にあって、奇跡的にサバイバルしているわけですが、近代日本はずっと一貫してそうなんです。先ほど日本の開国という話がありましたが、幕末にアメリカのペリーがやって来て、開国を要求しました。江戸湾にまで入って来て、大砲をどんどん撃って、太平の眠りを覚ますということになりましたけれども、実は東から来るペリーは大した脅威ではなかったんですね。もっと恐ろしいのは、北方から来るロシアの脅威でした。樺太、千島を南下して、蝦夷地、つまり北海道を支配下に収めようとする。時々新潟や対馬、あるいは長崎といったところへ来航して、勝手に上陸する。対馬を占領してロシア領にしようという動きさえ、何度も示しておりました。そして南からは、イギリス、フランス、ヨーロッパ勢が来るわけですね。もうご承知の通り、ペリー来航の何年も前に、琉球の那覇にはイギリス、アメリカ、フランス、各国の軍艦がひしめいておりました。しかも明治の日本は、同時に西から、強大な清国の圧力を受けていたわけです。四方八方というのはこのことですね。世界中にこんな国はありません。世界史の上でもないんですね。

アングロサクソン、つまりイギリスやアメリカの植民地になるかもしれないという脅威を受けた国は、実際にたくさんあります。ユーラシア大陸の南のほうにある国、中近東とかインドとか東南アジアがそうです。しかし、これはみんな西から来るヨーロッパ勢の脅威だけなんですね。中央アジアの国とかモンゴル、そういう国はロシアの脅威だけです。ラテンアメリカの国、太平洋のハワイなんかの小さな島々、こういうところはアメリカの脅威だけなんですよ。近代において、東から来る、北から来る、南からも西からも、脅威が四方から来るという経験をしたのは日本だけです。だから明治、幕末の日本の置かれた立場というのは、本当に危うかったんです。日本がなくならなかったのはまさに偶然、もしくは本当によくあれを切り抜けたものだと思います。4つのプレートがひしめいていて、その真上に日本列島があるというのも世界に例のない地質学的現実でありますが、まさに国際環境も同じであります。

そうした状況は、今日もあまり変わっておりません。地震が起こると、北の方からロシアの救援隊も来てくれましたけれども、同時に軍用偵察機も毎日のように日本海を南下しておりました。中国も四川大地震の際の日本の救援に対するご恩返しということで、早速に救援隊を送ってくれましたが、同時に尖閣諸島には、この震災のまった

だ中に漁業監視船が来て、接続海域にいました。まあ、これは毎度のことですけれどもね。それから、3月には2度、東シナ海の日本の排他的経済水域で、やはり中国の軍用ヘリコプターが自衛隊の護衛艦に異常接近をしました。90mぐらいまで近づいたんです。さらに4月に入ってからは、中国空軍の軍用機が尖閣諸島の上空に接近する行動をしました。これは初めてだったのでびっくりしました。つまり、尖閣諸島を巡っては、震災のまっただ中に、中国が不穏な行動をとっていたわけです。

日本の防衛省も震災のまっただ中に、ちょっとびっくりするような報告書を出しました。防衛省の研究機関である防衛研究所が、アジアの安全保障状況が変わった、尖閣諸島をめぐる情勢は日中間の不測の事態を招く可能性があるということを報告したんです。これは日本政府防衛省の研究所の報告書ですから、公式のものですね。ですから、中国側の行動もこれに反応したのかもしれません。しかし、いずれにしても日中間で不測の事態というと、一つのことしか意味しません。すなわち軍事衝突であります。従って、日本の公文書が初めて、日中間の軍事衝突ということに言及したということになります。これは驚くべきことです。なぜこういう報告書をこのタイミングで出したのか、それはきちっと戦略があって出したと思うわけですね。私は、その不測の可能性というのは、うんと前からあると思っておりましたけれども、それを公式に今の内閣の下で発表するというのは想像もしていませんでした。今の内閣の下で発表したら、この文書は本当に宙に浮きますよね。あるいは摩擦だけを引き起こす。対応ということは誰も考えていないのかと、非常に気になります。

その辺の問題もありますけれども、やはりこの震災の問題です。政府は復興・復旧に全力を投入すると言っていますが、元々この国はそういう環境にはないんですよ。東北の復旧なんかに全力を投入して、来月、西日本に地震が来たらどうしますか。自衛隊は東北に10万人出ているわけですね。自衛隊の定員は24万ですから、あと14万まだ遊んでる。そのうちまた10万を西日本大震災に投入すればいい。それでもまだ4万余ると、こういう計算でも皆さん、なさっておられるんですかね。国防ということを全く頭から捨象しておられるから、10万人投入という、あんな大胆なプランができたんだと思いますけれども、まして復興・復旧に全力を投入するなどということを、軽々しく口にすべきではないと思いますね。選挙を意識した、選挙民向けの言葉なのかもしれませんが、国家の決定としてそういうことを考えられる余裕は、まだ日本にはありません。これが一番大事なことだと思います。復興・復旧を簡単に口にするなということであります。

それから、もっと重要なのは、原子力発電所の事故がまだ収束していないことです。これを何とか収められるとしても、それには時間がかかるでしょう。あるいは、やっぱりある種のカタストロフィー、破局的事態に結局はつながっていくかもわかりません。その可能性もまだ残っているわけですから。私は、この事故を日本がどう始末するか、それが日本の国際的地位の分かれ目だと思います。この原発事故を何とか、悪戦苦闘してでも、かろうじてぎりぎり押さえ込んだら、日本は世界に冠たる原子力大国、あるいは技術大国と評価されるでしょうし、全国民一致で犠牲的精神を発揮し、この人類未曾有の大惨事を切り抜けることができた日本は大したもんだ、すごいものだと称賛されますよ。あの原発に入って、今必死に作業している人たち。もう命がけですよね。イギリスの新聞が書いておりましたが、これはまさに第二次大戦の時のイギリス本土の防空戦、バトル・オブ・ブリテンでドイツのイギリス占領を何とか撃退した1200人のあの戦闘機パイロットたちと同じです。イギリスという国は、彼らに甚大なおかげを被ったと、イギリスの首相だったチャーチルが繰り返し言いました。自らの命を的にして、何千倍という数の国民の命を、あるいは国家の存亡を守ったわけです。ですから、福島の原発で作業しているあの人たちは、国民的ヒーローということになるでしょうね。もちろん、注水活動に命がけで出動した自衛隊、あるいは警察官、消防士の方々も同様です。戦後の日本には戦争の英雄というのはいませんが、彼らは間違いなく英雄になると思います。

しかし、これを失敗して大惨事あるいは破局が起こる、もしくは、おそらくはアメリカやIAEAといった国際機関の手に委ね、外国が完全に仕切って安全に収めたということになると、

日本の国際的地位というのは確実に落ちます。やはり日本という国は、こういう技術システムで独り立ちができない国だということになる。日本の原発をモデルにと考えていた国は当然、採用を取りやめるし、日本の各種の先端技術や生産技術に対するイメージまで、世界中で変わってくる。これは現在の放射能の風評被害というものとは、全然レベルの違うインパクトを日本の将来に及ぼすでしょう。ですから、この福島の原発は、何があっても絶対に抑さえ込まなければいけない。国の運命がかかっているというのはこういうことなんですね。失敗すれば、もう日本の経済大国としての地位は真っ逆さまに墜落、クラッシュしてしまう。それほど重大なものです。

ですから、今の日本の政治体制で、ましてやこんな内閣で、さらにましてこんな総理大臣の下で収められるとはとても思いませんから、ただちに政変を引き起こさなければいけないと思うんです。これはあくまで私個人の考えですよ。明日、統一地方選の後半の投票日でございますので、今日はあまり狭い意味での政治向きの話をするべきではないと思いますけれども、やはり菅直人という人は、平時の総理大臣であっても首の皮一枚でつながっているような人です。支持率が大震災の直前の2月の調査でも10%台に落ちているし、あの震災の日には、まさに外国人からの不正献金問題で、総理大臣自身が追及されていました。その5日前には外務大臣が全く同じ問題で、即座に辞任しているわけですから、当然総理大臣は辞任すべき事態ですね。これ、あと数時間、参議院の審議が続いていたら、この人の首はつながってませんね。

冒頭に申し上げましたが、この震災を国難と言うなと私が本当に強く思う理由の一つは、国難と言ったのが紛れもなく菅さんだからです。あの時、国会でぎりぎりの追及を受けていた菅さんが、地震が起こったというので、審議を一旦中止して官邸に戻りました。そして執務室に入った時に、菅さんが「これは国難だ」と、ついていっている新聞記者に叫んだんです。ですから国難というのは、菅直人さんがご自分でお作りになった言葉ですよ。こんな言葉に乗せられてはいけません。もう追及されて国会は保たない、来週には辞任しないとしょうがないなあという状態で、首の皮一枚でつながっていた菅さんが、あっ地震だ、「これで2年は保つぞ」と思って発した言葉なんですよ。新聞は、総理大臣が執務室から廊下まで聞こえる声で叫ばれたと書いておりますが、これが国難でしょう。つまり、こんなタイミングで、こんな総理で、震災があったということが国難でしょう。

あとで申し上げますが、やっぱり政治というものが国の運命を決めるんです。国の大きな運命を決めるのは自然災害や経済ではありません。文化でもありません。ぎりぎりの危機を乗り越えて、国をサバイバルさせるのは、政治以外にないんです。ですから、政治の下手くそな国、政治のまずい国はいくら営々たる努力をしても、結局「賽の河原」なんです。アングロサクソンのイギリスやアメリカという国の人たちはあまり働きませんよね。創意工夫といっても、そんなに大したものを持ってるとは思いません。しかし、自分たちの役に立つ才能の持ち主は、どんどん取り立てて使います。昔はユダヤ系の人を大切にして、現在ではアジア系、あるいはアフリカ系の人を大切に扱いますね。しかし、自分たち自身には大した才能はない。ただ、総合的ないろんなマネジメントをして、国の動きの方向を選んで、そして合意を取り付け、あくまで実質的な損得ということを目安にしながら、大胆に妥協して政治をやっていく。やっぱり政治の天才なんですね、あの民族は。ほかには才能のある民族とは思いません。政治というのは、それほど大切なものなんです。

でも、戦後の日本はどうもこの政治というものに、あまり関心を向けてこなかったのかもしれません。それは大してがんばらなくても、経済が悠々たる成長を続けてきたからです。経済一流、政治三流という表現がまさにそうですね。戦後長い間、日本人は、日本の永田町の政治は情けない状態だけれども、それでも日本は成長するんだ、世界第2位の経済大国なんだと言ってきました。「政治はもうしょうがないよ」と関心を持たないか、どこか際物扱いしてきたように思います。しかし、やっぱり経済の悠々たる成長というのも、戦後の政治がしっかりしてたから、成し得たところがある。また、冷戦構造とか日米関係とかいろんなものに支えられたところもある。あるいはいろんなライバル国家が、経済的なテイク

オフをなかなかできなくて、日本は国際的にラッキーな位置づけにあったこともあるでしょう。大事なのは政治です。日本人は政治や国の舵取りというものを少し軽んじていた。それが今、大きなツケになって、経済の大きな疲弊、あるいは財政危機、あるいは安全保障の大きな危機になっている。平成という時代に政治が戦後でも最低水準になってしまった。そういう最中に大地震が起きたわけですね。

日本人は、政治をもてあそんできたのかもしれません。特にマスコミ、メディアは、政治をもう玩具のようにもてあそんできました。一昨年の総選挙でも、マスコミは政権交代、政権交代と、それ自体が何か良いことであるかのように、連日連夜、伝えましたね。政権交代して良ければ政権交代すればいいし、まずければ交代してはいけないんです。これは当たり前のことですよね。昨日までの野党だった与党が言っていることがいいのか、まずいのか、もうおわかりだと思います。特に総選挙の時、民主党の候補はマニフェストをしきりに論じておりました。あれは我々専門家が見ると、どうしたって最初から財政的に成り立つはずがない嘘、フィクションでした。こども手当とか高速道路の無料化とか、そういう予算は財源はあるんだと、しきりに民主党の指導者は言いましたけれども、どう見てもそんなものはありません。ないものをあると言っているわけですね。いや、それは予算を組み替える、あるいは霞ヶ関の埋蔵金を引っ張り出すと言ってますが、それをやろうと思ったら、どれぐらいの腕力が必要ですか。これもまた霞ヶ関の力を知っていると、政治学の常識から言って、日本の議会、国会の力でできることではありません。ですから、あれはまやかしです。インチキです。

「政権交代を一度してみるのもいいでしょう」なんてことを言っていた政治学者もいましたが、やはり政治をもてあそんだんですね。マスコミも、国民もこれは同じです。最低限の政権担当能力でもある政党なら、こんな体たらくにはなってなかったと思いますけど、現与党は予算を立てようとしても全然立たないんですよ。初年度から税収を上回る国債を発行して、やっとぎりぎり辻褄を合わせましたが、3月11日以前の今年度予算案でも、極限的に国債の発行を上積みしてますね。そして、やっぱり実行できないから、もうマニフェストを下ろしましょうと言う人たちと、いや、マニフェストを実行せよと言う人たちで、延々たる内紛です。これに小沢一郎さんのお金の問題が絡んできて、小沢系と言われる人たちは一生懸命マニフェストを厳守せよ、執行せよという主張し走り回ってるし、菅さんたちはもうマニフェストは無理だからやめようと言ってる。内紛を起こすぐらいなら、「マニフェストを作る前に起こしといて下さい」と言いたいわけですけれども、それをわざわざ今、やってるわけです。

そうしてまた鳩山さんの時にに、沖縄の普天間基地問題を巡って、日米関係がもう、戦後ないほど大きく動揺しましたね。あの問題の基本ははっきりしていて、やっぱり鳩山さんの個人的な資質の問題であったわけです。できるかできないかわからないことを、「やります」「最低でも県外」と言い切ってしまいました。そんなことで政治が簡単に動けるわけがありませんよ。子供でない限り、あんなことを言えばどんなことになるか余りにも予測が可能だから、私はしばらく、何か手品の仕掛でもあるのかなあと思っていました。でも3ヶ月ほどしたら、とんでもない人格の人だということがわかって、こういう人に国の舵取りを任せては大変に危ないと思い直しました。鳩山さんが総理大臣になったのは、ひとえに月々1500万円というお母さんからのこども手当のおかげですよね。あれがなければ鳩山派というグループはできませんし、代表選であんな力を持って、民主党の代表になれたはずがありません。やっぱりアマチュア政党と言いますか、個人政党、個人商店のままで、日本の政権の座に近づいていたわけですね。

鳩山政権に大変困った政権だったんですけれども、とりあえず現内閣よりは、一つだけましだったことがありますね。それは総理の座を投げ出されたことです。安倍晋三さんのように、体調が大崩れしてしまって、どうにもならずに辞めた人は別ですけれど、いずれにしてもマスコミは、総理大臣が次々に辞めるので、総理の職をそんなに簡単に投げ出すなんてけしからんと言って、しきりに責めてたわけですね。自民党は、安倍さんも福田さんも投げ出しました。その次に、投げ出さないけど、感じが良くない人が総理になって、こ

んな人たちに日本は任せられないとか言って政権交代したわけですね。そうしたら鳩山さんは1年もたたずに投げ出した。小沢さんも立派ですよね。一緒に投げ出したわけです。投げ出す政治家がどれだけ素晴らしいか、今、わかりますね。菅さんのようにとんでもないことをしておりながら、投げ出さない政治家が、本当に日本に災いをもたらしてしまったわけですから。

今回の東北大震災の被災者の人たちに関して、涙なしには聞けないようなニュースが毎日入ってきます。あの陸前高田市の避難所なんかは、丸1ヶ月たってもまだ、配られる食料はおにぎり一つと菓子パン一つ。こないだからやっと、卵焼きが半分、ゆで卵が半分、回ってくるようになりました。しかもあんな天井の高い寒々とした体育館の中で、木の床の上で毛布を被って過ごさなければならない。間仕切りといったら、せいぜい段ボールですよ。私は以前、パレスチナ難民の難民収容所に行ったり、あるいは国連関係の仕事をしておりました時に、パレスチナだとかボスニアとかいろいろ難民収容所を見て参りましたが、国連関係の難民収容所の方がはるかにましですね。あんな状態を放置しておくというのは、もちろん政府の責任ですが、なぜかマスコミもこのことをあまり問題にしません。

私は、阪神大震災の年に京都大学に移ってきましたが、毎年毎年、1月17日が来ると、関西の新聞は阪神大震災の特集を延々とやるわけですね。あの悲劇の1・17がまたやってきた、哀悼の意を表して誰それが何を言った、あるいは家族、遺族の人たちの悲しみ蘇える…。ここから先は少し申し上げにくい話ではあるんですけれども、関西の新聞・テレビのニュースは、1月17日の1週間ぐらい前になると、ほとんどお涙頂戴ばっかりです。亡くなられた人の心の痛みを伝える、これは大事ですよ。みんなでその悲しみの記憶をもう一度たどって、何とか個人的な不幸を乗り越えて、前向きに生きていこうとする元気をマスコミが与えてくれる。これは当然、大切なことです。心のケアということもしきりに言われておりますね。これも人間として非常に大事な営みであることは間違いありません。しかし、このようなマスコミの風潮に、社会や国家を率いていくはずの人たちが影響され、惑わされておりますね。ですから、強い姿勢で防災対策を進めようということにならない。大震災はいつか必ず来るのに、次の災害にどう対処するかとか、強い日本をどうやって作るんだという話に行かないんですね。非常に残念なことです。

結局、阪神以来16年間、防災論議はほとんど本格化しませんでした。これは平成という時代の、一つの時代精神なのかもしれません。何かひ弱な「優しさ」だけが横溢するような日本になったんですね。「強いだけではだめだ。優しくなければ生きていく価値がない。」もちろんその通りですね。日本では昔から、気は優しくて力持ちが理想の姿です。足柄山の金太郎ですよ。これは日本人の一つの生き方として当然の価値観ですし、優しさというのは非常に大事です。しかし、どうも平成という時代に入ってからは、一方的に優しさだけが大事になって、癒しだとか心の痛み、こういうことばっかりが言われるわけですね。これは一般庶民が言ってる間はまだいいんだけれども、国の指導者、社会のリーダーがこういう風潮に惑わされていくと、思い切ったことはできなくなります。

今でも東北の被災地には、がれきの山がたくさん残っています。実は、津波で流されてきた、どこの誰のものかもわからない自動車は、所有権が残っているとかで、勝手に処理できないんだそうです。あるいは、必死にがれきの片付けをしている自衛隊員や警察官が、何か大事そうに抱えて持ち出している。遺体か遺体の一部でも発見したのかなと思ったら、アルバムなんですね。アルバムは一家の大切な思い出がこもっていますから、その家庭の家族の方にとってかけがえのないものであるのは間違いないでしょう。しかし、誤解を受ける言い方かもしれませんが、それは国から派遣された自衛隊員が、しかも国防の仕事を一時的に取っ払って東北に来てる自衛隊員がやるべきことでしょうか。震災のあと一番大切なことは何かというと、これは一刻も早い立ち直りですよ。今度、西日本に大地震が来たら、我々は東北に助けてもらわないとやっていけませんから、そんなことをしている暇はありますかと、切実にそう思います。残念ながらがれきは、もうこれだけ時間が過ぎたら、全部ブルドーザーで山にしなければいけません。そして廃棄です。何が詰まっていようともそうです。日本以外の国

ですと、必ずそうしますよ。この間のニュージーランドの地震では日本人が二十数名亡くなりましたが、結局、全員の遺体は確認されないまま、20日過ぎるとあっという間に現場のがれきを処理しました。これが人間の人生というものであり、この世に生きるということだと思います。

ですから苛酷です。覚悟が必要ですよ。それなしには、この日本列島に住めません。日本人は、いつ噴火するかわからない火口付近に住んでいるようなものです。しかし、そんな不安なことについて、日本人は昔から考えないことにしてるんです。だから生きてこられたし、そしてまた日本人はそういう自然災害からの立ち直りが早い。もう台風一過あっけらかん。こういう国民性を形作ってきたのは、こういう風土だからです。ですから、こんな震災自体、私は簡単に言うつもりはありませんけれども、しかしあえて言えば、こんなのは国難でも何でもありません。しょっちゅう起こっていることです。

関東大震災は大正12年、1923年に起こってますね。あれは火災の被害が多かったけれども、10万人の日本人が亡くなりました。そして当時のGDPの、少なくとも30～40％の富を失いました。今回の東日本大震災は、今のところ死者・行方不明者合わせて2万数千、3万人にならんとする数でありますが、先日、内閣府が推計を出した経済的な損失は、大体15兆から25兆という数字でした。これはざっとGDPの3％から5％ということですね。経済的損失から言えば、関東大震災の10分の1です。

これは一例に過ぎませんけれども、今回こんな大きなプレート型地震が起こったことに大変多くの方が驚かれたものですから、過去のいろんな事例が報告されました。幕末の時代にに安政の大地震が起きています。あれは関東で起こって、1日置いて関西で安政の南西地震が起こりました。それで南西大津波が来て、土佐の高知沖から和歌山の紀州沖まで全部やられましたね。恐らくあの時の震災の被害は、関西地方と言いますか、西日本では未曾有のものだったと思います。その前、江戸時代の1707年の宝永大地震でも、やっぱり東と西が連結して、富士山まで噴火しました。そして江戸市中に火山灰が降り注いで、それまでの元禄時代が終焉を迎えたんです。元禄時代というと、近年には昭和元禄という言葉もあるほど、浮かれてバブルで、人々は享楽的に生を楽しんだ時代。そういうイメージですよね。その元禄時代が宝永大地震の発生と富士山の大噴火で終わり、一瞬にして時代相が変わりました。

大地震は歴史に大変化をもたらします。幕末の安政の大地震では、それから十数年すると江戸幕府は崩壊しました。関東大震災でも同じく、震災から二十数年後に、やはり日本国はポツダム宣言を受諾して占領されるという大変化が起こりました。宝永の時はそんな変化に起こっておりません。その代わり8代将軍吉宗が出てきて、財政の立て直しから何から、いわゆる享保の改革が始まっていきます。日本はおそらく、それまでとは全然違う国になろうとして、非常に深いものをいろいろと見つめ、考えていくような時代になりました。日本とは何なのかということに非常に多くの人が関心を向けるようになって、その中から出てきたのが、たとえば本居宣長の国学です。国学なんかが盛んになるのは18世紀、1700年代ですね。日本が本当の日本になっていくのは、私はこの宝永以後のこと

だったと思います。

今回の東北の大地震は1000年に一度の大地震と言われておりますが、決してそんな周期ではありません。地震学者がいつも1000年に一度の事例に挙げるのは、平安時代の貞観地震、貞観津波です。あれは869年ですから、もう1100年ほど前です。彼らは、今回の大地震はあれ以来だというようなことを言っているわけですが、これは狭い狭い知識で言っているだけであります。私は若い頃、国の原子力委員会の専門委員をやったことがありまして、地震と原発の関係をよく知っておりますが、地震学者は、我々から見ると本当に困った存在であります。彼らは政府とか原子力関係の人と、鉛筆をなめなめ、地震の想定は震度5弱ぐらい、あるいはマグニチュード7.3とか、これぐらいにしておきましょうと勝手に話をするんですね。学者はもっと勉強しなさいと言って、彼らに資料を与えるんですが、歴史もあまり勉強しないし、ちょっと困った存在です。貞観の地震の話もそうです。理系の人はどうしても、事実の連鎖の中に何かを見いだすという発想ではなくて、地震そのもののメカニズムを一生懸命見ようとしますね。歴史学的素養がないのかもしれません。

いずれにしても869年に貞観地震が起こり、それから9年後に西の方にやって来ます。まずは東京直下型の相模武蔵大地震が起こっていますね。それから有名なところでは、仁和の南海地震。これが887年ですから、10年に1回、ものすごい大きな地震がどんどん西のほうへ伝わっていってる。それで紀貫之の「土佐日記」なんかには地震のことが終始書いてありますが、この地震の時代、地殻の活動期を迎えて、日本人は変わっていきます。それまで中国直輸入の律令体制、あるいは中華文明をなかなか咀嚼できなかった日本が、これをすっかり噛み砕いて、いわゆる国風文化といわれる時代に入っていくんですね。菅原道真の建議で遣唐使を廃止して、中国の文明をただ学ぶのではなくて、日本らしさということを考えようじゃないかという時代に入っていくし、また平将門とか藤原純友の乱というのが起こってきて、日本の政治が大きく変化していきます。それから400年後には、また鎌倉大地震という大きな地震が起こっていますが、日本に大地震が来る時は必ず外敵がやって来るわけで、この大地震と蒙古襲来が重なります。そして、地震の20年後に鎌倉幕府が崩壊して、天皇中心の「建武の中興」と言われる時代になり、日本は南北朝時代から応仁の乱、戦国時代と、100年以上にわたる混乱期に入っていくわけです。

先ほど見た本居宣長の時代もそうですし、こういう南北朝時代の混乱と言いますか、幕府政治の崩壊も大変化ですね。あるいは平安時代の中期のように、文化や人の心が変わったのも大きな変化です。平安時代の場合、もう一つ大きかったのは、やはり神仏習合でしょう。神仏習合が決定的に深まるのは、この貞観地震のあとの800年代、9世紀のことです。京都に今ある主なお社・仏閣、有名なところでは石清水八幡宮とか、奈良の春日大社が平安京に移ってきた吉田神社とか、その後の日本神道の中心になる流れが、この時に明確に頭を出してくるわけですね。神仏習合こそ日本文明の非常に重要な特徴だと思いますけれども、大地震はこういう豊かなものも生み出す。政治の混乱も生み出す。あるいは経済の大変動も生み出す。いずれにしても大きなポテンシャルを生み出すんですね。ですから、東北の大地震が引き金となって今回はどんなものを生み出すのかということに、恐らく私は多くの日本人が、直接意識しなくても、何か先祖から延々と受け継いできた感覚的なDNAをもって、注目していると思います。どうする日本、どこへ行く日本、日本はどうなるんだ…。直感的ではありますが、何か時代転換の予感みたいなものを、無意識のうちに感じているかもしれません。それがなかなか言葉にならずに、もどかしい思いで、私も何かしたいという気持ちになったり、あるいは日本は大丈夫だろうかと心配になったり、いろいろするわけです。

今回の大震災では、被災者たちの本当に立派な秩序立った行動、あるいはお互いに他人を先に思いやる行動が、世界中から賞賛を浴びました。たまたまうどんの配給があると、みんなわーっと集まって列を作るけど、20食しかありませんよと言われたら、先にもらった列の前の人がうしろの人に回していって、小さな子供や老人に真っ先に与える。それを見たら、世界のどんなジャーナリストでも感動して、報道したいと思いますね。こんな民族は

世界にはいません。絶対にいないでしょう。イギリスのエリートのように、ジェントルマンはこうすべきだと徹底的に教育された国はたまにあるかもしれませんが、何か自然に庶民の中から出てくるようなものではありません。この中にやっぱり日本人の、何か大きなDNAと言いますか、非常に特殊な、世界に類のないものがあるんですね。こんなプレートの上に横たわっている島ですから、そういう国民性がなければ、この民族は絶対にサバイバルできなかったでしょう。外国のマスコミはびっくりして、日本人はすごいぞ、立派だぞと報道していますが、我々から見れば、何を言ってるの、当たり前じゃないと言いたくなります。これが日本人なんですね。だから、やはり日本の環境が日本人の国民性を形作ってるわけです。いずれにいたしましても、このような中で日本はどうしたらいいのか、どうしておけばいいのか、日本はどこへ行くのかということを、具体的に考えていかなければなりません。

まず一つ、私が地震を国難だと言ってはいけませんよと言うのは、本当の国難というのは、ともすれば地震のあとに来るからです。近いところで言えば16年前の阪神大震災です。震災自体の規模は、今回の大震災に比べれば小さかった。しかし、そのあと何が起こったか。多くの人の記憶しているところでも、1月に震災が起こって、3月に東京のど真ん中で地下鉄サリン事件が起こりますね。これはものすごい、世界的なテロ事件だったわけですけれども、同じ平成7年、1995年の夏には、いわゆる第二地銀と言われた関西の銀行、兵庫銀行が破綻している。戦後の日本で初めて、銀行破綻というのが起こるわけですね。それがどんどん波及していって、2年後には例の山一証券、北海道拓殖銀行の二つの大手金融機関が破綻します。それ以後、日本経済は不良債権問題とか金融のいろんな問題に悩まされております。小泉政権に至るまで、これが最も大きな日本経済の足を引っ張るものになるわけです。

さらにまた、同じ1995年9月、この沖縄では、皆さんご記憶のように、普天間基地問題の発端となったアメリカ海兵隊による少女暴行事件が起こります。日米関係が大きく揺らいで、それ以来もう16年間たっているわけです。当時は自民党主体の自社さ政権でしたが、自民党の山崎拓さんとか加藤紘一さんといった方々は、「冷戦も終わったし、以前ほど日本に米軍基地がある必要は高くはなくなった。米軍基地を根本から考え直す機会でもあるかもしれませんね」、なんて言ってました。加藤紘一さんは当時、自民党幹事長でした。こういう世代の保守政治家が、日本の中枢に上ってくる時代になってたんです。私自身はやっぱり、日本では憲法改正ということを実現して、日本自身で日本の国を守れる自主防衛力を明確に持たない限り、日米関係というのは動かせないと思っています。これに私の考えですが、大した思考にいらないごく当たり前の考えですね。しかし、こうした考えを何となく正面から口にしにくくなったような空気が、この阪神の大震災直後からありましたね。

そしてまた、同じ1995年の8月15日、当時の村山総理が、いわゆる村山談話というのを発表します。世界中で日本だけが、侵略戦争をやった責任がある国ですというんですね。「日本だけが」というところが、あの談話のミソです。どう読んでもそう読めます。じゃあ欧米先進国はどうだったか。アメリカはフィリピンを植民地化した。イギリスは世界中を植民地化した。ドイツはもっとひどい侵略をやってる。要するに、今、先進国と言われる国は、ほとんど全部侵略国ですよ。侵略戦争をやった国なんです。それが世界史の間違いのない事実。誰だってわかる事実です。それなのに、そのことを全く次の世代に引き継がないで、謝罪ということをやりだしたわけですね。今に至るも、何が起こっても全部、多くの歴史問題は、この村山談話に行き着きます。

私は戦後の生まれで今年64歳になります。先ほど、地震が起こった日にノモンハン事件のことを勉強していたと言いましたが、戦後長い間見てきて、あの戦争のことはもう、答えははっきりしてると思うんですね。日本が侵略の意図を持っていたとしても、せいぜい他の国と同じ程度です。膨張しようというのはイギリスだってアメリカだってそうです。場合によると中国やソ連だって同じです。しかし日本は、戦争のやり方がものすごくまずかった。戦争では相手を騙す謀略が決定的な意味を持ちますが、日本人は謀略は卑怯だ、スパイは許さないというようなことで、戦争をやる能力がないと申します

か、下手くそで負けたということです。それ以外の理由はありません。従って、村山談話は完全に間違いです。歴史家として言えば、こんな間違った歴史解釈はないでしょう。あんな談話を出すなんて、社会党の総理大臣だからしょうがないかなあというところもありましたけれども、結局、自民党になってもこれを引き継ぎ、民主党政権になっても引き継ぐ。戦後50年もたって、戦争のことをほとんど知らない人の時代になってから、こんなことが出てきたというのも、戦後日本ならではと思います。

私は予言者ではありませんし、地震や災害のことを責任を持って話せるような権威でもありませんが、このように見てきますと、今回、日本の国のあり方がものすごく問われたことは間違いありません。その一つは、これまで言われてきましたいわゆる地方分権の問題です。非常にはっきりと日本人に示すものがありましたね。震災と津波でほとんどの自治体が壊滅、あるいは壊滅的打撃を受けました。もう今、自治体としての機能を十全に残しているような被災地はありません。仙台市も100万都市ですが、ほとんど麻痺状態になっています。そのような中で、結局は国が何をやってくれるかです。日本人は中央政府と言わず、国という言葉を使いますね。日本では最近、地方分権とか、中には地方主権という言葉で、分権論が非常に盛んになってきました。構造改革の一端というわけかもしれませんが、その議論を聞いておりましたら、私なんかは、先ほど出てきたような謀略とか、工作員が入ってきて乗っ取ってしまうという危険性に対して、いわゆる公安・治安的な予防策、防護策が、何の用意もされてないなあと思うわけです。

私のおりましたイギリスや西ヨーロッパの国はみんな、真っ先にそのことを論じます。イギリスがドイツの銀行やアメリカの銀行にどんどんロンドンにやって来てもらって、世界中の資本を呼び込もうという「ビッグバン」の決断をした時に、イギリス政府や世論の最大の関心はその点でした。これは必ず監視しなければならないマネーが入ってくる。イギリスの政治をおかしくしたり、イギリスの国会議員を買収しようとする外国の工作が入ってくる。これが金融街シティを支配するようになれば、大変だ。これをどうやって監視しよう。コンピュータのシステムをどうする…。イギリスをはじめ昔からある国には、そういうことを調査する特別の部局があります。そして、「皆さん、どうぞ入ってきてください」と言いながら、裏でしっかり監視をしているわけですね。やっぱり監視能力を持ってるのが国家なんです。国家は監視能力を持っているという国家観があるから、イギリスの経済人も、あるいは官僚もマスコミも、みんなこのビッグバンをやって、グローバル化で国を開くことに踏み切れたわけです。そして、その時に最初にやることはこれだということで、イギリスではMI-5という外国のスパイや工作員を監視する機関が大拡張されました。冷戦が終わってるのに、予算が2倍、3倍に増えました。これこそ「グローバル化対応」の一つなんですね。

今回の原発事故でも、海外の人はまずそういう工作を疑って、私の知り合いの学者とかも頻繁にメールを送ってきました。地震が起こって津波が来た瞬間、福島の原発は一斉にすべての電源が喪失しましたね。あれは自然現象に便乗して、何か工作が行われたんじゃないですか。2日目、3日目の事態について、日本政府は一体どういった検証をしているんですか。そういうことを聞いてきました。全然マスコミは伝えませんけれども、確かに福島第一原発は、以前オウム真理教の関係者が潜入していて、人員配置の資料とか部品の交換マニュアルとか、そういうものが外部へ流出したという風に言われました。これはもう十何年前の話ですが、本当に危ないんですよ、そういう面の原発のセキュリティは。去年も『週刊文春』が5月15日号で、新潟県の柏崎刈羽原子力発電所の中に、警視庁公安部が北朝鮮の工作員だと断定した作業員が仕事をしていると報道しました。その作業員は日本人ですが、それをたどっていくと、関係者が一斉にいなくなってしまったということです。週刊文春はこういう公安情報については、一定の確度があります。従って、当時の自民党の勉強会で、こんな情報があるけどどうしますか、みたいな話をしてたのを覚えてますけれども、原発のセキュリティ、これは大変政治がらみの話になるんですね。

それからこの柏崎刈羽は、2007年の中越大地震の時、バックアップ電源のバッテリーが、今に至るも原因の

わからない火災を起こしてます。その後も火災が起こりましたし、今回も柏崎では小火が起こったそうですね。報道すべきは、本当はこういうことなんでしょう。本当の意味での国家というのがあれば、こういうことを報道し、問題にする人がいるんでしょう。しかし、日本にはいない。つまり国家がないというのです。この国には国家がないというのが、もう明らかですね。こうしたことに一番神経を尖らせて、調査が必要じゃないかという関心を持っているのは、アメリカ大使館です。だから、この国の面倒を見てるのは誰なんだということですよ。我々にどこかの何とか総連とあまり仲がよくありませんので、町を歩いてても、ちょっとヤバいなという時がありますが、日本の国内にはアメリカ系のそういう監視をしている人が、いっぱいいます。その人たちが日本のオピニオンリーダーや知識人の安全確保を含めて、治安を支えているところもあるんですよ。もちろん警視庁公安部、各都道府県、日本の警察は大したものですが、しかし、様々な制約を課されているから完全ではありません。アメリカがなければ、日本国内のセキュリティもどうなるかわからないというところが、日本にはあるんです。こんな怖い国はありません。そういう意味でも、現状では「アメリカなしにはやっていけない」という構造になっているんです。これが日本の真実です。

こういう話はめったにしませんが、今日はどうしてもこのことは言っておかなければと思って話しております。これからは治安の悪化が日本全国で起こるでしょう。いろんな危難に遭うかもしれません。言うなら最後の機会になるかもしれないという思いが頭をかすめたことも真実です。従って、「どこへ行く日本」ということで結論を申し上げれば、我々ができることは、あるいはやるべきことは三つあると思います。非常に大事なことの一つは震災対応でしょう。これは復興・復旧と言ってますが、まずは防災です。防災をやることです。政府は復興構想会議なんていう呑気な会議を作って、一知半解の学者を集めて、何かお遊びの会議のようにやってますね。あれはもう学者のお茶飲み会です。特に経済がわかる専門家が、ほとんど入ってらっしゃらない。経済界の有力な方もいらっしゃらないので、なぜだろうと思いますが、民主党はやはり「マーケットにフレンドリーではない」ということです。いずれにしてもこの人たちは何らかの結論を出すでしょうが、政府としては動けないでしょうね。何しろ財源の問題がありますから。

しかし、二つ目に大きな問題は、やっぱり財政再建です。財政再建は、この大きな震災を迎えてもなお忘れてはならない。国家として本当に大事な問題なんです。財政が崩壊したら、底が抜けます。震災どころの騒ぎではない。大変悲惨なことになります。日本人は先進国を経験したことが初めてですから、先進国が財政崩壊した時の悲惨さをわかっていないと思います。私は、いわゆる大英帝国の崩壊とかイギリス病と言われた時代にイギリスに住んでいましたが、財政が大きく崩壊すると、地方自治体は完全に機能を失います。今回の震災にしたって同じです。ガソリンが届かないので火葬場が動かない、火葬ができないという話は、悲劇的な話として伝えられましたが、当時のイギリスは震災も戦争もないのに、ただ単に財政崩壊だけで、地方自治体の火葬場が動かなくなりました。それでもどんどん棺は積み上がっていきますから、霊場は臭って、犬がワンワン吠えるわけですね。そこまで行くんです、財政崩壊すると。

私の住んでいた町では、若い男はみんな集まれと言って、強制的ボランティアに動員されました。私もどこの誰のかわからない壊れたような車を担いで車に乗せ、100マイルぐらい離れたところにある火葬場へ。一日不眠不休でピストン運転をして運んだ経験があります。街灯は全部消えて、レイプ犯罪が続発します。高速道路はメンテナンスを誰もやりませんので、もうもうたる砂塵を巻き上げて、あんなところを一回走ると、フロントガラスが傷だらけになる。しょっちゅう国道の橋が落ちる、鉄橋が落ちる、トンネルが崩れる。それでもニュースにはなりません。車が走っていて一緒に人が落ちたといったら、ちょこっと小さく記事になるぐらいです。財政崩壊というのは、大震災よりはるかに怖いんです。福祉予算や年金がどんどんカットされていきますから、冬になりますと老人があっちでもこっちでも凍死するんです。これはもう本当に悲惨なことでしたが、そんなことが何年も続く。じりじりと続く。イギリスの場合、10年以上

続きました。私は、こんなことになったら日本人は、外国人が称賛するような秩序立った振る舞いや他人への思いやり、我々の祖先が築いてきた本当に誇るべき国民性を失う可能性すらもあると、今、なんとなく感じます。それほど財政崩壊というのは恐ろしいものです。

しかし、これと合わせてもう一つ、最後に「どこへ行く日本」ということを考えなきゃいけません。三つ目はやっぱり安全保障の問題でしょう。日米関係をどうするかという問題は、突き詰めれば、日本人の憲法に対する態度の問題なんです。日本の自主防衛をどうするか。こちらの方針が決まれば、話は簡単なんですね。沖縄の米軍基地だって、論理的には解決のつく話ですよ。日本の自衛隊が米軍基地に取って代わる。そして日本人の防衛、日本の領土の防衛として、沖縄あるいはこの日本国内で防衛というものを考える。その中で日本とアメリカの関係を今後もフレンドリーに保つためには、どういう工夫が必要かというと、集団的自衛権です。アメリカで震災が起これば、これを行使して、日本の自衛隊が太平洋を越えて助けに行きますよ。こういうことが可能になるような方策に頭を使えばいいだけの話ですね。最大の安全保障の問題は、先ほど関岡先生も、繰り返しお触れになりました。やっぱり歴史的に中国大陸からの大きな圧力の前にさらされている日本が、どう生きていくかという問題ですね。

先ほどの財政の問題も、中国からの大きな風圧の中で日本の50年後、100年後、つまり我々の子供、孫の未来をどう確保するかということです。このことを考えれば、先ほど来、話をして参りました、我々日本人は震災にどう対したかということと二重写しになって答えが出てくると私は思います。それは、我々日本人が戦後おざなりにしてきた日本という国、日本国という国家、あるいは日本民族の生存、そういうギリギリな問題を今後はつねに直視すること以外に、これを突破していく道はありません。結局、今の状態でさえ最後は自衛隊なんですね。自治体は崩壊してますから、自衛隊に全部おっ被せて、遺体を捜してください、瓦礫してくださいと言ってる。こんなことまでみんな自衛隊がやる。これでは国防がおろそかになりますね。やっぱり国家をどうするかなんですね。我々はこういう問題をあまりにも考えなさすぎた。これは当然のツケだと言われてもしょうがないと思います。

震災の直前、アメリカの国務省の日本部長のメアさんという人が、「沖縄はゆすりの名人だ」と、沖縄の人を本当に誹謗した言葉を言いましたね。もし本当だとしたら、あんな不謹慎なことをよく言ったものだと思いますが、しかし、最後にあの人はこう言いました。「日本が憲法を変えるのに反対だ。この憲法があるから、我々は日本の国土をアメリカの国益のために利用できるんだ」と。報道の通りだとしたら、これは本当に正直な言い方です。本当に見上げたものですね。やっぱり国際政治というのは友情より国益なんです。それは非常にはっきりしております。ですが、その中で我々日本人が、我々の心情とどう折り合いをつければいいか。そういう基本思考、根本思考、根本的なものの考え方、これはもう避けて通れないんですよ。それをあのメアさんでさえ、我々に突きつけておられます。それでもピンと来ないのかと言って、地震が来ているわけです。

そして中国。この夏からは、本格的に東シナ海に張り出してくると思います。尖閣の問題も一層激化すると思います。ですから、世界経済の行方も目が離せませんが、「どこへ漂流して行く日本」ということも、実はもうほとんど後がない状態になっているんです。しかしそういう時こそあわてずに、本当に日本人の本領を発揮して、根本に戻って国として民族としてのあるべき姿を論じる時が来たのです。そういう時期がやっと、やっと来たのではないか。あえて言えば本当に大分待ち遠しかったと思います。私はそう感じておりますが、決して奇をてらうのではなく、本当に「いい時代が来たな」と思っております。これが今日の結論でございます。

どうも長い間、ありがとうございました。

パネルディスカッション

進行

山口 秀範 氏

（株式会社寺子屋モデル　代表世話役社長）

株式会社寺子屋モデルでは、英雄・偉人の生き方を通して、正直、勤勉、勇気、責任といった日本人が伝えて来た徳目を学ぶ現代版寺子屋を展開。

パネラー

- 中西輝政氏（京都大学教授）
- 長谷川三千子氏（埼玉大学名誉教授）
- 関岡英之氏（ノンフィクション作家）

【山口】皆さん、改めておはようございます。夕べ懇親会のあと私は、娘婿の叔父さま方、いずれも那覇在住3人にお会いして、夜中まで歓待されまして、「イチャリバチョーデー」を実感いたしました。さて、昨日はとてもいいお天気で、史跡の見学等させていただき、その時に若いガイドさんが、沖縄のこの季節を「うりずん」と呼ぶと教えてくれました。「若い夏」と書い

てうりずん。とてもいい響きです。そこで思い出すのが、皇后陛下のお詠みになった「波なきしこの平（たひ）らぎの礎（いしずゑ）と君らしづもる若夏（うりずん）の島」というお歌です。平成5年に植樹祭で両陛下が、沖縄に行幸なさった時のお歌です。その際に、両陛下は、今日午後から皆さんがいらっしゃる摩文仁の丘で、歴代天皇として初めて慰霊のお参りをなさいましたが、それが18年前のちょうど4月23日なんですね。丁度この貴重な日にシンポジウムを開催します。

それでは先生方のご講演を基にして「どうする日本、どこへ行く日本」を、もう少し深く考えていきたいと思います。昨日からのお話の中で、「どこへ行く日本」と言っても、なかなか行く先がはっきり見えてこない今の日本の現実、それから「どうする」の前に、「どこからこうなってしまったのか」ということで、黒船以来のあるいは戦後の日本の抱える問題も提示されました。また、沖縄の古い歴史を見聞させていただいたことにより、元々私たちの祖先が持っていた素晴らしいものも再認識されました。それらが混在する中から、さあそれではどうしたらいいんだ、どこへ行ったらいいんだという問いが、改めて私たちに突きつけられたように思います。

そこで、限られた時間ではございますが、まずそれぞれの先生方のお話をお聞きになった別の先生から、そのお話についてのご感想やご質問等をお出しいただくところから始めたいと思います。それでは最初に、長谷川先生のご講演をお聞きになった関岡先生からお願いします。

【関岡】余談ですけれども、昔、自民党時代に総理大臣をおやりになった小渕恵三さん、あの方は群馬県の選挙区だったんですね。今は小選挙区になりましたが、当時は中選挙区制で、同じ選挙区から自民党の候補者が複数立候補して、当選することが可能だったわけです。群馬県というのは戦後4人の総理大臣を輩出した県でもあるわけですけれども、小渕さんの選挙区には、実は中曽根さんとか、それから福田康夫さんのお父さんである福田赳夫さんとか、そうそうたる候補者がいて、その時に小渕さんがご自身のことを、まるで2軒の一流レストランの横で開業している屋台のラーメン屋の親父みたいだとおっしゃったんです。これはまさに今の私の心境です。しかし、司会の山口先生からのご指名でもございますので、昨日のお話を踏まえて、長谷川先生に二つ教えていただきたいと思います。

まず一点目です。昭和27年4月28日の主権回復についてのお話をされ、この日を国民の祝日にしようと運動なさっている三人の先生方のお名前も挙げられました。実は、私を拓殖大学に推薦してくださったのが小堀桂一郎先生で、それを受け入れてくださったのが井尻千男先生ですので、大きい声では言えないんですけれども、私も実はあの日を本当に心から祝うことができるのだろうかと、従前感じていたわけです。長谷川先生は一つはそれは沖縄が問題だとおっしゃいました。本当にその通りだと思います。さらにそれを敷衍して言えば、実は首都圏にも米軍基地はたくさんあるわけですね。

私は東京都民なんですけれども、東京都には横田基地がございます。年に1回、市民との交流の日というのがございまして、私はそれに紛れ込んで、横田基地の中に入ったことがあるんですが、本当にもう端から端が見えないぐらいの滑走路ですね。どれぐらいの面積があるんだろうと思って地図で確認したところ、これがすごいんです。よく東京ドーム何個分なんて表現がありますけれども、もし横田基地が東京の都心部にあったら、もちろん皇居が全部入りますし、千代田区も全部入るんじゃないかと思います。横田基地を都心に持って来たら、南が大体皇居の南の端から、北は上野の辺りまで入ってしまう。つまり、かつての江戸城から上野の寛永寺までの江戸城下が、すっぽり入るぐらいの面積を、横田基地は有しているわけなんですよ。

それから東京湾の入口、ペリーが来航した浦和には今、横須賀基地がございますね。そこへも私は市民の交流の日に、市民でもないくせに潜入したことがあります。横須賀は、ご承知の通り旧帝国海軍の本拠地だったところで、明治時代に横須賀鎮守府が設けられました。その横須賀鎮守府があったところが今、在日米軍海軍の司令官のオフィスになっています。横須賀には海上自衛隊の基地もありますが、その横須賀鎮守府があったゆかりの地を含め、中枢の部分はすべて米軍が押さえてまして、海上自衛隊の基地は脇に追いやられております。その近くに無人

島があるんですけれども、その島の中が全部くりぬかれて火薬庫になっているという説明があったんです。その島は横須賀の市街地の目と鼻の先なんですね。もしこの火薬庫で爆発事故か何かあったら、もう横須賀の市街が火の海になってしまうような状況なんですね。

ところが、私も含めて普通の東京都民は、正直言って、東京にある横田基地ですとか、すぐ隣の神奈川県にある横須賀基地のことを日頃意識することはほとんどないわけです。しかし、独立した主権国家でありながら、首都に60年間もこれだけ大規模な外国の基地が存在し続けているというのは、やっぱり異常なことではないかなと思います。私も、もうこれは憲法改正して自主防衛すべきだと考えますが、それが当面、国民の世論からして難しい状況では、やっぱり日米安保を堅持していく以外は選択肢はないだろうと思います。まったく中西先生のお考えと同じです。ですから私は、直ちに日米安保を解消しろとか、アメリカ軍が出ていけばすべての問題が解決するという立場には立たないんですけれども、さはさりながら、やはり基地の問題というのは考えていかなければいけない。それは決して沖縄の方々だけの問題ではなくて、東京都民とか日本人全体の問題であると思うわけですね。

なぜ都民でありながら、横田基地の問題をなかなか我が事として考えられないのか、横須賀基地の問題を身近なこととして考えなくなってしまったのか、そのところが私自身、よくわからないわけです。それはたとえば日本人の精神構造とか、そういったところと関係があるのでしょうか。非常に漠然とした質問なんですけれども、何かご示唆をいただければと思います。

二点目です。長谷川先生に4月7日の産経新聞の「正論」欄に「復興財源の確保に大胆な発想を」ということで、寄稿されております。普段高邁な哲学を論じていらっしゃる長谷川先生が、復興財源のことを真剣に心配され、やっぱりこれはすべての国民が英知を結集して、復旧・復興に取り組まなければいけないと書いていらっしゃるので、拝読して大変びっくりいたしました。さらに先生は昨日、自らネットワークを立ち上げられて、当初手漕ぎボートの状態から、モーターボートの状況になったというお話をされましたが、今日は福岡経済界、沖縄経済界の指導的な立場にある皆さんもおいでですので、何かご支援を仰げるかもしれません。もう少しそのネットワークの内容について教えていただければ、大変幸いだと思います。よろしくお願いいたします。

【長谷川】最初に関岡さんが、ものすごくご自分を謙遜されていましたが、うかがっている私には、恒倪たるものがございました。実は、最初にこのお話を受けた時には、あっ、これはちょうど三色アイスのような程よいバランスの人選だなあとか思っていたんです。どういう意味かと言いますと、関岡先生は本当に今の日本が直面している切実な実際問題を、詳しく掘り下げてご研究してらっしゃる。それから中西先生は、現実と理論の間をつなぐような形で、歴史と政治というものを学問の対象にしていらっしゃる。かく言う私自身は、何かこの世からぽーっと離れたようなところで、最近も「日本語の哲学」という、日本語を見つめるとどういう哲学が浮かんでくるかとか、そういう学問をしております。それで今回は、関岡先生、中西先生と、この世からだんだんに離れていって、私が浮世離れした話をするというような展開になるんだろうなと思っておりました。ところが昨日もお話ししましたように、私自身ががらりと一変してしまいまして、今やこの三色アイスは、中西先生が一番理論的な話を学者として高所大所からなさる。関岡先生がいろいろ具体的な形を理論化して見せてくださる。私自身はむしろ、実際に「どうする日本」だけを一生懸命つついていると、そんな風に逆転してしまったと感じております。

今の関岡さんからのご質問もその辺りにポイントがあるので、この場を借りて簡単に、私自身の考えている構想というものもお話ししたいと思うんですが、それに先立って、山口さんが最初におっしゃった「どうする」の前に「どこから」このような問題が出てきたのかも、併せて眺めてみるような形が必要じゃないかと思います。まず、関岡さんの最初のご質問にありました、日本は本当に主権国家なのかということですが、問題は、日本が主権の概念を本当には理解していないところにあるんじゃないかという気がいたします。我々は主権というものに、元々授けられた正しい権利みたいなイメー

ジを持っているんですが、主権という言葉は西洋語の翻訳語で、最高の力という言葉を日本語に翻訳したものなんですね。ですから力がないと、実はもう即、主権というのはゼロの状態になるわけです。ということは、敗戦後の日本はまさに、主権ゼロというところから出発している。これはもちろん、占領という目に見える形でも主権が奪われてきたわけですけれども、実質的にも敗戦後の日本は完全に武装解除されて、力がゼロの状態にあるという、いわば二重の主権ゼロ国家として歩み始めたわけです。

昭和27年4月28日の主権回復というのも、いわば形式的な主権の回復であって、本当の実質的な意味での力を日本が完全に備えたということでは全くないわけですね。さらに日本は、日本は戦争をする権利を持たない、交戦権はこれを認めないという憲法の条文を持っている。ですから、中西先生のお話の中にもありましたように、日本が憲法をきちんと改正しない限り、日本は自分で主権国家であることを完全に放棄しているということになるわけです。

先ほども、せっかくの自衛隊が、尊いお仕事ではありますけれども、がれきの撤去というようなことに専らかり出されている、そしてこれ幸いと外国の偵察機が飛んでくるというお話がありましたが、これはむしろ、日本が今、攻撃されていなのが不思議なくらいの話だと思うんです。多分、世界史上で眺めたらば、何で今の日本を誰も攻撃しないのと驚くくらいに、実は狙われて当然の時期ですね。ただ幸いにして、この21世紀の世界で、何のエクスキューズもなしにいきなりポカンと攻撃するというのは、さすがに国際世論の反発を招きます。それがかろうじて、いろんな国の手を引きとどめているという、そういう状況であることは確かです。

でも、本当に自衛隊が、自らの存在意義であるところの国防に力を注げないでいるという状況、これは震災に始まったことではなくて、戦後ずっと続いてきた状況の延長であるわけです。実は私自身も、神奈川県とのほとんど県境に東京都民として暮らしてますので、いつも頭の上をジェット機が飛んでいるんですけれども、旅客機なのか戦闘機なのか、あまり区別がつかないで過ごしています。多分、世田谷区の大多数の主婦は私と同じ感覚だと思います。多少は軍事オタクの男の子が上を見上げて、あれはF何とかだ、なんて言ってるんですけれども、本当に米軍のプレゼンスというのは見えない形になってますね。これも実は、戦後日本ずっと続いてきた形で、そもそも占領後、一応は日本の国会を置いた形で間接統治がなされてきましたね。そして日本の政府とアメリカとが一緒になって、アメリカが本当は支配しているということを隠し続けてきました。改めて今関岡さんからお話をうかがって、そんなにすごいんだと私自身も驚き、認識を新たにするぐらい、普通の日本人にとって、米軍の支配というのは見えない格好になっていると思います。

それで、次が「どうする日本」ということで、実はこれが中西先生への私からの質問へとつながっていきます。先ほど、中西先生からちょこっと「どうする」への基本テーマを示していただいたんですが、私自身「うん、その通り」とうなずいてしまったのは、最後に言ってらした「今は本当に良い時期」だというお言葉です。私がそのお言葉を聞いてふっと思い浮かべたのは、折口信夫が昭和18年の國學院の入学式で、新入生たちに語った言葉でした。折口信夫は「只今は国学という学問のためには幸福な時代になっていますが」と語り始め、国学にとって幸せな時は日本が不幸せな時である、でもこの時を過ごしてはならない、これが本当に日本にとってのチャンスなんだという趣旨の話をしています。多分、中西先生は折口信夫のその挨拶を念頭に置きながら最後を締めくくられたのではないかなと思いますけれども、本当に私も、これが日本にとっての幸福な時という風に捉えております。

それから中西先生は、最初に「これを国難なんて言ってはいけない」とおっしゃいました。多分、昨日の私の話を聞いてくださった方は、これは長谷川が黙ってないなあとか、長谷川からきっと大反発があるぞとか思っていらしたと思うんですが、実はこれもある意味では、私も中西先生と同意見です。というのは、この国難は決して東北の大震災で始まったものではない、というのが私の認識だからです。そこで今のご質問の、じゃあお前はどんな工夫を考えているのかということなんですが、少なくとも私が友人と、これ

だけは一つ基本線として守ろう、誰を巻き込むにしても、この基本コンセプトを共有している人だけを交ぜようねと言っていることがあります。それがどういうことかというと、きしあたっては東北地方自体が、既にもう抱えきれないほどの深刻な問題を抱えてきた地域だということなんです。地方分権だの地方主権だの、言葉の上では勇ましいことを言っていても、追いつかないぐらいの大きな問題を抱えている。一つは人口全体が減っている中でも、特に若年層の働く人たちが、もう東北に居着いてくれないという問題です。当然、東北の経済も非常に弱いものになってしまっている。これがずっと続いているわけです。東北はもちろん農業にとって大事な地域ですし、漁業も日本有数の漁港がある。それから機械の部品メーカーも非常にたくさんある。だけれども、東北が全体として盛り立っている時期だったかというと、決してそんなことはないんですね。

それで、まずこれまで東北が抱えてきた問題を、もう一回根本から洗い直してみることにしました。たとえば漁業で言うと、確かに素晴らしい漁港はたくさんあるんだけれども、漁民たちがみんなバラバラに動いていて、乱獲でもって稚魚をどんどん獲ってしまう。巻き網漁船というのが全く規制されずに、ありとあらゆるところに入り込んで稚魚まで獲っていくので、10年か20年先の漁業というものが見えなくなっている。東北の漁業はそんな危機を抱えてきたわけです。ですから、こういう状況を根本から立て直して、本当に漁業が永続的に事業として成り立っていくような漁業プランを作り上げよう、それを復興策にしようじゃないかと、水産業で言えば、そういう風なコンセプトをもって臨もうじゃないかというようなことを、私たちに考えているんです。

これはほんの小さい一例なんですけれども、実は日本経済自体が東北と同様に、非常に深刻な問題を抱えてきました。たとえばリーマンショック。これは本来、震源地はアメリカであって、これこそまさに人災ですね。インチキな不良の債権をうまく細切れにして、上等の肉に混ぜてミンチにして、これは素晴らしいお肉ですよと言って世界中にバラまいてしまった。それが破綻して、日本は多大な迷惑を被った。うんと荒っぽく言うとそういう筋書きであるにもかかわらず、日本が一番深い痛手を負い、景気の低迷に悩み続けてきたところに、この震災が起こっているわけです。ですから実は、日本全体の経済をどう立て直すかというプランなしに復興プランというのはあり得ないわけです。これは同時に復興財源の問題とも結びついてきます。

実は私も、本当ににわか勉強なので、「正論」に書いた時には、復興財源の一つとして、いわゆる政府マネーと言われている政府の貨幣発行権を発動したらどうかという案を提案したんですね。ところが、これはマクロ的に言うと決して悪くない案のようなんですが、実は実行に移すとなると、非常に難しい問題を抱えていることがわかりました。というのは、日銀に政府貨幣を引き受けさせる時に、帳簿のバランスシートの上で日銀がものすごい借金をする格好にしなければならない。そのため、日銀が毎年、多額の利子の支払いという損失を出すことになるんです。記事を書いちゃってから、人に言われて本を読んで、あっ、しまったと頭を抱えているんですが、いずれにしても、この復興財源が大変難しい問題であることに変わりはありません。

先ほど中西先生は、とにかく財源が破綻すると、すごく大変なことになりますよという一般論のお話だけをされたんですが、じゃあ今回の震災の復興、それも私が今申し上げたように、単に壊れたところを直すということではなくて、ここ10年間の日本のぐらつきを立て直すような形の、本当の意味のグランドデザインとしての復興をするための財源をどうしたらいいのか。これが実はまさに今、政府与党も自民党も議論の一番の中心にしているところです。私は個人的には、何で復興財源の問題がもめるかの一つのポイントは、みんなやっぱり復興財源というと、ただ使ってなくなってしまうお金と捉えているからだと思うんです。復興によって逆に儲かっていく。つまり一つの事業を立ち上げるための投資という形では、誰もこれを提案してないんですね。もし、復興プランを一つの投資、ある程度の見通しのある事業プランとして作り上げることができれば、いろんな人たちの財源についての考え方も、大分違ってくるんじゃないかという気がしております。私から中西先生への質問として、その辺りを具体的にどう考えていらっしゃるかを伺いた

いと思います。

最後に少し付け加えますと、中西先生のお話で、もう一つものすごく実感として同感したことがありました。私も今回の東北大震災をもう済んでしまったこととしてセンチメンタルに捉えているような話を聞くと、この人、おめでたいなあという気がするんです。中西先生は地震地質学の素養がおありの上でおっしゃっているんですが、我々みたいに全く何の知識もない人間も、今の東京都民の意識としては、地震が明日来るのか、それとも来月か、1年ぐらい先だとうれしいんだけどなという、そういう日々切迫した関心の中で生きています。ですから、グラッと来ると、ひょっとしてこれはまたプレスリップかなとか、そういう意識で絶えず、ある意味ではびくびくしながら生きております。しかし、もう最近私自身は、うちのあるところは津波は大丈夫だから、一瞬の、べちゃん、で潰れない用心と火事の用心だけして、いざとなったら水と缶詰と、そこら辺にいっぱい生えている草なんかで生き延びようと、そういう覚悟で生きております。東京都民は実は、もう中西先生がおっしゃった通り、次に備えて生きておりますので、あとは政府のほうに備えてもらうだけです。じゃあ、中西先生、お願いいたします。

【山口】「今回の大震災自体は国難ではない」という趣旨のお話しについて、私も実はその大震災があろうとなかろうと、日本のこの60年間抱えてきた問題自体を、むしろ国難と呼ぶべきかと思いながら伺っておりました。そういう意味では、今、長谷川先生が言われたように、震災復興のための財政のみならず、やはり日本を国家として立て直す根本的な財政の問題だろうと思います。国防の問題でもあろうと思います。では、先ほどの補足を、中西先生に少しお願いしたいと思います。

【中西】先ほど時間を大分超過して、人の時間を横取りしておりますので、短く、端的にお答えをさせていただきますが、今、山口さんから補足していただいた通りでございます。私の発言は舌足らずだったと思います。私が今回の震災を国難というのはおかしいんじゃないかと深く思うのは、この国は60年間国難だったからなんですよ。戦後日本というのは国難の国なんですね。それが見えないから、余計国難なんです。津波がどーんと来て、原発がバーンと爆発したのは、見えるから良かった。これはあえて反語で言っておりますけれど、それほど見えないということが、ものすごい難儀なんです。どうしようもない、治しようのない本当の病気、本当の難儀だったわけですね。それが私が、今回のことを国難と言うなと言う理由なんです。この震災を国難と言うのは、明らかに何かの意図に乗せられてしまっている人です。菅さんなんか、あとは復興だ、じゃあ復興財源だ、その話をしないといけないから、次の選挙まで私やります、財政再建までやりますなんて言ってますね。これは一種の悪質な政治家のデマゴギーですね。こんなものに乗ってはいけないです。

大事なことはこういうことだと思います。日本経済最大の問題は、やはり内需というものを非常に軽んじてきたことですね。先ほどの関岡先生のご説明にあった通り、日本と韓国は全然違うわけです。日本は内需大国なんですね。そしてまだまだポテンシャルはあるのに、もう内需の機会はない、国内投資をしてもリターンがない、あるいは利潤率が非常に低くなっている、だから外へ出るんだ、グローバル化時代

という追い風に乗るんだと言っている。ちょっと視野が狭くなり過ぎていたんですね。そうじゃない。日本経済の最大の問題、あえて言えば近代日本の最大の課題は、国内の市場をいかにして豊かで深いものにするかであって、これはいまだに解決していないんです。

今、震災がなぜ起こったかとか、近畿・関西の原発が次はいってしまうぞというデマとか、いろんな話が流れてますけど、実は私にとっての最大のニュースは、そんな今回のことではありません。私事で申し訳ありませんが、最近刊の『歴史通』という雑誌に、徳川家廣さんという方が書かれた記事です。徳川さんは徳川将軍直系の19代目のご子孫に当たられる、世が世ならお殿様ですけれども、大変欧米の事情に詳しい方で、この雑誌に「真珠湾への道」と題して、日本がなぜあの愚かなと言いますか、何であんな勝てない戦争を始めたのかについて書かれています。これは最大の日本人の問いであり、私にとっては決定的な意味を持つ問いです。もう老い先短い私は、あと何年生きるか、どんな研究ができるか、そのことばっかり考えていたんですが、私は震災より何より、徳川家廣さんのこの記事の内容に、稲妻に撃たれたような気がしました。

日本は昭和15年9月に三国同盟を結んで、翌16年12月に真珠湾を攻撃したわけですが、なぜ開戦に至ったかについては、陸軍と海軍の確執とか、山本七平の言う「空気の支配」とか、本当にいろんなことが言われています。空気の支配というのは、日本人はとにかく物事をきっちり決められない、その場の空気に支配されて、上の顔色を伺いながら流れに身をまかせてしまうんだという文化決定論ですけれども、我々にそういう話ばっかりで、愚かだと言われた開戦の歴史を説明してきた。ところが徳川さんは、それを日本への工作だったと言っておられる。昭和16年になってドイツ人工作員がどっと日本に入り込み、陸海軍、大蔵省、財務省、首相官邸、各マスコミ、経済界、全部に対して、日米開戦を一日も早くやれという対日工作を徹底的にやったというんですね。

徳川さんは、そのことを書いたイギリス外務省の資料を、この2月にロンドンに行って発見されたということです。その資料は、ドイツ人を大量に日本に送り込んだのは、実はイギリス情報部であるという証拠なんですね。私の友人にもイギリス情報部で仕事をしているような人がいますし、私も非常によく知ってますので、ああそうか、やりそうだなと、稲妻のような天啓を受けまして、一気に全部のパズルがつながったんです。これを証明するには、あとは検証作業だけです。これが私個人にとっては、震災よりははるかに重大な、3月最大のニュースでございました。大変無責任に聞こえますが、学者というのは世の中よりも自分の頭の中と、こういうものなんですね。

つまり何が言いたいかというと、内需の問題を日本人が考えようとしないのは、要するに誰かが邪魔をしているからではないかということです。日本人は馬鹿じゃないです。本当に理知的で、合理的な判断ができるんですよ。それなのに、あってはならないことが横行する。そういう時には、不自然な力が働いているかもしれないという可能性を、まず検証してみなきゃいけませんね。それをせずに、日本人は空気で動かされる馬鹿民族だというようなことを戦後60年聞かされてきたから、いろんな問題につながってしまったわけです。

馬鹿じゃない日本人がそれなりに行動する時には、それなりの理由がある。私はこの内需の問題は、やっぱり日本という国の経済政策を決めるある部分が、やっぱり日本人をマインドコントロールといいますか、何か日本は輸出しないといけないんだ、輸出だ、輸出だと、そっちへ意図的に話を持っていってるような気がします。過度に輸出依存になれば、国民経済としては危険になるに決まっているんですね。こんなことは学校の教科書にも書いてある。しかし、内需を本当の意味で掘り起こしていくという課題に、いつの時代もおざなりにされて、結局は外需に依存する形になる。戦前はそれが満州だ、いや南方資源地帯だという話になっていったわけですね。

これはいろいろ検討しなければなりませんが、時間の関係上、内需で今、日本が具体的にやるべきことをはっきり申し上げると、サッチャーがやったように、社会保障のカットです。これをやらなければ、この国は絶対に立ち直りません。構造改革というのも、本命は社会保障をカットすることです。これは途中で話がどこかに行ってし

まって、小泉さん以来延々と社会保障というのを聖域にしてきた部分はあります。自分の足で立てというのは一番厳しいところですが、このことに日本の政治が直面できなかったのは、やっぱり政権や代議士の座をめぐる政治家のエゴ、それとマスコミが延々とまき散らした、優しさの哲学みたいなものの影響でしょう。しかし、日本の政治が直面しようとしていない部分に、やっぱり解決策があるんです。社会保障をカットしたら、内需は拡大しますよ。私はそう思いますね。投資の話はまたあとでさせてください。

【山口】誰かが邪魔をしているというお話が印象的でした。ここで、事前に皆さん方から質問票をいただいておりますので、いくつかお答えいただきたいと思います。関岡先生に、「その馬鹿ではないはずの産経新聞、それから朝日新聞が、TPPについて同じ見解になっているというのがなぜなんだろうか」という質問が来ています。

【関岡】これは私もわかりませんね。産経新聞、朝日新聞に一回聞いてみたいとは思うんですけれども、私はいつも名指しで新聞の批判をするものですから、新聞社に友達がいないんですよ。一度、郵政民営化の勉強会の席に、その2社とは別の新聞社の方が来ておられたので、「なぜ新聞は郵政民営化がアメリカの要求だったことを書かないのか」と聞いてみたことがあります。アメリカの要求という話は私の捏造ではなくて、実はアメリカの年次改革要望書という外交文書にはっきり書いてあります。しかもその文書は、別に情報公開法の手続きが必要なものでもないし、秘密文書でも何でもなくて、在日アメリカ大使館のホームページにも日本語で掲載されているんですね。しかし、そのことは新聞は全然報じない。ですから、「郵政民営化を推進している竹中平蔵さんが正義の味方で、抵抗している亀井静香さんとか平沼赳夫さんが、抵抗勢力とか既得権者なんていう図式で、新聞が伝えているのはおかしいじゃないですか」「民営化賛成なのは別にいいけれども、アメリカが民営化を要求しているという一面も、事実として読者に報道すべきじゃないでしょうか」という風に言ったんです。

なぜ郵政民営化をアメリカが推進するかというと、実はアメリカの保険業界が簡保の資金を手に入れたくて、圧力をかけていたからなんです。今、アメリカ系の保険会社が、日本でもテレビや新聞で盛んに広告をやっていますけれども、マスメディアというのは広告収入に依存しているわけですから、そういう意味で、その新聞記者に「これはスポンサータブーの問題ですか」とも聞いてみました。要するに、スポンサーの意向に逆らうような報道ができないからじゃないかということを、チクッと言ってみたわけですね。そしたら、「馬鹿にしないでください。我々新聞記者が、営業の・奴ら・の言いなりになるわけないじゃないですか」とおっしゃったわけです。

つまり、マスコミに就職する方というのは、みんなジャーナリストに憧れて入るわけですから、社内で営業をやっている人間を一段低く見ているんですよね。私は銀行ですっと営業をやってましたから、むかつきまして、「ほう、そうですか。広告収入を気にするのは営業マンだけですか。経営陣はどうなんですか」と言ったら、もう害虫を噛み潰したような顔になって押し黙っちゃって、それきり会話が途切れて、あとでいくらメールを送っても返事が来なくなっちゃった。そういうことをやっているものですから、なかなかマスコミの本音というのは、私にもよくわからないんですね。

それで、中西先生のお話をちょっと引き取って、コメントというかお答えさせていただきます。今のお話は、日本は本当は内需をもっと大事にすべきだっただけど、それをやってこなかったのは、誰かが介在していたのではないかということでした。私はそれと同様の発想で、2004年に『拒否できない日本』という、年次改革要望書を分析した本を出したわけですけれども、そういう考え方というのは、私は中西先生から学んだんですね。

中西先生は2003年に、『国民の文明史』という大著をお出しになっています。これは世界的な水準の文明史だと思うんですけど、その中で戦前の金解禁を巡る経緯を分析されています。浜口雄幸という人が総理大臣をやっていた昭和5年、日本は当時のグローバルスタンダードだった金本位制に移行しました。正確に言うと一旦参加して、それから第一次世界大戦で離脱したのに、また再復帰するという流れだったんですけれども、イギリスがやっていた当時のグローバルスタンダードに、日本もやっぱり従わなければいけな

い、合わせなければいけないということで、金解禁を推し進めたのが浜口政権であり、その時の大蔵大臣だった井上準之助なんですね。ところが、その金解禁を強行した時に、世界はアメリカ発の世界恐慌に見舞われていて、日本だけではなく世界中がデフレの局面だったわけです。にもかかわらず、つまり日本経済の実態を全く無視して金解禁を強行した結果、日本は急速な円高になり、たちまち輸出産業が打撃を受けて、いわゆる昭和恐慌というものを招いてしまったんです。「大学は出たけれど」の就職難、それからまさに

東北の農村地帯では、娘さんを身売りするような事態も起きました。つまり昭和恐慌は、浜口政権と井上準之助という大蔵大臣の明らかな経済失政が招いた結果だったわけです。

それに対して中西先生は、このようにお書きになっています。「日本は国単位の行動、つまり英米のように金輸出の停止に戻って国内経済を立て直し、景気を浮揚させなければならなかったのに、あくまでもグローバリゼーションにこだわり続け、もはや存在しなくなりつつあったボーダーレスエコノミズムに向かってアクセルを全開させてしまった。それが井上準之助による金解禁であり、このブレーキとアクセルの踏み間違いによって、日本はとんでもないことになったのである」。まさにこの分析の通りなんです。城山三郎の『男子の本懐』という小説は、浜口雄幸が主人公になっていて、井上準之助のやった金解禁を肯定的に捉えているんですけど、これは金融業界出身の私からすると、とんでもない間違った前提に立った政策です。大先達を批判するわけじゃないですけど、金本位制をめぐる日本の政策の失敗ということに関しては、中西先生のほうが正しいんですね。

私が言いたいのは、実はそれが平成の時代に再現されている、ということです。小泉・竹中政権がやってきた構造改革は、先ほど中西先生がおっしゃったように、本来やるべき改革ではない。やはり別のグローバルスタンダードに必死に従おうとしてきたわけです。これについても中西先生は、既に2003年の時点で指摘されておりまして、「例の理由もなく外のスタンダードに合わせる。これこそ究極の不合理であり、この10年の日本は、そんなイデオロギーと難難に走った自虐趣味を改革の名の下にやっているわけである」と、このように書いていらっしゃいます。

構造改革というのは、実は小泉さんの専売特許ではなくて、橋本さんの時から始まっています。橋本さんは1997年に「六大改革」というのを打ち出されて、それを継承したのが2001年に発足した小泉政権だったんですが、当時も90年代の前半にバブルが崩壊して、日本はもうデフレの局面にあったわけです。ところが小泉政権は構造改革の名の下に、ひたすら緊縮財政、公共事業の削減、地方交付金の削減といった形で、むしろデフレを促進するような政策をずっとやってきた。こういうデフレの局面であれば、むしろインフレを誘発させるように、まず公共事業を拡大し、政府の財政支出を拡大して、デフレから脱却するのが筋であるはずです。

財政再建ももちろん重要です。財政が破綻した時のイギリスの実例を、先ほども中西先生に語っていただきましたが、私もその通りだと思います。ただし、増税というのはやるべき時期があるわけですね。やっぱりデフレを脱却して、国内の内需、国内経済が再建成ったあとで、増税なりして財政を再建するべきだったと思うんですけど、順序を間違えてしまった。大蔵官僚の言いなりになって、まず財政均衡をさせるべきだ、デフレの局面にもかかわらず、とにかく歳出を削減し、増税だということになってしまった。橋本内閣の時に消費税を大幅に上げたことが、内需の腰を折ったわけですけどね。

今度は復興財源の話になりますが、五百旗頭さんが復興会議の座長になってすぐ、まず復興よりも増税だということをおっしゃいました。どうして防衛の専門家がいきなり増税の話をする

んでしょうか。本当に中西先生がおっしゃったように、復興会議に経済の専門家は一人も入っていません。副議長が建築家の安藤忠夫さんで、あとは3人の知事とか芥川賞作家のお坊さんとか、そういうメンバーでやってるわけですから、これはおそらく大蔵官僚に言われた通り言ってるだけなんですね。やはり復興するためには、政府が有効需要を作り出さなければいけない。今こそ財政支出をしなければいけない時期だという風に、私は思いますね。

そうすると次に、財政再建をどうするんだという話になります。確かに日本は、政府の債務の規模だけ見ますと突出していまして、これは財政危機だという風に言われているわけです。しかし、皆さん方が経営されている会社も、財務諸表というのは必ず複式簿記になっていますよね。右側に貸方、負債があれば、当然反対側の左側の借方には資産があるわけですよね。それは国家財政も全く同じです。右側に国債残高が200兆ぐらいあるわけですけれども、日本の政府は左側に、莫大な金融資産を持ってるわけです。その中の一つが外貨準備で、これが1兆ドルぐらいございます。

日本はずっと外貨準備世界一で、最近中国に抜かれて2位になりました。我々はそれに何の疑問も持たずに、何か良いことのように思ってたわけですけれども、よく考えてみるとおかしいんです。なぜかというと、今、中国、日本に続く外貨準備世界第3位はどこかというと、日本の半分以下のロシアなんですね。そのあとに続くのは韓国とかメキシコで、要するにみんな途上国なんですよ。先進国で外貨準備を80兆円も100兆円も積み上げている国は、一つもありません。外貨準備って、何のためにあるものですか。対外債務を決済するためです。じゃあ日本は対外債務国かと言ったら、日本の外国に対する借金は1円もありません。じゃあ、なぜ外貨準備が必要なのか。外貨準備が必要なのは、要するにたとえば中国、ロシア、メキシコ、韓国といったソフトカレンシーの国なんです。通貨の交換性がない国は外為市場で外貨を購入することができないので、輸出で外貨を稼いで、国家が備蓄しとかなきゃいけないわけです。ところが先進国はハードカレンシーですから、外貨が必要になれば円を売ってドルを買えばいい。別に外貨準備を持っておく必要はありません。それなら何のために持ってきたかというと、これはアメリカの財政赤字を支えるためです。つまり、ここに日本の属国としての構造があるわけですね。

この外貨準備の1兆ドル。これは1ドル100円の頃は100兆円あったんですが、円高で1ドル80円になっちゃったので、80兆円に目減りしてしまいました。為替差損で20兆円も吹っ飛んでしまったわけです。一方で、今回の東日本大震災の被害額は、内閣府の試算では大体16兆から25兆円ぐらいと見積もられています。この数年の間に為替差損で吹っ飛んだ20兆円あれば、少なくとも東日本の壊れたところを直すぐらいの財源にはなったわけです。しかし、目減りしたとは言っても、日本はまだ80兆円も外貨準備を持っているわけですね。80兆円といったら国家予算に匹敵する規模です。その外貨準備の原資は何かというと、1次、政府短期証券です。つまり日本の政府は、実は100兆円の借金をしてドルを買い、アメリカ国債を買って持ってるわけです。しかも何の為替ヘッジもせずに丸裸のまま放っているものですから、円高になればどんどん目減りしてっちゃう。その目減りした20兆円というのが、今回の東日本大震災の被害額に匹敵するという状況なんですね。

ですから、まだ80兆もある外貨準備を半分でも取り崩せば、今回の直接被害で壊れたところを直すというだけではなくて、さきほど長谷川先生がおっしゃったように、東日本を本当に再生する、立て直すための40兆ぐらいの財源になるわけです。外貨準備を取り崩したところで、日本は何一つ困ることはありません。困るのはアメリカです。だから今は、先生方お二人が口を揃えて言われるように、日本にとって本当に良い時期、この10年、20年、日本が当たり前にやってきたことを根本的に見直す良いチャンスなんですね。

今までアメリカは、さんざん贅沢三昧の奢侈生活を送ってきて、自分の財布は空っぽです。自分たちは日本やサウジアラビアから借金をする形で、空前の富を謳歌してきたわけですが、それが極限まで行って破綻したのがリーマンショックですね。それを我々日本が必死になって輸出をして稼いで、稼いだ外貨でアメリカ国債を無条件で買ってあげて、為替ヘッジもせずに持

ち続けて、支えているということです。ところで、一番外貨準備が増えたのは2003年です。この間の統一選挙で島根県知事に再選された溝口善兵衛さんが大蔵省の財務官だった時に、1年間に30兆円の為替介入をやって、米国債を買ったわけです。1年に30兆円ですよ。今回の東日本大震災の被害額よりも大きい金額の借金をしてドルを買い、アメリカ国債を買ったんです。2003年に何があったか。イラク戦争です。イラク戦争の戦費を日本が出したわけですね。その頃、日本は平成の大不況で、失われた10年に苦しみながら、必死でアメリカ人の贅沢を支えていた。一体これは何なのかということですね。

私も本当に、中西先生のおっしゃる通り、日本人は馬鹿民族ではないと思いたいんですけれども、やはり何か大きな思考の呪縛みたいなものに、ずっととらわれてきたんですね。今回のことは、そのことを取っ払う一つのきっかけにしなければいけない。それから、中西先生が2003年の頃から主張されている、間違ったグローバリズムとか、グローバリズムについて行かなければ日本はおしまいだ、日本は取り残されるという誤った観念を、根本から見直さなければいけない。そういう意味で、今は大変に良いタイミングです。これを良い教訓の機会にすべきじゃないかと思います。

【山口】ありがとうございます。少し観点が変わりますが、長谷川先生へのご質問で、「この大震災の問題も、歴史の問題にしても、自分事として捉えなければいけないというお話があったわけですが、そう捉えられない人、なかなか自分事という意識が出てこない人を動かすヒントがありますか」という、面白い問いがあります。今も、日本人にグローバリズムの呪縛にとらわれているというお話でしたが、我々は戦後の日本に生きていることによって無意識のうちに目を曇らされ、我々が本来持っていたのがどんなものか、自分たち自身でよくわからなくなっている、そういうことではないかと思います。ところが、たとえば七ーファー御嶽のような場所に行きますと、日本人本来の心が目を覚ますような気がしますね。また、沖縄の方がとても先祖を大事にされるのは、島津がお坊さんを沖縄に寄越さなかったからだという話も聞きました。それだけ外国の影響は大きいわけです。そこで長谷川先生、その日本人が「どこへ行く日本」を考えるに当って、本来、私たちはどんな日本人だったのかということから出発するのも大事なところかと思うんです。大きな問題になりますが、何かご示唆をお願いします。

【長谷川】私は多分、逆だろうと思うんです。「どこへ行く日本」なんていう、評論家だの学者だのの発想で話をしている限りは、日本人の本当の姿は出てこない。先ほどからお話に出ている、日本人は馬鹿じゃないはずなのに、どうしてこんな風になったのかというこの状況、日本人の意識をどうひっくり返すかが問題なんですね。私は、意識をひっくり返して日本人の真価を引き出すのに一番良いのは、さあ、「これをどうする」、と具体的な実践の場に投げ出すことではないかと思います。たとえば、家が潰れた、隣近所もみんなやられた、手元に残ったのは一艘の船だけであるという時にどうするか。残ったこの一艘の船をどう役立て、どうやって生きていくのか。こういう実際の場に投げ出された時の日本人のあり方というのが、自ずとその答えになっている。日本人が今回の震災に出遭ってどういう態度をとったか、思い返してみてください。海外の災害の映像を見ると、ただ泣き崩れている、ただボーッとしているということが多いけれども、日本人はてきぱき実際的なことをやっていますよね。

厳しい避難所生活の中で、東北の被災者の人たちが気持ちをしっかり奮い立たせ、正気を失わずにいるために何をしているかというと、とにかく必要な手作業をやってますと言うんです。つまり我々日本人というのは、自然に向き合っても人間に向き合っても、実際的に行動することができる民族なんです。実際何事かに直面すると、理性がたちまち本来の働き方をするんです。向き合う対象があんまり大きくなっちゃって、グローバルスタンダードだとか言われると、我々日本人の本来の実際的なところが麻痺しちゃうんですけど、そういう時はそれを全部実際の課題にもう一度引き直してやればいい。

たとえばデフレの時に、我々はどういう商売の仕方をしたらいいのか。内需を拡大しようと掛け声だけかけたら、お金ばっかり膨れ上がって皆が突っ走っちゃったのが、いわゆるバブ

ルですよね。でもあの時もっと実際的に、お金はあるんだから、それをいろんな町で小さく使って皆の財布を膨らませ、またそれを実際的なことにどんどん使っていくようにしていれば、皆がお金持ちになって内需が高まり、税収も増えるという、そういうサイクルにも成り得たはずです。つまり、我々にとって大事なのは「どこへ行く」ではなく、実際に今「どうする」なんです。

私も今回初めて、東北地方のいろんな実際の取り組みというのを聞きましたが、実は知られていないけれども、もう不況の頃からずーっと東北地方の各地ではそういう取り組みが継続されていたんです。そういう風に地に足が着いていると、いろんな謳い文句に騙されません。我々は本当にどろまみれになりながら、いろんなことをしていく民族で、そこいら辺が中国とも韓国とも違うところです。ですから、我々の本来の昔からのあり方を取り戻すには、やっぱり何か実際的なことをして手を汚すこと。それがモノ作りだと思います。そのモノ作りをベースにして、インテリの言っている「TPPだの改革だの聳そうな話を、眉に唾をつけて疑ってかかる。日本全体がそういうマインドになれば、いろんな呪縛もはねのけていけるんじゃないかという気がします。

【山口】ありがとうございます。時間が限られており、残すところあと10分となりました。最後に一言ずつ、まず中西先生、先ほどお話しされなかったところをお願いいたします。

【中西】先ほど言いたかったのは、要するに復興財源の話だったんです。財政再建は大テーマではあるけれども、復興財源の問題は、もう両先生が既にお触れになられた通り、いくらでも財源はあるんですね。かつ、それを言いたくない、手をつけたくない人々がいる。何が彼らをそうさせているかということをしっかり考えていただければ、何が問題か、裏にどういう意味があるのかが簡単にわかるし、それだけじゃなく、今の日本を動かしているのはどういうベクトルのどういう力かがわかります。これがそのまま行ってフリーパスになっちゃうと、日本はひどいことになるぞということを、私は申し上げたかったわけですね。でも、両先生にもうお触れいただきましたから、私のほうからは特にございません。

【岡田】私も特にないんですけれども、財源に関して言えば、日本は決してあわてる必要はありません。先ほど言いましたように、80兆の外貨準備というのは政府が持っている分だけなんです。それ以外にもたとえば銀行とか生損保の保険会社も莫大な米国債を持っています。しかも日本は今、対外債務、外国からの借金は一銭もない。実は過去にはもちろん借金はしてまして、古くは明治時代の鉄道敷設事業、それから日露戦争の戦費、戦後も復興に関しては世界銀行からの借り入れをいたしましたけれども、一度も利払いを遅らせることなく、一度も返済が滞ることなく、きっちり耳を揃えて返してきました。これが今日の日本の国際的な信用につながっているわけです。今は借金がない上に、むしろ1,500兆円と言われている個人資産がある。これが銀行や保険会社、金融機関に回って、それが今、米国債を買い支える、要するにアメリカの財政赤字を支えるという形で使われているわけです。

私はこれを全部やめろと、極論を言うつもりはないんです。やっぱり大切な同盟国ですし、米国が弱体化すれば中国がつけあがって、いろいろ日本に対して行動を起こすことにもなりかねません。今日は尖閣の話がほとんどできませんでしたけれども、そういう脅威に直面する中では、やはりアメリカともきちっと、お互いに支え合っていかなければいけません。しかし、あまりにもアメリカの言いなりになり過ぎではないかとも思います。たとえばアメリカの国債を買って、財政赤字を支えてあげるというのもいいんです。いろんな検証を経た上で、百も承知であえてそれを一つの方法として選択するという形でやってきたならいいんですけれども、多分ほとんどの国民は、そういうことを知らないまま、ごくごく一部の大蔵官僚だけの発想でやってきたわけですね。それがこの80兆という、国家予算を上回るぐらいの外貨準備の規模になってしまっている。だから、まず政府がきちっと国民に対して説明責任を果たすべきです。

中西先生が、学者はどうしても大衆の過剰反応を恐れるあまり、ストレートに物を言わない、情報を正確に開示しないと言われていました。確かにそういう一面もあると理解できます。しかし、もう少し政府の役人は、高い民度を持った日本国民を信頼して、もっといろんなことを説明してほしい。た

とえばアメリカからこんなひどいことを言われているとか、中国からこんな理不尽な要求を突きつけられているということを、もっとオープンに国民に開示して、でもここだけは譲らないようにがんばるとか、ここはやっぱり相手のあることだから、外交交渉上、譲りますよとか、政府の説明責任を果たさないといけない。そうやって国民の合意を形成していけば、危機に直面した時に、日本人はすごく団結すると思います。

利他的な精神の下に、一番困っている人をまず優先させるという、この団結心を持った国民。これは最大の日本の財産、目に見えない宝だと思いますね。ですから、政府はもっと国民を信頼し、国民ももっと官僚や政治家を信頼しないといけないと思うんです。私は過度な官僚バッシングとか政治不信は、結局は日本の総合力というか、日本の国力を削ぐものだと思います。屋山太郎先生のような保守論壇の大御所が、ひたすら官僚バッシングをして、公務員改革さえやれば日本は良くなるみたいな主張を展開されていますが、私はそれには与しません。この危機においては、やはり国民と政治家、あるいは官僚、それから経済界とか文化人が、それこそ英知を結集し、団結しなければいけない。そういうことをやれば、この危機を乗り切って、必ず日本は再生できるし、日本はそれだけの基礎体力も持っていると信じております。

【長谷川】最後に一言だけ申し上げたいと思います。先ほど中西先生が、日本がいかに危ないところに生きているかというお話をされて、お聞きになった皆さんの中には、ちょっと気持ちが暗くなった方もあるかと思うんです。実は脅かすわけじゃありませんけど、沖縄も近くに沖縄トラフというのがあって、決して巨大地震と無縁の土地柄ではないんですね。

でも、私は実はこういう自然災害は、日本というものすごい高級マンションに住んでいるお家賃だという気がしています。つまり世界には乾き切って何もできない土地、寒過ぎて何も生えず、羊に食べさせる草しかない国、本当にいろんな国がある中で、日本列島の自然の恵みは、多分これも世界一だと思うんです。その素晴らしい自然の恵みに我々は感謝しながら生きてきた。100年に一度とか88年に一度とか、支払いを取り立てられる時があるんだけども、だからと言って我々に、この素晴らしい高級マンションに住むのをあきらめるつもりは、全くない。本当に素晴らしい国土に住んでいるからこそ、そういうお家賃を払うんだと、私自身は個人的にそう捉えております。

【山口】あっと言う間に時間が参りました。私は3月11日以降、いろんな方が今回のことについてお書きになっているものを読みましたが、その中で印象的だった話を一つご紹介します。笹幸恵さんという若いノンフィクション作家が、一昨年亡くなられた上坂冬子さんに「戦争が一番大変だった時はどうでしたか」と伺った。すると上坂さんは「気力に満ちた日々だった」とお答えになったそうです。

今、本当に大変な中で、復旧に向けて歩み出そうとしている被災地の我が同胞も、大変さの中に気力に満ちた日々をどこかで実感しておられるんじゃないかなあと、そんなことを想像します。だとすれば、私たちこそがそれに負けず気力に満ちた日々を取り戻して、私たちができることをやらなければいけません。それを改めて知らせてくれたのが、今日、三人の先生方に語っていただいた「どうする日本、どこへ行く日本」だと感じております。つたない進行で、先生方に十分お話頂けなかったかと思いますが、ご清聴下さり感謝します。

感謝の言葉

前沖縄県知事　稲嶺 惠一 氏（株式会社りゅうせき 参与）

本日は九州経済フォーラム創立25周年の記念事業を、わざわざ沖縄で開催していただきました。しかも、石原会長をはじめとする100名以上の九州の経済人の皆様にこの沖縄においていただくという、大変盛大なシンポジウムでございました。心から御礼を申し上げたいと思います。

また、今日のシンポジウムでの諸先生方のお話、パネルディスカッションの内容も大変素晴らしいものでございました。関岡先生、長谷川先生、中西先生、それぞれのお話の中に、一つの答えが見出せたような気がします。日本というのは、しっかりもういっぺん自分たちを見つめ直す。しかも自分たちの足でしっかり立つ。そして、皆が一致して進むことによって、現在の危機を乗り切ることができるんだという、ある意味では大変力強いメッセージをいただいたと感じております。

私は沖縄県知事の在任中も非常に気になっておりましたが、日本というのは、危機管理というものに対する感覚が非常に弱い国じゃないかと思っておりまして、そのことを常に沖縄サイドから訴えて参りました。基地問題が沖縄だけにあるのではありませんが、非常にウェイトが高いというのもその現れですし、尖閣の問題も同じで、もう右往左往しております。また北方領土の問題も同様であります。さらに今回の震災の時も、対応を見ますとそうです。特に原発の問題のあとの対応を見ると、如実に危機管理に対する感覚の弱さがわかります。すべて安全とか自然とかいうものは、天から与えられたものであり、ただであると、非常に何か安易に考えていたんじゃないか。その意味では、大変大きな考えるべき問題というのが、この大震災に際して、きっちりと出て来たという風に感じております。

しかし、その解決方法については、もういっぺんしっかり考え直す必要があります。今日のお話では、日本人はそもそも、世界の他民族にはまったくないような、お互いを助け合う素晴らしい資質を持っているということ、また同時に、それを見つめ直し、自分たちが中心になって考え、自信を持つことによって、いろんな問題がカバーできるんだと、大変素晴らしいご示唆をいただいたと思っております。

沖縄も今後、非常に難しい局面を迎えるわけでございます。防衛の問題に関連して、先ほど憲法の話も出ていましたけれども、この平和というのはただではありません。しかも、それを沖縄という一つの地域だけの問題として置いておくのではなく、日本全体でどのように考えていくのか、日本全体でどう負担すべきかという問題は、まだ難問として残っております。いずれにしましても沖縄にとりましては、県益と国益とが合致した方向の中で、どのように進んでいくかということが大きな課題だという風に思っております。

このシンポジウムは大変素晴らしい内容をもって、無事に終わりました。九州経済界の皆様がますます今後発展されんこと、併せて大地震の被災者の皆様が一日も早く回復されて、素晴らしい日本が復活することを祈念して、私の挨拶といたします。ありがとうございました。

閉会挨拶

九州経済フォーラム 理事長 小早川 明徳 氏（福岡県中小企業経営者協会連合会会長）

まず、本日大変お忙しいところご出席をいただきました先生方、そして沖縄の皆様、そして九州から駆けつけていただきました経済界の皆様方に、心から改めて御礼申し上げたいと思います。

実は5年前に、九州経済フォーラムの20周年記念事業を沖縄において実施いたしました。その時も本質的なテーマとしては今回と一緒であったわけですが、私どもがその準備にとりかかりまして、それが終わるまで、沖縄の経済界のリーダーの皆様方に接して大変感激し、深く感動いたしました。私は、皆様方の思想性の確かさ、そして人間性の高さというものに、心がうち震えるのを覚えながら、前回の20周年事業をやらせていただいたわけです。

それから5年、創立25周年という節目になり、再びこの地を記念事業の最初のスタートとさせていただくことにいたしました。今、日本ではいろいろ大変な困難が起きておりますが、その困難の課題である根本的な問題というものは、この九州、そして沖縄に集約されているような気がしたからです。そこで、沖縄から日本を考えよう、沖縄で日本の再建を図ろうということに決めさせていただいたわけでございます。

直接の原因となりましたのは、あの先日の尖閣諸島における中国船の船長の恣意的な衝突事件でありました。その問題に対する国の対応の仕方、これに対して石垣の漁民の皆様方が声を上げられました。こういう状態では、尖閣沖において漁をすることができない、安心して漁をする状況にはないということで、声を上げられたわけでございます。それに石垣市が呼応し、沖縄県が呼応して、そして都道府県・政令指定都市のうち41議会におきまして、その政府の対応、あるいは中国のやり方に対する抗議、そして決議文が採択されたわけでございます。

その時に、私が大変残念に思ったことがございます。漁民というのは、いわゆる漁をして業をなすわけですが、その漁業というのは農業と一緒で、我が国の産業を支える大変大事なポジションであります。その我々の仲間の叫びというものを、全国の経団連をはじめとする経済界が、何一つ取り上げ、支援しようとしなかったということに、私は大変大きな失望を感じましたし、経済界としての無力を感じました。私はこの国の経済界の指導者に、大義とか正義がなくなったのかということを思いました。その道、いわゆる筋道を通すには、忍ぶとか耐える、あるいはやせ我慢をするといったことが、当然あることでございますが、それすら今の指導者にできないのであれば、これは我々が立ち上がって、その正義を取り戻さねばいけない、道義を取り戻さねばいけないということを、私は強く感じたわけでございます。そういう意味において、この「どうする日本、どこへ行く日本」というテーマを採択して、今回の開催の運びとなったわけでございます。

私はそういう中で、昨日、ご講義をいただいた長谷川先生のご講演を拝聴

して、その原因とも言うべき戦後の日本の政治腐敗の始まりを、改めて認識させられました。占領下における押し付けられた憲法、そして講和条約締結時における主権回復対策のあいまいさ。これが今の、いわゆる我が国の精神史の衰退の始まりであったということに、改めて気づかされたわけでございます。心の在りようが形というものを表す。その結果が我が国の混迷する現状となっているということであると思っております。

現況、教育、領土、防衛、あるいは食料、すべてにおいて独立国家としての原理原則が貫かれていない。この原理原則を日本の指導者が貫くことができたら、今の日本の混乱はなかったのではないか。その原因が、あの講和条約時における、占領下の日本のその後の対応のあいまいさが、今の日本を作っているという非常に厳しい現実を、昨日、今日で突きつけられたわけでございます。関岡先生の、TPPの問題を念頭においての、すべての判断の中心軸を明らかにせよとの叫びが、私には聞こえて参りました。中西先生は、非常時における指導者の、国民の覚悟を求められました。国際政治は、国益を中心として展開されると喝破されたわけでございます。

今の日本を動かしている得体の知れない意思、その呪縛を克服せよということが、このシンポジウムの結論であっただろうと思います。そのために我々に残された道は、実践し行動することであるということであります。私は今回のこのシンポジウムが、新しい日本の国づくりの第一歩となりますことを、心から祈念を申し上げまして、閉会の挨拶にさせていただきたいと思います。

本当にありがとうございました。

慰霊参拝

解散式

九州経済フォーラム 会長　石原 進 氏
（九州旅客鉄道株式会社　代表取締役会長）

皆さんお疲れ様でした。石原でございます。この震災がチャンスだというお話もありましたけれども、そのチャンスを逃さないように、我々が今回いろいろ感じたことを、できるだけいろんなところで実行に移していただけたら大変いいんじゃないかなと思っています。大変良い25周年記念事業のスタートであったと思います。全理事、大変ありがとうございました。本当に感謝申し上げて、ご挨拶といたします。本当にありがとうございました。

熊本開催

KUMAMOTO

九州経済フォーラム創立25周年記念シンポジウムin熊本

次第（平成23年8月4日（木））

15:20 ■九州経済フォーラム創立25周年熊本記念事業
- 開会挨拶　九州経済フォーラム会長　石原 進 氏
- 歓迎挨拶　阿蘇市市長　佐藤 義興 氏

15:30 ■記念勉強会
- 講師　株式会社肥後銀行取締役頭取　甲斐 隆博 氏
- テーマ「当行における環境保全活動 -再発見・再設計によるCSR」

17:15 ■パネル展示見学会

18:45 ■交流懇談会（グランヴィリオホール）
- 開会挨拶　九州経済フォーラム副会長　矢頭 美世子 氏
- 歓迎挨拶　熊本県知事　蒲島 郁夫 氏

19:00
- 乾杯　熊本経済同友会副代表幹事　東光石油株式会社代表取締役会長　石原 靖也 氏

（ご歓談）

19:30
- 郷土芸能　寅舞

（ご歓談）

20:20
- 閉会挨拶　九州経済フォーラム常任理事　小辻 智之 氏

20:30 閉会

次第（平成23年8月5日（金））

7:30 ■記念シンポジウム（グランヴィリオホール）
- 開会挨拶　九州経済フォーラム副会長　甲斐 隆博 氏

7:40 ○基調講演
- 講師　NPO法人 森は海の恋人代表　畠山 重篤 氏
- テーマ「森・里・海の連環 －林業と漁業の同時再生目指して」
- お礼の言葉　九州経済フォーラム理事　濱崎 靖邦 氏

9:10 ○パネルディスカッション
- 進行役　京都大学名誉教授、農学博士　田中 克 氏
- パネラー　NPO法人森は海の恋人代表　畠山 重篤 氏
  積水ハウス㈱ 設計部 大阪設計室課長　畑 明宏 氏
  小さな世界学校代表　小関 哲 氏

11:50
- 閉会挨拶　九州経済フォーラム理事長　小早川 明徳 氏

12:00 閉会

記念文化勉強会

開会挨拶

九州経済フォーラム 会長 石原 進 氏
（九州旅客鉄道株式会社 代表取締役会長）

皆さん、こんにちは。九州経済フォーラムの会長をしております石原でございます。本日は300名もの方々にご参加いただきまして、この会場もいっぱいでございます。熊本から150名、それ以外の九州各地から150名ご参加頂き、本当にご参加ありがとうございます。

本日は、九州経済フォーラム創立25周年事業の2回目でございます。最初は4月に沖縄へ参りました。ちょうど東日本大震災の直後で、復旧・復興に向けてさまざまなことが議論されている中、たまたま沖縄事業のテーマが「どうする日本、どこへ行く日本」でした。震災を予想したわけではございませんが、日本は今、難しい課題を抱えています。人口に減り、経済に落ち、国に多くの借金を抱えているものの、社会保障の問題は先延ばしにされています。中国が急激に成長遂げたことでアメリカの影響力が相対的に落ちてきている。安全保障の問題もある。日本は本当にいろんな課題を抱えているわけであります。

そういった課題がある中で、沖縄のシンポジウムは「どうする日本、どこへ行く日本」という題にしたわけですが、そこに東日本大震災が発生してしまいました。中西輝政さんや長谷川三千子さんなど、現在を代表する思想家の先生方に来ていただいて、我々自身がこの日本の問題点を認識し、これからどう行動するのかということを議論したわけでございます。本当に今の日本を考えると、我々は一刻の猶予もない、非常に危険なところにいるのではないかと感じます。我々は自分自身の利害を捨て、国家のため、世のため、人のために頑張るということをしていかなければならない時ではないかと思っているわけでございます。

そういった中でもう一つ、21世紀は国が「環境の世紀」と謳っています。同時に「水の世紀」とも言われているわけで、日本、特に熊本県は、その素晴らしい「環境」と「水」を両方、兼ね備えているわけです。ただ、こういったものも、何もしないままでは、きちっと次代に受け継ぐことができません。現代の我々が一生懸命努力をしながら、こういった自然、あるいは素晴らしい緑、水といったものを維持し、保全していかなければなりません。

今回の熊本での事業は、肥後銀行の甲斐頭取に大変お世話になっております。肥後銀行はこの問題について、この阿蘇で大変な立派な活動をされています。CSRとして取り組まれているようですが、これは同時に甲斐頭取の思いが入っている活動なのではないか思います。先ほど、肥後銀行が実践されている「水掛の棚田」というところに、全員で行って参りました。地域の皆様方が大変歓迎してくださいまして、奥様方の手作りのお料理も、素晴らしいきれいな水が流れている林の中で、おいしくいただきました。稲もすくすくと大きく伸びておりました。今年が初めての米づくりだそうでございますけれども、秋が楽しみです。

本日は、畠山先生、田中先生、それから畑さん、小関さんにもおいでいただきまして、先ほどの肥後銀行の棚田もご一緒していただきました。明日はこの4人の方に、いろいろご指導、ご議論をいただくことにしております。

そして、記念事業の3回目は9月末に台湾へ参ります。九州経済フォーラムというのは、九州の各地で皆さんと何かを協力して、九州全体を盛り上げていこうではないかということで発足いたしました。しかし、九州全体を盛り上げるには、もう九州7県だけでは足りない、今の時代、アジアと一緒にやらなければ意味がないということは明らかです。そこで、台湾に行ってみようじゃないかということになったわけです。

台湾は非常に親日の国です。現在、準備を進めておりまして、台湾版経団連である工商協進會元会長の黄茂雄さん、それから現在の副首相でいらっしゃる江丙坤さん、どちらも非常に親日の方でいらっしゃいますが、そのお二人に出演をお願いしました。同時に現地における段取りもお願いしました。台湾側は財界人中心に100名が来てくださいます。日本からも九州を中心に100名の人が行きます。台湾で講演を聞き、親しく語り合い、食事をする中で、この人は立派な人だな、とお互いに思ったら、そこからビジネスマッチングが出来上がるのではないかなと期待しております。また、対中国を考えた場合、台湾、韓国、香港、シンガポールといった地域は非常に大事な地域でございますが、まずは台湾をやってみようということで、とりかかったわけでございます。

記念事業は4回目が最後でございまして、年内に福岡で全体のとりまとめをいたします。そこで我々のやるべきことを改めて確認し、決意を新たに皆様で取り組んでいきたいと思っております。

今日は、阿蘇市の佐藤市長にもお越し頂きました。この後、ご挨拶をいただきますけれども、本当に今日は素晴らしい天気の中、素晴らしいこの阿蘇の地でこういった会を開催できましたことを心から感謝いたしますとともに、佐藤市長にもお礼を申し上げたいと思います。

この会が、素晴らしい、実りある会になりますことをお祈り申し上げまして、私の開会のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

歓迎挨拶

阿蘇市 市長 佐藤 義興 氏

Ladies and gentlemen、ようこそ私どもの阿蘇においでいただきました。Welcome to Aso city！ 今日は本当に夏日和の素晴らしい天気になっております。緑の草原が皆さん方にウェルカム、そんな気持ちで、心をいっぱい開いてお迎え申し上げました。

阿蘇といえば、皆さん方がまだ小さくてかわいい時、お父さん・お母さんに連れられて来られたことがあるのではと思います。一本立ちをして、友達と一緒に阿蘇にお見えになられたこともあると思います。また、ちょうど成人になったころ、大好きな人と一緒にドライブをしながら、あるいはJR九州の鉄道を使いながら、二人でこの阿蘇に来られた思い出がある場所ではないかとも思っています。それから結婚して、子供を授かって、自分の幼い頃と同じように、子供と一緒にまたこの阿蘇に来られたこともあるでしょう。そんな素晴らしい阿蘇であります。この阿蘇は、決して熊本に住んでいる人だけのものではない。九州のすべての皆さん方、ひいては日本の皆さん方にとっての大事なやすらぎと、そして明日からの勇気を与えてくれる場所です。私はそんなふうに思っております。

私たち阿蘇の方では、今、素晴らしい地形と地質を活かしながら環境の保全をし、そして利用していこうということで、世界ジオパークの認定を目指しております。そしてその先には、最近認められた中尊寺のように、世界文化遺産にぜひとも登録していただきたい。そんな思いで活動に取り組んでいます。そんな私たちの思いは、今、たくさんの人に支えられています。特にこれから講演をされる甲斐頭取におかれましては、熊本県知事をはじめ九州電力の松尾会長さんもお入りになっている「阿蘇草原再生千年委員会」を開いていただいております。千年続いてきた阿蘇の草原をしっかりと守っていこう、そのことがすべての人に対して幸せを与えてくれる。この自然と豊かな水を与えてくれる阿蘇の草原と自然は、とにかく何ものにも代え難いものであるということであります。

記念勉強会

講師

株式会社肥後銀行 取締役頭取

甲斐 隆博 氏

テーマ

「当行における環境保全活動～再発見・再設計によるCSR」

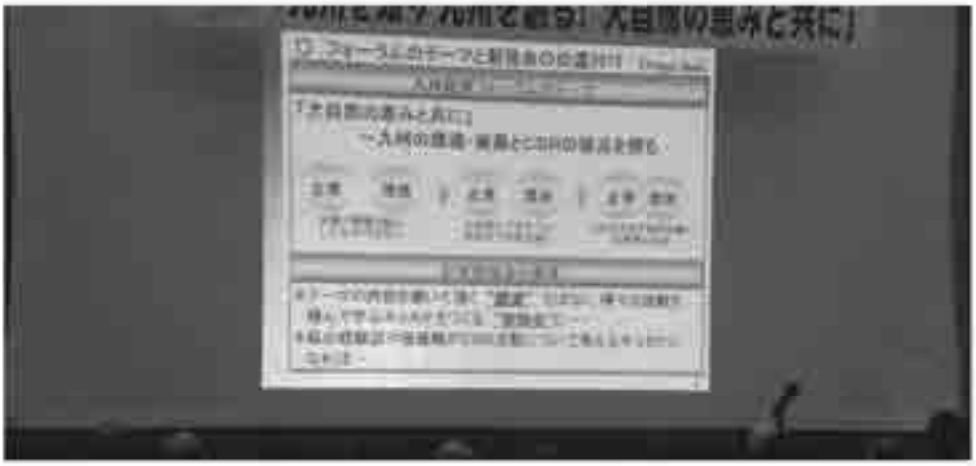
皆様、こんにちは。肥後銀行の甲斐でございます。私はまた、この九州経済フォーラムの副会長も仰せつかっております。この九州経済フォーラム25周年の記念シンポジウムにたくさんおいでいただきまして、ありがとうございます。私からもお礼を申し上げます。

本日の私の話は、「当行における環境保全活動」で、「再発見・再設計によるCSR」というサブテーマを設けております。ですから、今日のテーマはCSR、企業の社会的責任と、それをどう環境に向かって発揮していくのかという内容に絞られるかと思います。

このフォーラムのテーマと勉強会の位置づけでございますが、九州経済フォーラム全体のテーマが「大地の恵みと共に」であり、サブタイトルで「九州の環境資源とCSRの接点を探る」と位置付けています。CSRというのは、何も環境に対してだけ社会的責任を持とうということではありません。いろいろな社会的責任の持ち方があるわけでございますが、その社会的責任が目指すところは、持続可能な社会づくりであります。ですから、企業と環境との関係において、どのような持続可能性を探っていくのかということがポイントになろうかと思います。

そして、環境資源とCSRの「接点」というのは、企業と環境は決して独立した存在ではないということであります。環境の中に企業があり、企業は環境とともに存在するといった関係でありますが、企業と環境を結びつけて考えるという認識が広く浸透するのは、まだまだこれからだと思われます。ですから、企業は大自然とどのように向き合い、考えていったら良いのかを探っていこうというのが、このフォーラム全体のテーマであります。ただ単に考えるのではなくて、考え抜くわけです。大自然とどのような接し方があるのかは、企業さんそれぞれの業種や担当分野によって切り口が変わってくると思いますけれども、その切り口をどのように設定し、自然界と共存していこうかということを思い浮かべていただければと思います。

それと、記念勉強会とさせていただいておりますのは、私がこのテーマでお話しする内容を聞いていただくだけの講演ではないということであります。今後、皆様がさまざまな経験を積んで、学ぶきっかけを作る勉強会にしたい。



勉強ですから、必ず将来に対して、何らかの形でアウトプットをしていく必要があるという問題意識を持っていただきたい。私の経験内の価値観が、そのCSR活動について考えるきっかけになればと思って、お話しする次第であります。ですから、私の今日の立場は、いわゆる講演者ではなくて、語り手（問題提起者）というようにご理解いただければと思います。

今日の私のお話の要約でございますが、テーマが「当行における環境保全活動」、サブタイトルとして「再発見・再設計によるCSR」です。前半の「当行における環境保全活動」ですが、私ども銀行の社会的責任というのは、何も環境だけではありません。最大の社会的責任は、本業をしっかり全うすることです。それ以外に、雇用関係であるとか、あるいは地域との協調であるとか、様々な社会的責任がございますが、その中で環境についてのターゲットは水に絞っております。それも地下水という熊本特有の水をいかに保全していくかということを中心に、水の保全活動に絞り込んでおります。

その地下水を保全するための活動分野といたしまして、森林・水田・草原の3分野を設定いたしました。それぞれの分野において、それぞれの活動の歴史がございます。森林については、もう既に5年以上たっております。水田については今年から活動しております。草原につきましても今年からでありますが、もう既に、「阿蘇草原再生協議会」という立派な組織ができておりますので、その組織を通じて活動していこうという考え方で、間接的にまだ取り組みを始めたばかりでございます。

各分野の実践活動というのは、森林については植樹活動です。水田については耕作放棄地を再生し、田植えを自分たちでやっていこう、稲刈りも自分たちでやっていこう、稲作作業を自分たちでやっていこうという実践活動を行っています。草原については、草原を刈り取るための資金と、その仕事をするボランティアを募集するための資金が不足しております。また、草原を守るには畜産の振興も必要ですが、残念ながら今は余裕がありませんので、これに関しては直接的な活動をしておりません。ですから、草原の問題については、その資金についてご支援させていただこうと、活動資金を寄付しております。以上のように、私どもの環境保全活動というのは、地下水涵養力を高める自然装置の維持政策という観点で、その活動全体を取りまとめているわけでございます。

次に、サブテーマの「再発見・再設計によるCSR」でございますが、これは時代とともに社会的責任の内容、あるいは程度が変わってくることから、サブテーマに掲げました。外的要因として、その時代の変化、社会的問題意識の変化に影響を受けるものであります。また、内的要因といたしまして、具体的活動の実現レベルによってそのあり方を変えていかなければ、マンネリ化してしまいます。結果として、責任遂行がずっと低迷してしまうといったような構図になります。ですから、「変わる」、「変える」という問題意識は、CSRを実践するにあたっても、非常に重要であります。

その問題意識を現実的行動にしていくためには、「企業の責任である組織対応可能な組織設計」をきちんとやっていくことが大事だということになります。これはどういうことかと申しますと、企業ですから個人ではありません。複数の人間がいて、それぞれいろんな機能を持って仕事を担当しているわけです。その組織の機能を、社会的責任を遂行するにおいても、きちんとした形で組織設計して対応していくことが必要という問題意識です。

私どもの場合は、銀行という組織内

の目的別組織とインフォーマル組織との連携によって活動しております。インフォーマル組織とは、組織外の組織、あるいは組織内のインフォーマルな組織という意味であります。今日、水街の棚田をご覧になった方は理解されたかと思いますが、我々の植樹活動をした後の食事は、地元の婦人会の方々にボランティアでお世話していただいています。これはインフォーマルな組織と連携ができているから、ああいう形になるわけであります。

次に、責任は成果を伴うものでなければなりません。逆に言うと、成果がなければ、それは責任を遂行していないという考え方です。ですから、可能な限り測定可能な状態を作るということが必要だと思います。そのためには、自然が相手ですから、どうしても自然科学的視点が必要です。科学的背景を持ちませんと、その活動の持続性というものが維持できないわけです。しかし、たとえばどの程度の水の量が涵養できるのかという量的な測定は、これは我々素人ではできませんので、大学で専門の研究をしておられる先生方のご協力を得て、実際に測定してもらわないといけません。これは科学ですから、実証性がなければならないということであります。

それから、我々は営利あるいは生産を目的とした企業でありますので、企業である以上、経済的価値へつながる工夫が必要であります。そういう問題意識を持って、この環境保全活動を進めているという趣旨のお話もさせていただきます。それでは、今、申し上げたような内容で1時間半、お話をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、3月11日に起きました東日本大震災では、本当に大勢の方々が亡くなられ、そして大変大勢の方々がまだ避難生活をされています。亡くなられた方々に対してお悔やみを申し上げますとともに、まだ避難生活をされている方々には、心からお見舞い申し上げたいと思います。また実際に励ましに行きたいとも思っておりますが、今日のお話は、東日本大震災から何を学んだかということから始めさせていただきます。私は、この東日本大震災を、自然災害と原発事故という二つの側面がある複合連鎖災害であると認識しております。最初にマグニチュード9.0の巨大地震が発生いたしました。その巨大地震が、巨大な津波を作りました。そして、この巨大な地震と巨大な津波によって、福島の原子力発電所が大きな被害を受けました。その結果、放射性物質が漏洩し、30kmに及ぶ避難命令が出ているわけであります。

この一連の災害の特徴を一言で申し上げますと、それぞれの災害のキーポイントに水が存在するということです。津波は海水でございます。原子力発電所の事故は、冷却水不足が原因であります。また、原子力発電というのは、基本的に核分裂によってできた熱を利用して水を水蒸気に変え、その蒸気を送り込んで、タービンを回して発電します。原子力発電そのものが水を使っているわけです。冷やすのも水ですし、温められてエネルギーになるのも水であります。ですから、水が化学反応を起こして液体から気体になる、水蒸気になるという性質も、実はこの原発事故の背景にあります。

水は我々人間に、多大な恩恵をもたらしてくれますが、これが一旦、目常以上の状態になりますと、大変な脅威となります。食糧と生活の恩恵をもたらしてくれた海が、海水の異常活動という津波によって、大きな災害を引き起こしました。冷却水のおかげで安全な電気の恩恵を受けていた我々が、冷却水の供給機能不全により節電を強いられている。あるいは、今後の電力供給に関して、黄色マークがついてしまっているというような状態であります。元々、私は水に関して非常な"思い"を持っておりますが、この事故を通じて、水に対する畏敬の念を一層強めたわけであります。

それともう一つ、地震に関係して、千葉県の浦安地区が液状化現象を起こしました。これも水が関係しております。砂地盤の中に含まれる水は、砂の粒の結合体によって閉じ込められていました。その結合が地震の揺れによって解けました。解けた結果として水が上がってきました。それが液状化となって表に出てきて、あるいは地盤をゆるめて、被害になっているわけです。ですから、東日本大震災に直接的に大きな被害をもたらしたのは水である。私はそのような認識でおります。

先ほど申し上げましたように、社会的責任というのは、持続可能な社会づくりが目指すところであります。今後、持続可能な社会づくりに向けて、津波、

原子力発電、液状化現象、この三つの領域の分野の研究、あるいは対応が極めて重要な問題になっていくと思います。

3月11日、私は営業店を回っておりました。秘書から、地震で大変な災害が出たとテレビで放送していますという電話が入りまして、テレビを見ました。そのテレビの津波の映像で、本当に凄まじいほどの水の勢いを目にしたわけであります。そして、そのテレビ画面を見ながら思い出したのが、黒田如水の「水五則」でした。黒田如水は、あの豊臣秀吉の軍師だった黒田官兵衛です。如水はその晩年の号です。「水五則」を紹ませていただきます。

一、自ら活動して他を動かしむるは水なり

一、常に己の進路を求めて止まざるは水なり

一、障害にあい激しくその勢力を百倍し得るは水なり

津波が押し寄せて、内陸の奥深くに入り込んでいく様を見ておりまして、まさに五則のこの三つを感じた次第であります。

一、自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るるの量あるは水なり

これはまさに、今の福島原発の冷却水の状態を表していると思います。

一、洋々として大海を充たし発しては蒸気となり雲となり雨となり雪と変じ霧と化し凍っては玲瓏たる鏡となりしかもその性を失わざるは水なり

放射性物質を含有した冷却水が、水の七変化の中の蒸気となり、それが水蒸気爆発によって拡散し、今のような状態となっているのであります。本当に水というものは大変なものです。私は、水に関する研究が、まだまだ十分ではないと思っています。

それから、曹洞宗の開祖である道元禅師も、『正法眼蔵』で「一切衆生悉有現成」というようなことをおっしゃっています。これは、仏法の真理を著したものですが、すべての存在は水そのものであるという意味であります。実は、先ほど紹介しました黒田如水の「水五則」につきましても、曹洞宗の総本山である永平寺に「水五則」というのがございます。この「水五則」がほぼ「水五則」と同じような表現だそうです。ですから、おそらく如水の「水五則」も、道元禅師の教えである曹洞宗から出てきていると思います。

また、人間の体は60％以上が水でできていると言われております。先ほど佐藤市長が、私のために皆さん方が寝ないように、睡魔に襲われないようにというようなことをおっしゃって、激励していただきましたが、私は皆様の60％以上を占める体内の水に向かって、これからお話をさせていただきます。眠気が来るのは脳ですから、どうぞ水で聞いてください。

次に「我々を取り巻く水資源環境」についてお話をさせていただきます。まず、「熊本の地下水供給のメカニズム」について話をいたしますが、その中でいろいろな図やデータや資料で説明します。これらは、大学や行政の研究によって、あるいは調査・分析によって出てきたもので、こちらでそれらを総合しております。ですから、一枚一枚についてはお断り申し上げませんが、まずその点をご承知願きください。随分と研究が進んできています。そして、様々な方にまだ教えられております。私は、その教えられたことをお話しするだけですので、ちょっと生意気な物の言い方になるかもしれませんが、ご勘弁いただきたいと思います。

熊本には、"九州の水瓶"と呼ばれている「阿蘇」と「人吉盆地」がございます。人吉盆地からは、球磨川が八代平野に向かって流れております。そして、

"九州の水瓶"と言われている阿蘇からは、福岡県に向かって筑後川が流れ出しております。この筑後川の源流が黒川、あの黒川温泉の黒川でござ

います。それから大分に向かって大野川が、宮崎に向かって五ヶ瀬川が、それぞれ流れております。熊本県内においては、菊池川が玉名の方に向かって、そして熊本平野に緑川と白川の2本が流れています。つまり、全部で6本の一級河川の源流が阿蘇にあるわけでございます。そういう意味で、阿蘇は九州の水瓶と言われております。

次に、熊本県の年間降水量をご覧になっていただきますと、阿蘇がやはり、圧倒的に多いわけですね。高いところにたくさん雨が降ってくれる。それが低いところに向かって流れてきてくれるという、この自然のメカニズムが水の供給の基本であります。もし阿蘇の雨が、たとえば半分だったとするなら、我々がこれだけ豊かな水を熊本平野で享受することは、おそらくできないでしょう。このようなメカニズムは、人吉も同じです。やはり山に雨が降ります。これは自然が作ってきてくれた、非常にありがたい恩恵であります。

そして、熊本県内には、八つの地下水盆が存在いたします。ご覧のように北部、南部、それぞれに、全部で八つ分布しておりますが、特に今日、お話し申し上げます熊本地域の地下水盆の上には、全体で100万人の人たちが生活をしております。これらの地下水盆を全部入れますと、熊本県の人口の約8割の方が、地下水盆の上で生活していることになります。ですから、熊本の水の供給というのは、ダムや河川からの取水に頼っていないというのが、非常に大きな特徴であります。

そして、それだけ地下水盆がございますので、数多くの湧水が分布しています。熊本県全体で、湧水は609カ所。そして小さな湧水の集合体である滝が223カ所。これだけあります。本当に小さいところまで調査すると、湧水は1000カ所だという学者の方もいらっしゃいますが、非常に恵まれております。そしてまた、その水質についても、環境省が選定した「昭和の名水百選」に菊池、池山、白川、轟の4カ所の水源が、「平成の名水百選」に水前寺江津湖、金峰山、南阿蘇村、六嘉浮島の4つの湧水群が指定されています。全国でも8カ所の指定を受けている県は、富山県と熊本県の2県だけでございます。そういう意味において非常に恵まれたあるいはきれいな水を有しているのが、この熊本であるということが言えると思います。

この地下水をもたらす地下構造のお話をする前に、阿蘇の噴火の歴史をお話しすることが必要だと思います。阿蘇は過去、30万年前から9万年前の間に4回の大爆発を起こしています。それぞれに火砕流堆積物が大量に降りまして、そして現在、このような分布で火砕流の堆積物が4層になって堆積しております。ですから、この火砕流の堆積物が水を浸透させ、濾過する機能を果たしており、地下水を貯めるために、ミネラルを含ませるのに非常に大きな役割を果たしているわけでございます。

これが熊本市の地下構造です。白川の河口から江津湖を通ったところの断面図ですが、ご覧のように阿蘇1、阿蘇2、阿蘇3、阿蘇4といったような堆積層ができております。後で福岡と比較しますが、火砕流の堆積層の深さが、熊本の場合は圧倒的に深いのであります。

全体として、熊本市の中心部に砥川溶岩という浸透性の岩盤がございます。その上に火砕流の堆積層が重なっているわけです。その溶岩と堆積層に向かい、北から、東から、南から水が流れ込んでいます。結果として熊本は、その地下水を100％利用した水道水が飲めるというわけです。

水の恵みツアーに行かれた方は、健軍の水源地の井戸をご覧になったと思いますが、健軍の水源地には11本の井戸があります。そのうちの7本が自噴です。なぜ自噴しているかというと、上流域の地下水の速度は1日当たり40mです。それが白川中流域、大津付近になりますと、5mに落ちます。そこに、いわば一つのプールができておりますので、そのプールに入っていくわけです。そして、そのプールを出た水が、江津湖手前になりますと80mにスピードアップします。それがこの江津湖周辺の粘土層にぶつかって湧き上がってくるという、そういうメカニズムがあるわけです。熊本市の水道局が必要とする上水道用の取水量は、年間約1億1000万トン。地下水100％でございます。

そして、極めてアバウトではございますが、「熊本地域の年間の水循環」をお話ししますと、阿蘇を中心にして降る雨は、年間20・4億トンでございます。そのうち①7億トンが蒸発いたします。そして②7億トンが河川に流れて、有明海に注ぎます。ですから、

③6・4億トンが山林、畑地、水田に残って、これが地下に浸透していくわけです。そして、④生活産業用水として年間2・8億トンを消費しているという構図であります。つまり、我々が使用している水が3億トン弱で、地下水として涵養しているのが6億トンと倍以上あります。だから、まだまだ地下水を供給できる余力はあるわけであります。しかしながら、自噴といったようなメカニズムが、たとえば観光や景観に必要なものであるという認識がありますから、その状態を維持していくためには、やはりこれ以上の水を取るというのは、かなり難しいのかなと思われます。ですから、その辺りにどういう割り切りを入れて、より多く取るのか、あるいは現状維持するのかといったような問題もあるわけであります。

今年6月に私は、蒲島知事の肝入りで作られました「水の戦略会議」で議論した結果を、知事に提言いたしました。熊本は地下水のウェイトが非常に高いので、いわゆる水質条例、保全条例というのは、全国基準の10倍厳しくなっています。しかしながら、その10倍厳しい水準でも、今の熊本の水質と水量を維持していくためには、さらに様々な知恵を出していく必要があるという知事の問題意識で作られたのが「水の戦略会議」であり、私もそのメンバーでした。

その会議の議論の中から、熊本は目に見える部分で「火の国」と呼ばれているけれども、地下水という見えない部分を持った「水の国」でもあるという、新しい概念が生まれました。それから、一般に河川の水は公共水ですが、井戸から取る水は私水という位置づけであります。これだけ地下水に頼っている地域の、地下水に対する法律的裏付けが私水でいいのか、公共水にしなければいけないのではないかという問題提起をいたしました。

もう一つ、表に出て使用する水も、いずれまた地下に送り込まれるわけであります。地下に送り込むにあたって、やはりきれいな状態で送り込む必要がある。そういう概念を作って「育水」としました。ですから、この公共水と育水という概念を入れて条例を改正したらいかがですかといったような趣旨で、知事に提言をしたわけであります。知事も極めて前向きに対応をすると言ってくださいまして、私ども会議メンバーといたしましても、大変ありがたいと思っております。

そして、そのための新たな推進組織といたしまして、まだ仮称ですが、公益財団法人「くまもと地下水財団」というのが、平成24年4月に設立される予定です。現在、各地方自治体、あるいは各団体に、同じような組織がたくさんできています。これは何も水の分野に限らず、様々な分野で言えると思いますが、熊本県内には今、大きなものだけで地下水保全の推進組織が三つございます。一番大きな団体は、熊本県と熊本市、ほか13市町村で構成される「熊本地域地下水保全対策会議」ですが、他の組織もそれぞれ似たようなことを実施しているわけです。それではもったいないので、人も金も、そういった経営資源をとにかく集中して、より良い推進組織を作っていこうという提言を受けていただき、今度、新しい組織が出来上がるわけであります。

私どもは、昭和62年からずっと地下水の保全について問題提起をしておりまして、2012年は25年目に当たります。この九州経済フォーラムの周年と一緒です。25年目でこのような形で条例が改正され、新たな推進組織が出来上がり、そして地下水保全に向かった活動が本格化していくという現場に立ち会っておりまして、本当に感無量でございます。最初はどなたも、どなたもと言ったら失礼でございますが、数少ない方々の中にしか問題意識はございませんでした。それが25年間実施し続けたことで、これだけ大きく広がったわけであります。大変うれしく感じています。

熊本のことは以上で終わりまして、比較するために「福岡の水資源の状況」

について、少しお話をさせていただきます。これは福岡市と熊本市の地層の断面図です。何が最も違うかと言いますと、帯水層の厚さです。要するに水を含んだ地層の厚さが、福岡は10m程度に対しまして、熊本は130mあります。つまり土壌自体の水を含む量が、この帯水層だけでも13倍違うということであります。この福岡の断面図には、天神と中州が入っております。福岡の皆さん方はよくご存知のことと思いますが、これが警固断層です。福岡の地層で面白いなと思うのは、この第三期層という土の上に250万年かかって堆積した土が、10m程度しかないというところです。一方、熊本の場合は、阿蘇山が4回も大きな爆発をしてくれましたので、この130mもの新しい層が出来上がっております。ここが最大の特徴であります。

福岡市の水の供給ですが、福岡市の水不足を解消するために、1983年、昭和58年に福岡導水というのができました。筑後大堰から筑後川の水を福岡市内に向かって引っ張っていますが、これは福岡市の水の約30%を供給する流れでございます。もう一つの福岡の特徴は、海水の淡水化センターがあることです。後でご紹介しますが、福岡には海水を淡水化した水と、筑後川から取った水を混ぜ合わせる施設もございます。淡水化センターと福岡導水のそれぞれから、下原にある混合施設に水を持っていくルートがあり、そこで両方の水を混ぜ合わせて供給されているわけです。

水道を供給するにあたっては、他にもいろいろな施設があります。まず取水施設、水を取る施設ですね。雨水取水場という取水場が複数ございますが、福岡の場合は7カ所です。それに対して熊本は21カ所あります。熊本の方が圧倒的に取水場が多いのは、地下から取っているからです。浄水場は福岡の方が6カ所、熊本が4カ所。福岡の方が多いです。それから排水施設は、福岡は1カ所しかありません。それに対して熊本は18カ所あります。また、福岡の場合は、機械的圧力によって、水道水を流します。熊本の場合は、地下から汲み上げた水を高いところにポンプアップして、それから高低差を利用して配水しているわけです。熊本の水道における最大の弱点は、電力です。停電になったら、ポンプアップできませんので、断水します。ここら辺がやはり、エネルギー間の連携とでも言うのでしょうか、すべてにおいて関係性を持っています。こういうことは表にはなかなか出ませんが、電力の供給というのはものすごく大事なことであるということを、水の供給の面からも認識いただければと思います。

ここで、先ほど紹介した福岡の淡水化センターについてお話しします。この施設は2005年に完成しました。総事業費が約400億円であります。1日5万トンを淡水化し、18万人弱ぐらいの人口に向けて供給する能力があります。そのうち半分ぐらいが、福岡市の東の新宮町や古賀市の方に供給されています。しかし、この淡水化された水というのは、ミネラルを全部排除しますので、まったくおいしくありません。ですから、先ほどお話ししました下原の混合施設で、淡水化した水と筑後川から引っ張った水を混ぜ、それなりの味をつけ、ミネラルを入れて、各家庭に供給しているわけであります。この淡水化事業のコストは、1トンあたり210円だそうです。通常の水道水は1トンあたり130円ですから、1・6倍です。福岡市の水道料金が高いのは、仕方ないということであります。

次に淡水化の供給ルートを示しておりますが、これは先ほどお話ししました。もう一つ、淡水化に関してお話ししておかねばならないのは、淡水化した後に残った海水の塩分濃度が、約2倍になることです。それをそのまま海に流し込むと生態系に問題が出ますので、下水処理水と混ぜ合わせて塩分濃度を調整した施設から放流しているわけであります。

福岡市と熊本市の水道上の課題といったものをまとめてみますと、福岡市の場合は、たとえば水資源開発であるとか渇水被害の経験といった課題、つまり供給力確保という構造的・根本的課題が上がってきております。一方、熊本の場合は、質的・機能的保全という共生的課題であります。構造的・根本的課題と共生的課題とでは、対応が全然違うわけです。それを表しているのが水道料金ですが、20立方メートルあたり福岡が月額3,150円、熊本が2,877円で、約1割違います。たった1割と驚くぐらいにしか違いませんが、ここら辺は経営努力だと思います。それから、双方の水道局のバランスシートで設備投資の累計額を比較し

てみますと、福岡市水道局の4、215億円に対して、熊本市は1、523億円です。福岡市は、熊本市の2・8倍という非常に多額の投資をして、今の水の供給システムを作っているわけです。今の福岡市の人口は140万強と思いますが、人口が増えれば増えるほど、やはりこの水の供給が非常に大きな課題になってくるということが言えると思います。

ここからは「当行の環境保全活動」に入ります。まず、「環境保全活動のはじまり」からお話をさせていただきます。こういう環境に対する企業の社会的責任を遂行していこうという考え方を最初に出すのは、大体経営トップですね。下から上がってきて成功するというのは、あまり聞きません。当行の場合も、後に頭取になる人物が、1960年に水俣病を極めて具象的に描いた、水上勉さんの小説『海の牙』を読み、海洋汚染に対する問題意識を持ったことから始まりました。「海洋汚染＝水」です。有機水銀は水に溶けていたが故に、人間の体内に入って水俣病を発症させたわけであります。放射性物質も水に溶けて、水蒸気化して拡散していますが、先ほど申しましたように、水は一旦間違うと、猛烈な脅威をもたらします。

彼はその後、東京支店時代の1961年に隅田川の汚濁・汚臭を見て、びっくりしているわけです。長崎支店時代の1967年には、大渇水を経験しています。そして1975年、水前寺公園の大きな鯉が、浅くなった池で横泳ぎをしているのを見ています。それだけ湧水量が減ってしまって、まともな形で泳げないという姿を目撃したわけです。これは何とかしなくてはいけないということで、頭取になって3年目ぐらいですけれども、「肥後の水資源愛護賞」を創設したわけであります。

私は、この「肥後の水資源愛護賞を創設するぞ」と言われた時に、さほど違和感はありませんでした。それはなぜかと申しますと、先ほど黒田知水の「水五則」をご紹介しましたが、私は若い頃に、営業推進活動や人格形成の指針として、常々そういうことを言われていたからです。それぞれの渉外の部屋に「水五則」のポスターが貼ってあり、外訪活動から支店に帰るたびにそれが嫌でも目に入るわけです。ですから、うちの銀行は水に対して、随分関心があるのだなあ、というようなことで、こういう賞を作ることに対しても違和感がなかったわけであります。

「肥後の水資源愛護賞」は、最初は熊本日日新聞社さんと熊本県、そして当行の三者で顕彰活動を行っていたわけですが、このまま継続していくためには、なにがしかの組織対応が必要であるということで、当行が出捐いたしまして、「財団法人肥後の水資源愛護基金」を設立いたしました。それが1992年でございます。それからずっと、啓発・顕彰活動を中心にやっておりましたが、地球温暖化防止、CO2削減といったような環境問題や、緑化推進に向けての問題意識が強くなってきたため、2008年9月に「みどり」を入れまして、財団の名称を「肥後の水とみどりの愛護基金」へ変更し、賞も「肥後の水とみどりの愛護賞」にいたしました。そして去年の11月に公益財団法人化したわけであります。過去23年間で、のべ279先を顕彰しております。顕彰の対象はあらゆる人たちです。これも毎年、当行の支店のネットワークを通じまして、愛護賞に該当するような人はいないかといったような情報収集を行い、そこから挙がってきた候補者を選定しながら実施しているわけであります。

当初、この財団の運営資金は、肥後銀行の行員の個人的な寄付によって運営されておりましたが、財団の活動自体が大きく外に出ていくようになりましてからは、銀行が地域貢献費用として負担するようになっています。ただ、肥後銀行を退職された方々というのは、必ずと言っていいほど、退職金の中から一部をこの愛護財団に寄付してくれ

ます。その分だけで、毎年何百万か貯まっています。これもやはり、ずっと寄付で運営費をまかなってきた成果ではないかなと思っています。

また、財団はご覧のような賞をいただいているわけですが、こういう賞の選定というのは、様々な社会的関心によって動きます。2005年から2007年にかけて、地球温暖化対策の問題意識の一番高かった時期ですから、これだけ集中してこの時期にもらっているというのが一つと、20年以上活動をしたというのが、その表彰の理由ではないかなと思っています。

次に、具体的な「地下水の保全活動」についてお話をいたします。私どもが地下水の保全活動で取り組む分野というのは、冒頭にお話ししたように「森林・草原・水田」であります。2001年から水源涵養林の育成ということで植樹を始めています。そして本年から、水源涵養機能の活用ということで、耕作放棄地の解消に向けた水田の湛水事業を始めています。また、草原の再生、水源涵養機能の保全ということで、「阿蘇草原再生協議会」へ側面支援をしています。この三つの分野が我々の活動分野であります。

森林分野の活動は、具体的には「植樹活動」ですが、まず、植樹活動をするにあたっての問題意識について触れたいと思います。九州山脈の麓の町、山都町に「脊梁の原生林を守る連絡協議会」というのがございます。山都町の内大臣というところにお住まいの方々が作られた協議会ですが、その報告を聞きまして、「ああ、ひどいな」と思いました。森林の荒廃もひどければ、それによる水資源への影響もひどいということです。現在、日本の森林の多くが人工林でありまして、熊本の場合はそのほとんどが杉の人工林です。熊本は全国平均よりも約20％近く、杉の人工林が多いのです。それが間伐というメンテナンスをされないまま、ずっと来ておりまして、密集し過ぎているが故に、杉山が大変乾燥して、草や苔が生えない状態になっています。つまり、全く保水力がない、乾いた土地だということです。

また、杉が密集し過ぎていますので、たとえば台風が来た時など、通常であれば風のエネルギーを森林自体が吸収するのですが、密集しすぎて壁状態となり吸収できないという実態です。非常に根も浅いので、木が倒れやすく、山がはげやすいのです。それがこの緑川の上流域の状態です。ですから、雨が降らない時は、この杉の人工林の下流にある緑川には、水がほとんど流れておりません。ところが一旦大雨が降りますと、山に保水力がなく、場合によっては木もろとも山が崩れていますので、あっと言う間に雨水が川に流れ込んできます。そして、このような増水した状態になるわけです。それだけ大きな乱れと言うのでしょうか、そういうものを生じているというのが現実であります。

さらに、「脊梁の原生林を守る連絡協議会」の方のお話を聞いておりまして、山の森林を守っておられる方の平均年齢が、ものすごく高いということを知りました。自分の部落の高齢者の比率は7割だとおっしゃるのです。それで、若い人たちの助けが要るのだというようなことで、海の漁師さんたちと共同で山を守ろうという運動を始めていらっしゃいます。やはり若手が入っていきませんと、高齢者の方々がこんな急なところを登って、森林の保全を図るというのは相当無理です。また、その森林を保全するにあたっては、いろいろな経験やノウハウが必要であります。今でないと、そのノウハウはもらえません。だから本当に森林を守り、森林の荒廃を防ぐための具体的な活動というのは、今から始めないと、もうあと10年たったら遅いと認識しています。我々は、このような問題意識を持っているわけです。

それで、この愛護賞の創設15周年を記念いたしまして、植樹を開始いたしました。最初は国有林や公有地をお借りして、1回平均あたり0.3ha、1200本程度を、150人程度で植えていました。それはそれで良かったのですが、あちこちに植樹いたしますと、その後のメンテナンスがものすごく大変です。やっぱり植樹した以上は、下草刈りとかメンテナンスに行かなければなりません。そうしますと、あちこち離れた狭いエリアを5カ所もそれぞれやるというのは、時間的に言っても大変です。そこで、当行の創立80周年と水資源愛護賞20周年を記念しまして、2006年に「森を買おう」ということになりました。森を買おうと言ったのは私で、まだ常務だった頃ですが、私が言ったことが取締役会で承認され、都合52haを購入いたしまして「阿蘇大観の森」と命名したわけ

です。

大観の森は、実はここからも見えるのです。阿蘇の大観峰の真下、入会地をはさんで両サイド52haが大観の森で、そこに10年間で15万本の植樹を計画しました。企業がこういう植樹活動に入って良いところは、進捗状況をはっきりさせられることです。企業というものは目的を達成するために必ず計画を立てます。「計画はどうなっているのだ」「計画の進捗状況はどうなんだ」ということが日常です。つまりPDCAサイクルを回すというのが経営の基本です。そういう方法で植樹もやりますので、数値目標が出ますと、動きが非常に明確になります。それで15万本の植樹を計画いたしました。

森林が水源涵養になるということを現実的に数字で見てみますと、広葉樹林の1時間当たりの雨水浸透量は272mmです。これに対しまして、何も生えていない裸地は79mmです。いかに森林の雨水浸透量が大きいか、理解頂けると思います。ですから、水を涵養するにあたっても、森林というのは絶対に守っていかなければならない分野であると言えるわけであります。

それから当時、社会全体でCO2削減が非常に声高に叫ばれておりました。当行が排出するCO2を計算したところ、全体で年間およそ5、900トンでした。この数字は、温暖化対策法の算出基準によって算出しておりますので、極めてオーソライズされたものであろうと思います。それに対しまして、1本の木が成育中、約30年の間に吸収するCO2の量は、1本1年当たり約0・033トンと言われております。ですから、この0・033トンで一応5000トンをカバーしようというような計画を立てました。それが15万本という数字になっているわけですが、15万本の植樹が完了する2016年以降、大観の森が当行のCO2排出量の84%を吸収してくれます。限りなくカーボン・ニュートラルを目指したいと思っていますので、残りの16%については、大観の森の植樹が完成した段階で、その次のステップとしてどうするかを、次世代の人たちが考えていかなければなりません。

私の義祖母が法事の度に「家が衰退する時は庭から荒れる」といったような話をしておりました。庭というものには、経済的価値はありません。負担だけです。ところが人間には、ある種経済的に無意味なものを大切にするという心があって、それが逆に経済的価値を生んでいくということが言えるのではないかと思います。ですから、私ども肥後銀行にとって、大観の森は庭であります。大観の森が荒廃した時に、おそらく肥後銀行は公的資金が注入され、頭取はやめなければいけない事態に陥っているでしょう。そういう意味でも、皆さん方、ぜひ注目していただきたいと思います。

面白いもので、森林を見ておりますと、組織や経営にも活用できるのです。森の管理というのは組織のマネジメントに通ずるところが本当にあります。

あの東洋哲学者の安岡正篤さんが、「木の五衰」ということを言ってらっしゃいます。「懐の蒸れ」「褥上がり」「末（うら）枯れ」「末止まり」「虫食い」という流れなのですが、「懐の蒸れ」というのは、森林自体の枝葉が密集して蒸れてしまい、先ほどの山都町の崩れた杉林のように、発育がもうこれ以上進まないというような状態です。要するに、間伐も手入れも何もしていないので、密集し過ぎているわけです。組織で言うと、コミュニケーションがない、情報が共有化されてないという状態です。つまり、組織運営において人が多ければいいというものではないということです。業績が悪くなると、人が足りませんと言う。新しいことをやってくれよと頼むと、人が足りません、新しい人間を下さいと言う。しかし、人がいればいいというものではないのです。ある組織の中で、現状、快適に過ごせているのであれば、その状態で何とか工夫してみろというのが経営だと思います。

そして「懐の蒸れ」は、「褥上がり」を起こします。これは根が上がるということですから、養分の吸収力がなくなります。そうしますと「末枯れ」枝葉が枯れていきます。枯れたことによって「末止まり」つまり成長が止まります。成長が止まりますと、枝葉のほうから枯れていって、幹しか残りません。それで最終的に虫が食って木の生命がなくなる。「木の五衰」はこういう流れでありますが、本当に組織を順調に回転させようと思えば、この一番の「懐の蒸れ」の状態で何らかの対策を打たなければいけません。根っこが上がる「褥上がり」の状態まで容認していると、なかなか解決しません。これは事業再生を実施している時に、つくづく感じました。こういうことも森林は教えてくれます。

実は大観の森も、購入時には間伐ができておりませんで、密集し過ぎていました。植えて30年経っているのですが、大体30年経過してきちんと間伐して、一定空間を木に与えていれば、直径が30cmぐらいの太さになるはずです。ところが、そこの木は30年もので20cmちょっとの細い杉だったのです。ですから、人材育成というものも、やはりある程度の仕事量、空間、それから活動領域といったものを配慮してあげないと、なかなか太い人材は育たないと、そういうことも森林は教えてくれていると思っております。

先月末までに、大観の森52ha中、約40haの植樹を終えました。植樹本数は既に、累計で10万本になります。この折れ線グラフは参加人員です。とにかく肥後銀行だけではなく、他の企業さんにも私どもの森で植樹をしていただいております。この植樹については、いわばオープンにしているわけです。植樹のお世話をする人間をきちんと用意して、どなたでも植樹をしたいという時は受け入れて、そして自前で苗を持ってきていただいて、植樹していただいております。実際に肥後銀行から植樹に参加する行員は900人ですから、ほぼ倍の外部の人たちがあの大観の森に入って、植樹活動をしているわけです。これも少し他の森林と違った構図なのかなと思っております。これがその900名の証拠写真です。これだけの人数で、毎年植樹を行っているわけです。

次に「草原の再生活動」です。まず阿蘇の草原の変化を見てみますと、これは明治・大正期ですが、ご覧のように、阿蘇の中央火口から外輪山に向かって、草原が広がっています。昭和20年代には、南側の南郷谷のところが減少しています。そして現在。もうこんなに狭くなってしまいました。なぜこうなったかと言うと、馬や牛の放牧頭数が減少していることがまず挙げられます。それに野草採草も減少しています。つまり草を刈っていないということです。その原因は畜産農家の減少であり、それを招いたのは高齢化、後継者不足です。ですから、こういった草原維持が

困難な状態を何とかしないと、ますます利用されない野草地が増加し、草原の領域が減っていきます。さらに景観が変わり、水源の涵養機能が低下して、生態系が変化するわけであります。

先ほど裸地と比較して、森林の水源涵養力の高さを見ていただきましたが、実は草原の水源涵養力というのも結構ございます。これはつい最近、私も知って、再認識いたしました。森林ほどではありませんが、草地の水源涵養力というのは裸地の倍近く高いということですので、地下水の保全、あるいは水資源の涵養には、草原を守っていくことも必要であるという問題意識を持ったわけであります。

阿蘇の草原の再生に向けては「阿蘇草原再生協議会」が既に発足しております。そしてその後に「阿蘇草原再生千年委員会」というのが発足いたしました。阿蘇市長もこの会のメンバーでありますが、基本的に認識しておいていただきたいのは、草原というのは自然と人との共生の産物であるということです。つまり、人間が畜産を経営し、その畜産で飼育している牛や馬を放牧して、草原の草を餌として食べさせる、あるいは牛や馬の飼料として野草を刈って、新たな野草の芽を出してもらうために野焼きをするといったようなことを繰り返していきませんと、草原は守られないということです。共生の産物というのは、そういうことを意味しています。ですから、農的な営みが背景にないと、草原は守れません。草原をとりまく課題は、農業をどうするかといった産業的な課題にもつながっていくわけでございます。

「阿蘇草原再生千年委員会」の役割は、「阿蘇草原再生協議会」を支援することです。中心的なのは募金活動です。現状、ボランティアを雇い、畜産振興を図るといった資金が足りていません。ですから、そういう部分を何とかしようということと、再生協議会の具体的な活動の方向感のようなものを、"有識者で議論しましょう"というようなことが、この再生千年委員会の機能であります。なぜ千年かと言いますと、この阿蘇の草原が歴史的文献に記載されているのが、平安時代に書かれた「延喜式」だからです。今から千年以上前のことであります。「延喜式」は律令の施行細目でして、そこには兵隊の武力強化策として、どこどこの部署に馬を何頭配置しなさいといった細則が書かれているわけです。そこに併せて、阿蘇の草原には優秀な馬が育つといったようなことが載っております。「延喜式」に阿蘇の草原が登場したのが千年以上前で、それがずっと続いて今日があるわけですから、今後もやはり千年、阿蘇の草原が必要ではないかという意味において、千年委員会なんです。

もし阿蘇の草原を維持していくことが必要であるという問題意識を持たれた方は、ぜひこの千年委員会の募金活動にご協力いただければありがたいと思います。私どもも、全体の計画の10%ほどの資金を寄付することを決めており、もう実際に寄付しています。佐藤市長も一生懸命ですので、ぜひよろしくお願いします。

それから、先ほど「水掛の棚田」をご覧いただきましたが、次に「農業・水田灌水事業」でございます。「農業水田灌水事業」を行うには、耕作放棄地の解消というのをどうしても避けて通れません。しかし、私ども銀行ではこういう事業を行えませんので、受託基金が前面に出て、阿蘇市と農業水田灌水事業に関する協定を締結いたしました。この提携の下に、私どもの銀行のグループ役職員が具体的な活動である田植えや稲刈りのボランティア活動をしていきましょうということになっています。ですから、今日見ていただいた通り、棚田には随分稲が育っておりますが、10月21日に今度は稲刈りをします。手で植えましたので、手で刈ります。

財団で借り上げた「水掛の棚田」は、阿蘇山田地区乙川湧水群というところに存在する棚田、3町6反です。そこに今年初めて田植えをしましたが、地元の皆さんが、ここで採れたお米が一番おいしいとおっしゃいます。私が不思議というか、残念と思うのに、一番おいしい米を作るところが耕作放棄地となっていることです。この矛盾を解消するためには、やはり基本的な費用を負担できるところが出ていかなければと思い、思い切って事業に踏み切ったわけです。水掛の棚田は、大観の森から1.5km離れたところに存在していますが、3町6反全部、田植えできると思っていたら、減反政策というのがありまして、4割できないのです。よって、3町6反のうち2町が稲作です。ここら辺は基本的に国の問題だと思いますが、これからどうしていくの

かは、将来の持続可能な社会づくりを考えても、絶対に避けては通れない問題だと思っています。

というわけで、2町に田植えをしたわけでございますが、そのうちの1町は手植えでしています。私どもがこの再生活動をしたことによって、阿蘇市の耕作放棄地の約8%が解消されました。まだ92%残っているということですので、これをすべて解消するためには、やはりもっともっとパワーとお金がかかると思います。20年以上も耕作放棄地となっていた棚田というのは、見に行っても見分けがつかない状態です。

水田涵養の必要性の根拠ですが、当行のグループの役職員と家族は、合わせて約1万3000人おります。その1万3000人が1日当たり使用する水道の使用量が4,300トン余りあります。それに対しまして、阿蘇大観の森の涵養量が約2500トン、この水掛の棚田の涵養量が1900トンから約2000トンであります。合計いたしますと約4500トンですから、私どものグループの家族が1日に使う水道使用量は、全部まかなえる計算になります。言ってみれば、カーボンならぬウォーター・ニュートラルの状態を今、実現しているわけです。こういうような考え方を基にしながら、今後もしっかりやっていきたいと思いますが、おかげさまで、こういう棚田の地下水涵養量などは、東海大学で水の研究をなさっている市川勉先生が自ら手を挙げて、学生さんと棚田に装置を持ち込んで、どの程度浸透するか測ってくださいました。科学的根拠があるわけです。

米の収穫量は、大体1反当たり6俵で計算しております。銀行というのは中に食堂を持っておりまして、その食堂で役職員たちが毎日昼食をとっているわけですが、当行の食堂で使用する米の量は、年間2万8000kg、約466俵です。それに対してこの棚田では、まだ実際に収穫してはおりませんが、120俵ほど採れるのではないかなと予測しています。つまり、当行が昼食で消費するお米の26%を、耕作放棄地の復活努力と湧水の成果として、取り入れてやっていこうというわけです。

これは、先ほどご覧になられた棚田の整備前の状況です。何が何だかわかりませんでしょう。これはスズタケという笹の一種です。それが猛烈に根を生やしていまして、人手では絶対に復活できません。ですから、このようにパワーショベルを入れて、ずっと引っこ抜いていったわけであります。そして、今度は地ならしです。これもトラクターを入れて土を耕しました。これを3町6反、全部やったわけです。これが整備後の棚田です。この時点では、まだ畦がありません。この後、このように畦を作って水を張ったわけであります。

整備経過をご覧いただきましたが、これは土木工事です。田んぼを所有している農家単独でできるわけがないのです。実際、この工事には相当なお金をつぎ込んでおります。それは私どもが、要するに社会的貢献費用の一部を負担してやるのだと決めたからできたことであって、もしそういう決意と費用負担がないのであれば、耕作放棄地の棚田は山になります。ただ、逆の見方をすれば、20年以上放ったらかされていた田んぼが、なにがしかのお金をかければ、このように美しくなるわけです。これは50年の減価償却にすると安いものです。そんな考え方で対応できないかということであります。

田植えの時には、今日もお見えになっております阿蘇神社の宮司さんにお願いして、田植えの神事をしていただきました。大田主が私であります。そして、地元の山田小学校の生徒たちに、水掛の棚田最初の、今年の稲を植えていただきました。ちなみに、私のうしろに大きい子がいますね。この子は県の小学校の相撲大会のチャンピオンだそうです。ですから、将来、横綱になってくれるといいなあ、そしてこの棚田で土俵入りでもしていただくと、本当に素晴らしいのではないかなと思っています。

そして、これは田植え直後の様子です。本当に小さな苗ですね。それがご覧のように成長しまして、今日はもうこれぐらいになっていましたね。細かった苗も分蘖して、太い複数の苗になっていました。だから、稲作というのは面白いなと思いますね。それから、植樹とか田植えをすることによって何が変わるかというと、毎日の天候がものすごく気になるようになります。この間の大雨の時も、大丈夫かなと毎日心配しておりました。心配するということは感性を磨くことです。感性を磨きますと、いろんなことに対して、変化がよ

りよくわかるようになります。すごく親くなる。ですから今、部下は大変ですよ、いろいろ指摘されますから。これはボランティアで参加した460人、当行の関係者でございます。

それでは、最後にまとめさせていただきます。「新たなCSRの方向性」といたしまして、最初に申し上げましたように、時代の変化に応じて内容を変えていくことが必要です。私どもの場合は、環境保全の啓発活動をするために、まず顕彰事業からスタートしました。そこから国有地の植樹活動、具体的な植樹のボランティアをやって、ここで初めて実践が生まれました。そして、その実践にあたって、自分で森林を持たないとその後のメンテナンスができない、責任が持てないということで、森林を購入いたしました。さらに、地下水の保全をしていくには森林だけではだめだ、水田も草原も必要だということで、実践範囲を広げていったわけであります。ですから、社会環境変化に応じたCSR活動の進化が、再設計として生まれてきているわけです。

活動の組織対応ですが、植樹活動は当行を中心に、愛護基金に業務委託しています。ですから今日、お昼時にお世話した元支店長経験者は、愛護基金の職員であります。植樹活動には900人も集まりますから、バスの手配から植樹の手配から、案内から、いろいろ大変であります。そこで、従業員組合の若手が支援してくれています。それから、行政機関、阿蘇市にはいろいろとアドバイスやご支援をいただくなど、大変お世話になっています。地元の方々も本当に応援してくれています。植樹の場合は、元オーナーが手をつけられなかったところを、私どもが購入して今の状態に持っていっているわけですから、元オーナーをはじめとする地元の方々には本当に喜んでいただいており、毎回毎回、本当に熱心に私どもの活動を支援していただいています。大変ありがたいことです。やっぱり地元の方々とどういう連携をしていくかというのが、こういう事業の非常に大事なポイントだと思います。また、大学等の研究機関は、先ほど申し上げた科学的根拠というか、我々が事業を進めるにあたって、どの程度責任ある成果をもたらしたのかといったような客観的データを出してくれるとともに、アドバイスもくれるところです。とても大事だと思います。

そして我々は、当行の行員ほかOBや関連会社の職員まで、グループ全体でこの活動に取り組んでいこうという考え方です。農業水田潜水事業は、これは米の売上げが立って、米が実際に経済的価値を生むようになりますから、私ども銀行では補助できません。ですから、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金が前面に出ます。そして組織連携については、私どもがいろいろコーディネートのお手伝いをしているわけです。農業水田潜水事業の植樹活動との違いは、健康保険組合が入っているところです。つまり、健康というのを「食育」という観点から考えた場合、あれだけきれいな湧水で作った米、あるいは野菜というのは、間違いなく健康に良いはずです。そういう背景から、健康保険組合が資金的な支援をしてくれる条件が整っておりますので、健保組合が参加してくれているということです。

また、科学的な裏付けにより、支援される活動の持続性を維持するということは、これまでのお話でご理解いただけたと思います。活動成果の継承に関し、責任は成果を伴うと最初に申し上げましたが、社会的責任というのは、自己責任意識から始まると言えるのではないかと思います。要するに、自分で責任をもってきちんとやると決めて、起きたことについては自分の責任で解決していくというようなところまで覚悟しませんと、なかなかこうした活動は根付きませんし、広がりません。ですから、目指すべきCSR活動の目標を持ってしっかりと実践することが必要であると思います。

最後に、経済的価値につながる工夫ということなのですが、これは非常に難しい課題です。一応ここにいくつか書いておりますが、私としてはまだまだ、これぞということの確信を持てま

せん。ただ、こういう水のプロジェクトを進めるにあたって、このDBOOF

パネル展示見学会

パネル展示見学会 ご出展先一覧

	参加者名	県名		参加者名	県名
1	福岡県	福岡県	14	新日本製鐵株式会社 大分製鐵所 環境貢献技術グループ	大分県
2	熊本県・本田技研工業株式会社	熊本県	15	有明海干潟再生実験	福岡県
3	熊本県新エネルギー産業振興課	熊本県	16	NPO 法人 循環生活研究所（ベッタ会）	福岡県
4	水の国　くまもと	熊本県	17	公益財団法人 肥後の水とみどりの愛護基金	熊本県
5	佐賀県	佐賀県	18	特定非営利活動法人させぼエコプラザ	長崎県
6	大分県	大分県	19	南九州リサイクル事業地域協議会	鹿児島県
7	宮崎県	宮崎県	20	阿蘇草原再生募金事務局	熊本県
8	鹿児島県	鹿児島県	21	国立大学法人 熊本大学	熊本県
9	熊本市	熊本県	22	東海大学	熊本県
10	ANA（全日空）	福岡県	23	熊本県立大学	熊本県
11	シャボン玉石けん株式会社	福岡県	24	熊本学園大学	熊本県
12	ソニーセミコンダクタ九州㈱	熊本県	25	NBU 日本文理大学	大分県
13	富士フィルム九州㈱	熊本県			

交流懇談会

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 矢頭 美世子 氏（株式会社やずや 代表取締役会長）

皆さんこんばんは。九州経済フォーラムの矢頭でございます。

本日は皆さんのおもてなしの言葉を聞きながら、熊本は素晴らしいなと思いました。そして、やっぱり求められるところには感謝されるような人間が留まるんだなって思いました。この九州の皆さん、熊本の皆さん、そしてそのリーダーたちが熊本を愛し、今後こういう形の中でやってこうとしています。そういうリーダーの力って強いなと思います。私も小さい頃、そういう意味では、女でも頑張らなくちゃと思いました。今日、私は感動しましたから、いつかまた、その感動の結果を報告させていただきます。

そういうことで、今から懇親会になります。熊本の方もたくさんいらしていただいております。九州経済フォーラムの25周年ということで、沖縄から始まって今日は熊本、今度は台湾、最後に福岡で締めようと思っています。その時もぜひいらしてくださって、また応援していただけたら幸せです。

本当に今からは楽しく交流しましょう。ちょっとすごいなと思うような郷土料理もいっぱい並んでて、私も今日は思う存分に食べて、多分明日からダイエットします。ダイエットを誓ってはいるんですけど、私の夢のマスターリストの中で、できないものはダイエットと英語です。でも、いいです。今日はみんなと一緒に交流して、楽しみたいと思います。

今から開会させていただきます。ありがとうございました。

歓迎挨拶

熊本県知事　蒲島 郁夫 氏

皆さん、こんばんは。熊本県知事の蒲島でございます。今日は九州経済フォーラムの25周年という素晴らしい記念の時に、阿蘇を選んでいただき、誠にありがとうございます。

今日、東京から帰ってくる時に、空からこの阿蘇の大草原を見て、なんと素晴らしい山であろうかと、改めて感動いたしました。そして、阿蘇が、熊本にあることの喜びを感じたところでした。

阿蘇は熊本だけではなく、九州全体に恵みを与えるものです。阿蘇の水は九州のあちらこちらに流れていっておりますし、阿蘇の美しさは九州の美しさに色を添えています。

私は、阿蘇を熊本だけの阿蘇にしてはいけないと思います。福岡の方は福岡を宣伝する時に「自分たちの奥座敷に阿蘇がある」と、大分の方は「湯布院の隣に阿蘇がある」と、宮崎の方は「高千穂の向こうに阿蘇がある」と宣伝してください。そして熊本の方は「阿蘇の周りに素晴らしい観光地がある」と宣伝していただきたい。私はそのような形で、この阿蘇を売り出すべきだと、熊本だけで売ってもダメだと思っています。

今日は甲斐さんの講演が大好評でした。大事なことは、甲斐さんは行動する経済人であるということです。目標があっても行動しなければ何も起こりません。

私は、県政を預かっておりますが、今の熊本県庁をさらに行動する県庁にしたいと思っています。私は、常日頃から1年が1期だと考えております。もちろん1期は4年なのですが、4年あると思ってしまうとなかなか行動できません。ですから1期は1年であるという気持ちで取り組んでおります。そういたしますと現在4期目ということになりますが、この4期目までにどういった仕事ができたのか分かりません。しかし、少なくとも様々な課題に挑戦してきたと思っています。そして、熊本県庁は行動する県庁になってきたと感じています。

今、九州が目指すべきものは道州制です。既に、九州知事会では、九州広域行政機構を作ろうという方向で合意しています。最初から道州制という訳にはいかないと思いますが、そこに向けて一歩踏み出したと思っています。九州の知事全てが合意したということはすごく大きなことなのです。

私は、これから強い九州になるためには、4つの要因が必要だと思います。1つ目は、「競争と協調」です。各県は「競争」してもいいのです。しかし、最終的には九州全体で「協調」する。そうすれば強い九州になります。

2つ目は、各県が「多元性と結集性」を持つことです。熊本と鹿児島は違っていい、熊本と大分は違っていい、熊本と福岡も違っていい、各県が違う

という「多元性」がないと魅力がない。ただ、まとまるべき時には、「九州は一つ」ということで「結集性」を持つ。この「多元性と結集性」を併せ持つことが九州の強さになると思います。

3つ目は、アジアの活力をいかに取り込むかということです。アジアを取り込む上で、今、熊本が生んだ宮崎滔天、長崎が生んだ梅屋庄吉という2人の歴史上の人物がとても大きな意味を持っています。この2人がいたおかげで、台湾、香港、そして中国といったアジアの活力を九州に取り込むことができているのではないかと思っています。

4つ目は、私たちは何のために九州府をつくるのかということです。九州府をつくることは、あくまで手段であって目標ではありません。目標は九州の方々の幸福量を最大化することです。そういう意味では、県庁も手段であり、政治も手段であり、企業活動も手段であると思います。大きな目標は、みんなの幸福量を最大化することであると思います。

こういったことを考えながら、日々、知事の仕事に取り組んでおります。熊本の人は言うばかりで行動しないというのが、これまでの評判でした。しかし、甲斐さんも、熊本県庁も行動しています。

さらに、いよいよ来年は熊本市が政令指定都市になります。人は目標がないととても弱いものですが、私は「政令市になって、さらに品格ある熊本市になれば、阿蘇のように多くの恵みを九州全体に配分することができれば、熊本は州都になれる」と、日々言い続けながら、「熊本を州都に」を大きな目標の一つとして仕事をしております。福岡がニューヨークであれば、熊本はワシントンD.C.でいいのです。東日本大震災は、なるべく全てを集中しないこと、分散させておくことの重要性を教えてくれました。九州も、それぞれが競争しながら協調していく、そういう九州になりたいと思っております。

最後になりましたが、九州経済フォーラムのますますの御発展と、本日参加されている皆様の御健勝をお祈りいたしまして、あいさつとさせていただきます。本日はおめでとうございます。

乾杯

熊本経済同友会 副代表幹事 石原 靖也 氏
（東光石油株式会社 代表取締役会長）

皆様、こんばんは。先ほどから矢頭副会長、それから熊本県知事のご挨拶を聞いておりまして、何か皆さん方の表情がすごく明るくなっていくのを感じておりました。多分、阿蘇をご覧になって、熊本のポテンシャルみたいなものが、とてもこの会場の気を良くしているのではないか、本当に素直にそういう感じがいたします。

ご紹介いただきました熊本経済同友会の石原と申しますが、今日はお招きをする側の一人としてご挨拶をさせていただきます。熊本外の方、本当にようこそ熊本、阿蘇にお見えいただきました。

今日の勉強会では、肥後銀行の甲斐頭取のお話がありましたけれども、正直言いまして、あっ、肥後銀行はこういうことを考えていたのかと、地元におりながら改めて再発見、勉強をさせていただきました。もちろん、肥後銀行が何をおやりになっているかはとっくにわかっておりましたが、やはりこれほど自ら動いて、地元の自然の中で環境保全活動をやっているという企業は、あまり日本中にもないんじゃないでしょうか。そういう意味で、この熊本の一つの誇りとして、熱い気持ちを今、強く感じています。これも熊本のポテンシャルの一つだという風に思います。

明日は畠山さんのお話を本当に楽しみにしておりますけれども、3・11以降、さまざまな変化がありました。しばらくは日本中の全員が警戒状態になるような心の痛みを感じておりました。今日の甲斐さんの話で、何か心の復興があるような気がいたしました。ですから今日は、日本の復興に向かって乾杯をしたいと思います。ご唱和ください。

それでは、九州経済フォーラムにお集りの皆様方の前途、それからこの日本の復興を祈念して、乾杯！

郷土芸能 実舞

閉会挨拶

九州経済フォーラム 常任理事 小辻 智之 氏（全日本空輸株式会社 執行役員 福岡支店長）

皆様、こんばんは。はらはらドキドキする郷土芸能と、この土地の郷土料理や地酒の数々、皆さん、お楽しみいただけましたでしょうか。

今日、300名を超える皆様がともに集い、この創立25周年の記念シンポジウムをこれだけ盛大に行うことができましたのも、蒲島知事をはじめ熊本県の皆様、佐藤阿蘇市長をはじめ地元の皆様のおかげでございます。大変ありがとうございました。主催者が言うのはおかしいかもしれませんが、このように立派な、沖縄に負けない九州・熊本のシンポジウムが開催されております。本当にありがとうございます。

今日、私は福岡から一気に、新幹線つばめ号で、石原会長、小早川理事長とともに熊本に参りました。阿蘇の雄大な景色に、改めてほれぼれといたしました。九州の宝、日本の宝だなと思いました。外輪山の美しさ、肥後銀行様が育てておられる棚田の稲の風にたなびく美しさは、本当に忘れられないものになりそうです。この火の国熊本は、水の国でもあるということを、今日は教えていただきました。熊本の方は、この阿蘇から流れ出る地下水の井戸で水道をまかなっている。福岡に住むものとして、大変うらやましい思いをしております。

肥後銀行様の取り組みについては、まさにナブライズと感激でございました。ただ、ちょっとだけ宣伝させていただきますと、私ども航空会社は大変なCO2排出企業でございます。700万トン近く排出しております。大変申し訳ないと思います。ただ、新しい飛行機を買うだとか、エンジンを水で洗ったりすることで燃費が向上する、そういう地道な努力と併せて、やはり植林をしております。全国50の空港がありますが地域に、今34カ所の「私の青空ANAの森」を植えている最中です。また、沖縄の珊瑚礁が今、随分傷んできておりますが、ダイバーとともに珊瑚を植え付ける作業も行っております。微力ではありますけれども、社会貢献と地球の温暖化防止に努めてはおります。ぜひ、今後も継続したいと思います。

また、明日は朝7時半から、私も最も楽しみにしております、震災の被災地である東北の畠山様から、新たな基調講演をいただきます。その講演とディスカッションで、環境に対する認識をさらに深めていただけるものと思っております。3月11日以来、私どもが抱えておりますエネルギー、電力に対する大変な危機感は、今後も続いていくものと思いますけれども、ぜひその危機を、今日お集まりの皆様とともに乗り越えて、さらに九州から元気を全国に発信するという思いを込めて、このシンポジウムを成功させて参りたいと思います。引き続きご支援のほどをお願い申し上げまして、私の挨拶といたします。

創立25周年記念シンポジウム

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 甲斐 隆博 氏（株式会社肥後銀行 取締役頭取）

皆さん、おはようございます。小鳥のさえずりとともに目覚め、非常に爽やかな朝を迎えていらっしゃると思います。こういう自然の中でオペレーションをするというのは、企業人が環境との関係を考える場として、非常にふさわしいのではないかと思います。ゴルフ場が見えますが、この午前中はお勉強を中心にお付き合いください。

また、昨日は、勉強会で私の話を聞いていただきましたが、その後の懇親会で皆様方とお話しさせていただきまして、非常に問題意識が高まったことが確認できました。本当にありがとうございました。ぜひその問題意識を持ち続けていただければと思います。

本日は、CSRを考えるに当たりまして、全く違った分野の方々のお話をお聞きします。環境、あるいは自然の中で実際に活動しておられる方々のお話の中から、いわゆる環境というものに対する理解と、企業人としての社会的責任というものをどのように考えていったらいいのかを学ぶ時間帯となります。どうぞよろしくお願いいたします。

朝の7時半から、頭をフルに回転させるという機会は、なかなか日常の生活ではありません。しかしながら、九州経済フォーラムの小早川理事長を中心としたグループは、大体、朝、早起きであります。これが「九州経済フォーラム流」ということで、今日の午前中はぜひ新鮮な頭で考えていただき、CSRにつきましても、いろいろな受け止め方をしていただければ大変ありがたいと思います。

昨日の懇親会では、「虎舞」の時に矢頭副会長が大変盛り上がられましたので、虎舞について少しお話しさせていただきますと、私どもが大観の森で植樹を始めた時に、地元の方々にお昼ご飯を用意していただきました。その折、せっかくのご縁なのに、地元のご飯を用意いただくだけではもったいない、地元小倉地区に伝統的に続いていた「虎舞」をお見せしたいという気持ちが生まれて、30年ぶりに復活することになったのです。当時75歳で、昔実

際に舞った方がいらしたので、舞いの様式や動きがきちんとまだ残っておりました。そのお爺さんを中心に小倉地区の人たちが一生懸命練習して、あの「虎舞」が復活したわけです。最初に舞っていただいた時は、二段でございました。翌年舞いましたら、一番上に小さな子供さんが乗っかって、三段のものができたのですが、そのお子さんが年々成長して、だんだん重くなっているそうです。ですから、一番下で支えておられる方も、最初からやっていらっしゃるのですが、もう重くて重くて、肩が痛くて、ようがないと言っておられます。子供の成長って、非常に早いものです。

これは、我々企業人がそのような社会的貢献活動に出ていきますと、何かしらの刺激を地元の方々にも与えて、伝統文化が継承されていくという生きた事例ではないかと思っております。ちなみに、あの虎舞の面は、借りて舞っていらっしゃったので、私どもが寄付させていただきました。今は、堂々といろんなところで舞っていただけるようになっております。本当に文化というものは、それを楽しむ人たちも一緒になって保存していくことが必要だと感じた次第であります。昨日は、そんな盛り上がりも経験させていただきました。ありがとうございました。

それでは本日は、畠山さんをはじめとして、京都大学の田中さん、そして畑さん、小関さんの4人のお話をお聞きしたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

ありがとうございました。

基調講演

テーマ

「森・里・海の連環
～林業と漁業の同時再生を目指して」

講師

NPO法人森は海の恋人 代表

畠山 重篤 氏

東北沖地震の津波による被害を受けた三陸リアス式海岸に位置する宮城県気仙沼湾で牡蠣やホタテの養殖業を営む。フランス・ブルターニュ地方やスペイン・ガルシア地方を訪ねた経験を経て、森・川・海の関係に目を向けた。1989年に「牡蠣の森を慕う会」を仲間とともに立ち上げ、漁民による植林活動「森は海の恋人運動」を続けている。漁師たちが山に大漁旗を翻らせて木を植えるエピソードは、小学校の教科書でも紹介された。代表を務める（NPO法人森は海の恋人）で最も力を入れているのが環境教育。全国から訪れる子供たちを体験学習などで毎年500人受け入れ、現場で五感を通じて森と海のつながりを教えている。
著書に「漁師さんの森づくり」（講談社）、「森は海の恋人」（文春文庫）、「リアスの海辺から」（文春文庫）など。今年6月には、森と海をつなぎ、牡蠣を育むのは鉄だということから「鉄は魔法つかい」（小学館）を出版。
1999年「みどりの日」自然環境功労者環境庁長官表彰。2000年環境水保賞受賞。2004年第52回日本エッセイスト・クラブ賞などを受賞。

皆さん、おはようございます。私は、この度の震災の被災地の真っただ中に位置する、宮城県の気仙沼というところから参りました。3月11日のことは、まだあれから日も浅いことですし、今もトラウマのように頭の中を占めております。3月11日午後、仕事をしておりましたら地震がありまして、それから30分後に津波が来ました。九州にいますと、皆さんはなかなか津波のイメージがわかないかもわかりませんけれども、三陸沿岸には津波の歴史がずっとあります。私も50年前のチリ地震津波を高校2年生の時に経験しておりますので、あの程度のものが来るのかなということで、その辺のものを片付けたり、チリ地震の時の水位を想定して、いろいろ段取りをしていました。

ところが、今度の津波はケタが全く違う津波であります。我が家は海抜20数mの高さにあるんですけれども、その庭のすれすれ、ぎりぎりまで津波が来てしまいました。うちの地区は小さな入江に面する、家がわずか52軒の集落なんですけれども、何と52軒中44軒

の家が流されてしまいました。チリ地震津波の時は床上浸水の家が1軒ありましたけれども、流された家はありませんでした。その前の津波は昭和8年、その前は明治29年という風に津波の歴史は続いておりますが、こんな被害に遭ったことは歴史的にないわけですね。しかし、今回は気仙沼という漁業中心の町だけで約1000人の犠牲者がありまして、まだ300人以上が行方不明であります。この文明国においてさえ、全体で2万人を超える犠牲者が出るようなことが、現実に起こったわけですね。

東北大学が調べましたところ、このような巨大な津波というのは、今から千二百数十年前の貞観という時代にあったことが、地質の調査でわかっております。その前はじゃあ、いつ津波があったかというと、何と弥生時代だそうですよ。ですから、弥生時代があって、貞観があって、今回の平成という、文字通り1000年周期の長いスパンの中の一コマに、今、自分は立たされているということです。文字通り想定外の出来事であります。昔から、三陸海岸の人間は一生のうち大体2回津波に遭うと言われております。今はもう明治の津波の経験者はほとんどいないわけですけれども、昭和8年に津波を経験して、50年前のチリ地震津波も経験している90歳近い方々は、今回は人の背中に負ぶさって避難したんです。人生の終わりに近いそのような時に、巨大な津波に遭ってしまったということで、嘆き悲しんでいるようなところが現状でございます。

今、復旧に向けていろんなことが動き出しております。私は先ほどのご紹介にありましたように牡蠣の養殖をして、海で働いている漁師なんですけれども、時々山へ行って木を植えるようになって、今年で23年目になります。それも杉じゃなくてナラとかクヌギとか、秋になると葉っぱが落ちる落葉広葉樹を植えるという運動を続けております。「森は海の恋人運動」と名付けています。

さて、今回、九州経済フォーラムの25周年記念という区切りの時にお招きをいただきましたことに、私は非常に個人的な因縁を感じております。と言いますのは、私の祖父は明治20年生まれですけれども、実は熊本五高で学んでいるからなんです。あの東北の寒村から何で熊本五高へ来たんだろうということで、私は祖父の足跡を訪ねて、実は熊本には何回か来ております。それで祖父の同級生を調べてみましたら、その代表的な方に、あのミズーリ号で調印した重光葵がいるんですよ。彼は大分の日出出身で、日出には重光葵記念館があります。そこへ行ったら、何と重光葵がうちの祖父と写った写真が貼ってあったんです。ですから、今日、私が阿蘇のこの地にいて、このような形でお話しさせていただくというのが、私個人にとりましては何か因縁めいた、非常に歴史的なことになりそうです。

我が家は今は、本当に小さな仕事ですけれども、養殖業を中心に販売をしております。しかし、遡っていくと400年ぐらいの歴史があるようでして、以前は林業と言いますか、いわゆる山林地主でした。昔は燃料は薪でしたので、雑木林でも持っていれば、石油を持っている、エネルギー源を持っているのと同じことで、お金になったわけですね。もちろん山の木材は高かったですから、山持ちイコール金持ちというようなことで、そんな経済的背景もあって、祖父は熊本五高まで来ることができたんじゃないかと思っております。祖父は私が5歳か6歳の頃に亡くなりましたけど、どういうわけか英語が非常に得意であったようで、小さい頃の私にしきりに英語を教えようとしていたのを、かすかながら記憶しております。あの五校の記念館に行きますと、昔の教室がありますよね。あそこの教室の机は本当に小さいんですよね。ああ、昔の人の体格というのはこの程度なのかという風なことも、よくわかりますね。

さて、その我が家の持ち山からは細い川が流れ出ておりまして、それが海まで続いておりました。ですから、昔は海側から細い小川を遡ると、水田があって、それから山があって、地続きで海から山まで自分のものだという時代がずっと続いてたわけですね。河口では、昔は海苔が採れました。海苔といえば江戸では浅草海苔というのが有名なんですけど、三陸の気仙沼というところは、秋口から寒くなってきますと、日本で一番最初に養殖の海苔が採れるところです。昔はその海苔が全部、非常に高価なお正月の贈答用の浅草海苔というものに化けたわけですね。ですから、海苔の種場というのはものすごい価値がありまして、かつて我が家ではそういうこともやっておりました。

ただ、うちの親父は次男でした。戦争

から帰ってきて、これからどうしようかと思った時に、目の前に足りない食料を調達できる海が空いておりました。100年前から牡蠣の養殖という仕事も始まっておりましたので、じゃあ、そういうことでもやろうかと、親父の代から今の牡蠣の養殖業という仕事が始まったわけです。私が二代目でありまして、今、三代目の息子たちが後を継いでおります。四代目を継ぐ予定の孫が、もう小学4年生になりましたので、私は既にいろいろと教育を開始しております。今日いらっしゃっている京大の田中先生も三陸の海で研究をされていて、時々我が家にも泊まっていただくんですが、孫たちは既に田中先生にもいろんなことを教わっております。何とかこの津波を乗り越えて海の仕事を復活させようと、頑張っているところです。そういう漁師であります私が、何でそんなに山に行ってるのか。しかも今年の6月5日も23年目の植樹祭をやりまして、全国から1200人もの方が来てくださいました。なぜそんなに来ていただけるのか。その意味は、これから先の話でだんだんわかってくるんじゃないかと思います。

私は熊本には何回も来ていますが、阿蘇に来たのは初めてです。なかなか時間がなくて阿蘇まで来る機会がなかったので、本当に今回はラッキーでした。ただ、昨日もちょっとお話しましたけれども、草千里のイメージばかりで来ましたので、草千里の裾を取り巻くように黒い杉山がこんなに多いとは、夢にも思っておりませんでした。ああ、やっぱりこれは日本の縮図だなあと、つくづく思いました。

私は、水の都熊本というのはよく知っております。昨日の肥後銀行の頭取のお話は、単に飲み水がうまいとか、使う水に不自由しない、地下水が日本一だとかいう説明ばっかり多かったんですけれども、実はこれは有明海の恵みとくっつけて考えないと、本来の水の恵みということの意味の深さが抜けているということになります。肥後銀行のあの取り組みの中に、実は阿蘇の水は有明海の恵みにまで関連しているということがプラスされれば、このことの意味はケタの違うものになるということを、今日、実はお話ししようかと思うわけです。それは単なるきれいごとではありません。環境と言うと何となくきれいごとに聞こえますけれども、環境とか経済というものを超えた

日本本来のあり方、日本のグランドデザインをどうするかということが、実はこういうことの意味の中に含まれているということが、私にはだんだんわかって参りました。

私は牡蠣の養殖業をしている漁師ですので、以前は海ばっかり見てたわけです。しかしある時、牡蠣の育ちが悪くなったり、海が汚れてきて牡蠣が死んだりといった問題は、太平洋の沖の方から来るわけじゃなくて、全部内側の陸側、つまり人間の側からの要因で、沿岸域の海がおかしくなってくるということに気がつきました。それは当然、個人ではどうしようもない問題でありますから、漁業協同組合でありますとか水産試験場でありますとか、そういうところと相談をしていたんですが、そういう方々の思考は、どうもそれぞれの研究分野とか行政の管轄とかの範囲だけで、部分的にしか物事を考えていないということにだんだん気がついてくるわけですね。いわゆる縦割りということです。

特に私たちの気仙沼というところは、宮城県の一番北のはずれでありまして、岩手県と隣接しておりますから、私たちはよく「宮手県」なんて言ってるんですよ。気仙沼湾に流れてくる大川という二級河川も、川が流れ込む海は宮城県なんですけど、川の上流は岩手県なんですね。きれいな気仙沼湾を取り戻そうとする時に、やっぱり川からいろんな問題が発生しますから、その川をきれいにしなきゃいけない。しかし、川を下流から上流まで歩いて行ってみますと、県をまたがなきゃいけないんです。源流も河口も同じ県内であれば、物事を考える時にすごくやりやすいんでしょうが、縦割り行政の中で県をまたぐって、実に大変なんですよ。諸々の問題がそこに含まれているんですね。

それで、いろんな方々と相談してみましたし、学者の方々とも相談してみましたけれども、どうも皆さんは部分的な思考しかお持ちでなくて、これではちょっとどうしようもないなと思いました。もちろんその時、何もしないであきらめるという選択肢もあったわけですけれども、それでは何も変わりませんよね。私はその時45歳で、いい加減子供たちも大きくなってきておりましたし、やっぱり次の世代のことを考えると、誰かがどこかの時点で、何かを決断しなきゃいけないということを、だんだん考えるようになりました。でも私は、もちろんお金もないし知識もない、単なる一介の漁師です。その一介の漁師に何ができるかということですが、45歳ですから、ある程度、諸々の経験はしております。行政とか学者の方に先頭に立って行動してもらうのは到底不可能に思えましたから、冷静になって考え、仲間といろいろ相談しているうちに、我々で何かできることをやってみようということになりました。何か小さいことでも実際に行動に移してみれば、そこから派生してくるものがあるんじゃないかというのは、自分の経験則でもありますのでね。

元々沿岸域の、海の近くにあります森は、江戸時代から「魚付き林」と言いまして、みんなで守っていたわけですね。今でも海の近くの森は、魚付き保安林という形で、九州でもあちこちで守られていると思います。それは、沿岸の森を伐ってしまうと魚が寄りつかなくなる、魚が獲れなくなるということを、みんな経験的に知っているからですね。ただ、沿岸域の森を伐ってしまうとなぜ魚が獲れなくなるか、あるいは森があるとなぜ魚が寄ってくるかという風な科学的なメカニズムは、当時はほとんどわかっていませんでした。もちろん漁師は、光を遮る陸のところ、暗いところに魚が寄り付くということは知っていましたよ。ですから、真っ昼間は誰も魚を釣りに行かないで、みんな朝早くか夕方かに釣りに行くわけです。

ところが、海辺の森だけじゃなくて、海からかなり離れている川の流域の森とか自然というのも、魚付き保安林という風に考えなきゃいけないんじゃないかと、私は思ったわけです。それは、フランスに牡蠣の養殖の視察に行った時の記憶が甦ってきたからです。20数年前、私は牡蠣の養殖の歴史が深いフランスの沿岸部を旅したことがありました。フランス北部のブルターニュ地方との境に、ロワール川というフランスで一番でっかい川があります。その河口の海へ行ってみましたら、牡蠣がすごく元気がいいんですね。それで、その牡蠣の殻をよく見てみましたら、自分が作っている牡蠣と非常に似ているわけですよ。「あれっ！？　何だろう、この牡蠣」と思って、フランスの同業者とちょっと話をしてみましたら、実はその牡蠣は、50年前に日本の宮城県から来た種の子孫だということがわかったんです。

実はフランスでは元々、ブロンという平べったい丸い牡蠣を養殖していました。学者はヨーロッパヒラカキと言ってますけれども、そのブロンにウィルス性の病気が出まして、ほとんど全滅しかけるわけです。フランスと言えば、ご存知のようにもう牡蠣なしでは暮らせない国民性ですから、すごい危機感を感じて、いろいろと手を打つんですね。その頃、アメリカのシアトルには既に、宮城県の北上川の河口で採れる、通称宮城種という牡蠣の種が渡っておりました。牡蠣養殖の父と言われる沖縄出身の宮城新昌という方が、100年前にそういう事業を始めて、三陸の牡蠣がアメリカの西海岸で大きく育つということはわかっていたんです。シアトルはカナダ国境のすぐ近くですよね。カナダはフランス人がたくさん移民した国ですから、そういう牡蠣の情報は、カナダ経由でフランスにも流れていたわけですね。

それで、じゃあこの宮城種をフランスで育ててみようかということになって、東北大学にいらした今井丈夫という牡蠣の先生を中心に話が進み、実際にフランスに持って行きましたら、やっぱり気候とか水温、水質というのが非常に合ったんでしょうね。その牡蠣が非常にうまくフランスで育つようになりました。それ以来、牡蠣の種がエールフランスの飛行機で、日本からヨーロッパへ渡っていったんですね。私は、フランスと宮城県は牡蠣を通じて密接な関係にあるということを、改めてそこで知ったわけです。そういうことがわかると、フランス人は非常に陽気ですから、すぐシャンパンを抜こうということになったり、ご馳走になったり、そういう楽しいことがたくさんありました。

ロワール川の河口は、有明海と同じように干満の差がすごくあるところで、フランスでは牡蠣をその干潟にバラまいて養殖しております。干潟に行きますと水たまりがありますね。そこを見ましたら、牡蠣だけじゃなくて、小さい魚だとか蟹だとか、カレイの子供だとかイソギンチャクだとかヤドカリとか、ああいう小さい生き物がものすごくいるんですね。昔の有明海と同じような感じです。三陸の海も、私が子供の頃はそういう海でした。ところが、自分の子供にも見せようと思ったら、いつの間にか目の前の海からそういう生き物がかなり姿を消してしまってたわけですね。けれど、フランスの海にはものすごくいるわけですよ。何でだろうなと考えて、ハッと気がついたんです。今まで海ばっかり見てたけれども、ロワール川のここは河口じゃないかと。牡蠣の養殖というのは、全世界、川の水が海の水と混じり合う汽水域で行われます。有明海はその典型なんですよね。これがキーワードでありまして、こりゃあ海ばっかり見てないで、川を見なけりゃいけないんじゃないかと思ったわけです。

フランスの旅は、ちょうどそこで半分だったものですから、今夜はお祝いしましょうということで、レストランへ行きました。そして、その地の名物料理を出してくださいと言ったら、何が出てきたと思いますか？　シラスウナギのパイ皮包みというのが出てきたんですよ。ウナギの稚魚の、あのシラスウナギです。高いじゃないですか。去年なんかもう大不作で、今年はウナギの値段が上がりましたよね。そのシラスウナギを名物料理にして食べてるわけですよ。アップルパイみたいな、あのパイ皮の中に詰めてオーブンで焼いたもので、おいしいんですよ。そういう料理があることに、私はびっくりしました。

なぜかと言いますと、私は若い頃、自分の目の前の海でウナギを獲るアルバイトをしてたからなんですね。山へ

行ってクヌギとかの雑木を切り、それを束ねて胴柴というものを作って、ドボッと海に入れとく。そして、雨が降って水が茶色に濁るのを待つわけです。それから小さい小舟で行って、大きなタモで胴柴をすくって揺すると、その中からこんなに太いウナギが飛び出してくるんですよ。一つの胴柴から20匹ぐらいも出てくる。ですから、胴柴を20～30個も仕掛けておきますと、木造船の小さい舟の底が全部ウナギで埋まるんですね。でも、そんなのは日本中どこの海だってそうだったんです。それがパタッと1匹もいなくなった。そういう経験がありましてフランスへ行きましたら、なんとシラスウナギを食べてるわけじゃないですか。去年はシラスが不足で、どんどん値段が上がりましたね。シラスの流通経路もかなり複雑ですけど、最終的には1kg100万までいったという話もありますよね。それをフランスでは平気で食べてる。ショックは大きかったですね。

それで、これはやっぱり川を見なきゃいけないということで、川を上っていくと、今度はロワール川が川魚ですごく有名な川だということに気がつくわけですね。川の流域のレストランの看板に掲げてある名物料理を見ると、そこで何が獲れてるかというのが大体わかるじゃないですか。たとえば有明海から阿蘇まで来る間に、レストランの名物料理がだんだん違ってくるのと同じことです。ロワール川の中流域にかけては、川魚のレストランの案内がよく出ております。さらに上流の近くへ行ってみますと、野生の鳥だとか野生の動物の看板がやたらと目立ってくるわけですよ。これからの秋のシーズン、フランス人は食べ物の中で何を一番良しとしていると思いますか？

パリへ行きますと、もちろん店に牡蠣は山のように並んでおりますけれども、鹿とか猪とかキジとか山鳥とかシギ、ああいう野生の動物たちの料理をジビエと言うんですけれども、これを一番良しとしているんですね。なるほどなと思いました。

それで、川の上流に上がっていって周りを見ましたら、杉山じゃないんですよね。落葉広葉樹の大森林地帯なんですよ。なぜかと言いますと、よく知られている話ですが、その辺りは昔の王様の猟場だったわけです。森には森番がいまして、王様がいつ狩りへ行くと言いだしてもちゃんと狩りができるように、森と動物の状態を把握して、段取りしておかなきゃいけないんですね。鼠というのは大掛かりなものですから、王様が狩りに来て獲物が獲れないとなったら、森番が叱られるわけですよ。ジビエが獲れるような森を作るということは、つまり実のなる落葉広葉樹の森をちゃんと管理しておかなきゃいけないということじゃないですか。これにも、なるほどなと思いました。

私たちは環境と言うと、何かの反対運動に結びつくことが多いせいか、どこか行政用語みたいな感じで受け止めたり、倫理的な問題のように考えますけど、食欲の側から言った方がすごく気が楽になりますし、楽しくなるということですね。おいしいジビエを食べたい、川の川魚を食べたい、そして牡蠣とかオマール海老とか、海の幸を楽しみたい。そう思うなら、川の流域の環境、特に森林環境をちゃんとしておくというのが基本だということです。そこに私はフランスで気がついたわけですね。それもこれも私が牡蠣の養殖をしているからです。若い頃からフランス料理のシェフたちと交流があって、そういう話を聞いておりましたし、本も随分読んでたんですよ。だから、実際にフランスに行ってみて、なるほどと思ったわけです。

日本だって海へ行けば、寿司をはじめとして、おいしい海産物がたくさんあります。ただ、日本の文化人は、たとえば江戸前の寿司をありがたがって、みんな蘊蓄を傾けますけれども、寿司屋の親父の技術がどうだとか、握えているところが非常に限定的ですね。でも、たとえばお寿司、高い寿司を食ったとしますね。一貫で500円とか、ヘタすると1000円の寿司もあるわけですね。あの寿司の中で、シャリ代はいくらだかご存知ですかね？

あれはどんなに高い寿司だって、たった20円だそうですよ。だから1000円の寿司を食っても、実は980円は寿司の上に乗っけるネタ代なんですよ。じゃあ、そのネタをおいしく食べられるのは、寿司屋の親父の技量だけの問題ですか？　違いますよね。ネタそのものが良くなきゃしょうがないわけじゃないですか。このおいしいネタはなぜ獲れるのかというメカニズムを知らずに放っといて、それで今まで我々はずっと生活して、そういうのを食ってたわけですよ。東京の高い寿司屋へ行くと、座っただけで3万とか5万に

なるところもあるんですね。私も文芸春秋から本を出しておりますので、一回だけ東京の高い寿司屋に連れて行かれましたけど、まあひどいものですよね、本当に。

ということですので、今日の話も寿司を半値で食うにはどうしたらいいかと考えるようにした方が、少し気が楽になります。だから、肥後銀行の頭取も、どうやったら寿司を半値で食えるだろうか、そうなれば行員たちを時々連れて行っても大丈夫だという風な思いから、実は木を植えているというのであればいいなと。私はそれぐらいの余裕を持っていただきたいと思っているわけですね。冗談はさておきまして、やはりこれは川の流域をちゃんとしておくことが最も重要なんだということに、私はだんだん気がつくんですけれども、残念ながらそのメカニズムは、その時点ではわかっていませんでした。

それから、川の流域にはいろんな問題があります。気仙沼は水産の町ですから、水産加工場がいっぱいあります。それも全部津波でやられてしまいましたが、気仙沼は小さな町にもかかわらず、水産加工品だけで実は約700億ぐらいの産出額があるんですよ。でも当時に廃水基準がゆるいですから、魚を加工した汚い水を、そのまま海へ流しているという状態でした。河口にはそういう問題がありますし、もちろん住宅からは生活排水がどんどん流れてきます。それから、少し川の上流へ上がって行きますと、今度は水田地帯になりますね。これはどこでも同じですけれども、水田には農薬とか除草剤の問題があるわけです。うちのお袋が農家でしたので、私も子供の頃、よく田植えの手伝いに行きましたけれども、たとえば今日行った水掛の棚田で田植えなんかすると、カエルとか生き物がいっぱいいて、賑やかだと思うんですよね。ところが、下の方の本職がやっている田んぼに行ったら、シーンとしてるはずなんです。なぜかと言うと、除草剤や農薬を使ってるからです。この間、久しぶりに行った田んぼがあまりにもシーンとしているので、農家の方に聞いてみましたら、今さら手で草取るわけにもいかないからしょうがないんだ、農薬を使わなければもちろん田んぼの生き物も増えてくると言うんですね。そんな話を聞いて、レイチェル・カーソンという人の『沈黙の春』という本を思い出しまして、これはそういう世界なんだなということを何となく学びました。

それから今度は川の中流域に行きますと、川が狭まってきて、いっぱい看板が出ていたりします。ダムを造るという計画があるわけですね。今日は経済界の方々の集まりですから、土木建築の方もいらっしゃると思いますが、あえて言いますよ。ダムは洪水とかいろんなことがあって、人間の生活のために必要なものですし、私も何にでも反対するというわけじゃないんですけれども、結局ダムというものは、海にとって致命的なものなんです。これだけ怖いものはないんですよね。日本列島は真ん中に脊梁山脈がありまして、二級河川まで含めると3万数千本の川が日本海と太平洋に流れ落ちています。ところが日本の場合、この3万数千本中、ダムのない川なんてほとんどないんですよ。

フランスのロワール川にも昔、洪水がありまして、洪水防止のためにダム計画があったんですけれども、フランスはこの時、大英断を下してダムを造りませんでした。日本でしたら、洪水で被害を受ける住民の方々を殺わなきゃいけないから、ダムを造るというのが当然のことなんですけれども、フランスがどういう決断をしたかと言いますと、洪水になりそうなところの方々にちゃんとお金を払って、全部高台に移転してもらったんです。そういう風な選択をしちゃったんですね。これは後でわかったことなんですけど、ああ、そういうこともこの国の人々はやってるんだなと感激しました。それはやっぱり、おいしい牡蠣を食いたいためかなと思いましたけど、そういうことを許容する市民にも、何か川や自然に対する意識があるんじゃないかと私は思いましたね。

我が気仙沼に流れている川にも、そういう問題があるということがわかりました。これは大変なことだと思って、私はそれから山へ行くようになるわけです。山と言えば、私が子供の頃、うちの親父は村田銃という弾が一発しか出ない鉄砲を1丁持っておりました。とにかく昔は、車の道がないような不便なところで自給自足のような生活をしておりまして、夏は魚が釣れますけれども、冬になると釣れませんから、お袋はおかずに困るんですよ。それで冬場、親父は村田銃をかついで、飼っていた犬と山へ行って、キジとか山鳥とかウサギとか、そういうものを撃ってたんですね。私はそれについていってましたので、どういうところにキジや山鳥がいるか見ておりました。それは決まってるんですよ。実がなる雑木林でないといないんですよね。杉山の中には鳥一羽いません。私は阿蘇へ来て、まさかこんな杉山に囲まれたホテルに泊まるとは、夢にも思ってませんでした。これはもう象徴的な話ですね。

これは何も杉が悪いということじゃないんです。私の先祖も大きな杉を育てていました。昔は舟を作るための舟材というのが、ものすごく高い値段で売れましたから、本当にでっかい杉の木を1本植えれば、1年暮らしていけるような時代だったんですよね。そういう恩恵を受けておりましたから、何も杉山批判ということではないんですけれども、何にしてもやり過ぎていると思います。杉は最初、一町歩に大体3000本植えるんですよね。そして、ある程度まっすぐに育てなきゃいけないですから、20～30年たったら間伐して良い木を残し、間伐材を売った分で大体それまでの経費を取って、あとは儲けというのが、林業のあり方ですよね。それがご存知の通り、貿易の自由化と為替の問題がありまして、林業全体の仕組みが崩れてしまいましたから、山はもうこの通り、日の光が全く差し込まない暗闇の世界になっています。本当に私はこの景色を見て、ぞっとしましたね。草千里のきれいな緑を黒い杉が取り巻いて、着物の柄で言えば縞が黒い縞じゃないですか。景観的にもこれは問題ですね。

ですから、この杉をどうするかという秘策も今日はお話ししなきゃいけませんが、その前に、森と川と海が科学的にどういう風につながっているかということを、勉強していただかなければいけないわけです。そのことを教えてくださった方が、今は北海道大学の名誉教授でいらっしゃいます松永勝彦という先生です。この先生も、実は熊本ととても関係のある方なんですね。水俣市が「環境水俣賞」というのを十何年か前に作りましたけれども、その第1回の受賞者が、実は松永先生なんです。この方は四日市出身で、京都の立命館大を出まして、分析化学を専門に研究されました。水の中に含まれている微量金属とか、そういったことの分析の第一人者なわけですね。この方の業績の中で最も評価されているのは、海水の中に含まれている水銀の量を世界で最初に正確に測ったことです。あの水俣病は、チッソという会社から流れている有機水銀が原因だと、みんな薄々は感じてたようなんですけど、最初はそれを証明できなかったんですよ。自然界の海水に含まれている水銀の量がちゃんとわからないと、比較できませんからね。だから分析化学というのは、ものすごく重要なものなんですね。それは海水1ℓ中たった10億分の1gという、ナノグラムの世界なんですよ。そういう世界ってものすごく難しいことなんですね。その分析を世界で一番最初に成功したということで、ネイチャー誌にも2回ほど論文が載っています。松永先生はそういう業績のある方です。

その松永先生が北海道大学へ行きまして、北海道の海岸を見てみましたら、ちょっと不思議なことに気がつくんですね。函館の日本海側は松前とか江差というところで、太平洋側には噴火湾があります。噴火湾の方は、海岸に昆布がいっぱい生えて、魚もいっぱい獲れるし、すごく豊かな海なんですけど、日本海側は磯焼けと言いまして、海の岩に海藻が全く生えない、丸坊主の海の世界が広がっているわけですよ。それまでの水産学の先生方は、その原因は海の中にあると見ていました。つまり海しか見てなかったわけです。ところが松永先生は分析屋ですので、これはそこに流れ込んでいる川の水に何か原因があるんじゃないかという疑いを持ったんですね。函館の噴火湾側の海はものすごく昆布があるけれども、その日本海側の松前・江差の方は昆布は出てない。同じ対馬暖流という暖流が流れているのになぜだろうということです。

松永先生も水産の先生ですから、最

初は海ばっかり見てたんですけど、ふと思いついて海から山を見たわけですよ。そしたら、函館の北、噴火湾側の海っ縁は、海に垂れ下がるように森が迫っているんです。その辺りは南茅部というところなんですけど、そっちへ車で行くと「ヒグマに注意」という看板がいっぱいあるんです。つまり熊がいる。ジビエがいっぱいいるんですよ。それは、実のなる木がいっぱいある、落葉広葉樹の大森林地帯があるということです。しかも南茅部というところは、天皇陛下に献上するような、日本で一番良い昆布が採れているところです。さらに、たった50kmの範囲に小さい川を入れると90本も川が流れているんですね。

ところが、松前・江差の方へ行ってみますと、昆布はまったくありません。こっちは昔はニシンが獲れていたところです。九州の方はニシンと言ってもピンとこないかもしれませんが、昔は、東京からあのでっかい貨車にニシンを積んで並べると、京都の近くまで行くぐらい、ニシンが獲れていた時代があったんです。その当時は、海岸にホソメコンブという昆布がジャングルのように繁っていて、それに産卵するためにニシンが群をなして来てたんですよ。ところが、その昆布がなくなってたしまった。しかし、それは海にだけ原因があるという風にしか、見られてなかったんです。そこで先生が日本海側の背景の山を見ましたら、こっちは山が貧弱なんですね。

実は、これはまた皮肉なことなんですけれども、ニシンがいっぱい獲れて、これをどう処理したかというと、まずニシンを煮て、搾って脂を採るわけです。そして、その搾りカスは北前船に乗ってずーっと瀬戸内海まで渡り、おそらく九州にも少しは来て、藍とか綿とか高級な農作物の肥料になったんです。ニシンを釜で炊くには薪が要るから、近くの森からどんどん木を伐っていった。そういう問題が一つはありましたし、それから明治以降、日本は国策として北海道にたくさん人を入れて開拓しましたよね。開拓の歴史というのは、森林をどこまでも切り開くという歴史じゃないですか。そういうことで、函館の日本海側の山は、行ってみると本当に丸坊主なんですよ。松永先生は、山が丸坊主になって森の養分が海に流れてこなくなったことが、海藻が生えなくなる原因ではないかという疑いを持って川の水を調べました。そしたら、やっぱりそうだということがわかってきたわけですね。

その分析でわかった成分的なカギは何かと言いますと、皆さんは「なーんだ」と思われるかもしれませんけども、それは鉄です。今日はJRの社長さんもいらっしゃいますが、JRなんて名前になって鉄の字も抜けましたけど、元は日本国有鉄道じゃないですか。昔から日本はものすごく川が多い国ですから、鉄橋が多いんですよね。鉄橋の下ででっかいシジミが採れるという話は、昔から有名ですよ。私はJR東海の雑誌にそのことを書いたことがあるんですけど、あんまり反応はありませんでした。JRの職員ももっと勉強してほしいなと思いましたね。このことがわかれば、観光キャンペーンもきっと全然違ったものになるという風に、私は思うんですけどね。

鉄っていきなり錆のようなイメージがあって、環境に悪いんじゃないかと思いますよね。でも、九州にも新幹線が通りましたけど、新幹線の線路脇に住んでいる人で、病気になった人はいませんよ。鉄は人間の体にとって害はないわけです。だから、鉄道は日本中どこでも通っている。線路がもし他の金属で、銅か何かでできていたら、えらいことですよね。つまり、鉄は生命にとって害がない。害がないどころか、とても大事なものです。私たちの体を流れる血液の中にヘモグロビンという赤い色素がありますけれども、この赤い色素の中心的なものは鉄です。だから、子供の顔色が悪くなると、お母さんはレバニラ炒めを食べなさいと、一生懸命、鉄分の多いレバーを食べさせようとしますね。レバニラ炒めは、ニラと一緒に食べると鉄の吸収が良くなることからできた料理ですよ。中国人があんなに元気なのに、実に鉄鍋で作った炒め物を食っているからですよ。本当ですよ、これ。昔は鉄瓶でお茶を沸かしていたのも意味があるんです。それで、人間の体の中の鉄は、これはもうご存知のように、酸素をくっつけて体の隅々まで運ぶという重要な役割を担っています。鉄が酸素を運べなければ人間は終わりですよね。呼吸できませんから。

医学部の学生が最初に受ける講義では、シアン化合物、つまり青酸カリを飲むと人はなぜ死ぬかと、教授が学生たちに質問するそうです。それは毒だ

からと言った学生は、お前は明日から来なくていいと言われます。これはなぜかと言うと、シアン化合物というのは鉄との相性が酸素より良いからなんですね。水に溶けた鉄イオンに、酸素分子がくっつく前にシアン化合物がくっつく。そうすると、酸素がくっつこうと思っても鉄にくっつけない。結局、血液が体の隅々に酸素を運べなくなりますから、あっという間に窒息死する。これがシアン化合物の怖さですね。

それで、鉄は酸素をくっつけて体の隅々に行って、そこで一旦、酸素を離します。そしてまた他のものをくっつけて、体のこっちへ帰ってくるんですけれども、鉄がすごいのはここです。この物をくっつけたり離したりという芸当ができるのは、実は鉄だけなんですよ。なぜこういう性質が鉄に与えられたかと言いますと、今日は詳しく話す時間がないんですけれども、実は138億年前のビッグバンの世界まで話が行ってしまうんですね。ただ、鉄のこういう性質を利用して、生物は生きているということを覚えておいてください。酸素をくっつけることを酸化、酸素を離すことを還元と言いますね。酸化と還元。皆さんの中にも還元セールを随分おやりになっている方がおられると思いますけど、還元セールと言えば、何か安売りするような感じですよね。でも、還元の本来の意味からすれば、お店が儲けなきゃいけないのをお客さんに返していくのが還元ですよ。話がそれましたが、つまり酸化・還元、これをやれる一番中心的なものが鉄だということですね。

動物にとって鉄は、酸素を運ぶという重要な役目をしておりますけれども、じゃあ植物にとって鉄はどういう役目をしているんでしょうか。植物の緑色の色素はクロロフィル、葉緑素ですね。この緑色の色素が炭酸ガスを吸って酸素を吐き出す役目をしております。この緑色の色素ができるのに、植物の体の中では、どうしても鉄が要るんですよ。なぜ鉄かということを説明するのには、また時間がかかりますので、それは今日はやめますが、とにかくそういう風に覚えていただきたいと思います。それから、地上の植物は根っこから窒素とかリンとか肥料分を吸収しますね。この時に植物は、またどうしても鉄の力を借りないと、肥料を吸収できないんですよ。

皆さん、夕べ温泉にお入りになった方もたくさんいらっしゃると思いますが、あの温泉に入ってお気づきになったこと、ありませんか？　ああいいお湯だったと、それじゃだめですよ。あの温泉の茶色い色は鉄ですよ。これは火山と関係しております。これから登場する田中先生は、レジュメに「地球は水の惑星」と書いておられますけれども、実は「地球は鉄の惑星」と言わなきゃいけないんですね。7年ぶりに「はやぶさ」という小惑星探査機が帰ってきましたね。あのプロジェクトは川口淳一郎先生という方が代表者なんですが、私は去年、川口先生と対談する機会があったんです。牡蠣漁師と宇宙工学の先生がなぜ対談するのかというと、共通項は鉄なんですね。

「はやぶさ」は、イトカワという小惑星を探査対象に選定したわけですが、それはイトカワが小さくて薄っぺらな星だからです。この太陽系の成り立ちを調べるには、あまりでっかい星ですと、重力の働きで星の中心の元素と外側の元素が違う可能性があるんだそうです。小さい星であれば、それは限りなく近いわけですね。「はやぶさ」はイトカワにうまく軟着陸して、飛んだ粉塵を何とか抱え込んで地球に帰ってきました。持ち帰った粉塵の分析に日本中の注目が集まりましたが、私が川口先生に「先生、あの中に鉄はありますか？」と聞いたら「それはあるでしょう」とあっさり言われる。「太陽系の中で一番多い成分は鉄とニッケルです。それはもう常識です」ということでした。

昔から地球に落ちてきている隕石の中には、ほとんど鉄でできた隕鉄というのがあって、昔の人はそれを溶かして使っていました。太陽系というのは、文字通り鉄でできてる。その粉塵が固

まったのが地球ですから、地球も鉄の惑星なんですよ。実は水は、質量からすると地球上にたった0．03％しかありません。けれども鉄の質量は、この地球の3分の1を占めています。それが地下にマグマという形で存在するわけですよ。これが吹き出したのが火山じゃないですか。当然、阿蘇は鉄なんですよ。鉄の大地がありますから、ここには木も育つし農作物も育つ。当たり前のことですよ。こういう風にこの阿蘇を見なきゃいけないということなんですよね。

我が気仙沼は岩手県との境にあることにお話ししましたが、岩手は何と言っても宮沢賢治のイーハトーブの世界です。イーハトーブには理想郷という意味もあるんですけど、宮沢賢治は盛岡高等農林学校の卒業論文に、実は客土のことを書いてたんですね。宮沢賢治は農民の指導者でもありますから、冬に雪が降ったら赤土の崖へ行って、ソリにその赤土を積んで、それを引っ張っていって田んぼに入れなさいと教えてたわけですよ。田んぼに赤土を入れると、肥料の吸収が良くなって、良い米がとれるからと言ってたんです。赤土というのは鉄分を多く含む土ですよね。植物は窒素やリンというものを吸収する時に、鉄の力を借りなきゃいけませんから、宮沢賢治は植物と鉄との関係をよく知ってたということですね。

それから、私は今日、しまった、大失敗したと思ったことがあります。阿蘇という地名の由来を調べてこなかったんですね。特に阿蘇という漢字が何を意味するのか気になってるんです。九州もだんだん南に行きますと、ソテツという木がいっぱいありますよね。ソテツは阿蘇の蘇、蘇るに鉄と書きます。奄美大島に行きますと、この木を非常に大事にしております。それに大島紬を作る時に、ソテツの葉を切って土の中へ引き込んで腐らせ、その泥で糸を染めるからですね。あの大島紬の非常に味のある色は、実は鉄の色なんです。奄美大島というところは、大昔にものすごくでっかい隕石が落ちたので、土に鉄分が多いんですよ。それから、ソテツは非常時の食料にもなりました。茎を切って粉々にして何度も水にさらすと、澱粉がとれるんですね。もちろん実も食べられます。だから南の島の人はソテツの木を大事にしているわけです。ソテツを食べなきゃいけないような時代のことを指す「ソテツ地獄」という言葉も残っているそうです。平和がどれだけ大事かということを、彼らはよく知っているわけですね。

それで、奄美大島に行きましたら、具合が悪くなったソテツの木に釘がいっぱい刺さっているんですよ。つまりソテツというのは、鉄で蘇る木という意味です。木が弱るのは鉄が足りないわけですね。それから、松の盆栽なんかも具合悪くなったら釘を刺してやるのが、植木屋さんの常識ですよね。それはつまり、葉緑素を持った光合成をする植物にはどうしても鉄が要るということですし、それから窒素とかリンとかの肥料分を吸収する時に、どうしても鉄の力を借りなきゃいけないということですね。この部分の話は小難しくて、大概眠たくなるんですが、ここを理解できれば、いろんな問題の本質が何かパッとわかりますし、見えている風景が一変するんですよ。だから、何とか寝ないでがんばってくださいね。

それで、窒素・リン酸・カリというのは肥料の三要素と言いますね。これが水の中に溶け込んでいる時には、窒素は硝酸塩、リンはリン酸塩などという形になっています。これを植物が吸収しようとする時には、還元しなきゃいけないんですよ。ここでつまづかないでくださいね。先ほど言いましたように、基本的には酸素とくっつくことが酸化、酸素を取ってやることが還元です。水の中には酸素をはじめとして、いろんな成分がありますから、窒素やリンにもあっという間に、酸素とかいろんなものがくっついてしまう。植物がそういうものを吸収しようとする時には、余分にくっついたものを取ってやらなきゃいけない。つまり元の形に戻してやらないと、植物は吸収できないわけです。それを取ってやることを還元と言うんですけれども、還元の実動部隊は、還元酵素というものです。

昔、「酵素入り」と大きく謳った洗濯用洗剤が売り出されたことがありますが、今の洗剤には大抵、汚れを分解する酵素が入っています。朝ご飯に出た大根おろしの大根にもジアスターゼという消化酵素があって、でんぷんを消化する役目をしていますね。酵素というのは、そういう風にいろんなものの形を変える実動部隊なんですけれども、窒素やリンからいろんなものを取ってやる還元酵素が働くのに、少しでいいんですけれども、どうしても触媒とし

て鉄が要るんですね。平たく言えば、植物は鉄がなければ、窒素とかリンとかの肥料分を吸収できないということです。ですから鉄って、植物にとってどうしようもなく重要なものなんですね。ところが、空気に鉄をさらしておくと刃物でも何でもさびてしまうのでおわかりのように、鉄は酸化しやすい物質なんです。鉄に酸素分子がくっついてしまったでっかい形の酸化鉄は、困ったことに植物の細胞膜を通過できません。つまり、植物は酸化鉄の形では鉄を体の中に取り込めないんです。

ところが、自然界は実にうまくできるんですよ。森林の葉っぱが落った土を腐葉土と言いますよね。腐葉土ができる時、一緒にいろんな成分ができるんですけれども、その代表選手がフルボ酸という成分です。フルボ酸ってなかなか覚えづらいですけど、奥さん方に先にあやまっておきますが、漢字で「古母酸」と書けば、すぐ覚えられますね。新しい母もいらっしゃるでしょうけど、こういうものが森の腐葉土の中でできるわけです。このお母さんは小さくて、鉄にくっついても小さいんですよ。鉄の手に小さいお母さんのフルボ酸が先にくっついていると、大きい酸素はもうくっつけない。つまり酸化できない鉄が、森の中でできているわけです。これが阿蘇の地下水に溶り込んで、それで熊本へ行って、もちろんおいしい水道水にもなるんですけれども、残りは全部、有明海に流れ込んでいるんです。有明海で海苔が採れるのは、海水だけのおかげじゃなくて、こういうメカニズムがあるからです。こういうことを松永勝彦先生が見つけられたわけですね。

私は熊本の緑川の河口で海苔を作っている「天明水の会」の人たちとも交流があります。彼らも十数年間、山に木を植え続けていますが、山の森と海の海苔、その両方を結びつける科学的メカニズムは、こういうことだったんです。ですから、この阿蘇の森林をどうするかによりまして、実に有明海の海の幸が生きるか死ぬか決まるわけです。それは北海道のニシンの問題にも、気仙沼湾の牡蠣にも、全部関係してきます。日本という国は、先ほど言いましたように、3万5000本の川が海に流れ落ちてますから、海の近くに行きますと、どこでも海藻が採れますが、それは森林から流れ込んでいる鉄が決め手だということが、やっとわかってきたわけですね。最近までわかってなかったんですよ。鉄の分析をやって初めてわかったんです。こういうことをもっと詳しく楽しくわかるには、私の「鉄は魔法つかい」という本をぜひご覧いただきたいと思います。

九州も海の幸が多いところですけれども、実は、南の海で採れる魚や貝の量というのは大したことはありません。北の海の方が圧倒的にすごいわけですよ。それは、窒素やリンといった肥料分を大量に含んだ深層水というのが、北の海の海底からわいてくるからです。ですから寒流は窒素、リンがすごく多い栄養たっぷりの海、暖流は貧栄養の海なんです。三陸沖は世界三大漁場の一つと言われております。三陸沖から北海道にかけての海では、北の海で獲れる魚の5割が獲れているわけですよ。5割ですよ。九州の皆さんが実感されるのはなかなか難しいと思いますけれども、三陸沖から北の海がどれだけすごい海かということですね。皆さんが召し上がっておられる博多名物辛子明太子、あれはスケソウダラの卵巣ですよね。スケソウダラがなんで獲れるかというと、北の海に植物プランクトンがわいて、動物プランクトンがわいて、小魚がわいて、やっとスケソウダラなんですね。九州の人は辛子明太子で商売してるわけですから、スケソウダラはどこでなぜ獲れてるかというメカニズムぐらい、知っておいてほしいと思いますね。

でも、窒素やリンがいくら多くても、鉄が供給されなければ植物プランクトンは増えないわけですよね。森の鉄を川が運び、海で海藻を育てるというメカニズムは沿岸域の海の話だと思ってましたら、昨年、さらにとんでもないことがわかりました。この北の海に供給される鉄はどこから来てるかというと、実はロシアと中国の国境を流れているアムール川です。4500kmもある川ですよ。しかも両側は大森林地帯じゃないですか。あのアムール川流域の大森林地帯で作られる鉄、これは太平洋の鉄の100万倍の濃さなんだそうです。これがオホーツク海を縦断して、カムチャッカ半島に沿って千島列島まで来る。そして、水深200m以上、幅が40kmあるブッソル海峡を通って、実は三陸沖まで来ているということがわかったんですよ。実にこの外海も、森は海の恋人の世界だということがはっきりしたわけですね。これ

は白岩孝行という北大の先生が中心になってやった研究の成果です。

ですから、ここまでお話ししたことを出発点に、新たに考えなきゃいけないことはたくさんありますね。森林をどういう風な形に保つのか。川をどういう形に保つのか。川の流域になるべくダムを造らないためにどうすればいいのか。あるいはダムを造ったとしても、そのダム湖に貯まるフルボ酸と結びついたフルボ酸鉄を、どうやって海まで持ってくるのか。これからは土木のそういう技術も今、問われることになりますよね。

そして、現実問題として一番頭が痛いのが、杉山をどうするかですね。これが解決されないと、日本の山と森、ひいては海の問題も解決できないことになります。昨日も頭取がおっしゃってましたが、日本の杉ではコスト的にどうしても外国のものと太刀打ちできないということで、せっかく伐期を迎えた杉山が放ったらかしになっているわけですね。だから、これがもしお金になれば、私が言ってるような問題は、ほとんど解決すると言っていいぐらいです。昔は杉がお金になったから、本当に山奥にも人が住んでいたけれども、今は買い手がなくて、木が売れないから収入がない。だから人が住めない。人が住めなきゃ、棚田も放置されるという悪循環なんです。だから、もしこの杉がお金になって収入があれば、そこに林業に伴う仕事ができて、人が暮らせるようになる。暮らせれば、自分の食べる米ぐらい作ろうじゃないかと、棚田だってあっという間に復活するんですよ。だから、私たちは叡智をそこに傾けなきゃいけないんじゃないですか？　自分たちで木を植えることも大事ですが、肥後銀行もこれからそういう研究をなさらなきゃいけないんじゃないでしょうかね。

この杉の問題は、材木の質と密接に関わっています。たとえば夏伐った木は普通、使わないですよね。夏に伐ると乾燥の問題とかいろいろあって、材質的に良くないんですよ。ところが、これをうまく処置する技術があるんですね。まず、25ｍぐらいのでっかいコンクリートの箱を作るんです。そこに山から伐り出した木をぶち込むわけですよ。10トン車で何台分も入ります。その傍らで枝葉とか使えないところの木を燃やすんですよ。燃やして出た煙を5日間、箱の中でぐるぐる循環させると、材木の質が格段に良くなるんです。たとえば夏伐った木でなくても、よじれや割れが出やすい日本の杉とか檜、唐松とかいろんな木に、この方法は使えます。よじれや割れのある木は、大工さんにとってものすごく使いづらいんだそうです。だから、そういう材木が大工さんが使い良い木になれば、日本の木は動くと言われてるんですよね。ところが、今まで木というのは乾燥させればいいんだということで、重油を使って乾燥機でばんばん乾燥させてたんですね。でも、単に乾燥させただけではそういう問題は解決しません。木材の先生方がさんざん試してもできなかったんです。

ところが、今説明した技術を持った方は、群馬県の石井さんという人なんですが、この木材の処理方法を30年間研究してきて、やっと最近、はっきりした世界特許が下りたんです。これは夢の特許でありまして、今まで大工さんにとって本当に困ってた、木の悪い性質が全部取れてしまう。しかもシロアリも食わなくなる。カビもつかない。さらに伐り時が関係ないというんですよ。年間、山へ行って木を伐って、そういう処置をすれば、それがすぐ製材所に回って製材できて、しかも、それが狂わないというんですよ。その石井さんが、震災の後、我が家に来てくれたんですね。

津波で住宅がたくさん流されてしまいましたから、実は20万軒、家を建てないといけないんですよ。20万軒ですよ。その木材にどこの木を使うんですか？　外国のベニヤ板かなんかを持ってきて、また使うんですか？　建材メーカーはみんな安いということだけでやってるじゃないですか。でも、今作ってる住宅は、30年ぐらいでみんな壊してるじゃないですか。震災で今、ごみ片付けしてますけれども、あのごみのほとんどは住宅ですよ。ごみになるということは、住宅を解体してみたら、自然に返るものはほとんどないということです。住宅を造るということは、ごみを作るのと一緒ということですよ。それから、今、仮設住宅を建てていますけど、あれも役目を終えたら全部捨てるんですよ。そんなことを日本はやっているんです。

だけど、この技術があれば、日頃の仮設の備えに杉山の木が使えるわけです。しかもこれには、家を建てる際の技術的なアイデアもいろいろあります。

ちゃんといつでも家を組み立てられるような設計も、京都大学の先生をはじめとして、今、進めているところです。だから、日本の杉をどう使うか、使えるかということに、やっぱり私たちの叡智を傾けていかないといけない。今のままの状況では、この国は寿司が半値で食える国にはならないということですね。

それから、この技術は単に杉や檜の材質を良くするだけではないんです。東南アジアの方へ行きますと、パーム椰子という木がありますね。椰子の実から油を採るために、プランテーションで膨大な量を作ってるんですが、あれは20年で椰子の実がならなくなるらしいですね。そして、実がならなくなった木は全部伐り倒して、燃やしてしまうんだそうです。あの木は繊維が綿のようになっていますから、全然建材に使えません。ところが、そのパーム椰子をこの技術で処理すると、実は建築の材料に使えるということがわかったんです。南には、成長が速くて軟らかい木がいっぱいあるんですよ。そういう木の活用にも、今後、この技術は関連してくるかもしれません。

でも、石井さんは、自分の技術の持つ意味がわかっていますから、こういう技術は大企業に売るようなことはしないで、いつか何か役に立つことがあった時に使いたいと考えておられたんですね。ですから、この震災の復興に役立てたいということで、我が家にやってきてくれたわけです。そして、この考え方に共鳴したあるスポンサーが、5億、お金を出してくれることが、大体決まってきました。肥後銀行もいろいろお金を提出されているそうですけれども、こうしてポンと5億出すような企業もやっぱりあるんですね。熊本だって、この技術がシステムとして動くようになれば、これはえらいことですから、5億や10億、何ともないじゃないですか。この技術はCO2絡みからも、いろんな意味が実はあるわけですしね。

石井さんはこの間も、我が家に来てくださいまして、世界のどんな建築家がどう考えたって、こういう木の使い方はできないという風なモデルハウスを作ることが、大体決まりました。そういうものができましたら、またご案内しますけれども、その他、いろんな方々が、支援の声を上げてくださっております。展示場みたいな形になるかもわかりませんが、ちょっと違いですけれども、ぜひ一度、見学にお出かけください。この熊本の水の問題、有明海の海の問題、川の流域全体のことが、このことで大体解決するんじゃないかと思います。これは何も熊本だけじゃなくて、日本全国どこへ行っても同じ事情ですね。なるほど、いろんなことを研究している人がやっぱりどこかにいて、震災ということがきっかけで、そういう方との出会いもまたあったわけですね。

本当に私は出会いということに非常に縁を感じております。今日ここに来て、こういう話をお伝えできるということも、私の祖父がたまたま熊本五高にお世話になったという縁もあって、何か働きかけたんじゃないかと思います。また、海面から20数mのところに我が家の敷地を決めたのも祖父でした。熊本五高へ来るような人ですから、多分、過去の津波でどこまで水が来たかというのを、大体調べてたんですね。だけど、高いところで生活するというのは、漁師にとって大変なんですよ。上がったり下がったりしなきゃいけない。それから水の問題があるんです。水は高いところじゃなかなか出ないので、水汲みもしなきゃいけない。でも、きっと祖父は、いつかはやっぱり津波が来るぞと、高台に家を建てたんです。今になって、ああ、なるほどと、祖父の思いが頭に浮かびました。今日、このような形で皆さんとお目にかかれたのは、祖父がそういう風にさせてくれたんじゃないかということをお話ししまして、私の話を終わりたいと思います。

失礼したいました。ありがとうございました。

お礼の言葉

九州経済フォーラム 理事 廣崎 靖邦 氏（財団法人九州国立博物館振興財団 専務理事）

畠山先生、今日は素晴らしいお話をいただきまして、どうもありがとうございました。先生の震災でのご不幸、実体験に基づく気づき、それからその後の研究。いろいろと我々が参考にすべきところがたくさんありましたけれども、先生にお礼を申し上げる前に、一言、私もご挨拶させていただきます。

今回、私たち九州経済フォーラムは、「大地の恵みと共に」というテーマで、昨日から熊本にお邪魔いたしております。福岡の雑踏の中からやって来た私にとりましては、この阿蘇の大自然の懐の深さ、自然力というのは本当に驚きであり、感銘も受けました。阿蘇の大爆発は9万年前に起きまして、雲仙で我々が目にしたような火砕流が、関門海峡まで含めて九州の北部全体を覆いました。九州国立博物館では、この阿蘇の大爆発と火砕流を5分ほどのCGで描いて、放映しております。私もそれをほとんど毎日のように見ておりますが、この火砕流のおかげで、我々北部九州で暮らす人間に肥沃な土地が与えられたわけです。私はまずこの恵みに感謝し、多分大勢の犠牲者を出したであろう阿蘇の皆さんに一言お礼を申し上げたいと思っております。

そういう大地の恵みに対しまして、今日は海の視点から、畠山先生に非常に実体験に基づいたお話をいただきました。私もそれなりに先生のことを知った上で来ましたけれども、今日お聞きしたお話一つ一つに、本当に目が覚めた思いがいたします。皆さんにも大変な教訓になったのではないかと思っております。先ほどちょっとメモをしたんですけれども、一つはどうやっておいしく安い寿司を食べるかという、実にわかりやすい環境保全へのアプローチを示していただきました。我々は居眠りするどころか本当に目を覚まして、興味津々に聞かせていただきました。肥後銀行の甲斐頭取にとりましては、そうした食べ物に関しまして、地下水や森、草原、棚田にとどまらず、川や有明海まで含めた大きなテーマを与えられたんじゃないかと思います。

そしてさらには鉄というものにも目を開かせられました。後で本で読めというご指示もいただきましたけれども、鉄によって動物も植物もどれだけ恵みを受けているかよくわかりました。鉄橋の下のシジミは育ちがいいと鉄橋の効果に対してJRの石原会長に賞賛のエールも送って頂きました。最後には、阿蘇を取り巻く杉の木一辺倒のこの風景をこの山の姿にふさわしい山林に一変させるためには、熊本の経済界全員でもってこれに取り組めという、非常に力強いメッセージもいただきました。漁師らしくない、科学的メカニズムの解説、多岐にわたるご示唆、それから実体験に基づく心からの直言も、ありがたく聞かせていただきました。本当にありがとうございました。お礼申し上げます。

この後のシンポジウムも、我々、非常に楽しみにしております。会を代表して、お礼のご挨拶をさせていただきました。

パネルディスカッション

【田中】 皆さん、おはようございます。これから長丁場になりますが、最後には畠山さんの基調講演と私たちが話したことについて、皆さんからご意見をいただく時間を取りたいと思います。パネルディスカッションというのは、壇上だけのやり取りではなく、会場全体とのやり取りだとご理解ください。

私は、先ほどの畠山さんとご一緒することが多いのですが、畠山さんからはいつも、鉄のこともまだ十分にわからん情けない水産の研究者だという風に笑顔でご紹介いただいております。震災以来、畠山さんは、ますます物事を根源的に見て、ラジカルに語られるようになりました。そういう意味では、肥後銀行の頭取さんですとか九州の会長さんには、ひょっとしたら非常に失礼な表現があったかもしれません。ですから大体私は、まずこういう風に謝ってから討論に入ることで、相棒の役割を果たしております。

もう一つ、畠山さんが基調講演で会場を盛り上げられると、その後が非常にやりにくいというのが経験上わかっております。しかし、今回は全然心配しておりません。と言いますのは、パネラーがこのお二人だからです。私と畠山さんは、もう2年ほどすると古稀を迎えます。少し前まで、もうそろそろ若い者にという話をしていたのですが、やはり震災以来、そういうわけにもいかなくなってしまいました。けれど、このお二人は私たちのまさに息子の年代ですよね。こういう30代初め、

コーディネーター
田中 克 氏
（京都大学名誉教授、農学博士）

有明海の研究を三十数年続け、今も頻繁に九州、柳川を訪れて研究。有明海の生物多様性は、まさに阿蘇・九重山系の存在にあるとし、有明海再生プロジェクトや啓蒙活動にも幅広く関わっている。「森里海連環学」という新たな学問領域の提唱者であり、NPO法人森は海の恋人の理事も務める。

パネラー
畠山 重篤 氏
NPO法人森は海の恋人 代表

40代初めの若い人が、私のその時期から比べると、比べ物にならないぐらい素晴らしいことをやっておられます。こういう二人のパネラーがおられるので、私は、今日は進行役をうまく務めるだけの役割で、楽しみながらやらせていただきたいと思っております。

本日は「人は自然とどう向き合うか」がテーマです。現代社会で自然とどう関わるかを考えた場合に、やはりそれは個人の生き様、そしてもうちょっと社会的には家庭というものが基盤になります。そこで最初に、サラリーマンでありながら、社会を構成する最も基本となる家庭という単位の中から、どういう世の中を作るか、どう豊かな暮らしを取り戻すかを実践されている畑さんに、20分ほどご自分の仕事や活動をご紹介いただいて、それから討論に入りたいと思います。

【畑】 こんにちは、畑です。私はいわば三つの顔を持っております。一つは普通の会社員としての顔です。おそらく皆さんと同じような形で、夏場の今はクールビズで、冬になるとネクタイを締めてオフィスに行って、時には上司に怒られながら仕事をして、休日は家族と暮らすという形です。そういった会社員の顔がまず一つ。もう一つの顔が自給農民です。休みの時とか出勤前を上手に使って、家族5人分の米と野菜を自分で作ってるんです。勤め先は大阪の梅田というところなんですが、住んでいるのは奈良市ですので、1時間半ほどの通勤をしております。三つ目の顔は地域の顔というか、小学校のPTA会長として2年目を迎えております。これは立候補してさせていただいております。

そういった三つの顔なんですが、まず一つ目の会社員として、どんな仕事をしているのかをご紹介します。今回ここに呼んでいただいたのも、会社員としての仕事がきっかけです。今からニュース番組の特集を皆さんで見ていただくんですが、僕の関わったそのプロジェクトが、企業フィランソロピー大賞という賞を受けることができて、東京でプレゼンテーションをしました。その時に小早川さんとの出会いがありまして、それが縁で今回お声がけをいただいて、この会場に来ているという次第です。

それでは、10分ほどニュース番組を見ていただきます。

……

続いては「追跡！ エコファイル」です。今日は、大都会のど真ん中に出現した、新しい里山です。その里山では米や野菜が育てられ、鳥や虫も集まりました。すると、オフィスで働く人たちにも、ある変化が…。

大阪の中心地・梅田。そのほど近くにある新梅田シティ。高層のオフィスビルを中心とした一大商業集積地だ。この高層ビルの脇に緑地帯がある。ただの公園でもなければ、庭園でもない。日本の原風景である里山を手本に造成された「新・里山」だ。2000㎡の敷地には、雑木林を中心に200種類以上の植栽。田んぼや畑もある。

積水ハウスで住空間の研究に携わる畑明宏さん。都会の真ん中に里山を作る企画を2年がかりで実現した。

「日本の雑木林って、落ち葉がそのままあって、落ち葉を取っちゃうと、まず土が非常に乾きやすくなります。同時に地面の温度が下がるんですよね」（畑）

この里山には、カエルや昆虫も住んでいる。生態系の維持が大きなテーマだ。畑や田んぼに竹林。これらも生態系に深く関わる要素として配置している。設計にあたっては、鳥や昆虫の生態に詳しい藤本和典さんに協力を仰いだ。藤本さんは、この里山が完成して以来、野鳥などの生態を観察するために、毎月、東京から訪れている。

「今ちょっと、モズがいたりジョウビタキがいたり、都会では大変珍しい状況が起こってますね。モズは繁殖まで始めちゃったんです。ここで。これはすごいことですよね。楽しいですね、ここに来ると。いつも出会いがあって」

「あそこを見てください。シベリアから渡ってきたジョウビタキが、あそこ

パネラー
畑 明宏 氏

積水ハウス㈱設計部大阪設計室課長 会社員＋樹木医＋自給農民

全国のまちづくりや商業ビルなどの企画開発に携わるサラリーマンでありながら、家族５人分の米と野菜の自給自足を実践。また、積水ハウスが推進する「5本の樹計画」という、お客様が家を建てる時に５本の樹（日本在来の樹木）を植えてみませんか？という提案を全国に広めている。宮崎大学農学部卒業。

にとまってます。黄色い…。すごいですね。あっ、虫を獲りました。あぜ道のところにいる。きれいでしょう？」「そうですね、今は都会ではまず見られませんね。東京あたりも、いると、みんな自慢しますね」「ミツバチが来てます。これは小さい、日本ミツバチです。これも大変珍しいですねえ。ここは大変多いんですよ」（藤本）

何気なく見ているだけでは気づかない、小さな発見にあふれている都会の中の里山。高層ビルの隣で、小さな生き物たちの営みが繰り広げられている。

畑さんの指導の下、造園業者が毎日手入れをしている。畑は無農薬栽培。その基本精神は、何も持ち込まない、持ち出さない。

「畑さんから指導を受けて、持ち込まない、持ち出さないということがコンセプトなので、そういうこと、自分もまた考えてみたりとかしてるんですけど、それで言ったら、このくず米もそうなんです」（造園業者）

キジバトがついばんでいるのは、稲刈りの時に欠けてしまったくず米。これでキジバトにも生態系の一員になってもらう。

「鶴の恩返しじゃないですけど、春からはもう全然えさをやらないですね。で、春には虫がたくさんつきます。その虫を食べてもらうという役割をしてもらうんですね。」（畑）

この日はイチゴの世話。地面を黒のビニールで覆うのが一般的だが、ここでは稲わらを使っている。

「なぜわらを使っているのかというと、イチゴを採り終わって、土地がやせるんですが、これがちょうど朽ちてくるんですよね。そうするとわらが補っていくという形になるんです」（畑）

このオフィスビルでは、およそ300人が働く。そのうち200人以上が、新・里山のボランティア活動に参加している。昼休み、メンバーたちが畑に集まってきた。

「うちは梅田シティ里山くらぶと言いまして、ここのオフィスワーカーが集まって、お昼休みにこういう収穫の作業を、今、してるんです。雑草とか刈ったりだとか、あとは土曜日に、家族も含めてここで作業をしたりということもやっています」（ボランティア・男性）

「これは幹や葉につく虫です。最初はすごく気持ち悪かったんですけど、でも、もう慣れました」（同・女性）

「これはブロッコリーなんです。家で食べます。仕事の合間をぬってできるってことが、まずこれが素晴らしいことだと思いますし、仕事のストレスをこういうことで逆にね、解消できるかなという風に思います」（同・男性）

収穫した野菜はメンバーで分けるほか、オフィスビル内のスポーツクラブに並べられる。一袋につき100円程度の寄付金を募り、ボランティアグループの運営費に充てている。

都会の中の里山の仕組み。それは、発案者である畑さんの生活スタイルそのものと、深く関わっている。

「家でとれた玄米。家でとれたこれはジャガイモですね、カレー風味です。これは家でとれたカブです」（畑）

畑さんは自宅近くに田畑を借り、家族5人分の米や野菜を作っている。休日は専ら農作業。本格的な自給自足の生活を送っている。こうした畑さんの自然と向き合う心と、藤本さんの生き物を愛する心が、強く結びついて形になった。

「実は積水ハウスの方からお話がありまして、こうやって庭作りをすると面白いですよと書いたところから話が決まったようで…」（藤本）

庭も自然の一部という考えの下、日

パネラー
小関 哲 氏
小さな世界学校代表

本日の最年少者。長崎県平戸市出身。小値賀町という小さな島で、世界各地から修学旅行生を受け入れ、自然体験学習を運営。これが世界で高く評価され、アンケートで1位をとったこともあって、世界から注目されている。京都大学卒業。現在は、日々海に潜って魚を捕って生活している。

本の在来種の木を植えて、鳥や昆虫を呼び込もうと『5本の樹計画』を実施。これまで戸建て住宅の庭に、およそ88万本の木を植えてきた。

「ここの新・里山でも、同じことができるんじゃないかということで、藤本先生と相談しながら進めていて…」(畑)

畑さんは、自らの経験を生かして、落ち葉を使った堆肥作りや、クヌギを利用したシイタケの栽培にも力を注いでいる。米づくりは地元の小学校の総合学習の一環として指導。収穫した米は子供たち全員と分け合った。

「シイタケがもう出なくなった木というのに、ここにあえて置いてですね、小学生も幼稚園児も見てもらって、物が生まれるところ、芽吹きだとか花がつくとか、そういった最初の場面だけじゃなくて、朽ちた木は次の芽生えのために、自分は緑の下の力持ちになって、また土に返っていってというようなことで、生と死を一カ所で見られるような形になっています」(畑)

ありのままの自然とは言えないまでも、生き物たちがかかわり合いながら成長していく息吹が、ここにはある。

「私は害虫なんて一度も思ったことがありません。虫です。雑草なんてありません。草です。野草です。みんなそれぞれ役割があって…」「何かここに来たら、ここを歩いたら、ほっとするねという方がいらっしゃるんですが、人間も自然の一部であるし、ここが一つのきっかけになって、自然を考えるフィールドになればいいなと思っています。」(畑)

これが僕の仕事の一部でございます。このプロジェクトの企画書を書いて、実現まで2年間かかりました。やはり、会社の中での僕の立ち位置というのが、まだ力のない部分なんです。ただ、2年間、強引に行くのでになくて、自分では粘ったつもりです。粘って、粘って、粘ったら、どなたかが拾ってくれて、それが現実になりました。

NPOの藤本先生と一緒にやっているというのも、我々民間の力だけじゃなくて、やはりNPOにしかできないこともあるのです。それと、結果的にNPOさんが入っていることによって、毎年と言っていいほどマスコミに取り上げてもらえます。読売新聞の一面とかにも載りました。企業だとなかなか、よっぽどじゃないと一面には出てこないんですけど、NPOさんとやっていることによって取り上げられる機会が多くあります。外部の評価を受けることによって、僕自身も、間違いのないことをやってるんだなと確信できています。

それから、映像にはいろいろな鳥が出てきましたね。この新・里山は、できて5年目になるんですが、2年目にはハイタカというタカがこの地に降りてきました。猛禽類は小鳥の首のところをちぎって食べるんですけれども、ある日、猛禽類独特の食べ方をされた小鳥が死んでて、これはひょっとしたらタカがいるんじゃないかということで観察していたら、桜の木のところに隠れているタカを見つけました。つまり、大都会のど真ん中にある新・里山が、10日間ほどタカが暮らせる環境になっていたわけです。僕はサラリーマンですから、社長とか会長とか上司にほめられるのはうれしいです。けれども、自然に認められるともっとうれしい。タカというのは生態系ピラミッドの頂点の部分ですから、自然界の裾野が広くないと降りません。今、新・里山では生物調査というのも定期的に行っていますが、確実に生き物が増えています。

新・里山は大きな緑地ですから、企画・設計・施工・管理担当者がそれぞれいます。僕は設計部ですから、企画・設計のところをやったらいいんですけれども、5年たって、いまだに毎月1回の定例会をして、それぞれ管理者、企画者、関係者含めて定例会を行うことにしています。定例会のメンバーの中には毎日常駐で緑地管理している造園業者さんにも参加していただいています。毎日土や植物や生き物に接している人の意見も聞き打合せしなければ本物はできないと思うのです。小学生の稲刈りとか田植えも出てきましたが、これは会社のCSR室というところが事務局になってやっています。僕は最初、見せかけだけのCSRは嫌だから、それだったらやりませんと、やんわりと断りました。それでも言ってくるので、田植えをやって、除草作業をやって、稲刈りをやって、脱穀をして、最後に収穫して食べるところまで、5時間分の授業の時間を先生に割いてもらえるのならやります、という話をしたところ、地元の小学校の先生たちから、それはいいですねとご賛同いただいたので、関わることにしました。以来、米作りのすべての行程を5年間変わらないやり方で続けています。それを会社側が、若干けったいなやつだなと思いながらも業務として認めてくれているというのは、非常にありがたいことです。

その僕のバックグラウンドにあるものを、今からちょっとパワーポイントでお見せします。僕は自給的な生活をしていまして、そこからいろいろな発想が生まれてきます。まず命との対話というところで、僕は家族分のお米を1年間に大体800kg作っております。当然、苗代づくりから始めて、すべて手作業でやります。ここにちょっと注目していただきたいんですが、苗があって、種籾が当然ついています。僕は9年ほど前から自給的な生活をしてるんですが、自分で田植えをするまで、よく見てなかったんです。機械で植えると、これは見えないですよね。手で植えると、種籾がちゃんと一つ付いてるのがわかります。この種籾からいくつの種籾ができるかと言うと、たった6ヶ月で一粒が2000粒になるんです。1年じゃないですよ。お米作りというのは1年のような感じがしますけれど、5、6、7、8、9、10月だから、たった6ヶ月で、1粒が2000粒になるんですよね。それを秋に収穫してお米としていただくと、食べ物、エネルギー源、炭水化物という感覚なんですけども、種として考えると全く感覚が違ってきます。つまり米一粒、これは植えれば種なんですよね。その種が、お茶碗一杯、大体2000粒あるんですよ。2000粒ということは、大体稲2本分、種籾2粒でいけるんです。そうすると、お茶碗に盛られたご飯って、種のてんこ盛りなんですよね。皆さんはご飯を種として考えて食べたことありますか？ 僕は米作りをしてから、そういう感覚を持つようになりました。

たとえばホームセンターで大根の種といったら、袋の中でカサカサカサッといってるつぶつぶだけど、あれ、ひとたび土に置いて水を与えてやると、命としてよみがえるんですよね。僕はそのことに単純に感動してるわけです。命というのを感じます。僕は明安という名前ですから、明治42年生まれの祖母に「明ちゃーん、一粒残さず食べなよ」と言われて育ちましたが、その「一粒残さず食べなよ」の一粒というのは、単なるエネルギー源の一粒ではなくて、無限の可能性の一粒なんです。だから、2000粒を翌年種籾で使うと400万粒になり、それをまた種籾に使うと、次は億単位になります。3年たつと億単位です。そういった命のつながりが見えてきました。

次のスライドですが、僕たち家族はこういった恵みをいただいています。写っているのは家内と、3人いる一番下の息子ですね。トラクターもないし、時間もないので、いわゆる不耕起栽培というやり方です。カッコよく言うと、必要以上に自然に関わらない。それが僕のスタイルです。それで、秋になると先ほど田植えをしたところがこうなります。最後まで実らせますので、僕のところが一番稲刈りが遅いです。田植えも、いつつも仕事に追われて一番遅くなるんですが、お年寄りの人は僕のところへ寄ってきて、「お宅も遅いねえ。忙しいの？ でもね、半夏生までに植えたら、大丈夫だからね」と言うんですね。今はみんな、田植えは5月ぐらいですよね。肥後銀行さんも田植えは5月とおっしゃってましたが、でも半夏生といったら7月の2日ぐらいの話ですね。ですから、半夏生までに植えたらいいよと言われると、何かほっとします。そのお年寄りの人も、「今は早過ぎるんだよねえ」という風に、

僕を見て昔を振り返っておられるんですよね。

人参とかタマネギとか、野菜も作ります。この写真はついこの間のことですけど、タマネギもこれだけ収穫できると、もうにんまりしますよね。昨日の食事に肉じゃがも出ましたよね。タマネギがとれたら、我が家では必ず肉じゃがをするんですが、ジャガイモも同じような時期にとれますね。そうすると、すごく豊かな気持ちになります。タマネギはつり下げるんですよね。ずっとつり下げていきます。豊かです。食が見えるんですよね。

自然の中に入ると人間ってちっぽけです。先ほどの新・里山のある大阪梅田なんかに行くと、自然がほとんどないし、高層階に上がって眺めるとビル群ばっかりです。「人間って偉いよねえ、こんな大きなものを作って、みんな空調して、気持ちよく暮らしてるんだから」と思うんだけど、田畑に一旦降りると、本当に人間はちっぽけだと感じられます。田畑には季節があふれてます。これは真ん中の娘ですけれど、「菜の花畑に入り日薄れ…」という歌が、この写真を撮っている時に、僕の心の中に自然に湧き出てきました。そういう情景が、自然の中に行けば普通にあるんです。

僕は人間ですから、動けます。動けます。だから、ただただ体を動かして、僕ができる範囲で動力に頼らない米作りを実践しています。もし真似したいという方がいらしたら、僕の本にもやり方が書いてあります。これは足踏み脱穀機と唐箕（とうみ）ですね。実はこれ、ヤフーのオークションでそれぞれ8888円で買ったんですよ。明治40年の杉の木でできた唐箕です。送料合わせて、両方でなんと1万8888円だったんです。ヤマト運輸さんの時代だなあと思いましたね。足踏み脱穀機に昭和初期のものです。こういう機械にも一部頼るんですが、故障しても簡単に直せるんですね。自分で修理できますし、動力に頼らないから、僕は機械の新商品が出ても気にならないし、ガソリン代が上がってもそんなに気になりません。自家用車も持ってないんです。農作業なので、軽トラみたいなものがどうしても必要になってくるんですけど、リヤカーを使っています。もう108回ぐらい「中古の軽トラ出たよ、要らへんか」と、地域の人に言われましたが、かたくなに「要りません」と言い続けたら、今はもう誰も何も言いません。笑って見てるだけです。このリヤカーも奈良市の僕の住んでるところで有名になって、「畑さん、車の中から見たよー」と何回も言われます。

ただ、車は全然乗らないのかといったら、信州に家族旅行に行く時にはレンタカーを借ります。「レンタカー、何にしようかな」と言ったら、子供たちが「プリウスやーっ!!」と言うんですね。「プリウス、プリウス乗りたい」と言うんですよ。だからプリウス、借りました。借りて、みんなで信州に行ったら、「車っていいよなーっ」とか何とか言うわけです。というのも、僕と一緒に田畑に行くと、坂ではいっつも「押せ、押せ」と言われて、全員でリヤカーを押さなくちゃいけませんから。でも、坂道を上がる時にどれぐらいのエネルギーを使ってるのかとか、どれぐらいの負荷が車にかかってるのかというのを、僕も含めてわかる。その車のありがたさを体でわかるんですね。

除草剤も2年目からは使ってないんですけど、1年目は使いましたから、除草剤のすごさというのはわかります。それと、これだけ高齢化が進んでくると、農業でやはり若干は薬に頼らないといけない、今の日本の現状もわかります。そういうことは、自然とか自分を基準に持ってれば、あまり間違いない考え方に行き着くのかなあという気がするんです。

このリヤカーは三重県の人からもらいました。僕がレンタカーのトラックで取りに行ったら、ヤギも一緒に持って帰れと言われたんですけど、ヤギはさすがに要りませんと断りました。

田畑に行くと、僕も何となく考えることがたくさんあります。それは、自分も自然界のちっぽけな一つだからだと思います。やはり何かそこから得られるものが多いなという気がしています。

次はNPA会長の話につながるんですけれども、僕は20代は自分ないしは会社のために、もう労働基準監督署が知ったら怒られるぐらい、決まった休みも休まないで働いていました。仕事が大好きでした。できたお金は、今は車に乗ってないですけど、最新型のパジェロに乗ってたり、さんざん遊びまくりました。30代になって家族を持つようになって、子供ができて、そこに家族が加わりました。そして40代に

なった時、そこにさらに地域を足していこうと思ったんです。地域を足すということは、それまでより深く、種族的に地域と関わらないといけない。そのために何か僕が無理なくできることはないかなあと見回してみたら、そこにPTA会長というのがあったので、PTA会長をやらせてもらうことにしました。50代からは、もう少し人と自然のためにということを目標に掲げています。

最後のスライドなんですが、笑顔です。米と野菜がとれると、顔も笑顔になる。心も笑顔になります。僕は親御さんの了解をもらって、近所の子供とかも田んぼとか畑に連れて来るんです。いろいろと難しい問題もあるので、こういう場では自分の子供の画像しかお見せできませんけど、この背景にはたくさんの子ども達がいます。親も含めて誰も怒っている人はいません。みんな笑顔です。そういった笑顔をどんどん作りたいなあと僕は思っています。

世界の人口はもう70億人になるということなんですけれども、食べるものがなくて困っている人がたくさんいます。僕は菜食主義者で、進んで肉とか魚を食べませんが、それは自分自身が菜食が好きということが一つ。それから、菜食にすることによって、食の分配が海外の飢えて困っている子供たち、大人たちに少しでも行き渡るんじゃないかと思って、自ら実践しようと取り組んでいます。ただ、周りには、畑君一人がやっても世界は変わらないよという声もあります。けれども、僕は一人が重なって70億人になっていると思ってますので、その可能性を信じながら、今のライフスタイルを、常に間違いはないかな、間違いないよね、という風に問いかけながら暮らし、仕事を、地域とかかわり合ってます。以上です。

【田中】 すごく良い笑顔を見せながら、楽しい話を聞かせてもらいました。沢山のメッセージがあったので、この後の討論をどんな風に絞るかというのはなかなか難しいのですが、まずは自然というのはやっぱり、命のつながりの集合体だということですね。そして、それは我々人間にとっては、食と密接につながっている。食というのは、我々が他の命を食べているということですから、そのことを思いながら暮らすことが大事だし、それは個々の人間の生き方だとか幸せといった部分ではあるけれども、実は世界にもつながっている。そんなメッセージをいただいたのではないかと思います。

そして特に、都会で企業に勤めながら田舎暮らしをされているというのが、素晴らしいと思いますね。圧倒的多数の人間は、先進国では都会に集まっているわけですから、結局、都会の人々が物の見方、考え方、暮らしをどう変えるかというのが最終的なキーになりそうです。そういう意味では新里山の話は、非常に示唆に富んでいると思います。また、田舎の素晴らしさ、そこにこそ自然と人の関わりとか、いろんな人間の幸せ、豊かさの原点があるということを感じられて、それをすでに実践されているのも素晴らしいですね。多分、小関さんも次のプレゼンテーションで、そんな話をいっぱいされると思いますが、小関さん、ここでちょっと、今の畑さんのお話を聞かれて感じられたことをお話ししていただけるとありがたいのですが。

【小関】 自分の発表を前にガチガチになっているし、その準備もあるんですけれども、それよりも今のお話に対する感想がわき上がってきて、もどかしい思いをしていたので、そんな風に振っていただいて良かったです。今日は経済界の皆さんと一緒に、人と自然はどう向き合うべきかという話をする場なんですが、結局は僕は、家族の話になっていくのかなと思いました。

さっきの畠山さんも、お話をされながらお爺様のことを思い出されていく様子が、会場の席からも感じ取れましたし、今、僕もふっと自分の名前を付けてくれた僕のお爺ちゃんのことを思い出していたんですね。お爺ちゃんは僕が15の時に亡くなっていますが、今のお話を頭では聞きながら、その存在をどこかで感じていました。僕はこれから22世紀の現代の青年としてお話をしますけれども、そこにはうちのお爺ちゃんがやってきたことが流れているし、きっとそれに守られて話をするのだろうという気がします。そして、そういう感じがする時に、人は謙虚になり、かつ自信を持って何かをできるんだと思ったりもしました。ですから、自然の営みや経済活動、人間の活動がどうあるべきかを考える時に、自然にヒントがあるのはもちろんですけど、同時に自分や家族のことを感じながら考える。それが私たちだけじゃなくて、多分皆さんにとっても一つのテーマに

なるのかなと思いました。

【田中】 パネルディスカッションは時間が限られていますので、できるだけスムーズに進行するために、実は事前にパネラーの間でメールのやり取りをしていたのですが、不思議なことにそのやり取りで、いろんなつながりが判明しました。小関さんが生まれたのは昭和54年です。30代だった私は、その頃、長崎の国の水産研究所に勤めていて、平戸島でマダイの研究をしていました。それが昭和52年ですから、小関さんが生まれる前から平戸でいろいろ調査をしていたことになります。その時にお世話になった漁協の組合長のお嬢さんが、我々の頼いのために3年間料理の修業をされて、それが基になって今、栗山という民宿をやっておられます。非常に頑張っておられるのですが、びっくりすることに、その民宿が小関さんの小さな世界学校の拠点の一つになってるんです。こんなつながりも出てきてるんですね。

また、その時に畑さんから来たメールで、私自身はショックを受けました。先ほども畑さんは、30代は家族のために貢献したというお話をされていましたけれども、私の30代を振り返ると、もう魚の研究一筋で、家族のことは何も見ていませんでした。その時は、京都で生まれ育った家内と、半年と2歳半の子供を抱えて長崎に赴任したんですが、彼女は非常に不安な日々を送っていたのに、私は研究にかまけて、1ヶ月単位で平戸島に行っていたわけですね。そして、ある時帰ると、部屋がシーンとしているんです。これはただならぬ様子だと思ったら、机の上に「実家に帰らせていただきます」という置き手紙がありました。今回のやり取りで、畑さんから「皆さんはいろんなことを一生懸命やっておられるけれども、本当に自分の家庭を大切にされておられるんですか」という問いかけをいただいて、ハッといたしました。

そういうことが、今日のいろんなお話の背景につながると思います。じゃあ引き続いて小関さんの方から、今のことも含めて、現在、取り組んでおられることをご紹介いただければと思います。

【小関】 写真と動画を見せながらお話をしたいんですが、私は皆さんのお顔を見ながらでないと話せないところがあるので、会場のライトはつけたまま、ご準備いただいてもいいでしょうか。

その間、しばらくご休憩ください。

【田中】 それでは、この間に少し付け加えますと、畠山さんと私、そして小関さんの間には、また別のつながりがあります。私が京都大学で森里海連環学という新しい統合学問を立ち上げて、2003年に研究センターの開所式のシンポジウムを行った時に、畠山さんに基調講演をしていただきました。その時に、小関さんはまだ就職を決めてないと言いますが、将来の方針が決まってなくて大学の延長戦、いわゆる5回生でした。たまたまどこかでポスターを見られて、畠山さんの基調講演を聞きにこられていたんです。そういうつながりがこんなところで結びついて、いろんな連携ができることになったわけです。不思議な縁を感じます。

【小関】 皆さん、改めてこんにちは。お話をしたいことも、お見せしたいこともたくさんあるので、実は昨日からパニック状態でした。私は昭和54年生まれの31歳です。私の父が昭和27年生まれですので、今、58から59になるところでしょうか。会場で私より年下の方、いらっしゃいますか。後ろのほうに東海大学の学生さんたちがいらっしゃるようですね。私が畠山さんに初めてお目にかかったのは、これぐらいの距離で、自分の人生をどうしたらいいか迷っていた学生の頃でした。結局、就職をせずに大きなリュックサックを背負って、うろうろ放浪の旅をしばらく続け、それからふるさとの平戸に帰ってきたのが25歳ぐらいの時です。

私は平戸で生まれ育ちました。普通の島の子として、海に潜ったり、魚をとって食べたり、そういう暮らしを楽しんで育ったわけです。それから16歳の時に平戸島を出て、佐世保というところの高校に行ったんですけれども、日本の普通の町の、受験教育が全てであるというようなところが強いように感じたその学校に合わずに、退学をしました。私は2回ほど、いわゆる普通の道からはずれています。自分ではそんなに勇気を出して飛び出したというつもりはなくて、逆にその環境に疑問をぶつけることなく居続けることのできる同級生たちの方がすげえなぁという風に思ってたんですが、とにかく高校を中退しました。そして、幸い経団連が奨学金を出してくれて、イギリスにあるユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）という学校に行きました。

ここは世界中から奨学金を出して、

どんな貧乏人だろうが何だろうが、各国から数人ずつ、計500人ほど集めて、2年間、最高の国際人教育をしてくれるという、第二次大戦後に世界中の経済人、文化人、政治家たちが協力して作り上げた、まさに世界大戦直後の人類の願いがこめられた学校というべきところでした。UWCは今、世界に約10校程度に拡大しています。イギリス校の校舎は12世紀のお城で、当時の理事長はネルソン・マンデラさん（元南アフリカ大統領、アパルトヘイト廃止の英雄・ノーベル平和賞受賞者）でした。ですから生徒の中にもどこかの国の大臣の息子がいたり、目の前で両親を撃ち殺されて自分の足の中にもまだ弾丸が入ったままのアフリカの友達もいたりしました。世界中からそういう連中が集まっています。志さえあれば、お金を出してもらえて、最高の2年間を過ごせるわけです。日本では経団連が事務局をやっていて、そこに行けば試験を受けられます。日本からも毎年10人ぐらい行っています。私は15歳の時に高校に行って、何かおかしいと思ったんですね。その時はそれを言う力も変える力もなかったので、勉強して、そういう外国の学校に2年間行って、本当に楽しい、夢のような時間を過ごしてきました。UWCという学校についても、本当に1時間丸々プレゼンをさせてもらいたいぐらいなんですが、とにかくそういう素晴しい学校で学ぶ機会に恵まれました。

その後、縁があって京都大学に入れてもらって、とても楽しい学生時代を過ごしました。そして、普通は就職をすると思うんですけど、私は結局、しませんでした。私がちょっと前の世代と違うところがあるとすれば、田舎の出身であるけれども、外国にポンと行ったということと、それから大学に行って、普通であれば大都市の大企業に就職をする流れに入るところを、当たり前のようにそうしなかったことです。うちの大学でもこんな感じの就職説明会があって、僕も出てみましたが、途中でこれも違うと思って、私が何かの質問をしたんです。そしたら、それに対する企業の若手の人の答えというのが、とても僕には誠実でないように感じられて、その場で帰っちゃったんです。それでリュックサックを背負って、京都の後ろのほうにある北山という豊かな森の方に歩き出しました。すると、それがとっても楽しくて、自分にとって正しいことのような気がしたんですね。その延長線上で、私は今、ここにおります。

今日、私がここで、先輩方ばっかりの皆さんに何がお話しできるんだろうと考えたんですが、まず、私を作ったのは環境だということです。私は1953年生まれで、20歳になった時に2000年になりました。ということは、20世紀の最後の子供です。21世紀の最初の大人です。つまり、20世紀を作ったのは僕ではありません。僕の親やその親ですね。私の祖父や私の父は、僕のように若くって海外に行ったり、大卒直後に就職をせずそのまま自分の描くビジョンで仕事を始めたりといったことがあまりできない世代だったと思うんですが、その人たちが一生懸命作ってくれた豊かな社会と日本のおかげで、いま僕みたいな自由な動きが可能な世代が生まれてきているんです。

とは言っても、まだまだこのようなケースは突然変異的だと思いますし、多分皆さんの会社だったら私の世代の人間はまだすごく下っ端で、こうして皆さんのような方々とゆっくり話をさせてもらう機会はないでしょう。でも私は先輩方を前にしてドキドキはしていますが、こうしてこの場にお招きいただいております。それは、僕が皆さん方のおかげで素晴らしい10代、20代を過ごしてきて、その結果、今、ある仕事をしているからなんですね。その仕事は、実は僕たち若い人間が頑張ってゼロから作り上げた訳ではなくて、単純に今までの世代の人たちの積み重ねが、たまたまそういう形になってるだけです。僕は、僕がやっている程度のことは、ちょこっとやる気があれば、現代という先人の蓄積の上にある時代に生きる20代・30代の誰にでもできると思っている。「誰にでもできる」だからこそ意味や希望があると思ってるんですね。ですから今日は、こういう時代に生きさせてもらっているということの、親世代に対する報告会みたいな気持ちで、ここに座っております。僕と皆さんではちょっと世代が違いますし、一見新しいことのように見えたり、おおっ、面白いと思ってもらえるかもしれませんけど、それはどちらかと言うと私の作品と言うより、私の前の世代の方々が作った社会の作品だというのが、今の僕の気持ちです。

さて具体的に何をやっているかと言いますと、簡単に言えば日本の田舎に

国内外の、特に外国の人々を修学旅行・研修旅行という形で連れてきて、いろんな「本当の日本」に触れて何かを学んでもらい、地域にも刺激やお金を落としてもらう、という仕事です。今、ビジット・ジャパン・キャンペーンということで外国からたくさん日本に来てもらおうとしていますが、特にスタディツアー・修学旅行というような付加価値を付ける形で提供するというのが私の役割です。ところで日本の経済構造を考えると、日本というのは基本的に物を海外に売ることによって豊かになってきた国ですよね。今回は

一次産業が非常に重要な提点になると思うんですが、ひとまず一次産業のことは置いておいて、この旅行サービス業というのは、いろんな計算がありますけれども、実は隠れた巨大産業だという数字は色んなところで見ることができます。日本再生のためには、外国からたくさん人に来てもらって、お金を落としてもらうしかない。私は経済界の方に対して発表させてもらったり、原稿を書いたりすることが多いんですが、そういうことが経済界の要請としてあるように思います。そのためには、日本の文化だったり、歴史や風景といったものを大事にしなければいけないわけですね。

しかし、それにははど遠い現実があります。特に私たちのふるさとの九州や九州の小さな島は、今まさに沈もうとしています。私の住む平戸島では、毎年288人の若者が高校を卒業して巣立つんですけれども、うち135人がいなくなるんだそうです。そしてその多くは結局島に帰ってくることがないんです。一生懸命働いて、子供たちをかわいがって育てて、その子たちが18歳の美しい若者に成長したら、人口2万2000人の平戸島は毎年135人の若者を失っていくんですね。それで里山だったり畑だったり自然だったりを守れるはずがありません。

私はよくNPOだとか社会起業家という風なセミナーで話をしてくれと言われるんですけれども、私自身は元々世のため人のためとか掲げてやってるんじゃなくて、自分の好きな仕事を田舎で好きなようにやってるだけなんですね。ただ、今日本の田舎で仕事をするということは、日本の田舎で守るべきものを守ることにどうしてもつながるので、ごく当たり前にやらなければいけないことをやっているだけで、「地域のために頑張っているいいやつ」だと言われてしまう（笑）。田舎は、みんな仕事がないと言いますが、あまりお金がかかりませんし、私もお金持ちじゃありませんけど、日々を楽しく暮らしていくには困りません。私にとっては九州に帰ってきて、自分の好きなところで毎日おいしい魚を食べながら、最低限のお金もちゃんと稼げる仕事をやっているだけなんですが、それでほめられてしまうというのは、すごく複雑な気持ちがします。

とにかく、私は具体的活動として、外国人を日本の田舎に連れて来るという仕事をしています。アメリカに、毎年3万人のアメリカの高校生を2週間の海外修学旅行に派遣している、世界最大の修学旅行派遣団体があります。アイゼンハワー大統領が50年前に作った団体です。日本で言えば、内閣総理大臣が毎年3万人の若者を世界を知るための旅に派遣するという事業を立ち上げて、それが50年続くというのはあり得ませんから、そういう意味ではアメリカというのはやっぱりスケールがでかい国なんだなと思わされますね。そういう団体の日本側の窓口をJTBという会社が担当していたんですが、JTBさんが当時25歳の私を信用してくれて、JTBと一緒にという形で、その修学旅行の日本コースの一部を引き受けることになりました。そうして毎年288人のアメリカの高校生に、平戸や小値賀など日本の田舎町、漁師さんやお百姓さんのところにホームステイしてもらって、日本の子供でももうしたことのない田植えとか一緒に網を上げたりとか、お婆ちゃんと一緒に村に伝わるお祝いごとのご飯を作ったりとか、そういうことを修学旅行のプログラムとしてやってもらったんです。するとそれが、その団体の全世界で48

コースある修学旅行プログラムの中で、なぜかダントツの評価を受けてしまったんですね。世界の大企業が作っているその他の旅行商品よりも、日本の田舎で一青年が、田舎の爺ちゃん、婆ちゃんと作ったものが、旅行ビジネスとして一定の評価を受けたわけです。そのプログラムの現場の様子がわかる映像を、今ちょっとお見せしたいと思います。

……

総勢28人に上るアメリカの高校生が、長崎を訪れています。アメリカの高校生たちは、長崎で柯を見て、柯を感じるのか。交流を支えるスタッフの奮闘を取材しました。

海に囲まれ、豊かな自然と歴史ある町、平戸市。今月19日、たくさんの修学旅行生を乗せたバスが到着しました。降りてきたのはアメリカの高校生たちです。彼らは、世界各地に高校生を毎年派遣している国際教育団体、ピープルトゥピープルに選ばれた学生大使。異国の歴史を学び、交流するのが目的です。

高校生たちに、平戸の歴史を英語で説明する一人の青年がいました。小関哲さん、27歳です。

「日本で面白い旅行をしたいから、どこかないかという相談があったんですけれども、じゃあこっちを見てくれと。場所を案内することが、その場所をおすすめすることが、僕の最初の仕事でした」（小関）

平戸出身の小関さんは国際交流や体験教育の企画・運営を個人で行っているコーディネーター。自然や文化が残る長崎県を推薦し、訪問を実現させました。

「どんな旅を演出できればいいなと思っていらっしゃいますか？」

「ここにある真心がそのまま伝わることですね。というか、心の通訳をするというのが、一番大きな仕事のような気がしています」（小関）

この日、高校生が向かったのは、漁業と農業の島、小値賀町。港では島の人たちが温かく出迎えてくれました。

「1年半ぐらい前から、ずっと皆さんのことを、小値賀町みんなで待っていました」（島民代表）

高校生たちが島で一番最初に訪問したのは、小値賀町唯一の高校、北松西高校。ここで3年生たちと交流します。交流会では、流行の歌を弾き語りしたり、柔道の技を披露し、アメリカの高校生に日本の文化を紹介しました。

「緊張しました」「歌って良かったです」（北松西高生）

すっかり打ち解けた高校生たちに、小関さんも安心した様子です。一緒に昼食をとっていると、お弁当の梅干しに質問が。

「あっちではオリーブみたいなものだと言えばわかります。サワー・プラム、梅の酢漬けの…」（小関）

今夜、彼らは小値賀町から船で10分ほどの大島にホームステイします。

漁師の横尾でつろうさんの家に泊まるのは、コナンさんとビラナンさん。荷物を置くと早速、横尾さんの船へ。漁師の生活を体験してもらおうと、今朝とったばかりの魚さばきに挑戦です。

「これ、きれいに落とさんばよ。きれいに」（漁師の横尾さん）

初めての体験に、二人は悪戦苦闘。その頃、コーディネーターの小関さんは、ホームステイ先を回っていました。

「ちょっと、通訳に入りましょうか。」

Ah, she is wondering what you, a fire to have for breakfast tomorrow morning（お母さんは皆が朝ごはんどんなものを食べられるんだろう？って聞いてるよ）ああ、何でもいいですって。朝ご飯も。ああ、そんなこと考えてくれてるの、って」（小関）

日が傾き始めるころ、島の人たちと一緒に夕食です。料理を持って集まってきた生徒たちは、浴衣姿。甚平を着た生徒たちもいます。夕食会では、島の子供たちが歌を披露。島の温かいもてなしに、交流の輪が広がりました。

小さな島の夜は、にぎやかに更けていきました。

翌朝、お世話になった皆さんに別れを告げ、島を離れました。

平戸に戻った高校生たちが、次に学んだのは環境問題。海水から塩づくりをしている今井弥彦さんの工房を訪ねました。

「海水から作るお塩づくりというのが、30年前に完全にやめられたんですね。その一番大きな理由というのは、海の汚染です」「みんなが自分たちの近くの海を守ることは、僕が塩を作るためにも非常に重要なこと…」（塩炊き今井さん）

高校生たちは、被爆の実相を学ぶため、長崎にも入りました。語り部は、元路面電車の運転手で被爆者の和田耕一さんです。

「初めて見るようなものすごい閃光、

ものすごい風のために、建物が完全につぶれてしまいました。建物の下敷きになっていたんです」「僕のような人間を作らないでください」（和田）

アメリカの高校生は、平和の実現のために、お互いを理解することから始めたいと話しました。こうして4日間の長崎滞在が終わりました。

「きれいな自然だったり、おいしい食べ物だったり、温かい人々だったり。彼らは長崎や平戸や小値賀という場所を、本当にもう一生の思いにしたと思います」（小関）

長崎に初めてやってきた、アメリカからの大旅行団。住民たちのもてなしの心と、豊かな観光資源は、高校生たちに大きな喜びと感動を与えました。

アメリカの高校生の真剣な表情、そして鋭い視線と言いますか、とても印象的だったんですが、アメリカから長崎県に、これだけ大規模な修学旅行が訪れるのは初めてだそうです。7月中旬までに、アメリカから合わせて9陣、合わせて[illegible]人の高校生たちが、平戸、小値賀・長崎を訪問する予定だそうです。長崎の歴史、文化、じっくり見てください。

以上が、僕が20代半ばのとき、大学を出てふらふらして、「あんた、何ばしよっとね」「早くちゃんと会社とか行きなさい」とか近所のおばちゃんなんかに言われたりしながら、僕がひそかに準備して、実現した仕事のひとコマです。僕はこういうことを仕事としよう、今の社会に欠けている価値なんだから必ずそれは求められている、と、会場のうしろにいる学生さんぐらいの時から、実は本能的に解っていたと思います。それを理解してくれる人もいたし、別に東京の大きな会社に行かなくても、このパソコンと携帯さえあれば、山の中でキャンプしながらでもロンドンやニューヨークと不自由なくやり取りできます。そういうことが物理的にできる時代になっていたこともあって、こういうことをやっているわけです。先生、ほかにどんなことをお話しすればいいでしょうか。

【田中】 もう少し言いたいことがあれば、続けてください。

【小関】 そしたら、写真もお見せしたいですね。それから、2003年、私が27歳の時に、この仕事が国際的な評価をいただきました。経団連の記事なんかも書かせてもらったんですけど、その時に書いた、この仕事に関する20ページぐらいのレポートがあります。それには、この旅行ビジネスがどう成り立って、具体的にはどういうもので、お金がいくら、どういう風に回っているかという報告と、こういうことを各地で行うためにはどういう課題があるか、そして、それにはこういうことをすればいいのではないかという提言をまとめております。今日、なぜか私はそのレポートを配っておりませんが、外国人を地域に招いて、お金を落としてもらって、お金の効果とお金以外の効果をさまざまに生むということが、日本の地域再生の一つの手法ではあると思いますので、もしこういったことが、ご自分の地域だったり他のところで、あるいは次世代の仕事になるんじゃないかとお考えの方は、後ほどお声をかけてください。私は、少なくとも自分がやっていることに関しては、具体的に最も良く知っている現場の人間です。興味のある方には詳しくお話しできると思っておりますし、皆様の地域に輸出をしたいと思います。

残りの時間で写真をぱーっとお見せして、この活動の周辺にあるいろんな小話や、背景なんかについても触れたいと思います。これは私の家です。これが私と弟です。ここは私の家から徒歩数分の海で、あれは僕と親父と弟です。ここでサザエやタイが獲れます。僕らはここら辺に竹の矛を手に潜って、こんなタイを獲ることができます。

僕はここで育ったんです。僕と弟です。僕の事務所のすぐ近く。これがオフィスです。今はちょっとよそに家を借りてるんですけれども、ここで21歳から仕事を始めました。うちの親父の家の庭ですが、ワイヤレスが飛んでいるので、さっきのアメリカとの仕事っていうのは、ここで、このパソコン一台使って進めました。隣にあるのがマキノトウですけど、お昼時になったら庭を一周して、生えているものを摘んで、それでバスの中で作って食べて、また仕事に戻ると。こういう感じでした。

これはうちの庭ですね。婆ちゃんと婆ちゃんの妹と、うちの母と父です。裏に薪を積んでます。薪ストーブを使うようになって、うちは冬は石油はいらなくなりました。薪割りってなかなかいい運動になって、楽しいです。こういうところで過ごしました。これが僕の畑です。僕は百姓はまだ、畑先生

ほど経験はないんですけど、田んぼも今年から借りて、お米づくりもやっています。こういうのがおいしいんですよね。

こういう生活をしてたら、受験勉強とか就職が何かつまらないことのように思えてきますね。僕、決して働きたくなかったわけじゃなかったんですよ。むしろ僕は就職に燃えてたんです。でも、すごく社会に対する思いとか正義感なんかがあって、自分の情熱と時間を活かしてくれる会社があるのか、という真剣な眼差しで就職説明会に来ている若者に対して、あの受け答えはないだろうというような大企業の一側面に触れたこともあって、結局本能に従った結果生まれ育ったこの世界に戻ってきてしまいました。だから、昨日頂戴のお話を聞いてて、自分にも別の道があったかもしれないと思いました（笑）。若者っていうのは単純ですから、ああ、この人は素晴しいこと言ってるなとか、格好いいなと思ったら、簡単にほれちゃうわけですね。たまたま私が出た就職説明会の時は、今の私ぐらいの年齢でしょうか、世の中を知ったふりしてるような、あまり誠実じゃない若い社会人の姿に呆れたというか情けない思いを感じたので、僕は若者をそんなにすぐにダメにしちゃうところのある（ように当時思えた）大企業という社会に入ることを避け、今まで来てしまったんですけれども、別の人に会っていたら違ったかもしれないんです。たとえば僕が肥後銀行の説明会に行っていたら、「じゃあ一緒に植林やります！」とか言って、燃えてたのかもしれないなと思うと、若者って本当に単純だと思います。僕の仕事も、若者の無邪気で無垢な情熱と、それをよく理解している年上の先輩方とのコンビでやってるんです。

これは僕の弟分です。彼はプリンストン大学というアメリカの名門大学の卒業生なんですが、日本に帰ってきたら、東京に1泊だけして、すぐ平戸島のうちにやって来ます。これから新入社員として1千万とかよくわからないですけどそういう高額の評価をもらいながら外資系コンサルの仕事をするそうですが、その合間を縫ってうちに来て、僕の仕事も手伝ってくれることになっています。彼もこういう立派な魚を獲れるし、田舎の人と心の通じる、本当にいい子なんです。

これは青のりを干しているところですね。これは僕の弟です。こういった魚が、30分後にこうなるわけですね。さっきも寿司の話が出てましたけど、本当に今日のキーワードは「うまい寿司」です。うまい寿司を食べたいから、僕はこういう生活をしている。半額じゃなくて、これは無料です。このお寿司や料理、これは僕が作ったんです。さっき写真に写ってましたけど、僕のお婆ちゃんと母がちょっと病気をしまして、男だけで家を切り盛りしていたんですね。男3人でお婆ちゃんと母の面倒を見ているという状態で、お正月のおせち料理を作るのは無理かなと思ってたんですけれども、ないというのはちょっと寂しいねということで、急遽31日に僕が作りました。これはお重がいいので、それなりに見えるんですが、実際は見よう見真似の作品です。僕は料理は元々好きで、全くわからないつもりではなかったんですけど、いざお節の一式を整えてみようとしたら、想像を超えて大変なんですね。これを日本の母や祖母たちはたった一人で、あの忙しい時期にやってくれていたのか、と。そんな色んなことを感じながら徹夜でなんとか作ったお煮しめを、お婆ちゃんが一口食べて、「よろしい」と言ってくれたときは、長い歴史の一部に入れてもらえたような気がして本当に嬉しかったですね。

ところでおせち料理を作ったことのある男性、いらっしゃいますか？あ、すごい。僕は習ったわけじゃないし、料理が専門でもないです。でも、なぜか一応形ぐらいはつくることができた。たとえばこれを下茹でして、この出汁はこれには使えるけどこちらは別で、とか、今度は里芋を下ゆでしてこうやってという手順を、ちょっと考えたら少しはわかるからなんですね。魚の獲り方も、僕は漁師じゃないし、漁師と比べると遊びだけど、やったことない人よりは獲れる。こういった料理だとか、生き物の獲り方だとか、山の歩き方だとかは、学校や都会に行って学んだことと違って、自然に家族との時間の中で、あるいは地域の時間の中でうっすらと覚え、それが少しずつ積もってできるようになったものなんだなと思います。ですから、僕がおせち料理を作れるその感覚と、僕のやってる仕事のというのは、全くかけ離れたものじゃないんですね。趣味と仕事じゃなくて、そういう感覚で生きてきた人間が、同じ感覚で人と接していく

ことが、たまたまビジネスになっている。日本は製造業によって発展してきましたけど、人の心に接するということを商品や産業にする、あるいは人間にとって本当に大切な価値を見つめ直すという時間や機会を提供する。そんなときに日本の田舎は、その資源として、世界に誇れる人の力、地域の力を潜在的にしっかり持っていると思います。商品としても、商品としてじゃなくても、誇るべきものがたくさんあるんですね。

これが小値賀ですね。小値賀は平戸島の隣の小さな島で、人口3300人ですが、合併をせずに独立してやっています。ここがまたすごい島で、私は平戸の出身ですけれども、小値賀の方が平戸よりももっと住民たちがまとまって活動していて、自然も美しくて、自分が生まれ育った平戸の良さが濃縮されたような島だと思っています。私は大学卒業直後から特にこの島で活動を展開し、この島の人々に育ててもらってきました。しかし最近、私は思うんですが、九州とか田舎のことを語る時に、少なくとも九州人、特に現場の人間は、自然が美しいとか食べ物がおいしいとか、素材の良さを言うのをもうやめるべきだと思うんですね。素材がいいのも自然が美しいのも当たり前のことで、それをいかにシステムとして保存していくか、売っていくかが課題なんです。僕はその美しい話もしていますが、お金の話もしています。お金の話には裏付けがあるんです。小値賀の人は僕と同じ感性で、ビジネスの仲間として動ける力を持っています。現在そこに立派なパンフレットが置いてある高級宿泊施設の古民家ステイ事業だって、最初は2006年に僕という一青年が、島の古民家をホテルみたいに改造してお客さんを呼びましょうよと無邪気に提案したのに島の大人たちが真剣に耳を傾けてくれたのが始まりでした。4つか5つの古民家をものすごくおしゃれに改装して、1泊2万とか3万とかで泊まってもらう。全部稼働すれば年収2億ぐらいの施設になるという計算です。それが今稼働して、もう予約が取れない状態になり、当時職員1人（立役者として有名になった高砂樹史さん）からスタートしたNPOが、今は職員17～18名になって島最大のサービス事業者となっています。とにかく夢を現実に変えていく力、実行力があるんです。そういう島なので、小値賀についてもまた、丸々誇れるぐらいプレゼンしたいことがあります。これが野崎島。小学校がユースホステルになってます。

この小値賀というのが、日本の再生のカギ、モデルになると思っています。私はふるさとの平戸を愛していて、そこも美しいものがいっぱいありますが、小値賀と一緒にほかの地域が真似できる、素晴らしいモデルというのを作って、輸出したいと思っています。私の夢は、小値賀や平戸のような場所に日本中の志ある若者たちが集まり、大学や都会では学べないものを働きながら学べるようにすることです。そのために、既存の大学という形じゃない、新しい教育インフラストラクチャーを作りたいなと思っています。私の夢は非常に漠然としているんですが、実態も少しだけはあるんです。

地元の子供たちもたくさん手紙をくれます。エリートだけじゃなくて地元の子供たちも今、私たちのあとを追って、同じようなことをしたいと言ってくれています。この子たちが今、もう18～19になってきて、仕事を支えてくれたりするんですね。それから、さっき紹介した修学旅行で私たちの島を訪れたアメリカの子たちが、東北の震災が起こった時に、日本が大変だからって募金をくれたんですよ、僕に。その募金を使って、私たちと小値賀の人たちは、東北の子供たちの疎開を受け入れようということで、今、動いています。先週はそれで東北に行ってきたんですけれども、そういう形でも子供たちの純粋な気持ちが受け継がれてるなあと思います。

これ、僕のスタッフたちです。僕の留学時代の友人や後輩です。今、大学生なんですけど、ものすごく一生懸命仕事をしてくれて、その若者たちが地元の若者たちの憧れなんです。お兄さん、お姉さんが一生懸命、地域のためにやってくれて、しかもその事業が過疎地域にお金も落としているというので。

これは僕が若者時代に遊んでいる姿、こっちは僕が仕事をしている姿。区別があまりつかないと思います。これは友達じゃないですよ。うちの社員です。給料払ってます。この時は多くて、一月30万払ってました。これは事務所。

この頃はまだ20代でしたし、あちこちの講演や、テレビとか新聞とかでも

しゃべらせてもらっていました。大学とかで講演すると、若い子たちが熱えるようなまなざしで見つめてきて、ボロボロ泣く子がよく出てきます。本当は、その志にストレートに生きたいのに、現実社会の壁とか自分の未熟さとかもあって、どうしたらよいかわからない。ちょっとしたきっかけと導いてくれる先輩さえいれば、若者というのは寝食を惜しまず頑張りたくて仕方ないんだけど、社会にはそういう受け皿がないから、やれ受験だとか、「御社にはこういう理由で入りたいんでございます」とか、自分の心に嘘をついて我慢することが大人になることなのかと深く迷っているんです。本気で社長さんに直接アクセスする立場に立てないから、本音でしゃべる機会もないわけですよね。でも、本当に今も多くの若者たちは、表現する手段もきっかけもない情熱を秘めています。その力を、間に誰かが入って束ねて目に見える形にすれば、仕事にもなるし、仕事以上のものにもなると思うんです。あちこちとお話しましたがとにかく私はこういう感じで生きております。

【田中】 どうもありがとうございました。遊びながら仕事をし、仕事をしながら遊ぶというのは、何か人間の生きる、本当に理想的な形を実践されているような気がしました。その背景は、やっぱり限りなく美しい自然だとか身近な自然、それからおいしい食べ物、そして、おもてなしに代表されるような人と人との関係ですね。そんなつながりの中で、自らの生きる道を探っておられるというのは、本当に示唆に富んだ話だと思います。そういう意味では、最初にお話をいただいた畑さんと、現れ方や取り組みは少し違うけれども、かなり共通部分があるんじゃないかという気がしました。畑さんの方から何か、小関さんにコメントとかありませんか。

【畑】 小関さんの仕事を見せてもらっていて、手作り感というのはすごく感じました。手作りというのは、ためらいを伴うと言う人がいます。つまり考える時間があるんですね。たとえば僕は、4カ所に分かれた38坪の田畑を農家さんから借りてます。38坪というと、宅地で言うと大きいんですけど、農家さんレベルで言うと1反ですから、そんなに大きくありません。ただ、その周りに農道があったり、一部借りている畑田には土手があったりするので、緑地面積的にはざっと450坪ほどあります。そうすると、その農道や土手の150坪は草刈りをするわけです。さっき動力に頼らないと言ったんですけど、実はそこの150坪の草刈りは、時間に追われて業務用の草刈り機で刈り払います。刈り払う時に、カエルの背中の上をびゅーっとかすって、カエルの背中がなくなったり、カエルの目のところに刃物が当たったりもするんですが、それでも機械作業というのは効率を優先してずっとやっていく。ためらいも何もなく、作業として進めるわけです。

田畑の中の部分は、そういう機械が使えないので、のこぎり鎌という鎌で、ずっと刈っていきます。しかし、僕は無農薬でやっているもので、必要以上に田畑の草を刈り過ぎると、草という生き物がなくなって、野菜しかなくなる、米しかなくなる。野菜や稲にしか害虫が行かざるを得ない環境になるから、ちょっとやり過ぎかな、もうちょっとやらんとあかんかな、というためらいが出てくる。そのためらいの中に、相手を思いやる心があるんですよね。雑草にも命がありますし、その雑草を必要とする虫もいる。たとえばカタバミという雑草があります。その雑草は、ヤマトシジミという蝶の食草、つまり幼虫が食べる草なんですね。カタバミは非常に繁殖力が強いので、こん畜生と思って刈りたいわけなんですけど、ヤマトシジミさん、困るよねと、少しためらいが出てくる。それは相手を思う気持ちなんじゃないかと思います。

先ほどのニュース映像の中にあった真心とか、心の通訳という小関さんの言葉に、なんかすごい感動しちゃったんだけど、手作りとか、ゆっくり歩く人間のスピード、そういう中においては、本当に人間だけではなくて、植物も動物も含めて、他の生きとし生けるもののことを考える時間があるような気がします。ただ、現代社会においては、そればっかりは言ってられません。その部分を非常に理想の形で、平戸というところで実現されているところに、僕も勉強させられるところがあるし、何か共通する部分もあるし、非常にうれしく、楽しく拝見しました。

【田中】 ありがとうございました。小関さんは、まだ「あんた、何ぼしよっとね」と言われるとおっしゃっていました。でも、世間に「何ぼしよっとね」と言われるような人がもっと増え

て、その人たちが評価されるような社会にしていくことが、すごく大事だと思いますね。「何ばしよっとね」という意味では、畠山さんはその典型です。その畠山さんからすると、まさに息子さんと同じ年代にこういう若者が育っているわけですが、畠山さんの方から何かコメントがあれば、いただけませんでしょうか。

【畠山】　そうですね。もし自分の若い時にこういう状況があれば、また随分違った時代が来てたんじゃないかなと思いますね。うちにも今、同じ釜の飯を食って、一緒にやっていこうとしている男の子が3人いるんですけど、この間、小関さんがうちに来てくれて、何かうちの倅たちとすごく気心が合ったようです。ちょっと年は上ですけれども、「あいつ、いい奴」とか、みんな言ってましたので、これから何か交流が生まれそうな感じですね。本当にあいつら、何を考えてんのかなと思って、心配は心配なんですけど。

でも、目を世界に向ければ、本当に日本という国はいいところなんですよね。何か物作りばっかりに今、行ってますけれども、本当に私たちは、自分の住んでいるこの国の価値を、もう一回、見直す必要があるんじゃないでしょうかね。九州は特に歴史もありますから、歴史と自然とを絡ませて持っていければ、きっといろいろできますよ。私もガイド業をやりたくなってきたな。私は営業ができないけど、営業ができれば、本当にいい仕事ができそうな気がしますね。

【田中】　どうもありがとうございました。若いお二人の話を聞いて、私はこれから話すのがちょっと気が引けるような気持ちになりかけております。ただ、今回の震災が私たちにもたらしたものというのは、やっぱりもう一度物事の根源、一番の原点に立ち返って考え直すという機会、あるいはメッセージだという気がするんですね。そういう意味でパネル討論の後半は、これから私たちが大震災にどう対処していくかということを含めて、原点に戻るということのイントロダクションになるような話をさせていただければと思います。

私は今日、何を話そうかと思ったのですが、まず「社会運動としての森は海の恋人のポイント」、それから、いろんなことを統合した新しい学問としての「森里海連環学の時代を地方から世界に発信する」ということをお話ししようと思います。今日の話の中で既に、地方あるいはローカルにこそ、本当の意味で世界を変えていくエネルギーや源があるということが共通の基盤として出てきていると思いますので、そういったことで少し、頭の整理をしてみました。

最初に、東北太平洋沖巨大地震・津波のメッセージというのは、私も皆さんも同じでしょうが、やっぱり自然への畏敬の念をもう一度取り戻しなさいということではないかと思います。それを違う表現で言えば、物事の根源に立ち返るということであり、そういう問いかけを個人、家族、社会、いろんなレベルでしていく必要があるということではないか。そして、「自然とは」、「命とは」を深く問い直す。それから、水の惑星・地球というのも、鉄の惑星・地球に変えていく。しかし、よく考えれば、鉄があっても、それをいろんなところに運ぶ媒介がないといけません。それが水なんですね。そういう意味で、昨日の頭取のお話と少し重なりますが、鉄だけではなくやっぱり水も大事であり、さまざまな要素の共同作業であるということを、ここに含めて考えております。こういうことをもう一度、根源に戻って考えてみるということが大事ですね。

やっぱり、今回の原子力発電所の事故対応の仕方にしても、人間の命に関らず、周りのすべての命が本当に大事だということが社会の基準であったなら、あれよりはもっと迅速に、もっと基本的な対処ができて、これほど大きな問題にはならなかったと思います。すべての命は海で誕生しました。私たちは忘れかけていますが、これは当たり前のことですね。そして、海で生まれた命は、脊椎動物の最も祖先の魚を経て、海から陸上に上がってきました。ですから、私たちの稲作漁労文明、魚を大事にする食文明・文化というのは、

こういうことにも関わりがあるはずです。

人類の祖先の歴史というのは200～200万年ありますが、今の現代人、ホモ・サピエンスの歴史は、せいぜい19万年です。生命の歴史38億年から考えるとほんの一瞬ですね。そのほんの一瞬の人間が、今、本当に、根本からいろんなことを考え直さなきゃいけない時期に来ている。そして、その19万年はほとんどが氷河期でしたから、彼らは熱帯雨林の中で、狩猟、移住生活をしていました。それから地球が温暖化すると、1万年くらい前から農耕という新しい文明を発明して、定住生活に移った。その頃、彼らの圧倒的多数は森の中にいたわけですね。つまり、森は現代人のふるさとである。それを人間は潰し続けている。このことをもう一度、問い直す必要があるでしょう。

さらに、ふるさと、田舎を見捨て、壊し続けている日本人のあり方を、もう一度考え直してみる必要もあります。これは同時に、命を支える基盤を考えてみようということですね。命を支える一滴の水は森に生まれ、森の一滴の水は海からもたらされるという循環があるわけですし、水は21世紀の最も熾烈な、最も重要な資源問題でもあります。昨年、レアアースの問題なんかで、日本は随分ごたごたした感じがありますが、21世紀レベルで見れば、中国は本当に水問題に困るわけです。日本はそれと対極の水に恵まれた国であるということを基盤に置けば、そういう意味でもっと自信を持てるだろうと思います。要するに、水循環の起点は森と海であって、それはすべての命の基盤であるということです。言い換えれば、私たちのこの間の物質文明というのは、森と海のたゆみない循環、つながりを分断してきた歴史ではないかということですね。

一つ具体的な例を示してみましょう。ヒラメという魚がいます。おそらく小関さんも採集の対象にしている魚ではないかなと思いますが、1㎏のヒラメが産む卵の量は200万個です。先ほど畑さんは、一粒のお米が2000粒の種籾になると話しておられましたが、海の生き物はもっと多産ですね。それは圧倒的多数がほんの1ヶ月ぐらいの間に、1万分の1ぐらいに減ってしまうからです。運良く生き残ったものは、広くて深い海のどこにでもいるわけではなくて、まさに陸と海の境界の波打ち際、渚というところに集まります。かつて生き物が海から陸に進出してきた渚が、彼らの育つ場所なんですね。そして、この渚でどういうことが起こっているかと言うと、海で蒸発した水が、山に雨や雪となって降る。それが森を育んで腐葉土を、そして先ほど畠山さんのお話にあった溶存鉄を生み出して、川や地下水を通じてこの渚にもたらされる。それが彼らの命を養っているわけです。海と山、森、川や地下水、そしていろんな生き物。こういったいろんな循環が縦横につながったのが、私たちの世界だということになります。

森が海を育てるというのは、いろんな物質が水を通じて森から海に流れるわけですから、非常にわかりやすいわけですね。しかしもう一つ、海も森を育むという逆方向の流れもあるんです。その代表がサケですね。サケは生まれた後、体長5㎝、1㎏ぐらいに育つと、海に下って北洋まで回遊をします。そこで海のエネルギーを体いっぱいに貯め込んで、5～6㎏まで大きくなる。ですから、産卵のために川に戻ってくる時には、5000～6000倍のエネルギーを森に運んでくることになります。従来から、卵を産むと親は死んで土に返り、子供たちが育つ環境を豊かにしてきたと、こういうつながりが知られていました。実はこのつながりで重要な役割を持って新たに登場するのがクマです。クマは大量のサケを食べて、栄養を蓄えないと越冬できません。面白いことにクマはとても贅沢な奴で、おいしいところだけしか食べないんですね。サケを捕まえると、陸に持ち上げて、内臓やイクラといったところだけを食べて、ほとんどは食べ残しです。ですから、1頭数百㎏のクマが1シーズンに200～300尾のサケを食べて、その大半を食べ残し、それが陸域に累々とたまっていくわけですね。そのことがどういう役割を果たしているかというのが、こちら側の循環になります。つまり、海の栄養がクマによって陸上へ運ばれ、分解されて土に戻る。森の木がそれを吸収して、大きく成長する。サケがたくさん遡上した年には、森がどんどん育つ。そして育った森は昆虫を養い、その昆虫が水に落ちて稚魚のえさになる。つまり、森と海の関係というのは、双方向であるということになります。

森里海連環学は、そういう双方向の

いろんなつながりを新たに解明する学問として、1903年に京都大学に生まれました。地球を生命体と考えれば、今、皆さんの森に降った雨が、地下水や川となって海につながる循環系であるというのはイメージしやすいんですけれども、同時にこれは免疫的機能を持っています。私は、この両方が今、病んでいるというのが、今の症状だという風に思います。森里海連環学は、こういうつながりそのものを現代に再生する新しい学問であるということを言い続けてきましたから、大震災で絆やつながりが問い直されようとしている今こそ、まさに出番だという気がします。しかしながら、それは決して、森里海に限って考えてはいけない。私たちがいろんな意味で「ふるさと」と呼ぶのは、圧倒的多数の人たちが住む生活空間ですから、田舎だけではなく都市も含めて、そこに住む我々自身のありよう、生き方、それから生業そのものを問い直す、そういう学問であるべきなんですね。

では、自然はなぜ大切かを、ちょっと考えてみましょう。日々の食は、すべて自然の恵みです。植物にせよ動物にせよ、他の生き物の命を食べているということは、本当に重いことですね。また、自然は46億年の地球の歴史の生き証人です。九州には阿蘇、雲仙、天草というジオパークがあるわけですから、九州全体がそういう歴史の証人のような存在であると言えます。このことがおそらく、九州がこれから元気になり、特性を活かして伸びていくための基盤だと思いますね。そして、我々と運命を共にする自然の中には、仲間たちがたくさんいます。先ほど畑さんが言われたように、役に立たない生き物こそ、いろんな意味で私たちの暮らしや産業の縁の下で関わっている。そういうすべての生き物に思いを馳せることが、実は生物多様性だと私は思います。熱帯雨林に遺伝子資源があるから、生物多様性を大事にしなければというだけではないんですね。そして、生物多様性を基盤にして、もう一度地域の経済を元気にし、地域の人々がもっと心豊かに生きていくための方法というのは、おそらく地域からしか生み出せないだろうという気がします。

自然の中には、私たちがまだ見出していない、いろんな素晴らしい価値があります。ここには「未知の資源の宝庫」と書きましたが、こう書くと一般的には、残念ながら遺伝子資源のようなものをイメージされがちです。しかし、まったく違う資源があるんですね。その一例が音です。私たちがここで話しているような声、あるいは都会の喧噪、これらは耳から聞こえる音ですから、人間が認識できるわけですが、実は環境の中には、人間の耳には聞こえない高周波の音がいっぱい存在します。音資源と言っていいのかどうかわかりませんが、この高周波音のことをハイパーソニック環境音、あるいはハイパーソニックサウンドと呼ばれています。これには三つの効果があるんです。一つはストレスを解消する。そして、さらに免疫機能を高める。そして、さらに驚くことに、心を豊かにする。これは何も感覚的なことではなくて、現代科学の手法を用いた脳科学のレベルで、既にこういうことが実証されています。それを実証したのは日本の科学者（大槻　力先生）です。こういう価値が世界的に認められれば、これはおそらくノーベル賞に匹敵するような発見ではないかという気がします。こういったものが、自然の中にはまだいっぱいあるんですね。

そのハイパーソニック環境音が最も顕著に存在するのは、実はホモ・サピエンスが19万年暮らしていた熱帯雨林の中です。だからこそ熱帯雨林は大事なんです。私たちが何となく熱帯雨林を大切に思ったり、機会があれば行ってみたいと思うのは、自分たちのふるさとだからですね。ふるさとにはこういう宝物がある。しかもその宝物は、何も熱帯雨林だけにあるのではない。実は里山の雑木林にもあるんです。鎮守の森にも、屋敷林にもあるんです。これらが熱帯雨林と共通するのは、いずれも生き物が、人間以外のいろんな生物が元気に生きている場所だということです。その最も典型的な場所が熱帯雨林で、ここには一番の高周波があるというだけです。間伐がされないで放置された杉の人工林は、生き物の気配が一切しないわけですから、残念なことに、この周辺の杉の人工林にこういう音はありません。しかし、そういう森でも手入れをして木を使い、生物多様性がもう少し豊かになった森にすることによって、音資源そのものを復活することができます。そういう中で私たちが暮らす機会が増えれば、ストレス解消、免疫機能、心を豊かにするという三つの効果が本当にもう無理を

しなくて得られます。薬を飲まなくても、お医者さんに行かなくても健康になれる。このことを経済的に評価すれば、すごい価値になるということですね。これはおそらく、ほんの一例だと思います。

先ほどの畠山さんの話に出てきました魚付き林のように、やっぱり昔の人の知恵にもう一度学び直すのも大切です。今回の津波で、三陸の海岸沿いの道路はことごとく壊滅的被害を受けましたが、かつての東北縦貫道は、今回、水が進出した範囲より陸側にきちっと道が作られています。昔の人はそういうことをちゃんと知って、先人の知恵に学びながら暮らしてきました。その先人の知恵の代表が、魚付き林なんですね。この考え方も時代とともに変遷して、岸辺の森と水辺の生き物だけではなくて、既に日本列島丸ごとが魚付き林であると考えられるようになりました。たとえば九州ですと、日田の森は有明海の魚付き林であり、阿蘇の森も有明海の魚付き林という関係だということです。

先ほど既に北大の白岩先生の話が出ましたが、さらに巨大魚付き林構想というのも出てきています。巨大魚付き林というのは、今まで考えられなかった大陸と外洋につながりがあるという考え方です。これはアムール川の支流の写真です。余りに大きいので、支流でないと岸辺が見えません。両岸には手つかずの森があります。こういうアムール川と今でも数十万トン獲れるサンマに代表される親潮の恵み。従来は関係があるなんて誰も考えなかったのが、科学の目で、しっかりと双方の関係が押さえられました。つまり、アムール川が親潮域を世界の三大漁場にしているということがわかったわけです。ということは、たとえば阿蘇の人工林がなかなか利用できないと、どうしても外材に頼らざるを得なくなり、そうするとシベリアの森を壊すことになって、それが巡り巡って三陸のサンマが獲れなくなってしまう。そんな連鎖を考えないといけない時代に来ているんだということであります。その循環の魔法のカギが鉄だということが、科学として明らかになってきたわけですね。

私自身は、有明海で30数年ずっと研究を続けています。30年間の研究がこんな1枚のスライドになってしまうかと思うと、何となくせつない思いがしないでもないですが、実はこれに本当にいろんなことが含まれているんです。生物多様性の豊かな有明海の秘密をずっと調べていくと、汽水の河口域にいるいろんな生き物のつながりが見えてきます。そして、この最も基本的なプランクトンを養うのが、有明海の濁りに濁った水なんです。これ、どこでも濁りが作り出されるわけではなくて、海の水と川の水が最初に混じり合うところで濁りが生まれるんですよ。一番典型的に見られるのが、筑後川の河口から15kmぐらい上流ですね。そこにはふんだんに筑後川から水が流れてきます。そして、水の中には阿蘇や九重の火山台地で生み出された粘土やシルトが豊富に含まれています。これが次の段階では、ここにもう一つ鉄が加わってくる。これはこれから調べるところですが、とにかく山が地球を育むわけです。もう少し具体的に言えば、「阿蘇山が有明海の稚魚を育む」んですね。こういうことが、30数年かかって、ようやく見えてきたわけです。これが私の森里海連環学の発想の原点ですし、こういう学問はこれから本当に世の中を変えていく、あるいは自然の再生をしていく上で大事な学問であると言えます。同時にこれは有明海から生まれた学問でもあります。私はこういったことを、これから命が続く限り究明していきたいと思っています。

従って、有明海再生は九州再生の試金石であると言えますね。いろんな取り組みが行われていますが、有明海は瀕死のままです。この海には、ここにしかいない生き物がたくさんいます。そして、かつては日本中で一番豊かな海でした。しかし、この10数年の間に30人近い漁業関係者の人たちが、自ら命を絶たざるを得ないという深刻な現実があります。そういう海を放置したままで、九州の豊かな自然を売り出すことはできないのではないかという気がします。やっぱり自然を再生するような公共事業へ転換していく必要があります。有明海を有明海らしくしている一番の大本は、九州最大の河川・筑後川ですね。その上流が阿蘇や久住の山地です。もちろん阿蘇や久住は、菊池川、白川、緑川などの別のルートでも有明海につながっていますので、各流域の生業や暮らしの本来のあり方をできるだけ再生していくことが大事です。その総和が有明海の真の再生に結びつくんだということですね。私たちも森里海連環的な考え方で、そういう

ことに少し取り組み始めたところです。有明海ほど環境が多様で面白い海はありません。面白いというのは、研究としても面白いし、このことが本当に有明海を再生できれば、それは日本全体を再生することにつながるぐらい面白いということも言える気がします。

先ほどの畠山さんの鉄ですが、「鉄は魔法使い」を実証しようというプロジェクトが、今始まりました。これはキレートマリンという商品名で売られているんですが、形は練炭そのものですね。これが何でできているかと言うと、純度の非常に高い鉄と竹炭です。それにキレート剤をまぜてセラミックで固めて、こんな形にしているんです。これをヘドロ化した干潟に設置して干潟を元気にさせようという試験を始めました。まず、キレートマリンの鉄と炭素が反応して、先ほどのフルボ酸鉄のような溶存鉄がじわじわとしみ出します。微生物にとって鉄は必須の元素ですから、微生物が活性化して元気になる。そうなればヘドロが解消する。それから、ムツゴロウが食べるような干潟の上の植物プランクトンを再生する。その上でこの溶存鉄が不可欠ですから、そういう植物が増えれば、酸素が供給されて干潟が元気になる。こういうメカニズムを基本的な考えとして、今、研究を進めているところです。

この取り組みは、実はたくさんの人たちの漁師さんと研究者、学生、大学院生、それから「志民」の方々に支えられています。この志民というのは、文字通り志のある市民ですから、こういう方のつながりがずーっと広がって行くことが本当に重要だと思います。この漁師さんは有明海の中でずっと苦労されて、自分の息子に家業を継がせたいと思ったけれども、どうしても今のままではできない。毎日、暗い気持ちで過ごされていたところに、こういろんな人たちの協働の輪ができてきたんですね。その時にこの漁師さんが我々に言われた言葉は「今日は楽しかばい」でした。これがやっぱり、本当にいろんなことを進めていく上での原点になるのではないでしょうか。そういう人の輪で自然再生もできるし、経済の源にもなるのではないかという気がします。

少し口幅ったいことを言わせていただければ、森里海連環というのは、実学であり哲学であります。現代社会が混迷を深めているのは、理念とか哲学がないからではないかという気がするんですね。物質文明は見えるつながりだけをつまみ食いしながら、物質的な豊かさを求めてきたけれども、本当は縁の下の力持ちのような見えないつながりにこそ、重要な意味がある。この森里海連環学というのは、そういうつながりの価値観を取り戻す学問であるということになりますので、同時にそれは、縦割りの構造や思考からもっと柔軟に、畑さんや小関さんが実践されているような横断的な思考へ転換するという意味でも、哲学的な意味を持つわけです。しかし、哲学だけで世の中変わるわけにはありませんので、今、実学としての森里海連環が試されていると思います。科学の中の縦割りを壊そうというのが一つの目論みですし、それから新しい学問として、科学の内と外をつながないと、学問の世界だけの科学ではやっぱり限界があるだろうと考えています。そういうことが、先ほどのキレートマリンのような試みにつながってきます。溶存鉄というのは本来、森から不断に供給されて、自然の仕組みの中で海に流れるわけですが、それが人間のいろんな活動で分断されて、そういうつながりが絶たれている。そこに、少し手を加えてやれば、自然の再生の力を目覚めさせることができる。森里海連環学の実学としての側面は、そんな技術であろうと認識しています。

森里海連環学は、ある面では、森は海の恋人。の科学的根拠を解明するものですが、科学的なメカニズムを明らかにするということだけを目指すものではありません。私たちは今、森里海連環学をより基盤のしっかりしたものにしながら、それを基にして、本当に自然を再生することを目指さなければならないと思っています。これを日本からアジアや世界に広めていくには、森里海連環学という日本語では通用しませんから、何か良い英語の呼び名がないかと考えて、最終的に、H to O Studies。とすることにしました。Studiesというのは学問という意味ですが、Hというのは、源流（HeadstreamHeadwater）のH、OはOceanです。源流から海までの学問。さらに、このtoを2に変えると、H2O Studies、つまり水の学問ということになります。水は地球を巡り、豊かな自然と命の源であるということですね。こういう発想は、日本だ

から生まれたのだと思います。人工林に40%は変えられてはいるけれども、日本はまだ国土の67%が森です。四方は本当に豊かな、世界的に見て豊かな海に恵まれています。そしてそれはつながっている。森里海連環学は、そういう日本の自然基盤から発想し得る新しい学問なんです。こういうことを世界に発信していくのが大事だろうという気がします。

東日本大震災からの復興にも、やっぱり森里海連環のような視点が重要になってきます。今、いろんな取り組みが行われていますが、やはり単に元に戻す復興ではなく、本来の姿に戻すという真の復興が必要だろうという気がします。また、三陸は文化も人の考え方、価値観も、気候風土も極めて多様なところですから、本当の本来の姿に戻すのは、地域の思いを一番大事にした、下からの復興でなくてはならないと思います。たとえば畠山さんの地元の気仙沼、あるいは岩手県一関市の、森は海の恋人運動の植樹祭が行われる室根、そして畠山さんの水山養殖場のある唐桑。ここは宮城県と岩手県、気仙沼市と一関市という行政を越えて、林業と漁業の同時的再生ができるような森と海のモデルを生み出そうとしているところです。ただ、森里海連環というのは林業と漁業だけではなくて、農業と林業や農業と漁業、さらに商業も、本来密接につながっているわけです。そういう第一次産業が相互に補完し合う仕組みをしっかり作り直すことが基盤的な考え方であると思っています。

そして、東日本の大震災から本当に日本が復興するためには、やっぱり西日本がどれだけ支えられるかというのが大きな課題だと思います。お金や技術の支援の段階から一歩踏み出して、地方から、九州から、三陸とともに、自然への畏敬の念に根ざした社会を築く、そういう連帯こそ重要だという局面にあるのではないかということです。ですから、今回のこのフォーラムが、自然と我々がいかに向き合うかというテーマを真正面に据えて、考える機会を作っていただいたのは、本当にありがたいことです。感謝しております。

最後になりました。これは私の孫ではなくて、畠山さんのお孫さんです。この一番上の小学校4年生のお孫さんは、既に数年前から畠山さんが特訓中で、海の生き物や魚の絵が、本当に上手なんですね。将来は、牡蠣の養殖漁業を継ぎながら、画家を目指すという志を持っています。その下に小学校1年生と幼稚園のお孫さんもいます。この3人が本当に天真爛漫で、我々が見ると震災のいろんな悲しい記憶を思い出して、いたたまれない気持ちになるような復興の現場を遊び場にしているんですよ。私たちはこれからいろんなことを考えていきます。もう私や畠山さんにはそんなに残された時間はないんですが、高度経済成長期以来、かなりおかしくなってしまった自然や社会の仕組みを元に戻すのには、やっぱり孫の世代ぐらいまでの時間がかかるだろうと思います。物を考えるスパンとして、長期的には孫の世代ということを考えないといけないんじゃないでしょうか。私の孫は、残念ながらみんな女の子なんですが、将来、一人ぐらいはこの辺の息子さんのお嫁さんにしてもらえればありがたいなと、勝手に思ったりします。そんな少し楽しいことも考えながら、取り組みを進めているところです。

ということで、私の話がまとめになったでしょうか。かえって混乱させる羽目になったかもわかりませんが、これから残りの時間、畠山さんにもう一度登壇いただいて、頭の底には東日本大震災からどういう復興ができるか、そしてこの九州からどういうことができるかということも考えながら、最後の30分のディスカッションをしたいと思います。畠山さんはいつも、徐々に話を盛り上げていかれるんですが、ちょっと今日は時間配分を間違えられて、最後の林業と漁業の同時再生のところが、若干少なくなったかなという気がしております。そこで畠山さん、そこのところを含め、東日本大震災からの復興と絡めて、追加のご発言があればお願いしたいと思います。

【畠山】 今、スライドに映りましたけど、あそこに電柱が立っておりましたね。津波は、あの電柱より高いところまで来たんですよ。ですから、孫がいたところ、あそこが海の底になったということです。津波って、そういうものなんですね。今、東南海とか、西日本のいろんな地殻変動の噂がいろいろ立っておりますよね。有明海は、過去の津波の経験がどうだか、よくわかりませんけれども、たとえば大阪にあの程度の津波が来たら、全部水没だそう

ですね。だから少なくとも4階以上の高さに逃げないと、助からないということです。岩手の盛岡医大の先生からお聞きした話ですが、震災の夜、500人ぐらいのけが人が出るからということで、盛岡の病院に段取りをさせていたそうですけれども、患者は一人も来なかったそうです。なぜかと言うと、津波は生きてるか死んでるかの両極端で、中間がないということですね。地震であれば、崩れた中にはさまって、けが人がいっぱい出るんですけど、津波はけが人がいないということです。津波にはそういう厳しさがあります。

ですから、沿岸域にお住まいの方はもちろん、沿岸域を旅している人も、大津波警報が出たら、少なくとも4階以上の高さに避難しなきゃいけないということを、いつも頭に置いておいてください。1000年と言わずとも、ちょっと長いスパンで考えると、日本というのはそういう国であるということです。私たちはそういう日本に住んでいるということを、やっぱりいつも頭の隅に入れておかなきゃいけないといけません。気をつけなきゃいけないんだよ、本当に。

それから、私はこの復興のプロセスをどうしようかと、本当に思い悩んでいました。最初は被災仲間もみんな、もうあんな危ないところには帰りたくないと言ってたんですけれども、2ヶ月ぐらいしたら、やっぱり海の見える小高い丘に家を建てて住みたいと言い出したわけですね。そんな本当に危ないところで、危ない仕事をなぜするのかという疑問は、誰でもお持ちかと思いますけど、やっぱり海を相手に生活してきた者の心情として、誰も海を恨んでる人はいないんですよ。私自身もそうなんですけど、そういった何とも言えない心情があるんですね。それはやっぱり、ふるさとというものを愛している、ふるさとが好きだということでしょう。それからやっぱり海の豊かさによってずっと生活してきたと言いますか、そういうことでしか生きられないということであるかもわかりません。

今、田中先生の京大のグループの方々に来ていただいて、この1000年に1回の非常に大きな揺り戻しの中で、海がどういう風に変遷していくかというような調査をしていただいてるんですね。あれだけのことがあったわけですから、海は本当にめちゃくちゃになって、どうしようもないのでにと思われているかもわかりませんけど、海は意外と何ともないと言いますか、あっという間に復活していってるということです。たとえば陸側で油のタンクが流れて火事になったり、いろんなことがあって、そういう重金属の問題なんかもあるかと思いましたが、それも大体大丈夫だということがわかりました。それから、一番大事な植物プランクトンはどうなっているか。これはもう良いプランクトンがぼんぼん繁殖しております。もちろん酸素量も全然問題ないぐらい、海底まで復活しております。

しかも、この何ヶ月が漁師が海に漁に行かないものですから、最近は魚が沿岸域にばんばん近づいてきてるんですよ。本当にこんなでっかいサヨリが、ものすごい数の産卵をして、今、サヨリの子供が無数に飛び回っております。それから、うちの倅たちが船でちょっと外へ出たら、何か船にごとっと当たったものがあるんですね。でっかいマンボウにぶつかったんです。カツオとマンボウとホヤというのは、三陸の夏を代表するご馳走なんですけど、そのマンボウを獲って、みんなで分けて食べて、力をもらいました。それから、思いもよらない魚たちが、岸の近くに来ております。太平洋戦争の時にも、男たちが全部出ていって、マグロがほんの近くまで来ていたことがあるんです。農地は塩害でお米を作るのはなかなか大変なんですけど、海はもうすぐにでも使えるということですね。ですからうちも、倅たちが山へ行って杉の木を伐って、それで筏を作って、牡蠣の種を下げ始めました。杉も困ったものだと思ってたんですけれども、こういう時はやっぱり役立つんですね。杉も大事なんですよ。もう牡蠣

は成長を始めております。

ですから、うまくいけば、来年の春にはある程度の収穫が見込めるというような、そんなところまで動き出しております。一方で地域全体の復興をどう考えるかという時に、ちょうどさっきの木を燻すという技術を持った方が来てくださって、私はこれが本質だなということがすぐわかりました。というのも、こちらと同じように、我が大川流域も杉ばっかりなわけですね。そこの杉山に手が入れば、光が差し込んで、先ほど言いましたようにあいうフルボ酸鉄のようなものが川を通って海に供給されるようになるわけです。我々は今まで、木を植えるということだけに、どちらかと言うと特化してきて、やっぱり木をどうやって使うかということに頭があまり行ってなかったんですね。ですから、この木さえ使うことができるようになれば、問題のかなりの部分は解決します。しかも20万軒という家を建てなきゃいけないんですよ。本当に身近に木はあるわけですから、この木を使うということを考えていきたいと思います。

この間、その方が来て、今、我々が木を植えている室根というところに、その装置を試験的につけてもらいました。すると5日間で原木がどんどん回転します。それを製材所へ回して、大工さんがその材木を使って家を建てればいいわけです。しかも、高台に家を建てるということは、必ず山を切らなきゃいけないから、木が出ますよね。この技術は杉だけじゃなくて、松だろうが唐松だろうが、普通の雑木だろうが、あらゆる木が建築材として使える、本当に夢の技術なんですよ。ですから、これで雇用も生まれる。限界集落と言われている山の奥の方にもお金が回っていく。これで私は全体が動きそうな気がしています。この技術で木を使っていったら、気がつくと海に魚がまた甦ってるということになるじゃないですか。ですから、このことを一つのモデルとして、海の調査と陸側の調査と、これを全体として見る調査をして、世界にそういう問題を発信していきたいと考えております。

それから、私が書いた『鉄は魔法つかい』は英訳が決定しまして、全世界へ発信していくことになりました。それから、私たちの活動に目を向けている方が世界中にいろいろいるんですけれども、その代表がルイ・ヴィトンです。なんでルイ・ヴィトンが牡蠣の養殖業者に目を向けたのか不思議でしょう？ ところが、ルイ・ヴィトンの宣伝をするわけじゃないですが、あの旅行鞄の骨組みは、全部木でできているんですね。特にフランスのポプラという木が軽くて丈夫だということで、骨組みがその木で作られているんです。ですから、ルイ・ヴィトンという会社は山をいっぱい持っていて、あちこちに森を作ってるんです。しかもルイ・ヴィトンの会社の方々はみんなフランス人ですから、牡蠣好きなんですよ。ところが、森を守るということが牡蠣に結びついてたということを今まで知らなくて、そのことを知ったのがすごいショックだったんですね。さらに50年前に、宮城県の牡蠣の種がフランスの牡蠣を救ったということがわかって、赤十字とかももちろん支援するけれども、じゃあ、牡蠣を作っている漁師たちを、特化して支援しようという話が持ち上がりました。それで私は、この間パリの本社に行ってきたんです。そして、ルイ・ヴィトンは世界全社挙げて、実にこの三陸の牡蠣に関する様々なことを支援するということが決まりました。

私は今、このルートを通じまして、この復興のプロセスや、鉄は魔法使いの科学的なメカニズム、それから日本はやっぱりどういうところかというのを全世界に発信しようと考えております。科学的裏付けはもう京都大学がついてますから、これはおもしろいことになりますよ。積水ハウスもしっかりしなきゃ。しかも、こういうことが、九州の自然、日本の自然、世界の自然の循環を考え直すことにつながっていくわけです。今回の大震災は本当に大変な被害で、実際は大変なんですけれども、そういう中でこういう光明も見えてきました。そういうことが今、私の夢になっております。

【田中】 先ほどから畠山さんの矛先が、少し積水ハウス、畑さんの方に向いていますが、畑さん、何かコメントはありますか。

【畑】 フランスの話が出ましたが、僕の本にもちょっと関係することを書いてるんですね。僕は食の自立というのを家族単位で目指そうということで、子供の誕生日を機に、農家出身でもないのに農ある暮らしを始めました。なぜ食の自立かというと、阪神大震災の時の私自身の体験から来ています。私

の実家は兵庫県西宮市のJR甲子園口の北側で、全壊でした。ご近所には亡くなられた方もあったんですが、我々は幸い大丈夫でした。震災後1週間ほど、私もいろいろ片付け等やったんですけれども、すべてを失った震災の晩に何を探していたかと言うと食べ物なんですね。もう家はぐちゃぐちゃですから、家にあった食料の蓄えも探しに入れる状態じゃないし、危ないわけです。ですから、何とか食べるものを調達しようと、兄と二人で買い出しに出ました。だけど、西宮市から流れている武庫川の橋を渡って尼崎の方に行っても、全部店に閉まってて、さらに歩いてようやく開いてるお弁当屋さんを見つけ、そこで家族分のお弁当を買って、西宮に帰ったわけなんです。その時に、すべて失ったんだけれども、家族っていいよなとか、食って必要だよなということを感じてたんですね。ただ、その時の気づきはそこまでで、食の自立をしたのは、子供が誕生した時でした。食の自立をしたと同時に、精神的な自立が芽生えたんでしょうか。久しぶりに会った人に「雅君、変わったねえ」と言われるようになりました。それで、何か自信を持てるようになったんです、自分自身に。

そこでフランスの話なんですが、アメリカと正反対のことを言うし、今回の電力の問題に関しても、独自の方針を打ち出していますよね。その背景というのは、僕なりの解釈で言うと、食の自立を成し遂げているからだと思うんです。食の自立を成し遂げるためには、自然を大切にしておかないといけません。先ほど田中先生が、つながりの価値ということをおっしゃってたんですが、食だけ守ってもだめなんですよね。食だけ守るのではなくて、自然を守ることが豊かな水を作るし、豊かな海を作るわけですから、米なんか作ったら、面白いですよ。バーチャルウォーターという言葉を聞かれたことがあるかどうかわからないんですけれども、米を1kg作るのに、何万トンという水が要るわけですよね。米そのものは小さいけれど、その背後にはたくさんの水があるわけです。米を作ったら、それが見えてくる。それは、米だけ守ってだらいいのか、農業だけ守ってたらいいのか、ではなくて、自然を守るということですよね。

それは家族単位でもできるし、我々企業としてもCSR的な活動としてできることです。僕の今の企業の立ち位置でやっていることもあります。国産の杉の話が出ていますが、僕は庭担当なので、庭のデッキ材や菜園のところに国産の杉を使うことを提案しております。おそらく畠山さんが言われている技術と同じような処理ではないかと思いますが、サーモウッドと言って、木を高温の窯に入れて、それでほぼ組成的には炭に近い状態にする技術があるんですね。僕はそれをウッドデッキのところに使ったり、僕が菜園ボックスと呼んでいるサーモウッドの箱で花壇のように菜園を作ることによって、僕の企業人としての立ち位置で、今できることをさせていただいてます。

ですから、積水ハウス全体として言われると、それだけの権限は今のところ僕にはありませんが、ただ問題意識は持ち続けているつもりです。大学時代も宮崎大学で、漬け物用大根の産地として有名な田野というところの演習林で勉強していたので、やはり自然の大切さ、伐期を迎えているこの日本の林業の現実、林道整備の難しさなんかは、一般の方よりわかっていると思います。ただ、企業人として、家庭人として、自分が今日、明日できることは何なのかということを考えながら、行動しているということです。

【田中】 畠山さんが「積水ハウスは…」と言うのは、それは突つかれているというのではなくて、本当にこいつのことは信頼している、ますます活躍してくれるだろうという思いで言っておられるんですね。

【畠山】 はい、そうです。ありがとうございます。

【田中】 私も最近、それがようやくわかりました。私は今でも、畠山さんから、鉄のことがいまだにわからない水産研究者だと言われるんですが、それもまあ褒めだと善意に解釈しております。それから小関さんは、実はもう既に、自らの思いで気仙沼、三陸に2週間行って、いろんなことを現場で見て、九州が、平戸が、あるいは小値賀が、どういう風に東北を支えられるかということを考え、既に行動を起こされています。小関さんの方から少し、その辺の経験等を紹介していただければと思います。

【小関】 私が平戸、小値賀でやろうとしていることは、この間、毎日新聞の夕刊にも載りましたし、これからもちょこちょこ出てくると思います。今

目の資料に初めて印刷したチラシもはさんでおりますので、ご覧になってください。私は九州に住んでおりますので、私がちゃんと何かをやっていれば、どこかで皆さんのお耳に入ると思いますので、それまでがんばりたいと思います。

その詳しい内容よりも、いまちょっと私が気仙沼で感じたことと、それと以前から気になっていたCSRという単語について私が感じていることとの共通点について、お話ししたいと思います。僕はこの席で、最後にCSRの話、あるいは僕は九州人だから、九州の話をすごくしたくて、うずうずしてたんです。僕は気仙沼で感じた「支援」という単語に対する違和感、あるいはそれについてもうちょっと考えなきゃいけないんじゃないかという感覚を持って、この場に来ました。それから私はCSRという単語が、はっきり言ってしまえば好きじゃなくて、自分で使いたい単語じゃなかったんです。ですから、今回もCSRということでいろいろ考えてきたんですが、昨日、初めて企業のCSRの取り組みというのを真面目に聞きましたら、頭取の個性のおかげで、結局良いことなのだから、いいじゃないかと、その言葉に対するこだわりというか、あえてきつく言えば嫌悪感が少し薄らぎました。

支援という言葉に対して、私がもっと考えなきゃと思うこととと、CSRという単語が好きじゃないということには、共通するところがあると思います。特にCSR、企業の社会的責任の責任という単語は、あまり軽々しく使っていい単語ではないのではないかと思うんです。責任というのは、多分二つの意味があります。たとえば私がパン屋さんだったら、100円もらえば、100円のパンをきちんと作って供給する責任がある。これは簡単な意味での責任ですね。だけど最近の日本って、言葉がインフレを起こしてて、価値が安くなっている言葉がいくつもあると思うんですね。たとえば「何とかさせていただきます」という過剰敬語。首相がなぜ大臣に「やっていただいてます」と言うんだろう、といつも思います。それから、テレビをつけると「責任を取ります」「責任を感じております」「どうも申し訳ございません」という言葉が、どこかでいつも流れてます。それに対して、若者たちはもう冷めていますね。もうダメだこの人たちは、と思って別の価値を探っているけど、うまくいかないという状態だと思うんです。

CSRの話に戻りますが、たとえば肥後銀行さんがCSRとして、社会あるいは地域に対する責任、行動としてやっていらっしゃることというのは、ものすごく深くて、ものすごく自発的なものだと思うんです。僕も地域の中、社会の中で自分の仕事をやらせてもらっていますが、あの豊かな地域があるから、それを使わせてもらえばいいだけの話で、もうやるのは簡単なんです。海で牡蠣を育てるのと同じで、作業の難しさというのはそれはそれなりにあっても、元々海があるから、元々地域があるから、仕事をさせてもらえるというのが、ある程度やってくるとわかってきます。あっ、これは俺の力でやってるんじゃないんだな、地域の力でやってるんだなというのを感じるわけです。ですから、地域あるいは自然にとって良いことをするというのは本来、責任を果たすとか、「いいこと」をするというレベルではなくて、当たり前のことなんですよ。多分、子供が親になって、また子供の面倒を見るというのも当たり前なことですよね。特に「いい人」だから子供の面倒を見るわけではないし、子供が親の老後を看るのだって「これこれの学費をもらったから、その分を返そう」というようなものでもない。どちらかと言うとお互いの依存と言うか、お互い様の気持ちでやってると思うんですね。

ですから、そのCSRという単語をあちこちに印刷して、我が社はこれこれのCSRを果たしていきますと言うのは、それはそれでものすごく大事なことだと思いますけれども、僕にはそれは自発的に人間が使いすぎていい単語なのだろうか、責任という単語は個人が心の中に秘めるべき単語なのではないかという風に思う違和感があったわけです。ただ、実際に本当に行動されている方が、その単語をある意図をもって使っている場合には、その違和感は感じません。やっぱり行動があれば、言葉に重みがつくんです。言葉が悪いんじゃないんですね。ですから、同時に言葉を悪く使う社会というのも、大人が作ってはいけないなと思いました。これから僕も若者ではなく大人として社会の一端を担わなければならないので、そういう風になっていこうと思っております。

そこで、もう一つの「支援」という

単語なんですけれども、結局、人というのは、何かをする側の時も、義務感や責任感でやるというのは不自然なんですよ。畠山さんの寿司の話もわかりやすかったですけど、環境問題じゃなくて、寿司を安く食う、あるいはただでうまいものを食おうという感覚が大事なんじゃないですかというのは、まさに、僕もそう思います。僕もいいことをやりたいからやってるんじゃなくて、楽しいから、おいしいから、いろんな友達が面白いから、いろんな人にほめてもらえるから、やってるわけですね。東北を見た九州人が何かをしなければという気持ちに、それにもちろん純粋にあるでしょう。しかし、それを支援という形で、責任を持ってやり続けるのは非常にきついものがあると思うんです。受け取る側も、支援を受け続けるのが、だんだん重荷になって心苦しくなる。人というのは与え続けることも難しいし、それをもらい続けることも恐らくできない生き物ではないかと思います。

ですから、CSR という単語もそうですし、災害復興支援という言葉もそうですし、環境保護という言葉もそうですけれども、そういう取り澄ました建前めいた言葉で考えたり実行するのではなくて、そういうことはもうちょっと普通に、何かしたいからする、おいしいものを食べたいからするという、本能の部分の出来事であるべきだと思うんですね。企業は責任があるから良いことをすべきだという議論ではなくて、そこで指針にすべきなのは本能です。僕は人間には、ある程度、自分たちの欲求が満たされた時には、余裕がある範囲で人に対して何かをしたいという、第二の本能があると思うんですね。自分の命を維持するための第一の本能の上に乗っかった、二階建ての形で。

人間というのは基本的に、自分のために食べていかないといけません。私たちの親や祖父母世代は、それまでは戦争があったり物がなかったりで、時には人を押しのけてでも上に行きなさい、あるいは他の国を侵略してでも自分の国を守らなければいけないという経験をしています。その世代がずっと頑張って、社会が豊かになって生まれてきた私たちは、そんなに困った目に遭ったことがありません。だから偉いんだ、だから甘いんだと言われますけれども、親たちのおかげで、僕たちは、人間が本来、厳しい環境でなければ持っているささやかな優しさの中で育てられてきて、それを知っている。だから、それを何とか仕事という形にしようという世代が生まれつつあると思うんですね。

二階構造の本能でやりたいことをやっていると言うと、きれいな顔をしてきれいなことを言う、イメージのいい NPO 的な、社会起業家がリードするような感じのことを連想されるかもしれません。もちろんそういう部分も多少は必要だとは思うんですけれども、結局僕は、人々の食べたいとか、家族を安全な家で住まわせたいとか、牛乳を飲みたいとか、お酢を飲みたいとか、いろんな人間の本能、欲求を満たすために、さまざまな活動をしているのが企業だと思うんですよ。ですので、最初に肥後銀行の頭取が、「私たちは一番の責任は、本業をきちんとやることです」とおっしゃいましたが、どこかで東北の支援だとか言う時に、その企業が本業として東北に関わるという、その形がまさに基本なのではないかという風に考えさせられました。全然答えのない、違和感の提起だけになってしまいましたが、責任ないし支援という単語が時々使われるのはいいんですけれども、今までに人類が、慈善活動ではなくて企業活動としてやってきた手法を、ストレートに適用するという努力がカギになるんじゃないかなという気がします。

私は企業の人間ではありませんし、企業とは別の形で動いています。しかも、その動き方はレアで、多分、世間の 90% の人はしない動き方をする人間だと思うんですね。でも、そういう人間が一人いることで、ほかの人々が持っている力だとかリソースというものを活かすことができるとも思っています。そんな私が常々感じる社会の問題のひとつは、人材があまりにも大都市、大企業へ行き過ぎていていることです。もうちょっと分散して、他のところにもいた方が、企業と社会も動きやすくなるのではないかと考えています。そういう意味では、生物多様性という単語がよく使われますけれども、それを社会に置き換えると、社会の中での社会的な多様性が、今は薄れてきている気がします。僕みたいな人って、多分、皆さんの会社にいないと思うんですね。僕自身も職務質問されると、いつも答えに困るんですけど（笑）。

海にいろんな生き物がいた方がいいように、いろんな人間も少しずつはいた方がいいと思います。

いろんな海藻や小魚が育つ海のように、サケが帰ってくる川のように、九州も若者の帰ってくるふるさととなってほしいと、僕は心から思っています。サケが川に帰ってこれないと、すごく悲しいですよね。今、九州は、若者がふるさとに帰ってこれない。それぐらい多様性の乏しい地域になってきているような気がします。私個人としては、企業などには既にいろんな方がいらっしゃいますから、僕はそこへ入らなくてもいいだろうということで活動していますが、やっぱり人間の多くは、企業という形で行動するのが一番力強いと思います。その企業が施しでCSRをするというのではなくて、その企業の本来の力というのを改めて社会に通用し直す。新しいことが必要なんじゃなくて、改めてその企業の得意技を活かす形でやらなきゃいけないのかなと思います。それから最後に、私みたいな新しいタイプの人材を育む程度に豊かな海、地域であってほしいなと思います。以上です。

【田中】 私が初めて気仙沼に行ったのは、4月の上旬でした。実際に自分の目で見ないと、ということでお伺いした時、一番印象に残ったのは、皆さんが新ストーブを囲んで、体も心も暖かい気持ちになっておられたことです。その現場に居合わせたんですね。今回の震災で、いろんなエネルギーの問題も出てきているんですが、日本は一番どこにでもある身近なエネルギー源だった薪や炭をどんどんなくしていきました。今回の大震災からは、エネルギーの多様性を著しくなくしていったことに対して、それでいいのかというメッセージも、やっぱり発せられていると思うんですね。これまでいろいろ話してきたことは、そういうこととも関係しているわけです。今、小関さんの方からいみじくも「本来」という言葉が使われたんですけど、これは私もすごく大事だと思いますね。企業は企業として、本来のあり方を求める。個人は個人として、本当に本来のあり方を求めることが、今問われているんだという気がしますので、これは自然と私たちがどう向き合うかということとも密接につながる、根本的な視点ではないかという気がします。

残り時間が少なくなっていますが、最初にフロアとの対話ということを申し上げたので、最後に皆さん方の方からパネラーの皆さんへ聞きたいこと、あるいは自分としてはこんな風に考えるということがあれば、ぜひご発言をお願いしたいと思うんですが、いかがでしょうか。

【矢頭】 今の小関さんのお話に、ちょっと引っかかる部分がありました。私たちは、企業というのは人との縁だと思っています。そして、縁のあった人々が企業を通して社会のいろんなことを学んでいくわけですよ。少なくとも私は、自分の会社と言うより私たちの会社、そして社会の中の会社と思っていますし、企業が社会大学だと思ってるんですね。人はその中でずーっと成長していきます。成長するためにいろんなことを学ぶわけですから、企業がただ儲けるだけじゃなくて、その利益をどう循環させて、そして社会の中にどう参加するかということは、常に社員もみんな考えていると思います。企業にはやはり、企業としての責任があります。社会の中でどう利益を循環させるか、そして社員たちと一緒にどう夢を実現させていくか、さらに社員たちの自己重要感、価値をどう高めていくか、そういうことも常に考えながら、私たちオーナーはいろんな形で経営をやっているということだけは、覚えておいてください。

【小関】 はい。皆様とお会いして、学ばせていただきました。

【田中】 ほかにありますか。

【甲斐】 大変楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました。まず、若いお二人のお話を聞いておりまして、食生活における自給自足という個人的バックグラウンドを持っていると、発想が極めて豊かになるんだな、自由に行動できるんだなといったようなことを感じました。ですから今までの日本は、おそらく人間が生活を自給自足できる状態を視野に入れないで経済成長してきたわけで、私なんかその典型だと思うんですよね。20代、30代の頃は、毎晩12時を過ぎてから帰ってました。だから、7時から12時過ぎまで働いていたわけですが、「あなた、あの頃、何やってたの」と女房に言われても、全然記憶がないんですよね。家には帰ってませんし。ですから、これからは人間が生活を取り戻す、そういう時代なんじゃないかなと思いました。生活を取り戻しますと、畠山さん

がいろいろご指摘なさいましたような、いわゆる食の問題でありますとか循環の問題とか、そういうものが自然と頭の中に入ってきます。そうやって、この環境に対するCSRという概念の問題意識になる根底が築かれていくのかなあといったようなことを、お三方のお話を聞いていて感じた次第であります。

それから、田中先生のお話の中で、すごく私の印象に残ったのが、森林のハイパーソニック環境音が人間にとって良い効果をもたらすということです。実は、私が森林を購入した背景には、もちろん水保全もあるんですけれども、人事対策としての意味合いもあるんです。私たちは非常に機械的な生活をするようになってますので、ストレスを解消する、免疫機能を高める、心を豊かにするといった、ここに書いてあるような効果をやっぱり、企業の中にビルトインしていく必要があるんじゃないかということと、具体的にいわゆる鬱病のような状態になった時の、回復手段として使えないかなというようなことを発想しまして、あの森の購入を提案したわけですね。ただ、今までその科学的な背景をお医者さんに聞いても、具体的な答えは得られませんでした。ここに来てこういうものが出てきたというのは、私にとって大変ありがたいことであります。ですから、水も守りますけれども、その前に人を守らなくちゃいけません。人を守るためには、そこまで配慮するのがいいかどうかは別問題として、基本的な私のスタンスとしては、落ちこぼれは作らないというようなスタンスでおりますので、そういうような意味で、今後もこういう森林であるとか、自然環境が有効に活用されていくといいなあと、そういう風に感じました。以上でございます。どうもありがとうございました。

【田中】 ほかにございませんでしょうか。

【バスガイド】 1号車のバスガイドでございます。島山先生の方から「有明海の津波がどうだったかは知らないけど」というご発言がありましたので、ちょっと仕込んできたネタをご紹介します。今から238年前、1792年に有明海で津波が発生しております。この津波は、普賢岳が爆発しておりました時に、直下型の震度4の地震がありまして、複合要因で眉山が崩れ、4億トンの土砂が有明海に一気に流れ込んで津波となったものです。地震から15分後に対岸の熊本を襲っております。この時、1万8000人の死者が出て、河内町が一番ひどい被害だったと聞いております。熊本市内には、慶長6年にできたことから長六橋と名付けられた橋があるんですけれども、その橋のところまで津波が来ております。地震が起きてから津波到達までの時間が15分ということで、人々は逃げる時間もなかったようでございます。それから、島原と熊本を津波が往復して、だんだん高さが増し、一番高い時は53mまで達したということです。以上、ネタとして仕込んで参りましたので、ご披露させていただきました。

【田中】 貴重なご報告、ありがとうございました。そろそろ時間になりましたので、今日のパネルディスカッションを終わりにしたいと思いますが、実は、畑さんが住んでおられるのは、奈良市と言っても、京都の木津川市の近くですね。私の在籍する国際高等研究所というのは、世の中にほとんど知られていませんが、木津川市にあります。そこの所長さんが、地震の大家で、前の京大の総長の尾池和夫先生です。尾池先生は、大学が法人化になった時の一期目の総長で、それでも若い人たちには、「150年たっても役に立たないような研究をしなさい」と、こう言われたんですね。これは非常に含蓄のある言葉です。もう一つ、学生は科学とは、あるいは学問とは何かというのを常に考えるわけですが、「いろんな議論の中で、最も基礎的なことが最も応用的である」とも言われました。今日は、九州のこの場でいろいろなことを考えましたけれども、尾池先生の言葉を思い出して、最もローカルなことが、ひょっとしたら最もグローバルなことにつながるのではないかということを感じました。

今日は会社の皆さん方が中心でしたので、私たちの話は、ひょっとしたら日常の話とは相当違うところの話だったかもしれません。しかし、そういう話も時には聞くのも非常に大事だと思いますし、もし何らかのご参考になれば、私たちにとっても非常にありがたいと思います。

長い間、ご清聴、本当にありがとうございました。パネラーの皆さん、ありがとうございました。

閉会挨拶

九州経済フォーラム 理事長 小早川 明徳 氏（福岡県中小企業経営者協会連合会会長）

昨日から、そしてまた本日早朝からご参加いただきまして、心から感謝を申し上げます。また、この熊本事業を開催するにあたりまして、肥後銀行の甲斐頭取を中心といたしました熊本県の皆様方に、大変お世話になりました。改めて心から御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

畠山先生、そして田中先生、櫛さん、小関さん、それぞれに大変素晴らしい内容のあるお話をいただきました。昨日の甲斐頭取の勉強会から始まりまして、本日の講演とパネルディスカッション、皆さん方がここでどんなことを学ばれたのかは、今後の皆様方の行動が証明してくれるだろうと思っております。

実は、私が畠山さんの存在を知りましたのは、電通の北島さんのご紹介であります。北島さんからは、畠山さんが物作り文明機構というところでご活躍なさっていらっしゃる、京都で勉強会がある、あるいは大分で研究会があるということで、何度もお誘いを受けました。私が参加ができない時は、私どもの職員を数名参加をさせ、勉強させていただきました。本日、改めてご講演を拝聴し、大変素晴らしいお仕事をなさっているということに感銘を深くしていたところでございます。

その畠山さんは、今回の東日本大震災の被害が最も大きかった場所で被災されたにもかかわらず、この会にご出席、ご指導をいただきました。そこで、皆様方にご提案がございます。昨日から行っております震災への募金の件ですが、実は私は、石原会長から畠山さんへ、この場で皆さん方を代表して、寄付金を差し上げていただこうと考えておりました。しかし、それを事務局に言いますと、「理事長、それはするな」と言われました。なぜかと言うと、皆さんがお帰りになる時に、出口でもう一度皆さん方にお願いすれば、そこで集まるからということでございます。昨日から皆さん方のご厚意をいただいておりますが、今日、帰りにまた出口で、皆さん方に最後のお願いをさせていただきたいと思います。そして、その真心を、後ほど畠山さんの方にお預けして、その使い方からすべてお任せをするということで、ここで皆様方のご了解をいただきたいと考えておりますが、ご賛同いただけますでしょうか。…〈拍手〉…ありがとうございました。それでは、本日終了後、改めて皆様方からいただきました真心を、畠山さんの方にお預けするということにさせていただきます。

昨日から、皆様方と一緒にいろいろと勉強いたしてきたわけですが、私がここでそれを語ると皆様方の感性を削ぎかねませんので、あえて繰り返しません。皆様方がそれぞれに感じられたことにお任せをしたいと思います。ただ、それぞれの講師の方々は共通して、本質的なものを取り上げて論議し、哲理というものを明らかにしてくださったのではないでしょうか。そして我々は、自然の営みの中には哲理があり、道理があること、また、その命の継承と連鎖を学んだのではなかろうかと思います。

その哲理とか哲理という中で、私が思い出しましたのは、この大震災の津波の警報が知らされた時に、相馬市の漁協の皆様方が一斉に沖に向かって船を出されたという事実でございます。100数隻の船が、津波の迫り来る中、沖に向かいました。津波は最初は5m だったのが、第二波、第三波と何回も乗り越えるたびに高くなってきたそうでございます。操縦をしていて、津波の波の頂に乗った時にエンジンを減速して、それでまた海に叩き付けられるような状態で、それを繰り返して沖に

出られた。船が少しでも斜めになりますと、もろに波を被って沈没するわけでございますが、津波の時には沖に出よという先人の知恵を活かしたことが、その地域の漁民の方々と船を守ることになったという、非常に感動的なお話がありました。

これはまさに、そういう自然の摂理というものを大事にしたから、なし得たことだと私は思っております。この東日本大震災によって学びを得たことはたくさんございますが、その学びを本質的に理解し、今後哲学的に、哲理的に行動を起こしていくことによって、国の再生、そして地域の再生を図ることができるのではないかと思います。そういう意味で、この問題を九州、そしてまた私どもが属する企業に当てはめまして、それぞれの立場で、今日学んだことを活かし合っていきたいと思っております。

ご出席をいただきました方々、そしてまた、ご指導いただきました方々、そしてこの会を主催していただきました石原会長はじめ皆様方に、心から御礼を申し上げまして、ご挨拶にさせていただきます。ありがとうございました。

水のめぐみツアー

チャリティーゴルフ

台湾開催

TAIWAN

九州経済フォーラム創立25周年記念シンポジウムin台湾

次第 《平成23年9月29日(土)》

9:00 ■記念講演会1
(台北晶華酒店3樓宴會A廳)
・挨拶 中華民國工商協進會
常務理事 林 省三 氏
・挨拶 九州経済フォーラム
副会長 高宮 俊雄 氏

9:10 ○記念講演①
・講師 江丙坤 氏
(財團法人海峡交流基金會 董事長)
テーマ
「台日経済交流と展望、
台中の経済と台日の協力
~ECFA後の日台中の経済関係~」
・お礼の言葉 九州経済フォーラム
理事 廣崎 靖邦 氏

10:00 ○記念講演②
・講師 劉金標 氏(巨大集團 董事長)
テーマ 「台湾企業の国際観」

11:00 ・質疑応答(20分程度)
・お礼の言葉
株式会社ワールドインテック
代表取締役会長兼社長
伊井田 栄吉 氏

記念講演会1 終了

11:30 ■昼食 (台北晶華酒店1Fレストラン)

次第 《平成23年9月30日(金)》午前

15:00 ■特別懇談会 開会(君品酒店5樓亮廳)
・挨拶 中華民國工商協進會
常務理事 洪 敏弘 氏
・挨拶 九州経済フォーラム
副会長 是永 駿 氏
・挨拶 台灣電力公司
董事長 陳貴 明 氏

15:15 ○特別講演
・講師 梁 國新 氏(経済部 常務次長)
テーマ 「台湾経済の現状と展望」

16:15 ・質疑応答(15分程度)
・お礼の言葉 九州経済フォーラム
理事 村上 英治 氏

16:30 休憩

○記念勉強会(君品酒店)

16:45 ・講師 莊 連豪 氏
(高雄市電腦商業同業公會 理事長)
テーマ「日台関係について」
・質疑応答/ディスカッション
(特別講演) 鄭 世松 氏

18:15 休憩

■九州経済フォーラム夕食会
(君品酒店5樓亮廳)

18:30 ・会長挨拶 九州経済フォーラム
会長 石原 進 氏
・乾杯 九州経済フォーラム
台湾事業特別顧問 井上 良弘 氏

(ご歓談)

・閉会挨拶 九州経済フォーラム
副会長 矢頭 美世子 氏

20:20 閉会

20:30

次 第 《平成23年9月30日(金)》午後

13:00 ■視察
・台北世界貿易中心南港展覧館
・南港ソフトウェアパーク

16:00 ■記念講演会Ⅱ（台北晶華酒店3樓宴會A廳）
○記念講演③
・講師　黄 茂雄 氏
（中華民國工商協進會 榮譽理事長）
テーマ「東日本大地震後の日台協業の新機会」
・お礼の言葉　九州経済フォーラム
常任理事　熊田 勇治 氏

18:00 総統府 表敬訪問
副総統　蕭萬長 氏　訪問

19:00 ■交流懇談会（台北晶華酒店3樓宴會A廳）
○CEREMONY
・挨拶
経済部 常務次長　黄 重球 氏
・挨拶
外交部亜東関係協会
会長 彭榮次 氏
・挨拶
交流協会台北事務所
副代表　佐味祐介 氏
19:30 ・記念品交換
19:35 ○記念交流会
・主催者挨拶　九州経済フォーラム
会長　石原 進 氏
・乾杯
中華民國工商協進會
榮譽理事長　黄 茂雄 氏

（ご歓談）

20:50 ・閉会挨拶　九州経済フォーラム
理事長　小早川 明徳 氏
21:00 閉会

次 第 《平成23年10月1日(土)》

8:00発 ■台北市内観光
8:30 ・国立故宮博物院見学
・芝山巖観光

12:00 ■昼食（点水楼レストラン）
・解散式

15:25 ■桃園空港着

17:25 ■桃園空港発

20:35 ■福岡空港着

特別懇談会

開会挨拶

中華民國工商協進會 常務理事 洪 敏弘 氏 （台湾松下電器 董事長）

石原会長、是永副会長、九州経済フォーラム代表団の皆様、経済部・梁次長、台湾電力・陳董事長、そしてご来場の皆様、こんにちは。工商協進会の常務理事を兼任しております、台湾松下電器董事長の洪と申します。

まず、当協進会の黄名譽会長は海外へ出張しており、このフォーラムに参加することができないことをお詫び申し上げます。代わりに石原会長並びに九州経済フォーラム代表の皆様をお迎えできることを光栄に存じます。また、本日は台湾電力・陳董事長をお招きし、ご挨拶いただくことになっております。そして日台双方の親睦を図るために、台湾の商業界の方々にもご出席いただいています。

去る3月11日の東日本大震災と放射線騒動では、多くの方々の命や富が大きなダメージを受けました。当協進会一同、お見舞いを申し上げます。日本と台湾は緊密な関係にあり、これまで長い間、助け合って参りました。たとえば1999年の台湾中部大震災の際、日本は多くの資金や技術を提供してくださいました。今回の東北大震災で、台湾は170億円以上の義援金を日本へ贈りましたことからも、台湾人の日本人に対する友情の深さがうかがえます。

先週木曜日、9月22日に、日台間で投資協定が結ばれました。1972年、両国が断交して以来、最も大きなイベントで、双方の経済貿易関係に新たな礎を築くこととなりました。一方、台湾と中国の間では両岸経済協力枠組み協定、つまりECFAが結ばれております。日本は台湾と投資協定を締結する最初の産業大国であります。この投資協定は、必ずや両国の企業同士の投資や連携を促進し、双方の経済関係をより緊密にしていくことでしょう。また、日本と台湾には深い関係があって、経済文化も企業文化も似通っており、かつこれまで長い間協力し合ってきました。日台間にこのしっかりとした基盤があることは、日本にとって有利です。技術の輸出や新たな市場の開拓における最高のパートナーは、台湾以外にございません。

この度、九州経済フォーラム創立25周年というめでたい時期に、アジア地域を中心とした一連の記念活動が予定され、さらに台湾を、九州経済界の最も重要な交流対象にお選びくださったとお聞きしています。この度の代表団は、石原会長のリードの下、九州から約100名の企業の方が台湾にいらっしゃいました。九州と台湾の交流促進のために、今日と明日の2日間にかけて、三つの部に分けてフォーラムを開催されることになっています。

本日は光栄にも、経済部の梁次長にお越しいただき、台湾経済の現況と展望をテーマとしてご講演いただきます。そして高雄市電腦商業同業公会・荘連豪理事長が、日台関係につきましてのご知見を皆様と共有化する予定となっております。台湾の経済事情や日台間企業連携のビジョンにつきまして、よりご理解いただけると確信しております。

最後に工商協進會を代表し、石原会長をはじめ代表団の皆様を改めて歓迎し、大会が成功裏に終わりますこと、そして皆様のご健勝・ご発展を祈念して、私の挨拶と代えさせていただきます。

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 是永 駿 氏
（立命館アジア太平洋大学 学長）

ただ今、ご紹介に預かりました是永と申します。中華民国工商協進会常務理事、洪敏弘様のご歓迎のご挨拶、誠にありがとうございます。

まず、3月に起きました東日本大地震に対する台湾の人々の、巨額の義援金をはじめとするご支援に、心から感謝申し上げます。皆様のご支援を受けて、日本は大災害からの復興、そして新しい日本の建設に邁進しております。

この度、中華民国工商協進会栄誉理事長であられる黄茂雄先生のご配慮により、福岡を中心とする九州経済界の台湾訪問代表団の台湾訪問が実現いたしました。この九州経済フォーラムは、石原進JR九州会長を代表とする代表団でありまして、九州経済界を代表する方々、そして大学関係者等々、いろんな方々が参加しております。

あとで梁國新先生のお話にあるかと思いますが、台湾は現在、台湾人としての誇りを守りつつ、中国との経済貿易関係を飛躍的に発展させております。一方、日本の九州は、今回の大震災のあとに、日本の企業の中心的な企業が、安全な九州に生産基地を移そうという動きを始めております。今回の我々の台湾訪問を契機に、台湾と九州の間に経済貿易関係での架け橋の関係が生まれますことを願っております。

今回の台湾訪問事業は、九州経済フォーラムの創立25周年を記念したものです。今年はちょうど辛亥革命の100周年でもあります。九州は辛亥革命を成功させた革命家である孫文先生を支援した方々を輩出してきました。特に梅屋庄吉さんと宮崎滔天さん、このお二人は、孫文先生の革命運動を心から支援したお二人で、お二人とも九州出身であります。この記念すべき年に、九州の経済代表団が台湾を訪問できたことを心から喜びたいと思います。

また今回に、梁國新先生、そしてから江丙坤先生、劉金標先生、お三方のご講演を拝聴する機会が設けられており、我々は誠に光栄に感じております。こうした講演を聞く中で、我々の台湾に対する理解も、きっと深まることと信じております。

台湾の公用語は中国語ですので、最後に中国語で少し挨拶させてもらいます。

（以下中国語、続いて日本語にてスピーチ）

今日、私は飛行機の中で昨日の聯合報を読む機会があったのですが、その社説に、先ほど洪先生が触れられましたように、日本と台湾が投資関係の協定を結んだことが書いてありました。この協定の意味するところは、台湾の位置というのは、ただ大陸との両岸関係だけではなくて、国際化する、グローバル化するという意味を持っているということであります。

そういう投資関係の協定が結ばれましたので、台湾と日本、特に九州ですが、企業の方々も台湾というこの地域、この中華民国をアジアへのゲートウェイとして、お互いの連携関係を強めていけたらいいというふうに思っております。

その架け橋として、この記念事業がお互いに連携し合ういい機会になりますことを祈っております。フォーラムのご成功を祈って、挨拶といたします。

開会挨拶

台湾電力公司 董事長 陳 貴明 氏

石原会長、そして工商協進會の洪常務理事、そして日台双方の皆様、こんにちは。きっと皆様もお気付きかと思いますが、是永副会長の中国語は私よりお上手です。

皆様、ようこそ台湾へお越しくださいました。今年は九州経済フォーラム創立25周年ということで、大変喜ばしいことでございます。台湾電力を代表しまして、私からもお祝いを申し上げます。

日本人と台湾人の価値観は非常に近く、深い友情を持っています。不幸な事件があるたびに、お互いに助け合う例は枚挙にいとまがございません。また経済連携の歴史も長く、時とともに進んで参りました。先般結ばれました投資協定は、まさに相互関係を証明する良い一例でございます。

私が勤めております台湾電力は、台湾国内に唯一電力を提供する事業者であります。そして私どもが提供しております電力は、安全で、そして信頼性の高い品質を持っておりますので、ぜひ九州電力を含め、各界の皆様の私たちへの投資をお願いしたいと思います。皆様が海外進出をするための安定した電力を提供して参ります。

九州は日本の南の大きな島で、台湾と同じく海に囲まれています。そのため対外的な交流の機会が多くございます。私の知っている限りでは、長崎は日本で初めて外国に開放された港ですし、そして九州の人々は、開かれた国際観を持っていらっしゃいます。台湾とよく似ている点ですが、このことからも激変する国際経済環境の中で、お互いに学び合うことが多々あるかと思われます。

電力事業を例にとりますと、台湾電力は東京電力、関西電力、中部電力、中国電力、九州電力など、日本の電力会社と緊密に交流をして参りました。また、九州電力株式会社も台湾電力も、東アジア西太平洋電力協会、いわゆるAESIEAPのメンバーでございます。去年、台湾電力が台北にて2010年のAESIEAP台湾電力産業大会《CEPSI2010》を開催しました。そこで九州電力からも多大なご支援をいただきました。また、九州電力の社長や専務さんもよく存じております。

お詫びを申し上げますが、次に予定されております講演の講師であります、経済部の梁次長が、ただ今、こちらに向かっている途中でございます。お許しいただければ、私がここで21世紀の世界の電力の需要に関しての知見を、皆様に発表したいと存じます。

日本は京都議定書を提唱した国でありまして、そしてその会議が開催された国であります。そして、この京都議定書が採択されることで、電力事業に多大なインパクトをもたらしました。主に二つの現象が見られます。まずは、よく発電に使われている石油燃料です。そしてもう一つは地球温暖化ガスの排出問題です。そして、その電力事業の発展というのは、すべて我々電気業者が、正確に、そして精密に把握しているのであります。

21世紀に入りますと、やはり電力に対する需要や電力に対する期待が大きく変わっています。その変革の速さは20世紀では体験できなかったことです。私は電力産業で38年も仕事をしておりますが、しかし、この38年を通して、電気事業の中で全く変わっていないことが一つございます。それは、電力事業が常に安全で信頼性が高く、環境に優しく、そして経済に新たな競争力をもたらす電気エネルギーを提供しなくてはならないことです。

今、省エネや低炭素化などさまざまな環境対策、環境保全の使命がございますが、それによって多くの燃料の選択肢もございます。我々電力事業者にとってみれば、やはりコストパフォーマンスの高い燃料を選ぶことが一番大切です。ですから、これだけの燃料のオプションのある中、やはり責任のある企業の一員として、燃料の選択肢のポートフォリオをしっかりと検討していかなければなりません。

経済部の梁次長がお見えになりましたので、私はこれでご挨拶とさせていただきます。また次の機会に、皆様に電力事業に関して知見を述べたいと思います。ありがとうございました。

最後に、この記念事業のご成功と、皆様のご健勝・ご発展を祈念して、ご挨拶と代えさせていただきます。ありがとうございました。

特別講演

テーマ

「台湾経済の現況および展望」

講師

中華民国経済部　次長

梁國新 氏

洪常務理事、そして石原会長、是永顧会長、村上理事、台湾電力の陳董事長、本日は九州経済フォーラムの創立25周年代表団の皆様をお迎えすることができ、そしてお話しできることを光栄に存じます。これから台湾の経済の現況と展望についてお話をしていきたいと思います。

先ほど、台北の国際会議センターのほうから参りましたが、そちらでは台北の発明展がございました。そして、先ほどの会場には、蕭万長副総統もおられました。蕭万長副総統は、明日の午後、皆様にお会いするという話をされました。蕭副総統は台湾の経済の専門家であります。改めまして皆様のご光来と、そして台湾での楽しい滞在をお祈りしたいと思います。

それでは早速、本日の講演内容ですが、五つのパーツに分けましてお話をして参ります。まずは経済部の政策の中心理念と、その次には台湾の現在の経済環境、三番目としては経済発展の今後の戦略とその方向性、そして四番目は日台産業間連携のビジネスチャンス、そして最後に簡単に結びたいと存じます。

経済部が管轄する範囲は非常に広く、そして多岐にわたっています。商業管理、そして工業発展、国際貿易、知的財産権、そしてエネルギー開発などを含みます。そして、あまりにも多岐にわたりますので、今年、経済部としては「創新経済、樂活台灣」、つまり新たな経済を作り出し、台湾の生活を楽しくするということを目標にして、新たな経済発展を促進し、楽しく幸せに暮らせる環境づくりをして参りたいと思っております。

我々の今後の発展のビジョンですが、まず、素晴らしい投資環境を整備し、外国の資金を誘致して、台湾を世界のグローバル・イノベーション・センターにし、アジアの運営センターとして、また台湾企業の運営本部として参ります。そして産業構造の面では、多角化した産業構造の高度化を進め、さらには環境に優しいことを考え、省エネの責任を背負い、産業の付加価値を高めることを目標としています。それから、都市と地方のバランスのとれた発展も目標としております。また中小企業の指導や、就職の機会を作り出すこと、それによって楽しい台湾を実現して参ります。

では、現在の台湾の経済環境についておさらいをしていきます。ご存知の通り、2010年の台湾の経済に、大変素晴らしいものがございました。経済の成長率は10・88％で、これは24年来最高の記録です。その経済成長の背景には、一番大きな要因として、民間投資および輸出がそれぞれ32・51％、そして25・65％伸びたことがあったわけです。去年はこれだけ素晴らしい成績を上げていますが、今年はどうでしょうか。

今年になってみますと、やはり日本、ヨーロッパ、アメリカ、そして台湾を含めて、全世界的に心配はありました。その主な原因としては、やはり就

機が回復していないこと、そして新興の経済国家にインフレの懸念があること、そして欧米における債権の危機などの影響で、今年後半の伸びが弱まっております。後ほどの質疑応答の時間で、皆様の世界経済に対する考え方をぜひお聞きしたいと思います。

行政院主計處、つまり台湾の公式データを発表する機関ですが、今年の経済成長率を下方修正しまして、4.81%としたわけですけれども、しかしIMF国際通貨基金の予測では、依然台湾の経済成長率は5%とし、それはアジアのNIESの4カ国、つまり香港、韓国、台湾、シンガポールの中では、台湾は依然としてトップの座を確保できるとしています。ですから、ちょうど今、第3四半期から第4四半期に入ろうとしている時期ですが、我々はもっと頑張らなければならないと思っております。

実際に台湾経済の体質は、非常に良好なものでございまして、ここ数年では世界競争力もどんどん高くなっています。いくつかのデータを見ていきましょう。まず最初に世界貿易においてですが、2010年の輸出総額は世界で第16位、そして成長率は世界で第2位となっています。そして投資関係についての評価ですが、アメリカのBERI社の統計では、2011年の投資環境で台湾は世界で第3位、そしてアジアで第2位となっています。世界の競争力につきましては、スイスのローザンヌ国際管理学院(IMD)の統計データですと、台湾の世界競争力は、今年は大きく伸びて第6位となりました。これは歴年最高の成績です。そして経営環境の改善につきましては、世界銀行の発表ですと、世界的な2011年の経営環境の報告は、台湾は世界で第33位、去年より13位もランクアップしています。こうした点からもわかりますように、台湾経済の体質は非常に良好で、世界でも競争力を持っていますから、ぜひ台湾と連携して、世界市場を狙っていきましょう。

では三番目にご報告しますのは、経済発展の今後の戦略の方向性です。そこには三つの区分がございます。まずは魅力的な投資環境の整備です。これにつきましては去年、既に産業創新条例が採択されました。つまり、産業の高度化に関しては、イノベーションが最も重要なコア価値であるということで採択されたわけです。また、その投資環境の改善につきましては、営利所得税、つまり日本で言いますと法人税ですが、これも25%から17%まで引き下げられました。そして第三次産業を推進して、経済発展の新たな牽引力にしていくことも、施策のポイントの一つでございます。そのために6つの新興産業、4つのインテリジェンス産業、そして10のサービス産業を、主要な産業として選びました。そして三点目のポイントとしては、前向きに地域の経済統合に参画し、そして貿易のさらなる自由化を推進して参ります。ご存知の通り、去年の6月29日に両岸の間、中国との間ではECFAが結ばれました。それによって貿易自由化の効果が得られています。さらに進んで、主要な貿易パートナーとの間にもEPA、経済連携の協定も結んでいきたいとしています。

たとえばまずシンガポールですが、シンガポールとの間では、貿易パートナーシップの協定を結ぼうと、交渉を今、進めております。またASEAN諸国との経済貿易関係を促進するための協定の交渉をしております。これは今後、現地での経済貿易の改革にも、起爆剤の作用が期待できるとしております。そして、皆様と最も直接に関係しておりますのは、先週の9月22日に、日本と台湾の間で結ばれた投資協定です。日本と台湾の間で投資協定が結ばれましたことをご存知の方は、どうぞ手を挙げてください。……まだご存知でない方もいらっしゃるわけなんですが、もし関連の情報が必要であれば、工商協進會の者にぜひお尋ねください。

簡単に申し上げますと、その投資協定につきましては、投資に関する保証、投資の促進、そして投資の自由化を三本柱としております。この日台間の投資協定がどうしても必要な理由の一つとしては、日本は台湾にとって二番目に大きい貿易パートナーであることです。去年の日台間双方の貿易総額は、7億米ドルに達しようとしていました。また、過去50年間で日本が台湾に直接投資した金額は165億米ドルで、台湾の日本に対する投資金額は約16億米ドルもございました。そして、先週の9月22日に、日本と台湾の間では投資協定が結ばれましたが、この投資協定の正式な名前は非常に長く、「亜東関係協会および財団法人交流協会における投資に関する自由化促進、および保護の協力協定」となっています。この投

資協定の締結によっては、次のようなメリットがございます。まずは、双方に安定した、そして制度化した投資環境が提供されること。そして日台間の産業サプライチェーンがより緊密化されること。そしてさらには、係争があるたびに国際仲裁のソリューションが提示されることです。たとえば、先ほど台湾電力の陳董事長もおっしゃいましたが、エネルギーに関する業務連携も、こういった投資協定が結ばれましたことで、より保証されますし、より自由化され、促進されることになります。

この1年で、多くの日本の企業の皆様が、台湾に対して投資を行われました。去年、台湾と中国の間でECFAが締結されましたことで、日本の企業は台湾に協力パートナーを見つけるために、たくさんの投資を行いました。いくつかの例を挙げましょう。まず最初に、日本のホクト社です。そして、つい昨日の話なんですが、台湾ホクト社が台湾第二工場の搬入れ式を行いました。私もお招きをいただきまして、台湾の東の方の屏東県に行ってきました。屏東県には農業バイオテクノロジーの先端施設がございまして、ホクト社はそこに12・5億台湾ドルを投入して、第2工場を建設することとなっています。今後、ホクト社は、台湾をアジアの主な生産拠点にし、生産されたものを中国を含めたアジアの近隣諸国に販売しようとしています。

次の例は古河電気工業さんです。古河電工業は主に電気自動車の電池の需要に合わせて、今年の3月に24億台湾ドルを投入して、古河銅箔社を作りました。また、プリント基板系の銅箔の市場を見込んで、古河銅箔社をさらに増資し、21億台湾ドルをかけて工場の増設を始めました。三番目の例は東レさんです。5月に投資金額21・5億台湾ドルで東レ尖端薄膜社を立ち上げまして、主に台湾のアルミのメーカーに製品を提供しています。この三つの例からわかりますように、農業、電子部品、そして電子産業など、いずれの分野の会社も台湾に対して非常に好感を持っており、台湾で協力相手、パートナーを見つけてきたということでございます。

本日の皆様のご来光を心から歓迎しますが、経済部といたしましては、日本企業を支援するためのさまざまなサービスを提供しております。まず、私たちが考えておりますサービスの一つとしてに、日台産業連携企業招致代表団の編成があります。これは個別に企業を訪問して、日本企業と協力するためのパイプを拡大していきたいと考えています。今予定している代表団は、10月、11月の2回に分けまして日本に渡り、特に日本の地方の中小企業を中心に交流の機会を増やしていきたいと思っております。そしてもう一つの取り組みとしては、近い将来、日台産業協力架け橋のアクションプランを策定したいと考えています。このアクションプランの中では、まず日本に対しての産業連携の架け橋の推進のメカニズムを今、考案しているところです。また、今後さらに、日台間の産業のイノベーション・サイエンス・パークというものの設置も、計画しております。

台湾政府のビジョンとしては、まず世界から台湾へ、台湾から世界へと考えております。これはECFAの締結によって、さらに台湾の基を大きくし、台湾を強化して、台湾のアジア太平洋地域の経済におけるその役割を、より見える形で表現していきたいと思っています。国際経済貿易における台湾の地位を高めるために、また台湾国内経済の発展を加速するために、さらに経済の繁栄をもたらすために、経済部は現在、四つの方策を考えています。まず、前向きにその地域の経済統合に参加すること、そして市場のビジネスチャンスを拡大させること、さらには企業誘致を拡大すること、そして四番目には、産業の実力を向上すること。以上が我々の主な取り組みの内容です。

では、アジェンダに従いましてそろそろ終わりますが、後ほど皆様の方からのご質問などを、ぜひお受けしたいと思います。ありがとうございました。

【質疑応答】

皆様のご質問をお受けする前に、簡単に私の経歴をご紹介します。私は経済部に30年以上、勤めております。主に担当して参りましたのは、貿易の推進と貿易の交渉です。そしてこの30年のキャリアの中で、半分は海外でした。海外はヨーロッパに7～8年、そしてアメリカも7～8年です。

私は貿易の政策や貿易の交渉、そして国際連携には、個人的にも非常に興味を持っています。従って、今後、日台間でどのような連携ができるかにつきましても、ぜひ皆様のコメントをお聞きしながら、皆様と意見を共有化していきたいと思います。ですから、ぜひ忌憚なくご質問いただきたいと思いますが、もし質問がなければ、私の方から質問をして参りたいと思います。よく言われることですけれども、「攻めは最高の守りである」ですから。では、トップバッターの方、どうぞ。

●九州経済フォーラムの会長をしております石原でございます。梁先生、今日は大変素晴らしいご講演、ありがとうございました。一つだけ質問がございます。台湾の経済が非常に好調であるのには、いろんな理由があると思いますが、一言で言うとFCFAとかEPA、FTAという言葉は出てきてないけれども、要するに国を開いて、広く海外からどんどん投資ができるようにしていく、同時に台湾自身も外にどんどん出ていき、中国にも進出する、ということだと思います。そういった中で、たとえば法人税25%を17%にするなどの政策は、とても素晴らしいですね。17%というのは香港、シンガポール並みですから、世界でも最も法人税の低い国だと言えます。

これなら日本の企業はどんどん台湾に投資をしたくなるわけですが、そういった政策や自由化を進めると、必ず農業などの国内産業に風当たりが来るわけですね。FTAとかEPAとか、日本でそういう経済の自由化が進まない最大要因というのは、国内産業への風当たりの問題があります。特に一次産業への影響が大きいわけですが、台湾がこういう自由化を進めるに際して、どういうことで国内産業のそういった問題点をカバーしているのか。それについてお伺いしたいと思います。

ご質問、ありがとうございました。非常に大切で、非常に重要な質問であります。今の質問で思い出しましたけれども、確か6月に菅前首相がTPPの交渉に参加するかどうかという発言がございました。このTPPというのは、アジアの9カ国に及ぶ全面的な貿易の自由化の協定です。これに関しましては、日本国内の農業関係者は、かなり大きな声を上げているんですけれども、菅前首相も、そうした農業に関わる皆さんの意見をまとめて、6月に何らかの形で発言できるのではないかということだったんですが、残念ながら3月に東日本大震災が起こって、予定通りにいかなくなりました。

確かに貿易の自由化に関しましては、台湾も日本も同じように、農業をはじめマイノリティの産業団体からのプレッシャーがございます。ですが、こういった第一次産業を含めた大変な問題は、各国がともに抱えているわけです。政治家も必ず苦しい選択を迫られることになりますが、しかし、この例をぜひ考えていただきたいと思います。たとえば高校の1クラス30人がいるとしましょう。そのうちの3人が、どうしても大学に受かることができない。だとしますと、残りの27人も大学に行かなくて良いのでしょうか。ですから、言葉を変えると、国の全士もそうなんですが、国の発展というのは、一番立ち後れている産業と一緒に考えていかなければいけないのか、それとも一番進んでいる産業と一緒に考えるべきなのか、という選択肢になります。ですから、そういった産業の団体との話し合いを、とにかくしっかり持つこと。そして、どうしてもやはり、覚悟を決めて過渡期を過ごさなければならないということを、皆さんに伝えていかなければなりません。

確かに日本と台湾の間には、たくさん共通点がございます。ですから私も、よくこういう問題にぶつかる時には、日本の皆さんはどういう対策をとるのかと、いつも考えています。今後、貿易の自由化というのは避けては通れない道だと思うのですが、やはり一番肝心なのは、国内の皆さんとどのようにコミュニケーションを図っていくべきか。この点ではないでしょうか。

●同じく九州経済フォーラムの高宮と申します。今の梁さんのお答え、大変感服いたしました。私も大変質問した

いことだったんですが、会長に先を越されましたので、別の質問をさせていただきたいと思います。

今、世界が大変な経済危機に陥って、今後も大変な状況になるのではないかと言われている中で、台湾の成長率は昨年10・8%、そしてまた今年も5%強ということで、その成長ぶりには大変敬意を表する次第でございます。それで、一つ質問があります。先ほど、この成長の要因にはさまざまなものがあるとおっしゃいました。一つには中国との関係が、ECFA等で急速に良くなったということをお聞きしていますし、日本との新しい連携も進めようとしているということでございます。私もこの台湾の位置からしても、中国は本当に大事なところだと思うんですが、同時にアジアとの関係はどうなんでしょう。日本と架け橋を結んだ台湾に日本が期待するところとしては、中国と並んでアジアとの関係が非常に大事になってくると思っているのですが、そのアジアに対して、台湾がどのような戦略を持たれているのか、お聞きできたらと思います。

おっしゃる通りでございます。中国とは確かにECFAを結んだわけですけれども、これは実務的な需要があったからです。たとえば、毎年、台湾と中国の間での貿易総額は、何と1500億米ドルに達しています。ですから、こうした投資をされた台湾企業に対しては、やはり安定して、そして継続可能な投資環境を、私たちのところで確保してあげなければなりません。そして中国へ投資をしている台湾企業の数は何と8万社、金額にすると1000億米ドル以上です。これまで私たちは、中国が唯一の市場だとは言ってきませんでした。しかし、実際の状況を見ますと、確かに経済の環境の中では、中国への輸出は40%も占めています。行政委員長はいつも、「すべての卵を一つのバスケットの中に入れるな」ということ申しておりますが、しかし、たとえば100の卵があって、そのうちの40の卵がバスケットの中に入っていれば、この40の卵もしっかり守っていかなければなりません。

いつも申し上げておりますが、ECFAというのはあくまでも台湾の経済発展の戦略の中の一つであります。中国だけでなくアジア、そしてアメリカ、ヨーロッパ市場は、いずれも忘れてはなりません。ですから、日本企業との連携というのは決して中国市場に限るものではなく、アジア市場、そしてヨーロッパ、アメリカ、必然的にインドの市場も狙っていっても構わないと思います。先ほども申し上げましたが、中国には既に8万社の台湾企業が進出しております。これは何よりも、日本企業が連携して中国への進出をするための、最高の舞台ではないでしょうか。また、東南アジアにも数万社の台湾企業が進出しているため、現地にはしっかりとしたネットワークができております。こちらでもぜひ、皆様と手を携えて、現地の市場の開拓をしていきたいと考えています。

質問をいただきまして、誠にありがとうございます。重ねて申し上げますが、我々は中国市場だけを狙っているわけではありません。あくまでもECFAの締結というのは、台湾政府の世界戦略の中の一環でございます。

時間となりましたが、また次に皆さんとお会いできることを楽しみにしております。ありがとうございました。

御礼の言葉

九州経済フォーラム 理事 村上 英治 氏
（財団法人西日本産業貿易コンベンション協会 常務理事）

親愛なる友人の梁先生、誠にご講演ありがとうございました。私は九州経済フォーラムの理事をしております村上と申します。梁先生のすばらしいご講演を拝聴いたしまして私も思うところがございましたので、お礼も込めまして2、3点だけコメントをさせていただきたいと思います。

一点目は、台湾経済が先進国型に着実に近づいてきていること、そして経済活動が非常にダイナミックであるということを実感いたしました。台湾経済産業構造の高度化は、先進国と同等の域に達しておりますし、また台湾経済の輸出を牽引している電子機械等の電気機械も、非常に高機能製品にシフトしてきているような感がございます。これもひとえに台湾経済部のご指導の賜物であり、また経済政策の勝利であるという風に、私は強く感じました。

二点目は、台湾経済は今後、長期に渡って大いに発展するであろうという確信を持ちました。今年も5%程度の成長がほぼ実現できそうでありますし、また、さきほどお話がございましたように、世界の成長ランキングを見ましても、スイスのIMDでは6位、世界銀行の投資環境ランキングでは13ランク上昇という風に非常に高ランクにありまして、台湾経済の前途は非常に明るいという確信を持っております。

三点目は、日本・九州と台湾経済との関係でございます。我々日本・九州と台湾は、ともにアジア太平洋地域という成功を約束された地域にあります。この成功を約束された地域という考えは、決して与えられたものではなくて、友情と信頼、そして不断の努力によって初めてできるものであると思っております。先ほど梁先生のお話をお聞きして、我々はともに自由主義と民主主義を標榜する国であり、またこれからは日台の投資協定をはじめとしたそれぞれの政策によって、互恵関係と相互依存がますます高まっていく、そのような新しい時代が到来したという気持ちを強く持ちました。

最後に、今申し述べました信頼と友情についてでございます。冒頭に述べましたけれども、3月に我が国は大地震と津波によりまして、大きな痛手を受けました。その際に、台湾国政府、並びに国民の皆さんからいただきました世界で一番温かいご恩を、日本国民は決して忘れることはございません。台湾には、木の根元がしっかり立てば、どんな台風が来たとしても、木の天辺でも恐れることはないということわざがあると聞いております。どうかこれからも、日本・九州と台湾の間に、それぞれの互恵関係・依存関係によりまして、揺るぎない友情関係ができますことを心から祈念いたしまして、私の梁先生に対します御礼のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

記念勉強会 1

講師

高雄市電腦商業同業公会 理事長

莊 連豪 氏

テーマ

「日台関係について」

皆さん、こんばんは。本日は皆様と交流できることを光栄に存じます。私は本当は日本語で皆様と交流したいのですが、既に通訳にお金が支払われているということですので、通訳をしてもらうことにします。

私は高雄市電脳商業同業公会の理事長の荘と申します。先ほど皆様がお聞きになったのは、台湾の政府系のご発言でございます。経済部、台湾電力、いずれも政府系の機関でございます。これから皆さんにお聞きいただくのは、ずっと素晴らしい民間の講演です。政府の要人の方たちは、私が発言するのを聞きたくないようで、皆、逃げていきました。私はいつも、政府に対抗して本当のことしか言いませんので、本日申し上げますことは、どうぞこの部屋の中にとどめておいてください。

皆さんは、日本から台湾においで下さったのですが、私も十数年、日本にいましたので、日本のことはよく知っているつもりです。日本人は私にとりまして、まさに学ぶべき対象ではございますが、本日はパソコンでは学べないことをお話しいたします。皆さんは、いつも経済の観点から日台関係をよく話題にされていますけれども、本日は日台関係だけでなく、中国をプラスした三角関係について申し上げます。

中国が台頭するまでは、日本はアジアの中で最も強い国でした。私はよくこういう風にたとえます。日本は狼の国です。そして台湾は羊の国です。今でも羊です。そして中国は獅子、ライオンです。まさに目覚めたライオンです。これにご同意いただけますでしょうか。同意していただける方は、どうぞ拍手をお願いします。……〈拍手〉……これは、政府の要人たちが決して口にできないことです。過去から現在、そして未来に向けても、100年ぐらいは多分、この情勢は変わらないと思います。というのは鷹、つまりアメリカは空を飛んでいて、まだ話に出てこないからです。これがまさに、私たちが検討しようとしている経済関係です。非常にこれはシリアスな話なんですよ。あくまでも私の見方ですけれどもね。

これまで経済の話をする時、やはり政治、宗教、そして環境問題。この三つをなしにしては語れませんでした。これから100年先も、同じようにこの三つの要素が大事です。この宗教、政治、そして環境問題、これは決してパソコンでは解決できない問題ではないでしょうか。コンピュータを学ぶ人間は非常にストレートで、物事にはっきりしているのですが、しかし、この三つの問題は、いずれも解決できません。

先ほど梁次長の話にありましたが、既に8万匹の羊が今、中国にいます。そして今、1～2万の羊が、東南アジアでぼーっとしています。これはまさに、日本の狼が追いかける対象です。なぜこういうたとえ方をするかと言うと、やはり私にとって日本は、アジアの中でも最も信用性を重んじる民族だからです。日本には、自分のボスのために切腹しても良いというような文化がございます。こういう文化は、60年前まではまだ色濃く流れていました。しかし、こうした精神をそのまま中国に持って行くと、ばかばかしいと言われるだけでしょう。もちろん、そう言うのは中国人です。中国人には中国人ならではのやり方があるからです。

ですから台湾人、特に60歳以上の人は、昔の日本にまだ憧れています。まだ昔の日本の皆さんとお付き合いをしたいと思っています。私はメインテー

プルに座らせていただいておりますが、この中では私が一番年は若いのですが、考え方はもしかすると一番古いかもしれません。台湾人からはよく、私の考え方は火星人の考え方だと言われています。

私は依然として信頼を何よりも重んじる考え方をしているわけですが、しかし、中国では何よりも利益の方が先行します。日本人は二十数年前、中国を信用できないとよく話していました。でも、この21世紀に入りますと、世界のすべての国々が、中国に行って利益を上げようと、ています。まあ中国人が信頼できないわけではなく、日本人は中国人の考え方を理解できないと言ったほうが正しいでしょう。

ですから、私もそう思うのですが、皆さんはぜひ、この8万匹の羊をうまく捕まえて利用しましょう。中国で草を食べているこの8万匹の羊たちが、世界で最も中国に関する知識のある者たちです。なぜこういう言い方で知識の話をするかと言うと、台湾は世界の中で最もベジタリアンの人口が多い国だからです。ですから、狼と羊が協力すれば、得するのが狼の方です。つまり日本人にとって最上の協力パートナーというのは、わざわざ言われるまでもなくご理解いただけると思いますが、台湾です。

今は非常に経済の先行きが不透明で、大変な時期でございます。先ほど、梁次長が、台湾の経済は非常に素晴らしいとおっしゃいましたが、私はそれには納得できません。だからというわけでもありませんが、彼は、さっさと姿を消しましたね。ですから、本日はぜひ皆さん、層の力を抜いて、台湾の経済事情をよく知り、何よりも投資環境だけでなく、その土地に住む人々の文化もぜひ知っていただきたいと思います。

私は高雄に住んでいますけれども、九州と高雄は非常に似ています。一番大きい共通点は、道が広いことです。高雄の人と同じように、九州人の心も広いです。ですから、私はよく台湾人の友達に、九州人とビジネスをすれば、絶対に間違いないと言います。

講演の最後に一言「心をもって付き合いましょう」。これは私の心からの言葉です。ありがとうございました。

【質疑応答～荘連豪氏】

●村上でございます。日本は今、デフレ、円高、そして株安といった三重苦にあえいでいて、さっき梁先生がおっしゃったように、海外への産業の移転が始まろうとしているわけなんですが、台湾でも今、80年代に出現した産業の空洞化という問題が、再現をしているといった話を聞いております。今のお話にあった8万匹の羊、これは本当は何万匹かは台湾に残っても良かったのかもしれないという気もするのですが、空洞化の問題というのは、どういう風にお考えなのでしょうか。

さらに言えば、日本からいろんなキーカンパニーが今、台湾に進出を考えておりますが、そういったキーカンパニーというのは、台湾に中間材を作る企業があるという前提でネットワークを考えて、台湾への立地を考えている節もあるわけです。従って、そのような中間材の調達先企業がどんどん大陸に出ていくと、日本企業が進出した際の不安要素となります。そのネットワークや生産体制、サプライチェーンがうまく作用するのかどうかについては、どういう風にお考えでしょうか。

お答えします。私もIT産業の一員ですので、IT産業の視点からお答えしようと思います。台湾政府が今取り組んでいるのは、シャケの里帰りというアクション、つまり中国進出した企業が、また台湾に帰ってくるよう促すプランなのですが、そもそも台湾の8万匹の羊が中国にいて、果たしてどうなったのでしょうか。本当に中国の獅子のように目覚めたでしょうか。実際に台湾の羊が大規模な獅子になった例は、フォックスコン社（鴻海精密工業）以外にはほとんどありません。1、2社のみです。ですから、やはりこれまで中国に渡った台湾の羊は、羊のままであります。

台湾の産業基盤というのは、やはり中小企業によって作られています。また、台湾の経済の奇跡を作り出したのも、台湾の中小企業です。最も実力を持ち、柔軟力を備えているのも、台湾の中小企業です。日本においても、同じようなことが言えるのではないでしょうか。日本の高度経済成長を促したのも、きっと中小企業の力だと私は思います。ですから、日本と台湾の中小企業同士の間での連携を強化する。これがまさに最高の、空洞化を防ぐ良策ではないでしょうか。

記念勉強会 2

講師

鄭 世松 氏

東亜経済人会議 台湾委員会副会長
（前・台中商務協議会会長、前・台湾銀行頭取）

「特別講演」

こちらの鄭と申します。産業の空洞化の問題が話題に上っておりますが、産業の空洞化の問題というのは、結局に英国で産業革命が起こってから今まで、ずっと繰り返し続いているんですよ。しかも最初は全部、中小企業から始まる。最初から大企業なんてありません。

産業革命は英国で最初に起こりましたが、英国内の生産力が高くなると、それが次にはヨーロッパに行きました。英国にとっては産業の空洞化ですけれども、別の見方をすれば、同時に、今まで産業革命で蓄積した資本をヨーロッパ大陸に投資したことになるわけです。その投資によって半が大陸に行って、今度は狼になったりライオンになったりする。ですから、それをうまくサポートできるかできないかによって、産業の空洞化の問題というのは解決されると私は思うんです。今まで日本のいろんなマスコミが言っている空洞化の論調といったら、もう産業はだめになっている、国内はだめになっているということなんですけど、私から見たら、空洞化の問題で一番大事なのは、今まで産業発展によって蓄積した資本が、有効的に使われているかどうかということです。

英国で始まった産業革命は、ヨーロッパに移ってそこで発展しますが、いろんな問題でヨーロッパの労働力が高くつくようになったので、今度は労働力の安いアメリカに行きました。そして第一次世界大戦が始まると、ヨーロッパでは生産できなくなり、代わってアメリカが生産して、アメリカにお金が蓄積されることになります。それで、アメリカも制度改革をするために、たくさんアメリカ国債を発行したんですが、そのアメリカ国債を買ったのは、産業革命によってヨーロッパの産業が発展した時に、お金を儲けたヨーロッパのお金持ちです。また、ヨーロッパは民族がたくさんあって、宗教問題もうるさいし、社会事情も良くないからと、その頃からヨーロッパの企業も、いろいろ環境が整っているアメリカに産業を移したんですね。

さらに第一次大戦が終わると、アメリカは施策として、相当なアメリカの国債を買った人、それから企業を移した人には、いろんな優遇をしました。それで、ヨーロッパのいわゆる中流以上の人たち、アメリカの国債をたくさん買ってる人たちが、たくさんアメリカに移民したんです。すると、そのアメリカ国債が償還時期を迎えた時には、その国債を持っている人たちというのに、移民してアメリカ国民になっていますから、国債は返すんですけれども、アメリカにとっては右のポケットから左のポケットに移すだけのことですね。お金は全部、アメリカに行っちゃったんです。それで急速にアメリカのウォールストリートが栄えることになったわけですね。

つまり、そういう形で中小企業が蓄積したお金をうまく使うと、産業の移動によって規模が大きくなり、それがだんだん多国籍企業に成長するということです。ですから、豊かになったアメリカがそういう状況になって、今度

はアジアに出ていく。すると今度は日本、韓国、台湾といったところでも同じことが起こり、空洞化が移ってきます。ただ、アメリカの大企業もちゃんとそういうことを押さえてやっているわけですから、結局、企業が国外に移ると国が衰退するといった意味での空洞化というのは、私は起きていないと思います。

さっき梁さんが言ったように、台湾企業の中国・アジア進出を世界戦略の一環としてやったということは、要するに台湾も日本と同じように、たくさん資本を蓄積したので、これをうまく利用しなければ、台湾の経済は維持・発展していけない。それで、台湾の周りでは中国大陸が一番いい条件を備えているから、そこへ行って投資しない理由はないということなんです。ECFAを作ったのは、その企業を守るためですね。

要するに、空洞化のあとに来るのは、中小企業が大企業に発展する一つの契機なんです。たとえば日本と台湾の企業が、つまり狼と羊が一緒になって中国大陸に行って、そこで大きくなって、今度はライオンになるチャンスなわけですね。空洞化は当然起こります。しかし、起こるべくして起こったものを議論するより、いかにして今まで蓄積したものを有効に使うかということを考えるほうがいい。そうすると今、日本が過去に蓄積した技術と資本を最も有効に使うためには、最も近い台湾との経済協力によって、中国あるいはアジア、第三世界に投資をする。そして、どういう風に発展していくかということを考えた方が、ベターじゃないかと思うわけです。

以上が私の今の空洞化に対する認識です。

【質疑応答～鄭世松先生】

ご紹介に預かりました鄭という者でございます。日本と台湾の間に東亜経済人会議というものがございまして、今、そこの台湾委員会の副会長をさせてもらっています。先ほど空洞化の問題について、私の知見を述べたわけでございますが、台湾のこと、またその他のことでも、私が答えられるものがありましたら、喜んでお話ししたいと思います。ご質問をどうぞ。

●石原です。今の鄭先生のお話も、非常に的確な素晴らしいお話だったと思います。ありがとうございました。私は先ほども梁先生に質問したわけでございますが、要するに貿易の自由化というのをやっていくと、国内産業の一定のもの、特に農業関係を中心に、非常に大きな影響を受ける。それがかわいそうだから、あるいは関係者の反対が怖いから、政治がリーダーシップを発揮できない。ここが日本が国を開くという面においての、非常に大きな問題です。このままいったら、日本の国というのはだめになるんじゃないかと思います。それに対して台湾は、政府が非常にきちっとリーダーシップを発揮して、うまくやっている。それはなぜなのか。そこのところをどう考えていったらいいのか。ぜひそれについて、お考えをお話しいただきたいと思います。

それは要するに、台湾の社会的なコンセンサスと、日本の社会的なコンセンサスが、ちょっと違うからだと私は思います。私は終戦の時に中学の3年でございまして、まず日本語で勉強したわけです。その後も日本で14～15年、仕事をしておりましたから、多少、日本のこともわかっているつもりでございます。それから、アメリカとかヨーロッパでもいろいろ仕事をやってきましたので、台湾自身のことも、それから中国のことも、ある程度わかっております。

その中の比較の問題でございますが、日本はずっと昔から、アジアの中で一番状況が良かったと思うんですよね。島国で、四方を海に囲まれているわけですから、外国からの圧力を受けにくいという点で、非常に環境が良かったわけです。しかも徳川幕府になって333年も鎖国をやりました。するとどうしても、日本に住んでいる方々の社会的コンセンサスというのは、村意識が非常に強くなると思うんですね。村の人は、弱い人の面倒を最後まで見ないといけない、弱い人を基準にしてすべてのことを決めないといけないということですね。

台湾の社会、それから中国の社会はそうではありません。中国はヨーロッパのEUくらいの大きな国ですから、国内にもいろんな民族がいて、文化とか方言も相当違います。そういうところで人々は暮らし、仕事をやっているわけです。ことに台湾というのは、中国

のいろんなところから人々が来ていますから、同じ言葉を使っていても、必ずしもメンタルが同じではないわけです。そういう人たちが社会を構成して一緒に何かやる時には、いわゆる「政治」というものが必要になります。人々が同じような考え方をする日本の場合の村と、全然意識が違うわけです。

台湾に一つの村があるとしましょう。そこによそ者がやってくる。すると競争しないと生きていけなくなる。弱い人ばかりを見ていたら、村全体が潰れちゃう。そんな時にどうするか。台湾人は結局、弱い人を切り捨てて、もっと生存できる方向にやっていくわけです。そこには、政治的な判断があります。冷徹に見えるかもしれませんが、そのけじめがないと住んでいけないということですね。だから、日本と台湾の違いはメンタリズムの問題ですよ。日本の場合はどうしても政治が、弱者の切り捨てに躊躇します。台湾の場合は、さっきの梁さんが貿易自由化を巡る第一次産業の問題に関しておっしゃったように、国が政治的な決断をする時には、少数の利益より大多数の利益を優先する。弱いものは切り捨てられてもしょうがないという姿勢です。弱いものを基準にしていては国が存在していかないということですね。

それからもう一つ、私が考えていた問題というのは、税の平等ということです。日本の社会の税の平等というのは、現時点での平等を指していますが、台湾とかヨーロッパの国々、特に英米法の国では、税の平等というのは生涯の平等なんですね。現在は平等でなくても、生涯的に平等になればいいという考え方です。たとえば経済特区を作って、ある企業の税金を減免するというのは、現時点で考えたら税の不平等です。しかし、実際に台湾や中国に輸出加工区をたくさん作っているし、アメリカは特定企業に対して税の減免をやっている。それはなぜかというと、その企業が育った場合に、将来、たくさん税金が入ってくるからです。その入ってくる税金によって、将来の他の人に対する不平等が解消されるわけです。

私は日本におりまして、税金を払っていましたから、よくわかるのですが、こういうような税の平等に対する考え方を、日本の社会はなかなかできないですね。できていれば、日本でもいろんな特区を作って、もっといろんなことができたはずなんですよ。ところが、その政治的な決断がおそらくできない、あるいは難しいだろうと思います。ですから、その辺りのことをもう少しダイナミックに考えていかないと、もう一歩が踏み出せないんじゃないかという気がするわけです。

たとえば今、日本では復興の増税の話が出ていて、一時は相続税を上げるとか言っていましたね。ところが台湾は、リーマンショックの後、その相続税を45%から10%にしたんですよ。そしたら台湾のお金持ちは、投資銀行に預けて外国で運用していたお金を、全部台湾に持って帰ったんです。そのお金によって、台湾の今の投資、つまり中国あるいは他の国への投資が始まったわけです。投資銀行に預けて運用してもらう場合には、大体10%ぐらい、いろんなコミッションを取られます。それなら相続税の安くなった台湾に持って帰って、自分で投資なり運用したほうがいいんじゃないかということですね。

しかも日本の社会の中には、お金持ちというのは一種罪悪みたいな社会通念がありますね。ところが、お金持ちがいなければ、新しい企業は育ちません。結局、ベンチャー企業がなかなか日本で育たないのは、そんなお金持ちがなかなかいないからです。ベンチャーをやって儲けたとしても、税金を取られるから、ばからしくてやらない。けれども我々の場合は、相続税を10%にしたことでお金持ちが台湾に持ち帰りました。彼らがそのお金を、少なくともここで運用してくれれば、運用益の税金は台湾に落ちるわけです。相続税を下げた分以上の税金を取ることができるわけですね。だから、なかなか難しいと思いますが、日本もそういう物の考え方をして一歩踏み出していくと、状況が違ってくるんじゃないでしょうか。そこが政府の決断じゃないかと私は思います。

●ハーバード白熱教室の話をしてください。

皆さん、おそらくご存知だと思いますが、ハーバード大学のサンデル教授の講義が話題を呼んでおりますね。先日、ちょうど私は東京に行っておりまして、NHKの番組を見る機会がありました。サンデル教授が、インターネット中継で日米中3カ国の大学生10

人ずつと、ある究極の選択について討論するという内容で、日本は東京大学、早稲田、慶応、中央大学、アメリカはハーバード大学、中国は北京大学、復旦大学の大学生が参加していたと思います。

今、ある飛行機がハイジャックされた。その中には200人の乗客がいる。そのハイジャック機はアメリカのホワイトハウスを狙っている。この時にあなたが空軍の総司令官だった場合に、この飛行機を撃ち落とすか、撃ち落とさないか。撃ち落とすのにはどういう理由があるか。撃ち落とさないためにはどういう理由があるか。そういう質問が出されました。もし撃ち落としたら、全然何も罪のない200人全員を犠牲にしなければいけない。その代わり、その200人を犠牲にすることによって、ホワイトハウスにいる200人以上の人が助かる。しかも国の政治の中枢が壊されない。そういう場合はどうするかと、皆さんの意見を聞いたわけですよね。

そしたら、ハーバード大学の学生の場合、6人が落としていい、落とすべきだと答え、残り4人は、罪のない人は殺しちゃいけない、人間の尊厳から言って、人間の命を奪うのは良くないと反対しました。日本の大学生の場合は、確か7人が反対だったんですよね。その7人は、人権に基づいて落としてはいけない、命が大事だと反対し、3人が賛成しました。中国の場合は違うんです。7人が賛成で、3人が反対ですね。

結局、サンデル教授はその時、政治的な決断としては、おそらく落とさなければいけないと言っていました。というのは、政治をやっていく、あるいは国を存続させていくには、それに最低限必要な存在、機能を守らなければいけない。だから飛行機を落とすべきだと結論づけたわけです。この選択そのものは置くとして、私は日米中各国の若いエリートたちの賛成・反対の割合から、アメリカはやはり政治的な決断ができる。日本の場合はなかなか難しいだろう、中国の決断力は高いと、そういう風に見たわけです。皆さん、いろいろご意見があると思いますが、ご参考までに申し上げました。

●後藤　申します。貴重なお話、ありがとうございました。台湾の方の世代間の違いについてお聞きします。先ほどの莊さんの講演に、60歳以上の日本語世代の台湾の方は、日本との関係活性化に熱心であるというお話がありましたが、あえて60歳以下の世代のお話はされなかったと思うんですね。今のお話も、台湾と日本の若い世代では、リーダーシップや物の決断力の違いがあるということですけれども、日本語で教育を受けられた郷先生のような皆様と、台湾の50代、40代、30代という次世代の方たちとの間に、日本に対する見方の違いはあるのでしょうか。また、日本との関係について世代間でどういう継承がされているのか、教えてください。

今、65～50歳ぐらいの私より若い世代の方は、日本が中国と国交を結んで、台湾と断交した時に10代から20代前半ですから、多くは学生でした。その日中国交回復の時、日本の文部省がそれまで台湾に振り当てていた留学生の講座を、全部中国に移してしまったんです。そのため、台湾の学生は日本になかなか行けなくなって、主にアメリカ、それからヨーロッパに留学に行ってしまったわけです。だから、おそらく今65～50歳の世代の留学先は、アメリカ、ヨーロッパが圧倒的に多いわけですよね。日本に留学された方ももちろんい

ると思いますけれども、比率的に言うとそういうことなんですね。

そういうわけで、この世代の方は日本に行っていませんが、彼らの親世代は日本の植民地の時代に生きていたわけですから、日本のことをよく知っているんです。だから彼らも、日本語はしゃべれないけれど、親を通して日本のことをわかっています。もちろん、そのわかり方は親ほどではありませんが、日本は中国あるいはアジアの人が言ってるほど悪者ではない、しかも技術や文化的な面でも相当レベルが高いということはわかっているわけです。

その人たちがヨーロッパで教育を受けて台湾に戻った時には、子供の時に親から伝えられた日本、ヨーロッパやアメリカの風土から見た日本に加えて、今度は台湾の現実や仕事を通じて、日本との関係を学ぶわけです。そうすると、日本に対する認識というのは、親の世代よりも客観的だけれども、ベースには相変わらず好意的なものが流れている。そういう意味で、台湾の若い人の日本に対する感情、日本に対する考え方というのは、非常に正しいと僕は思うんですよ。しかもこの人たちは、小さい時から中国人に教育を受けていますから、中国のことも親の世代よりよくわかってるわけです。先ほどの荘さんもそうですけれども、そういう世代の人たちには、そういう形での了解があると思います。だから、世代間の日本に対する意識のギャップというのは、そんなに大きくはないんじゃないでしょうか。

●そもそも日本と台湾というのは、すごくいいパートナーとしてやってきたし、現在もやれていると思うんですよ。そこに中国が台頭してきました。台湾の会社もたくさん中国に進出し、成功して帰ってくる会社も多いとうかがっていますが、そういう風に中国との距離が近づくことによって、今の台湾の方の日本企業に対するイメージや、日本との提携関係に対する考え方、パートナーシップのあり方に変化はないんでしょうか。気持ちとかマインド、雰囲気的なものも含めて、変化があれば教えていただければと思います。

日本との提携関係そのものも、それに対する考え方も、基本的にはあまり変わってないと私は思います。ただ、今まで日本との提携というのは、日本の企業から技術を導入して、台湾で作って世界に売る、あるいは台湾で作って台湾国内で売るという関係で成り立っていましたが、今度はそれだけではなくて、第三国でも販売をしたい、いろんな営業展開ができるようなものをやりたい、今までよりもう一つレベルの高いものをやりたいと考えるようになっています。ですから、日本との提携関係においては基本的に、今までよりももっとハイレベルなものを目指して、しかももっと平等な協力関係でやりたいということじゃないかと思います。

●私は、産学連携機構九州という会社で社長を務めている坂本と申します。私どもは福岡から来ていますので、今日のテーマの「台日関係」を、「台福関係」あるいは「台九州関係」という形で考えると、今のコラボレーションとかパートナーシップの話もより具体的になると思いました。

私が社長をしている会社は、大学発の技術を民間企業との間で活用したり、学生や教員のベンチャー創業を支援をしているのですが、もうおっしゃる通りで、日本の場合は、優秀な人材が新しい産業を生み出すような起業をしても、やっぱり資金調達の問題とか税制の問題とかあって、どうしてもなかなか育ちません。上場しようと思っても、日本のマーケットの条件が厳しくて上場できなかったり、やればやるほど大手企業の方からいじめられたりして、馬鹿をみてしまうというような状況があるのを、私はずっと見てきました。実際に私の友達の会社も、成長しようとする過程の中で上場できずに、最終的に台湾の企業に買われてしまいました。

それで、今日のお話を聞きながら、九州のベンチャーや中小企業が日本で上場することが難しいのであれば、台湾の金融関係もしくは事業会社から投資を受けて、台湾で上場してもいいんじゃないかなと思ったんです。引いてはそれが中国で鞘子になって、最終的にまた九州に戻ってくるかもしれません。九州には技術力を持った中小企業やベンチャーはいっぱいありますので、そこと台湾の企業または投資関係の方々とのコラボレーションを、もっと加速するといいのではないかなと考えたんですけれども、こういうことは可能でしょうか。また、アドバイスがありましたらお願いしたいと思います。

台湾では既に、そういう企業を優遇するような法令が出ておりまして、台湾証券取引所への上場は十分に可能です。九州のそういう企業の情報をお持ちでしたら、台湾の投資銀行関係あるいは大きな証券会社と連絡を取って、まず話をしてみてください。たとえば台湾の企業のどこかと提携をして合弁をやるとか、台湾でベンチャーの会社を作って、経営して上場するとか、そういうことは大いに可能でございます。台湾でうまくやって、それからアジア、あるいは大陸に進んでいくということも、十分考えられます。ただ、日本サイドがどういう技術を持っているか、台湾サイドはわからないので、そうした情報のやり取りが必要不可欠ですね。だから台湾でベンチャーをやってるいろいろな企業、投資銀行なんかもそうなんですけど、状況がある程度わかっているところ、話が通りやすいところと話をしてやったほうが、よろしいんじゃないかと思うわけです。非常に可能性はあります。

●是永です。今日は日本人にとって非常に大事なお話を、ありがとうございます。日本では、機会の平等と結果の平等ということをよく言うんですが、今の日本人はかなり結果の平等を優先していると感じます。今日はそれに加えて、生涯の平等という考え方を教えていただきました。非常に大事なことだなと思います。

それから、先ほど荘理事長が、台湾人は羊、日本人は狼、中国人はライオンという話をされました。同意する方は拍手をと言われましたが、私は実は、拍手しなかったんですね。なぜかと言うと、私は今の日本人は狼どころではなくて、おそらくウナギかなと思っているからです。どうしたら日本人が狼らしく、凛々しく決断ができるのかと考えてみましたが、やっぱり今の日本は、まさに百年に一度の人材不足ではないかと思えてなりません。これは政界、経済界、大学等々いろんなところがそうだという気がするんですが、台湾の方から見て、今の日本がどういう風に変われば、台湾のようにきちんとハングリーで、なおかつグローバルでボーダーレスな世界で渡り合っていけるようになるでしょうか。日本人がそういう精神を身につけるためにどうすればいいのか、アドバイスがございましたら、お願いを申し上げます。

まず最初に、日本は狼ではないと言われましたけれども、私は狼でないとは思いません。日本は狼の良い面を持っているということです。日本は明治維新の前から、アジアの中で一番最初に世界の潮流を察知して、開国をやったわけですが、そういうところは狼の危機感知や非常に機敏な行動になぞらえられると思います。敗戦、全部一からやり直した時にも、機敏にそういうことをやってのけたんですね。その日本のやり方は、その後とてもうまく行って、私個人の見方なんですけど、あの『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という、ヴォーゲルさんの本が出たころ、一番ピークだったと思うんです。結局、産業のライフサイクルが15年ぐらいで、製品のライフサイクルが7～8年の間は、日本の今の組織、今のメンタリティが全部うまく働いていた。ところが、産業のライフサイクルが5年になったり4年になったり、製品のライフサイクルが半年、1年になった場合には、日本の組織とメンタリティはついていけない。私は何度もヴォーゲルさんの本を読み返して、そう思った

んですよ。

ですから、私が客観的に見るところでは、明治時代から昭和50年代半ばまでの、産業のライフサイクルが15～20年、製品のライフサイクルが7～8年の時には、日本のそのやり方とメンタリティ、これがぴしゃりなんですよ。私は、それがヴォーゲルが書いた『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の要諦だと思うんです。けれども、そこから世界が変わり、国家としての政治のあり方と、国際社会のあり方というのが、非常に大きく変わってしまった。しかも速いテンポで変わり始め、ますますスピードアップしている。たとえばITの発達によって、グローバリズムが非常に速く進んでいるわけです。そうなると、今までのメンタリティから脱することができなければ、だんだん荷が重くなる。私個人は今の日本の状況をそういう風に見てるわけです。間違っているかもしれませんが、そういうことだと思います。

これを脱するためには、まず、アメリカがなぜ今、まだ大きな力を蓄えているか考えてみるといいと思います。アメリカは年に300万の移民を受け入れていて、しかもその中でgood brains、高い頭脳を持った人が移民しやすいシステムと、そういう人たちがアメリカ社会に根付いていける環境を作り上げているんですね。だから、今でも全世界の優秀な頭脳が、全部アメリカに集まってくるんです。ですから、今の話を引き取って大胆に言わせてもらえば、日本はbig brains、非常にいい頭脳を持っている移民を年間50万人受け入れると同時に、そういう人たちが日本の社会で生きていけるようなスキームを作らないといけない。非常に大胆な、かなり突飛な発想でございますけど、おそらくそうでもしなければ、なかなか難しいんじゃないかと、私は思います。

それから、台湾がなぜ日本と違うかというと、やはり台湾の社会は移民の社会だということです。まず中国大陸から来る。それからオランダ人が来て、ここに36年ぐらいいたんですかね。その後で日本の植民地になって、戦後また、大陸からいろんな人が来る。いわゆる東西冷戦時代には、アメリカの軍隊も来ていました。ですから台湾の人々には、自分たちと違う、考え方の違う人たちと一緒に生活するのは、当然だというメンタリティがあるわけです。そういう意味では台湾の社会というのは、ある程度アメリカの社会に近いんですよね。そういう社会というのは、なかなか結束は難しいけれども、その代わり産業とか社会の変化のテンポが速くても、ついていけるんですよ。だから、一利一害あるんですけど、結局、日本の社会のやり方が悪いんじゃなくて、今の世界の動きの中では、ちょっとちぐはぐになっているところがあると、そんな気がしています。しかし、日本の皆さんは非常に素晴らしいですから、そのうちにすぐ、キャッチアップできると思います。

九州経済フォーラム夕食会

夕食会挨拶

九州経済フォーラム 会長 石原 進 氏
（九州旅客鉄道株式会社 代表取締役会長）

皆様どうも大変お疲れさまでした。九州経済フォーラム創立25周年記念事業の台湾事業に100名もの皆様にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。本当に100名です。黄さんに100名と申し上げたあと、100名、本当に来ていただけるかなと不安に思いましたが、皆様にちゃんとお集まりいただきました。本当にありがとうございます。そしてご苦労さまでございます。100名の皆様方全員が、今回のこの台湾でのシンポジウムに参加されて、本当に良かった、と思えるような会になればと思います。

一日目が終わったわけでございますけれども、まずまずどころか、私自身は大変良かったんじゃないかなと思っています。ご講演していただいた講師の方々からも、そして、飛び入りで参加をいただいた郷さんからも、大変素晴らしいお話をいただきました。郷さんの空洞化の話、そしてまた国を開く話は、経験を踏まえた大局観を持った内容で、我々がまさにこれから参考にしていかなければならないという内容のお話だったと思います。本当にありがとうございました。

このフォーラムの事業を海外でやるのは初めてでございます。初めての海外事業の開催地としてこの台湾を選んだ理由は、皆様も大体おわかりになったと思います。台湾は中国との関係に大変苦労している。苦労しながらもこの躍動する経済を見事に作っている。そして大の日本の友好国であるということです。そういったことで、台湾を真っ先に選ばせていただいたわけですが、まだあと一日半、残っておりますけれども、大成功は間違いないのかなと、私は思っております。

本日のこうした会を催すことができましたのも、今日はまだ東京にいらして、今夜お帰りになるご予定の黄茂雄先生のおかげです。明日はまた、たくさんの方にご講演をいただきます。江丙坤さん、それから自転車の世界最大のメーカーであるジャイアントグループの劉さん、そして黄茂雄さんにもご講演もいただきます。さらに蕭万長副総統への訪問もございますし、南港地区の視察も行います。大変盛りだくさんです。

本日は、当初我々100名の内輪の会ということでございましたが、台湾の皆様方30名ほどもこの会に参加いただいております。明日はまた、盛大な晩餐会もございますので、ぜひ皆様、台湾の方々としっかり話をしていただいて、この台湾の皆様方の考え方、取り組み、そういったものを学び、交流を深めて、日本並びに九州経済の活性化のお役に立てていただきたいと思います。

以上で私のご挨拶といたします。本日は、大変ありがとうございました。

乾杯

一般財団法人九州ニュービジネス協議会　理事
井上　良弘 氏（井上喜株式会社　顧問）

井上でございます。僭越ですが、ご指名でございますので、乾杯の音頭を取らせていただきます。

皆さん、本日は長時間お疲れ様でした。もう話すことは、私からはございません。いろんな方々のお話で、十分にいろいろと肌に感じ、考えられてこられたと思います。ぜひこれからのご歓談の中で、またそれを深めていただければ、本当にありがたいと思います。

世界でも最大の日本の理解者である台湾で、台湾の方々に直接お会いしてお話を聞き、そして感じるということが、まずは一番大事なことではないかと思います。それでは乾杯に移りますが、台湾の方々の友情と、それからまたこの交流を、これからも一緒にご発展させていただくことを祈念しまして、乾杯をさせていただきたいと思います。

それでは、乾杯！

どうもありがとうございました。

特別懇談会

開会挨拶

中華民國工商協進會 常務理事　林 省三 氏（長榮集團 首席副総裁）

石原会長、高宮副会長、九州経済フォーラム代表団の皆様、中華民國工商協進會・黄茂雄名誉理事長、海峡交流基金会・江丙坤董事長、ジャイアントグループ・劉金標董事長、ご来賓の皆様、おはようございます。

まずは私より、自己紹介をさせていただきます。弘は当地の長榮グループという企業体の首席副総裁を務めさせていただいております、林省三と申します。ただし、本日は中華民國工商協進會の常務理事として、このフォーラムに参加させていただいております。

本日のフォーラムは、工商協進会の名誉理事長であります黄茂雄先生がご主催の予定でありましたが、黄先生は昨夜、旅行から帰ってきたばかりで、まだ取り込んでいるようですから、私が代表しまして皆様をお迎えし、挨拶の言葉を述べさせていただきます。

なお、本日のフォーラムには、財団法人海峡交流基金会の江丙坤董事長、ジャイアントグループの劉金標董事長に講演をいただくほか、日台双方の視聴を深めるために、台湾の商業界の方々にもご出席いただいております。

さて、1週間ほど前のことですが、9月22日に、日台間に投資協定が結ばれました。これは1972年に両国が断交して以来、最も大きなイベントで、双方の経済投資関係に新たなマイルストーンとなりました。台湾にとって日本は、二番目に大きい貿易パートナーであり、資本と技術の大事な提供先でもあります。統計データによりますと、2009年の日台間の貿易金額は約700億米ドルでした。過去50年間で、日本からの投資金額は165

億米ドルに達し、そして台湾から日本への投資は16億米ドルです。この投資協定が締結されることで、双方の関係促進に大きなプラス要因になるのは言うまでもありません。

中国とのECFA……、ECFAを何と翻訳していいかわかりませんけれども、両岸の経済合作の骨組み協定のようなものです。ECFAの締結に続いて、日台間の投資協定も結ばれ、両国の企業同士の提携に大きく寄与するだけでなく、今後、台湾がほかの国とETA、すなわち自由貿易協定を締結することにもプラスに働くと、私は信じております。台湾と日本に関係が深く、企業文化も似ており、しかも長年の協力関係の基盤がございます。日本にとって技術の輸出や海外市場の開拓における最高のパートナーは、台湾以外にございません。

このたびは、九州経済連携機構設立25周年というめでたい時期に、アジア地域を中心とした一連の記念活動が予定され、さらに台湾を、九州の対外関係開拓の重要な対象としてお選びくださったと聞いております。このたびの代表団は、石原会長のリードの下、九州から約100名の企業の方々が、九州と台湾の交流促進のために台湾を訪れておられます。皆様に台湾の経済事情や日台間企業提携のビジョンについてより深く理解していただくため、本日はお忙しい中、海峡交流基金会の江董事長にお越しいただき、「ECFA後の日台中経済関係」というテーマでご講演をいただくことになっております。また、台湾が世界に誇る自転車のリーディングブランドであるジャイアントグループの劉金標董事長をお招きし、企業の国際化について、その知見を皆様と共有化いたしたいと存じます。

最後に、工商協進會を代表し、石原会長をはじめ代表団の皆様を、改めて歓迎し、大会が成功裏に終わること、皆様のご健勝・ご発展を祈念して、私のご挨拶とさせていただきます。

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 髙宮 俊諦 氏
（株式会社タカミヤ 代表取締役社長）

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました髙宮でございます。

この度、私ども九州経済フォーラムでは、創立25周年を迎え、その記念事業といたしまして、ご当地・台北にて、台湾交流シンポジウムを開催させていただきました。

開催に当たりましては、先ほどからお話に出ておりますように、中華民国工商協進会の黄茂雄名誉理事長には、何から何まで一方ならぬお世話をいただきました。本当にありがとうございます。また、この後ご講演をいただきます、財団法人海峡交流基金会の江丙坤董事長、並びにジャイアントグループの劉董事長、そして工商協進会や工商会など、多くの関係者の方々に、多大なご尽力、ご協力をいただきました。改めまして心より感謝を申し上げます。

また、ご当地では、建国100周年という記念すべき日を来月10日に控えられた、大変ご多用な中にもかかわらず、私ども100名を越える訪問団を快く引き受けていただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

私も台湾には30回近く参っておりますが、今回ほど興味が湧く、エキサイティングな訪問は初めての経験でございます。それは、今回ご講演いただく方々が、現在の台湾の中で最もグローバルにご活躍をされている方々ばかりということもありますし、これまで地道に培ってきた長年の日台関係が実務面でようやく花を開き、実を結ぶという、実行の段階にいよいよ入ってきたということを実感するからでございます。

昨日の交流シンポも、わずか半日足らずでございましたが、私ども訪問団にとりまして大変有意義で、興味の深いものとなりました。今の日本にとりまして、足りないところを随分ご指摘いただきましたし、日台の連携が一歩一歩深まっていくことを実感しております。先般の東北大震災の時にも、経済界のトップの方々が先頭に立たれて、どこの国よりも早く多額の義援金を、そしてさまざまなご支援をいただきました。本当にありがたいなと思っております。今、日台の関係は、この震災後、かつてないほど良好なものになってきたのではないでしょうか。

昨年の対中のECFA締結に続きまして、先週には日台間で投資協定が締結されましたが、これらの経済関係におきましても、今後、台湾を軸として、中国、日本、アジアの連携がさらに深まるものと期待しております。今回の記念シンポジウムを契機に、貴国と私ども九州の連携の絆が、さらに深まることを祈念申し上げまして、御礼のご挨拶とさせていただきます。謝謝。

記念講演 1

テーマ「ECFA後の日台中経済関係」

財団法人海峡交流基金会 董事長 江 丙坤 氏

石原会長、ただ今スピーチをされました高宮副会長、林省三常務理事、黄茂雄会長、それからご出席の皆さん、おはようございます。ただ今ご紹介に預かりました、海峡交流基金会の会長を担当しております江でございます。

海峡交流基金会と言いますと、台湾にあります日本の交流協会と全く同じ性格でございまして、中華民国政府を代表しまして、中国のカウンターパート・海峡両岸関係協会と、両岸関係に関する交渉を担当している窓口でございます。今日、九州経済フォーラム創立25周年の記念シンポジウムに講演に来られまして、非常に光栄に存じます。

今日のテーマは「ECFA後の日台中経済関係」でございます。実は去年の6月29日に、私が中国の陳雲林会長とECFA、経済協力枠組み協定というのを結びました。これがかなり、これからの台湾の経済、およびアジアにおける経済統合に大きく影響をもたらすと考えていますので、これをテーマにしまして、皆さんに簡単でございますが、講演していきたいと思っております。

少し振り返ってみますと、日本・台湾・中国というのは、歴史的、地理的、経済的にも非常に深い関係を有しています。台湾は中国が清の時代に、日清戦争によって日本の植民地になり、今度は日中戦争によりまして中華民国に返還され、その後の国共の内戦によって、1949年、中華民国政府が台湾に撤退してきました。現在、一つの中国が分裂した状態の中で、お互いに経済交流をしている現状でございます。

地理的に見ますと、非常に大きな土地と人口を有する中国と、経済的に非常に発展した国である日本、その中間に位置するのが台湾でございまして、この三つの国はおそらく、お互いに影響し合いながら経済の発展に大きく貢献しています。特に中国は、土地で言いますと日本の25倍、台湾の267倍、人口にしますと日本の11倍、台湾の58倍という大きなサイズでございます。

日台中はお互いに経済交流をしながら、それぞれに労働し、生産しまして伸張してきました。GDPから言いますと、中国は今、世界第2位で5兆8800億ドル、日本が第3位で5兆4600億ドル、台湾は土地が小さいながらも今、26位で4300億ドル

でございます。輸出は今、中国はナンバー1、日本が第4位、台湾は16位でございます。輸入につきましては第2位と第4位、17位でございますが、外貨準備高から言いますと、中国は3兆2000億ドルで1位、日本が1兆ドルで2位、台湾は4位に食い込んでいます。

この中では、日本の経済が戦後、戦前の工業基盤を基としまして素晴らしい成長を遂げていますが、成熟するに従って、徐々に経済成長率が減っております。日本はまた、台湾の経済発展に大きく貢献しておりまして、台湾も日本の後をついて徐々に経済成長を遂げ、それから成熟期に入りまして、ご覧のような状態になっております。中国は20年前から経済成長を始め、高い経済成長率を保っています。これは雁行型経済発展で、日本が先頭を切り、台湾がその後をついて、中国が追っている状態でございます。

そのため、日本の一人当たりGDPは1953年から急速に伸びまして、70年以降にずっと大きくなり、また円高も手伝いまして、今は4万ドルを超えています。台湾は大体60年代から日本の後を追って、80年代にようやっと2000ドルを超え、今が大体1万8000ドル。今年は2万ドルを予定しております。中国は80年代から、さらに10年遅れてスタートしまして、今が大体台湾の1985年ごろ、日本の1975年ごろと同じ程度の経済成長になっています。

今度は日台中の貿易を見てみます。過去に台湾は、日本から資本財、部品、原料を輸入し、台湾で加工してアメリカへ出すという三角関係が、主な貿易の形でございました。後ほど詳細に説明しますが、1987年以降、この状態が変わってきました。実は1987年に台湾の対米黒字が大きく伸びて、アメリカからの非常に強い圧力の下で、台湾ドルの切り上げがあったんです。その後、労働資本系産業が台湾で困難になったために、かなりの資本が今度は中国に行きまして、現実におきましては、台湾は日本から精密機械や原料を輸入して台湾で部品や機械を作り、それを中国に輸出しまして、中国で加工して、アメリカに出していくという四角関係になっております。このため、台湾は今、黒字が大きく減っておりまして、アメリカからの圧力はございませんが、逆に中国がアメリカから

大きく圧力を受けています。また、特に2000年以降、中国の輸出は急増し、2000年当時はアメリカ向けが521億ドルですが、2010年はその5倍以上の2800億ドル、黒字も297億ドルから2010年には1800億ドルを越えてまして、かなり経済関係が大きく変わっています。

次に、日本が台湾経済の発展に果たした役割です。やはり台湾の経済の奇跡というのは、日本の資本、技術に負うところが非常に大きいということです。特に1952年から1995年の間、台湾政府は技術提携については許可制を敷いておりましたが、この期間に日本から導入しました技術の件数は、全体の60％を占めておりまして、アメリカが第2位、ヨーロッパが第3位になっています。1996年以降は技術導入の許可制度を廃止しましたので、その後の統計はございません。しかし、先ほど申し上げたような歴史的要因、地理的要因、それから経済的要因によりまして、実は今もかなり日本の技術の導入が台湾の経済を支えているということが言えるわけです。

経済発展の過程で、外資の導入は非常に大事でございます。1950年代から台湾は外資導入制度、それから奨励制度を設けました。1952年から今年8月までの外国人投資は大体1139億ドルでございますが、件数から言いますと日本が断然多くて大体23％、金額ですと第4位になっています。やっぱり金額的にはアメリカが第1位、オランダが第2位、それから第3位のカリブ海英領はここを経由した金額でありまして、第4位が日本です。1952年から現在に至るまで、日本の資本、日本の技術が台湾経済の成長を支えるという形が続いていることを表しています。

そのため、日台の経済関係の中でにやはり貿易というのが一番大きな位置を占めています。今、日本は台湾の第2の貿易パートナーであり、台湾は日本が第4の貿易パートナーです。去年の日台間の貿易総額は、大体700億米ドルに達しています。ご承知のように台湾はかなり日本から輸入しておりますので、いわゆるインバランスの状態になっております。私も政府にいた時にはずっと日本を担当していまして、一番苦労したのが、このギャップをどう埋めるかという問題でございました。もちろんかなり努力をいたしましたが、やはり技術の格差というのもございまして、従来通り台湾は日本からの資本財と原料に大きく依存しているわけですから、こういう状態に変わりはありません。そのために今は例年大きな赤字でございますが、幸い対米、対中国輸出が伸びましたので、中国から外貨を稼いで日本に払っていける現状でございます。もちろんその他にいろんな国に対しても黒字がございます。

台湾の輸出・輸入は、台湾の海外投資が始まって以降、かなり大きく変わっていますが、これはまた後ほど説明します。輸出先として昔はアメリカが1位でございましたが、今は大体12％、日本は大体6％、ヨーロッパが10％、中国と香港が大体40・5％、ASEANが16％です。輸入はやはり日本からが中心ですが、ただそのウェイトは、25％から今は18・6％に減っておりまして、むしろ中国からの輸入が12％から16％に増えています。ASEANは大体11％、アメリカも大体10％前後で推移しているというのが現状です。

日本が台湾の経済発展に貢献しているのと同じく、台湾は中国の経済発展に大きく貢献しています。一番重要なのが対中国の投資でございますが、実はこの投資が始まったのは、先ほど説明しましたように、台湾ドルの切り上げがきっかけです。まず中国におきまして、鄧小平氏が1979年に改革開放の路線を打ち出しました。台湾では1987年に蔣経国総統が、一つは民主化推進のために戒厳令を解除し、それから新しい政党を作ることを許可しました。それと同時に彼が成し遂げた一番大きな功績は、国共内戦から40年たって、その当時に台湾に来た「老兵」の中国への親族訪問を許可したことです。

実はその同じ1987年、対米黒字が記録的成長を遂げまして、アメリカから圧力がかかり、台湾ドルが1対40から1対26へ、つまり35％も切り上げられました。それで経営が難しくなった台湾の労働資本産業は、まず中国の広東省に進出し、そこで投資を始めました。現在、中国大陸における投資は、私どもの統計ですと4万件でございますが、中国の統計ですと8万4000件ございます。金額では、私どもの統計で1077億米ドルですが、中国が出した件数でいきますと、おそらく2000億ドルを超えていると思います。

その当時、広東省に進出した台湾の企業は2万4000社で、大体、労働資本系産業が中心でしたが、その後に電子メーカーが続きました。2000年に台湾政府が中国へのノートブック型パソコン工場投資を解禁したのに伴って、香港経由で上海に行き、上海から昆山、今の蘇州に足を伸ばしまして、現在、江蘇省は台湾公司の一番多い省になっています。現在のGDPは広東省が一番大きく、江蘇省が第2位ということで、台湾の公司の経済貢献が顕著です。

その一方で、私が政府にいた時代に、やはり東南アジアを重視しないといけないということで、実は、いわゆる南進政策というのを始めました。そのため、アジアにおいても大体1万件近く、大体700億ドルの投資がございます。つまり、台湾の対外公司は、投資先の中国、東南アジアの経済に貢献すると同時に、台湾の輸出にも大きく貢献しているということです。

台湾の輸出先を金額の割合で見ますと、1989年にはアメリカが大体36%、ヨーロッパが18%、日本が14%、それから中国はわずか11%です。現在、中国は40.5%、ASEANが大体16%、アメリカが12%、ヨーロッパが10%、日本が6%です。こういう風に台湾のパートナー、それから輸出市場が大きく変わっています。

台湾にとって中国と言いますと、これは最大の貿易パートナー、最大の貿易黒字の相手国です。去年の対中国の黒字は772億ドルで、中国以外の国は全部合わせても黒字は232億ドルしかありません。また、最大のマーケットであり、2番目の輸入相手であり、最大の投資先になっております。

この台中の経済交流の中で、やはり台湾の海峡両岸関係協会（海協会）の交渉は、非常に大きな意味を持つと同時に、重要な役割を果たしております。1991年に両会が創設されまして、海基会は皆さんお馴染みの辜振甫先生が初代会長に、海協会は前の上海市長の汪道涵先生が会長になられました。そして1993年に初めて、シンガポールで両会の会合が開催され、辜先生と汪先生の間で4つの協議書が調印されました。しかし、この協議書に調印する前から、台中間には非常に大きな問題がございました。いわゆる「一つの中国」問題です。ご承知のように中国は、日本との国交も一つの中国として結びましたし、アメリカにもそういう風に要求しています。こういう場合、たとえば日本ですと、言葉のいろんな言い回しで解決していますが、辜振甫先生時代にこの問題が提起されて大分もめまして、最終的にそれをまとめたのが「92年コンセンサス」と呼ばれているものです。

この92年コンセンサスは、日本風に言いますと、「玉虫色」の解決でございます。一つの中国というのは中国の要求ですが、台湾の憲法も一つの中国なんです。台湾の憲法は一つの中華民国で、その下に台湾地区と中国大陸地区という風に二つに分けております。しかし、やはり私どもの見解も、中華民国の統治権というのは台湾に限るということで、お互いに1992年当時、了承しましたのは、「お互いに一つの中国の原則を尊重するが、その一つの中国の内容は、各自口頭で表現する」ということです。つまり、私どもが言う一つの中国とは中華民国である。向こうが言う一つの中国とは中華人民共和国である。結局、こういう玉虫色の解決で問題を棚上げしまして、1993年にシンガポールで最初の協定を結んだわけでございます。

その後、第2回目の会合は1999

年の予定でございましたが、当時の李登輝総統が、台湾と中国の関係を「特殊な国と国との関係」と言ったことで、中国側が大反発しておじゃんになりました。さらに2000年には、独立志向の強い民進党が政権を取ったものですから、両岸関係が非常に険悪になりまして、台湾は国際環境にも経済にも大きな打撃を受けました。事態が動いたのは、2008年に国民党政権になってからです。馬英九総統が主張するのは、台湾は中華民国の現状を維持し、その中で92年コンセンサスに基づいて、中国との両岸交流を進めるということです。

そこで両会の交渉を再開することになり、2008年5月26日に私が海基会の会長に就任しました。海協会の陳雲林会長も就任されましたので、その時点で私が、92年コンセンサスに基づいて両会の会合を再開したいという趣旨の手紙を書いたところ、5月29日に返事をいただきまして、6月11日に私が北京に行き、13日に二つの協定に調印してきました。この二つの協定のうち一つは、両岸を結ぶ直航チャーター便の開設についてのものです。当時はわずか週18便、両方で計36便でした。もう一つは、大陸からの観光客を解禁する内容で、当時1日3000人ということで、協定を結びました。

この交渉は1年間に2回開催し、第1回目は北京、第2回目は台北という風に、お互い交代して開いております。去年の12月に第6回目の会議がございまして、合計で15の協定に調印してきました。この中で空運の協定は、最初の38便から108便、それから270便、370便と増え、今は558便に増便しています。向こうは41の飛行場から飛行機を飛ばしておりますが、それでも上海や北京便はやはり満員でございます。もう一つ、観光客につきましては、今年の1月1日から、3000人だったのを4000人に引き上げておりまして、また個人の旅行も、今は認めています。

その他に大事なのは、この共同犯罪の防止と摘発です。この協定によりまして、台湾の法務省と向こうの公安部で、今、いわゆる年末詐欺メンバーの取り締まりが非常に実行されまして、たくさんの犯罪嫌疑者が送り返されています。また金融協力というのがありまして、現在、台湾の銀行が六つ、中国でブランチを開設し、中国から四つの代表事務所が台湾にできております。それから、船便も昔は沖縄経由でしたが、この後の船便の2回目の交渉で海運協定を結びまして、今は中国の68の港に、全部直航便で船が行けるようになっています。その他に農産品の検疫・検査、基準・計量、そして漁船乗組員、知的所有権の保護、医薬衛生協力と、これら全部に調印しましたが、一番大事なのは、先ほど申し上げた、去年の6月29日のECFAでございます。

第1回の交渉で調印した渡航の協定によりまして、去年は中国から158万人が台湾を訪れました。そのうち観光客に119万人で、渡航解禁以来の観光客を合計すると250万人となり、台湾に対して大体2154億台湾ドルの消費をもたらしています。また、観光客の増加によって、今、ホテルの建設などへの投資金額が、約1808億台湾ドルに達しております。

空運も、先ほど申し上げたように、旅客・貨物とも直航便となり、今は大分時間が短縮され、燃料コストも減っています。また海運も同じ状態で、今は時間も節約され、それからコストも安くなり、そのために台湾の新鮮な農産物がよく売れるようになっています。

両岸関係の改善は、台湾の投資環境にも大きく影響しています。中国との経済交流が始まったあと、たとえばビジネス環境リスクの評価会社であるBERI社の評価では、台湾は現在、世界第3位。スイスのIMDの国際競争力の評価でも第6位、WEFでも13位と、全部向上しています。

次はECFAの位置づけですが、ECFAというのは枠組み協定でございまして、このピラミッドの図で言いますと、頂点部分の三角形にあたりますピラミッドの一番下の部分が、今の両岸の経済関係の中で、過去に調印されましたいろんな協定です。真ん中の部分はこれから進むべき、たとえばエネルギー、サイエンス協力などでございますが、ECFAというのはこのピラミッドの一番上で、貿易協定や投資協定、経済協力などが含まれています。

日本とASEANの経済協力はEPAの形をとっておりますが、台湾の場合は、去年の1月1日から東南アジアと中国のEPAが発効されましたので、輸出が非常に厳しい競争にさらされています。そこで、早急に中国に対してECFAの枠組みの中で、い

わゆるアーリーハーベスト、つまり優先項目の関税引き下げを要求し、今年の1月1日から石油化学、紡績、機械、輸送機器、農作物の539品目に関しては、関税が引き下げられております。この539品目を一昨年の実績で計算しますと、大体138億ドル分でございます。私どもは中国に対して267品目の関税を下げておりまして、金額にしますと28億ドルでございます。今年の1月1日から、3段階に分けて、双方の関税をゼロにしていきます。

このために実は台湾は、いわゆるアーリーハーベストの中国輸出が、今年になってだいぶ伸びておりまして、たとえば工作機械ですと62%増、サンマですと8倍増、紅茶ですと50%増となっております。また、中国から台湾への輸出も大体4%増加しており、お互いにこのアーリーハーベストにおける関税引き下げの効果が見られます。これは第一段階の効果でございます。来年1月1日にはまた、関税が引き下げられます。現在は15%ですけれども、今年で5%、来年でゼロ関税になる予定でございます。

この中に実は一般のサービス品目も含まれています。たとえば日本から中国へ投資しようとしても、投資ができないサービス品目がありますね。これもいわゆるアーリーハーベストに入れましたので、今年1月1日から、中国において投資ができるようになっています。つまり、私が6月に認めたいろんなサービス産業の投資、中国が台湾に提供したサービス産業の投資、たとえば銀行、証券などが、優先品目になっているわけです。

ただし、ECFAは枠組みですから、このあとに大変厳しいものがあります。実はこの枠組み協定のあと、協議しなければならないものとして、まず、日本のEPAにあたる製品貿易というのがございます。それからサービス貿易協定、投資協定、経済協力があります。もう一つ、争議解決の協定がございますが、ここには書いておりません。

製品貿易については、残った制限、つまり関税を引き下げるということで、現在交渉に入っています。即時関税撤廃するもの、段階的に撤廃するもの、それから例外として引き下げないものの三つに分けて、これから交渉しまして、将来的に大体90%の品物の関税が撤廃される予定です。サービス貿易協定では、中国側で制限されてまったく参入できないサービス分野において、中国で台湾の資金によるサービス産業への投資をできるようにするのが課題です。投資協定は最近日本と結んだ投資協定と全く同じ問題です。経済協力は、この政府の関係を利用しまして、これから民間ベースで、いろんな協力を結んでいくということです。今後の交渉はこういう骨組みになっています。

製品貿易協定の対象ですが、台湾側は中国からの輸入8726品目に関税をかけていました。そのうちアーリーハーベストが268品目、元々ゼロ関税が2634品目ですから、これから協議すべき品目が5824品目あります。

中国側は、台湾からの輸入品7923品目に関税をかけていましたが、現在、アーリーハーベストで台湾に与えたのが533品目、元々ゼロ関税が657品目ですから、これからの協議の対象となるのが6727品目になります。一般的に中国の関税は非常に高く、工業製品では平均9.2%ですから、これらの品目中約1割を残して、あとが全部ゼロ関税になれば、台湾の輸出が相当有利になることは明らかでございます。

そこで、日本から見ました場合、本当は、中国進出は台湾経由が一番安全で早いということを、皆さんに申し上げたいと思います。まず、台湾と中国の間の物流の便利性があります。先ほどから申し上げているように、今、台

湾から41の空港にほぼ毎日飛行機が飛んでいまして、貨物便も空港が6カ所ございます。中国から台湾には空港が9カ所、貨物空港が2カ所ございます。

台湾に投資をして、それから中国へ輸出することの優位性というのもたくさんございます。一つは税金の安さです。台湾の法人税というのは今17%です。日本が40%、中国が25%、韓国22%というところですから、台湾が一番低いわけです。それから、相続贈与税が50%から10%に引き下げられましたし、アーリーハーベストもゼロ関税になっております。さらに、台湾のインフラが十分に整備されていること、非常に安い水と電力、整備された工業用地、便利な物流、ヒューマンリソース、情報通信のインフラなど、台湾の優位性はたくさんあります。それから知的財産権の保護についても、現政権の下で、ここ3年の間にかなり改善されています。

実は過去にも、日台のビジネスアライアンスが、かなり成功を収めています。まず、一つ目の成功事例ですが、これはエッチングリードフレーム、FPCエッチング加工といったことで、元々取引関係にあった台湾の順德工業と日本のフィルコンの事例です。2社がお互いに資本出資し、技術や人材を持ち寄って、台湾に德輝科学技術会社を設立しました。今、非常に成功しております。いわゆる合弁の形でございます。

次は技術協力での成功事例です。これは日本の永和化成と三和化工が、台湾の啓盟工業と技術提携をしまして、そのあと今度は中国の石家荘というところで投資を始めております。

もう一つは共同出資という形です。これは日本の信越化学と、信越化学が出資する台湾の会社がいろんな投資関係を結んだあと、今度はお互いに出資をして一緒に中国に会社を作り、そこで操業を始めたという事例です。そういう共同出資の形もございます。

それから、台湾企業による日本企業の買収、あるいは日本企業への出資という形もございます。これは台湾の企業が日本企業に出資することによって、人脈を駆使し、日本の日本のシワードテクノロジーという中小企業を買収した事例です。台湾の会社はシワードテクノロジーを買収したあと、そこの技術を利用して中国で投資をし、上海の近くの無錫に会社を作ってOEM生産をやっています。

こういった形で日本と台湾の会社が協力し、ECFAを利用して共同で中国に投資をすると、さらなる発展が期待できるということでございますが、過去の台湾の経済が日本の技術と資本で大きく広がったことを考えますと、私はやはり、これからの台湾経済の発展にも、日本の技術、日本の資本がどうしても必要だと思っております。日本の企業も円高で海外に出ないといけませんが、中国というところは非常に現実的ですし、危険も多く、投資するにしても賭けみたいな部分があります。そういう場合に、やはり台湾企業との協力をお考えいただきたいと思います。日本の企業は経営管理や技術、台湾企業は社会的労働と、お互いに補完しあえますし、双方にメリットがあります。ぜひ台湾に投資をしてください。

日本にもいろんな中小企業があります。後継者がいないところもあれば、日本では競争力が低下してしまったところもあるでしょう。そういう日本企業が台湾で一花咲かせる可能性は大きいと思います。台湾企業と技術提携し、台湾で事業をスタートして、それから中国に入ることもできます。日本から中国へ入った場合は9%税がかかりますが、台湾からはかかりません。場合によっては、今度は一緒に中国へ行くという形もとれます。

大体、日本人は昼間は強いですが、夜は弱い。台湾人は夜は強いということで、一緒にやれば、昼間も夜も強いということになりますから、かなり良い成果をあげると考えます。そういう意味において、この講演がこれからの日本と台湾の関係の強化につながるよう祈念しまして、私の講演を終わらせていただきます。ありがとうございます。

講演御礼

九州経済フォーラム 理事 廣崎 靖邦 氏
（財団法人九州国立博物館振興財団 専務理事）

九州経済フォーラムの理事をしております廣崎です。一言、御礼のご挨拶をさせていただきます。

江丙坤先生、本当に今日は、示唆に富むお話をいただきまして、ありがとうございました。今回、私どもが台湾でこの記念事業を催させていただきましたのは、言うまでもなく、世界規模で非常な躍進をしております中国ということを念頭に置いてのことです。台湾は今年建国100年ということですけれども、台湾はこの100年間、言ってみれば、わずか130㎞の海峡をはさんだ先の中国と、非常に厳しい環境の中で、今日のこの素晴らしい発展、経済成長を成し遂げたわけです。我々は、台湾がいかにしてその発展・成長を成し遂げたかを肌で感じたいと考えて、ここにやって参りました。

この発展の原動力というものがどこにあるかという、本当に知りたかったことについては、江先生から非常に詳しいデータを示していただきました。また、通信と通商と通行という両岸にとって長年の懸案だった「三通」の問題を、見事に知恵を使いながら達成された、政治家・江先生の功績というのは、どれほど大きいものか、よくわかりました。そういう知恵と交渉力、なおかつアメリカからF-16までも調達しようというこの国のしたたかで意欲的なエネルギーが、今日の台湾の経済成長につながったと私は思っております。

残念ながら先生もご存知の通り、日本は戦後、空気と水と安全はただだという非常に安易な考えでやって参りましたので、今、そのツケがいろんな形で出て来ております。今日の先生のご示唆は、これから中国との取引を目指そうとしている我々福岡の経済界も含めて、日本にとってどれだけ大きいものだったか計り知れません。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

日本にとって社会制度の異なる中国はやっかいな国ですが、その中国市場は本当に無視できません。最後に先生から示していただいた、日台中の三角関係をいかに強化するかにつきましては、台湾との関係をもっと友好的に、そして緊密に続けていきながら、今後、勉強させていただきたいと思っております。我々訪問団の中には、もっと状況を知りたい人がたくさんいると思いますので、今夜の懇親会にもぜひおいでいただき、ご教示いただければありがたいと思っております。

最後にもう一つ、付け加えさせていただきたいんですけれども、今年は辛亥革命100年ということで、孫文先生に対する台湾の皆さん方の尊敬の念が非常に高まっていると聞いております。孫文先生に関しましては、台湾の人もご存知だと思いますけれども、九州の我々の先人たちが現在の貨幣価値で2兆円をつぎ込み、孫文先生を物心両面で支えたという歴史的事実がございます。実は今、九州経済フォーラムの事業の一つとして、台湾の皆さんに九州に来ていただいて、孫文先生、それから鄭成功先生の足跡をたどり、九州を再発見していただく「孫文ツアー」というのを計画しております。このツアーにつきましては、工商協進会秘書長の張駒昌先生を通って、台湾の方々にもいろいろとご相談をしているところでございます。

どうぞこの今日の講演を機に九州に一度来ていただいて、九州人がいかにおもてなしの心を持っているか、そしていかに台湾に対して今後の期待を持っているかということを、肌で感じていただければありがたいと思っております。ツアーにご参加いただければ、また九州でお会いできると思います。お待ちしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

江先生、ありがとうございました。謝謝。

記念講演 2

テーマ「時とともに進むグローバル経営 ～ジャイアントを例にとって」

巨大集團（ジャイアントグループ） 董事長兼総裁 劉 金標 氏

私はジャイアントグループの劉金標と申します。これから私の講演に入りますが、私の日本語は付き合いの席での話ぐらいなら大丈夫ですけれども、講演で語るには、ちょっと勉強不足でありますので、通訳に頼んで申し上げたいと思います。

それでは、我が社の実例をもちまして、「時とともに進むグローバル経営」につきましてお話をさせていただきます。

台湾の自転車産業というのは、伝統産業の中でも小さいもので、経済に対する貢献度も大きくはありません。しかし我が社は、伝統の技術を基に変革を重ね、挑戦を続けてきた今は、世界的にもあまり代替できない優位性を構築しています。私たちの進め方が皆さんの参考になればと思っています。

我が社はすでに5回の革新を経ております。30年前に台湾で創立した時、良い自転車はまだ作れませんでした。当時は自転車の産業規格もなく、私たちは日本から初めてJISの仕様を導入しました。そして5年間かけて、協力メーカーとともに、こういった規格を安定化させました。今は世界のどこでも、同じような自転車、同じ部品を調達することができるようになりました。そしてOEM加工もそれで受けるようになりましたが、製品はアメリカにしか輸出できませんでした。私たちはクライアントとともに一緒に製造することを決めました。その後、残念ながら、生産委託をしてくださった取引先は、"浮気"をしてほかのところに行ってしまいました。しかし、これはOEM加工の宿命と言わざるを得ません。十数年間の長い受注関係はあったものの、やはり別れてしまう結果になりました。

OEMの委託先がいなくなったので、私たちは否応なく方針の転換を迫られました。つまり2回目の革新です。会社を持続させるためには、やはり自社ブランドを立ち上げなければなりませんでした。しかし、国際市場に打って出るには人材が必要で、これはもう険しい道のりでした。台湾は十分な人材を揃えていません。販売にしても流通にしても、これはすべて人材が必要でした。でも、何とかして、やはり世界各地に販売店のネットと販売グルー

プを確保いたしました。そこで初めて、グローバル経営を始めたわけです。

現在、世界各国に1万以上の販売代理店がございます。そして我が社の直営店は2割以上を占めています。もちろんその中には先進国も、そして中国もあります。これは東京のジャイアントのショップです。これはイギリスのショップです。こちらはオーストラリアのショップです。これはボストンのお店です。この時点では、まだ中国を視野に入れていませんでした。

その後、1978年になって、中国が改革開放を実施しました。そこで初めて、私は中国をグローバル経営の視野に入れました。しかし、改革開放と言われてはいても、後戻りするのではないかという心配もありました。中国が後戻りするかどうかを知るために、私はさまざまなシンポジウムに参加し、勉強しました。中国が後戻りするのであれば、我々の投資はだめになってしまうからです。シンポジウムでは、中国の国民も改革開放の恵みを享受した以上は、生活レベルも向上するので、やはり後戻りはできないと学びました。そこで中国への投資を決定し、グローバル経営の幅を拡大しました。

しかし、そこに新たな問題が発生しました。つまり、中国の改革開放によって、多くの協力メーカーや競合他社が、賃金が安く、生産コストも安い中国に行ってしまったのです。台湾の自転車産業は空洞化が激しくなり、ほとんどゼロに近いところまで行きました。しかし、リーディングブランドでありますジャイアントは、やはり台湾を守らなければならないという使命感から、Aチームを編成しました。Aチームというのは、競合社も含め21社から編成されました。このAチームの設立の趣旨というのは、互いに競合関係はあるものの、その対立を棚上げにして、とりあえず台湾の自転車産業を守ろうということでございます。そういうことで、我々の城であります台湾を守り、そして台湾の自転車産業のネットワークの高度化を進めました。

でも、このAチームには、最初に認めなければならないことが一つありました。つまり、負けを認めるということです。中国とはコストの面では、どうせ太刀打ちはできません。そこで、その経営利益の全く出ないような自転車は完全にあきらめて、これを捨てます。その分、手が空きましたので、これから先のことに力が注ぐことができるようになります。こういった精神の下、6年間の努力によって、自転車の輸出単価は、6年前の110米ドルから倍増して、222米ドルになりました。

こうして、他の産業ではできなかった競合社の間での連携を、私たち台湾の自転車業界は実現することができました。その成功の成果は、ほかの国では製品の単価はどんどん安くなっていくのに対し、我々の自転車の単価は倍増したことに表れています。そして、その成功の背景には、トヨタ様のご協力があります。トヨタ様は、TPSの生産体制を導入してくださいました。でも、台湾の自転車に乗る人口を考えますと、本当はこんなことをしていていいのかと心配でした。台湾にはオートバイに乗る人はたくさんいるんですけれども、自転車に乗る人は少ないんです。そこで、産業の基盤をしっかりとしたものにしていくために、私自ら自転車新文化基金会を立ち上げました。この基金会の意図は、まず、台湾をサイクリングアイランドとして構築していきます。そして、目の肥えた消費者を育てていきます。こうした目先の利いた消費者が増えていけば、私たちの製品もどんどん高度化していきます。つまり、台湾の国内市場を、我が社の研究開発の道場にしていくわけです。私たちはそのミッションとパッションをもちまして、自転車の伝道師として仕事をしてきました。

4年前、私は73歳でしたけれども、自転車新文化基金会の創立者として、またジャイアントグループの代表者として、自転車に乗って台湾を一周することにしました。しかし、何と言っても73歳ですので、やはり体力が続くか、安全なのかと、いろいろ心配はありました。私の周りの者は、誰もが反対しました。でも私は、どうしてもこのチャレンジを成功させたかったのです。最初はやはり自信がなかったので、メディアには一切、知らせませんでしたが、私は、絶対にこのチャレンジを成し遂げ、新しい自転車の時代のイメージを作り出さなければならないと考えていたのです。

台湾一周に出発してからすぐ、すでにその情報が漏れていたらしく、聯合報という台湾の大きい新聞が取材に来ました。そのあと、電波メディアも興味を覚えて取材に来ました。こうした

活字メディア、電波メディアの取材が、意外と宣伝をしてくださったので、多くの関心を呼び集めることができました。その報道を見てた若い人たちの多くは、あの73歳のおじいさんができるぐらいなら、自分たちもできるのではないかと思うようになったそうです。そうして台湾一周に成功した私ですけれども、メディアの皆さんが口を揃えて「次はどうされるんですか」と聞いてきました。「もう台湾は既に一周しました。もう一度同じことを繰り返すのは私の主義ではないから、とりあえずもっと難しいことにチャレンジしようと、今、考えております」と答えました。

その頃、両岸関係は既に緩和されていたので、そこで思いついたのが、北京から上海への自転車ツーリングです。ここに「京騎」と書いておりますが、こちらの「京」というのは北京で、そして「騎」というのは上海です。今思えば、もし73歳の時に台湾一周をしなかったら、75歳で北京から上海へのサイクリングはなかったでしょう。この73歳から75歳までの間の2年間で、友達がたくさん増えました。私と一緒に、自転車で北京から上海を目指そうという人たちが出てきました。お医者さん、弁護士さん、そして同業者の皆さん、合わせて28人が、一緒にその道のりを自転車で走ることになったわけです。

今、改めて振り返りますと、北京～上海間はなんと1886kmもあるんですね。北京という古都から、今最もモダンな街である上海まで、自転車で走るわけです。どの道を通るかですが、三つの省にまたがって、揚子江、黄河を渡るルートを選び、このすべての道のりを20日間で走破しようという計画を立てました。つまり1日80km走らなければなりません。これは、雨の日も風の日も、変わらず断行します。

先ほども申し上げましたが、28名のオピニオンリーダーやエリートの皆様が一緒に走るわけなんですけれども、やはり気をつけなければならないのは、中国はあくまでも中国人によって治められる国だということです。たとえば中国のどこかの町を走っていると、そこの公安、つまり警察に、「こんなに大人数が自転車に乗って、何をしてるんだ」と言われる心配がございます。ですから、念のために公式文書を中国政府に出しました。つまり、こういう旅をしますと報告をして、私たちの交通安全を守ってほしいという要請をしたわけです。実際に行ってみると、これはびっくりしました。なんと、町の道路を全部閉鎖して、我々を全部青信号で通過させてくれたんです。こういう風に、非常に大規模な警備体制で守ってくださっているのですが、極めつけは、高速道路を全部閉鎖して、車の通行を一切止めて、我々を走らせてくれたことです。

こうした自転車の旅にチャレンジして一番うれしいことは、自分が常に新しい記録を作り出していることです。そして、台湾で盛んになった自転車の文化を、中国にお伝えすることができたと思います。自転車で1000km以上走れるというのは、中国人には想像もできないことだったようですね。途中の街で、人々によく「どこからどこへ行くんですか」と聞かれましたが、「北京から上海へ向かっている」と言ったら、「嘘でしょう」とびっくりされました。中国の人にとって、自転車は歩行の代わり、または荷物を運ぶためのツールでしかなかったんです。旅の途中では、中国の自転車好きな人々も、私たちと一緒にサイクリングしていました。

私が新しい自転車文化を広めようと思ったのは、やはり自転車にも成長限界とがあるということを重視しているからです。実際、世界的にも自転車の供給というのはオーバー気味です。どんな産業でも、市場の景気が良くなることを期待して新商品を開発し、続々と市場に投入します。でも、私から見れば、それはただ市場を追いかけているだけの経営の仕方です。たとえば私がゴルフをやらなければ、どれだけ素晴らしいゴルフ用品が開発され、発売されたとしても、絶対に買いませんよね。市場の開拓には、やはり自転車のハイテク化とともに、芸術との融合の結晶であるような優れたデザインが必要です。つまり、消費者が自分も乗ってみたいと思うような魅力的な自転車を作っていかなければ、市場は広がらないということです。

自転車に乗ると、最初はどうしてもお尻も痛いし、体中が痛くなってしまうんですけれども、乗るのがうまくなってくると、乗馬みたいにスピード感も出るようになりますし、かいた汗が流れる前に風に吹かれて乾いてしまう、その爽快感もどんどん味わえるようになります。私はすでに自転車に乗

るのが病み付きになって、生活の一部になっています。会社に行くのも、そして退社するのもすべて自転車で、1日40kmも走ります。

要するに、ただ単に新商品を開発しただけで、使う人を増やすことはできないんですね。ですから、自転車の新しい文化を作り出し、これまでの自転車についての先入観を払拭して、自転車に乗ることはファッショナブルである、おしゃれであるということを、改めて認識していただこうとしているわけです。私は自転車の伝道師でありますし、その素晴らしい自転車の新生活を、これからも提唱していきます。今、台湾全国で自転車に乗らない人は85%もいるわけなんですが、この人たちすべてが私のターゲットです。

自転車に乗るメリットというのはたくさんございます。たとえば、環境に優しいし、健康にも効果的ですし、省エネもできます。また精神的にも明るくなります。自転車に乗らないのがもったいないくらいです。ですから、私は伝道師として、この85%の人たちに、そのもったいなさを伝えています。

自転車の事業の方では何をするかというとRacing to the Top、その山の頂に自転車に乗って行くことが目標です。サービスもある段階まで行きますと、その頂点に近づくにつれ、次の目標が見えてきます。もちろん目の前にある課題への挑戦をする一方で、新しい目標に向けて努力するのは非常に難しいんですけれども、しかし、やればやるほど自信がついてきます。そうやって25年間努力し続けてきたことで、このジャイアントというリーディングブランドができたわけです。

冒頭に申し上げましたけれども、最初、私どもはOEMの加工生産をしておりました。その時には、その技術を身につけるのに一生懸命でした。持続発展可能な経営には、やはり自社オリジナルブランドと販売の通路が必要ですが、ブランドだけでは、むしろ大成しません。昔、台湾で作られるということは、あまりイメージは良くなかったので、当初はつまり（MIT Made in TAIWAN）というマイナスの重みを背負って、世界市場に立ち向かったわけです。

25年前にジャイアントグループ・ヨーロッパを立ち上げたわけなんですけれども、どうして欧州だったのかと言うと、OEMの委託先がヨーロッパの国だったからです。当時はまだ十分な人材が台湾で確保できなかったため、現地の人材を活用いたしました。そしてヨーロッパではマウンテンバイクを主力商品としたのです。当時まだヨーロッパの求めている品質水準には立てずに、そのためにはIAの生産などもあえて行いました。

そして22年前に、ジャイアント・ジャパンを立ち上げたわけですが、皆さんもご承知のように、日本人の品質に対するリクエストは、非常にハードルが高いのです。たとえば商品が予定外の問題を起こした場合、ほかの国ではまだ、お金で弁償して解決することができるんですが、これは日本ではできません。そして日本の市場でも、やはりマウンテンバイクを中心に、一つ一つゆっくり、そして確実に、商品のブランドイメージを立ち上げたわけです。7年間の努力で、初めて会社の経営が黒字化しました。

その後、18年前に私たちは中国市場へ進出しました。中国では、それまでの戦略に少し調節を加えました。つまり国内向け、国外向けの両方に力を入れようと考えたのです。その当時、中国へ進出した台湾企業というのは、ほとんど中国で製造して輸出することを考えていて、中国の国内市場をあまり視野に入れていませんでした。その理由は、中国の国内市場で物を売っていくのは簡単ですが、お金を回収するのが大変だったからです。当時の中国の生活レベルはまだまだ低いもので、自転車というのは荷物を運ぶための道具でした。ですから、ジャイアントのような高品質の自転車は、もちろん値段も高いので、彼らは買えませんでした。中国人の乗っていたのは、変速ギアのないシンプルなもので、彼らは変速ギアのあるものには乗りません。ですから経営戦略を変えなければならず、販売ルートに力を入れました。でも、そのような取り組みの中でも、やはり高品質、高級品であることは変えずにいたのです。今は中国の有名ブランドの一つとして成長しました。

自転車メーカーの中でも、先進国家の高級市場と発展途上国の中での主流市場、その両方でシェアを占められるのは、ジャイアント社一社のみです。今の会社経営としては、もちろんまだOEMの委託生産もお受けしているんですけれども、自社ブランドの生

産も併せて行っています。よくジャイアントは世界一だと言われるんですが、私はそれを聞いてもまったくうれしくありません。私が目指しているのはオンリーワンです。そして今、ジャイアントグループの本部は台湾にあるのですが、しかし、世界各地の人材を活かしています。もちろん、これだけ国籍の異なる人材が揃っていれば、やはり文化の違い、価値観の違い、そしてお金の価値の違いによって、よくもめたりもします。しかし、この長い間の経営によって、我々ジャイアントならではの、ジャイアントウェイの経営方式を立ち上げたのです。

この長い間、私は自転車を生産し、そして自転車に乗ってきましたけれども、最も有意義なことは、やはり自転車に乗ることによって、自分が若返ったことであります。そして自転車に乗ることのもう一つの良さとしては、自転車に乗っていると仲間に出会えることです。そして、その仲間たちとよく話をするようになりました。これまで私は「劉董事長」と呼ばれていたんですけれども、今はあだ名で「標おじいちゃん」と呼ばれています。何よりも一番大きなメリットとしては、自転車に乗ることによって、不平不満を言わなくなりました。また、自転車に乗れば会社の宣伝にもなるわけですし、世界の環境保全にも役立っています。さらに社会に認められ、たくさんの拍手を頂戴しています。

私はもう77歳なんですけれども、すごく子供っぽいところもありまして、自転車に乗ってほめられると、その気になって、また乗りたくなります。常に子供のような挑戦をしていきます。私のこの情熱というのは、会社全体にも浸透し、そしてグループ全体の活性化につながって、会社も少しずつ変わろうとしています。

先ほど申し上げましたが、私は自転車に乗るようになって、すごく健康になりました。77歳になっても、健康診断の結果、非常に健康であることが裏付けられています。元は77歳のおじいちゃんでしたが、今は健康なサイクリストです。体が痛くなるのだけは大いに不満足ですけれども、私は自分の健康のために自転車に乗っています。物理的に言いますと、いつの日にか自転車に乗れなくなる日は来ますが、しかし、今はまだ健康を養えて、乗れなくなる日を先送りしたいと考えています。

終わります前に、一つ申し上げておきたいと思います。我が社の製品は、変速ギアは日本のシマノ社のものを使っています。こういうものは、日本と台湾の間での国際分業の良い成果だと思います。

それから、皆様は多分、この次はどこへ行かれるんですかとお聞きになりたいでしょう。最初は私は、日本の東海道をサイクリングしようと思っていたんですけど、残念ながら東北大地震がありましたので、そういうムードではなくなりました。そこで、来年の6月は北海道に行きます。また愛媛に行って、しまなみ海道を走りたいと思っています。

最後に一つ、私のほうからの提案ですが、ぜひ皆さん、自転車に乗っていただきたいと思います。そして、乗る時にはぜひ、クセになる自転車をお選びください。軽快車ですとどうしても体節が動いてしまうので、いい自転車を選んでいただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

御礼の言葉

九州経済フォーラム 伊井田 栄吉 氏
（株式会社ワールドインテック 代表取締役会長兼社長）

劉先生、ありがとうございました。

私は九州経済フォーラムのメンバーで、ワールドインテックの伊井田と申します。まずは、東日本大震災の復興の現場に、劉先生が無償でマウンテンバイク1000台を寄付していただきましたことに、感謝の意を表したいと思います。日本国民として大変ありがたい支援でございました。本当にありがとうございました。

それでは、劉先生のご講演に対しまして、御礼の言葉を述べたいと思います。私も創業した者でございまして、今日の話はメモに取りきれないぐらい、たくさん、参考になることがあったんじゃないかなと思っています。中でも国際経営ですけれども、日本の企業がバブルの周辺から最近にかけて、なかなかグローバル化されておりません。その原因は何かと言うと、一つは皆さんもおわかりだと思いますが、日本の国の経済規模の大きさです。だから、自分の国の中で事業を十分やっていけるんですね。ここが台湾や韓国との違いだと思います。それ以外に原因として何があるか、我々は悩んでおりましたが、今日劉先生が言われた五つの革新の中に、答えがあるかなと思います。一つ、そのことをご説明したいと思っております。

私たちは企業を創業していく時に、まず経済性から入っていくんですね。そして人間性、それから社会性を考えます。要するに、いくら儲ければいいかと、儲けることから入って、そして人の教育、それから社会貢献という社会性、そういう風な形で、我々は事業を考えるわけです。先生の五つの革新の中には、それがちゃんと入っております。先生は世界戦略で成功したという違いがあるわけですが、経済性から始まったというのは、まず間違いないと思います。かつ、劉先生はその次の人間性のところ、人の教育から実は、もうグローバル戦略に入っておられるんですね。これに対して我々は、人材教育とか社会性と言われているところに、グローバルという意識が入ってない気がするんです。この点が大きな違いの一つではないかと思っております。

私どもは、どういう風に事業を展開するかはもちろん、人材育成とか社会貢献の面においても、やはり地域、あるいは国内にばかり目を向け、その狭い範囲の中で自らを問うていってるんですね。そこでは世界観というのが、非常に卑屈になるのではないかなという感じがしています。また、私どもの会社というのは、経済性から始まって人間性、社会性へと行くんですけれども、どうしてもそこからまた経済性に戻ってしまう。この繰り返しをずっとやってまして、一向にそこから成長しないという状況にあります。劉先生は、世界の中での社会性というところを一つかり捉えておられて、やはり我々の目標になるんじゃないかなと思います。我々日本の中小零細企業も世界に出ていって、この3年、5年ぐらいの間に、劉先生の企業と競い合うような状況になればいいかなと思っています。

最後にジャイアントグループのますますのご発展と、劉先生がいつまでも元気で、自転車に乗っておられることを祈願いたしまして、御礼の言葉に代えさせていただきたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

視察：南港ソフトウェアパーク /TECO グループ

記念講演 3

テーマ

「東日本大地震後の日台協業の新機会」

中華民國工商協進會 栄誉会長 黄 茂雄 氏

皆さん、今日は最初のところで地元の方にご挨拶して、それから1時間前後で講演をやりたいと思います。日本のオーディエンスが多いので、日本語で話したほうが親切ではないかと思いますので、通訳の方はひとつ、我慢してください。

地元の方も、非常にご多忙のところ、よくおいでいただきました。今日は中小企業協会の理事長さんも来てるし、海南ルーツの出身の方々も来てるし、まだまだたくさんいらっしゃるようですね。地元の皆さんは多分、九州経済フォーラムの財界人の熱心さに感激して、集まってくれております。この後の懇親会の席では、私の一方的な話を聞くのではなくて、九州の皆さんがこの2日間、いろいろ見聞されたところを、地元の皆さんとそれぞれ話をしながら確認されるということです。そして遠慮なく食事をなさるのが一番大事だと思います。私も、できればフリートーキングをしたいところですが、この後、総統府訪問の時間が迫っているので、できるだけ余裕を持って、それから、今朝、江丙坤先生がおっしゃった話とは重複しないように調整しようと思っております。

では、簡単に今日の私の主題を申し上げたいと思います。今朝ほど江丙坤董事長からお聞きになった話は、オフィシャルなものだと思ってください。私は、昨日皆さんが聞いていた鄭先生に近い本音のところで、企業人、財界人としての視点からお話ししたいと思っています。

これは、昨日の羽田の飛行場で買った『東洋経済』の特集のトップページです。皆さん、帰ったら、今週号ですから、ぜひ買ってください。非常に詳しく、何ページにも渡って、台湾を中国を攻めるための一つの起点に考えているという、そういう記事でございます。

もう一つ、私が印象に残ったことがあります。先月、台湾の企画庁長官を

務めておられる女性の方と一緒に、企業誘致、投資誘致のミッションで、東京と大阪に行きました。その時にどなたか、チェックマーク、何かをチェックする時につけるレの形に似たマークを持っておられたんです。これはどういう意味かと尋ねましたら、チェックマークの短い方の一端が中国の上海と台湾を結ぶ線で、それから斜めに長いのは台湾と日本を結ぶ線なんだそうですよ。だから、日本から中国へは、まっすぐ行くのじゃない。チェックマークの形に沿って、日本～台湾～上海とこう行く。これはナイキのマークにもそっくりなんですね。ナイキのブランドは格好いいので、ナイキのマークで中国に行くと覚えれば、とても覚えやすいですね。これは皆さん、それぞれご検証されて検討されるといいことだと思います。

私がなぜ、本音のところをお話ししたいかというと、実は台湾は、確かに去年は10・88%の経済成長を遂げて、20～30年ぶりの好況を呈したわけですけれども、しかし、その前の年は5%のマイナスだったんですね。その時の政治というのは、言ってみれば上手じゃなかったわけです。今日、江さんが言っていたように、玉虫色のぼやぼやの形で、中国とあまりややこしいところ、痛いところをさわらずに、そしてお互いに利するところを求めて、一緒に手を組んでやるということを考えてやったということですね。そのおかげで、中国との関係が非常に大きくなりまして、経済的には非常にどちらとも接近しました。もちろん中国の方は、最終的には政治統合ということを考えています。そのために一連の台湾に対する奨励連携、奨励政策を会議しているわけです。

その会議で、去年の6月にECFAというのを調印しました。ECFAを調印したのは、非常に台湾と中国の関係が良くなったからんですが、台湾とほかの国との関係も、非常に明るくなってきましたね。というのは、みんなやっぱり、中国を敵に回したくないからです。中国といろいろ仕事をしたいからです。そのために台湾のことで中国との関係を損なうのは、非常につらいところだということで、台湾ともうまく付き合っていこうとしているわけです。はっきり言うと、日本経団連なんていうのは、大体その口に入りますね。中国との関係を進って、台湾のことをあんまり鮮明に出しきれないんですね。

ついこの間、台湾は今度は日本と投資協定も結びました。これは今晩、台湾の亜東協会の会長さん、彭桑次さんが来ますけれども、彼の言葉を借りると、今まで台湾と日本はずっと相思相愛の仲なんですよ。心の中では非常に国民同士、愛し合ってるんですよね。しかし、日本の場合は表立って、台湾と手を組んで街を歩いてはいけないんです。愛し合っている仲だということを見せるわけにはいかないという関係です。ところが、今度、投資協定を結んじゃうと、これに相思相愛を内外ともに見せることになる。それで非常にこれからは、本当にあらゆる面で、大幅に拡大した形での積極的なやり方ができるということになるわけです。まあこういうことだろうと思いますね。

投資協定の次は当然、貿易協定です。投資協定については、昨日、貿易担当の次官がお話ししたはずですが、これからは皆さんすべて自国民扱いになります。我々台湾の人がエンジョイできる条件を、日本の皆さんもそのまま、同等の扱いを受けられると、こういうことでございます。まず今日のお話にあったように、法人税が17%、それから金持ちの贈与税が10%、亡くなった時の遺産相続も10%という税率が、皆さんにも適用されます。これだけでも相当、台湾の金持ちさんがお金をどんどん持って台湾に戻ってきたわけです。たとえば皆さんもおそらくご存知の台北101、101階のあの高いビルですね。あそこの最大の株主は、中国でお金儲けをして台湾に帰って来て、25%の株を取得したんですね。ですからあそこのオーナーは、結局海外で稼を成し、財を成した人ですよ。だから、そういう人を今、ちゃんと台湾に引き寄せているわけです。

それから一昨日も、台湾のある土地が、記録的な値段で入札されて売れました。その土地に今度また大きなビルを建てるそうですが、これも中国から帰って来た企業が手を出して獲得しているわけです。連中の考えだと、大抵の不動産は、上海とか北京に比べたら、全然まだ割安だそうです。台湾と中国がだんだん接近していくと、おそらく台北は第二の上海、第三の上海ぐらいの位置づけにはなっていくだろうということも、彼らは言っております。特に中国のお金持ちさん、台湾系じゃな

くて中国系の人たちは、台湾に財産を一旦置くほうが、本当に自分の財産になると考えています。中国に財産を置いた場合は、必ずしも主はいないという話になる恐れがあるらしいんです。これは、私的に、お互いに個人的に話し合うと、そういう風な感じがわかりますね。そういう意味でも彼らは、台湾みたいなところへ自分の財産を一応移すということは、大変得策だと思っているわけです。

台湾は土地や不動産がまだ安い。それから財産を台湾に移すということで、完全に安心感が持てる。台湾はやはり相当の法治国家で、私的財産というのは大変よく保護されていますから、安心感がある。その上、行き来も短時間で簡単にできる。中国からはよく訪問団が来ますけれども、私たちが接待しても、中国の人は大体8時には切り上げたいと言うんですね。8時に切り上げて、みんなホテルに戻って、8時半か9時から、テレビの前にかじりついているんです。何を一生懸命見てるかと言うと、政府の批判をする番組です。台湾には5局ぐらい、政策についてもいろんなことについても、全部政府の批判をする専門のチャンネルがあるんですよ。我々の言葉で言えば、政論プログラム、政治を論議する番組ということになりますが、そういう番組では、野党も与党も、いろんな中間党も全部呼んで、各3名ずつで7～8人、あるいは9名ぐらいで政治討論するわけです。その時にはもうとにかく、総統であろうが副総統であろうが、相当叩きますね。叩くだけ叩く。台湾でもし政治家が交通事故なんていったら、1週間ぐらいは叩かれるわけですね。中国の連中はああいう番組を見て、きっと胸がすーっとするんだね。こんな風にお上を罵倒していいのかなあ、これは台湾しかできないことだなあと思うんですよ。台湾では、そうやって胸の内のフラストレーションを晴らすことが可能なんですね。

一方、我々が向こうに対してどういう考えを持っているかというと、かつて我々は、日本と同じように、中国の低賃金を利用して、低価格の土地とか工場、そういうものを確保して、中国で生産して海外に輸出するということをやっていました。この図式が大体、過去15～20年続いたんですけれども、ここ2、3年で、中国はやっぱり市場として見ないともうダメだという風に、急激に変わってきたんです。というのは、中国が世界に占める経済の規模がだんだん大きくなるにつれて、中国自体の輸出も、いろんなところから非常に迷惑だという風に警戒されるようになった。だから、中国は自国のマーケットを作り上げなきゃいけない。マーケット・ビルディングが始まってきている。国民の民度も高くなってる。その中国市場にある程度食い込んでいないと、世界市場でシェアを占めるには非常に不利で、なかなか成功しないということになりますね。これは絶対、中国の中に入って行かないといけないということで、今、我々の企業も一生懸命、中国の国内市場を取ろうと言って、みんな競い合っております。中国に進出した台湾企業も、輸出志向じゃなくて内需志向ということになっています。

中国自体の内需志向は、この2年間の間に、中国の政策から始まったんですけど、もう一つの要因は賃金上昇です。中国では2年間で6割ぐらいの賃金上昇を見ているんです。中国で6割上がったら、相当なものですよね。元々賃金が低かったせいもあるけど、6割はすごいです。毎年も賃上げになったら、労働に支払うコストが大変多くなって、輸出が非常に難しくなる。それから円高にもなってきている。だから当然、どうしても内需というものを考えるわけですね。その上、一般の大衆は、給料が6割上がるから、インフレーションが6～7%であっても、別にそんなに苦しいとは思わないですね。まあ給料が1割ぐらい上がったという感覚じゃないでしょうか。しかし収入としては6割以上も上がっていますから、これをみんな見逃すわけがないですね。ですから、台中間の協議はどんどん進んでいるんです。

今までにたとえば世界の名ブランド、ルイ・ヴィトンだとかも、中国市場で店を展開しています。まあ最初は、上海、それから北京など一級都市では非常に売れるわけですね。ところが最近は、二級都市も三級都市もどんどん購買力がついてきて、そこに店を皆さん多く出すようにしている。そしてみんな成績がいいんです。最近聞いた話だと、重慶だとか成都の成績が、沿岸部よりいいという話もある。そういうことで、日本の皆さんは列車に乗り遅れると大変もったいないということですね。

それでもう一つ本音で言いますと、最近、台湾の政治が安定したわけですね。去年のECFA以来ですが。だから投資協定も間もなくシンガポールとも結ぶし、いろんなところとやりますから、この点は非常に皆さんにとって特典なんです。後ほど皆さん、総統府へ行きますけど、向こうに行っても政府上層部は手放しで喜んでいる明るい顔をしてないと思います。緊張してるんです。この政権は通常選挙で非常な接戦をしてますから、やっぱり緊張感に満ちている。最終的には勝つだろうと言われていますが、選挙の競争はかなり厳しいんですね。その中で、野党の民進党が言ってることは、なかなか国民党の痛いところを突いているわけです。今朝の江丙坤さんの話にあった"一つの中国"というコンセンサス。これは1992年に章振甫さんという我々の大先輩が、最初の橋を渡した時に、やっぱり一つの中国で行きましょうということになったんですね。その代わり、それは中華人民共和国にするのか中華民国の方にするのかというのは、これはお互いに口頭で言ってればよろしいだろうと、こういうようなコンセンサスです。これを基に、とりあえず中国の国民党と中国の共産党が仲良く手を結び、双方の政府に押し込んで、お互いに利益を得ようとして、両国間の交流や経済交流というのを進めてきたわけです。

ところが、台湾の現政権がこれを特権だとして打ち出そうとしたら、野党がちょっと待ってくださいよと言ってきたんですね。あなたたちが言ってるコンセンサスは、あくまでも党と党がやったことであって、ちゃんとした国会の手続きをとってる台湾人民のコンセンサスではないはずだと。であるならば、そのプロセスをちゃんと経て、みんなに判断させなきゃいけない。そういうことを最近、野党・民進党の蔡英文さんが言い出したんです。彼女もロンドンスクールを出たなかなかの才女で、ハーバードで研究したこともあるんですが、彼女はそれを台湾コンセンサスと称して打ち出してきました。92コンセンサスじゃなくて、台湾コンセンサスはどこに行ったんだ。これをちゃんと確認した上で、中国といろいろやるならよろしい。それができてないということは、これは聞コンセンサスだということになってしまうという主張ですね。後ほど馬総統に会った時、聞いてみてもいいと思いますけど、非常にその辺が、なかなかのところだということでございます。

それから、じゃあ台湾の将来について、台湾の人はどういう風に考えているかということです。私は、台湾の将来については、割と楽観視しております。まず中国が台湾を攻めるということは、ここまで来たらあまりないだろうと思います。というのは、台湾と中国の経済がもう完全に融合していますから、敵に回したら不利だということが明白なんですね。それから国際社会においても、中国は、たとえば債権にしてもいろんな面で、もう役割をある程度満たしていますから、今後もあまり極端な道に走らなければ、台湾に武力行使はしないだろうということです。ところがプレッシャーとしては、やはり時々、たとえば日本人とかアメリカにプレッシャーをかける。それで今回、アメリカが台湾に武器を売るということに決まったんですね。実際は、あの程度の武器の売買では、台湾を完全に守れるということにはなりません。しかし、象徴的に台湾に武器を供与、売るということは可能であると、アメリカのインテンションがあるとい

うことを見せるのに、それは大変価値があるわけですね。

ですから、中国は我々に抗議してきました。抗議されても、我々は、向こうの痛いところを突くことができます。台湾は「そりゃあ私たちは、武器を買いたいとは思ってますよ。でも、そちらも我々が買わなくても済むような、そういう環境とか状況にしてくださいよ。ミサイルを108基も台湾に向けて、そしてお前たちは防衛を考えたり、武器を買う必要はないと言うのはおかしいじゃないですか。一緒に乾杯しましょうと言いながら、ミサイルの照準を台湾に合わせているのはおかしいでしょう。こういうことがないように、どんどん撤廃してくださいよ」と言えばいいんですね。これに対して、今、中国が何を言ってるかというと、「これは平和協定ですか」ということです。台湾では、次の国民党政権が来年からスタートするんですけれども、もし総統が再選されれば、平和協定を結ぶという道へ行くんじゃないかと言われています。私は平和協定を結ぶのは、そんなに間違いではないと思います。しかし、内容が問題になってきますね。やっぱり一つの中国に統一するとか、決定までの時間を決めるとか、そういうことになったら、台湾の中でコンセンサスを得るのはなかなか難しくなるという、そういう見方が出ているんですね。

以上、皆さんに、台湾と中国の関係の大体の背景として理解してもらいまして、次は、まあ皆さんから見れば、私たちと向こうは上手に付き合っているなという実態を申し上げたいと思います。

中国は、GDPでも盛り返してるんですね。日本は、中国はだんだん賃金高、コスト高になっているので、GDPは高成長しないだろうという見方ですが、私たちの見たところ、昔みたいに2桁代の成長を持続することはないにしても、7～8%以上の、世界水準であれば高い経済成長を続けるのではないかと思うんです。それには、これからお話しするような背景があります。中国には、まずミネラル、天然資源がたくさんある。それから土地がまだたくさんあるんです。この間、江丙坤さんと一緒に内モンゴルへ行って来ました。内モンゴルは外モンゴルと違って、中国の領域です。外モンゴルはモンゴル国という別の国ですけど、内モンゴルは中国のものなんです。そこに行きましたら、もう高速道路は完備してるし、鉄道は今、どんどん引いているところで、間もなく通じるようになるんですね。

少し街から出ると、大草原のところを掘って、そこから黒光りする石炭が露天掘りで採掘されているんです。その石炭を運ぶために、トラックが次々とやって来て、大体2000台ぐらいずーっと、高速道路の一番端の車線を占めてるんですよ。トラックをあんなに数珠つなぎして、いちいち乗っけてやってる。昨日、小松製作所の会長の坂根さんにお会いしたので、つい、あんなのは何とかならないのか、コンベアでつないで運んだ方が効率的じゃないかと聞いてしまいました。わかりませんけど、多分、最初はそんなに採れるとは思わなかったけれども、よく採れるし、またよく売れるんでしょうね。

1ヶ月前、ちょうど私が内モンゴルから帰って来て間もなく、三井物産の会長の舘田（うつだ）さんに会いました。彼は3年前に内モンゴルに行って、帰ってきて間もなく、3ヶ月以内にオルドスというところに支店を出したんです。オルドスというところは、今、多分1500基ぐらいクレーンがあって、ビルがだーっと建っています。これはちょうど私が7～8年前にドバイに行った時の、あの光景なんですね。とにかくビルラッシュで、もちろん道路は整備されて、きれいな長い道路ができています。北京に行ったら、長安路といって、天安門の前のメインストリートがあるでしょう。あんな立派なやつが何本もあるんですよ。要するに、内モンゴルにはミネラルがたくさんあるんですね。石炭、鉄鉱石、それから最もありがたいのは稀土、レアアース、レアメタルです。こういうのが包頭（パオトウ）というところの近くにあるんですよ。包頭の街も非常にきれいですね。井上さんは前に行ったことがあると言ってますけど、多分、あなたが行った時と今では、段違いに変わっていると思います。

それから中国には人口がある。人材を含めての人口がありますね。中国の政治体制というのは、人材を輩出するんですね。先ほどちょっと脱落してましたけど、胡錦濤さんの次、来年は習近平さんだということになっています。習近平さんのあとはどうなるかというと、これが中国のおもしろい仕組

みで、今の胡錦濤さんは自分の次は決められないんですね。選定できるのは次の次なんですよ。ですから、習近平さんの次は胡錦濤さんが決める。で、今の胡錦濤さんは江沢民が決めたんじゃなくて、鄧小平の時から決めている。それで江沢民さんが習近平さんを決めたんだと、そういう風に専ら言われてるんですね。その代わり、今の胡錦濤さんは政治局のいろんなメンバー、特に常任委員には、大体自分の側近を並べるでしょうね。そして、その次をこの人たちがやるというようなことになる。そういうことで、ひとつの仕組みがシステマティックにできているわけです。

それから優秀な役人は必ず、有力な部署に集められます。まず組織部というのがありまして、組織部は、省の知事だとか市の市長さん、それから市には大体7～8人の副市長がいますけれども、副市長の中の3人ぐらいを選んでいるんです。たとえば更迭されたとか、市長が退任していなくなったら、いつでも副市長の中から一人、市長に上げる。つまり後継を用意してあるわけです。これが組織部の仕事なんですね。一番大きくて革新的な組織は組織部で、それと肩を並べるのが、財産を管理する発展改革委員会。これが経済政策なんかをやる。それから国有資産委員会ですかね。この三つの組織が、地方であろうが中央であろうが、ほとんどのいろんなポリシー、それから監督を司っているわけですね。ですから、なかなか民主的ではないんですけれども、一説によれば、シンガポール並みに柔軟な政府にはなり得るわけです。シンガポールも民主的じゃないですからね。だけど、いい政治、いい行政をすれば、一般の国民も納得する。間違は汚職とか、ミスジャッジによってミスポリシーを出すことで、そうなるとみんなから顰蹙を買うというようなことになるんです。今のところは何となくうまくいっているし、大衆もよくわかってきているから、不満はもちろんありますけど、みんなも何となく安住しているんですね。

そういうところに、先ほど申し上げたような市場力とか消費力がだんだん上がってくると、外国からの影響も出てくるから、ほとんど同時進行ですね。日本の場合、昔は、高い良い物はちょっと中国には早過ぎるから、とりあえず日本におけるポピュラーなものとか、ちょっとグレードの低いものを出しておこうとしてましたよね。ところがこれはとんでもない勘違いで、高級品持っていく方がいいんです。高級品はやっぱり、日本の比じゃないぐらい、ものすごく交渉の機会があるんです。それで売れていくし、実際に彼らは買う力がある。だから、そういうトップクラスのものも行った方がいいですね。

それからもう一つ、日本の中小企業が犯した間違いがあります。私が金沢に行った時、市長さんとか副市長さんが、「金沢は日本が世界に誇る工芸の進んだところです。私たちの作るものは非常に精巧で立派なんですよ」と、こう言われる。「工芸といったらどんなものなんですか」と聞くと、向こうが案内してくれたのが、漆工芸品のお店でした。輪島塗りとかありますね。これ値段を見たら、1点75万円とか150万とか、そういうのがあるんですよ。僕は3000円、5000円のをいっぱい、お土産に買ったんですよ。たくさんの人にあげるお土産だと、その程度、せいぜい1万円ぐらいですよね。すると、そこの店の主が私に「黄さんは非常にお買い得品ばかりに目をつけますね」と言うんです。「これにきれいだし、私自身、これで満足している。もちろん玄人の場合は違うでしょうけど」と私が言い返したら、「あなたの買ったのは、木じゃないんです。あれはプラスチックに漆をかけているんですよ」と言うわけですね。

私の買ったものは、工芸品としては全然価値がないと思うんですけど、工芸品になると100万、200万ということになってくる。それを誇りに思うのはいいんですが、それで一つの会社、老舗を支えるような考えでいる。だから、そこに来て、私は反対したんです。

「そんなのおかしいじゃないですか。工芸か産業かと言ったら、私は両方考えないとダメになると思いますよ。木で作った工芸品は、月に何点売れますか？」と聞いたら、「いや、黄先生、年に3点、4点ぐらいです」という答えでした。「そうでしょう。年に3点、4点で、あれだけの店を、職人さんも店員さんもいる店を支えるのはちょっと無理じゃないですか」と私が言いますと、やっぱりそうでした。話を聞いてみると、金沢市も皆さんも、産業化ということを考えてやり始めていたらいいんですね。せめて1～2万円のところでたくさん出したらどうかと。それぐらいの品を求めるお客さんが多いんです。それは工芸技術のうちトップのところも、もちろん残さなければいけない。進歩のために、発展させるために技術を残すというのは大事です。しかし、それを支えるには、やっぱりマスがないとダメだと言ってるんです。

そしたら、あそこの焼き物屋さんとか漆塗りの業者が、「黄さん、中国まで連れて行ってください」と言い始めました。中国に行って、たとえば景徳鎮だとか工芸で有名なところの職人を日本に連れて来たいと言うんです。しかも「女性がいいです、美人の。女性も美人じゃなきゃいけない。美人の職工さんを10人だけちょっと集めたいんですよ」と言うわけですね。というのは、日本にはそういう職人のなり手が少ない。それに男の人は落ち着かない。女性の方が真面目にコツコツやる。だけど、技術だけ学んで景徳鎮に帰られたら困るから、日本の男の子にモーションかけさせて結婚させる。そして日本に定着させる。そうすると自分の会社も存続できる。だから美人がいいというわけです。なかなかこれも想定にはなかった話だったんですけど、まあ、工芸の領域では、そういう手は確かにあるのではないかなと思います。まあ、いろんな事情の違いがございます。

それから、中国の強みとして「対外政策・社会メカニズム」のところに、社会主義の修正、調和社会、競争の再構築と書いておりますが、この辺は中国が言っている能書きですからね。社会主義にもいろいろあるので、方向性とか程度とか修正しながらやっていくということであり、それから格差のあまり大きくならない消費社会にすること、競争を再構築することを考えているということです。中国でも非常に速いスピードで、同時進行になっております。じゃあ、ここからは端折っていきましょう。

次は台湾の立場ですね。私は、台湾はGDPが3%程度の成長でまず行くだろうと思うから、間違いなく産業はますます発展しますね。台湾は10年、20年前からやってるから、大分得してますけれども、日本の特に地方の会社、あるいは中小企業は、今からがんばっても遅くないと思います。市場がやっぱり大きいですから。もう一つはやっぱり、バックアップ体制というのがある。これは、いろんな箇所に置いておいたほうがいいです。私の会社もモーターで55年やってきたんだけれども、東南アジアの全ての国にちゃんと工場を置いている。ただし大きな工場にはしていません。一番大きいのは1カ所、マレーシアとかタイに置いて、あとは全部、最終のアセンブリだけ、組み立てだけにしています。そうするとマーケットに対して対応が早くなるということですね。

ここに「サラリーマン化・官僚化の企業」と書いておりますが、多分、鄭さんが言ってる日本の問題は、会社はサラリーマン化して、それから役員は官僚化しているということだと思います。官僚化がこういうことかと言うと、実情の意見を遅くするということですね。リスクをとらないようにする。そうすると自分の地位が安泰であると。これがオーナーシップ系の企業との違いです。でも、サラリーマン化した会社にオーナーシップが下りたら、そういう官僚化する社員が出てくるんですね。

次は、台湾に投資してくださいという話ですが、この間、東京、大阪に行った時には、これが我々の主目的でした。中央の幹事長8人が行きました。8人というか、経産省と大蔵省はかいろんなところ8単位ですね。それから

8つの地方都市、高雄市も台北市も行きました。台北市長もいましたね。それから私も企業代表150人の中の一人で行きました。帝国ホテルで企業投資説明会をやった時には、200～300人ぐらい、それから大阪の阪急ホテルでは500人ぐらい集まりました。それで、結局テーマは、日本の皆さんが台湾に来るのはいいけれど、台湾としては一緒に最終的には中国へ行きたいんだ、最終的には中国に投資に入りたいんだ、ということです。

そこで、日本の力を借りたい。やはりこれからは、日本の円の強さが有利になる。でも、これがずっと続くとは言えないですね。私も日本の銀行家に「日本の経済はあまり良くないのに、円が強いのはどういうことか」といろいろ聞いたんです。そしたら「これは相対的な問題で、今はドルが弱い。ドルがどんどん印刷されて、これはもう値打ちがない。その中で、まだ日本の円は流通性も高いし、今のところ日本の円の価値は相対的にある」と、こういうことなんですね。ただし、こういうことも言ってました。「大体、円の実力は1ドル100円ぐらいです。今、80円前後になってるのは、ちょっとオーバーなんです。だから、ヨーロッパの情勢が一段落したり、出口が見えたら、あるいはアメリカの経済回復の見込みがついたら、円は必ず下がります」。これは皆さんにご参考までに申し上げておきます。あまり時間がなかったので、詳しくは聞きませんでしたが、そういうことだそうです。それから、日本の方々や日本の商社は非常に勉強熱心ですね。特に総合商社の場合は、あちこちの情報を非常に正確につかんでおられます。

我々が日本の皆さんと一緒に中国に行った場合の、我々にとってのメリットは、一つには、やっぱり日本の国際的地位ですかね。我々はやはり国際社会ではみそっかすなんですね。台湾だけだったら、相手にしてもらえないことがある。そうするとやっぱりリスクがあるんですね。それと安全保障上も、日本と一緒に行くということは好都合です。もう一つ、やはり日本の管理システムや技術力は優れていますし、比較的台湾と相性が合うんですね。ですから我々は皆さんと提携し、手を組んでやりたいわけです。韓国の場合は人間を引き抜くというほうが手っ取り早いと言って、実際にそうやっているわけですから、その違いはあると思います。こういうことで、私たちはこれからも、ちゃんと日本と折り合いがつけば、一緒にやるということです。

反対に日本にとって、台湾と一緒にやるメリットというと、今朝、いろんな話を聞かれたと思いますけれども、既に台湾から8万3000社もいろんな会社が中国に行ってるんですね。それから台湾人も今、100万人近く中国に行っております。それが10何年、20年たつと、もっと中国に根を広げているでしょうから、やっぱり後から行く日本にとっては、あまり苦い経験をせずに済むということですね。

それから、台湾の企業は日本の中小企業、特徴のある企業を割と好きなので、大体釣り合いをとりやすいんです。最近、日本の中小企業が台湾で非常に成功している例がいくつもあるんですね。今朝、江丙坤さんもいくつか挙げたと思うけれど、私も100ぐらいのリストがあります。みんな成功しています。

次のスライドですが、東北大震災というのは、日本と台湾との関係には大きく寄与しています。変な言い方ですけどね。我々は自分たちが震災を受けたぐらいにひしひしと感じているし、義援金も強制されたり、官制のではなくて、自発的に民間が主流で出しました。ジャイアントの親父さんは、マウンテンバイクを1000台出したり、うちもたくさん出しましたよ。そういうことで、日本の東北大震災は、日本の衰退の始まりになるんじゃなくて、新生日本の踏み台になって、そこから日本が駆け上がって行くということを、我々は本当に心から願っております。私はとにかく、新しい日本が必要になってくると思います。その時に、ちょっと南に台湾という友人がいることを、これにもう友人じゃなくて親戚だと思ってください。そういうことで、時と場合によっては採算を度外視しても、みんなと一緒にお役に立てればということでございます。

次のスライドに書いている気候異変、災害、人口構造の変化、高齢化といったことは、皆さん先刻ご承知だと思いますけれども、この区域統合は、アジアもやっぱりそういう時代になってきまして、中国が一番これを捉えてるんですね。日本がまごまごしてる間に、もう中国は江西省とか雲南省から、鉄道をタイ、ミャンマーとかベトナム

とかへ、国境を越えてどんどん延ばしております。西の方でも、今、ウルムチから、どんどん中央アジアの方に延ばしています。そういうことをすべて考えて、実行してるんですよ。もうやってるんです。私も南寧といって、中国の南の端の、ベトナムの北の国境にすぐのところの街で、鉄道とか、いろんなハイウェイの起工式に呼ばれましたけど、とにかく大変な国際感覚ですね。ただ、ちょっと具合が悪いのは、今回のビジネスサミットでも、国際ルールでは一人の持ち時間は12分だと言ったところ、中国の人は30分使っちゃうんだね。だからみんな、大国ってしょうがねえなあという感じで見てました。まあ個人の問題かもしれないけれど、やはり国際ルールというものがあるということを、お互いに気をつけていかなければいけないですね。

今のところ、もし後でご希望があれば、資料を差し上げることにしまして、まあ共通の問題を考えたいですね。人口構造の変化ということでは、台湾の出生率の低さは、実は日本以上にシビアなんですね。だから、そのうちに台湾は困ってしまうんじゃないかと言ってるんですけれども、もう一つ、あまり皆さんが知らないことがあります。それは、台湾の次の世代はベトナム化してしまうんじゃないかということです。台湾も田舎へ行くと、お母さんがみんなベトナムの女性なんですよ。海外からお嫁さんを探してくる事業って、日本も結構あるらしいですね。それが台湾ではベトナムの花嫁です。でも、ある意味では、広域で見るとアジア時代だから、ベトナムの奥さんもどこも悪くはないと思いますね。その代わり日本の女性はなかなか結婚できなくなる恐れが出てきますね。いずれにしろ、非常にボーダーレスになっていくということです。

貿易の構造は、皆さんご承知のように、もうアジア時代ですから、アジア域内の貿易が、既に世界の経済の4割ぐらいを占めているわけです。だから一生懸命アジアでやれば、別にあちこちやる必要はない。アメリカもリスキーだし、ヨーロッパもリスキーだし、アジアで安全にやれる間は、やっぱりやればいいと思います。それから、ここに書いてありますように、アジアの中産階級は、1985年には6億人だったのが、もう19億人になっているんですよ。だから、大きなマーケットになっていることは間違いないですね。

面白いことに、INGは2012年から2015年の成長率は、平均すると台湾が世界で一番高いと言っている。その根拠はよくわからないんだけど、台湾は良く見られてるんですね。でも今、台湾のICT産業に地殻変動が起きています。今まで主力だった液晶だとか半導体、パソコンといった産業が、iPhoneやiPadのせいで非常に揺らいできてるんですよ。そのため台湾の政府は、これからその代わりに、新しい20種類の新産業に力を入れていこうとしています。その20種類には、医療だとかバイオテクノロジー、それから観光とかもいろいろ入っております。石塚会長の考えてることも、もう考えてるんですね。そういうことをこれから伸ばしていこうと、今、細かいことを詰めています。もし皆さん、興味があったら、後で、どういう機構に連絡すればインフォメーションが取れるという情報も差し上げようと思っています。

次の大震災の支援は、先ほど言いましたからいいでしょう。

その次のは、アジアのGDPのグローバルのシェアですね。アジアはどんどん上がってきています。アメリカとかヨーロッパと比べたら、非常に伸びる要素があるということです。

次の図は、日本企業と台湾企業はどうやって補完し合っていくかということですね。お互いの持ち味というのはこれだけあるということで、コンプリメンタリーという考えです。

最後になりますけれども、これから日本と台湾が一緒にやっていくには、まず架け橋が必要なんですね。みんな心情的にはここでやりたいと思う。だけど相談したり、それを結びつけるのをどうするか。これについては、台湾の内閣で一応架け橋プログラムというのを考えて、窓口を作って、国務大臣を一人あてることになりました。既に発表はしてますけど、発足は来月になると思います。皆さんのご希望があれば、私がご紹介するのにやぶさかではありません。

それから、共同出資をやりたいというようなことがあれば、成功事例はたくさんあります。これは日台が一緒に中国に行った事例をまとめたんですが、これはみな大きいですよ。

また、日台で協力して進めているプロジェクトも、ソフトウェアとかいろいろありまして、これからまだまだ続

くと思います。

それで最後に、台湾の中小企業が中国に行って、この15年、20年で大きくなって、台湾の産業はともかく、世界の産業にも大きなところを占めている事例を三つ、四つ見せたいと思います。

その前に、これがいろんな機構ですね。皆さんがいろいろ相談に乗ってもらえるところです。これをゆっくり説明できると良かったんですが、時間がありません。

そしてこれが投資協定を結んだ時の新聞です。こちらは昭和電工の大橋光夫さん。この協定を結ぶちょっと前に、交流協会の会長になられました。国賓待遇ですね。次がその投資協定の中身で、投資促進、投資の保証、それから投資の自由化ということです。続いて、その投資協定によって期待できる効果を5つほど書いております。

これは、最初に見せた『週刊東洋経済』の特集の記事の一つですが、今、日台で一緒に中国で展開しているコンビニの例です。次は有名なEMS、電子電気関係に携わるフォックスコンというところです。今年の初めに、たくさん自殺者が出て問題になりましたが、でもここは非常にすごい会社です。この旺旺グループは、元々せんべい屋さんです。日本で一番大きいせんべい屋は、亀田製菓というところらしいですが、規模にこだわらず、そこより非常に小さいところへ行って提携したんですね。その提携が大変うまくいって、旺旺グループは大成長して、最近、この人は自家用飛行機を1機か2機持ってます。

これは私のところの関係のモスバーガー。ここに今、台湾でうまくいってるので、今度は中国に一緒に行こうと、こういうことになっています。ほかにも細かく見ていけば、いくらでも事例を挙げることはできます。もっともっと関心を持って、お調べになったらいいと思います。

この記事は、さっき言いましたように、蔡さんも言われている通りです。そしてこの方は、私と一緒に東京と大阪に行った我々の経済企画庁長官ですね。

結びです。この辺は何度も言われていることで、どんどんWIN-WINの関係を作っていこうということですね。日本の内閣も厳しい状況ですが、台湾も来年1月に大統領選挙を控えています。それが済んで、2月までいろんなことを準備して、3月、気候が良くなったところで、皆さん、どんどんいろんなプロジェクトを発進させてください。

それから、自由貿易協定は、2国間の取り決めから、地域間とか多国間で進めるという流れになってきていて、2015年にはアジアの域内では、関税が完全になくなると言われています。その域内ではゼロ関税になるということになっていくわけですね。だから、我々もこれに注目しなければいけません。

もう一つは通貨が非常に不安定な状態でありますので、アジアの通貨を一つのバスケットに入れてしまおうという、ECU(欧州通貨単位、エキュー)構想も考えられています。EUでユーロを導入する前に、EU域内の通貨計算の共通単位としてECUというものが使われたんですが、今考えてみれば、こっちのほうが理想的なんですね。同じユーロ域内でも、やはり弱い国が札束を印刷するのは非常に問題になってきます。ECUの方が、計算単位とし

て設定する場合において、それぞれの独立性を保てるし、安全性も高いわけです。

とにかく我々は、日本の皆さんにもアジアの皆さんにも、今のECFAプラス日台の投資協定によって、中国市場を共同で運営していこうという呼びかけをしていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いします。

途中、端折ってしまいましたが、以上でございます。

一つぐらい質問ありましたら、どうぞ。

●今回は有意義なお話をありがとうございました。ECFAについて質問が二つほどございます。私は、ECFAについては中国との経済連携の上で非常に大事であると思っております。そして日台投資協定につきましては、日本との経済連携として重要だと思う一方で、おそらくは経済上の国際理解のパワーバランスの上からも大事だろうと思っておりまして、これは台湾外交の成果であると考えております。その中で、ECFAの方はもう1年3ヶ月たっておりますけれども、どれぐらい成果が上がっているのか。そして課題があるのかどうかが、まず一点であります。

もう一点は、ECFAのサービスにつきましては、サービス分野に9分野ありますけれども、日本企業が台湾でこの制度を活用するには、三つぐらいメルクマールがあると聞いております。一つは台湾国内のサービスと全く同じものでないといけないといったものと、台湾に所得税を払っていなければいけないというのと、それと台湾に拠点を持っていないと、中国ではそういうサービスができないといったように聞いているんですけれども、こういった制度が将来、改善される、規制緩和の方向があるかどうか。いかがでございましょうか。よろしくお願いします。

ECFAのご利益はどうだということを一言申し上げると、ECFAは去年の6月に調印したんですけれども、実際に発効したのは今年の1月1日ですね。ところが去年のGDPは10.88%と上昇したわけです。ということは、この先、ECFAの恩恵があるということだけで、経済が活性化したんですね。たとえば、去年なぜ台湾は10.88%の成長を見たかというと、ホテルだけでも100軒ぐらい建ってるんですよ。つまり、中国から観光客が相当来るだろうと見込んで建ててるんです。今、観光客を見てると、まあ観光だけじゃないと思いますけど、中国人はもちろん増えてます。ただ最近は、政府機関がちょっとあまり来ないでくれと、こちらからお願いしてるんですよ。台湾国内からはどんどん来ます。日本からも、大震災で東北に行けなくなった人たちが、最近では相当来ています。昨日も私、夜遅くのJALの最終便で帰ってきましたが、満杯でした。JALは高いんですよ。サービスもあまり良くない。そのJALでも満員ですよ。これはうれしい、うれしい限りですね。

だからECFAと投資協定のことをどういう風に言うかというと、僕の言い方じゃなくて、大前先生に言わせると、ECFAはビタミンなんです。日本と台湾の人が一緒になって、ビタミン飲んで、一緒にふとんを被って、そしてアイラブユーをして、中国に行く。だから我々と同じ布団をかぶらなきゃダメなんです。日本のブランケットじゃダメなんですね。

ということで、かなり我々と一緒になるということで、台湾企業に恩恵はないよというのが向こうの狙いなんですよ。それに皆さんは便乗すればいいんです。乗っかればいいんですね。規制緩和に関しては、今晩、何人か役人も来ますので、直接聞いてください。

総統府 表敬訪問

副総統 蕭萬長 氏 訪問

交流懇談会

挨拶

交流協会台北事務所　樽井 澄夫 氏

ご紹介いただきました樽井でございます。

私ども交流協会というのは、こちらの台湾において、大使館のような仕事をしているところでございます。日々、ビザの発給とか邦人の保護というような業務を行う一方で、日台の経済交流の推進というのを、非常に重要な任務にしています。本日、九州からおいでになられた、九州経済フォーラム会長の石原進様、ほか皆様、大変お疲れさまです。また、こちらの中華民國工商協進會栄誉理事長の黄茂雄先生をはじめ、台湾からご出席の皆様、どうもありがとうございます。

私ども交流協会では、折しもつい先週、東京から会長が参りまして、こちらの政府窓口機関であります亜東関係協会との間で、「日台投資取り決め」という、投資の相互交流に関する協定に合意をしたところです。それから、こちら台湾では、ご案内の通り、昨年、大陸との間でECFAに相当するECFAという枠組みを作ったところです。

今回、九州の各県から産業界のトップの方々においでいただいていると思いますが、ぜひこうした環境、枠組みの整備を踏まえて、日台間の産業のアライアンスを、一歩でも二歩でもさらに拡大していただければと、そういったきっかけに今回の出会いがなればという風に、お祈りを申し上げます。

甚だ簡単ではございますが、本日ご出席の皆様のご健勝をお祈りして、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

挨拶

外交部亜東関係協会 会長 彭榮次 氏

皆さん、こんばんは。大変失礼申し上げました。何とか馳せ参じることができて、大変喜んでおります。

2日間にわたるこのシンポジウム、我が台湾側からのゲストの名前を見ますと、いろんな経済問題はもう皆さんには伝わっていると思われますし、私は台湾側として最後の発言者になりますので、少し違う角度からお話をしたいと思っております。

私は先週、こちらの政府の亜東関係協会の代表として、日本の政府を代表する交流協会と、日台投資協議というものを取り決めました。これは非常に大きな飛躍であり、その大変良いタイミングで、皆さんが台湾にいらっしゃったと思っております。日台間の関係というのは、ここ数年、隅々まで深く行き渡っているという感じでしたが、最近は表立って堂々と付き合うようになっておりますので、これからの一層なる提携が期待できると思います。

ちょうど来週の10月10日は、我が中華民国の建国の前触れとなった辛亥革命の100周年記念ということで、大変大きなお祝いの行事がございます。中華民国というのは、その頃は大陸を含めて非常に大きく、中国における満州一族専制統治をひっくり返したのが辛亥革命でございますが、お食事中に固い話はどうかと思うので、私はもっと範囲を狭めて、台湾がこの100年、日本とどう関わってきたかをお話ししたいと思います。

私どもの年代の台湾人は、日本との関係において、ある意味、歴史が分断されるのではないかという出来事を二、三回経験しています。最初は日本時代が終わった1945年でした。私は日本人小学校に行っていましたが、ある日突然日本人から、君はもう日本人と違うよ、明日から中国人だと言われたわけです。そういうことで私は、これで一つの歴史が終結するのか、もうこれから日本との関係は切れるのかと思いました。

それがその後、私の中では、九州との非常に深い関わりが起こります。まず、戦後に台湾から日本に引き揚げる在住邦人の中に、九州の方がすごく多く、私の小学校のクラスメートにも九州引き揚げ組が多かったんです。私は小学生だったから、これから自分の友達にどうなるかなあと心配しながら、手を振って別れたんですよ。教室で席が隣だった幼なじみの女の子も、福岡に引き揚げました。その後、その子のお父さんが亡くなったと聞いて、お互いに不幸だなあと思いました。我々も日本時代という一つの時代が終結し、新しい時代を迎えて大変苦労しましたから。

それからも、その子はどうしているのか気にしてはいましたが、20年たって音信はありませんでした。自分で風の便りを頼って聞いてみたら、九州からいらしてる人が、こういう方じゃないですかと言ってくれて、何とか見つかりました。確かにお父さんを亡くして不幸ではあったけれど、日本に帰ってNHKの合唱団に入って、今は良い旦那様を見つけて結婚してますということでした。私はそれでも会いたいなあと思いましたが、向こうは、非常に良いお相手のところへ、はっきり言うと通産局の官史のところへお嫁に行って幸せですからと言うんですね。それならいいじゃないですかと言って、私は九州に行くつもりで九州のガイド本まで買ったんです。けれども、彼女の旦那はとてもいい人ですが、ただ一つ、小さな声で言わせてもらえば、非常に嫉妬深いということで、私はついに行くことをあきらめました。今は台湾のころを思い出して、幸せであればいいなあと願っています。

その幼い時の思い出から4年後、1949年の国民党の大陸からの撤退で、蒋介石の軍隊が50万、台湾に引き揚げてきました。その時、敗戦を続けた蒋介石の台湾における軍隊を支援しようということで、日本の旧日本軍

将校を中心とする軍事顧問団が、「白団」と称して台湾にやって来るわけです。日本から総指揮をとった岡村寧次大将、その参謀長で、後に白団の団長になる富田直亮少将ほか、これがすべて九州の人ですよ。九州軍事顧問団ができたような感じです。私はその時、まだ幼かったんですが、大学に入ってから、あれっ、日本から留学生が来ていると思って名前を尋ねたら、富田と言うんですね。なぜこんな戦後の混乱の中に留学してくるんだと聞くと、親父が蒋介石の顧問団団長をやってるんだと言うわけです。非常に縁の深い話ですが、私もその時にそうしたことは初めて聞きました。

従って、さっき言った歴史の中断というものは、この時にはなかったわけですね。私の心の思いの中には、引き続き幼なじみがいたし、かつてお互いに戦った日本軍の元将校や参謀長が、顧問団として支援してくれている。しかもそれは九州の人たちだったということです。その留学生の富田さんは、素晴らしい方でした。残念ながら国際情勢は、この反攻対立というものを許さず、1967年に富田さんを中心にする白団は解散しましたが、日台間の歴史はまだ続いてるわけですね。それは歴史の大津波にも沈まなかった強い絆だったと、私はそういう風に思っています。

ところが1972年に、台湾はまた歴史を中断されるんじゃないかという、心の中の津波にさらされました。それは1972年の9月29日、日本でも忘れられない出来事だと思いますが、田中角栄が北京に飛んで、日中国交条約に調印して、明日からは台湾とは絶交だという通告をしたわけです。なんとそれが39年前の昨日です。39年前にそういうことがあったわけですね。それでもう、また日本とおさらばかと思ったんですけれど、やはり日本人と台湾人の心の絆というのは、想定外に強いんですね。その絆は、そういう政治的な窮境を乗り越えて、日本との経済連携をさらに強化していきました。

我々は、90年代に自分たちのリーダーを公正な直接選挙で選ぶという民主制度を確立しました。自分たちの力でこういう民主政治を確立した国はアジアにもなかったし、世界でも珍しいということで、我々は誇りに思っています。しかし、小さな我々1300万人対お向かいの13億という不均衡は厳として存在しています。今、中国が経済台頭し、さらに軍事力を強化する中で、我々を守る安全保障の術は何かと言うと、それは日本とアメリカと価値観を共有することです。そして、自由・民主・人権を台湾に確立した、台湾のこの民主政治というものが、我々の安全保障の要であります。ということで、我々はこの自由・民主・人権という安全保障を全面に出し、日本とは100年にわたる提携を超えた心の絆、友好と言うより兄弟愛をもって、今後もお付き合いしていきたいと強く思っております。

その心の絆は、今度の東北の大震災に対する台湾の対応を見ましても明らかです。私も台湾人の一人なんですが、これは単に一部の台湾人、または政府や経済団体という次元ではなく、老少を問わず、本当に台湾の人々すべてに共通する思いだと思います。セブンイレブンというコンビニエンスストアのチェーンがありますね。世界11カ国のセブンイレブンで、東北大震災の被災地への義援金を募集したところ、集まった義援金の額は台湾がナンバーワンなんです。これは情、亜民ですよ。家庭の主婦や若い子供です。そういうことからして、私はこれはもう日本へのハートそのもの、被災地に台湾の心を届けるものだと思います。日本語の絆という言葉は、提携という言葉よりうんと強い、ハートとハートということを意味していますね。私は今回の東北大震災を通じて、改めてこの絆という言葉の強さを感じました。

従って、台湾に最も近い位置にある九州という大きな島にも、台湾はそういう絆を感じています。そういう絆の強さということで言えば、私は九州の人たちと一生共有したっていいと思っています。そこからまた日本という国への絆が広がって、これからますます日台はかけがえのない友愛の下で結ばれ、将来は世界が、日台間を引き裂くことのできない関係であると認知するでしょう。このシンポジウムでも盛んに言われてきたように、いかに相手が強くても、我々が手を取り合い、この絆で大きなマーケットに立ち向かえば、すごい結果が生まれると信じております。

以上をもちまして、私の本日、遅ればせながら皆さんに申し上げるご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

主催者挨拶

九州経済フォーラム 会長　石原 進 氏

（九州旅客鉄道株式会社　代表取締役会長）

皆様こんばんは。石原でございます。本当にお忙しい中、台湾にお越しいただきましてありがとうございます。

まず初めに、今回の東日本大震災に際し、台湾の皆様には２００億円を超える義援金をはじめ、物心両面で様々なご支援をいただきましたことを心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。それから、今回の訪問につきまして、黄茂雄先生には大変お世話になりました。これほどいろいろ細かいところまでお心遣いいただいたことにつきまして、団員を代表しまして心から御礼を申し上げます。先ほどは本当にお忙しい蕭万長副総統にもご挨拶をさせていただきました。それから黄先生自身、昨晩、日本の野田総理と懇談の機会があったようでございますが、そちらに出られるとこの集まりで歓談ができないなということで、お帰りいただいたという話をお伺いしました。

ところで、九州経済フォーラムは創立25周年を迎えました。25年の記念事業として、今回、台湾を訪問したわけでございます。九州経済フォーラムは九州一円で活動をやってきましたが、この25年を契機に外へ出ていこうということで、どこに行くか、それだったら台湾だ、とすんなり決まりました。台湾は、中国との大変厳しい関係を乗り越え、見事な経済成長を達成されてい

ます。そして日本とも長年の友好関係を保っております。私どもも台湾が大好きです。この際、ぜひ台湾の皆様方と交流を深め、これから一緒に経済活動を進めることができればいいなということで、九州経済界の100名でこちらに参ったわけでございます。

昨日の梁國新さんのお話、そして今日の江丙坤さん、またジャイアントの劉金標さん、それから黄茂雄先生のお話、大変に勉強になりましたし、刺激になりました。若い人たちにも大変にいい意味で、自分たちの仕事に対する取り組みについての強い感銘を与えたのではないかなと思います。今日、これから懇親会を始めるわけでございますけれども、ぜひ皆様、特に若い九州の人たちは、台湾の皆様のところにお伺いして名刺交換をして、いろいろ交流をしていただきたいと思います。そして、これを契機に台湾経由でのアジア事業ということを視野に入れ、自分の仕事にも活かしていただければいいなと思っているところでございます。

昨日、今日と、大変に素晴らしい講師の方のお話をお伺いしました。それぞれ大変に参考になったのでございますが、黄茂雄先生のお話は本当に迫力があって、もっともっと時間があればおうかがいしたいところでございました。黄茂雄先生にはまた改めて、そうした機会を持つことができればと思っています。それからジャイアントの劉さんは、裸一貫で会社を興してOEM生産を始めたけれども、中国が伸びてくると仕事がなくなる。そういう中で踏ん張って、ジャイアントを世界一の会社に押し上げられた。この辺の頑張りのお話、1978年以降のお話を、これも改めてお伺いしたいなと思います。自分の仕事をさらに伸ばしていこうという30代、40代の若い諸君には、ぜひこういった話を参考に、改めて頑張る意思を固めていただきたいと思います。

最後になりましたが、台湾経済のますますのご発展、そしてまた日本と台湾、九州と台湾の交流関係の緊密化を祈念すると同時に、皆様方にもお願いして、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

乾杯

中華民國工商協進會 栄誉理事長 黄 茂雄 氏

皆さん、乾杯の用意はできましたか。これから先はリラックスして、ゆっくりやりましょう。さっきはちょっと、慌ただしかったですから。

本当に皆さん、ご苦労さまでした。どの程度の刺激になったかわかりませんけれども、少しは参考になるところもあったかと思います。これを一つの復活するきっかけに、ぜひ台湾をもう少しお介しになって、そして先ほど私が申し上げたように、手を携えて、ビタミンを飲んで、春団をかぶって、そして一緒にがんばりましょう！ 乾杯！

閉会挨拶

九州経済フォーラム 理事長 小早川 明徳 氏

皆さん、いかがでしたでしょうか。私ども福岡から参りました一行にとりましては、本当に感激の連続の"日々"どころか、本当に人と会う、話を聞く、その1時間、1時間が、本当に感慨深いものでございました。

先ほど、亜東関係協会の彭会長のお話を拝聴しながら、私どもが今日、こうして学ばせていただく背景には、私どもの先人たちの本当に真心あふれる遺産というか資産があり、それが引き継がれて、我々がここにいるんだなという実感を持ちました。私どもは今日ここで、あるいは昨日からここでお会いしたのではなく、私どもがここで会うべく、私どもの先祖が営々としてその流れを築いてきてくれたんだという確信を持ったわけでございます。この機会をお作りいただきました中華民國工商協進會の黄栄登理事長に、満腔の感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

私は、黄理事長をはじめ、昨日急遽ご登壇いただきました鄭さん、そしてご講演をいただきましたお一人お一人の方々、その愛情あふれるお言葉の中に、同胞意識以上のものを実感させていただきました。まさに先祖の血が一緒ではないかなという感じすら持つに至りました。それが今回のこの会合であります。また、ダイナミックに発展する台湾の現状、飛行機から見た時の、あの建設途中のクレーンの多さ。今、日本にその姿がないという寂しさよりも、台湾がダイナミックに発展しているその姿を拝見した時に、私どもが本日掲げております「日台の戦略的パートナーシップの構築」が、ここにおいてきっと強固なものになるという確信を持たせていただいたわけでございます。

あのスポーツ用品メーカーのナイキのマーク、これが私どもの今後の道しるべではないかと思っております。この2日間で、私は考え方を改めました。それに、この素晴らしい出会い、この感動がどこから来るかということを考えて、思い至ったことがあるからであります。黄栄登理事長がリードされます中華民國工商協進會が、まさに国家をリードする団体であるということ、台湾という国家のリーダーの集まりであるということ、そしてそのリーダーの皆さん方によって、この記念事業が開催できたということ。私どもは今回、九州を代表して、あるいは福岡を代表して、この台湾に来させていただきましたが、それを受けていただいたのは、まさに台湾という国家を代表する方々でした。大変大きなことがここで実現いたしました。私どももそれに倣い、九州の経済団体として、日本の国民の気概を育てる経済団体になっていかなければいけない。そして、国づくりに具体的に参与できる力を養う経済団体でありたいと決意したわけでございます。今後とも、黄栄登理事長をはじめこの台湾の国家の指導者の方々にご指導いただきながら、私どもも日本の政治家、本来の日本のあるべき姿に回復するように、力の限り頑張っていきたいと思っております。

九州経済フォーラムは、石原会長がリードして、そして次々と地域における課題に取り組んでいます。その視野を具体的にアジアに広げた第一歩を、この台湾に記させていただきました。今後もこの第一歩を忘れることなく、台湾を基盤として、九州が、そして日本が、アジアに向かってさまざまな経済活動を展開していくことを確認いたしまして、閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

芝山巌学堂見学

山口 秀範 氏（株式会社寺子屋モデル 代表世話役社長）

台湾は今建国100年を祝っておりますが、今から100年前、実はここは日本だったんですね。明治28年（1995）、日清戦争の勝利によって、日本は初めての海外領土として台湾を領有することになりました。講和条約が結ばれた翌月には、治安維持の軍隊に加え、警察官と一緒に教育者が6人、台北に乗り込んで来ました。それが、六氏先生と呼ばれる偉人です。

元々ここ芝山巌には古い寺子屋があったので、台湾で近代教育を始める第一号ということで、この地に学校を作ったんです。ところが、当時の台湾には、子供を学校に行かせる習慣がありませんでしたので、なかなか生徒が集まりません。先生のほうから親に月謝を払って子供を集めたという記録があります。やがて十数人の子供たちが集まって、日本語の教育が開始されます。

なぜ日本語かと言うと、日本人は黒船が来てから明治28年までの間に文明開化し、西洋の文物を全部日本語に訳して、マスターしてきたんですね。台湾を日本と同じように発展させるには、まず台湾の人に日本語を覚えてもらう。そして日本語を通じて近代文明を伝える事。それが必須でした。その教育がやっと軌道に乗り始めた明治29年の元旦に、当時台湾に駐在していた日本人の年頭祝賀会が台北市内で開かれることになりました。ところが、まだ治安が確立されておらず、ゲリラが蜂起するという噂が暮れのうちから流れています。心配した生徒たちは、先生たちに早く逃げるようにとアドバイスしに来ます。その時、6人の校長格であった樺取道明という方が、「君たちはそう言うけれども、自分たちは教育に携わるためにここに来ている。私たちは武器を持って立つ者ではないけれど、こんなことで逃げてしまえば、日本人としての道に反する」と言うんです。「我々の命運は天に任せる他はない。全てを我々の職務のために尽くし、職務と存亡を共にするのみである」と語ったと伝えられています。

6人は元日の朝早く山を下りて船着き場まで来たが、既に船頭が逃げていて、街に行くことができない。やむなく戻ってくる途中でゲリラに遭遇し、6人とも惨殺されてしまいました。これが六氏先生の物語です。

丁度その頃日本では、6人に続く第二陣の教師を募集中で、全国から800人の応募者があったんですが、この事件の報を聞いて、500人が辞退して300人になりました。しかし、残った300人の士気は高く、その中から選考をされた、45人は、明治29年の6月に赴任して来ます。

そして7月1日に、この碑の前で六氏先生の慰霊祭をしました。それがこの芝山巌学堂の始まりです。この碑の「学務官僚遭難之碑」という字は、初代総理大臣・伊藤博文の直筆です。先ほどご紹介した校長格の樺取道明という

人は、実は吉田松陰の妹の長男、つまり松陰の甥です。ですから、伊藤博文にとっては、恩師の甥が台湾の教育のために殉じたという特別の思いを込めてこの碑文を揮毫したことでしょう。

その後、記録にあるだけでも240名の日本の若い先生たちがここに来て、日本語を教えます。ここはいわば師範学校ですから、芝山巖で教育を受けた台湾の若い人たちが、全土に散って日本語教育を普及させていきます。明治31年には、台湾の子供たちの就学率はわずか2%でしたが、昭和19年、敗戦により中華民国に返還する前年には、92.5%の子供たちが学校に通っていました。いわゆる植民地ではあり得ない数字です。この一事をもってしても、日本人は台湾を植民地とは考えていなかった。まさに同胞として、日本と同じ文明に浴すべきと信じて、明治の青年たちはこの地で命をかけたのです。

この碑は戦後撤去され、放置されたままでした。しかし、李登輝さんが総統になり、陳水扁さんが台北市長になった時点で掘り起こされて、ここに建て直されました。そういう意味で戦後の台湾の政治情勢をも反映したものですが、六氏先生は今日、「台湾近代教育の父」と呼ばれています。裏側に六氏先生のお墓もありますが、地元の方のお世話で生花が絶えません。その周りには、伝染病や事故により志半ばで亡くなられた先生方の碑も、重なり合うようにして残っておりますので、それもぜひお参りください。

昨日、一昨日来、台湾の方々が我々に示してくださる友情、親愛の情は、この六氏先生の物語に象徴されるように、我々の先人が築き上げた貢献の賜物ということを感じていただければと思います。

解散式

昼食乾杯

九州経済フォーラム 副会長（台湾事業実行委員長）
是永 駿 氏（立命館アジア太平洋大学 学長）

今回の台湾事業の意義については、総督府での石原会長のご挨拶に、すべて込められていました。また、今後どういう心づもりでやっていったらいいかということは、最後の小早川中経協会長の言葉にすべて込められておりますので、私は雑談でいきます。

今日は中華民族、漢民族の宝物を見てきました。私は台湾にも研究仲間がいまして、彼らと話す時には冗談で「故宮博物院の宝物を台湾全土に散りばめれば、ミサイルは飛んで来ませんよ」と言うんです。一方、中国にも研究仲間がいます。彼らと北京で会って話す時に「僕に両方見たけど、良いものにみんな台湾に行ってますね」と言いますと、「いや、良いのはこれから掘りますから」と言うのですが、いずれにしても何千年といった中華民族の宝物の精髄はすべて台湾にあると言っていいと思うんですね。我々は今日、大変良い見学をさせてもらいました。

台湾人の心については、皆さんお一人お一人がお感じになった通りだと思いますが、台湾との関係というのは、実は単純なものではありません。たとえば先ほど参観した芝山巌学堂に、伊藤博文の碑がありました。これには六氏を襲ったのは「土地の匪賊」だと書いてあります。ところが6年前、台湾政府が、この碑はこういう意味で残すと書いた銘板がありまして、そこには日本人を殺したのは「義民」だったと書いてあるんですよね。こんだけ複雑なんです、台湾の場合は。ですから、我々はこういう歴史をもう一度学び直して、台湾と付き合う必要があるんじゃないかと思います。

いずれにしてもご苦労さまでした。乾杯しましょう。

これからの九州経済フォーラムの発展を祈念して、乾杯！

感想～台湾事業に参加して

九州経済フォーラム 常任理事 徳田 勇治 氏
（トヨタ自動車九州株式会社 常務取締役）

一つだけ、今回私が強烈に感じましたことを申し上げます。私は中国へは、もうあちこち行きましたけれども、恥ずかしながら台湾は初めてでございます。けれども、台湾で過ごしたこの3日間で、中国よりもどこよりも、はるかに台湾という国が好きになりました。これは本当に事実です。バスガイドさんまで一生懸命に、台湾人は日本人が好きなのよと言ってくれるし、昨日お会いしたいろんな財界の方々、お役人の方々、お一人お一人が、やはり日本との絆というところをいろんな意味で強調されるし、実践していただいてますよね。

あの総統府に行かせていただいた時に、我々のような団体が、本来は国と国というレベルの場で、あそこまで厚遇していただけたというのは、本当に大変なことだと思います。しかし、そういうことをちゃんとアレンジしていただける日本びいきの黄先生がいて、いろんな関係者の方々がいて、本当に我々一人一人、良い経験をさせてもらったと思っています。ですから私は、今後日本に帰りまして、生涯、台湾びいきになろうと決めましたので、賛同いただける方と一緒に、ぜひいろんな活動をやらせていただきたいと思っております。どうも今回はありがとうございました。

感想～台湾事業に参加して

九州経済フォーラム 常務理事 岡部 知寛 氏
（株式会社ティーアンドイー 常務取締役）

T&Eの岡部でございます。この度は、石原会長をはじめ各幹事の皆さん、そして事務局の皆さん、いろいろとご尽力をいただき、心より深く感謝しております。私も学生時代、2年ほど台湾に留学しておりましたので、台湾にはある程度精通しているつもりだったのですが、今回改めて、台湾の方々と濃密な時間を共有する中で、自分は何をすべきなのか、日本人としてどうあるべきか、という沢山の問いを頂いた3日間となりました。これから自分がどう考えて行動するかというところを、もう一度、日本に帰って突き詰めたいと思っています。

蛇足ですが、「これからの自分」でと申しますと、昨夜、足つぼマッサージに行きましたら、前立腺とか、「これからの自分」にとって大事な部分のツボに激痛が走りまして、足つぼの先生にいっぱい駄目だしされました。改めて自分の肉体も含めて鍛え直したいなと思っております。皆さん方、今後もどうぞ宜しくお願いいたします。この度は本当にありがとうございました。

福岡事業に向けて

九州経済フォーラム 副会長（福岡事業実行委員長）
矢頭 美世子 氏（株式会社やずや 代表取締役会長）

皆さん、大変お疲れさまでした。本当に今回の実行委員長にじめ、皆さんのおかげで台湾を満喫させていただきました。ありがとうございます。

鄭さんはじめ昨日の皆さん、すごく品格がおありですよね。最後にお話しされた彭さんは、私たち以上に日本語がきれいで、滲み出る品性とか品格が備わっていて、私も将来、年をとったらあんなになりたいなと憧れてしまいました。

次は最終の福岡事業です。もう本当に今朝から、石原さんと次の打ち合わせをしています。今までの事業は参加100名で、皆さん頑張っていただきましたけど、次は2000名です。私は今回の記念事業には、これまで全部出席しましたが、仕事も全部キャンセルして出席したのは、最終が福岡だからです。全体の流れを見て福岡に当たろうという気持ちもあれば、見てきた分を活かそうという面もあります。最後良ければみんな良しという言葉もありますので、結構力を入れています。

にしても、福岡の場合、2000人を集めなくちゃいけません。皆様のご協力の中で頑張っていきたいと思います。11月17日は空けておいてください。夜の交際は一切禁止。よろしいですか。それと接待も禁止です。いろんな楽しいイベントを今、考えていますので、どうぞぜひお集りください。最後は石原会長が全面的に熱き思いを30分、語ってくださいますので、ぜひこれを見逃さないでいただきたいと思います。私はこれだけ言わせていただきます。11月17日、2000名です。ぜひよろしくお願いいたします。

台湾事業総括

九州経済フォーラム 会長 石原 進 氏

皆様、大変ご苦労様でございました。今回、100名の参加ということで、本当にどうなるかと心配していました。本来なら30名から40名、バス1台ぐらいがちょうどいいところですが、高宮さん、小早川さんも参加され、本当に100名の皆さんに台湾に来ていただきました。実は、黄茂雄さんとこの事業の話をしていた時に、黄さんが「そうか。来るなら来てくれ。俺の方は155名用意するから」という感じでおっしゃるから、つい「じゃあ、こちらも100名」と言ってしまいました。辛亥革命100周年というのを意識したわけじゃなくて、たまたま100年経っていたわけですが、言った以上は、実現しなければならないということで、100名もの方にお集まりいただきました。本当にありがとうございます。

集まっていただいた以上は、参加された方々には、本当にこのツアーに参加して良かったなと思っていただかなければいけません。そこも心配でしたが、やはり黄さんのアレンジは見事で、台湾側の講師の皆様方、参加者の皆様方、どのメンバーも素晴らしかったですね。こちらで小早川さんをはじめ準備していただいた方々、それから是永先生も大変ご苦労様でした。是永先生には台湾事業の委員長をしていただきました。是永先生が委員長をされるということを参加の動機とした方もいらっしゃいますし、APUからも非常にたくさんの先生に参加していただきました。そしてこの会の権威を高めることにもなりました。本当にありがとうございました。それから、事務局の皆様も本当にありがとう。実に段取り良く運んでいただきました。綱渡りのスケジュールの中、黄先生に参加していただけたのも、皆様方のしっかりした手助けがあったからだと思っています。おかげさまですばらしい会になりました。

台湾に来てわかったことというのは、本当にたくさんあります。台湾はこれまで、ものすごく中国との関係で苦しんできました。その時、一番の拠り所が日本だったわけです。戦前の経緯もあって親日である。それに対して日本は、政治的には中国との関係があり、特に中国と国交を回復して以降、台湾をいわば袖にした形になったわけです。国交がない形になってしまったけれども、実際、台湾は非常に日本人が好きなんです。ということで、政府は斜に構えるけれど、経済界も国民も台湾と付き合ってきたわけです。

この国の生き方としてメイク・ファクトリーというのがありましたが、最後はそこなんです。韓国もそうだけれども、国を開かなければ、このボーダーレス経済の時代は豊かにならないですね。あの鄭さんが言っていました。例の空洞化の問題みたいに、歴史はずっと移転してくると。パックス・アメリカーナがあった。その次にパックス・ジャポニカがあったけれども、今はもうパックス・中国かパックス・アジアか、そうなっている。日本は、放っといても放っとかなくても空洞化していくんですよ。その空洞化に対して我々はどう対応していくのか。これはやっぱり我々自身が、積極的に働かるところ、成

長するところに出ていって、仕事をして儲けて、そのお金を日本に持って帰るということをせざるを得ないのです。そうしなければ、どんどん日本の人件費が下がっていって、経済が小さくなりますから、嫌だけども、日本全体がますます貧乏になるということにならざるを得ない。だから、我々はやっぱり出ていかなければならない。しかし、日本人はあまりにも内向き過ぎるのです。

ですから、今回参加していただいた皆様方、特に若い方々は責任重大です。若い人、若い人と言って申し訳ないですけど、やはり頼りにできるのにこれからの若い人のパワーです。台湾は、我々としても非常に仲良く、商売しやすい国です。契約はきちんと守る。対中国ではほとんど関税がかからない。中国は内陸部もものすごく伸びている。黄さんが、内モンゴルにものすごい街が出来上がっていると言われていました。あれを聞いて、僕は見に行きたいなと思いました。見ると多分、それだけで電撃が走るような気持ちになるだろうと思います。今回台湾へ来ただけでも、おそらく皆様方は、あっ、これでは俺たちは日本の中だけでやってもダメだなということが、よくおわかりになったと思います。そこのところが大事なんですね。

我々経済団体というのは、そうした機会を作る団体であって、だからこそ、このツアーに参加した皆様一人一人が、今度は台湾で友達を作り、具体的にビジネスを進めていただく必要があるのです。それを進めていく中で、九州の経済界もちょっと手伝ってよ、という話を持ってきていただくようになれば、本当にいいなと思います。

11月17日に、最終の25周年記念事業の福岡での会があります。しっかりやりなさいと言われましたので、一生懸命やります。ぜひ皆様方、ご支援よろしくお願い申し上げます。今日はどうもありがとうございました。

福岡開催

FUKUOKA

九州経済フォーラム創立25周年記念シンポジウムin福岡

次第（平成23年11月17日（木））

15:15 ■九州経済フォーラム創立25周年福岡記念事業

16:00 ・開会挨拶　九州経済フォーラム副会長　井手口 修一 氏

■Qcon（九州クリエイティブコンテスト）

16:05 ・オープニング、プレゼン、審査員コメント

16:50 ・総評　九州経済フォーラム副会長　矢頭 美世子 氏

（休憩）

■模擬　九州府長 就任式

17:10 ・開会挨拶　九州経済フォーラム副会長　甲斐 隆博 氏

・模擬　府長就任式
プロローグ－映像5分－

17:15 ○宣誓式

17:20 ・模擬　府長就任演説
九州経済フォーラム会長　石原 進 氏

17:50 ・公開記者会見

18:15 ・閉会挨拶　九州経済フォーラム副会長　橋田 紘一 氏

18:20 ○特別講演　九州経済フォーラム副会長　是永 駿 氏

・講演　中華民國工商協進會榮譽理事長　黄 茂雄 氏

18:50 終了

次第（平成23年11月17日（木））

18:50 ■記念式典
・国歌斉唱
・25年の歩み
・25周年記念事業DVD視聴
・会長挨拶 九州経済フォーラム会長　石原 進 氏
・功労表彰　受賞者紹介
・受賞者代表挨拶

19:20 （移動・休憩）

19:30 ■記念レセプション（芙蓉の間）
・実行委員長挨拶
九州経済フォーラム副会長　末吉 紀雄 氏
・乾杯　九州経済フォーラム副会長　高宮 俊諦 氏

20:40 ・閉会挨拶　九州経済フォーラム理事長　小早川 明徳 氏

20:45 ・博多手一本　九州経済フォーラム相談役　長谷川　裕一　氏

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 井手口 修一 氏
（西日本電信電話株式会社 九州事業本部長兼福岡支店長）

皆様、こんにちは。本日は「九州経済フォーラム25周年記念事業」にかくも多数お集まりいただきましたこと、誠にありがとうございます。私は当フォーラムの副会長を仰せつかっております井手口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。この同フォーラムの25周年記念事業でございますけれども、この春から、沖縄、熊本、台湾と、3つの事業を進めて参りまして、この福岡の記念事業が最後になります。本日は、何と言いましても、石原会長の九州府長の就任式がメインでございますけれども、これは沖縄で日本の基本的な姿勢を考え、熊本で人が自然とどう向き合うべきか、台湾事業におきましては、これからアジアや世界に向けてどうつき合っていくべきかということを考えて参りましたが、その集大成という位置づけでございます。いわゆる今日、この会場でこの九州の新たなる使命と役割が示されるわけでございます。ぜひ皆さん、石原九州府長の演説にご期待をいただければと思います。加えて、今日は大勢の学生の皆様方にもお集まりいただいております。九州の未来を考えるについて、やはり次代を担う若い方々にこの事業にも加わっていただくべきではないかと、そういうような議論を通じまして、学生様自身の自らの運営によりますプログラムが含まれております。予選会を勝ち抜いた皆様方がこの九州の活性化について、具体的なアイデアや具体的な施策を発表していただけると聞いております。こちらの方もぜひ、ご期待いただきたいなと思います。

本日は長時間にわたりますけれども、ぜひ皆様方、最後までご参加いただくことをお願い申し上げまして、高いところからでございますが、開会の挨拶に代えさせていただきたいと思います。本日はありがとうございます。

Qcon

九州クリエイティブコンテスト

プレゼンテーション

「未来デザイン九州2035」

九州大学 大学院2年 冨田 大揮・緒方 友孝

未来デザイン九州2035ということで、2035年の九州についてのアイデアのプランを私たち、九州大学の冨田大揮と緒方友孝で発表させていただきます。よろしくお願いします。

まず皆様に冒頭にお聞きします。九州の日本における役割って何だと思いますか。例えばアメリカであったらシリコンバレーであったり、中国の経済特区であったり、というようなその地域によっての場所の「色」があると思います。そういった意味での九州の役割って何だと思いますか。私たちはその役割について考えたんですけれども、まだまだ九州の立ち位置は不透明という風に感じました。確かに最近では九州新幹線であったり、熊本城築城400年だったり、すごく盛り上がりを見せている九州ですけれども、またその中で、世界でさらにもっともっと知られて、愛される九州になるために、私たちは、その「色」をつけること、それが大事だと考えました。そこで私たちは25年後の未来についての九州を考えました。この25年後というのはもちろん、そちらの25年ということで考えております。結論から申しますと、2035年、九州は「シルバーアイランド」へと進化すること、このことをアイデアとして提案します。

それではまず、25年後に起こる、確実に来る未来、というものが3つあり

ます。その3つを今から紹介していきます。

まず一つ目が人口の減少です。これから日本の総人口は減少し、1億1000万人になるという風に言われています。そのことによって国民一人に当たる税金の負担というものが大きくなってくる、という風に言われています。二つ目が超高齢化社会への突入です。日本の総人口の3分の1が高齢者になる社会というのが確実に訪れます。その中で起こることは、年金問題であったり、税金の社会保障費の負担であったり、または介護側人数の減少であったり、というような問題が起こるという風に言われています。三つ目は過疎化の進行です。人口の3割が南関東4都県に集中するという風に言われています。このことでまた都市部の住みにくさというものが大きくなってくるという風に考えられます。以上の問題をまとめますと、このスライドに挙げられている3つ、①介護側人数の減少②年金問題、税金の社会保障費の負担③都市部の住みにくさ、これに集約するという風に考えます。

この3つの問題を解決するための策、そのための提案として、私たちは、この「シルバーアイランド構想」というものを提案します。一言でいえば、「高齢者の、高齢者による、高齢者のための行政特別区」のことです。概要として、都市部の高齢者を九州へ誘致すること、このことで実現していきたいと思います。以下、この詳細について、緒方君に説明してもらいます。(発言者交代、以下オガタ)

シルバーアイランド構想を実現することのメリットは2点ありまして、1点目がいまここに出ている3つの問題点を解決することができる。という点と、あともう一つは、日本の老人の皆さまに幸せな老後を過ごしていただくことができるという点にあります。

それではさっそく、介護側人数の減少という問題と、若者の年金や税金の負担が大きくなってしまう問題に対する解決策を提案します。それは循環型社会の形成という方法で解決させていただきます。詳しく話しますと、まずシルバーアイランド、つまり九州なんですが、九州におきまして、老人の雇用を大幅に増やします。例えばパソコンに強い老人が増えてくると考えられますので、在宅ワークという形でパソコンを使って仕事をしていただく。そ

うすることによって社会に貢献していただくということもありますし、元気な老人が増えるとも予想されますので、老人が老人を介護するという形の老人相互介護という新しい雇用が生み出されるのかなと考えています。またこれによって、先ほど言いました介護側の人数の減少という問題を解決します。かつこの雇用から生まれてくる所得に、大幅に所得税を引き上げまして、その所得税からシルバーアイランド内の社会保障費というものをすべて捻出いたします。この仕組みはさすがに九州が独立した行政や、独立した財源というものを持ってないと難しいと思うので、道州制というものの実現というのが不可欠なのかなという風に考えています。つまり、何が言いたいかと言いますと、若者の税金に依存することなく、「老人が老人を支える社会」を実現していこうという考えです。

次に過疎化することによって都市部が住みにくくなってしまう、ということについての解決策です。こちらは先ほどからありますように、都市部の老人を根こそぎ九州に誘致するということで解決します。そのための方法なんですけれども、まず住宅保証入制度を撤廃することによって、例えば身寄りのない老人だとか、外国人の方でもすぐに移住できるような環境を整えます。また、シルバーアイランド内に高齢者が住みやすい地域がなければいけないので、そのような街を造るために土地を確保しなければならないんですけれども、その土地を、九州に多く存在している耕作放棄地を活用して解決します。以上のことから、シルバーアイランド構想から高齢者が住みやすい街づくりというものを実現したいと考えています。

ところで皆さん、幸せな余生って何かと考えたことがあるでしょうか。私たちもいろいろ考えさせていただいたんですけれども、うまく答えが出なかったということから、いろんな数の老人にヒアリングをしまして、2つほど幸せな余生のカギを見つけました。その一つが、人と人とが面と向かってコミュニケーションをするというような、ふれあいのコミュニケーションにあるのかなという風に感じました。一緒にゲートボールをしたりとか、そういったコミュニケーションですね。あともう一つが、老人が社会のお荷物になっているだとか、若者に負担をかけているというような感覚を感じるのではなくて、何かしら自分が役に立っているんだという実感というものを感じてもらう、生きがいというものを感じてもらう社会、というものをつくる。そのことがカギなのかなという風に感じました。そこでシルバーアイランドでは、そのどちらも解決することができますし、実現することができます。つまり老後の充実した生活というものを提供することができます。そして、そのようなことから九州は、日本においてなくてはならない存在となっていく、という風に私たちは考えました。（発言者交代、以下トミタ）

そしてさらに、九州が世界へプレゼンスを示すことになります。九州が高齢化社会に対するロールモデルになることで、そのノウハウを蓄積してアジアなど、諸外国へ輸出することで、世界に対する「色」というものをつけていける、という風に考えています。このシルバーアイランド構想によって、もともと九州に「色」がないといった問題に対して、「色」がつく、かつ、その老後の余生、日本人の老後の余生に対して充実を図ることができるというような効果があるという風に思います。

私たちが大好きな九州が、これから世界の中でもっともっと愛される九州になるために、このシルバーアイランド構想というものを提案したいと思います。「ＷｅＬｏｖｅＫＹＵＳＨＵ」ということで、私たちのプレゼンを閉めさせていただきます。ありがとうございました。

Qcon

九州クリエイティブコンテスト

プレゼンテーション

「ファインドアップスクール」

響高校1年 吉田 拓巳

皆さん、初めまして。北九州からまいりました高校1年のヨシダタクミと申します。今日に短い間ですが、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

これからの九州をどうするか、ということを考えまして、今回僕がプレゼンさせていただくのは、「ファインドアップスクール」というテーマでプレゼンをさせていただきます。「ファインドアップスクール」とは何かと言いますと、従来の五教科を勉強する塾ではなくて、クリエイティブな人材を育てる新しい子ども塾、ということで「ファインドアップスクール」を提案します。

近年、日本のお隣のアジアは急激に経済成長を遂げています。皆さんも連日のニュースなどでご存じだとは思いますが、インターネットやパソコンの普及により、若者の多くがプログラマーだったり、デザインをやったり、とても大勢のプログラマーが世界には、アジアにはいるのが実際の現状です。ネパールには15歳から20歳までの若者のプログラマーを集めたプログラミング会社が実際に存在しています。そして日本企業もコストダウンのために、そのアジアの若者の企業を使っていることが多くあります。そこで僕ら若者には、もっとグローバル化の意識が必要だと思っています。実際に日本の一部の企業では、社内の公用語を英語に転換したり、実際に外国人の雇用

を行っていたり、そのようなグローバル化を遂げています。実際に就職をするときに、競争するのは日本人だけではない状態になっています。そこで僕らはもっともっとグローバル化の意識を高めて世界に進んでいかないといけないと思っています。そんな世界に通用するような、新しいクリエイティブな人材、一から何かつくれるようなクリエイティブな人材を育てるための塾ということで、この子ども塾、「ファインドアップスクール」というものを企画しました。

一般的な学習の流れですと、中学生で学習塾や進学塾に通い、高校生で進学塾や予備校に通うのが一般的な学習の流れです。実際の現状では、学習時間を長くかけても、就職難などの問題により、就職ができない学生がいるのが現状です。そして僕が提案させていただきます「ファインドアップスクール」では、対象は小学校高学年から高校生までを対象にしていまして、小学校高学年で言語を勉強し、忍耐力や人間性の強化のために道徳などの勉強を行い、そして中学校前半でIT・ビジネス部門の2つに分かれ、IT技術者の育成だったり、ビジネスリーダーの育成というのをカリキュラムに組んでいます。そしてそこで学んだことを生かして、高校生で職場体験やインターンシップを福岡・九州の企業と行い、その実力をもっと強めていけるようなカリキュラムを組んでいます。これを行うことによって大学を卒業して実際に社会人デビューするのではなくて、18歳で社会人デビューができるようなスキルを持った新しいクリエイティブな人材を育てることが可能になります。そして先ほども申し上げましたが、カリキュラムとしては、コミュニケーション能力として日本語はもちろんなのですが、それに加え、今後世界と闘っていくためには、英語、中国語も必要だと思っています。英語、中国語も日本語に加えて学び、IT技術者の育成、プログラマーやデザイナーも専門の講師から学び、早い段階でそのような技術を習得する、そしてビジネスリーダーの育成ということで、企画力やマーケティングなどの強化を図ります。そして道徳ということで、現代の若者には忍耐力が足りないと言われています。そこで忍耐力の強化を行うため、この道徳の授業を行います。そして人間性を鍛えるために、改めて日本の文化を一から学び、歴史を一から学ぶことで、人間性の強化を図ります。この企画は、2012年の夏には開講を目標に、現在プロジェクトを進めています。

アジアに最も近い九州だからこそ、僕ら若者が立ち上がり、がんばらないといけないと思っています。不況だから何だとか言われますが、そんなことは押しのけて、まず九州からどんどんと世界に目を向けて、世界に進出していかねばならないと思っています。どうもご清聴ありがとうございました。

Qcon

九州クリエイティブコンテスト

プレゼンテーション

「若者のシェアする街『まちの間』」

佐賀大学1年 江口 克成（まちの間プロジェクト）

こんにちは。自分は今日、佐賀から来ました。佐賀大学のエグチと言います。よろしくお願いします。今日は少し駆け足になるかもしれませんが、今自分たちが取り組んでいる「まちの間」という取り組みについて紹介しつつ、10年後、佐賀が、そして九州がどうなっているのかということについて、郁介していきたいと思います。現在、この会場にいらっしゃる皆様で、「まちの間」をご存じの方はいらっしゃいますか。あ、ちらほら・・・。今日は「まちの間」について知って帰ってもらえたら嬉しいなと思っています。

では、若者のシェアするまち「まちの間」として、発表させていただきます。

自分は今、佐賀で活動していますが、佐賀県佐賀市の中心市街地は、よく言われるような廃れた商店街、「シャッター街」で人通りが少ないという現状になっています。現状としては、空き家率が20％を超えていて、さらに酷いところでは50％を超えていて、空洞化しています。自分は実際に、この商店街に住んでいるんですけれども、周りのおじいちゃん、おばあちゃんはほとんど70代から80代がほとんどです。高齢化も進んでいます。結果として、商業は低迷し、地域コミュニティが希薄化しています。結局衰退していくばかりです。ここで自分たちは「まちの間」ということを提案して、活動しています。この写真に写っているのが、「まちの間」1号です。ここに学生のシェアハウス兼コミュニティスペースとなっていて、2階に学生3人が住んでいます。1階に土間空間としてコミュニティスペースを併設しています。詳しく見ていくとこのようになっていて、2階に3人の部屋があって、1階にダイニングキッチンと土間（イベントスペース）があります。これはおよそ3ヶ月かけて学生が自ら改修を行いました。改修を行っている時期から、地域のおじちゃん、おばちゃんとのコミュニティが形成されていきました。差し入れをもらったり、声をかけてもらったりしていくような、そ

ういったコミュニティができています。これは1階の土間空間ですけれども、どういうことをやっているのかというと、この写真のように展示会を開催したり、小学生とワークショップをしたり、演劇をやってもらったり、展示スペースとして若手のアーティストに場所を提供したり、時には自分たちで制作活動を行ったり、学校で勉強した自分たちの成果を地域の人たちに発表する場として使ったりしています。

「まちの間」と呼んでいるんですけれども、「土間」とか「茶の間」とか「居間」とか、「間」のつく空間、人が交われるような場所をまちレベルで考えたときの空間として、自分たちは「まちの間」と呼んでいます。この「まちの間」によってどのようなコミュニティが生まれているのか、それが普通のシェアハウスとどのように違うのか、ということを紹介していきます。自分たち学生3人は、地域の自治会に入っていて、自治会のおじちゃんおばちゃんと一緒に川掃除をしたり、学校から帰ってくると、このように小学生が1階で遊んでいて一緒になって遊んだりします。また、この右下のサザエさんみたいなおばちゃんですけれども、向かいの靴屋のおばちゃんで、すごく面白いおばちゃんなんです。左側のあのようなお裾分けをよくくれます。いつも「いってきます」って言うと、「いってらっしゃい」って言ってくれるし、「お帰りなさい」と言って、いつも自分たちを迎え入れてくれます。窓を開けっ放しで外出したときは、「窓、開けっ放しよ」と自分たちにまで電話してきてくれます。そういうおばちゃんです。そして、おばちゃんにペンキ塗っとってと言われて、代わりにペンキ塗りをしてあげて若い力を提供するような機会もあります。これはどういうことなのかというと、まちの高齢者から学生は息子・娘のような扱いを受けます。学生にとって周辺のおじちゃんおばちゃんは、一人暮らしで忘れがちな家族のような存在に感じられます。学生はこのようにシェアをしています。今流行ですね、シェアハウス。この写真のように夕食をみんなでつくってお金を節約しています。他の学生を集めて鍋パーティをして楽しんだりしています。近頃、やっと他の学生が集まり始めていて、福岡の九州大学から来てくれたり、佐賀大学の他の学生も30人程度集まったりとか、たくさんの人たちが集まってくれるようになりました。若者が集まる場所としても新たなものが提案できていると思っていて、若者同士の新たな出会いの場になっていると思います。

これはどういうことなのかというと、「家族でも、職場でも、友達でもない、親く、でも暖かくて強いコミュニティ形成」が可能であると思います。「お金にならない価値」と自分たちは呼んでいます。現在「まちの間」2号ができて、現在、女子学生4人が住んでいます。また先月、3号を計画し始めました。

さらに「まちの間」がまちに増えることで、10年後どうなっていくのかということを提案したいと思います。

現在「まちの間」の周りには、先ほど紹介したような緩いコミュニティと呼べる様な世代間の交流が行われるようなこういうコミュニティが存在しています。それらが10年後増えて、「まちの間」の周りにそれぞれ特色を持った、色の違った「まちの間」コミュニティができる。すると、交流空間の都市への波及効果ということで、シェアする都市ができると思っています。これはまた、学生の生活圏の変化による相乗効果が期待できます。今の学生は、大学街とよべる、大学の近くにアパートを借りて住んでいると思うのですが、そのような学生たちが商店街などのまちなかに住むことで、街への経済効果と若い力の提供、また学生は先ほど紹介したような「お金にならない価値」を経験できるんじゃないかなと思っています。

まとめると、まちと学生、ともに「WIN-WIN」の関係を築けるということです。シェアハウスによる家賃と光熱費のシェア、空き家が多い佐賀のまっなか、他の地方もそうだと思うんですけれども、空き家の有効利用、若い力の提供、学生にとっては、学外での学習機会の経験や体験ができるんじゃないかなと思っています。さらに世代間交流が行われ、いろんな年齢の幅のある人と接する機会もあります。これは佐賀だけではなく、九州全域で同様に考えられることじゃないでしょうか。若者はどこのまちにもたくさんいます。商店街はどこも困っています。「まちの間」コミュニティで、九州を元気にしていきましょう。今日はどうもありがとうございました。

Qcon

九州クリエイティブコンテスト

プレゼンテーション

「子どもに平等な教育の機会を」

九州大学4年 森山 円香

皆様、こんにちは。私は九州大学の森山円香と申します。本日にこのような素晴らしい場に立たせていただき、誠にありがとうございます。本日は教育の観点から、九州の今と未来についてお話させていただきたいと思います。

突然ですが、皆様、「日本の貧困問題は深刻である」そう聞いたときに、ピンと来るでしょうか。暗いニュースは多々あれど、識字率99%、衣食住に困らない、格差の少ない日本。そのようなイメージを私は抱いておりました。こちらのデータをご覧ください。日本の相対的貧困率は世界トップレベルです。相対的貧困率とは、国民の平均年収の半分以下、日本で言えば127万円以下で生活をしている人の割合を指します。つまり、相対的貧困率が高ければ高いほど、国内の経済格差が激しいということです。その中でも、日本の中で見たとき、九州は全体的に高い傾向を示しています。そしてそれは、年々上昇傾向にあります。なぜでしょう。その原因の大きな一つとして、貧困が継承され、格差の再生産が行われているということが挙げられます。大卒の親を持つ子どもは大学へ。中卒の親を持つ子どもは高校から働き始める。そのような傾向が非常に大きいです。大学院卒と中卒の人の生涯年収の差は、男性で7600万円、女性で1億9000万円にものぼると言われています。近年行われましたOECDの調査によると、日本の子どもの15%が将来大人になったときに、契約書に書かれている内容が理解できないと、そう言われています。

生まれた瞬間から自分の経済状況が決まってしまう。そんなのおかしいと思いませんか。私は生まれた地域環境、家庭環境によって、子どもの可能性が左右されてはならないと思います。そのために学校があるんじゃないか。そうおっしゃる方がいらっしゃいます。しかし、今の学校にそのような役割を

想うことができるでしょうか。学力保障、しつけ、果ては育児まで求めたために学校は疲弊し、新人教員の精神疾患による離職率、退職率は、10年前と比べ圧倒的に増加しています。教員養成一つとってみても、大学で授業を受け、たった2週間の教育実習で免許が取得できます。そしてこれらの環境での新任教員に対するフォローは、十分とは言えません。このような現状で、厳しい日本の社会、そして学校現場をフォローできるとはとても考えられません。

このような現状を前に、私にできることはないだろうか、そう考えていたときに、ある一つの団体を見つけました。アメリカの「ティーチフォーアメリカ」という教育NPOをモデルにした「ラーニングフォーオール」という団体でした。その団体は教師派遣事業と、学習支援事業という2つのことを行っていました。具体的にご説明します。

教育に情熱のある志高い新卒や若手社会人をリクルーティングし、研修を行った上で2年間、学校現場に派遣をします。そして派遣された教員は2年間、現場で子どもたちの学力向上や、それぞれの地域の学校の課題解決に取り組みます。一般的な教員ならばそのまま学校にとどまります。しかしこの仕組みが行っていることは、2年間の、派遣された教師の2年後のキャリアは自由とされています。もちろん、学校現場にとどまるもよしです。それ以外に民間、行政に就職することもよしとされています。そのようにして、教育問題を学校現場のみでとどまらせるのではなく、社会全体で取り扱っていこう。そういう仕組みがこれによって実現できます。もう一つ、学習支援事業に対して、こちらは教師派遣事業とは異なり、現役の大学生をリクルーティング対象としています。社会に出る前の段階から、困難を抱える子どもたちと向き合うことで、さまざまな能力を現場で身につけています。こちらは5日間から2か月間のプログラムです。この仕組みを知ったとき、「これだ！」、そう思いました。先ほどのデータにもありましたように、九州でもたくさんの子どもたちが苦しんでいる、そして大学生は九州では就職がないと、関東や関西に出て行ってしまう。そして学校現場や企業は、優秀な人材がいないと嘆いている。この仕組みならばこれらの問題を解決できる、そう思った瞬間、私はいても立ってもいられなくなり、団体の代表に連絡を取り、東京まで会いに行き、九州での設立を認めてもらいました。そして仲間を集め、支援先を見つけ、今年の9月に初の学習支援事業を実際に行いました。実際にやってみて、これはただのボランティアではない、そう確信しました。限られた時間でどう子どもたちの信頼を得て、子どもたちがどの教科のどこでつまづいているのかを分析して計画を立て、そして実践、指導を行っていく。指導を行ったあとにはふりかえりをして、より改善に努めていく。PDCAを回していく。そして自分の立てた目標に向かって、どうすればそれを実現することができるのか、仲間たちと話し合い、語り合い、課題解決に取り組んでいきます。そうして今回実際に行った結果、最初は中学3年生の子たちを対象にしていたのですが、最初は「勉強がわからない」「学校の授業についていけない」「高校に行けるのか不安だ」、そういう声であふれていた中、たった5日間のプログラムでしたが、終えたときには、生徒たちから「がんばればできるということがわかった」「高校受験に向けてがんばろうと思う」「ありがとうございます」「また来てください」、そういう声をたくさん聴くことができました。

最後に、私は、誰もが可能性に呼応できる社会をつくりたい、そう思っています。そのためには、まずは自分がやらなければ。そう思って、この問題に全力で取り組んでいくことを決意しました。今、大学4年生ですが、卒業してからも続けます。しかし、私一人の力ではとても達成することはできません。この課題を解決していくためには、社会全体で、地域全体で取り組んでいく必要があります。この素晴らしい九州を人情あふれ、自然豊かなこの九州を、子どもたち、そして若者たちが可能性を信じて歩いていけるような、そんな地域にしていきたいと思います。今日はそのことをお伝えしたくて、この場に立たせていただきました。どうもご清聴ありがとうございました

1　相対貧困率とは等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分未満な世帯員の割合を指す。ここでは正式な定義に比較的近く、一般に理解しやすい表現を用いた。

2　一人世帯の場合を指す。二人世帯の場合は一二七万～二一一・八〇万となる。

Qcon

九州クリエイティブコンテスト

『プレゼンテーション

「LOOK WEST 政策」

九州大学4年 末成あゆみ

皆さん、はじめまして。九州大学3年の末成あゆみと申します。今日はこの「LOOK WEST 政策」というタイトルでお話をさせていただくんですが、前者4組のプレゼントは違って、私は、皆さんが十分に解っていることとは思うんですけど、今一度、視点として、必ず忘れてほしくないことを改めてお伝えしようと思います。

私は九州が大好きです。九州の文化も歴史も、食べ物も大好きで、それゆえに九州大学に進学してしまったんですが、今大学にいて、先輩たちの就活状況やこれからどうしていくかというものを見たときに、私は九州から出なくちゃいけないんじゃないか、就職だったら関東や関西に出なくちゃいけないんじゃないかといつも思います。それはここになぜか、九州にいつも閉塞感を感じるのです。ここに若者の元気というのが、関西や関東に比べて少ないんじゃないかって思うんです。これで九州大好きな人間が社方ないと言って、関東や関西に出て行く。これってすごく残念なことではないかなと、私はそう思います。

突然なんですけど、実はさっき答えが出てしまったんですけど、この国旗がどこの国のものかわかる方はいらっしゃいますでしょうか。この国旗は、アジアの小さな南国、シンガポールの国旗です。私は日本人の父、シンガポール人の母を持って、シンガポールに生まれ育ちました。私は日本に来てずっと思うんですが、シンガポールの若者に対し、日本の若者はまったく元気がありません。目が死んでいます。ぎらぎらと輝いている目で、毎日お互い切磋琢磨して、刺激し合っているという印象をずっと、シンガポールにいたときは思っていたんですが、今はあまりそういうことは感じられません。それはなぜか。

このデータを見てください。2007年のデータなんですが、世界アジアの一人あたりのGDPの金額を示しています。上の青いのがシンガポールです。その下にあるのが日本です。日本は戦後50年間ほど、一人あたりのGDPの金額を他のアジア諸国に譲ることなく、トップをずっと保っていました。でも2007年、ついにシンガポールに抜かれます。1970年、そのときのシンガポールの一人あたりのGDPは日本の5分の1しかありませんでした。しかしあっという間にこの短期間で追いつかれてしまいました。国の規模などいろいろあると思うんですが、ここに来て私は、この閉塞感を打破できるそのカギがあるんじゃないかな、と思っています。

シンガポールと日本、2つの国で育った私は、もっとも違うところは、シンガポールは海外に対して抵抗感を覚えていない、日本は抵抗感を覚えている、と深く思います。例えば、シンガポールで優秀な人材を雇おうとした場合、シンガポールはどの会社も政府も、国籍などは見ません。優秀かどう

かだけで判断します。日本はどうでしょう。海外の外国人採用枠ってあるんですよね。わざわざ設けているんですよね。奨学金をもらうのに対しても、外国人用、日本人用と分かれています。優秀であればもらえるという一律の規定はあんまりないです。私が調べた中では、なおかつ、金融危機の際に、日本はどうしていますか。今の国債に金額、わかっていますよね。今度消費税も上がるって言っていますよね。でもときには外国の力を借りること、そうやって内々で解決していくことだけではなくて、外国の力を借りること、海外に開いていくことというのが、私はとっても大事だと思います。これがシンガポールと日本における最も大きな差ではないかと考えています。

九州です。九州はよくアジアの玄関口だと例えられるときがあります。しかし私はそうは思いません。確かに立地は抜群で、日本でいちばんのアジアの玄関口だと思います。私はたいへん思うんですけれども、そうやって九州にいる中で、採用に関してもそう、何に関してもそうなんですけど、何か外国人、日本人って分けているとき、ないでしょうか。皆さん、そういうこと絶対ないでしょうか。優秀かどうかだけで果たして選んでいるでしょうか。日本はアジアンの中の一国という意識がなんだか私は薄いように感じています。アジアと日本、と思っていませんか。日本もアジアです。アジアの中でフラットに、アジアの中で他の優秀な人材と闘う。それがもっともこれからの経済発展には大事なことだと私は思っています。

今回私が最も言いたいこと。これが、日本を守るために外国を受け入れる。この姿勢を絶対に忘れてはならないということを今一度お伝えしたいのです。九州には、私の通う九州大学には、たくさんの留学生が来ています。今日、先ほど知ったんですけど、学長が来ていらっしゃる、立命館アジア太平洋大学というのが大分にありますが、確かそちらの大学は日本でいちばん留学生の数が多いとお伺いしています。九州は、中国の人も韓国の人も集まりやすい場所だということですよ。ということはたくさん優秀な人材が集まる機会があるというのに、よく考えてみれば、そのあと、その人材、留学生たちは九州に残っていますか。ほんとに残っていますか。働いていますか。東京に出ていませんか。と、私は思います。せっかく留学生を連れてくるところまではできているんです。そこから九州に根付かせられるようにたくさんの対策をこれから取っていかなければいけないんじゃないか、という風に考えます。

そして、これは私からの最も強いお願いで、今日は学生がたくさん来ていらっしゃるので、たいへん耳が痛いかもしれないんですが、日本人、外国人にこだわらず優秀な人材であれば、私たち学生を捨ててそちらを取ってください。日本の大学生の雇用、日本人の雇用を守る必要はありません。長期的な視野で見た場合、どう考えたって優秀な人材を確保する方が大事です。にもかかわらず、それは私はなされていないんじゃないかと思います。それでも、実際就職の状況は厳しいのですが。

先ほど言ったように、九州にはそれを、アジアとの壁を取り払うチャンス、場所、すべては整っていると私は思います。ですから、九州から、日本の中では九州からアジアへ突破していく、突破口になれると私は信じています。このように長々と述べてしまいましたが、最後です。外に対して開いていく、受け入れていくという姿勢はとても怖いものです。飲み込まれてしまうと思うかもしれません。しかしそれこそまさに、先ほど述べた、私の母国シンガポールではそれをやって、すでに成功しています。お手本の国がいくらでも西の方にあるではありませんか。今までシンガポールはじめ、たくさんの国は、日本の真似をしてきました。「LOOK EAST 政策」というものを行ってきました。東を見ろ、日本の真似をしろ、と言ってきました。そして私たちは経済発展を遂げてきました。しかし経済がこうして追いつかれた今、次、日本が見つめられるのはどこだ。それは西です。「LOOK WEST」です。西の制作を真似する、アジアの視点も取り入れる、アジアの人たちとも十分に闘う。その視点は絶対に忘れてはいけないと、私はそう思います。それによって九州は、日本は、また一つ成長を遂げられるはずです。もしそうやって九州を舞台にお互いを刺激し合って、アジアの若者がここで闘いを始めたなら、この九州という場で始めたなら、私は関西や関東へ出る気にはなれないと思います。以上です。ありがとうございました。

Qcon

九州クリエイティブコンテスト

映画予告編鑑賞

司会　ありがとうございます。これにてプランニング部門のプレゼンテーションを終了したいと思います。ここで集計に入ります間、メディア部門で、地域活性化の事例として、高い評価を受けました宗像市大島で撮影された自主制作映画「島の空はまだ青く」の予告篇をご覧いただきます。

司会　今回審査員から、地域貢献の良い事例だと評価を受けた「島の空はまだ青く」。これは福岡県宗像市を舞台にした映画、地域を舞台とした映画をつくることによって、地域の活性化効果も生んでいます。地元の子どもたち向けのワークショップも行い、つくることの楽しさも伝えています。

司会　それではここで、今回作品を制作された小田　憲和さんにご登壇いただきます。九州大学芸術工学部大学院1年生です。では皆さん、温かい拍手でお迎えください。今回メディア部門の審査をいただきました、九州アートディレクターズクラブの伊藤　敬生さん、福岡コピーライターズクラブの上野　達生さんにコメントをいただきたいと思います。

伊藤氏　九州アートディレクターズクラブの伊藤です。この映像を事前に見せていただいたんですけれども、非常に島に対する愛情と言うんでしょうか。そういうのがあふれていたんですけれども、これをつくるにあたって、思いみたいなものを聴かせていただけたらと思うんですが。

小田氏　一一度、プロジェクトメンバー3人いるんですけど、それで島に行ったときに、大島自体はけっこう釣りっていうものを押し出していたんですけど、自分たちは釣りをしに行ったわけじゃなくて、島を巡ってみようと思って、島を自転車で巡ってみたら、けっこうきれいな景色がいっぱいあって、その中でこれをもっと押し出していった方がいいんじゃないかって思って、それでそのロケーションを生かすにはどうしたらいいかということで、自分がちょっと映画づくりをやっていたので、それを生かして、映画をつくろうという風になりました。

伊藤氏　実際、映像がとってもきれいなんですけど、これはご自身で撮られたんでしょうか。

小田氏　そうですね。カメラ、撮影は自分がやっています。

上野氏　初めまして。FCCの上野と申します。今初めて拝見させていただいたんですけども、非常にカメラワークとかもプロ顔負けな感じで素晴らしいなと思いましたし、監督と脚本の方もされていると書いてありましたが、なかなか2つを両立するというのは難しいんじゃないかなと思うんですが、そのへんの苦労話が1つ、2ついただけると。

小田氏　一応、自分は前から脚本づくりの方も好きで、脚本も大島ならではの話にしたかったので、そこにある「天の川伝説」というのがあるんですけれども、それをモチーフに、現代版に脚本を書き直したっていうか、そうやって書きました。

司会　ありがとうございます。上野さん、伊藤さん、ありがとうございました。それでは今一度小田さんに大きな拍手をお願いいたします。

閉会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 矢頭 美世子 氏
（株式会社やずや 代表取締役会長）

皆さん、こんにちは。今回、最後の25周年の福岡での実行委員長をさせていただき、どう行っていったらいいかを実行委員会で話したときに、九州の未来を考える次世代の若者たちが何を考え、何を学んで、またこれからの将来をどう思っているのか、これを表明してもらおうということになったんです。そして、また九州の未来を考える当事者たちに参加していただき、今日は多くの学生さんが参加していただいています。一緒になってこれからの未来を考えようということで、学生さんを中心にお願いし、パンフレットもつくり、こういう形になりましたが、期間2か月ぐらいしかなく、本当に短くて申し訳なかったです。こうしてやっていった中、写真や映像で表現するメディア部門への応募は39件、プランニング部門にはなんと37件の応募があり、書類審査などを学生さんと一緒に行い、彼らのプレゼンテーションを私たち審査員の方が何回も見ながら、今回5組の方たちがプランニング部門でノミネートされて、今日の壇上に上がっていただいたんです。本当言いますと、学生さんは最初はあがって、まって大丈夫かなと思ったんですけど、皆さん、すごい成長ぶりです。見事に私たちの心を捉えてくれました。その間に、みんなが応援して、今回の5組に少しでもビジュアライズして、きれいにできるようにということで、みんながアドバイスしたことを、素直に学んでくださって、今日の発表は最高だったと思います。

私たちがいま審査しましたが、どれもが私たちを感動させてくれました。だから1位2位とか、そういう形ではなくて、あなたたちがプレゼンの間だけでも努力し、さらに今日の表現力またビジュアライズ、皆さんたちの前に立つということに、これだけ努力したことに敬意を表して、甲乙つけがたしということになりました。これは審査員の全員の一致です。それぞれの賞を今から発表させていただきます。

「九州ブランディング賞」。これは九州大学大学院2年の冨田　大輝さんと緒方　友孝さんです。お二人の提言は「シルバーアイランド」の提案ですね。若い人たちが老人の特区をつくるというのは、私たちも考えてもみなかったことで、私たちの将来も明るくなったなと思いました。

「アントレプレナーシップ賞」。春高校1年、吉田　拓巳さん。本当に高校生なのにここまでできるというのはびっくりしました。頭だけじゃなく、心構えが大事ですよと。日本人としての歴史とかそういうのも大事じゃないかと言ったら、次のときに素直に全部入れてこられました。今回はほんと、皆さ

んとても素直でした。そして自分に対してもっといいものをつくっていこうという姿勢が、今日も見受けられました。どうもおめでとうございます。

「地域活性化賞」。佐賀大学1年、江口克成さん。この方は「まちの間」ということで、若者と老人と地域の活性化を実際にやってらっしゃいます。空洞の活性化ですね。本当に着眼点がいいと思います。私たちのことも考えてくださって、ありがとうございます。

「地域人材育成賞」。九州大学4年、森山　円香さん。子どもに平等な教育の機会を与えたい。子どもの教育について「できない」と思うのでなく、私たちの指導如何によってレベルが上がっていくんだということ。次世代が子どもたちのリーダーを自分たちの手でつくっていく。本当に素晴らしいことだと思います。

「政策提言賞」。九州大学3年、末成あゆみさん。日本の国際化、10年後の日本を目指すためには、日本をもっと変えなくちゃいけない。考え方を変えなくちゃいけない。外国を受け入れること。最終的に「私は九大だけど、九州にはいません。東京に行きます」と言われ、ショック受けましたけど、そういうことのないように、私どもも今からがんばって、こういう若い方たちの意見を聴きながら、これからの九州というものをかんがえなくてはいけないと感じています。

プランニング部門には合計37の応募があり、本当に最初はたいへんでしたけど、彼ら5組が受賞しました。本当にご苦労様でした。本当によくがんばりました。ありがとうございます。

九州府長 就任式

九州経済フォーラム 副会長 甲斐 隆博 氏
（株式会社肥後銀行 取締役頭取）

開会挨拶

皆様、こんばんは。九州経済フォーラム25周年の記念式典にかくも大勢の方々がお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。九州経済フォーラムは今年で25周年を迎えまして、沖縄、熊本、台北、そしてこの福岡という記念事業を執り行って参りましたが、「九州は一つ」という理念のもと、25年間活動して参りました。それが次の25周年に向けて、先ほどの大学生の皆様方の発表を聴いておりますと、新しい25周年を迎えられるんじゃないかなと、つまり50周年を迎えられるんじゃないかなといったような思いを強くした次第であります。このような形で、我々経済人が、大人が、おじいさんが、おじさんが、若者と直接同じ場に座って、そして、若い人たちの問題意識を十分に理解する。逆に若い人たちが、今、大人がどんなことを考えて、どういうことに悩みながら、今の実社会が動いているか。そういったようなことを考え、将来を考える機会、このような場が持てたことが何よりも私は嬉しく思います。

そして今から「九州府長就任式」という、この九州経済フォーラムならではのたいへんユニークな企画を実行させていただきます。道州制の議論が各地域、いろんな経済団体で行われていますが、まだまだ道州制といったような西洋的枠組みについては理解が不足していると思いますし、また考え方もばらばらであろうかと思います。そのような実情に対しまして、石原進九州府長という方が登場いたします。そして就任式を行いまして、演説をぶつと申しますか、演説を述べられます。その述べられた演説の内容は、今をベースにして将来をどのように考えるかといったような主旨になろうかと思いますが、若い学生さんたちは、ぜひ20年後の自分というような観点から府長の就任演説を聴いていただきたいと思います。そして現役の経済人である我々は、今からそれに向かってどのような形でこれを実現していなければならないのかといったことを考えていただければという風に思います。

石原氏の府長就任演説をお楽しみいただきまして、またこの就任式の後の懇親の場で皆様方とコミュニケーションを取らせていただければという風に思います。ではどうぞ、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

メッセージ

蒲島知事

石原府長おめでとうございます。私に道州制に目的でなく手段だと思うんです。

目的は九州の住民の幸せを最大化する。そのためには経済的豊かさ、九州の品格そしてプライド。もう一つはホープ。そしてセキュリティー。この5つだと思うんです。それを九州がひとつになることによって、より高めることができる。

もう1つは、どういった国を目指すかということがだいじだと思いますけど、九州は大体スウェーデンと同じようなサイズです。ただスウェーデンが素晴らしいと思うのは政策の革新性それから福祉と成長の両立それから政治的信頼がとても高い。そして、世界から愛されている。今、九州はひとつ、という思いがとても高まっています。それは知事会でも、九州広域貿易行政機構これをもって全体的な国の出先機関をまるごと引き受けようとしています。そういう高まりがありますので、ぜひ九州はひとつという感じでこれから各県が進んでいけばいいと思います。

飯干町長

九州の真ん中に位置し、そして県境に位置している自治体として、地域住民が安心してかつ安全に暮らしていくために、県境があるということがしばしば支障をきたしているということがあります。道州制によって地域のセーフティネットが確立し、住民の幸せ度、満足度がいっそう高まることを大いに期待しています。

松尾会長

道州制の実現については、従来から最大限の関心をもって取り組んでいます。

今、それが完成したという話を聞いただけでも、私は大変うれしい思いです。

完成したと仮定した場合に、九州の大きなメリットが、そして魅力が、そこに膨らんでくると思っています。例えば、九州は思っているよりも農業のウエイト高いです。今後、九州全体として、農産物の海外への輸出それを前提とする九州としての、各県バラバラではない、ブランド品が確立するだろうと思っています。輸出もどんどん進むだろうし、観光についても、九州には様々な魅力に満ちた地域があり、外国人から見ると、例えば温泉や、世界に冠たるカルデラをもつ阿蘇などの資源が沢山あります。そういうものを九州全体として評価して売り込むことによって観光事業も大変盛んになると思います。

人財育成についても、九州の場合は、アジアとの交流に焦点をあてた、そういうグローバル人材の育成という点で取り組むと、どこも異論がないはずです。

一体的にやった方が九州の発展の目的に沿った教育ができるのではないかと思っています。石原府長、大いに期待しています。

宣誓

私は、九州府長の職務を忠実に遂行し、
九州における安全の確保、経済・文化の発展に全力を尽くし、
九州府民の幸福の最大化に務めることを厳粛に誓います。

平成23年11月17日　九州府長　石原進

九州経済フォーラム 会長 石原 進 氏
（九州旅客鉄道株式会社 代表取締役会長）

九州府長 就任演説

石原でございます。よろしくお願いします。先ほどのたいへん素晴らしい5人の学生さんの発表、九州の若者も捨てたものじゃないという感を強くいたしました。それでは演説に入ります。

本日ここに九州府が発足しました。九州府は、九州で暮らす我々が、自分の力と責任で地域づくりをするために発足しました。

これまでの都道府県制度による中央集権体制の基本形ができたのは1890年（明治時代中頃）のことであり、この九州府の発足は実に120年ぶりの大改革にあたるわけです。

九州府設立の趣旨

まず、九州府設立の趣旨についてお話をします。

日本は今まで東京にある中央政府から経済、財政、教育、安全、地域づくり等、総ての分野にわたり指示を受けていました。このシステムは、戦後の荒廃期からの立ち上がりと追いつけ追い越せの高度成長期にはたいへん有効に機能しました。しかし、欧米先進国

にキャッチアップし、経済が成熟した現代ではうまく機能しなくなりました。その背景には、社会・経済の大きな構造変化があります。

変化の1つ目はグローバル化と豊かな時代の到来です。情報化が急速に進展し、技術や市場、人々の価値観がとてつもなく速いスピードで変化する時代になりました。また、従来の画一的かつ物質的な豊かさを求める時代から、多様性と心の満足を求める時代へと変貌しました。2つ目の変化は、過度の東京一極集中と地域間格差の拡大です。中央政府がある東京にヒト、モノ、カネ、情報、仕事、文化等あらゆるものが集中し、そうした状況下では地方が創意工夫によって地域の活性化を図ろうとしても限界があります。東京一極集中が進み過ぎた結果、地方の閉塞感と疲弊が深刻化していきました。3つ目の変化は、人口減少・少子高齢化の進展です。特に地方では就学・就職のために若者が東京圏を中心に流出する社会減も進んでおり、地方の活力低下に拍車をかけています。4つ目の変化は、財政の悪化です。中央集権システムでは、多様化する地域のニーズに応えるのは難しく、多くの無駄遣いが生じ、巨額の財政赤字の一因となっており、行政改革によるコスト削減を行う必要があります。また、国・地方の長期債務残高が1000兆円に迫ろうとする現状では、地方はもはや国を頼ることもできず、自らの創意工夫により活路を見出す必要が出てきました。

日本は今多くの課題を抱えています。少子化、高齢化、人口減少、巨大な財政赤字、崩壊寸前の社会保障制度、長期にわたり低迷する経済、エネルギー、安全保障など難題ばかりです。我々現代に生きる者はこうした課題を解決し、日本を再び希望に満ちた活力ある国にしていく責任があります。そのためには、日本の各地域が中央の指示を待つのではなく、自らの力で自らの地域づくりを責任を持って行う必要があります。

九州府の発足により、九州は自らの責任で地域づくりを行うことになりました。これからは、これまでのように政府に甘えることはできません。地域間の競争も起こります。地域間で大きな差が出ることも想定されます。地域の盛衰はその地域に住む人々の努力にかかっています。まさに、今回の道州制改革は日本人が自らの力で行った改革としては、明治維新に匹敵するものといえます。

以上、九州府設立の主旨について述べました。

国、九州府、市町村の役割

次に、国、九州府、市町村の役割についてお話をします。

今回の九州府の設立により、国と地方の役割が明確になりました。国は外交、防衛、通貨、マクロ経済対策、教育の最低限の水準や社会保障の基本理念を示すなど、国家の存立に関わる仕事に専念します。住民の生活に密着した内政に関する事務は、原則として地方の役割になり、九州府または市町村が、国の関与を受けることなく企画立案から執行までを責任もって担うことになります。例えば、住民の日々の暮らしに関係の深い福祉、子育て、医療、まちづくりに関する事務は、市町村が責任を持って担います。九州府が担うのは、市町村の範囲を大きく超え、九州が一体となって取り組まなければ効果が上がらない分野です。例えば、九州全体の環境・防災などに関する事務、大規模な空港・港湾や高速道路のような基盤となる交通インフラの整備、広域にわたる産業振興、観光、雇用、国際政策といった分野です。役割分担を明確化し、財源、権限を国から地方に大幅に移譲することで、住民の意思を反映した施策を迅速に展開できます。

また、従来までは、国が政策の多くを企画・立案し、都道府県と市町村が執行するという、国と地方の主従・上下関係があったのですが、これからは国、九州府、市町村が対等・協力関係の中でそれぞれが責任をもって役割を遂行していくことになります。例えば、幼稚園は文部科学省、保育所は厚生労働省が管轄といったいわゆる縦割り行政の弊害は、市町村に権限が移譲されることにより解消されます。また、九州府の設立によりこれまで各県で設置していた東京事務所、海外事務所は統合されますし、各県にある類似した国立、公立、独立行政法人の試験研究機関も再編・統合され、研究機能の強化と行政コストの削減が可能となります。市町村が担当する行政サービスも市町村間の広域的な連携や事務の共同処理化が促され、質の高いサービスを低コストで提供することが今後可能となります。

以上、国、九州府、市町村の役割についてお話しました。

九州府の具体的ビジョン・施策

次に九州府の具体的ビジョン・施策についてお話します。

道州制の効果は、次の3点に整理できます。1つ目は、国ではなく九州府や市町村が主役となった地域づくりを実現すること。2つ目は、外交・防衛など国家の存立に関わる課題に政府が専念できる体制とすること。3つ目は、国と地方を通じた行財政改革を進め、簡素で効率的な行政を実現することです。この道州制の効果を最大限発揮し、明るい未来ある九州府をつくります。その具体的ビジョン・施策は次の通りです。

教育

まず教育について述べます。

●教育その1　愛国心・愛郷心の養成

まず、日本国民として日本国を愛し大切に思う心の養成が重要です。義務教育では国歌の斉唱、国旗の掲揚を行い、日本の歴史や偉人の事績の学習、人を大切にする徳育教育に力を入れます。また、自分が生まれ育った地域に誇りを持つ「愛郷心」を育てます。

●教育その2　よみ・かき・そろばんと実務教育の重視

教育カリキュラムにも独自性を出していきます。小学校低学年では国語、英語、算数といった「よみ・かき・そろばん」に力をいれ、基礎学力を徹底的に身につけさせます。小学校高学年及び中学校では、日本史や世界史、とりわけ近隣諸国との歴史にも力を入れます。高校では、大学進学教育だけでなく農林水産、畜産、園芸、陶芸、木工、醸造、観光、美術、デザイン、音楽等、九州の産業構造にマッチした専門人材を育成するためのカリキュラムを充実させ、九州の産業発展に貢献できる人材育成に努めていきます。また、海外でも生き抜くことができる人材を育成するため、ディスカッションの授業を取り入れます。英語はもちろん、韓国語・中国語など第2外国語教育を導入します。

●教育その3　大学再編

高等教育に関しては、国立、公立大学を必要に応じて道州立大学に再編し、芸術・獣医・アジア言語等の九州に不足する大学、学部を増設し、これに体育・看護・福祉等の既存の専門大学を加え、特色ある高等教育を実践します。また、英語で授業を行う大学院や学科をつくり、海外から優秀な教授陣を招聘します。

●教育その4　国際人材育成のための留学支援

世界を舞台に活躍できるエリートとグローバル人材を育成していきます。そのために若者の留学を推進します。中国では、現在12万5000人もの若者をアメリカに留学させ、徹底的なエリート教育を行っており、海外留学で培ったグローバルな視野と人的ネットワークが将来国のために強力に活かされることになります。「内向き」傾向にあるといわれる日本人のアメリカへの留学生数は2万5000人弱で、近年減少傾向にあります。国際人材育成のために、九州府はできるだけ多くの若者が海外留学に出るよう支援していきます。

以上、教育を終わります。

危機管理・防衛

まず、危機管理専門機関の設置です。九州ではこれまで、新燃岳の噴火や口蹄疫、鳥インフルエンザといった県境を越える災害や疫病が発生しました。また、津波に対するいち早い避難経路の確保は急務です。こうした広域にわたる事態に対応するために、九州府では危機管理の専門機関を設置し、自衛隊、警察、消防、医療機関、ライフライン、メディアなどの関係分野と緊密に協力しながら、迅速な事態収拾を図ってまいります。

●その2　安全保障

次に安全保障、友国関係構築についてお話をします。

本来、安全保障は国の役割ですが、大陸に近い九州は周辺国家にも高い注意・関心を払い、有事の際の安全保障について準備しておく必要があります。そのため九州府では、韓国・中国・ロシア・台湾などの周辺国を始めとしたアジアの国々との友好関係の構築に全力を尽くします。なお、発足から23年が経つ「アジア太平洋こども会議」では、これまで30を超える国・地域から7500名以上の子どもたちが九州

を訪問しており、そうした人的ネットワークを活かしていくことにも力を入れていきます。

以上で、危機管理・安全保障を終わります。

■インフラ整備

次にインフラ整備です。言うまでもないことですが、限られた財源の中で投資の重点化とスピードアップを行う必要があります。

●交通インフラ整備

まず、交通インフラ整備です。グローバル経済に対応するために、韓国の仁川空港、釜山新港のように、九州においても戦略的重点化を行い、ハブ機能を持った空港・港湾を整備します。重点化を行う空港は、滑走路増設、空港使用料の引き下げなどにより、韓国、台湾、シンガポールなどに負けない多くの路線が集結する体制を作ります。また、日本の港湾物流は世界の変化に乗り遅れており、日本からの貨物は韓国船が集め、釜山港で積み替え、大型船は日本の港を素通りするという、「抜港」問題が起こっています。重点化を行う港湾では、大水深化、バースやガントリークレーンの増設により、大型コンテナ船に備えた機能増強を行います。進出企業への土地の安価な貸与、通関手続きの簡素化・迅速化によるリードタイムの短縮などにより競争力強化を図ります。また、九州域内の高速交通インフラとしては、九州新幹線長崎ルートと東九州自動車道を早期完成させます。長崎方面の観光客、ビジネス客の増加が図れ、または九州内の循環型高速道路網が完成することになります。

●電力の安定供給

次に電力の安定供給です。電力を安価に安定して供給することは経済活動の基本です。九州の電力の4割は原子力で発電されており、全ての原発を停止すれば電力の安定供給を維持できなくなる恐れがあります。一方で、再生可能エネルギーが電力の主力を占めるにはまだ長い時間を要します。したがって、安全性の徹底的な検証を行った上で原発を再稼動させ、あわせて再生可能エネルギーの利用を拡大していくことが必要です。

■産業育成

次に産業育成についてお話をします。まず、これまで九州経済を牽引してきた自動車、半導体、鉄鋼、重機、化学、造船などの基幹産業については、国際競争力の維持のために全力で支援してまいります。さらに九州に根付く産業として、観光、環境、健康、農林水産業に力を入れ、あわせて研究開発機能を充実します。

●観光

まずは観光産業についてお話をします。2010年、九州には100万人を超える外国人の訪問がありましたが、その国籍は韓国、中国、台湾、香港の順に、アジア諸国が上位を占めています。外国人旅行者は1人1回の旅行で約17万円を消費するといわれ、誘客により大きな経済効果が期待されます。外国人旅行者を増やすには、おもてなしの心が大事です。そのため、入国手続きの迅速化、九州全体の観光案内所の設置、外国語表記による観光マップの作成や、両替所やクレジットカード利用箇所の充実、特区制度による独自の通訳案内士、九州に適した韓国語、中国語などの通訳案内士の育成など、旅のバリアフリーを進め、何度も繰り返し訪問していただけるような受け入れ体制を整えます。九州観光推進機構は、九州府の公的な組織に格上げします。これまで各県にあった観光系の部局から優秀な人材を集め、九州全体のために一体的な観光推進を行います。

九州には歴史・文化・食・温泉など豊富な観光資源があります。それを徹底的に売り込むことにより、九州というブランドの確立を目指していきます。

●環境

続いて環境産業についてお話をします。

環境については、福岡県・北九州市・福岡市が国際戦略特区で申請しているグリーンアジア国際戦略総合特区による環境ビジネスを強力に推進していきます。九州には、高度成長期の公害を克服した技術や人材、及び世界に誇る省エネ・省資源をはじめとする環境関連の産業・研究機能と、自動車・半導体などの産業の集積があります。また、エコタウン、環境モデル都市等、環境分野における先駆的な取り組み実績もあります。とりわけ、環境技術は成長の拠点であるアジアでニーズが高いため、アジアに近い九州は優位性があります。こうしたポテンシャルを遺憾無

く発揮し、環境ビジネスの新規市場の創出・拡大を行い、わが国のグリーンイノベーションをリードしていきます。

●健康

次に健康産業についてお話をします。

健康であることは、人の幸せの原点であるだけでなく、増大する医療費の抑制につながります。お年寄りが病気に苦しむことなく、元気に長生きするために予防医学に力を入れていきます。九州府では、定期健診による住民の健康管理と、運動面・栄養面の指導に力を入れ、病気になりにくい地域づくりを目指します。また、医療ツーリズムを推進します。九州は、大学病院を始めとした医療機能が充実しています。また、指宿に粒子線によるがん治療センターが今年1月から本格稼動していますし、平成25年春には鳥栖にも重粒子線がん治療センターがオープンします。こうした特徴を内外にPRすると同時に受け入れ体制を整備することで、医療の面でも九州の地位を高めていきます。

●農林水産業

次に農林水産業についてお話をします。

一次産業の活性化は九州の重要課題です。農業については、九州は農業産出額の全国シェア2割を占めており、全国有数の食糧供給基地です。一方で、一農業者あたりの規模が小さく、後継者不足から耕作放棄地も増加し、20年前は2兆円あった生産高も1・6兆円まで減少し、危機的状況にあります。九州府では、農地を集約し、一農業者あたりの規模を拡大し、生産性を向上させます。農業の担い手として株式会社の参入も推進していきます。また、農産物の生産だけでなく、加工や流通・販売にも農業者が主体的に関わる、いわゆる5次産業化も進めることで活性化を図ります。そしてこうした農産物のブランド化と輸出により、農業のさらなる活性化を図ります。

九州の森林は全面積の63%を占めますが、農業同様、林業も少子高齢化の影響による後継者不足が深刻です。近年、新興国での需要増や森林資源の減少により、アメリカツガや北洋えぞまつなど、輸入材価格が上昇しつつあり、それに伴い、国内材へのニーズも高まりつつあります。複数の林産地から原木を大量に購入し、大規模な製材工場で製材品を大量生産することでコスト減をはかる規模の拡大を図ります。また、森林所有者から製材・加工業者、最終消費者までを総合的にコーディネイトする企業の参入を促すことで、製材の品質向上や加工・流通時のコスト削減をはかり、林業の成長を促していきます。

また、九州の漁業は、海面漁業・養殖業漁獲量で全国シェア15・5%を占めています。安定した漁獲量を維持するためには、排他的経済水域を守り、安心して漁業が行える環境が必要です。北方領土や尖閣諸島など、経済水域の確保に直接影響する領土問題について、九州府は国に対し毅然とした対応をとるよう進言していきます。九州は、ノリやブリといった海面養殖も盛んであり、いったん赤潮が発生すると大きな被害が出ます。「森は海の恋人」と呼ばれるように、海と森は深い循環関係にあります。海洋汚染を防ぎ、豊かな海を維持するために、植樹活動を行うなど森の管理・育成に力を入れていきます。

●研究

最後に研究についてお話をします。

研究分野は、次世代の戦略産業の育成に不可欠であり、大学が大きな役割を果たしています。特に九州には九州大学学術研究都市と、北九州学術研究都市があり、大学・研究機関・企業が集積し研究開発に取り組んでいます。研究開発機能をさらに伸ばし、地域産業のインキュベーターとして九州を強力にリードしていってもらおうと考えています。アメリカのスタンフォード大学は、優秀な研究者を積極的に招聘することでシリコンバレー発展の礎を築き、大学自体も世界トップレベルの評価を得ています。こうした成功例に倣い、国内外から高度人材の招聘や企業研究施設の誘致を積極的に行うことで、世界からも注目される研究都市に育ててまいります。また、優秀な外国人を受け入れるために、良い環境の住宅や子女の教育施設の整備にも努めます。

以上で産業育成を終わります。

■国内外からの企業誘致

次に国内外からの企業誘致についてです。国内外から企業誘致をしなければなりません。九州府は、思い切った税制優遇をはじめとした各種の施策を講じることによって、東アジア圏の成長力を九州に取り込み、ヒト・モノ・カネ・情報が集まる、魅力ある経済圏

を実現していきます。

●法人税

まずは、税制です。国からの権限移譲により、法人税等の税率を九州府が一定の範囲・条件で決められるようになりました。法人税については、これまで日本の実効税率は約40％で、これは世界標準が25％前後であることと比較すると極めて高い水準です。台湾、シンガポールは17％、香港にいたっては16・5％まで税率を下げています。九州府は、まず25％程度まで税率を下げることで企業活力を醸成するとともに、海外から企業、投資、人材が集まる環境を整備します。

●相続税・贈与税

税金の二つ目、相続税、贈与税です。相続税・贈与税も切り下げます。台湾では、2009年に相続税と贈与税を50％から一気に10％にまで大幅に切り下げました。その結果、富裕層が海外に持っていた資産が台湾に戻り、投資の活性化につながりました。九州府も台湾に倣い、税率を切り下げることで産業育成向けの投資に資金を呼び込む環境をつくって参ります。

●貿易の自由化

次に貿易の自由化です。

貿易立国である日本はTPPを始めとする、FTAやEPAにより、自由貿易を推進する必要があります。貿易の自由化は、真の国際競争力をつけることに意義があります。場合によっては、台湾などの海外の活力ある地域と九州府とでローカルFTAを結び、貿易の活性化を図っていくのも一つのやり方でしょう。要は、国を開くことが重要なのです。それにより影響が大きい農業などの産業には、その産業の国際競争力強化の観点から財政をはじめとした支援を行って参ります。

●起業

次に起業の支援を行います。

外国人が九州で会社を設立する際は、在留資格の緩和や在留期間の延長ができるよう国に粘り強く働きかけ、優秀な人材が集まる環境整備を行います。また、国内外からの企業誘致を進める上で、土地を安価に供給することも重要です。福岡市の人工島をそうした目的のために活用するのも有効な方策と考えています。

以上で国内外からの起業誘致を終わります。

■国鉄の分割民営化

5番目でありますが、国鉄の分割民営について触れたいと思います。

国から地方へ権限と責任を移し、自らの力で地域づくりを行うというこの道州制改革は、かつて行われた国鉄の分割民営化と類似しています。昭和39年は東京オリンピックが開催され、東京・新大阪間に東海道新幹線が開業した年でもありますが、この年国鉄は赤字に転落します。その後、状況は悪化していき、昭和44年には償却前赤字になり、借金をしなければ運転資金が回らない状況にまでなりました。危機感を感じた経営陣は生産性向上運動に取り組みますが、労働組合の強硬な反対が起こり、ストが頻発し、職場はますます荒廃していきました。山陽新幹線が開業した昭和50年には運賃を2倍に上げ、以後毎年運賃値上げが続きました。昭和51年にはスト権ストを8日間に及び実施しました。ストを行った組合側は、日本の物流が大混乱に陥ると想定していたのですが、その思惑に反し、物流機能はトラックによって維持されます。以後、毎年6000億円の補助金をもらっても1兆円の赤字

を出す状況が続き、遂に昭和62年国鉄は、旅客会社6社、貨物会社1社の計7社に分割・民営化されたのです。

国鉄が多額の赤字を出し分割されるに至った要因は何か。それは、トップ人事、予算運賃など経営上の重要事項について国会の議決、政府の認可を取る必要があったからです。国が経営に深く干渉していたために、非採算路線の建設判断や運賃改定などが適切にできなかったのです。権限がなく経営判断を行えない状況下で、当事者意識が欠如した無責任経営が行われ、さらに不正常な労使関係が追い討ちをかけ、まったくの機能不全に陥ってしまったわけです。

民営化により状況は一変しました。国による干渉とともに庇護もなくなり、もう2度と同じ過ちは繰り返せないという強い危機感が生まれました。他の輸送機関との競争に負けぬよう、各社とも自らの意思と責任で、地域の事情に即した経営を実践していきました。危機感は社員の意識の変化ももたらし、サービスレベルは国鉄時代と比較にならないほど向上しました。結果、6000億円の補助金をもらっても1兆円の赤字を出していた国鉄は、分割民営化により平成17年にはJR7社で約5000億円の黒字を出し、2400億円の税金を納めるまでになりました。もちろん、補助金はゼロです。国鉄改革の事例は、地域に権限と責任を与え、自主性を持って地域経営を行うことの重要性を示していると考えます。

■結び

結びです。

本日設立された九州府は、人口1323万人、域内総生産2兆円と、経済規模ではヨーロッパの中堅国であるスウェーデンに匹敵するほどです。九州府を活力あるものにするためには、そこに住む住民一人ひとりの自立が重要です。すなわち、みなさんが「自分たちの地域は、自分たちでつくる」という意識を強く持つことが大切なのです。そのためには、これまで以上に住民自身が地域のことを知り、地域とかかわっていく必要があります。地元のまつりやイベントの企画運営をしたり、NPO、ボランティア団体への参加や協働を行うことにより、一人一人の自治意識を高めていきましょう。また、福祉についても国や自治体が国民の福祉すべてをみるのは無理であり、家庭、地域、企業、同業者団体など、国民の自助努力が重要となります。例えば生活保護は、高齢やケガなどで就労できない人のための最後のセーフティネットであり、働ける人はきちんと働くという健全な勤労意欲を保持することが前提であることを認識することが大切です。

九州府の次世代を担う若い皆さんには、さらなる未来の発展のためにアジアへそして世界へ出て行って、チャレンジしていただきたいと思います。アジアにも、上海、台湾、香港、シンガポールといった、国際競争力を持ち、飛躍的に発展する地域、都市がたくさんあります。そうした地域で学び、人と交流し、国際感覚を養い、その知識、経験を九州府のために活かしてください。

日本は今、浮沈の際に立っています。道州制改革は、日本を立て直す最大のチャンスです。各地域ブロックが自分たちの力で互いに競争しあいながら地域づくりをすることで、日本に活力を呼び戻します。

我々が持つべき心構えを改めて言います。

一つは危機感を持つということです。経済の減退は国家の独立の保持すら危うくします。経済成長を背景に急速に台頭してきた中国に毅然と対応するためにも、「このままではいけない」という危機感を一人ひとりが持つことです。二つ目は、グローバル化への対応です。豊かになるには成長するアジアから活力を取り入れていかなければなりません。そのためには、各種障壁や規制を取り払い、国を開き、外へ出て行く、そして外から入りやすくすることが大切です。三つ目は、社会に奉仕・貢献する心です。この国や地域を愛し、自分のためだけでなく、国家・地域のため、人のために努力する心を持つことであります。

こうした心構えを持ち、九州で暮らす人間が知恵と力を結集させることで、将来の世代にも誇れる九州府をつくっていきましょう。

ご清聴、ありがとうございました。

公開記者会見

川崎　10年ぶりの記者会見でして、少し緊張しています。それと同時に今お聴きになったと思うんですけれども、すごく広範な政策の披露がありました。バーチャルなのか、リアルなのかわからなくなっていまして、本当の記者会見でやっているんじゃないかという気さえしています。ホワイトハウスの大統領が就任したときは、100日間は絶対批判しないという100日ルールというのがあるそうです。今日私たちに、最初にゲームみたいな感覚だったんですけれども、改めて今、政策を何うと、ちょっと真面目にやろうかなと思いました。きちんと論議をさせていただきたいと思います。たいへん限られた20分くらいの時間ですけれども、よろしくお願いします。

1300万人強、44兆円総生産という行政体としての九州府ができました。今お話を何っておりますと、国鉄が分割民営のときにやられた経験というのが、石原さんが今回府長に就任された一つの大きな要素だという風にも感じるわけです。府長と呼ばれたときの率直な気持ちを聞かせていただきたいと思います。

石原　府長をちゃんと演じようと思いました。改めて申し上げると、九州にはものすごく課題が多いですね。でも大いに可能性のある、素晴らしい、非常にやりがいのある地域だと思います。

森藤　さすがに若手記者らしい質問でした。財源に対する厳しい質問になるかと思いますが、お話の中で、府内で減税をしていくということ、またいろんなインフラ整備を広域にしていくということ、それから産業育成を活発にしていくということであれば、片方で費金が要ると思います。先ほどのQeoiでもありましたけど、これから九州の府内が否応なく少子高齢化が進んでいくと、年金制度、医療保険、介護保険等の制度はどうしても国に頼らざるを得ないと。この財政も逼迫しているわけですけれども、各種の政策を展開していく上で、九州府内に国から財源を移譲するという前提でありますけれども、それに独自の財源を確保するということもあると思うんですが、

財源の確保、調達について、何かお考えがあれば。

石原　非常に難しい質問です。かつて道州制を検討したときに、九州は2兆円くらい税収が足りないのです。直接税と間接税があって、直接税が3分の2くらい国に還元されるものを、結果的に全部使うお金と、国に仮に明かさないとした場合に、2兆円ぐらい足りないという計算になるわけで、単純にいったらえらいことになるということになるわけですが、この際、産業を活性化し、振興して、一生懸命やれば、ぼくは大変かもしれないけれども、みんなで力を合わせれば産業は元気になる。そうして税収を増やしていくことだと思いますね。実は、国鉄が分割されたとき、九州は大変な地域だったのです。本州にある三社はもともとものすごく儲かる経営体質で、九州は大丈夫かなと思いながらがんばってきましたが、今、何とか自立して経営できるような状態になってきました。国からの補助金は一切ありません。リーマンショックも何とか乗り切れました。それなりに地域に対する投資や貢献ができるようになってきました。そういう経験を活かせば「やればできる」ということになると思います。ただ、年金制度をどうするのかという大きな課題があります。これは国内ですべて同じ制度にしておかないと、転勤等で地域間を移動した場合、難しい問題になるのではないかと思います。しかも金額が極めて大きいのです。それ以外の介護とか医療とか生活保護とか、そうしたものは九州府で制度を引き受けていく必要があると思います。

野口　3人の中ではいちばん若輩者でございますので、新人記者のようにぎこちなく質問をさせていただきます。九州府になって、県境が消えるわけですが、例えば、現在でも顕著な福岡への一極集中化、そういった九州府内における地域間格差、新幹線によって南北は若干緩和されたように聞いておりますけれども、まだ東西の問題というのがあります。こういったようにインフラ整備などがいわゆる勝ち組に偏る懸念はないんだろうかと。ただし、私は自由競争、健全な競争、あるいは切磋琢磨ということが基本だと考えますが、その辺とのすり合わせで、いったいこの地域間格差をどうやって解消していくかをお聞かせ願いたいと存じます。

石原　そうですね。格差はどうしてもありますね。同じ地域の中でも、都会と中山間地との格差はゼロにはならない。何を格差とするか。いろんな格差があるわけです。そういう中で、そこに住む人が、住んでいる土地を愛し、「ここで生活するんだ」とか「この土地を愛しているんだ」と思えることが、一番大事なことだと思います。中山間地は放っておけば無人になってしまうという話もありますが、逆に若者はそういう地域で、所得は２００万円くらいしかないかもしれないけれど、自然が豊かな場所で子どもを育てたいという人もいる。大事なことは、そこで生活できる、生きがいを持てる仕事があることです。例えば中山間地だったら林業とか、農業とか、そういった産業を育てて、そこで人生を豊かに送ることができる。そういった産業育成が大事です。そうした意味で農林水産業が非常に九州にとって大事だということを申し上げたわけです。もう一つは、九州というブロック全体が豊かにならなければ、ダメになるわけで、やはりプライオリティをつけて、社会資本投資をやっていく必要があると思います。特に海外から、アジアから、活力を導入するとすれば、プライオリティをつけて投資する仕掛けが大事なのではないでしょうか。各地域平等に港湾をつくる、平等に空港をつくる、平等に道路をつくってしまうとお金がいくらあっても足りませんし、いつまでたっても完成しない。そうすると日本全体、九州全体がダメになるということになります。そういうことをみんなで理解して、効率的な予算組みをするということで、全体が豊かになっていくのではないか思いますがいかがでしょうか。

川崎　あと県境がなくなったんですけれども、もう一つ残っているのが、議会です。九州全部で8つの県議会が機能を果たしてきたんでしょうけども、九州府というのができたときに、議会はどうあるべきだとお考えでしょうか。

石原　当然、各地域からの代表が選出されて、九州府議会を構成するわけですね。そのときに県がなくなるとはいっても、県という単位は極めて住民の心の中までしみついた行政単位だと思います。したがって、各県単位ぐらいでの人口比例による議員の定数配分という、そういうことをやるのが現実的なのではないのかなという感じがします。基礎自治体は当然、自治体の長

と、議員議会があるわけですが、それはそれぞれ選んでいくということになると思います。

川崎　一県の格差がないような感じになりますかね。

石原　できたらそうしたいと。現実は、必ずしもそうならないかもしれませんが、県単位くらいだったら格差がないようにやれる可能性があるかもしれませんね。

川崎　バーチャルな記者会見がリアルなものになりつつあるのではないかという気がしますね。

斎藤　今、議会の話が出ましたけど、自治体、今おっしゃったように県が消える、県という行政体が消えていく、九州府長が九州全体広域をまとめていく、それから市町村がある。市町村の権限が大きくなるような気がするんですけど、政令市から人口1万未満の村まで、さまざまある。先ほどの地域格差の話につながるんですが、行政能力の差みたいなものが出ざるを得ないのではないか。そうしたときに、考えられるのは、平成大合併のように市町村再編みたいなことが必要になってくるんじゃないかと。そうしないとかなり行政能力の差が実際にあるのではないかという感じがするんですが、その辺はいかがでしょうか。

石原　おそらくそうだと思いますね。九州は233の市町村があります。平成の大合併をやりましたが、小さい自治体もあるんですね。そこに大きなところと同じ仕事をしろといっても、実際にはうまくいかないという現実はあると思います。そこでどうするかですが、九州府の中にそういった基礎自治体をサポートする組織をつくることになると思います。予算とかそういうことだけではなくて。そういうところの、場合によっては地域に出張所を設けるということにもっと断続的にやった方がいいと思うんですよ。まるまる県がなくなったらたいへんだという地域は必ず起こるわけで、平成の大合併で市町村が疲弊している理由の一つに、役所がなくなったことがあるんですね。その辺もよく見ていく必要があると思いますね。議会は合併すればその分なくなると思いますが、基礎自治体にはありますが。出張所みたいなもので対応するというかですね、県庁所在地にはちゃんと連絡事務所を置いて、そこから面倒を見ていくというのもあるかもしれませんね。

野口　今の石原さんのお答えに関連するんですけれども、九州はご存じのように広大なエリアになっています。斎藤さんと石原さんのQ&Aに重複してしまうんですが、この広大な九州府と市町村、これを調整・連絡を取るのは極めて煩雑になるのではないかと。施策をどうやってそこまで徹底させていくかという問題も非常に距離感が出てきてしまう。そういった場合に、今、石原さんがおっしゃった出張所システムというのが一つの見識かもしれませんけれども、それをやると、もとの県と市町村の関係に近くなるという、皮肉な現象が起きやしないかというところを突っ込みたいと思っています。

石原　権限を基本的に、基礎自治体にちゃんと渡せばそういったものはいらないかもしれないですね。233の基礎自治体でしょ。そんなに面倒見なくてもいいところはいっぱいあるわけですから、面倒見なくてはいけないところをどうするかと。直接九州府からコントロールしても、できないことはないかもしれませんね。同時に、そういった中で、また新たなる市町村合併が起こってくることもあると思います。あまりこれは無理にもやる必要もないとは思いますが。

川崎　最後の質問になるかもしれません。今まで道州制や、経済問題を語る一方で、教育問題についてもいろいろと発言されてこられたと思います。今回の九州府の政策の中にも教育政策がありました。そこで、ぜひこれはやりたいという政策があればお願いします。教育に関して、世界史とか、日本史とか、九州の歴史とかここに書いてありますけれども、歴史教育についても、何かご意見があれば。

石原　総論賛成だけど、各論反対。結果は平等である。こういう感じが非常に今あるような気がいつもするもんですから。そうではない。結果が平等じゃなくて、機会の平等。総論賛成、それが会、みんなのために大事なことだったら、自分自身もつらいけれども、教育するという姿勢が大事なんだろうね。意識をきちんと子どもたちに教えなければいけない。もう一つはやっぱり学ぶ、楽しいというかね、勉強する意欲ですね。それがものすごくない、という感じが最近するもんですから、そこのところは教える。そのためには偉人の軌跡を教えていくということ、それがその辺だろうと。我々のお父さんに

はこんな立派な人がいたという、私たちの子どもの頃もありましたよ。いろんな偉人伝を聞いてきた記憶がありますけれども。あとはですね。世界に通用する人間をできるだけつくる。つくるっていうのは、エリートですよ。エリートの育成システムをもっとつくっていくこと。これから外国との競争なんですから、日本国内だけでおろおろしているだけではダメなんで、そしたらそれはやっぱりエリートが必要ですよね。それはやっぱりアジアの国々に学ぶところはすごくあるんじゃないかなと思いますね。

川崎 私も学生さんの話を聴いていてもそう思いました。

野口 本当に最後ですが、まさに経済人から政治家に転身されたお気持ちを一言だけ（笑）。

石原 だからそうひやかされるから僕は嫌だったんだ（笑）。僕は失敗した。矢頭さんにやってもらったら良かった。ものすごくさっきの良かったですよ。総評というかですね。

野口 いや、僕はひやかす気持ちはまったくなくて、これだけ広範な政策ができたということは、本当に九州府ができたときの本当の府長さんが国るだろうなというような内容で、そういう政策だと思います。記者会見、どうもありがとうございました。

閉会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 橋田 紘一 氏
（株式会社 九電工 代表取締役社長）

皆さん、こんばんは。先ほど、九州初代府長の施政方針演説がございましたが、何年おやりになるのかなと思いながらうかがっておりました。4年になるのか、6年になるのか、その辺がはっきり決まっているのかわからないのですが、できれば6年ぐらいおやりになって、しっかりと先ほど説明された施政方針を成し遂げていただきたい、そのように思います。

九州経済フォーラムでは、九州道州制について、今まで様々な議論がありました。道州制のあり方、あるいは道州制の是非、そういう議論をずいぶん長く、日本国中で実施してきたと思います。

我々九州経済フォーラムでは、議論はもうそろそろよいのではないか、むしろいかにスピーディに実行するかを考えてもよいのではないかということで、様々な研究会がございます。

そのひとつ、道州制について検討している研究会では、今年の2月22日に、「バーチャル州議会」というものを実施しました。先ほど出ておられました熊本県の蒲島県知事に道州制の初代の長になっていただき、我々が九州の県と県の境の市町村、県際にいらっしゃる町長さんたち、あるいは市長さんたちにも声をおかけし、バーチャル議会の議員になっていただいて、半日かけて会議を実施しました。その後に、「九州県際サミット」という、県と県の間にあるいろんな市町村、宮崎県だと五ヶ瀬町長など、そういう方々に多数お集まりいただいて、バーチャル会議を実施しました。

今日、初代府長、石原さんから提案がございました防衛の問題や教育の問題、あるいは救護のあり方など、議会の議案としてバーチャル的に検討、審議し、可決していくというようなことを行いました。その後に、県際の市町村長さんたちの「九州県際サミット」というものを開催し、これから毎年一回、そういう県際におられる市町村長さんたちの集まりの会議をやっていきましょうというお声かけをしておりまして、来年にもう一度、九州経済フォーラムの事務局がお世話をして、今後も持続していくよう思っています。

私たちも何とか、九州道州制が実現しないかなと、こう思っています。最初の方に、学生諸君から様々なプレゼンテーションをしてもらいました。九州のことを思い、日本国のことを思って、一生懸命プレゼンしてもらいました。彼らがこれからの日本国を背負っていくと思うのですが、私たちの想念は、これからの日本国の20年、30年のことを考えて、若い人たちにいろんな形で引き継いでいかなければいけないと思っています。

石原初代府長、これだけの施政演説をまとめられましたこと、大変なご苦労があったと思います。非常に中身の濃い、一つずつ吟味すると、たいへん難しい問題もありますが、極めて重要なことであると思います。ぜひ私たちは、せっかくこういう形で九州府が成立したわけでありますので、これを大事に育てながら、できるだけ早く、九州の力で九州府をつくっていきたいと思います。

最後に石原さんもおっしゃってありましたが、特に九州の次世代を担う若い皆さんに、さらなる未来の発展のために、アジアへ、そして世界へ出ていきチャレンジしていただきたいと思います。「今、日本に浮沈の際に立っている。道州制改革は日本を立て直す最大のチャンスである。各地域、ブロックが自分たちの力で、お互いに競争し合いながら、地域づくりをすることが、日本に活力を呼び戻すことである」と府長はおっしゃってありました。また、「経済のこのままの減衰、減退は国家独立の保持すら危うくする」という警鐘を鳴らされました。皆さんと一緒に危機感を持って、力を合わせて、将来の世代にも誇れる九州府をつくっていきたいと思います。本当にありがとうございました。

特別講演

開会挨拶

九州経済フォーラム 副会長 是永 駿 氏
（立命館アジア太平洋大学 学長）

皆様、こんばんは。私は九州経済フォーラム副会長を仰せつかっております是永と申します。25周年記念事業では、アジア事業を担当させていただきました。日頃、立命館アジア太平洋大学では、グローバル人材の育成に努めております。まずもって、本日の九州府成立、石原進初代府長ご就任、おめでとうございます。お慶び申し上げたいと思います。

本日、特別講演いただきます、黄茂雄様のご紹介をさせていただきます。黄茂雄様は、中華民國工商協進會榮譽理事長、そしてTECO（テコ）グループ東元集団の会長を務めておられ、台湾の経済界の中心的な存在の方でございます。九州経済フォーラムでは、先日、9月29日から10月1日まで、創立25周年記念の台湾事業を開催いたしました。黄茂雄様のご尽力のおかげで、我々九州側からは、石原進団長はじめ一ぱい名の一大代表団で押しかけたのでありますけども、黄様のご尽力で、総統府での蕭萬長副総統との謁見も叶いましたし、台湾の政財界の重鎮の皆様とのお引き合わせも整えていただきました。心より感謝申し上げます。また現地では、きめ細やかな心配りを頂戴し、参加者全員が深い感銘を受けて九州に戻ってきたわけであります。九州経済フォーラムといたしましては、今後の日本、台湾、日台の新たなパートナーシップ構築には、黄会長のお力添えなくしては考えられないと思っております。本日は、「今こそゴールデンチャンス！！日台関係の未来に向けて」と題しまして、ご講演いただきます。短い時間ではありますが、九州の将来に貴重なご示唆を頂戴できるものを思っております。黄茂雄様は、日本の慶応大学の経済学部をご卒業されまして、米ペンシルバニア大学ウォートン・スクールでMBAを取得なさり、チャンジュンクリスチャン大学名誉博士PhDをお持ちであります。それでは黄茂雄様、よろしくお願いします。

特別講演

テーマ

「今こそゴールデンチャンス」

講師

中華民國工商協進會
榮譽理事長

黄 茂雄 氏

石原府長さん、おめでとうございます。私はこういう、非常に貴重な石原府長の就任演説と特別記者会見、非常にアフィリシエイトさせていただきました。私に別に特別講演という予定ではなくて、特別報告くらいはさせていただこうと思って、引き受けるということを申し上げたんですけれども、かねてから私の会社は、九州とは非常に縁が深いんです。まず50数年来、八幡製鉄、今の新日鉄さんとおつきあいしておりまして、私が社長就任のときには、八幡製鉄さんにたいへん大きなパーティと言いますか、祝賀をしていただきましたし、それからパートナーシップとしては、安川電機さんと約50年、ロイヤルホストさんとは約20年、高玉の寿司とは12年。私は本当に九州が好きだし、博多も「博多21の会」と台湾の「七心餐会」との提携を、私と井上さんと一緒に仲人をしたわけです。

この度は、九州経済フォーラムの皆様方を台湾にお迎えすることができて、最初は5、60名、しかし、25周年事業だからもっと増えるかもしれませんということで、結局106名来たんですね。本当に台湾の総統府に入りきれないくらいに熱狂的でございまして、その前に、大前　研一先生が主催している向研会でも80数名来ております。高宮さんは続けて2回来て、うちの台湾の大統領と副大統領を全部ぶつけました。この次はこれ以上はちょっと用意できないと思いますけれども、九州の皆さん方が非常に熱心であるということは、私たちに相当強くアピールされたと思いますし、これからのいろんな取り組みにおいては、非常に期待が寄せられると私は感じられます。

今日、こちらへ来る前に、実は2日間、観光旅行させていただきました。昨日は長崎グラバー邸にも行きましたし、出島にも行きました。そして最後ににハウステンボスで一泊させていただいて、ハウステンボスがだいぶ回復したということを見て、私は非常に嬉しく感じます。私は10年前に確か井上さん、台湾の中央銀行の総裁のご夫婦と一緒にそこに行ったんですね。そのときはまだ神近さんが説明してくれましたけども、今度はANAホテルになって、来年はオークラホテルになるという話で、これも時代の変化でしょうし、でも非常に健在だし、立派なこういう施設を復活させたっていうことはたいへん嬉しいことでございます。今朝ほど

早く平戸の方へ、佐世保から参りまして、どうしてこういうことを行ったかと言いますと、やっぱりあの辺が台湾との、あるいは中国との結びつきが強いところであるということです。長崎は皆さんご承知のように、昔から中国人、西洋のポルトガル人、オランダ人がそれぞれ商業行動と言いますか、貿易などを非常に活発にやっておりましたところです。私も本場のちゃんぽんを食べました。進化しています。台湾のちゃんぽんよりもおいしいと思います。昨日の長崎行きの主な目的は、孫文と、梅屋庄吉さんの展示でございました。梅屋庄吉さんは長崎の方で、近代中国の帝政に大きな功績を遂げられている、大きな貢献をされたということを、非常に私ども、今回は先遣隊ですけれども、8名ばかり私と一緒に来た台湾新幹線の会長兼社長の夫妻、前任の台湾の副総理の弟夫妻、蕭副総統の甥子さんと、割と重要な連中を連れて、孫文さんと梅屋庄吉さんのいろんなつき合いのそういう文物資料というのを拝見しました。最初は30分で片づけようと思ったんですが、とうとう2時間半かかって、ゆっくり見させてもらいました。あれは本当に、日本と中国の関係が良くないと言いますが、今日の現代中国ができたというのは、日本の方の力を仰いだということがあの展示でよくわかりました。非常に感動しました。満州、清朝時代を近代中国に切り替えたのは、もう一人、頭山満さんと言うんですか、いろんな人がみんなお金を出しているんですね。梅屋庄吉さんは、自分の資財の9割くらい、近代中国の活動などに投げ打ったということですね。私はその本を相当買って、台湾に持って帰って、皆さん方に読んでもらおうと思っております。

それから今日は、平戸に行きましたのは、まさしく鄭成功（ていせいこう）があそこで生まれたということですね。私も平戸の若い市長さん、黒田さんという方にお会いして、この方は非常に行動力のある若い人で、私も非常にいいお友達になりました。前の市長さんに、私は「台湾においでくださいね」と言ったら、「気持ちはありがたいけれども、ちょっと長崎の中国の総領事に相談して」とこう言うわけです。なんでよその国に話を持って行かなければいけないのかと。悪いことするわけでもなんでもないですのに、ちょっとがっかりしたんですけれども、今度の方は非常に行動派だし、本当に好きになれそうな方で、皆さんもやっぱり鄭成功の生まれたところ、隠れキリシタンとか、いっぱい資源があるということがわかりました。いずれにしても絆がかなり強いところ、前は、八田與一（はったよいち）という、金沢生まれのダムを作った技師がいたんです。その方が台湾の南の穀倉、大きな平野をお米がたくさんできるようないい業績を残されたんですけれども、そのダムと灌漑用水路をつくって日本に帰って来たんですけれども、その後東南アジアに派遣されたときに魚雷で撃墜されて沈没して亡くなったんです。奥様は台湾に残ったんです。ところが敗戦のために奥様が日本に引き揚げなければいけないということになって、彼女は自分の子どもを船に乗せて、親戚の方にお願いして、日本に連れて帰ってもらうことにして、自分はまた烏山頭（うざんとう）ダムの方へ戻って、そして皆さんに最後の挨拶をして、ダムに身投げをしたんです。今では、台湾では神様として祀られています。我々の総領事がそこにいますけれども、いろいろ調べて行きますと、本当にいろんな面で絆がありまして、台湾の方々と日本の、例えば一昨年、大々的なヒットを遂げたロマンチックな映画「海角七号」というようなね、日本の教師が引き揚げるときに、教え子の女子学生がそれに7つの手紙を送るんですね。それにまつわって、60年後に、またも一つのロマンスが起こるんですよ。今度は男の方は台湾の青年、女性は日本のプロダクションのアシスタントという、これがまた恋に落ちるわけですね。60年を隔てても、まだ台湾と日本との間では、そういうような絆があって、どんどん人間関係が深まると。相性がいいんですね、台湾人と日本人というのは、何ら隔たりがないような気がいたします。

私の今日の題目はですね、私のレジメ通りに全部やりますと、2時間かかりますので、それじゃあまずいと思いますので、簡単に要約しますと、日本は現状はたぶん私が想定するのには、TPP加入問題でいろいろ議論されておると。それから財政の立て直し、そのために税金がなかなか下がらないと、さらに引き上げるというような感じになって、本当に皆様方はたいへんだろうと私は同情申し上げるんですが、しかし、立て直した上で、また経済を

発展させて、さらなる次のステップを踏んでいくのではないかと思います。

先ほど、府長の就任演説の中にありました地方の広域自治、これは非常に必要なんですね。私はまったく石原先生のお話に大賛成でございます。私は昔ドイツのハンブルグに行きましたときに、ハンブルグは本当に大きな自治権を持っております。企業誘致する場合でも、いろんな特権を持って他の州区と全然違っていいわけです。それから中央政府に掛け合って、外国人の滞在を長くするとか延長するとかいう話がありましたが、それはハンブルグでは全部ビザから例から、滞在に地方政府がやってしまうんですね。そんなようなことで、ロンドンからハンブルグに移したんです。外交については、米国、そして中国と、こういう基軸を設定しましたけれども、これからはもう少しそれも見直す必要があると思いますね。アジアの親国国家と。で、日本の苦しみというのは、災害問題とか、超円高とか、サプライチェーンも、もう一度構築をしなきゃいけないし、今の市場を冷えているところをどうやってまた活性化していくかというようなことですが、その上で、海外の新しい、日本国内の市場が伸びないならば、新たなる市場をどうやって開拓するかということを、皆さん、相当悩んでいらっしゃるし、研究されていると思います。

そこで私が提案するのは、中国と台湾に少し目を向けたらいかがですかということです。中国は皆さんもご承知のように、いよいよ12回の五か年計画、これは、良く見ていったらわかりますように、量から質へと転換する、経済成長が二けた台でなくてもいいし、7－8%であってもいいということで、そこで格差をもっと是正しなきゃいけない。そして中産階級とか、富裕層もにっこうありますので、こないだも誰かとお話ししたんですけれども、日本のある料亭が北京で非常にヒットしたと。一人当たり3万円はウケない。10万円だったら非常にウケるという、これは大前さんの話です。10万円の方がウケるんですよ。なぜかというと、全部役人の接待に使っているから。まあ、その高いほど尊重しているということでありますので、それはさておいて、私はやはり、いろんなマーケティングをされたら非常にいいのではないかと思いますね。

それから軍事力も非常に、科学技術がベースになったものがあるんですが、これをもう少し民政、あるいは実用面に将来ロケットの技術であろうがなんであろうが、活用されていくと良いと思います。もう一つは中国は、沿海岸からだんだん内陸、そして、西域地方、昔、清の時代から、どんどん進んでおりますけれども、西域というのは、今の中央アジアからトルコまで向かっているところで、中国はあそこにもう一本、鉄道を敷こうという計画も非常に噂されております。いずれにしても皆さんはもう2万社、中国に日本から進出しておられるので、私たちは9万社行っています。週に58便、37の都市に向かって飛んでおります。直行便でね。ですから、台湾の利用ということ、最近よく、日本の東洋経済とか、エコノミストに出ているように、中国は台湾から攻めろと、こういうような提案もされているようですけれども、私は、前は自分が一生懸命行っているから、我田引水ですが、やっぱり日本の方がいろいろ調べた上でそれも提案されている。10月のエコノミストをご覧になれば、おわかりになっていただけると思います。

私は、「ゴールデンチャンスである」

と言っている意味は、私たちが20年間中国とつき合って、これは言葉の障壁は全然ないし、文化的にも近いということで、最近はこういう密な往来になって、私たちの若い連中は、日本に留学するよりも北京や上海に留学するようになっているわけです。それは何を勉強するかというと、人脈づくりで行くんです。みんなそういうつもりでやっていると思います。ですから、私は皆さん方が、ホップステップジャンプ、ジャンプするためには、まずは台湾にステップすると捉えていただいて、台湾の中堅幹部をつくって、そして中国へ行くと。日本の幹部に中国語を教えるのは5年10年かかります。その分を省けるわけです。賃金も台湾の給料ベースだったら、日本の半分くらいか、3分の1ということになるかもしれません。そういう意味合いで非常に利用しやすいと思います。西洋とか、資本主義経済については、日本とは非常に親しくやっているから問題ないと思います。

そんなことで、私どもは先ほど石原府長がおっしゃったように、法人所得税を17%にして、遺産相続と贈与税は10%に下げております。ですから、中国に行って、金持ちになった人が台湾に来ていろんなことをやっております。最近、私どもの政府は、閣僚を2人起用して、二班に分かれて、日本の地方をずっと回って参りました。1人は台湾の経済企画大臣、女性です。もう一人は元経済産業大臣で、今、国務大臣。ただし、経済担当者、私はこの2人のお手伝いをしまして、一緒に回ったんですけれども、何をやるかと言うと、日本の地方の特色のある、非常に中堅の、少し光っているような中小企業、この件を私たちは探してパートナーシップを組む。台湾でパートナーシップをして、台湾政府がまたそれを奨励する、ということが工業団地でも提供しまして、その上で必要に応じて奨励、例えば研究開発の助成金を出したり、ブランドをつくるためのいろんな助成金を与えたり、人材を教育するためのいろんなことも手伝うという。

そういうことで、私は、日本と台湾の絆はこれだけ非常に深いということであれば、少し信頼してパートナーシップを探していけばいいと。私たちから見れば、ダイヤモンド探し。光っている日本の中堅企業、大企業はすでにみんな行ってますから、中堅企業が私たちは非常に価値があるし、さらに中国に行けば、大きな企業になっていくのではないかと。15年前、20年前に、私は3つの例だけ上げてお話を終わりたいと思いますけれども、台湾は、小さな金型工場がありまして、わずか10人の技師を連れて中国へ行きました。中国で一人の金型技師にですね、倍の給料払ってあげるから、一人につき1年の間に、8人から10人の職工さんをつくれ」と、そしたら1年でだいたい80人、3年間で240人、金型職工さんができた。それが今日のホクストンといって、電子のアウトソーシングの依頼する、最大の今一兆円以上の会社ですよね。中小企業の汚い金型屋さんでした。2番目の例はですね、台湾でサラダオイルを売っていた中小企業が中国に行きまして、古いラーメンをつくるライン買った。担当した。継ぎ足して二台目を買おうとしたときには、日清食品ですかね、そこがこんな小さい会社はダメだと、目にしなかったので、彼は三洋食品に行った。三洋食品は日清食品よりちょっと小さい会社で、三洋食品はその男を見込んで、ラインを提供して、代金はいいと、お前の会社の株にしてもらえばいいと、出世払いということですね。それが今、彼の会社が大きくなって、三洋食品たいへんなものですよ。あの会社は今、中国ではナンバー1の食品メーカーになっています。そのからの実入りだけで、サンヨー食品は利益がある。私も台湾モスバーガーにはかなり貢いでいるんですよ。最後の一つの例は、靴屋さんね。ケミカルシューズ。これも台湾では三流の靴屋さんだけど、中国に行って、ナイキ、アディダスとお付き合いをして、今20万人くらい雇っております。ですからね、私は今でもチャンスはあります。だが、中国へ行くのには、ある程度中堅幹部と中国の文化とかいろんなものを少し厚くして、それから出かけるということであれば比較的無難ではないかと思います。

こういうことでご報告申し上げます。どうもありがとうございました。

記念品進呈

記念式典

会長挨拶

九州経済フォーラム 会長 石原 進 氏（九州旅客鉄道株式会社 代表取締役会長）

どうも皆様お疲れ様でございます。九州経済フォーラム会長の石原でございます。このように多くの方が25周年記念事業に参加していただきまして、本当にありがとうございます。

先ほどDVDで報告がありましたように、昭和61年の3月にこの九州経済フォーラムは誕生しました。株式会社はせがわの長谷川裕一会長が中心になって、このフォーラムを大きくしていただいたわけですが、若手の経済人が九州だけにとどまっていると、視野が非常にローカルになってしまうんですね。もっと広い視野を持ち、将来を考え、九州を引っ張っていくような、そういった人材を育てたい、ということでこの九州経済フォーラムは誕生しました。「創ろう九州新時代、拓こうアジアの新世紀」というスローガンがあります。最近は使うことが少ないのですが、今も誕生当時の考え方が変わっているわけではありません。5周年、10周年、15周年、20周年、それから25周年、今回5回の周年事業を行うことができました。5周年のときは平成2年ですから、ちょうどバブルの最中で、ものすごく日本人は浮かれて、調子が良かった頃です。平成7年の10周年記念のときは、バブル経済が崩壊し、阪神淡路大震災が発生した年です。日本経済が大きく変わりつつあるときです。それから15周年が、平成12年、ちょうど2000年のミレニアムです。この年、沖縄サミットがあり、そごうが倒産し、みずほフィナンシャルグループが発足した年になります。ちょうど銀行の経営が非常に厳しい状況で、大銀行の合併がどんどん起こっていった時期と重なります。それから平成18年、20周年記念事業。このときはライブドア事件。北朝鮮がテポドンを日本海に落としたときでございまして、そういった世相の中で、この間、日本は失われた10年と言われるように、経済成長はほとんどしないで、一方、中国が急激に伸びてきた時代です。この辺になると、日本は大丈夫かなという危機感もずいぶん出てまいりましたが、その後、平成21年にリーマンショックが起こり、今年、平成23年には東日本大震災という大変な震災が起こったわけです。こういう状況の中で、25周年を迎えたということです。先ほど申しあげましたように、日本は、本当に浮沈の際に立っているのではないかなと私は思います。我々は大変な危機感を持ってこの日本を変えていかなければいけないわけです。ではそれはどうやってやるのか。やはり国民の心を大きく変える改革が必要ではないだろうか、それが道州制だと言っているわけでありますが、道州制を実施することで権限と責任を持って、人に頼るのではなくて、自分たちの力でこの地域を救っていくんだと。成功してもっと九州を盛り上げるぞと、そういう世の中をつくらなければいけないと思うのです。

今日は素晴らしい若者が5人、発表してくれました。本当に素晴らしい発表だと思います。私も意を強くしました。そういう若者が元気に羽ばたける九州をつくっていく必要があるわけですが、このままでは、そのような九州にはならないのではないかと思います。就職は東京で、或いは大学から東京へ、という人が多いのが現実です。九州を、若者が思い切り仕事のできる、自分の将来をかけて盛り上げていこうと思える地域にしなければいけなりません。そのためには何をしていくのかということですが、国を開く。そして、国民、

住民が自立の心を持つということが必要です。そうした心を持つためには教育が大切だと思います。今日は、若い学生もいっぱいいらっしゃいます。そして企業の方もいらっしゃる。皆さんそれぞれ、今回の25周年事業での様々なイベントを通じて、これからの九州をどうしていくのかということを考えていただくことになれば幸いでございます。

最後に、この式典の後で功労表彰を行います。さきほどのDVDにもありましたけれども、これまでご協力いただきました交流団体の方々、25周年記念事業を沖縄、熊本、台湾、本日の福岡で開催しましたが、これらの開催でお世話になった方々に感謝の意を申し上げたいと思います。簡単でございますが、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

功労表彰　受賞者一覧

株式会社 りゅうせき 参与
稲嶺 恵一 氏

社団法人 那覇市観光協会 顧問
米村 幸政 氏

社団法人 沖縄県経営者協会 会長
知念 榮治 氏

熊本県 県知事
蒲島 郁夫 氏

中華民國工商協進會 榮譽理事長
黄 茂雄 氏

東光石油㈱ 代表取締役社長
石原 靖也 氏

伊佐市 市長
隈元 新 氏

受賞者代表挨拶

株式会社りゅうせき 参与 稲嶺 恵一 氏

稲嶺でございます。まず感謝の言葉を申し上げたいと思います。2つあります。1つは今回の25周年、素晴らしいものでした。私も本当に感動いたしました。沖縄の立場から言いますと、実にいろいろ問題があります。日本が常に、難しい問題というのを先送りにしているというところに大きな問題があると思います。例えば安全保障の問題とか、外交の問題、防衛の問題、これはもう、重要な問題です。すべて重要な問題を先送りにしたのです。そこに沖縄の苦悩がある。ところが逆に、この九州経済フォーラムは、先送りではないのです。前取りなのですね。今日の九州府長さんの話、たいへん素晴らしかったです。一つの立派な考え方を持っておられまして、それを述べられました。また、クリエイティブコンテスト、素晴らしい提言でございました。このような素晴らしい席上で、私どもが功労者として表彰を受けたということは、たいへん感激でございます。心から御礼を申し上げたいと思っております。それともう一つに、先ほど申し上げましたように、沖縄だけでなく、各地でいろいろな事業を行いました。各地の皆さんも非常に感謝していると思います。ゆえに個々の問題もクローズアップされます。ただいまの台湾についても、台湾と日本との関係、台湾と九州との関係、これがどういう風に今後展開した方がプラスになるのだろうか、お互いにとってメリット、ウィンウィンの関係になるわけでございます。すべて各地の問題がクローズアップされるわけでして、私は、この功績はたいへん大きいと思っております。これを機に私どももますます、張り切ってそれなりの仕事をしたいと思っておりますけれども、ひとえには、この25周年、これは四半世紀に至る間にこれだけ素晴らしく大きく、成長、発展されました、九州経済フォーラムの石原会長をはじめとする多くの関係者の皆様に心から御礼を申し上げたいと思いますし、改めて敬意を表したいと思っております。

今後ますますのご発展を心から祈念をいたしまして、ご挨拶といたします。本日はどうもおめでとうございます。

記念レセプション

実行委員長挨拶

九州経済フォーラム 副会長 末吉 紀雄 氏（コカ・コーラウエスト株式会社 代表取締役会長）

本日はお忙しい中、多くの方々にご参加いただきまして、心より御礼を申し上げます。

さて、この25周年記念事業は、まず沖縄での事業に始まり、熊本、台湾、そして福岡と進めて参りました。石原九州府長の力強い就任演説にもありましたが、これまで沖縄で日本を考え、熊本で九州を考え、台湾でアジアを考えてきたこと、すべてがここ福岡で集約され、そして具体的な方針が示されました。

私たちが、この25周年記念事業で求めていたものは、この4つの拠点で生まれた課題や問題を集約し、そして新たな九州を創り上げていくことであります。その実現に向けては、九州各地およびアジアの皆さま方より、多くの力添えを賜りました。今後は、九州の更なる活性化の原動力に変えるべく、九州経済フォーラムの活動を加速させていきたいと考えております。

また、本日は、学生による九州活性化のコンテストを開催しましたが、さまざまな提案があり、非常に頼もしく感じました。九州経済フォーラムは、創設時より若手の人材の育成に力を入れ活動しておりましたので、この精神を今後も継続し、世代間の対話、交流を積極的に進めていきたいと思います。

最後になりますが、これまでご支援をいただきました皆さん方に心から感謝申し上げるとともに、今後ますますの発展につながることを祈念いたしまして、挨拶に代えさせていただきます。

来賓挨拶

福岡県副知事 服部 誠太郎 氏

皆さん、こんばんは。ただいまご紹介をいただきました、福岡県副知事の服部でございます。九州経済フォーラム創立25周年、誠におめでとうございます。また本日はこのように、盛大に式典やレセプションが執り行われまして、心よりお祝いを申し上げます。九州経済フォーラムは、昭和61年に設立されましてから、25年間の永きにわたりまして、政治、経済、文化、あるいは社会問題など広範な分野にわたっての研鑽を重ねてこられました。また、行政、経済、各分野の人材の交流にもしっかり取り組んでこられまして、九州経済の活性化に大きな貢献をされているところでございます。このフォーラムの創立以来、運営にご尽力をされてこられました長谷川相談役、石原会長、小早川理事長はじめ、役員、会員の皆様方の熱意に対しまして、深く敬意を表する次第でございます。

さて、我が国は現在、大震災からの復興という課題、また電力安定供給という問題、急激な円高、これらに起因します国内産業の空洞化の懸念、このように大きな困難に直面をいたしております。今こそ皆様の底力、地域の底力で、まずこの福岡県を元気にし、この元気を西から全国に拡げていかなければならないと考えております。我が県はこれまで本県の雇用の8割を担っていただいています中小企業の皆様に対し、経営、金融、あるいは販路拡大といった点につきまして、総合的な支援に取り組んで参りました。また自動車、先端半導体、あるいはバイオといった先端的な成長産業にも力を注いで参りました。特にこの9月30日には、今日お集まりの経済界の皆様方との連携のもとに、県、北九州市、福岡市、三者共同でグリーンアジア国際戦略総合特区を国に申請をいたしました。アジアの活力を取り込み、アジアから世界に展開し、そしてアジアとともに発展する我が県が、我が国の経済の牽引役となるということを目指しているところでございます。実は明日、特区の採択に向けた専門家のヒアリングがありまして、私も参りますが、石原会長にもご出席をいただき、プレゼンテーションいただくということになっております。12月の指定に向けまして、全力を挙げて取り組む覚悟でございますので、本日ご出席の皆様方にもどうか、ご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、九州経済フォーラムのますますのご発展と、本日ご出席の皆様のご健勝、ご活躍をお祈り申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございました。

乾杯

九州経済フォーラム 副会長
髙宮 俊諦 氏
（株式会社タカミヤ 代表取締役社長）

皆さん、こんばんは。皆様のおかげで、今日は、九州経済フォーラム25周年記念事業が本当に立派に素晴らしい開催で終えることができました。本当にありがとうございます。これからは皆様方とご一緒に楽しいひとときを過ごさせていただきますが、今日は石原府長より、なんとかこの九州から日本を変えたいという強い、熱い思いで、九州府の設立宣言をさせていただきました。同様にアジアでも先ほどの講演がございましたように、アジア新時代の到来、幕開けが始まろうといたしております。この2つの大きなうねりを九州全域が一体となって、それぞれの持ち味を発揮して、さらに大きなものに膨らませていきたいという風に思います。そのような熱い、熱い思いを込めて、乾杯の音頭を取らせていただきます。それでは、九州府の一日も早い実現を目指して、乾杯！

閉会挨拶

九州経済フォーラム 理事長 小早川 明徳 氏

皆さん、本日はたいへんお忙しいところ、ご出席をいただきましてありがとうございました。おかげさまで25周年記念事業を無事終了することができました。組織というのは、トップの器を超えることはございません。この九州経済フォーラムは、石原進という、いわゆる男の中の男を会長にいたしまして、本日、こういうことで、皆様方に九州経済フォーラムの次のミッションを明確にできたという風に思っております。

そこで一つ、皆様方にご報告があります。本日実行委員長のご挨拶をいただきました、コカ・コーラ・ウエストジャパン、末吉紀雄さんが福岡商工会議所の会頭になりました。ちょっとご紹介をします。壇上にお上がりくださいませ。先ほどご挨拶いただきました、コカ・コーラ・ウエストジャパンの末吉紀雄会長でございます。今、日本の中でコカ・コーラを代表する方でございます。どうか今後とも、コカ・コーラの活躍、商工会議所の会頭としての活躍にご支援をいただきますよう、心からお願い申し上げます。

石原会長が「危機感を持たなければいけない」ということを本日おっしゃっていただきました。私どもは、沖縄と熊本と台湾で事業をいたしました。本日福岡でその総括の事業をさせていただきました。その中のリーダーに共通して見えたものは、そのリーダーとしての覚悟であります。その覚悟は、裏を返せば、危機感であります。沖縄はいわゆる日本の防衛の最前線として、日本の安全を担っておるわけでございます。熊本はいわゆる九州の中心地として、環境資源、そして来たるべき世紀の循環となる社会のミッションを担っております。台湾は中国という国を経済的には活用しながら、国の独立を守るために、まさにリーダーは崖っぷちにおいて、国の発展のために努力をされております。私どもはこの記念事業の中で、そういうリーダーの共通する覚悟というもの、腹をくくるという、この非常に大事なものを見せてもらった気がいたします。今日の府長就任式で、石原会長の覚悟も十分伝わりました。今日の就任式におきまして、例えばタレントとか、評論家とか、なぜ呼ばなかったかと、人が集めにくいじゃないかという話も聞きました。しかしながら、九州のことを考える九州経済フォーラムは、九州のリーダーの器、これ以上に九州の発展は不可能であります。ということは、九州のリーダーが腹をくくるということがまず求められるという風に思いました。従いまして、あえて石原会長に今日の府長就任式の府長役をお願い申し上げました。そして、それを見事に期待に応えていただきました。次の九州の我々の方向性をイメージしていただきました。これで一歩踏み込めたのではないかという風に思います。リーダーが変われば、九州が変わる。九州が変われば、日本が変わる。そういう思いで、私どもに九州経済フォーラムの皆様方とともに、力を合わせ、汗を流し、九州島の建設に邁進をして参りたいという風に思います。

この25周年の記念事業を閉めるにあたり、その創業者である長谷川裕一氏に心から敬意を表します。そしてまた、2代目会長をお引き受けいただきました、今は亡きゼンリンの大迫会長に心から感謝を交えまして、そして、今の石原進会長に満腔の期待を込めまして終わらせていただきます。ありがとうございました。

◆博多手一本◆

九州経済フォーラム　相談役

長谷川 裕一 氏

（株式会社はせがわ 代表取締役会長）

ただいまご紹介いただきました長谷川でございます。今日はほんとに感無量でございます。石原会長の勇気に心から敬意を表したいと思います。皆さん、拍手をお願いします。

本日のこの素晴らしい式典はもとより、沖縄、熊本、そして台湾と、たいへんなご準備にご指導くださった、またご苦労くださった事務局の方々、そして担当の九州経済フォーラムの方々、そういう方々に心から感謝を申し上げるとともに、今日また、九州経済フォーラムのこのような式典に進んで、中にはおつきあいで来られた方もございますが、大枚1万2000円払ってご参加くださった方々にも心から感謝を申し上げたいと思います。

それでは皆さんのお話がございましたように、九州から日本を変える、そしていずれ、日本が世界から仰がれる国となる、そのようなことを期待して、今日お集まりの皆さんがますますご発展されることを大いに祈念して、手一本をいたします。

九州経済フォーラム 25年の想い出

Kyushu economic forum

Memories of 25years

歴史年表……P267
交流懇談会記録…P267

九州経済フォーラム 歴史年表

Kyushu economic forum history

1986~2012

昭和61年	3月	長谷川和一氏(㈱はせがわ)をはじめ,12名の役員により九州経済フォーラムが発足
	6月	第1回定例会「最近の円相場と日本経済」(大蔵省国際金融局長 久保田勇夫氏)[福岡 博多城山ホテル]
平成元年	3月	九州電力㈱の川合会長が九州経済フォーラム顧問に就任
	4月	博多21の会「5周年記念事業海外視察」共催 [イタリア・オーストリア・西ドイツ]
	7月	博多21の会「5周年記念シンポジウム」共催 [福岡 西日本銀行本店大ホール]
平成2年	11月	創立5周年事業「九州未来会議2020そのとき西ゃは」[大分 大津観光ホテル]
平成3年	3月	北海道「一つの会」との交流会
平成4年	2月	九州ニュービジネス協議会「九州NIC・ニュービジネス・フォーラム92」共催
	11月	九州ニュービジネス協議会「設立五周年記念フォーラム」共催
平成5年	2月	九州ニュービジネス協議会「デザインフォーラム93」共催
	4月	特別講演 中国社会科学院 林 凌講演氏「中国経済急成長の秘密」[福岡 西日本銀行本店ホール]
平成6年	2月	博多21の会「10周年記念講演会」[福岡 ホテル日航福岡]
	3月	九州ニュービジネス協議会「感性ビジネスフォーラム94」共催 [福岡 福岡国際ホール]
平成7年		阪神大震災義援金活動として,西日本新聞民生事業団を通じて36万円を被災地に送る
	11月	創立10周年事業「九州未来会議2020日本が危ない・九州が危ない」[佐賀 和多屋別荘]
平成8年	2月	中国雲南省を襲った震度M7級の地震見舞金を送る(博多21の会連名)
平成9年	3月	九州ニュービジネス協議会「環境ビジネスフォーラム97」共催 [福岡 福岡国際ホール]
	9月	マレーシア・シンガポールIT視察団の派遣(㈱アジアビジネスセンターと共同開催)
平成10年	2月	九州ニュービジネス協議会「新たなるチャレンジフォーラム98」[福岡 ホテルニューオータニ博多]
	11月	鹿児島県大口市が福岡県中経協内に事務所を開設
平成11年	4月	熊本県七城町が福岡県中経協内に事務所を開設
	7月	熊本県が天神アクロス福岡内に事務所を開設
平成12年	3月	第1回 福岡・熊本交流懇談会(福岡産業振興協議会主催事業) [福岡 グランド・ハイアット・福岡]
	7月	第2回 福岡・熊本交流懇談会「天草空港開港記念事業」(福岡産業振興協議会主催事業) [熊本 天草国際ホテル]
	11月	創立15周年事業「九州の再生―極東の安定と新しい世界秩序」[福岡 シーホークホテル&リゾート]
平成13年	4月	九州経済フォーラムの事務を(社)福岡県中小企業経営者協会へ委託(㈱はせがわから引継ぐ)
	9月	第1回 福岡・大分交流懇談会(福岡産業振興協議会主催事業) [大分 日田市大山町文化センター]
	12月	臨時総会を開催し,九州経済フォーラム2代目会長に大迫 忠氏(ゼンリン㈱)が就任

創立5周年事業「九州未来会議2020そのとき西ゃは」

創立10周年事業「九州未来会議2020日本が危ない・九州が危ない」

第1回 福岡・熊本交流懇談会

創立15周年事業「九州の再生―極東の安定と新しい世界秩序」

第1回 福岡・大分交流懇談会

初代会長 大迫忠氏

第1回 福岡・鹿児島交流懇談会

平成14年	4月	1月早朝会 ゼンリン西部高朝会 大迫 忍氏「最近の動向について」[福岡 ホテル日航福岡]
	10月	第2回 福岡-大分交流懇談会 [大分 東洋ホテル]
平成15年	7月	第3回 福岡-大分交流懇談会 [北九州 リーガロイヤルホテル]
平成14年	8月	第1回 福岡-鹿児島交流懇談会 [鹿児島 城山観光ホテル]
	10月	第4回 福岡-大分交流懇談会 [大分 別府亀の井ホテル]
平成17年	4月	九州経済フォーラム2代目会長　大迫 忍氏(ゼンリン)1月18日死去　享年70歳
	8月	臨時総会を開催し、九州経済フォーラム3代目会長に石原 進氏(九州旅客鉄道)が就任
	10月	第1回 福岡-宮崎交流懇談会 [宮崎 フェニックス-シーガイア・リゾート]
平成18年	3月	第1回 福岡-佐賀交流懇談会 [佐賀 ホテルニューオータニ佐賀]
	4月	第1回 福岡-沖縄交流懇談会[沖縄 ザ・ナハテラス]
		創立20周年記念シンポジウム沖縄「日本の国柄を考える」[沖縄 ザ・ナハテラス]
		創立20周年記念「沖縄戦没者墓苑にて慰霊祭祭」[沖縄 国立沖縄戦没者墓苑]
	7月	創立20周年記念式典・記念講演(麻生外務大臣)・記念交流会 [福岡 西鉄グランドホテル]
	10月	第1回 福岡-長崎交流懇談会 [長崎 ルークプラザホテル]
平成19年	7月	第2回 福岡-宮崎交流懇談会 [福岡 グランド・ハイアット・福岡]
	10月	第3回福岡-熊本交流懇談会 [熊本 ニューオータニ熊本]
平成20年	3月	第2回 福岡-佐賀交流懇談会 [武雄センチュリーホテル]
		トルコ・ドバイ海外視察団派遣 [イスタンブール・アンカラ・ドバイ]
	9月	長谷川裕一氏FSG会長就任を祝う会 [ホテルオークラ福岡]
	10月	福岡-鹿児島交流懇談会 [鹿児島城山観光ホテル]
平成21年	4月	第3回福岡-長崎交流懇談会 [対馬市交流センター 酒]
	10月	トルコ共和国視察 [トルコ共和国]
	11月	第3回福岡-宮崎交流懇談会 [えびの市文化センター、えびの市国際交流センター]
平成22年	3月	第3回福岡-佐賀交流懇談会 [鳥栖市ホテル ビアントス]
	6月	新博多駅ビル視察 [新博多駅ビル]
	7月	第4回福岡-熊本交流懇談会 [山鹿市 八千代座、天然の温泉地市 菊乃家]
平成23年	4月	第6回福岡-大分交流懇談会 [由布市湯布院町 湯布院公民館、山水館 愛流館]
	2月	第3回福岡-鹿児島交流懇談会 [指宿市 指宿白水館]
平成24年	3月	第3回 地域間交流懇談会IN長崎 [ハウステンボス]
	6月	第4回 地域間交流懇談会in宮崎 [宮崎県五ヶ瀬町]
	10月	九州-台湾交流懇談会 [台北市世貿センター、台北国際会議場]

3代目会長　石原 進氏

第1回 福岡-宮崎交流懇談会

第1回 福岡-宮崎交流懇談会

創立20周年記念
シンポジウム沖縄

創立20周年記念講演
麻生大臣　講演 麻生 太郎 氏

第1回 福岡-長崎交流懇談会

懇親会

九州経済フォーラム
トルコ・ドバイ海外視察

記念講演　麻 洋樹 氏
(ドバイ国際工業技術庁 特別顧問)

基調講演　藤山 雅章 氏
(NPO法人"幸せ海の恵人"代表)

創立20周年記念シンポジウム
in 沖縄

九州経済フォーラム
交流懇談会開催記録

※:福岡産業振興協議会主催事業

九州経済フォーラム データベース

Kyushu economic forum

Data base

九州経済フォーラム歴代会長 ……P271

九州経済フォーラム平成 23 年度 役員 … P272

九州経済フォーラム歴代役員一覧 ……P273

九州経済フォーラム定例会 ……P275

九州経済フォーラム早朝会 ……P277

九州経済フォーラム車座懇話 ……P287

九州経済フォーラム定期総会 ……P288

九州経済フォーラム歴代会長

三代目会長 平成17年8月～

昭和20年4月30日生まれ
東京都出身
東京大学法学部卒業
〔略　歴〕
昭和44年7月　日本国有鉄道に入る
昭和62年4月　九州旅客鉄道
　　総合企画本部経営管理室長
平成2年6月　同　総務部長
平成5年6月　同　取締役総務部長
平成7年6月　同　取締役
　　鉄道事業本部副本部長
平成8年6月　同　取締役関連事業本部長
平成9年6月　同　常務取締役
平成13年6月　同　専務取締役
平成14年6月　同　代表取締役社長
平成21年06月　同　代表取締役会長
平成24年06月　同　取締役会長

二代目会長 平成13年12月～平成17年6月

昭和20年8月13日生まれ
大分県出身
中央大学文学部卒業
〔略　歴〕
昭和43年3月　中央大学　文学部仏文科卒業
昭和43年4月　善隣出版社
　　（現 株式会社ゼンリン）入社
昭和47年9月　同社取締役
昭和55年3月　同社常務取締役
昭和55年5月　同社代表取締役社長就任
平成13年4月　同社最高顧問
平成17年6月　永眠 享年59歳

一代目会長 昭和61年6月～平成13年12月

昭和15年10月10日生
福岡県直方市出身
龍谷大学文学部仏教学科卒業
〔略　歴〕
昭和15年10月　長谷川仏具店の創業者
　　長谷川才蔵の長男として
　　生まれる
昭和38年4月　長谷川仏具店
　　（現（株）はせがわ）入社
昭和41年2月　専務取締役就任
昭和57年4月　代表取締役社長就任
平成20年4月　代表取締役会長就任

九州経済フォーラム平成23年度 役員

平成23年度 定期総会時点

氏名	会社名	役職名
会長 石原 進	九州旅客鉄道(株)	代表取締役会長
副会長 井手口 修一	西日本電信電話(株)	九州事業本部長兼福岡支店長
副会長 甲斐 博	(株)肥後銀行	取締役頭取
副会長 末吉 紀雄	コカ・コーラウエスト(株)	代表取締役会長
副会長 高宮 俊譜	(株)タカミヤ	代表取締役社長
副会長 坂口 恭一	九州電力(株)	上席執行役員 経営企画本部長
副会長 横田 紘一	(株)九電工	代表取締役社長
副会長 矢野 美佳子	(株)やすや	代表取締役会長
副会長 是永 豊	立命館アジア太平洋大学	学長
理事長 小早川 明雄	福岡県中小企業経営者協会連合会	会長
常任理事 磯山 誠一	(株)西日本シティ銀行	代表取締役専務
常任理事 伊藤 健二	TOTO(株)	代表取締役副社長
常任理事 梅野 寿色	梅野建設(株)	代表取締役社長
常任理事 小幡 修	(株)福岡銀行	取締役副頭取
常任理事 岡崎 俊成	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ 九州支社	執行役員九州支社長
常任理事 小辻 智之	全日本空輸(株)	執行役員 福岡支店長
常任理事 斉藤 淳	日産自動車九州(株)	取締役執行役員
常任理事 坂田 陽一	西部ガス(株)	取締役常務執行役員
常任理事 竹島 和幸	西日本鉄道(株)	代表取締役社長
常任理事 熊田 重治	トヨタ自動車九州(株)	常務取締役
常任理事 宮原 敬介	(株)ミサワ九州	代表取締役社長
常任理事 川崎 隆生	(株)西日本新聞社	代表取締役社長
理事 飯田 和男	三井不動産(株)	九州支店長
理事 岩尾 慶一	岩尾磁器工業(株)	代表取締役社長
理事 大西田 勇成	西日本不動産開発(株)	代表取締役社長
理事 大久保 昇	ハウステンボス(株)	常務本部 部長兼九州支社長
理事 坂本 剛	(株)産学連携機構九州	代表取締役
理事 田中 幸二郎	第一交通産業(株)	代表取締役社長
理事 二又 茂明	久留米運送(株)	代表取締役社長
理事 三浦 明	(株)ゼンリン	社長室長
理事 石田 英章	(株)ホークスタウン	代表取締役副社長
理事 福野 佑一	(株)トータルプロデュース	代表取締役社長
理事 佐伯 心高	九州工業大学	産学連携交流部門長教授
理事 鶴 嘉	鶴業	自営
理事 小村 裕	一人くるめ	理事
理事 阿部 邦和	大分銀 福岡事務所	所長
理事 立川 優	熊本県 福岡事務所	所長
理事 村上 昭夫	宮崎県 福岡事務所	所長
理事 小城 義治	鹿児島県 福岡事務所	所長
理事 平田 厚雄	沖縄県福岡情報センター	センター長
理事 松崎 浩	北九州市	副市長
理事 山崎 一輝	福岡市	副市長
理事 近藤 倫明	北九州市立大学	学長
理事 坂口 光一	九州大学 統合新領域学府 ユーザー感性学専攻	教授
理事 倉藤 修一	(株)日本経済新聞社	専務執行役員西部支社代表
理事 濱崎 清邦	(財)九州国立博物館振興財団	専務理事
理事 村上 英治	(財)西日本産業貿易コンベンション協会	常務理事
常務理事 城村 敏満	(株)ウエムラ	代表取締役
常務理事 榎本 一郎	福岡地所(株)	常務取締役
常務理事 岡部 知憲	(株)ティーアンドイー	常務取締役
常務理事 富永 泰輔	福岡運輸(株)	専務取締役
常務理事 西原 聖剛	医療法人 聖友会	会長
常務理事 矢野 健	安全産業(株)	代表取締役社長
常務理事 後藤 太一	合同会社福岡アーバンラボラトリー	代表
常務理事 古賀 正博	福岡県中小企業経営者協会連合会	理事
監事 石村 慎恒	(株)石村萬盛堂	代表取締役社長
監事 西川 勲	九州日報新聞(株)	代表取締役社長

九州経済フォーラム歴代役員一覧

※役職等は、退任当時ならびに平成24年7月時点を表記しています。

氏名	会社名	役員	就任
■代表世話人・会長			
長谷川 裕一	（株）はせがわ	代表取締役社長	'86～
大迫 忍	（株）ゼンリン	最高顧問	'01～'04
石原 進	九州旅客鉄道（株）	代表取締役社長	'90～
■顧問			
川合 辰雄	九州電力（株）	代表取締役会長	'86～'00
■幹事長・副会長			
石村 信悟	（株）石村萬盛堂	代表取締役社長	'86～
井上 良弘	井上商（株）	代表取締役社長	'86～'99
川原 健	（株）ふくや	代表取締役社長	'86～'97
大久保 太郎	ワンドーダイ（株）	代表取締役社長	'90～'97
小原 健史	（株）和多屋別荘	代表取締役社長	'94～'00
古荘 和文	（株）シロヤバリガン	代表取締役社長	'96～'99
宮崎 元滋	西日本電信電話（株）	取締役福岡支店長	'00～'01
橋田 紘一	九州電力（株）	常務取締役	'01～
高江洲 文雄	西日本電信電話（株）	取締役福岡支店長	'02～'05
小柳 敏雄	西日本電信電話（株）	九州事業本部長兼福岡支店長	'06～
■事務総長			
小早川 明徳	（社）福岡県中小企業経営者協会	会長	'01～
■常任幹事			
大串 愛一郎	九州ニュービジネス協議会	参与	'94～'99
■幹事・理事			
入江 伸明	入江興産（株）	代表取締役社長	'86～'93
入江 正武	福岡工業大学	非常勤講師	'86～
清田 均	九州電力（株）	企画部経営計画担当課長	'86～'93
末廣 和英	（株）リンガーハット	代表取締役社長	'86～'91
遠田 一真	（株）福岡銀行	取締役副頭取	'86～

氏名	会社名	役員	就任
保 太規	城山観光（株）	代表取締役社長	'86～'06
町田 英俊	福岡市 総務局	企画調整部長	
樋口 貴雄	福岡市 総務局	企画調整部長	'90～'90
末田 龍久	福岡市 総務局	企画調整部長	'91～'93
山下 康則	ひぐち企画グループ	取締役経営計画兼東京本部長	'91～'93
青柳 泰雄	アオヤギ（株）	代表取締役社長	'94～'00
大野 厩男	三信産業（株）	代表取締役社長	'94～'00
大村 幸生	九州産業大学	元学長	'94～'00
西村 貞男	（株）ふようサプライ	代表取締役社長	'94～'00
橋本 剛	（株）西日本銀行	取締役総合企画部長	'94～'00
原田 光博	千鳥屋	代表取締役社長	'94～'00
安田 穂一	（株）九衛	代表取締役社長	'94～'06
林田 正毅	福岡市 総務局	企画調整部長	'94～'95
菅 唯志	（株）如水本店	代表取締役社長	'94～'97
花田 實	九州電力（株）	企画経営計画課長	'94～'97
橋口 益次郎	ひぐち企画グループ	取締役経理部長	'94～'92
三村 光博	（株）ゼンリン	取締役福岡支社長	'94～'99
牛島 真澄	マックスバリュ九州（株）	取締役開発社長	'96～
梅林 美伍	梅林建設（株）	代表取締役社長	'96～
柴戸 隆成	（株）福岡銀行	営業推進課長	'96～'97
浦川 正保	西肥自動車（株）	専務取締役	'96～'99
北島 博文	（株）福岡銀行	営業統括部営業推進室長	'97～'99
筆真寺 傳臣	九州電力（株）	企画部経済調整担当課長	'98～'99
椎木 昭夫	三浮信販	代表取締役社長	'98～'99
松本 剛平	西日本電信電話（株）	九州支社福岡本部長	'98～'99
井口 忠美	島倉ハウジングループ	代表	'00～'00
犬山 源吾	九州電力（株）	企画部課長（経済調査担当）	'00～'00

氏名	会社名	役員	就任
国松　利行	（株）福岡銀行	営業統括部営業推進室長	00～00
中原　幹雄	（株）ゼンリン	社長室福岡事務所長	00～00
岩尾　慶一	岩尾磁器工業（株）	代表取締役社長	01～
植木　とみ子	福岡市	教育長	01～
櫻本　重孝	（株）九州リースサービス	代表取締役社長	01～
清藤　恭介	西部ガスエネルギー	代表取締役社長	01～
甲斐　陽博	（株）肥後銀行	専務取締役	01～
末吉　紀雄	コカ・コーラウエストホールディングス代表取締役CEO		01～
玉川　孝道	西日本新聞社	取締役副社長	01～
長尾　亜天	西日本鉄道（株）	代表取締役社長	01～
中島　慶美	雲海酒造（株）	代表取締役社長	01～
右田　喜章	（株）ホークスタウン	取締役副社長	01～
矢頭　美世子	（株）やずや	代表取締役社長	01～
濱崎　順洋	ソニーセミコンダクタ九州（株）	代表取締役社長	01～02
馬見塚　謙	トヨタ自動車九州（株）	取締役副社長	01～03
高橋　豊久	（株）エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州	代表取締役社長	01～03
高田　秀一郎	（株）高田工業所	代表取締役社長	01～03
山崎　朗	九州大学経済学部	教授	01～04
坂口　光一	九州大学ベンチャービジネスラボラトリー教授		02～
坂本　和一	立命館アジア太平洋大学	学長	02～02
竹内　昭夫	ソニーセミコンダクタ九州（株）	代表取締役社長	03～03
井上　登	（株）エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州	代表取締役社長	04～
大内田　勇成	（株）シティアスコム	代表取締役社長	04～
菊池　克麿	全日本空輸（株）	執行役員九州・沖縄地区代表　福岡支店長	04～05
雲場　成郎	（株）日本航空ジャパン	九州地区支配人福岡支店長	04～05
鷲尾　健治	トヨタ自動車九州（株）	常務取締役	04～06
仲上　健一	立命館アジア太平洋大学	副学長	04～07
鈴木　茂	北九州市	助役	05～
橋村　俊久	松尾建設（株）	顧問	05～
二又　大榮	久留米運送（株）	代表取締役社長	05～
水嶋　修三	（株）JTB九州	代表取締役社長	05～

氏名	会社名	役員	就任
西村　順道	東陽機器（株）	取締役副社長	05～
富井　史郎	福岡日産自動車（株）	代表取締役社長	05～
矢田　俊文	北九州市立大学	学長	05～
中島　喜器	（株）日本航空インターナショナル	執行役員九州地区担当・福岡支店長	06～
安永　太郎	全日本空輸（株）	福岡支店長	06～06
植田　勇治	トヨタ自動車九州（株）	執行役員九州・沖縄地区代表　福岡支店長	07～
丸山　芳範	全日本空輸（株）	代表取締役社長	07～
大島　茂	城山観光（株）	代表取締役社長	07～07
顧問			
戸部田　浩一	九州商事（株）		86～00
時枝　隆生	（株）福岡銀行	総合企画部　次長	92～93
井上　雄介	（株）福岡シティ銀行	代表取締役専務	96～03
堤　敬志	（株）西日本シティ銀行	常務取締役	07～
顧問			
石井　敏	日本政策投資銀行	九州支店長	07～
小原　恒平	国土交通省　九州地方整備局	局長	07～
川口　修	経済産業省　九州経済産業局	局長	07～
大里　伊勢夫	国土交通省　九州運輸局	局長	07～
三村　亨	財務省　福岡財務支局	支局長	07～
山下　勝裕	日本銀行　福岡支店	支店長	07～
顧問			
甲斐　睦敦	宮崎県　福岡事務所	所長	05～
西山　哲郎	熊本県　福岡事務所	所長	05～
菅　純一郎	熊本県　福岡事務所	所長	05～06
田原　幸一	長崎県　福岡事務所	所長	05～06
永富　裕仁	佐賀県　福岡情報センター	所長	06～
西野　賢行	大分県　福岡事務所	所長	06～
金城　生光	沖縄県　福岡情報センター	センター長	06～

九州経済フォーラム 定例会

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(役職名)	スピーカー(氏名)
第1回	昭和61年6月	円高の円相場と日本経済	大蔵省	国際機構課長	久保田 勇夫
第2回	9月	産業構造の変化と今後の産業政策	通商産業省	自動車課長	中沢 隆弘
第3回	12月	アメリカ産業空洞化の教訓	大蔵省	官房審議官	山本 幸三
第4回	昭和62年3月	税制改革と日本経済について	大蔵省	官房参事官	藤田 東彦
第5回	6月	四全総（第四次全国総合開発計画）と九州経済	国土庁	事務次官	吉田 修造
第6回	9月	産業構造の変化と地域経済	日本経済新聞社	論説主幹	井上 毅
第7回	12月	大きな日本・小さな日本 ― 新時代発展のシナリオ ―	京都大学	教授	矢野 誠
第8回	昭和63年3月	世界経済の動向と日本	通商産業省	大臣官房総務課長	麻生 渡
第9回	6月	税制改革のポイント	大蔵省	主計局調査課長	長野 庄一
第10回	10月	豊かの追求・加速の動向 ― 急変の状況をインサイダー博士にきいて ―	大蔵省	証券局業務課長	西方 俊平
第11回	12月	スペースワールド ― 人を集めるまちづくり ―	（株）スペースワールド	常務取締役	関口 幸雄
		北海道における地域開発の具体例 ― 新千歳空港と臨海プロジェクト。福岡県産業振興公社構想、地域振興のための財団の設立と役割等 ―	北海道開発庁	次長兼課長	筑紫 義郎
第12回	平成元年3月	平成元年度の内外景気動向と経済政策の進め方について	大蔵省	官房調査企画課長	竹内 宏行
第13回	9月	九州地域産業ビジョンについて	通商産業省	九州通商産業局長	山口 智
		日本と台湾 ― 大陸進出の現代的意義 ―	日本政策研究センター	代表 兼任学会会長	伊藤 憲夫
第14回	12月	ニュービジネスの将来について	通商産業省	産業政策局サービス産業室長	平田 竹男
		アメニティ時代を考える ― 情報創造の視点から ―	情報創造室		勢竹 清文
第15回	平成2年7月	日米構造協議と今後の対応	海外経済協力基金	総務部長	久保田 勇夫
第16回	12月	「九州ニュー・グランドデザイン」について	九州大学	経済学部教授	矢田 俊文
第17回	平成3年3月	北海道「二のべ会」との交流会			
第18回	7月	行政改革と土光さんの思い出	首相官邸	秘書官兼審議官	東家 嘉之助
第19回	12月	フランスから見た日本、ヨーロッパからみた日本	大蔵省	国際金融局 金融業務課長	船橋 晴雄
第20回	平成4年10月	魅力ある「くまもと」をめざして	熊本県	企画調整部長	松本 徹

参考図	出典	外務省外交史料館（[illegible]）	不明	外務省外交史料	不明 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	不明	参考図書		不明 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	参考図書	参考図書		不明 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	不明	日本国[illegible]	参考図書	参考 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	日本国[illegible]	（出）参考[illegible]	参考図書	参考 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	参考	参考図書	参考図書	参考
参考図	平成[illegible]年 出典	日本国[illegible]（[illegible]）	不明	参考図書 [illegible]	参考 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	[illegible]「[illegible]」	参考図書		不明 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	「日本国[illegible]」（[illegible]）・参考図書[illegible]・[illegible]・参考[illegible]・[illegible]一覧	参考図書	不明 参考図書	参考 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	参考[illegible]	参考[illegible]	参考	参考
参考図	平成[illegible]年 出典	参考[illegible]・参考[illegible]・[illegible]・[illegible]・[illegible]	参考[illegible]	不明 参考図書	不明 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	不明	参考[illegible]	不明 参考図書 参考	参考 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	参考[illegible]	（参）参考[illegible]	参考図書	参考 参考
参考図	平成[illegible]年 出典	参考[illegible]・[illegible]・[illegible]・

九州経済フォーラム 早朝会

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(氏名)
第1回	昭和61年4月14日	テーマに関する情報なし	福岡工業大学	入江 助教授
			青柳工業(株)	青柳 社長
第2回	5月13日		コスモアンドスタントン(株)	鹿野 社長
			大蔵省 福岡財務支局	龍宝 支局長
			みずほ銀行 福岡支社	森谷 支社長
			アメリカンセンター	モーガン 館長
			(株)リンガーハット	米澤 社長
第3回	7月10日		田中産業(株)	田中 社長
			麻生商事(株)	麻生 社長
			福岡県 企画調査課	久保 課長
第4回	8月12日		井上畜(株)	井上 社長
			(株)ふくや	川原 専務
			日本電気(株)	藤原 支社長
第5回	10月14日		通商産業省九州通商産業局	佐久間 局長
			(株)ゼンリン	大迫 社長
			大日市	中村 市長
第6回	11月11日		西日本銀行(株)	山本 国際部部長
			福岡市企画調整部	志賀 部長
			九州工業大学 情報工学部	吉田 学部長
第7回	昭和62年1月13日		(株)岩田屋	中牟田 営業副本部長
			日本銀行 福岡支店	安田 支店長
第8回	2月10日		九州大学	田中健蔵 教授
第9回	4月15日		九州牛乳輸送(株)	恵谷 専務
			福岡県商工部商工振興課	村田 課長
第10回	5月12日		(株)加藤又本店	菅 社長
			ひびき企業グループ	山下 開発部長
			(株)日本長期信用銀行 福岡支店	藤田 副支店長
			JR九州 企画本部	石原 経営管理室長
			千鳥屋	原田 専務
第11回	7月14日		日本銀行 福岡支店	安田 支店長
			(株)福岡銀行	倉田 企画課長
			日本磁力選鉱(株)	原田 社長
第12回	8月11日		運輸省 第四港湾建設局 博多港工事事務所	平尾 所長
			大蔵省 福岡財務支局	中島 支局長
			純山銀天(株)	保 専務
第13回	10月13日		(株)西日本銀行 北九州支店	山本 次長
			C&C21研究会	五百蔵 主任研究員
			日本興業銀行 福岡支店	友松 取締役支店長
第14回	11月10日			

	開催日	トピック	ドリーム（男性部）	ドリーム（婦人部）
第25回	平成元年一月四日	キャンプに関する情報など	（株）ケンウッド	三田 美智
			（株）コスモーランド	米原 幸枝
			大日本	今宮 和枝
第26回	平成二年四月		大阪単 関西医科大	宮崎 恵
			キヤノン（株）	金子 幸枝
			新星化学（株）	新星 幸枝
第27回	平成三年四月		大王製紙株式会	大王 麻衣
			ダイキン 関西株式	今宮 和枝
第28回	平成四年二月四日		関西電力株 大王製紙株式会社	三口 恵
			（株）ロッテ関西工場	伊藤 和枝
			日本電気（株） 大王製紙	藤原 和枝
第29回	平成五年四月四日		日本電工 関西株式会	田崎 和枝
			ドンパーキャンプ場（株）	大久保 幸枝
			（社）関西ゴルフ連盟関西地区	小林 三 新田恵
第30回	平成六年四月四日		大阪単 関西医科大学	金城 和枝
			新日本 大王製紙株式会社	小田 田 小田恵
			産業医科（株）	米谷 新田恵
第31回	平成七年四月四日		関西化学ハイ（株）	大西 新田恵
			関西電工（株）	豊本 和枝
			ちいの会員でキャンプ	三戸 新田恵
第32回	平成八年四月四日		関西電 関西電力株 関西医科大学	福本 佳枝
			（株）大王製紙	福田 大阪単
			（株）松屋	米田 新田恵
第33回	平成九年四月四日	ヤハタキャンプ・ユキーム	関西ペイント株式会	小久保 新田恵
		記録達成	（株）足利銀行	今宮 和枝
第34回	平成十年四月四日	大王製紙ヤハタ会員	日本電工 関西株式会社	一田 藤原
		ドンパーキャンプ場	（社）関西ゴルフ連盟関西地区	小林 三 新田恵
		ドンパーキャンプ場 一つ目の記念日	キヤノン（株）	金子 和枝
第35回	平成十一年四月四日	新たな会員の紹介	（株）松屋	今宮 和枝
		大王製紙株式会社 ドンパーキャンプ場（ドンパーキャンプ）	産業医科大学 大王製紙株式会	田崎 新田恵
		新たな会員の紹介	関西電 新日本	藤代 小田
第36回	平成十二年四月四日	新たな会員の紹介	コーナン商工 関西株式会	新田 和枝
		関西ペイント株式会社	関西電 関西医科大学	福本 佳枝
		新たな会員の紹介	日本電工（株）	今宮 和枝
第37回	平成十三年四月四日	大王製紙ヤハタ会員	（株）大王製紙	新田恵 小田
		ちいの会	（株）大阪	阪田 和枝
		新たな会員の紹介	関西電力株（株）	新田恵 小田
第38回	平成十四年四月四日	新たな会員の紹介 ドンパーキャンプ・ユキーム	（株）ヤハタキャンプ・ユキーム	大田 和枝
		ドンパーキャンプ場（会員限定） ちいの	ドンパーキャンプ場	藤原 藤原恵

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(講師名)
第29回	平成2年1月10日	90年代の経済を考える	(株)日本長期信用銀行 福岡支店	小山 剛 支店長
		長崎新幹線について	春久丸商事(株)	春久 敏 社長
		県庁跡地を文化のシンボルにしよう	建設業	宮谷 栄
第30回	2月27日	統一県市町村(市町村合併の出先機)の地域おこし(大正村の開村 加代村長高藤三枝子さん)	香蘭女子短期大学	井原 教授
		わが社の多角化戦略	東芝石油(株)	石原 社長
第31回	3月22日	新しい来客増勢	日動オーストリア大使	教彦 孝雄
第32回	4月18日	人手不足の労働事情	福岡県 労働部長	渡邊 信
		超高速船の現状と課題	運輸省 九州運輸局 企画部長	藤本 吉郎
		福岡少年少女マレーシア友好協会レポート	福岡・マレーシア友好協会 常務理事	大串 慶一郎
第33回	6月26日	セコムの提案 ―セコムテック・90―	セコム(株) 九州第一統括部 福岡第一地域担当部長	福森 一男
		これからのバス事情について	西鉄石動車(株) 営業取締役	浦川 正保
		最近の九州通産局の動き ―大型店問題 ヒト―	通商産業省 九州通商産業局 商工課長	光内 清
第34回	8月21日	FM放送の課題と展望	(株)FM福岡 業務企画室長	蒲崎 公彦
		21世紀を支えるこれからの人材像	長崎大学 助教授	樋木 とみ子
		公共事業と地域活性化	建設省 九州地方建設局 企画課長	田尚 正
第35回	9月28日	高速道路網を目的とした、我が社の戦略	三信産業(株) 代表取締役	大野 耐男
		九州発ヒト・ヨーロッパ技術協力世界をつなぐ	(株)はせがわ 社長	長谷川 裕一
第36回	10月24日	トイザらスの進出と変貌する日本国内専門店の対応	(株)いのうえ貴金属 社長	関 孝成
		世界を結ぶシャッピング高速度企業への歩み	(株)はせがわ 社長	井上 健一
		アメリカ最近事情	(株)石村萬盛堂 社長	長谷川 裕一
第37回	平成3年1月17日	私の91年	(株)リクルート 九州支社 支社長代理	石村 善信
		男に代わる女性の底力	九州牛乳輸送(株) 社長	倉東 克彦
第38回	4月23日	最近の輸送事情から	(株)富士銀行 福岡支店 副支店長	高谷 孝
		銀行の目で見た企業の見方	(株)近畿百貨店 社長	長嶺 宏昌
第39回	6月26日	岩田屋から三屋へきて1年	通商産業省 九州通商産業局 局長	樋木 とみ子
		九州における産業構造の展望	福岡市 市民局 女性部長	和才 昌二
		新代女性部長をお受けして	日本興業銀行 福岡支店 副支店長	樹野 邦武
第40回	8月21日	公定歩合引き下げ後の金融財政動向	日本銀行 福岡支店長	小原 健史
		アメリカ最近のリゾート事情	(株)和多屋商社 社長	今里 菊子
		ハイテクショップ(ニ)について	西日本リビング新聞社 編集長	松本 博
第41回	9月26日	恒三島のリゾート開発について	松草石油(株) 顧問 社長	佐伯 心造
		九州の国際化と通産局の取り組み	通商産業省 九州通商産業局 商工部 国際交易振興課長	真野 恵美
		PL時代の新しい生き方	スリーエー企画 取締役	竹内 正敏
第42回	10月16日	国内における企業買収の動向について	(株)日本長期信用銀行 福岡支店 副支店長	松本 英一
		最近の流通事情について	(株)サニー 常務取締役	大塚 尚
		大学生急増・急減県庁子における学術都市	福岡工業大学 理事	松浦 弘
第43回	11月20日	建設事業をとりまく最近のトピックスの中から	建設省 九州地方建設局 企画課長	吉田 和文
		シルバーリーク制度について	(株)白雁 代表取締役社長	川原 隆義
		まちづくりとメセナ	福岡県 総務部 地方課 企画監	大内 和俗
		国際教育の現場から	西南学院大学 教授	福井 唯子
		福岡県の新しい軍用道路	(株)都市総合研究所 主任研究員	
第44回	平成4年1月22日			

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(氏名)
第44回	平成4年1月22日	企業の繁栄と私の使命	(株)片村鍛工所 社長	片村英麟
第45回	2月19日	最近の小企業界の動向について	九州産業大学 商学部長	大村幸生
		九州NBC・南欧州視察団に参加して	(株)石村萬盛堂 社長	石村萬盛
		ゼンリンの事業展開の現況について	(株)ゼンリン 取締役福岡支店長	高橋宏志
第46回	3月19日	ノータッチの経営	(株)九州西武 社長	西村貞男
		5年たった1月九州と今後	JR九州 総務部長	石原進
		当社の業績利益について	NTT 福岡本部 涉外広報部長	川上隆志
第47回	4月17日	ハウステンボスのオープンとこれから	(株)日本興業銀行 福岡支店 副支店長	和才昌二
		市場整備の現況	運輸省 第四港湾建設局 博多港工事事務所長	村田清
第48回	6月18日	自動車産業のこれから	通商産業省 九州通商産業局 総務企画部 調査課長	後藤宏一
		自己紹介あれこれ	(株)博多グリーンホテル 社長	菊谷茂雄
第49回	7月17日	アメリカの家庭に招待して感じたこと	アオヤギ(株) 社長	青柳泰秀
		久住高原のリゾートホテルの現況	エフコープ生活協同組合 専務理事	高橋壮介
第50回	8月27日	新任ごあいさつを兼ねて一言	通商産業省 九州通商産業局長	菊崎徹也
		最近韓国へ行って感じたこと	福岡工業大学 助教授	入江正武
		イスタンブールの印象	(株)はせがわ 社長	長谷川裕一
第51回	9月17日	総合経済対策について	大蔵省 福岡財務支局長	鈴木康司
		NBCの新しいビジョンについて	日本電気(株) 九州支社 理事兼支配人	藤原誠司
第52回	11月5日	外国人労働問題について	福岡県 労働部長	石千恒明
		アメリカ・中国・バチカンの旅から	(株)はせがわ 社長	長谷川裕一
第53回	平成5年1月26日	中国・大連に事業拠点をはじめて	ひびき企業グループ 取締役経営計画室長兼本部長	山下繁博
		地球33番地	三菱電機電装(株) 福岡本部長	上野宏次
第54回	2月18日	グループのトップ社長に就任して ― 新時代への投資 ―	リョーユーパングループ 社長	北村俊策
第55回	3月16日	競輪の話	通商産業省 九州通商産業局長	菊崎徹也
		旧書のお願い	(株)加悦又本店 社長	菅唯志
第56回	4月13日	タクシー行政について	運輸省 九州運輸局長	山下邦雄
		不況下の我が社の対応	(株)ユニードダイエー 社長	亀山博光
第57回	6月16日	厳しい状況下の社長に就任して	(株)サニー 社長	松本英一
		九州における貴いある可づくり	建設省 九州地方建設局 河川部 河川調査官	川上義幸
第58回	7月15日	海の時代とマリノア	(株)九州西武 社長	西村貞男
		アメリカにおける非営利団体の力と企業	西日本リビング新聞社 編集長	今里裕子
第59回	8月19日	6ゼロ・ゼロの時代なのか	通商産業省 九州通商産業局長	水谷四郎
		「世界21の会」の発足と今後の行方	(株)知多屋別荘 社長	小原健史
第60回	9月9日	中国、モンゴル旅行雑感	(株)ふくや 専務取締役	川原健
		93ユニバーシアード・バッファロー大会を視察して	福岡工業大学 助教授	入江正武
第61回	10月27日	私の中国とデセアン	(株)はせがわ 社長	長谷川裕一
		今、銀行員が考えていること	(株)日本長期信用銀行 福岡支店 副支店長	竹内正敏
第62回	11月24日	九州と中国の経済交流について	中華人民共和国 駐福岡総領事館 主席領事	張立国
		景気について	(株)日本興業銀行 福岡支店長	片桐満夫
第63回	平成6年1月19日	オーストラリアからの農産物輸入機会	オーストラリア領事館 領事	クリストファー・ケ・リース
		明治に明なし、麗中に明あり	(株)ハロー 社長	牛島貴登
第64回	2月17日	天神地区における交通秩序システムについて	運輸省 九州運輸局長	櫻野孝雄

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(役職名)
第64回	2月17日	福岡ドーム初年度の反省と2年目の対策	(株)ツインドームシティ 副社長	山深 康三
第65回	3月17日	九州の新国際化時代	通産産業省 九州通商産業局 国際室室長補佐	越方 富幸
		日米関係・銀行の視点から	(株)福岡シティ銀行 代表取締役専務	井上 修介
第66回	4月14日	みなとまち博多のウォーターフロント開発	福岡市 港湾局 計画部長	佐藤 孝夫
		当社の経営と今後の展開	三洋信販(株) 取締役経営企画室長	椎木 昭夫
第67回	6月22日	県庁移転・建設著む ―アクロス福岡―	福岡県 総務部 県庁移転対策課長	久保 善博
		いまだから、後藤英人論説に応えるビッグキャンペーン	(株)いのうえ貴金属 社長	井上 健一
第68回	7月21日	コラソンホテルの誕生とこれから	西鉄百貨店(株) 専務取締役	清川 正保
		人の効率的な活用とシステムについて	(株)ワコーコンサルタンツ 社長	吉原 康男
第69回	8月24日	駅元の国際化とその背景	(株)和多屋商社 社長	小原 健史
		世界一美の博覧会 ―夢えて未来―	世界一美の博覧会 事務局長	小森 久弘
第70回	9月29日	九州NHKと、東西経済文化機能を終えて	(株)ふくや 社長	川原 健
		九州旅客鉄道株式会社の試み	東亜建設工業(株) 専務取締役	木下 泰二
第71回	10月30日	21世紀の福岡を支える福祉計画	福岡市 民生局 福祉部長	植木 とみ子
		北部九州平成6年渇水の現状と対応	建設省 九州地方建設局長	藤坂 英城
第72回	11月25日	中韓人脈用の問題点 ―我が社の場合―	喜久丸漁業(株) 副社長	井関 恭平
		シーホークホテル&リゾートの出発もの	(株)ツインドームシティ 副社長	山岸 康三
第73回	平成7年1月26日	中国改革開放後の変化	九州産業大学 経済学部 助教授	文 吉
		21世紀九州・福岡のこれから	九州旅客鉄道(株) 取締役総務部長	石原 進
第74回	2月16日	歴史の上から見た日本の姿	(財)阪神・淡路復興委員会 社長	阪神 正義
		阪神大震災と日本経済	日本銀行 福岡支店長	片桐 義夫
第75回	3月6日	九州未来会議・2020グランドデザインについて	九州大学 経済学部 教授	矢田 俊文
第76回	4月20日	福岡アメリカン・センターの役割	福岡アメリカン・センター 副理事長	花田 早苗
		中国進出を容易にする経営のシステム	(株)九州建設 社長	西村 自見
第77回	6月14日	テクノポリス・ランド九州の実現に向けて	通産産業省 九州通商産業局 企画調査課長補佐	佐伯 心造
		新福岡空港・21世紀タイムリミット ―新福岡空港の実現に向けて―	福岡空港管理事務所 事務局長	長崎 紀彦
第78回	7月30日	電気事業変革の時代 ―規制緩和と自由化―	九州電力(株) 企画部経営企画担当課長	花田 育
		私の夢	(株)福岡ニット 会長	麗峰 泰久
第79回	8月22日	九州経済の抱える問題と今後の展望	日本経済新聞社 西武支社 編集部次長	井上 直樹
		―やずや― が目指す異分業化	(株)やずや 社長	矢頭 宣男
第80回	9月25日	アジアと九州の国際化	西南学院大学 商学部 教授	小川 慧亨
第81回	10月26日	講演	(株)石村萬盛堂 社長	石村 萬盛
		九州地理情報(株) システムハウスに革命ご注意をお忘れなく	東亜建設技術(株) 社長	木下 泰二
第82回	平成8年1月23日	マルチメディア あれこれ	日本電信電話(株) 福岡本部長	松本 剛平
		大交流時代を支える港湾	運輸省 第四港湾建設局 博多港工事事務所長	岩崎 三日子
		新北九州空港の概要と事業の現状	運輸省 第四港湾建設局 北九州港工事事務所長	金子 彰
第83回	2月15日	流通業界の動向	(株)大丸ローチェ 専務取締役	香葉 忠雄
		アジア大交流時代 ―歴史を通して21世紀を見る―	法務省 福岡入国管理局長	山崎 智夫
第84回	3月5日	元気都市・大分	三井造船(株) 社長	大野 耕平
		福岡都市圏のマンション事業	第一交通産業(株) 常務取締役本部長	中島 智俊
第85回	4月19日	熊本の元気	(株)シロヤパリガン 社長	吉井 和文
		中国経済事情と西安医療	中国全国青年連合 中国青年友好人材交流センター 駐日本主席代表	羅 世勝
第86回	6月7日			

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(講演者)
第86回	6月7日	2002とスポーツイベントについて	西鉄旅行(株) ももち浜支店長	横山 達男
第87回	7月17日	九州地域における新規産業の創出について	通産産業省 九州通商産業局 商工部 新規産業振興室長	清水 正行
		ハウステンボスの現況とアジアに向けての展望	ホテル日航ハウステンボス 代表取締役副社長	松田 裕二
第88回	8月27日	福岡のホテル事情	(株)博多都ホテル 社長	金田 豊
第89回	9月26日	外から見た九州	日本開発銀行 福岡支店 企画調査課長	加藤 茂樹
		当社の現状と展望	三洋信販(株) 副社長	桜木 昭夫
		ジャーセイチスカル心療	福岡公認会計事務所 所長	福原 俊
第90回	10月17日	最近の不動産動向について	島鉄ハウジンググループ 代表	井口 忠英
		国際会議の舞台裏	(株)コングレ取締役	橋野 真理
第91回	11月8日	桜をめぐる話題	大蔵省 福岡税関長	古出 哲彦
		北欧の高福祉事業展	宮坂本石灰工業所 取締役	坂本 達雄
第92年	1月21日	日本経済を語る当面の諸問題	通産産業省 九州通商産業局長	井田 敏
		思い切り、見切り、踏み切りの心	太平工業(株) 九州支店 副支店長	岡田 吉光
第93回	2月6日	九州の高速道路の概要	建設省 九州地方建設局長	肥田木 修
		J.R.九州の経営革新	九州旅客鉄道(株) 取締役関連事業本部長	石原 進
		日米保険協議の影響について	日本生命保険(相) 福岡総支社長	竹之内 洋右
		今後の産業政策の課題について	通商産業省 九州通商産業局 総務課長	横田 俊之
第94回	3月13日	「夢」について・雑感	(株)ホクショウ 代表取締役	岩崎 英富
第95回	4月17日	当面の労働行政の課題	福岡県 労働基準局	大石 明
		カンボジア・ラオスを訪して	(社)福岡県中小企業経営者協会 副代会長兼専務理事	小早川 明雄
第96回	6月26日	当面の金融情勢等について	日本銀行 福岡支店長	吉原 直人
		新潟県下地震災害の概況	(株)地方金融別社 代表取締役	小俣 雅史
第97回	7月23日	福岡の教育	福岡市 教育委員会 教育次長	植木 とみ子
		カウントダウン定期 舞踊	(株)福岡銀行 営業統括部 主任調査役	赤司 真人
第98回	8月6日	「国連人間居住センター福岡事務所」の開設について	福岡県 企画調査部 障害・高齢者対策課長	村田 恒昭
		「女性企業家国際交流会議 in 97」に参加して	(株)オリジナル・メディア・サービス 代表取締役社長	大谷 勉子
第99回	9月30日	建設・開発業界を巡る最近の課題	運輸省 第四港湾建設局博多港湾空港工事事務所長	片桐 正彦
		人生九十年時代の医療と福祉を目指して	特定医療法人 秀愛会 理事長	田中 浩子
第100回	10月28日	ポスト入管法の福岡	大蔵省 福岡財務支局長	小倉 義
		環境デザインの今後	(株)環境デザイン研究所代表取締役社長	冬至 洋一
第101回	11月25日	イスラエル紀行	(株)ふくや 代表取締役会長	川原 健
		私の人生と仕事	(株)ワコーコンサルタンツ代表取締役社長	吉原 律男
第102回	1月28日	福岡市教育委員を終えて	(株)石村萬盛堂 代表取締役社長	石村 善佑
		関門海峡ふく物語	(株)博多グリーンホテル代表取締役社長	菊谷 茂彦
		最近の景気における民香率 ― 低迷経済への対応 ―	(株)片村鐵工所 代表取締役社長	片村 英輔
第103回	2月19日	アジアビジネス最前線	(株)アジアビジネスセンター代表取締役社長	滝本 重二
第104回	3月25日	新福岡空港の展望について	福岡県 企画調査部長	谷井 博美
		ファッションについて	レイナ(株) 代表取締役社長	今井 千恵
第105回	4月21日	中小企業の情報武装	タカ食品工業(株) 代表取締役社長	大塚 直
		携帯型とシステムの信頼性	福岡工業大学 電子工学科 助教授	入江 正武
		キリマンジャロに挑戦して	日立電子(株) 九州支社 情報通信営業部 部長	中島 茂雄
第106回	6月25日	アジア投資会議のその後	(株)アジアビジネスセンター代表取締役社長	滝本 重二

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(肩書名)
第107回	7月28日	MITI九州アジア・スキーム ―共生圏の夢のためのアジア政策―	通商産業省 九州通商産業局国際グループ 国際課長	佐伯 心造
第108回	9月17日	福岡県の留学生施策	(財)福岡県国際交流センター専務理事	藤本 英夫
第109回	11月11日	最近の金融経済動向	日本銀行 福岡支店長	大野 和彦
第110回	1月13日	中韓国の現況と新21世紀全国事業について	(社)福岡県中小企業経営者協会 常務理事	中島 正勝
第111回	3月4日	ブランド・ランドセルの秘密	(株)ヒノデ屋 代表取締役社長	三村 隆男
第112回	4月14日	都市の美と彩	(株)松下美彩照明設計事務所 代表取締役社長	松下 美紀
第113回	6月9日	九州・福岡の元気の秘密	日本開発銀行 福岡支店 企画調査課長	安永 英資
第114回	7月26日	これからの住宅保証について	福岡県信用保証協会 常務理事	高尾 豊
第115回	9月9日	最近の金融経済動向	日本銀行 福岡支店長	藤尾 純一郎
第116回	9月16日	運輸の規制緩和	運輸省 九州運輸局長	上子 道雄
第117回	10月20日	九州・福岡の元気の秘密	日本開発銀行 福岡支店 企画調査課長	安永 英資
第118回	平成12年1月13日	これからの住宅保証について	福岡県信用保証協会 常務理事	高尾 豊
第119回	3月9日	スポーツとしてのゴルフを考える	東亜建設技術(株) 代表取締役社長	木下 恵二
第120回	4月20日	アメリカ出張で感じた給与体系のあり方	(株)科教企画設計 代表取締役社長	松本 正憲
第121回	6月16日	経営理念は何処に	九州産業大学 元学長	大村 幸生
第122回	7月11日	町長選挙を戦い終えて ―政策の枠が問う反省点―	佐賀市役所 工業所 常務取締役	坂本 達雄
第123回	9月27日	本業以外に手を出せる ―大学科学博物館館長―	(財)西日本産業貿易コンベンション協会 専務理事	光内 清
第124回	10月18日	【NHKファーコレクション】を終えて	レイナ(株) 代表取締役社長	今井 千恵
第125回	平成13年1月15日	中堅企業を中心とした投資戦略	九州開発銀行(IDB) 日本代表理事	小澤 徹
第126回	2月26日	【魅力にあふれる住みよい九州】を目指して	建設省 九州地方建設局 局長	吉野 春彦
第127回	4月19日	1兆博多駅について	九州旅客鉄道(株) 常務取締役	石原 進
第128回	6月14日	女性国土庁サミット	福岡県 副知事	樽田 磨子
第129回	7月11日	歌が社の【社寺建築】	(株)佐伯建設 代表取締役社長	川崎 哲一
		2000年都市の展望	日本銀行 福岡支店長	義尾 純一郎
		九州における外国人の入国・在留状況	法務省 福岡入国管理局 局長	坂中 英徳
		コカ・コーラウエストジャパンの1年	コカ・コーラウエストジャパン(株) 取締役副社長	末吉 紀雄
		日本の株式マーケットを取り巻く環境	野村證券(株) 福岡支店長	山尾 太一
		最近のロシア事情について	(株)福岡証券 代表取締役	吉嶺 文俊
		フクオカ・ベンチャーマーケットについて	福岡県 商工部 商工課長	久保 善弘
		福岡ドームの近況報告	(株)福岡ドーム 常務本部副本部長	中谷 正紀
		【人生と温泉】 ―大学の難問にどう対処すべきか―	筑後地区農業共済組合連絡会 会長理事	中村 義生
		創業者・久留米市の残した財産	(株)やずや 代表取締役社長	矢留 美智子
		福岡空港の現在と未来	運輸省 第四港湾建設局 博多港湾空港工事事務所長	古市 正彦
		瓦屋さんが勧めた一十ビジネス	(資)瓦井正瓦店 代表社員	瓦井 正隆
		ファッション・ムーブメント福岡について	女福商事(株) 取締役社長	戸部田 浩一
		これからの物流	(株)ランテック 代表取締役社長	高谷 孝
		年課題修	(株)はせがわ 代表取締役社長	長谷川 裕一
		IC乗務員カードシステム	(株)井浦商会 代表取締役社長	井浦 正之
		1キロの夜景と展望	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州 取締役モバイルマルチメディアビジネス部長	牧原 英人
		ヒューマン・エコノミー九州への挑戦	経済産業省 九州経済産業局 局長	橋口 一清
		九州観光の現状と東アジア観光コンソーシアム	(株)和多屋別荘 代表取締役	小原 健史
		マリブコミュニケーションズと福岡の作品	(株)ゼンリン 福岡営業所 アシスタントマネージャー	広田 実
		九州ニュービジネス協議会の新たな展開	(社)九州ニュービジネス協議会 事務局次長	松山 建久
		文化と経済が出会う街『ふくおか』をめざして	(財)福岡市文化芸術振興財団 副理事長	植木 とみ子

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(講演者)
第125回	7月11日	九州新幹線	九州旅客鉄道(株) 常務理事	石原進
第126回	9月19日	最近の金融経済動向	日本銀行福岡支店長	佐藤文俊
		長崎観光とハウステンボス	ハウステンボス観光(株) 福岡支社長	宮崎良分
第127回	10月18日	多国籍テロと経済情勢について	野村證券(株) 福岡支店長	吉原隆夫
		ホークスとゆめタウン	(株)福岡ドーム 営業本部 副本部長	中谷正紀
第128回	平成14年2月27日	九大のビジネススクール構想	九州大学 経済学部 教授	山崎朗
		産業クラスター計画	経済産業省九州経済産業局 局長	吉本孝一
第129回	3月26日	日・シンガポール新時代経済連携協定の内容と意義	経済産業省通商政策局地域協力課長	梅原克彦
第130回	5月9日	第3世代携帯電話について	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ九州モバイルマルチメディア企画開発部部長	長崎忠己
第131回	6月13日	市町村合併について	コカ・コーラウエストジャパン(株)代表取締役社長兼CEO	末吉紀雄
		大学の国際競争力について	立命館アジア太平洋大学 学長	張本和一
第132回	10月2日	今月11日から1年 我々は今どこに	在福岡アメリカ領事館 首席領事	ウィロビー
		国際交流の歴史と長崎くんち	長崎県国際課 所長	野口正勝
第133回	1月9日	最近の都市について	ゼンリン(株) 最高顧問	大迫忍
第134回	4月17日	私の地域開発にかける夢	福岡地所(株) 代表取締役社長	樋本一彦
		若者の人材育成の側インターンシップ	福岡県インターンシップ推進研究会常任幹事	藤本英夫
第135回	7月24日	九州経済フォーラム設立会について(九州文化・観光戦略研究会を発足するにあたって)	九州文化・観光戦略研究会 代表幹事(九州大学 教授)	橋本とみず
		産学連携の課題	(株)産学連携機構九州 代表取締役社長	鍵本忠尚
第136回	10月22日	世界のIPセルボエを目指して	レイナ(株) 代表取締役社長	今井千恵
		知事という仕事 ―現場で感じる地方自治―	佐賀県知事	古川隆
第137回	10月28日	九州経済の現状について	経済産業省九州経済産業局 局長	鈴木正徳
第138回	11月21日	地域密着型ベンチャーファンドについて	九州ベンチャーパートナーズ(株) 代表取締役社長	水口敬司
		21世紀の九州地域戦略	(社)九州・山口経済連合会 常務理事	張替正雄
第140回	1月30日	非常の感覚経営 「PEET」の威力	医療法人天神会 古賀病院21 理事長	古賀啓人
		ジェンダーフリー思想にひそむ危険	高岳経済大学 地域政策学部 助教授	八木秀次
第141回	3月5日	水からの伝言 ―自分を変えるということ―	I・H・M総合研究所 所長	江本勝
第142回	3月22日	構造改革特区と地域再生計画の活用による地域振興	内閣官房構造改革特区推進室事務官	竹嶋正彦
		人を育て、人を活かす	(株)やずや 代表取締役社長	矢頭美世子
第143回	4月28日	新しい行政の方向	前内閣官房副長官	古川貞二郎
第144回	6月10日	郵政構造改革 ―経済活性化と子育て―	財務省 福岡税関 局長	清水治
		最近の金融経済動向	日本銀行 福岡支店長	鈴木茂
第145回	10月8日	APEC議長のねらい	外務大臣	平松守彦
		APEC の今日と明日	北京都アジア太平洋大学 学長	モンテ・カセム
第146回	1月26日	日本経済のゆくえ ―日本から離れているからこそ見える真実―	ニューヨーク市立大学 教授	雲見晋治
		福岡の都心「天神」の現状と問題点について	西日本鉄道(株) 代表取締役	長尾亮夫
第147回	3月2日	最近の都市開発の話題	(株)福岡銀行 副頭取	宮正明
第148回	3月31日	コピキタス社会の到来	日本電気(株) 執行役員常務	井田敏
		私が北九州市助役になったわけ	北九州市 助役	鈴木茂
第149回	6月29日	北九州市立大学の留学生について	北九州市立大学 学長	矢田俊文
		産業医学の発展と優れた産業医及び産業保健従事者の養成を目的として	産業医科大学 理事長	太石晴
第150回	9月30日	九州ビジネススクールについて	九州大学大学院 経済学府 教授	小西豊治
		歴史の事実を知り、真実を考えるパートII	亜細亜大学 法学部 教授	東中野修道
第151回	11月17日			

	開催日	テーマ	スピーカー(敬称略)	スピーカー(肩書き)
第154回	平成18年2月3日	推薦・起業後の経営を考える 日本の新政を考える	アトリエ冴美 一級建築士 福岡国税局 局長	森川義彦 中村明雄
第155回	10月18日	「コカ・コーラウエストグループの基本戦略」について	コカ・コーラウエストホールディングス株式会社 代表取締役兼CEO 日本政策投資銀行 九州支店長	末吉 紀雄 石井 敦
第156回	11月17日	人生の舞台としての都市・福岡市を語る会に	筑紫女学園大学 日本文化研究所 所長	井沢千秋
第157回	平成19年1月31日	変化を起こす街づくり	学校法人宮崎総合学園 理事長	川越宏樹
第158回	3月29日	フェニックス・シーガイアリゾート、新しい年の挑戦	フェニックスリゾート株式会社 代表取締役社長	丸山俊幸
第159回	9月7日	インテリジェンスとは何か	外務省 二等書記官	佐藤優
第160回	10月24日	Qボード市場を活用した経営戦略と現状	福岡証券取引所 理事長	松野直彦
第161回		熊本城と城下町 もう1年祭 熊本城の歴史とデザイン	熊本城復興400年記念実行委員会事務局長	岸本清久
		福岡・博多の街づくり	福岡県庁 代表取締役社長	樋本一彦
		受賞を通じての私の人生観	株式会社やぎや 代表取締役社長	矢園美智子
第162回	平成20年2月16日	「観光立国・九州」を目指して	九州観光推進機構 事業本部長	大江英夫
		「力強い」地方づくりのための、あえて「力弱い」戦略	武雄市長	樋渡啓祐
第163回	3月12日	急増する「まさいのみやこ」美容ときれいな医療産業「セラピー」	筑紫女学園大学 学長	竹本忠雄
第164回	7月30日	「食卓の向こう側」に見えるもの	西日本新聞社 編集委員	佐藤弘
第165回	9月25日	九州経済の展望	九州経済産業局 局長	橋爪公久
		大学の品格	福岡大学 学長	喜多修也
第166回	10月18日		国土交通省九州運輸局 局長	福本啓二
			熊本県庁建設局 公園緑化課 課長	塚田勝也
第167回	平成21年2月18日	総長就任に当たって	財務省 福岡財務支局 支局長	八田薫
		株式会社日本政策投資銀行の民営化と地域の事業	九州大学 総長	有村総夫
			株式会社日本政策投資銀行 九州支店長	小笠原朗
第168回	3月27日		立命館アジア太平洋大学 学長	モンジ・カセム
			立命館アジア太平洋大学 教授	高野雅治
第169回	4月22日	経営改革戦略の事業計画（発表）とディスカッション	九州広域連携研究会	
			九州経済・産業戦略研究会	
			九州観光推進機構 事業本部長	橋田副会長
			武雄市長	西岸座長
				鶴座長
				小柳副会長
				橋村座長
第170回	平成20年2月16日	「観光立国・九州」を目指して	九州観光推進機構 事業本部長	大江英夫
		「力強い」地方づくりのための、あえて「力弱い」戦略	武雄市長	樋渡啓祐
第171回	3月12日	急増する「まさいのみやこ」美容ときれいな医療産業「セラピー」	筑紫女学園大学 名誉教授	竹本忠雄
第172回	7月30日	「食卓の向こう側」に見えるもの	西日本新聞社 編集委員	佐藤弘
第173回	9月25日	九州経済の展望	九州経済産業局 局長	橋爪公久
		大学の品格	福岡大学 学長	喜多修也
第174回	10月18日		国土交通省九州運輸局 局長	福本啓二
			熊本県庁建設局 公園緑化課 課長	塚田勝也
第175回	11月20日	景気予測調査による九州経済情勢	財務省 福岡財務支局 支局長	八田薫
第176回	平成21年2月18日	総長就任に当たって	九州大学 総長	有村総夫
		株式会社日本政策投資銀行の民営化と地域の事業	株式会社日本政策投資銀行 九州支店長	小笠原朗
第177回	3月27日		立命館アジア太平洋大学 学長	モンジ・カセム
			立命館アジア太平洋大学 教授	高野雅治
第178回	3月27日			
第179回	11月20日	景気予測調査による九州経済情勢	九州大学 総長	有村総夫
第180回	平成21年2月18日	総長就任に当たって	立命館アジア太平洋大学 学長	モンジ・カセム
第181回	3月27日		立命館アジア太平洋大学 教授	高野雅治

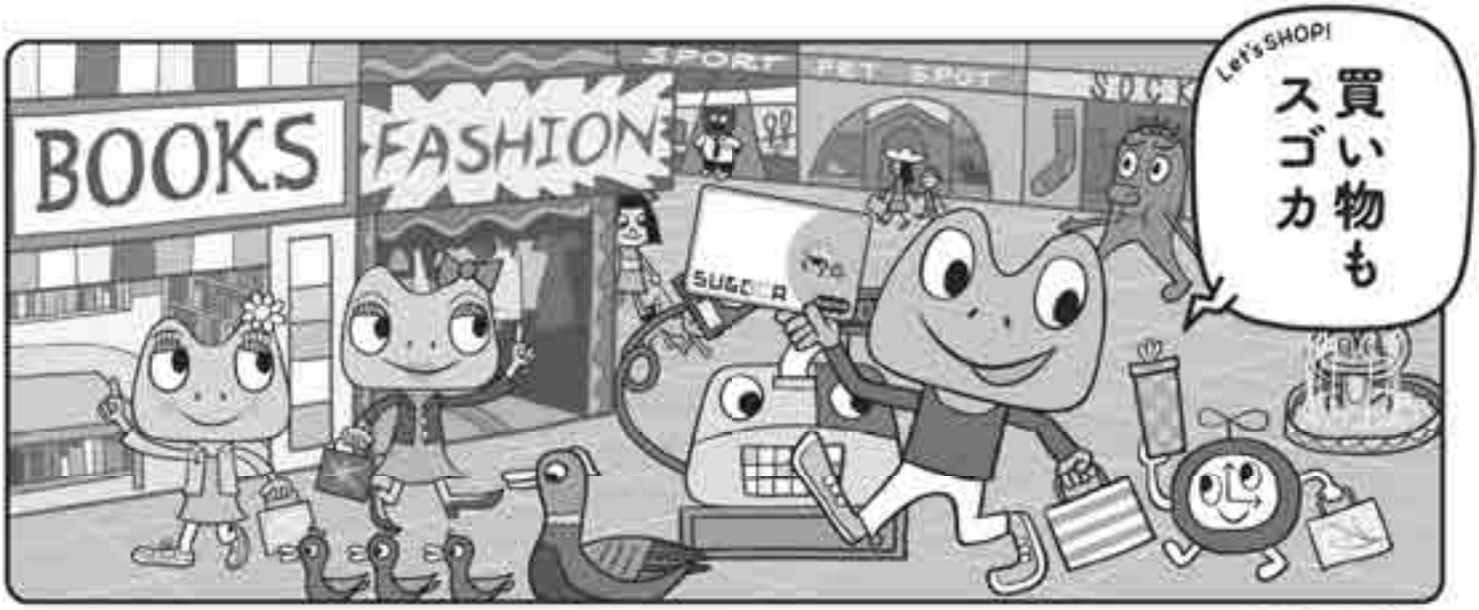
	開催日	テーマ	KSUーボーイ(男女共)	KSUーガール(女子)
第1回	平成25年	物語のはじまる場所を考える講演会（仮題）：講師 [illegible]	[illegible]	[illegible]
				[illegible]
				[illegible]
			[illegible]	[illegible]
				[illegible]
			[illegible]	[illegible]
				[illegible]
				[illegible]
第2回	平成25年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第3回	平成26年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第4回	平成26年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第5回	平成26年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
第6回	平成27年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第7回	平成27年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第8回	平成27年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第9回	平成27年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
第10回	平成28年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第11回	平成28年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第12回	平成28年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第13回	平成28年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]
第14回	平成29年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
第15回	平成29年[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
		[illegible]	[illegible]	[illegible]

九州経済フォーラム 車座談会

	開催日	テーマ	スピーカー(会社名)	スピーカー(氏名)
第1回	平成8年7月1日	福岡都市圏と21世紀	西日本新聞社 編集局次長兼地域報道部長	大野誠
第2回	8月21日	福岡市のまちづくり－新しい福岡市基本計画－	福岡市 総務局 企画調整部長	原野茂
第3回	10月31日	アジアビジネス展望編	(株)アジアビジネスセンター 代表取締役社長	滝本憲二
第4回	平成9年2月27日	世の中が変わる、世界が変わる	通商産業省 九州通商産業局 炭鉱課長	後藤宏一
第5回	8月21日	日本3番目の外国語FM－LOVE・FM－	(株)九州国際エフエム 代表取締役専務	宮澤義敬
第6回	10月2日	多チャンネル化時代を迎えて－海底の地上放送の生き残り戦略－	(株)テレビ西日本 報道部長	鮫天
第7回	平成10年2月2日	パソコンビジネスの将来展望	(株)システムソフト 代表取締役社長	佐藤隆治
第8回	8月25日	福岡の21世紀	福岡県知事	麻生渡
第9回	10月29日	最近の金融システムにかかわる諸問題	(株)西日本銀行 会長(九州商工会議所連合会 会長)	後藤達太
第10回	平成11年2月22日	九州の個性とネット	九州旅客鉄道(株) 代表取締役会長(九州・山口経済連合会 副会長)	石井幸孝
第11回	8月23日	21世紀のアジアと九州	九州大学 法学部 教授	新野幹雄
第12回	11月10日	九州からアジアへ 駆逐の風	スカイネットアジア航空(株) 代表取締役社長	服部浩行
第13回	平成12年2月9日	芸術ばあれこれ	芸術家	田村鴻郎
第14回	8月29日	ファクイ談義	九州工業大学 情報工学部 教授	山川烈
第15回	平成13年8月8日	九州の金融戦略－IT化九州	九州興銀(株) 代表取締役社長	石倉雅
第16回	10月24日	西日本連携によるアジア太平洋ビジネスネットワーク構想	九州電力(株) 常務取締役	橋田紘一
第17回	平成15年3月18日	アメリカの対日経済政策について	駐日米国大使館 経済問題公使	Michael W. Michalak
第18回	9月17日	ハイパーテキストシティ構想－まちづくりマーケティングのビジネスモデル－	福岡大学 経済学部 教授 博士(工学)	斎藤泰郎
第19回	平成16年8月26日	九州経済の現状と、今後の発展戦略について	(社)九州山口経済連合会 会長	鎌田迪貞
第20回	平成17年8月1日	博多の文化について	博多織・博多町人文化講座 理事長	長谷川法世
第21回	平成18年			
第22回	平成19年			
第23回	平成20年			
第24回	平成21年8月17日	「駅就学から産学連携へ」－九工大牛奇体工学研究科の設置－	九州工業大学 生命体工学研究科 教授	菱生修司
第25回	10月9日	日本を学ぶ	参議院議員・文部科学大臣	山谷えり子
第26回	平成22年9月13日	福祉化は在宅ものか	中部大学 教授	武田裕彦
第27回	11月8日	食料・農業・農村をめぐる最近の状況	九州農政局 局長	藤高悟
第28回	平成23年2月21日	新博多駅と国際インパクト	(株)日本政策投資銀行 九州支店長	増山拓次
第29回		九州新幹線全線開業で人の流れがどう変わるか？実践ビジネスの予測 －関西と九州、九州内、博多と天神	福岡大学 都市空間情報行動研究所	豊藤泰郎
第30回	8月31日	九州と台湾の関係について－歴史・文化・経済に学ぶ	(株)西日本新聞社 アジア室 次長	小山田晶生

九州経済フォーラム　投票結果

	開催日	テーマ	パネリスト（所属等）	パネリスト（職位等）
第一回	平成元年十月四日	不動産ビジネスのフロンティア	東京建物株式会社	取締役
第二回	平成元年十月十日	ホテルの未来像を求めて	大正製薬(株) 代表	三代 [illegible]
第三回	平成元年十月十日	国際化をめざすビジネス	西鉄旅行株式会社 代表	大石 [illegible]
第四回	平成元年十月十日	大正製薬をめぐるトークセッション	大正製薬株式会社(株) 代表	坪井 [illegible]
第五回	平成元年十月十日	建設業界をリードする新時代 ゼネコンの国際戦略	(株)ふじたに建設	藤谷 [illegible]
第六回	平成元年十月十日	ネットワークを活かした地域活性化の方策	西日本新聞社 [illegible] 編集局(出版・[illegible])	吉崎 [illegible]
第七回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大塚製薬 大阪本社 [illegible] 代表取締役	岩田 [illegible]
第八回	平成元年十月十日	「ホテル・[illegible]」 [illegible] 社長を囲む	大正製薬 代表取締役	上野 [illegible]
第九回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	西鉄ホテル [illegible] 代表取締役	中村 [illegible]
第十回	平成元年十月十日	「[illegible]」	(株)ケンタッキーフライドチキン 社長	小倉 [illegible]
			(株)[illegible] 代表取締役	宮崎 [illegible]
第十一回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大正製薬 [illegible] 取締役	三宅 [illegible]
第十二回	平成元年十月十日	「[illegible]」	(株)大正製薬・日本[illegible] 取締役[illegible]	柳田 [illegible]
第十三回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大正製薬 [illegible]	永田 [illegible]
第十四回	平成元年十月十日	ロボットを語る [illegible]	キヤノン(株) 代表取締役	賀来 龍三郎
第十五回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	福岡銀行 [illegible] 取締役	藤田 [illegible]
		大正製薬をめぐるトークセッション	[illegible]	大坂 [illegible]
第十六回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大正製薬株式会社 代表取締役	藤田 [illegible]
第十七回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大正製薬株式会社 [illegible] 取締役	永田 [illegible]
第十八回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大正製薬株式会社 [illegible] 代表取締役	坂田 [illegible]
第十九回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	大正製薬株式会社 [illegible]	川瀬 [illegible]
第二十回	平成元年十月十日	「[illegible]」 [illegible]	福岡県知事	
第二十一回	平成元年十月十日	トークセッション [illegible]	福岡県知事	麻生 [illegible]
第二十二回	平成元年十月十日	「[illegible]」 [illegible]	日本[illegible]株式会社 代表取締役	[illegible]
第二十三回	平成元年十月十日	[illegible]	日本[illegible]株式会社 [illegible]	[illegible]
第二十四回	平成元年十月十日	[illegible]	[illegible] 代表取締役	[illegible]
第二十五回	平成元年十月十日	地域社会を活性化する新産業の創造をめざして	[illegible] 代表取締役	[illegible]



乗り物も。買い物も。便利なICカード!!
SUGOCA
詳しくはホームページへ http://www.sugoca.jp SUGOCA
JR九州

NTT
西日本
"光"、ひろがる、ひびきあう。
みんなでつながり合えば、
未来はどんどん楽しくなる。
NTT西日本と一緒に、
もっともっと、ワクワクする未来へ。
さあ、行こうぜ!

NTT西日本 福岡支店

あしたを、ちがう「まいにち」に。

TOTO

業界初[*1]!
きれい除菌水[*2]のチカラで、毎回手間なし除菌[*3]。

TOTOの清潔機能がさらに進化して、きれいをバックアップ!
薬品や洗剤を使わずに、見えない汚れや菌まで分解・除菌します。

「きれい除菌水」で便器を除菌

きれい除菌水とは、水道水[*2]に含まれる塩化物イオンを電気分解して作られる、除菌成分(次亜塩素酸)を含む水のこと。薬品を使わず、水道水から作られるので安心・安全です。

*2 水道水(水道管で送られた水)です。井戸水の場合、塩化物イオンがうまいためか、安全効果が得られないことがあります。

汚れにくい「セフィオンテクト」

ナノレベルの滑らかさで、汚れがはがれにくく清潔が長持ち。

超節水「3.8L洗浄[*]」

*洗浄水の量(3.8L)は、洗浄・排水の場合(4.8L)限定。

タンク式と水道直圧式を融合させたハイブリッドエコロジーシステムにより、超節水を実現。

*洗浄水、排水水について、詳しくはWEBホームページをご確認ください。

「きれいサイクル」が、365日セルフサポート。

トイレ使用後、待機中までトイレのきれいを徹底サポート。便器やノズルの洗浄・除菌に加えて、気になるにおいも強力脱臭。きれいの状態を光の点灯でお知らせします。

*1 業界初(2009年9月11日現在)(TOTO調べ)
*2 試験実施:(財)北里環境科学センター、試験方法:電解生成物質除菌試験、検査方法:電解した水道水に菌液を混合し、菌数を測定、試験結果99%以上。培養菌(きれい除菌水)は汚れを洗浄するもので、殺菌効果にあるものではありません。効果・効能は使用状況によっては、効果が異なります。
*3 試験機関:(財)日本食品分析センター、試験方法:除菌効果試験、検査方法:電解した水道水に菌液、付着菌糸(パセル)を混合し乾燥および洗浄後、菌数が99%以上減少(試験結果99%以上)

NEOREST
HYBRID SERIES

デザインで選べる2モデル!
ネオレスト ハイブリッドシリーズ
(AHタイプ)希望小売価格¥321,000~(税込¥337,050~)
(NHタイプ)希望小売価格¥280,000~(税込¥294,000~)

商品のお問い合わせは TOTOお客様相談室 0120-03-1010 受付時間 9:00~17:00(夏期休暇・年末年始を除く)
TOTOホームページ www.toto.co.jp

TOTO GREEN CHALLENGE

地図には大きな可能性があります。

地図づくりを通して社会に貢献したい。私たちの本質は、まずここにあります。
絶えず収集・蓄積される、道や建物など街に関する膨大な情報。
そのデータベースはいま、住宅地図やカーナビゲーションにとどまらず、
日々の生活に欠かすことのできない、社会インフラとして利用されています。
情報を地図として整理・活用する技術で、より豊かな「未来」へ。
地図の無限の可能性を探りながら、ひたむきに歩みを進めてゆく私たちです。

株式会社ゼンリン　www.zenrin.co.jp

ZENRIN
Maps to the Future

大好評！光の王国

2013・3・10 sun まで開催！

いよいよ1,000万球 東洋一から世界一へ。

YAHOO! JAPAN「人気イルミベスト20」で
全国第1位を
2年連続獲得

おすすめ4大イルミスポット

場内ホテル泊で大満喫！ 1日10室限定

オススメ 光の王国へ行こうプラン

ハウステンボス入場2日間 ＋ 対象施設1日フリーパス ＋
光の宮殿入場 通常500円 ＋ 対象店舗お買物券1,050円分 ＋ 朝食

場内フラッグシップホテル「ホテルヨーロッパ」泊

27,570円→19,000円～

（平日ベストレート時スタンダードタイプ
3名1室利用の場合の1名様料金）

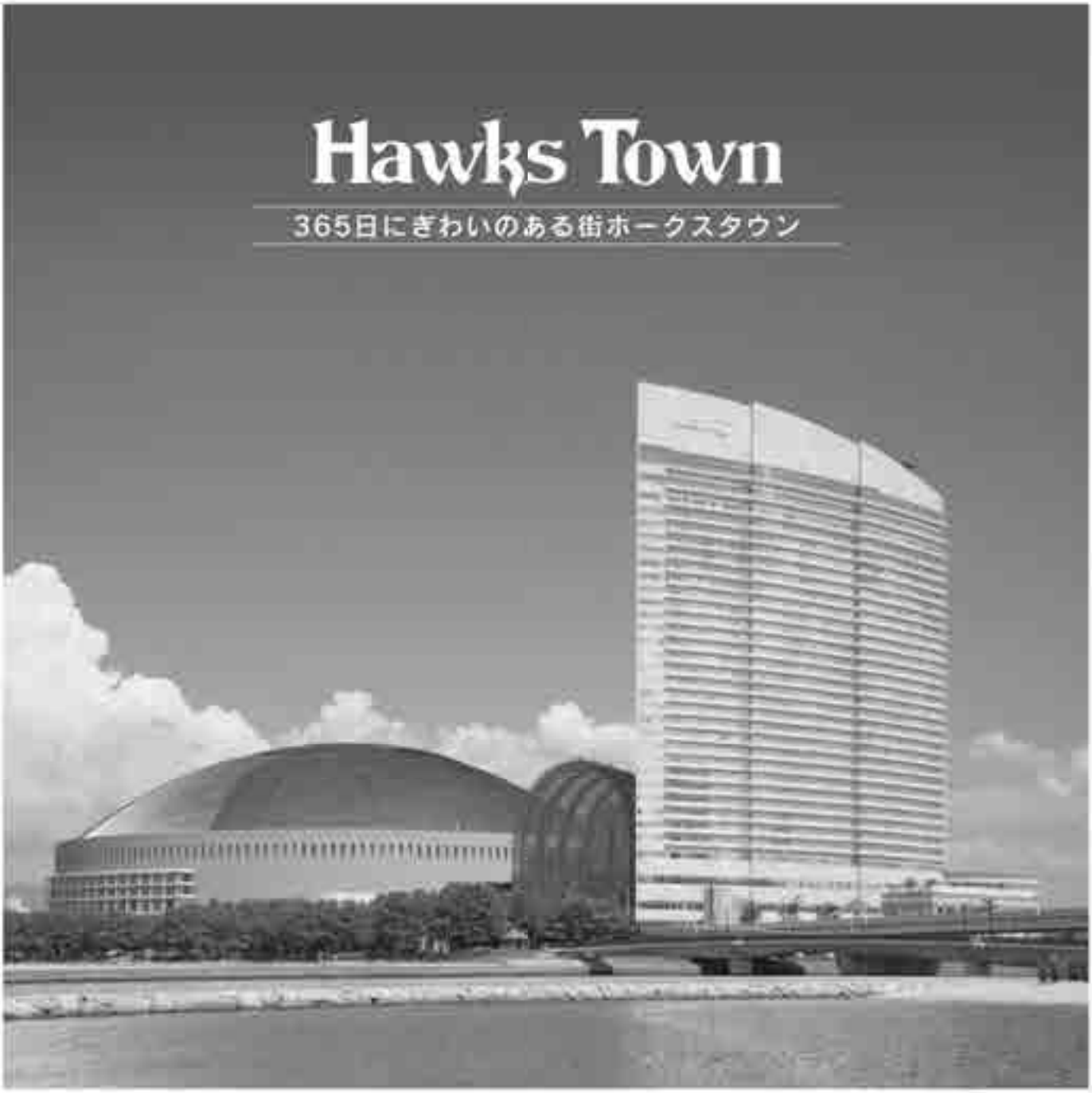
ホテルヨーロッパスタンダードタイプ

ハウステンボス

電話1本らくらく予約ダイヤル Tel.0956-27-0011
総合案内ナビダイヤル Tel.0570-064-110
www.huistenbosch.co.jp ハウステンボス

Hawks Town

365日にぎわいのある街ホークスタウン



あなただけのやすらぎと極上の眺望

玄界灘を臨むオーシャンビューの客室を中心とした九州を代表する都市型リゾートホテル。
複合商業施設「ホークスタウンモール」とも隣接しており、カップルからファミリーまで幅広い層の皆様に一日中お楽しみいただけます。
朝・昼・夜と変わり行く景色が、ご宿泊いただいたお客様の心を安らげる何よりのおもてなし。
優しさと温かみのある新しいリゾート空間で、上質なホテルライフをお楽しみください。

Hilton
FUKUOKA SEA HAWK

Hawks Town mall

http://www.hawkstown.com/

ISO9001 認証取得
ISO14001 認証取得

ハートを運ぶ…
SAFETY & HUMANITY

もっと迅く、より確実に

ハートを運ぶ…
ANZEN SANGYO
SAFETY & HUMANITY

安全産業株式会社

〒891-0122鹿児島市南栄三丁目17-5
PHONE099-269-3081 FAX099-269-3068

JR博多駅アートプロジェクト・白磁アート陶板

磁器の総合オートクチュールメーカー

IWAO

岩尾磁器工業株式会社

〒844-8555 佐賀県西松浦郡有田町外尾町丙1436-2

十四代 岩尾 對山窯

岩尾エンヂニヤリング株式会社

〒844-0004 佐賀県西松浦郡有田町大樽2丁目1番5号

● 岩尾グループ主要営業品目

【化学工業用セラミックス】
耐酸煉瓦　ハニカム　触媒　ファインセラミックス
多孔質セラミックス　FRP　セラミックス受託生産

【環境装置・水処理設計施工】
上下水道　汚水処理プラント　脱臭装置

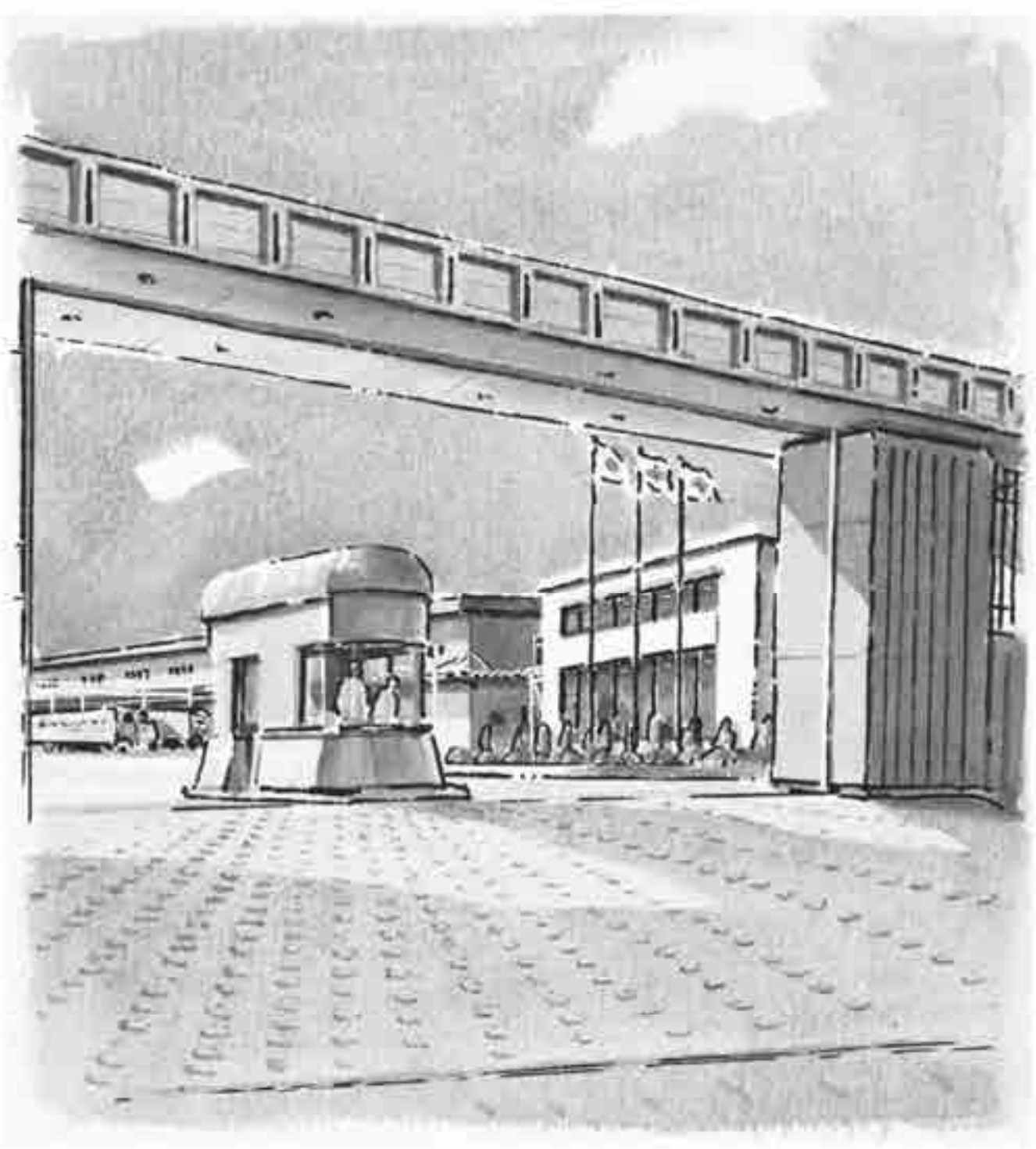
【建築材・製品設計製造販売】
特注タイル　磁器壁画・レリーフ　モニュメント　敷立て
インテリア・エクステリア製品　サイン・メモアール

【十四代岩尾對山窯】　美術工芸陶磁器

東京　東京都中央区銀座2丁目8番5号岩尾ビル
大阪　大阪市北区東天満1-7-17 東天満ビル10階
中部　岐阜県可児郡御嵩町御嵩2143-1
福岡　福岡市博多区博多駅東1-2-19-302

http://www.iwao.co.jp/

花と緑のある暮らしのお手伝い



九州日観植物株式会社

代表取締役社長　西川 勲

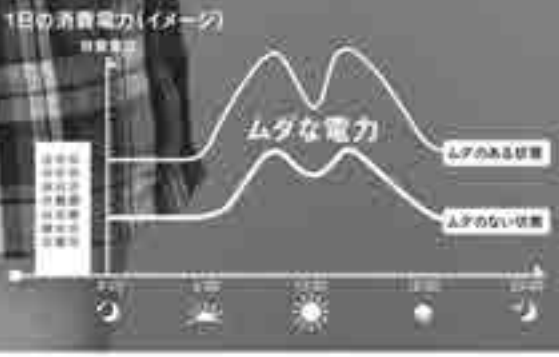
〒818-0013 筑紫野市大字岡田 310-1

Make Next.
九電工

省エネは、九電工っす！

ますます上達中！フォームにムダがない！
スイングのムダをなくすと、ボールが正しく飛ぶように。
オフィスやビルもエネルギーのムダをなくすことが、
効率のいい経営には重要。

九電工の省エネサービス＝Q-BEMSは、
エネルギーを見える化してムダを発見。そのムダを省いて
エネルギーコストを抑えるお手伝いをします！



Q-BEMSに関するお問い合わせ 0120-707-091
www.kyudenko.co.jp/qbems Q-BEMS 検索

いつもそこに、いつでもそばに。

ふと見上げれば空が広がり、空には雲が浮かんでいる。
あたりまえのなにげない風景。
いつもそこにあって、いつでもそばにいる安心感。
そんな存在でありたい。

ココロがある。コタエがある。
西日本シティ銀行

第一交通産業グループは、
社会の幸せと発展のために、時代を見つめながら、
明日の快適生活環境を創造していきます。

北海道から沖縄まで、全国33都道府県をネットワーク。

第 全国タクシー予約センター

FreeDial 0120-382-333

ご旅行やご出張などで各地へお越しの節は、ぜひご利用ください。

電気自動車

ハイブリットタクシー

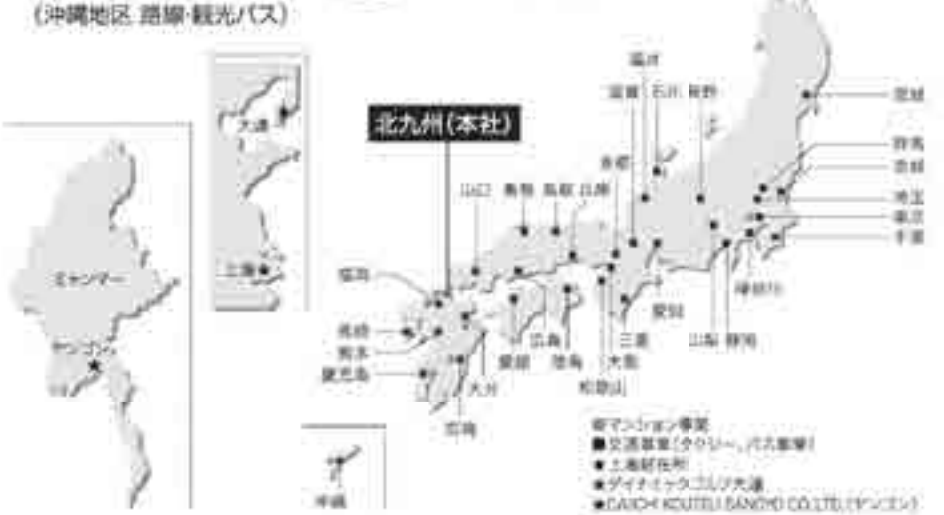
那覇バス
（沖縄地区 路線・観光バス）

琉球バス交通

アーバンパレス九大学研都市（福岡市）

グランドパレスステーションテラス行橋（行橋市）

ユニエクセラン（第一ホーム（株））



タクシーを中心に広がる、さまざまな事業。

タクシー事業　バス事業　マンション事業　戸建事業　介護サービス事業　コインパーキング　自動車関連事業　ファイナンス事業

（その他関連事業）
■ビル事業　■ゴルフ練習場
■ソフト開発　■情報通信
■通信販売　■宿泊業

●タクシー・旅客台数　7,198台 ●バスその他旅客台数　720台 ●マンション・戸建住宅総戸数　16,396戸

明日の快適生活を創造する

第一交通産業グループ DAI1CHI

〒802-8515 北九州市小倉北区馬借2丁目6番8号　TEL093-511-8811

全国配車センター

日産自動車九州株式会社

お一人様からでも楽しめる工場見学にぜひお越しください

日産のクルマづくりを体感できる
工場見学に、ご家族、ご友人を
お誘い合わせのうえ、ぜひお越しください。
また、ゲストホール周辺の緑地
(ドリームパーク23)ではお弁当を
広げたり、楽しい時間を過ごして頂けます。

日産自動車九州生産車

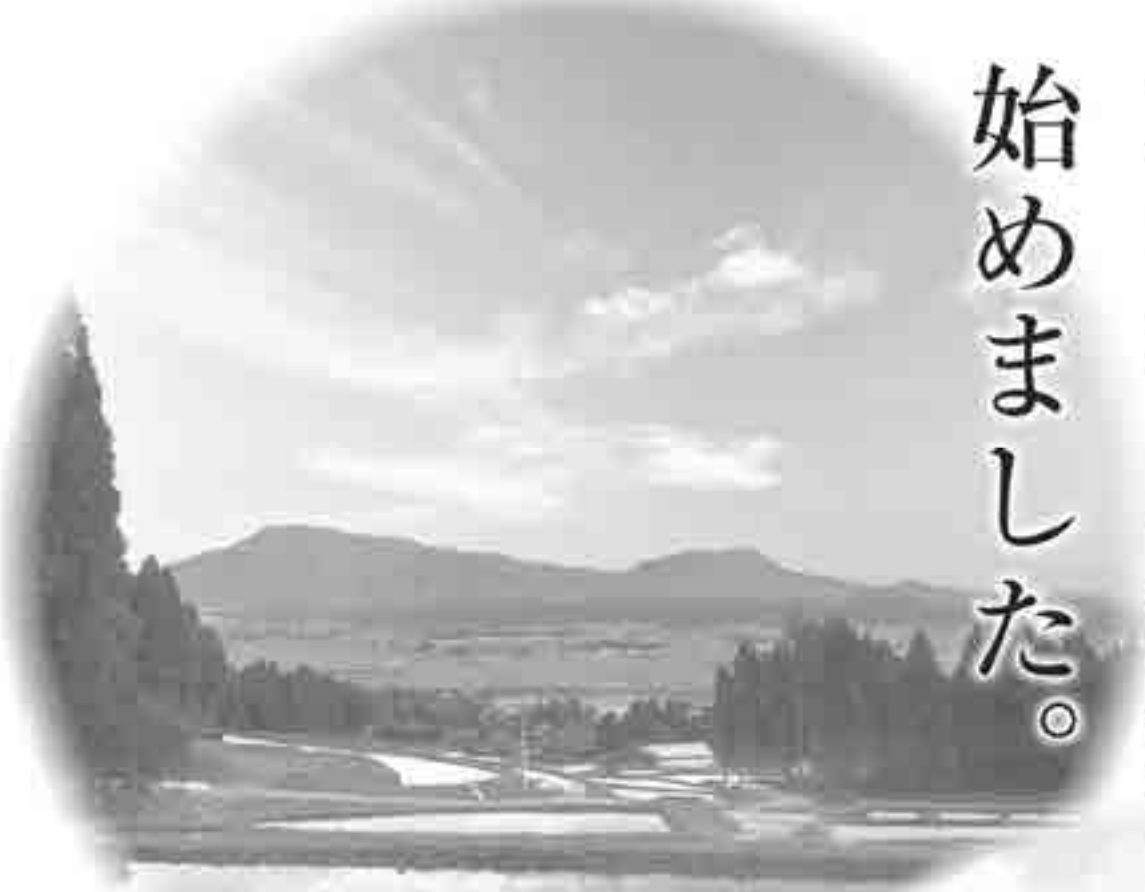
セレナ・ティアナ・ムラーノ・エクストレイル・ノート・デュアリス

詳しくはゲストホールまで。	TEL 093-435-1137
(受付時間)月～金曜日 8:30～17:30	

人々の生活を豊かに

NISSAN

またひとつ
水を守る活動を
始めました。



阿蘇水掛の棚田

私たちは、ふるさとの美しい自然と
大切な水を守るため、
肥後銀行「阿蘇大観の森」で水源涵養林の
保全・育成のための活動や、
水田湛水事業の支援を目的に、
「阿蘇水掛の棚田」で当行グループ役職員と
その家族等により、田植え、稲刈りなどの
ボランティア活動を行うなど
様々な環境保全活動に取組んでいます。
豊かで美しい熊本を未来の子どもたちに残すため、
これからも活動を続けてまいります。

肥後銀行

http://www.higobank.co.jp/

揺るがぬ信念で魅力ある街づくり、地域づくりに誠実に取り組みます。

（キャナルシティ博多）

（マリノアシティ福岡）

（リバーウォーク北九州）

（木の葉モール橋本）

（hit住宅展示場（福岡県内5会場））

（西新コンドミニアム）

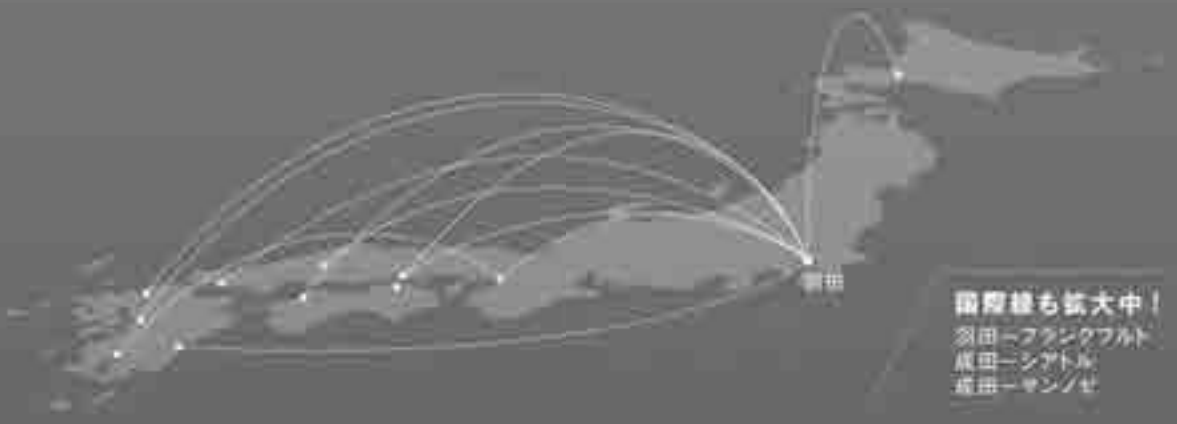
時代は揺れ動きます。しかし、動かない価値、いつの時代にも認められる価値は存在するのではないでしょうか。誠実・信用はその一つでしょう。これまで当社は歴史の判定に耐えられる事業を目指し、福岡を拠点に幅広い事業を展開してきました。「時代より一歩前」、「既存のものよりちょっと違う」をコンセプトにした街づくりが、地域・国内はもとよりアジアのお客様にも評価をいただいております。今後も地域の人々と思いを一つにして、伝統、文化、自然に適応した街づくり、地域づくりに邁進してまいります。

福岡地所株式会社

http://www.fukuokajisho.com

空の旅を、ますます心地よく。
新世代機787
運航路線ぞくぞく拡大中！

787 1st Anniversary



ANA

JTB

感動のそばに、いつも。

株式会社 JTB九州

全国直営113店舗

お仏壇のはせがわ

http://www.hasegawa.jp/

福岡本社　福岡市博多区上川端町12－192　はせがわビル
☎092-263-7600

東京本社　東京都文京区後楽1－5－3　後楽国際ビル7F
☎03-6801-1076

株式会社はせがわ美術工芸

アート HASEGAWA

http://www.art-hasegawa.co.jp/

寺院御内陣仏具・漆塗・金箔押・彩色工事一式

本　社　〒822-0011 福岡県直方市中泉今林885-26
TEL0949-24-7211　FAX0942-24-7221

産学連携機構九州

- 協働、共創の理念による産学連携
- 大学の知的資源を活かした新事業、新産業の創造
- 産業や地域のかかえる課題解決への貢献

http://www.k-uip.co.jp/

産学連携サービス実績

Karatsu University Collaborative Center
からつ大学交流連携センター KUCC

からつ大学交流
連携センター

http://www3.people.ne.jp/~k-daigaku/

産学連携機構九州
九州 PPP センター

九州 PPP センター

http://www.k-uip.co.jp/kpppc/

FUKUOKA BUSINESS CREATION CENTER

福岡ビジネス創造センター
研究コーディネート業務

http://www.fbcc.jp/

Fukuoka D.C.

福岡地域戦略推進協議会
事務局

http://www3.people.ne.jp/~k-daigaku/

UDCI

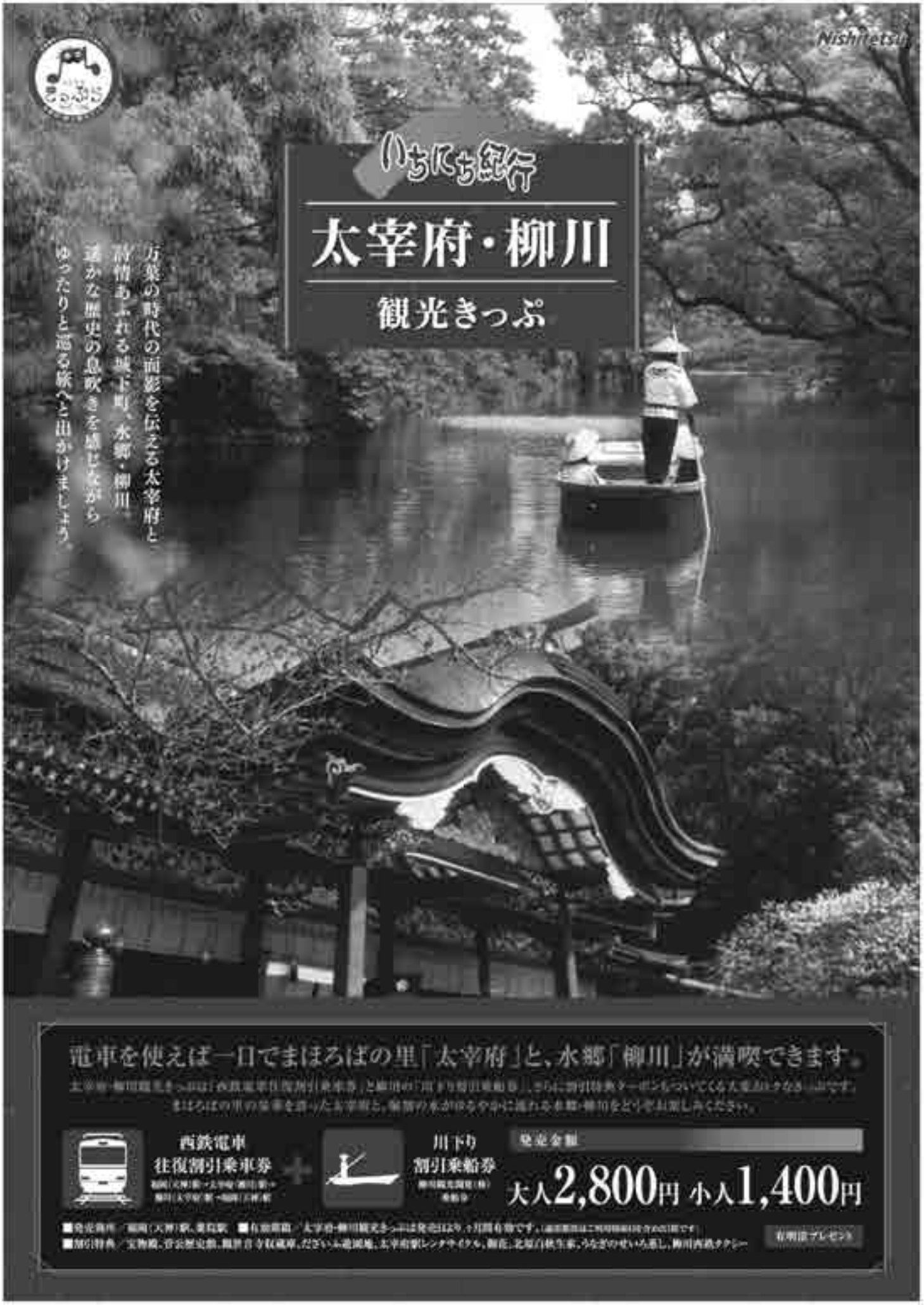
アイランドシティ
アーバンデザインセンター

http://terra.net/?author=17

株式会社　産学連携機構九州　　代表取締役　坂本　剛

〒812-8581　福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学産学連携棟 I アントレプレナーシップ・センター 3F

Tel：092-643-9467　Fax：092-642-4365　E-mail：contact@k-uip.co.jp


Nishitetsu
いちにち紀行
太宰府・柳川
観光きっぷ
万葉の時代の面影を伝える太宰府と
詩情あふれる城下町、水郷・柳川。
遥かな歴史の息吹きを感じながら
ゆったりと巡る旅へと出かけましょう。
電車を使えば一日でまほろばの里「太宰府」と、水郷「柳川」が満喫できます。
西鉄電車
往復割引乗車券
川下り
割引乗船券
発売金額
大人2,800円 小人1,400円
有明海プレゼント

いつもの街に、
いつもどおりの
毎日を。
守りたい街があります。守りたい暮らしがあります。
かけがえのない毎日を大切にしたいから。
私たちは、暮らしの中のガスを
より安全に使っていただくために、
さまざまな工夫や対策を行ない、
いつも皆様のそばで快適な暮らしを守っています。
お客さまの安心が、私たち西部ガスの使命です。

西部ガス

UMEBAYASHI

人にやさしく…地球にやさしく

私たちは建設を通して地域社会に奉仕し、
地球環境保全に努めています。

梅林建設株式会社

〒870-0044大分市舞鶴町1-4-35(大分三井ビル)
TEL.097-534-4151 FAX.097-536-4151
http://www.umebayashi.jp

あなたのいちばんに。

いちばん身近な銀行

お客さまの声に親身に心から耳を傾け、対話し、共に歩みます。

いちばん頼れる銀行

豊富な知識と情報を活かし、お客さま一人ひとりに最も適したサービスを提供します。

いちばん先を行く銀行

金融サービスのプロ集団として、すべての人の期待を超える提案を続けます。

あなたのいちばんに。
FFG ふくおかフィナンシャルグループ

福岡銀行

地球環境と働く人にやさしい工場で
世界最高品質のプレミアムカーを生産しています

トヨタ自動車九州株式会社

【本社・宮田工場】〒823-0015 福岡県宮若市上有木1番地
【苅田工場】〒800-0304 福岡県京都郡苅田町鳥越町9番2
【小倉工場】〒800-0231 福岡県北九州市小倉南区大字朽網3914番地58
【会社HP】http://www.toyota-kyushu.com/
【採用HP】http://www.recruit.toyota-kyushu.com/

九州博多発

通心販売

『やずや』は創業以来、健康補助食品を
通信販売で全国に紹介してきました。
お顔が見えなくても、私たちにとってお客様は家族のようなもの。
商品だけでなく、ふれあいや温もりもお届けしたいのです。
いままでも、そしてこれからも
『やずや』は「心の通信販売」を続けていきます。

本物だけをまっすぐあなたへ
やずや
やずやグループ
〒815-8686 福岡市南区大楠1-34-16
TEL 092(526)0828 FAX 092(526)4223
ホームページ www.yazuya.co.jp
プライバシーマーク制度に基づき、個人情報を安全に管理しています。詳しくはホームページをご覧ください。
JADMA

呼吸、ピッタリ！

明日へ向けて
戦略的物流システムに
アプローチする
久留米運送は…
お客様と二人三脚
そんな気持で走ります。

まごころを＝はこぶ
久留米運送株式会社

本社　福岡県久留米市東櫛原町353番地　☎(0942)39-2151(代表)
URL:http://www.kurumeunsou.co.jp

黒豚しゃぶしゃぶ「黒熊鍋」は
2006全国お国自慢鍋コンクールで総合優勝した鍋で
全国ネット業情報番組にも紹介されました。
秘伝のスープと最上級の黒豚を使い
従来のしゃぶしゃぶのようにつけだれは使わず
薬味のゆずこしょう、にんにくをスープに溶かしいただく。
このスープと黒豚の組み合わせは絶妙。
さらに鍋料理には珍しいレタスやブロッコリーが
また合っていてシャキシャキ感がやみつきになります。
第21回国民文化祭
全国お国自慢
食の祭典鍋コロシアム総合優勝
日本一の鍋。
鹿児島特産最上級の黒豚「六白」
博多初登場
鹿児島黒豚は「六白（ろっぱく）」と呼ばれる、鼻、両手足、尾の六ケ所が白い黒豚のこと。
柔らかい「かたロース肉」とうまみの詰まった「ばら肉」の二種類の味わいを楽しめます。
旨味成分と栄養が詰まっており、豚肉特有の臭みも無いのが特徴です。
過去、食べた事がない人が多いため、ぜひ、ご賞味ください。
熊襲伝来
特注鉄製の熊襲鍋で食す、鹿児島特産 黒豚しゃぶ
「くろくま」
黒熊鍋
なかがみ
福岡市中央区春吉3丁目11-19 パノラマスクエア博多1F
営業時間：17:30～23:00
大小個室あり
予約 092-724-8899

感謝の言葉

九州経済フォーラム 事務総長　小早川 明徳

当フォーラムの創立25周年記念事業は、石原会長の強力なリーダーシップのもと、半年間の長期にわたり諸事業を展開して頂き、無事終了できました。各事業を担って頂きました副会長、理事、メンバーの方々、そして、開催地においてご支援頂きました地元関係者の方々に改めて心からなる御礼を申し上げる次第でございます。本当に有難うございました。

今回の記念事業は、沖縄においては、わが国の国家的課題について取組む。熊本においては九州の課題、台湾においては、わが国の対アジアの課題、最後の福岡は九州経済フォーラム自体の取組むべき課題の一つと向き合うという設定を考えました。

その結果、九州がわが国をリードできることは何か。九州で挑戦できることは何か。九州だからこそ有利に展開できることは何か。九州から発信すべきことは何か等を整理する絶好の機会となり、その役割の大きさに改めて心引き締まる思いでした。

そういう中にあっても、とりわけ、当フォーラムの果すべき役割を考えさせられたのは、台湾事業で先方より団体名を漢字で表記するよう求められたことでした。「九州経済連携推進機構」と登録した団体名は、まさに当フォーラムの使命を表現したものとなりました。もしかすると、創立30周年においては団体名が変更されているかもしれないと思ったりもしていますが、皆様、いかがでしょうか。

さて、組織は常に革新を繰り返すことによって伝統を刻んでまいります。

次の節目となる30年は漢字で書けば「卅」となります。これが「世代」の「世」という字です。つまり、30年一世代ということでしょうか。愈々、次なる世代にバトンタッチするために、当フォーラムの理念、哲学、思想性の論議を深め明確化する時であると思っています。時代が激動する昨今、激しければ激しいほど遠心力が働きます。遠心力をエネルギーにするためには、その核心的支柱が不動のものでなければなりません。その「核心」に「日本と日本人」を置くことによってのみ、ぶれない中心軸・が確立されていくと信じています。日本が「にっぽん」らしく、日本人が「にほんじん」らしくあることによって初めて明るく活力あふれる時代を創ることができるのではないでしょうか。

最後に、当フォーラムの二代目会長大迫忍氏（当時㈱ゼンリン最高顧問）の仏壇に遺影を拝ませて頂いた時、ふと顔をあげて私の目に飛び込んできた言葉がありました。「事を謀（はか）るは人にあり、事の成るは天にあり」と。当フォーラムの創始者長谷川裕一氏をはじめ、歴史を刻んで頂きました多くの方々に重ねて感謝申し上げ御礼の挨拶と致します。

九州経済フォーラム 創立25年記念事業 推進体制

会長　石原 進
九州旅客鉄道㈱　代表取締役会長

会長代行　橋田 紘一
(株)九電工 代表取締役社長

実行委員長　末吉 紀雄
コカ・コーラウエスト(株) 代表取締役会長

沖縄事業

担当副会長

井手口 修一
西日本電信電話(株)
九州事業本部長兼
福岡支店長

実行委員

磯山 誠二
(株)西日本シティ銀行
代表取締役専務

植村 敏満
(株)ウエムラ
代表取締役

坂口 光一
九州大学
経済学府ユーザー感性学専攻
教授

鶴 基
農業
自営

徳田 勇治
トヨタ自動車九州(株)
常務取締役

平田 厚雄
沖縄県福岡情報センター
センター長

飯田 和男
三井不動産(株)
九州支店長

熊本事業

担当副会長

甲斐 隆博
(株)肥後銀行
取締役頭取

実行委員

阿部 邦和
大分県　福岡事務所
所長

小城 親治
鹿児島県　福岡事務所
所長

小辻 智之
全日本空輸(株)
執行役員 福岡支店長

村上 昭夫
宮崎県　福岡事務所
所長

山口 洋一

アジア事業

担当副会長

是永 駿
立命館アジア太平洋大学
学長

実行委員

小幡 修
(株)福岡銀行
取締役副頭取

国枝 俊成
(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ 九州支社
執行役員九州支社長

後藤 太一
合同会社福岡アーバンラボラトリー
代表

髙宮 俊諦
(株)タカミヤ
代表取締役社長

大久保 将
ハウステンボス(株)
営業本部 部長兼九州支社長

中村 裕
JA くるめ
理事

宮原 敬介
(株)JTB九州
代表取締役社長

村上　英治
(財)西日本産業貿易コンベンション協会
常務理事

岡部 知寛
(株)ティーアンドイー
常務取締役

榎本 一郎
福岡地所(株)
常務取締役

坂本 剛
(株)産学連携機構九州
代表取締役

廣崎 靖邦
(財)九州国立博物館振興財団
専務理事

福岡事業

担当副会長

矢頭 美世子
(株)やずや
代表取締役会長

実行委員

石村　信悟
(株)石村萬盛堂
代表取締役社長

川崎　隆生
(株)西日本新聞社
代表取締役社長

斉藤　淳
日産自動車九州(株)
取締役執行役員

佐伯　心高
九州工業大学
産学連携推進センター
産学連携交流部門長 教授

西川　勲
九州日産自動車(株)
代表取締役社長

西座　聖樹
医療法人 聖友会
会長

二又　茂明
久留米運送(株)
代表取締役社長

矢野　健
安全産業(株)
代表取締役社長

斎藤　修一
(株)日本経済新聞社
専務執行役員西部支社代表

富永　泰輔
福岡運輸(株)
専務取締役

脇野　佑一
(株)トータルプロデュース
代表取締役社長

田中　亮一郎
第一交通産業(株)
代表取締役社

式典事業

担当副会長

坂口 盛一 (梨田 一海)
九州電力(株)
上席執行役員 経営企画本部長

実行委員

岩尾　慶一
岩尾磁器工業(株)
代表取締役社長

大内田　勇成
西日本不動産開発(株)
代表取締役社長

坂田　陽一
西部ガス(株)
取締役常務執行役員

竹島　和幸
西日本鉄道(株)
代表取締役社長

三浦　隆明
(株)ゼンリン
社長室長

右田　喜章
(株)ホークスタウン
代表取締役副社長

事業統括総合調整

担当副会長

小早川 明徳
福岡県中小企業経営者協会連合会　会長

主管

古賀 正博
福岡県中小企業経営者協会連合会　理事

後方支援

伊藤 健二
TOTO(株)
代表取締役副社長

松崎　茂
北九州市
副市長

梅林　秀伍
梅林建設(株)
代表取締役社長

山崎 一樹
福岡市
副市長

近藤　倫明
北九州市立大学
学長

ご協力頂いた企業

九州旅客鉄道㈱
西日本電信電話㈱
㈱肥後銀行
コカ・コーラウエスト㈱
九州電力㈱
㈱九電工
㈱やずや
㈱西日本シティ銀行
TOTO㈱
梅林建設㈱
㈱福岡銀行
㈱エヌ・ティ・ティ・ドコモ 九州支社
全日本空輸㈱
日産自動車九州㈱
西部ガス㈱
西日本鉄道㈱
トヨタ自動車九州㈱
㈱JTB九州
三井不動産㈱
岩尾磁器工業㈱
西日本不動産開発㈱
ハウステンボス㈱
㈱産学連携機構九州
第一交通産業株式会社
久留米運送㈱
㈱ゼンリン
㈱ホークスタウン
北九州市立大学
福岡地所㈱
福岡運輸㈱
医療法人 聖友会
安全産業㈱
㈱はせがわ
九州日覆植物㈱
㈱九州リースサービス
日本政策投資銀行
高松産業株式会社
エントリーサービスプロモーション㈱
国土交通省　九州運輸局
㈱ホテルオークラ福岡
㈱にしけい
篠原公認会計士事務所
㈱アサツーディ・ケイ

九州経済フォーラム創立25周年記念誌2012年3月発行
発行/九州経済フォーラム
〒812-0011
福岡市博多区博多駅前2丁目9-28
TEL 092-451-8593
デザイン/株式会社 デザインQ　寺師 秀史
印　　刷/ダイヤモンド印刷株式会社
編　　集/九州経済フォーラム事務局
神代眞宏・平野竜一
発 行 人/理事長　小早川 明徳